

世界樹と巨神と上帝と

横電池

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハイ・ラガードの世界樹で人を魔物に作り変えてきた上帝。

ある冒険者たちによってその体を破壊されたが、バックアップデータは残っていた。

以前の人格からわずかに解放された上帝は、かつての自分が作りだした魔物を死なすために研究を再び開始する。

彼らを死なすには、世界樹をより知らなくてはならない。

そんな結論に至り、世界樹の制御が行われたであろう地に向かった。

人の世に紛れやすいように、アンドロの体となって。

注意事項

世界樹2のラスボスが主人公の、世界樹4のストーリーです。

ネタバレ全開です。

また、綺麗な上帝となっております。そして上帝の魔改造ものです。

オリジナルキャラは話の都合上、一キャラのみ出ます。

あと意味のないTSです。

新世界樹2の要素はないです。

目次

第一章

1.	上帝、其処に再臨す	1
2.	天より降りて最果てへと向かう	11
3.	過去の希望の犠牲者	25
4.	最果ての街の領主	37
5.	廃鉱の魔と暁の王	48
6.	夜闇に舞うは旋風の白刃	63
7.	此度の空は狭く煩く	72
8.	光届かぬはずの地で	85
9.	乾いた森に始まる序章	98
10.	死を呼ぶ突風	109
11.	汝の呪いは何処より来たる	120
12.	最果ての街の住民	132
13.	冥闇の依頼書	142
14.	薄暗き藪に潜む獣の猛威	155
15.	群れ統べる狩猟者の庭	170
16.	狩る者よ、狩られる身の恐怖を知れ	182
17.	歓喜の中、遠き日の面影	196

第二章

18.	瘴気の中で出遭う異種	209
19.	知られざる伝承の歪み	220
20.	たおやかな朝の風景	233
21.	深い霧が隠すは道か心か	244
22.	巫女の守り手たち	255

2 3. 己が選択に悩んだ軌跡の上 | 266

2 4. 迷える路に終わりなし | 282

2 5. 疑心と信者の道標 | 298

2 6. 見えざる音と聞こえぬ光を頼りに | 311

2 7. 守り手として、その宿業を果たさん | 324

2 8. 開かす心と開かぬ真意 | 341

2 9. 善意のない救い | 353

第三章

3 0. 白き大地で温もりを消さぬ為 | 364

3 1. 其の黒きものに触れるな | 377

3 2. 三体の竜の話 | 389

3 3. 雪の花に誘われて | 401

3 4. 遭遇、岩窟の牛頭 | 418

3 5. もうひとつの伝承 | 432

3 6. 名乗れる日はまだ遠く | 443

3 7. 猛き炎は愚者の足止める | 458

3 8. 先行く者の背を追って | 469

3 9. 業炎の中で、戦士の心強く輝く | 480

4 0. 翻る旋風 | 496

第四章

4 1. 黒き砲口が示す道 | 510

4 2. 其の武器を向ける先は誰か | 520

4 3. 似たような朝食 | 529

4 4. 南の聖堂にて卓囲む | 540

4 5. 帝国の野望を挫け | 559

4 6. 警戒すべきは誰なのか | 572

4 7. 千年前の彼らを殴りたかった | 585

4 8. どこに本物の僕がいる | 600

4 9. 廻り戻るは光の柱 | 616

第五章

5 0. 誰かの墓標 | 629

5 1. 浄化齋す楽園への導き手 | 644

5 2. 忠義の矛先、呪皇を穿てば | 657

5 3. 神話の再現を今ここに | 669

5 4. 戦いの狼煙をあげて | 688

5 5. 崩れゆく日常を崩さぬために | 699

5 6. 暁の上帝と冥闇に墮した者 | 712

5 7. 神話の後継者達 | 725

5 8. 此処まで繋げた物語 | 738

5 9. 永劫の玉座にて求めた楽園の夢 | 757

6 0. 例えどれほど違つていようとも | 767

第六章

6 1. 異国から来た旅人 | 777

6 2. 異国の出来事、咎の在り処 | 788

6 3. 奈落より響く呼び声 | 804

6 4. 暗闇の前に佇む金色の守護者 | 814

6 5. 暗黒の中から覗くは惨劇の瞳 | 826

6 6. 心は見えない声に導かれ | 837

6 7. ある男の日記 | 849

6 8. 異形苦しめど悪夢未だ終わらず | 863

69.	悪夢の中、固く閉じる	875
70.	守り手が残せし願い、神樹を止める者	886
71.	最果てより天を求めん	900
最終章		
72.	餞別の言葉を最果てより	911
73.	世界樹の麓の国	923
74.	其の罪を背負う資格	935
75.	悠久の時を過ごした孤独の城	950
76.	楽園になれなかつた森	959
77.	千年の時を越えた岐路	968
78.	戦場 天の支配者	985
79.	決戦 イシュ	997
80.	太陽と月に背いても	1008
81.	新しい日々の始まり	1022

第一章

1. 上帝、其処に再臨す

時間が足りなかった。

人として残された時間が、圧倒的に。

あの者たちを救うための研究を推し進める時間が足りなかった。

『我を信じ、ついてきた者たちをあらゆる厄災から守るために！』

ゆえに、人の身を捨てた。

あの時の選択は間違いとは今も思っていない。

だが……、人の身を捨ててから、機械の身となつてから、間違えたのだ。

新たな体への人格のコピーにエラーが起きたのか、あの体の全能感がそうさせたのか、はたまた人の身から脱却し、それと同時に人の倫理からも脱却してしまったのか。それとも……。

いや、何れにしても我が間違えたのだ。

『我、オーバーロードが汝らの旅に終焉を与えよう』

あの機械の体を滅ぼした者たちは、この言葉を向けられた者たちは聖杯を求めただけで、我を止めるために来たわけではない。

『聞くがいい、人の仔よ。我は滅んだ世界からの脱却、新たな世界での未来を夢見た。何人であろうとその邪魔はさせぬ！ 人が人であるがゆえの限界を我は越えるのだ！』

『神となりし我が力を思い知れ！』

彼らは人の限界を越えたはずの我を、人の身のままで越えてきた。しかし、詰めが甘かった。

いや、この時代には機械など全くないのだから仕方のないことかもしれない。

彼らは、我を完全に滅ぼすことはできていなかった。

あの体に致命的な異常が来した時、その時点での記憶データが緊急用のボディにバックアップされる。

ゆえに、我は今こうして思考できるのだ。

「もつとも、我を信じついてきてくれた者たちはもういないのだから、意味のないことか……」

以前の体の我は狂っていたのだろう。みながいなくなってもなお、それを認識せずに研究を続けていたのだ。

記憶データのみで、人格データまでも移されずにすんだのが幸いなことだ。こうして正常に認識できる。

いくつものパスコードを記入し、緊急システムの消去を行う。

もう研究を続ける意味はない。

彼らのために行ってきたのだ。その彼らはもういない。

この体も何れ狂うかもしれない。次のデータ移植時に狂うかもしれない。

そのため終焉の準備をする。

我の終焉を。

彼らがいなくなったのであれば、我が存在し続ける意味はない。

研究の過程で怪物を産み続けた神……、いや、悪魔は消えるべきだ。緊急システムを削除したことによって、残された私の記憶データはこのボディにあるだけとなった。

あとはこの体を破壊するのみ。

「む……う？」

部屋にある管理機器から電子音が鳴った。

世界樹内で何者かが死んだことを知らせる発報音。以前であればこの音が鳴れば、翼人に死体の回収をさせていた。今はもうそんな気など起きない。

死体がモニターに表示される。

もう聖杯はないというのに世界樹に足を踏み入れるとは、理解ができない。よつぽどの愚か者だろうか。この世界樹には樹の影響を受けた獣……、魔物が多くいるというのに。

世界樹の魔物にやられたであろう者たちの姿をモニター越しに見た。

「……スキュレーにやられたか」

スキュレーは世界樹の産み出した魔物ではない。

我が人から作ってしまった魔物だ。

研究のため、そしてさらなる研究のサンプル確保のために冬の階層に配置した魔物……いや、哀れな人の成れ果てだ。

世界樹の遺伝子を取り入れさせたがゆえに、死ぬことも叶わず。そして世界樹の汚染の影響を受け、理性を失った人の成れ果て。

我が作ってしまった負の産物。

スキュレーだけでない。キマイラも、炎の魔人も、ハルピュイアも、ジャガーノートも。

そして私の管理から外れてしまったヘカトンケイルに、あの幼子も。

我によって死ぬことができなくなった哀れな者たち。

はたして我はこのまま、あの哀れな者たちを放置しながら消えていくのか。

私の救うべき者たちは、かつて我を信じついてきてくれた者たちだけだ。あの哀れな者たちではない。

あの人の成れ果てを産み出した原因が我にある。それを責められるのはなんとも思わない。

しかし、さらに遡り、我についてきてくれた者たちを原因としてとらえられる、その可能性がある。彼らの罪と捉えられるのは許容できない。

ならば我はこの残された身で、あの哀れな者たちを解放させるべきではないか。

それを遂げて、初めて我は消えるべきではないか。

しかし、あの哀れな者たちに死を与えるには世界樹自体をどうにかしなくてはならない。あの哀れな者たちはもう世界樹の一部となつてしまっているのだ。

世界樹の生命を止めるか、世界樹の在り方を変えるか。

古より培ってきた知識にはそのような方法は、どちらも存在しない。

では新たに模索するか。しかしあまり長い時間をかければこのボディの人格も再び狂うかもしれない。

我の知識だけでは足りぬ。

別の者の知識が必要だ。しかし、この時代の者には期待はできない。古の時代の知識が必要だ。

そこで思い出す。

「たしか……、スペインの世界樹計画は世界樹の制御に力を注いでいたな」

世界各地にある七つの世界樹。それぞれ大本となる目的はすべて同じだが、いくつか別の目的も各地で取り入れられていた。

ある国では浄化に特化させるために、またある国では樹そのものに方舟としての機能を持たせるために、またある国では溜まった汚染を宇宙に排出する機能を持たせるために、各々が研究を進めた。

我はかつて祖国の世界樹計画から途中で抜けたが、スペインの世界樹計画を少しだけ耳にしたことがあるのだ。世界樹による浄化の被害を最低限に留める制御機能を持たせる。そのスペインの世界樹計画の資料が残っていれば、あの哀れな者たちを解放できる近道となる。

資料が残ってないにしても、スペインの世界樹について調べる必要があるだろう。

大地のほとんどが世界樹によって偽りの大地と成り果てた。

だが各地の世界樹の位置関係さえわかれば、どの世界樹が目的のものかわかるというものだ。

まずはこの世界樹から出て、今の時代の地理を把握する必要がある。

新たな使命ができた我は、まずはこの玉座の間から外へ足を踏み出した。

「ここにも緋緋色の剣兵か！ 多いな！」

「むっ。」

玉座の間から出れば何やら冒険者がいた。

ここは叡智をこめた我が居城。勝手に足を踏み入れた者たちに不快さを感じるが、我は新たな使命がある。使命を果たすためにも無用な争いは避けれるなら避けた方がいい。

このボディは予備のもの。ゆえに戦闘力は以前のものより遥かに落ちる。

さらにはバックアップももうない。この身が破壊されれば新たな使命を果たすことはできない。

城に入った無礼者は今回は見逃してやるにしよう。

いや、待て。

この無礼者どもにスペインの世界樹について聞いてみるもいい。

我にはこの時代の情報が少しでも欲しいのだ。機会は無駄にはできぬ。

「汝ら、我の問いに答え——」

「ぶっ壊れるお!!」

「——!?! な、何をする!?!」

なんだこの野蠻人は。

この我が友好的に接しようとするれば、突然手にもつ武器で襲ってきた。

冒険者というのは考えれば様々な地に赴き、資源を奪っていく盗っ人かもしれない。

我の全盛期の体を滅ぼした奴らも、我の研究の成果である聖杯を奪っていった。

「あの猛攻が来る前に早く壊すぞ!」

「くっ——! この無法者め!」

「え!?! ていうか喋ってないこの剣兵!?!」

「うわ、本当だ!?!」

我は天の支配者。その我が喋るなど当たり前のことだろう。何を驚いているのか、なんにせよこの隙に、我は撤退を選んだ。

撤退先はすぐそばの扉の奥。つまりは玉座の間である。

入ってすぐにセキュリティロックを掛ける。

神となりし我には戸締まりなど不要という考えから、随分と使っていないかったセキュリティシステムだ。

「まったく……以前の体であればあのような者たちなど……いや、考えても無意味だな」

それにしてもオーバードたる我を剣兵剣兵と、奴らは何を言っていたのか。剣兵などではなく天の支配者、暁の王、上帝、父なる太陽。様々な呼び名がある我だというのに何故に剣兵。

「む……?」

あるモニターに映る景色を見た。そのモニターは玉座の間を映している。つまりは我の現在地だ。

別段それ自体に異常はない。

しかし玉座の間にいる存在がいつもと異なる。

……これは侵入者排除用の警備アンドロイド、SSA-1だ。特徴

としては両手に持つ高熱を発する剣での白兵戦を得意とする機械兵。その機械兵がモニターに映っている。モニターを眺めている機械兵の姿が……モニターに。

「これは……、我か……」

予備の体は何故に量産型の体……

あの全能感に冒されていた我のことだ。予備の体になることなどないと考え、量産型に緊急時の受信先を設定していたのだろう。

一応は多少カスタマイズされているが……これは不味い。

戦闘力の問題もあるが、それ以前にこの体ではとても世界樹について調べることなど難しい。どうみても異形だ。というか機械兵だ。人ではない。

前の体も勿論人ではないが、溢れ出す神々しきさでいけると何故か考えていた。ダウンロードされた記憶データが人格にも影響を残してそうだ。

どうしたものか。

このままでは人と出会うたびに戦いとなってしまう。とても世界樹の調査などできぬ。

この城ごとスペインの世界樹を探しに行こうにも、世界樹の枝や蔦が城に絡まり下手に動かせない。

せめて人に見える体を作るなりしなくては——

そこまで思考し、記憶領域からとある情報を引き出せた。

不死の研究で、人と外見が同じアンドロイドを造っていた。

人の肉体を棄て、なおかつ人としての機能を残し、人格や記憶を移植すればそれは不死へのアプローチなのでは。そう考えて造ったアンドロイドが一基。

しかし使われぬままだったものだ。

彼らは『大地を棄てただけで飽きたらず、人の身までも棄てたくない』と言つてこの計画を拒否したからだ。

——我は彼らのために棄てたというのに。

……！ 我は今何を思考した。

我は我自身が考え自ら人の身を棄てた。彼らのせいなどではない。とにかく、試作品として造られたアンドロイドが一基あるのは記憶データが告げている。廃棄もしていない。となれば、アンドロイドに人格データと記憶データを移せばよい。

強いて問題点をあげるとすれば……

「女型……」

性別などない体となつて千年は経っているが、人であつた頃は男だった。

さらに言えば、父なる太陽と呼ばれる身としてはやはり女型だと疑問符が出てしまいそうだ。

だが今は選択の余地などない。

新たなアンドロイドを造るには材料も時間もない。

以前の体より僅かばかり演算性能までも落ちているこの体では

……

古の記憶では『男の娘』というのがあつた。それと似たようなものになるだけだ。それに、どのような体であろうと我は我だ。

「これより、データのコピーを行う」

移植の際、人格データのみ多少変更する。前の人格ではない。人の世に馴染みやすいように感受性を高めた。また、エラーでも起きて前の人格にならぬように警戒は怠らない。

この機械兵たる体の我はデータ移植後、アンドロイドの我の人格に問題有りと判断すれば即座に破壊するのが役目だ。

全盛期の体からコピーされた機械兵の我。そこからさらにコピーを重ねたアンドロイドの我。

造つた時期から想定すれば、確実に受容器としては劣化している。新たな使命と人格に影響がなければ妥協は必要。

軽快な電子音が鳴る。

今度のはデータ移植が完了した知らせだ。
今この瞬間、我はこの世に二人、いや二基いることとなる。
上体を起こすアンドロイドの我に呼びかけた。

「目覚めたか、我よ。異常はないか」

同一の存在がいるとは不便なものだなと発覚。正確な呼びかけが
なんとも異常な呼びかけとなってしまった。

「我に異常はない。強いて言うならば、やはりスペックの低下を感じ
られる」

「だがその我の体はかつての我が造りしもの。この我の体に劣りはす
るが世界樹の調査には問題のないレベルだ」

「……我我やかましいな」

「む……？」

何か我らしからぬ言葉が聞こえた気がしたが……

「それより、我はスペインの世界樹の調査に向かうが、汝はどうするの
だ」

「我に汝と呼ばれるのは複雑だな……。我はしばらくの時間が経てば自
壊する予定だ」

我は二基もいる必要はない。

この城に留まり続ける我はまた狂う可能性が高い。ゆえに自壊す
るのだ。

アンドロイドの我は人の感性に多少近づけた人格だ。そこに世界
樹の調査といえど外の刺激があれば狂う可能性が低くなるだろう。

「だがその前に」

「うむ。では聞こう。アンドロイドの我の使命はなんだ」

自壊する前に、女型アンドロイドとなった我の人格を知らなくては
ならない。

狂う可能性がある。もしくは既に狂っている。はたまた、我から乖
離しすぎた思想であれば、破壊する。

「私の使命は、我を信じついてきてくれた者たちの名誉を汚さぬために、あの哀れな魔物と成り果てた者たちを解放すること」

「……どうやらエラーは起きていないようだな」

後は人の中に馴染めるようにすることだが、その点はいくくア
ンドロイドの我に任せよう。

「では我よ、後は任せたまえ」

「必ずやあの哀れな者たちを解放してみせよう。我についてきてくれ
た者たちのために」

玉座の間から出ていく私の後ろ姿に全てを託し、私は自壊処理準備
を始めた。

2. 天より降りて最果てへと向かう

アンドロイドの体となった我はまず、今いる世界樹の麓の国へ向かうことにする。

麓の国は、かつて我についてき、そして偽りの大地で死ぬことを選んだ者たちの子孫がいる国だ。

子孫である者たちのために何かをするつもりはない。彼らは子孫であって、あの時代の者たちではないからだ。

ゆえに、麓の国ではただ情報を集めることのみを行うつもりだ。

「麓に降りるまでの間に、この体の戦闘チップは済ませておきたいものだな」

今の我に足りぬものは時間、情報。情報も大きく分けて三つ。世界樹に関して、この時代の常識に関して、戦闘技術に関して、だ。

世界樹に関しては言うまでもない。今の私の目的に繋がるものだ。常識に関しては人の世に馴染みやすくなるために必要だ。馴染むのが早ければ早いほど、世界樹に関してだけでなく、何かと有用な様々な情報が集まりやすくなるだろう。

そして戦闘技術。これは全盛期の体を討ち倒した冒険者達に並ぶものが望ましい。世界樹に向かうということは、溜まりきった汚染と相対することも視野にいれなくてはならない。それでなくても、少なくともヘカトンケイルや幼子を超える力が必要なのだ。哀れな彼らの解放のためにも。

そのためには力がある。神となりし我を超えた、人のまだ見ぬ可能性の力が。そこに私の叡智を混ぜれば幼子を超えることができるだろう。

研究、調査のためにも時間は無駄にはできぬ。

世界樹を降りきるまでにこの体のスペックくらいは調べられる。

テスト相手は事欠かない場所であるからだ。

「ふむ……」

SSA―1相手にテストしてみるか。丁度そこにいることだ。それにあの野蛮な冒険者たちは緋緋色の剣兵と呼びながら慌てて襲ってきた。冒険者にとってかなり警戒を要する相手ということだ。ならばテスト相手として申し分ない。

手にもつは二振りの剣。

どちらも、いつか回収された死体を持っていたもの。やはり体は違えど全盛期の記憶データから二刀流が最適だと考えたからだ。

機械兵は襲ってこない。

我がこの城の主だとしてしっかり識別できているからか。

と、なれば普通の戦闘チェックは難しい。何をしようこの機械兵は反撃しないであろう。ならばできるのは、我の力の単純な出力チェックぐらいか。

かつての体の時同様に、二振りの剣を交差させるように斬りつけた。頭の中で技名を浮かべながら。

山行水行。

我が一撃を、あるがままに受け入れよ。

SSA―1は荒事を抑圧するために特別頑丈な造り。いくら我の一撃といえど、ましてやアンドロイドの身となっている攻撃であつさり破壊されることはない。

……そのはずだつたのだが。

「……修復不能なまでに破壊できるとは」

斬つたというより圧壊したような残骸。

剣が特別性というわけではなさそうだ。単純にこの体の出力が想定以上だつた。

思えばこの体は、我を信じたあの者たちが入るかもしれない体。あらゆる災厄に抗えるようにその時持てる限りの技術を注ぎ込んだものだ。いわば特別性のアンドロイド。

となれば、戦闘面は問題なしと判断してよいだろう。

強さと不死性を除き、限りなく人に寄せるために装甲は控え目になつているが、そこは当たらなければ問題ない。堅牢な敵を撃破できる力があれば充分。

「我は冒険者としての才覚までも備えているようだな」

人格データは人に寄せてコピーされていくが、このような考えが出るということは、それはどう足掻いても抗いようなない事実ということなのだろう。

「む……？ 樹海地軸……想定していたよりも早くついたか」

かつてはこの地軸を使い、彼らに地上と似た風景を堪能してもらっていたが、今となつては世界樹に足を踏み入れる冒険者達の移動手段である。

かつて彼らと四季を眺めた時を想い、ノスタルジィな感覚に襲われたが寄り道はすまい。

世界樹の最下層、夏の階層に行き先を定めて起動する。

この技術も今の世では再現は出来ぬものだろう。今の時代の者はこの地軸の仕組みを理解して使っているのだろうか。理解せずに使っているのだとしたら、その蛮勇さは理解できぬものだ。

だがそれも冒険者として必要な要素なのかもしれない。全盛期の我を滅ぼした者たちもそうだったに違いない。見知らぬ果実を食べたり、あからさまに古そうな水を飲んだり、ただのザリガニと意味のない戦闘を繰り返したりしそうな顔であった。

我もあの者たちを見習って、時には蛮勇になるのもいいかもしれない。それで壊れてしまつてはもとも子もないから、この体でなら無害そんなことまでにしよう。食べ物毒味とか。

アンドロイドの身ではあるが、味覚機能は実装されている。そのため不味いものは口にしたくはないが。

「あれ？ 君、一人ですか？」

「む……？」

樹海地軸による転移が終わり、緑生い茂る階層につくと鎧を着こんだ者が声をかけてきた。

……冒険者、というわけではなさそうだな。

鎧の者の背後にも同じ格好で統一された者達がいた。装備の統一性、装飾につけられた紋章から国の兵士といったところか。

「はぐれたのですか？」

「何を言っている。我はもとより一人だ」

そういえば冒険者というのはたいいてい複数人で活動していたな。それで先程の質問があったのだろう。

「ええ？ 一人で冒険しているってことは凄腕なんだろうけど……て
いなか声低……」

「なんだ、人よ」

「えと、君、ギルド名は？」

ギルド名。

もしや冒険者というのはある程度国に管理されているのか。管理
識別のために各々で名称が登録されているとしたら、私の立場はどう
見えるか。

樹海地軸を使つて戻つてきた冒険者と思つたら、冒険者として国に
登録されていない謎の人物。

最悪、不法入国者扱いもあり得るやもしれぬ。

しかし元々この世界樹はこの者共の国の物ではない。人が活動で
きるように我が内部を改造し、管理し、そして城と偽りの大地の通路
としたものだ。つまりは私の物といつても過言ではない。

にも関わらず、その我が不法入国者など納得できるはずがない。

「我はギルドになど所属していない」

「え、ええ……？」

「それで、汝らは我をどうするつもりだ？」

返答次第では強硬突破も視野に入れている。

私の言葉に戸惑っていた兵士が、他の兵士と相談をし始めた。

「どうしよ……とりあえずギルド長に報告か？」

「いや、そんなことしたら俺達がちゃんと出入り管理出来てないって
ことで絞られるぞ……」

「う……またあのしごきは受けたくない……」

「じゃあこつそり街に帰つてもらうか？」

「でもまた入られでもしたら……」

「それじゃとりあえず注意で留めておこう。ただし報告にはあげない
方向で」

「賛成」

「異議なし」

「目指せ平和な衛兵」

丸聞こえだ。

だが、この者達の意識の低さは助かる。面倒ごとは避けたいし、何よりもこの者達は自ら弱味を晒した。

ならば協力を取り付けるのはスムーズにこと運ぶだろう。

兵士の相談もこれ以上は進展ないと判断したのか、最初の者が我のそばにやって来た。

「えつと……とりあえず今回は見逃すけど、次回からはちゃんとギルドに入ってから世界樹に入つてね。今回見逃したことは内緒だよ」

「ギルド長の耳にいれるのが嫌だからだな」

「ま、まあそうだけでも……」

「ならば我に協力せよ」

「へ？」

間拔けな声をあげるものだ。しかしこの男、この我がギルド未所属とわかってから口調が砕けすぎではないか。

「なに、難しいことではない。我は今、別の世界樹に赴きたいのだ。そのためいくつか知りたいことがある。それに答えればよいだけだ」

「ああ、そんなことなら大丈夫だよ。といつても答えられる範囲でだけどね」

「良い心掛けだ。では問おう。スペインという単語に聞き覚えはないか」

「すぺいん？」

反応を見るに初めて聞く単語のようだ。他の者と話し合いだしたが期待はできない。

世界樹の制御を目指していたスペインも、やはり制御ができず滅びたか……。それか汚染によって滅びたか。

しかしなんらかの資料は残っているかもしれぬ。それに我の叡智ならスペインの世界樹から新たな発想を掴めるかもしれぬ。

よって目的地に変更はない。

「すぺいん、ねえ……俺は聞いたことないな」

「ていうか変わった子だなあ。しゃべり方とか、質問とかあの格好とか」

「そうだなあ。あの角みたいなのなんだろうな。今の若い子の流行りなのかな」

兵士達の話が確実に脱線していつている。

「どうやらやはりスペインというものを知らなかったということか。それより角とは……意味もなくつけてしまったコレだろうか……」

頭部につけられた角。特別なアンドロイドとして性能も高まるように験担ぎのような想いからつけた角だ。人だった頃に見たアニメーションの指揮官用ロボのように、三倍の能力になるように。

だがそれほど長くはない角だ。そのため目立たないと踏んでいたがそうはいかぬらしい。

後程に頭巾でも被り隠すことにするか。

「ごめんね、すぺいんっていうのはみんな聞いたことがないや」

「ならば各地に点在する世界樹が載った世界地図を持ってないか」

「世界地図?」

まさか世界地図までも知らぬというつもりか。

「世界地図ってまた渋いねえ」

「5つくらい前の世界地図なら家にあるぜ、俺」

渋い? 5つ前?」

「最新版はないけど、それでもいいかい」

「う、うむ」

「んじやダツシユで取ってくるわ」

「ギルド長に見つかるなよ」

一人の兵士が走り去っていった。

よくわからぬが世界地図であるならいいだろう。

「ていうかこの子もついていってもらったら良かったんじや……?」

「ま、今更だし……」

世界地図の目処がたったところで他の問題も解決せねばならぬ。

「もうひとつ質問がある」

「あ、まだあったんだね。何かな？」

「遠い地に行く場合、空路などの移動手段はあるか」

どこまで技術が発展しているか我にはわからぬ。しかしスペインまで徒歩であった場合、どれほどの時間がかかってしまうことか。

「うーん。空路は難しいかな。なくはないけどそれ相応のコネとか必要だし……王族とかと繋がりがある、とかじゃない……よね……？」

「そのようなものはない」

「よかった。ちよつと焦っちゃった。それなら陸路か海路しかないかな」

ふむ。

つまりは今の時代にも、一応飛行技術はあるのか。

「他に質問はある？」

これ以上は今のところ、聞きたいことはなくなった。

「他の質問は地図を見てから行う」

「わかったよ。たぶんそろそろ戻ってくると思うよ」

その言葉通り、ほどなくして地図を持った兵士が走って戻ってきた。

「おつかれさん、見つからず戻ってこれたか？」

「なんとか……酒場の親父に見つけかけただけでなんとかやりすごした……。あの人なら絶対わざと大声で変なこと言うからさ」

「すげえ想像できるわー。自分だってギルド長苦手なのに、他の人が絞られるのは見てて面白がるよな」

「無駄話はよい。はやく地図を見せよ」

我が促してようやく地図が渡された。

「これは……それで、各地の世界樹はどこにあるのだ」

「ええつと、ちよつと待つてね」

渡された地図は、我が記憶しているかつての姿と異なる世界を記していた。

本来の大地を埋め尽くした偽りの大地の地図。その地図に兵士がペンを持ってチェックをいくつか入れていく。

「エトリアとハイ・ラガード、アーモロードに……ゴダムのもいるかな？」

「ゴダムの世界樹は無くなったしいんじやないか？」

「待て」

「どうしたの？」

「世界樹が、なくなったただと？」

世界樹がなくなるなどありうるのか。それはその国独自に設計された機能なのか、それとも外的な要素によるものなのか。後者であればその要因を用いれば、あの哀れな者達を解放する術があるということ。

「詳しく話せ」

「と言われても……誰もよくわかってないんだよ。大きな光の柱が立ったと思ったら、都市ごと世界樹が消えてたそうだよ」

「光の柱……か」

恐らくは衛星軌道上からのレーザーか。汚染が溜まった頃合いに浄化の役目を果たした世界樹ごと処分といったところか。

この件は私の求めた術ではない。我と我についてきてくれた者達のための城ごと消す方法など、考慮に値しない。

「消えた世界樹があった場所も書くのだ」

「わかったよ」

記された世界樹の位置関係を見るに、幸い消えた世界樹は目的のものではなかった。

そして目的地であるスペインの世界樹。その最寄りの地名は……

「読めぬ……」

文字がかつてと異なっているためわからぬ。

千年の時を経ようと文字の変化はそれほどないと考えていたが……

「あ、ええつと……これが今いるハイ・ラガード。で、こっちがエトリアで、これはタルシス。それでここが——」

「そこまでよい。タルシス、だな」

最寄りの地名はタルシスとわかれば充分だ。他の場所の名など不

要。それよりも……

「何故タルシスは世界樹から離れてあるのだ」

印から離れているのが気になる。

「……さあ？」

遠い地についてまでは一般兵にはわからぬか。

ならばもう質問することはない。

「タルシスに行くつもりなのかい？」

「そうだ。そこに我が求めているもの……それがあがる可能性が高いのだ」

「今なら丁度いい時期かもね。タルシスでも冒険者急募してるし、タルシスまでの旅費は負担してくれるそうだから」

「我は冒険者などではないが……」

「そうなのかい？」

いや、文字が異なるこの時代。通貨もかつてと異なるだろう。元々金など持っていなかったが。

旅費が必要ないとなれば、今回は冒険者ということにしてもいいかもしれないぬ。

「いや、やはり我は冒険者だ。タルシスに赴く冒険者だ」

「それじゃ、交易所で申請資料に記入を……って文字が読めないんだっけ。確か代筆可だから書いてもらおうといいよ」

「ふむ。そこまで案内するがよい」

「いいけど。君が世界樹に入ったのは秘密にしててよ」

「不要なことをわざわざ言ったりはせぬ」

必要であれば言うつもりだが、それを教えるのもまた不要なことだ。

兵士に連れられて街へと入る。門を越えてすぐだというのに人の往来が多くあった。

生きている人をこれほど一斉に見るのは何年ぶりであろうか。千年近くか。

本来であれば、ここに我を信じついてきてくれた者達もいるはず

だったのに。

「こつちだよ。この先は広場で、もっと人の行来が多いからはぐれないようにね」

まるで我を年下のごとく扱うのが気になるが、今の私の体を考えれば仕方のないことか。

たどり着いた施設はどこ狭しと武具が並ぶ店だった。珍しげに見られるのも少々面倒になるかもしれない、角を手で隠しながら入る。

「ここがシトト交易所。パツと見は武具店だけどいろいろやってるとこだよ。すいませーん！ タルシスへの申請の人を案内してきたのですがー！」

「はーい、ただ今ー！」

奥から出てきたのはまだ年端もいかぬ女兒。

時代、文明が変われば労働環境も変わるといふことか……。

「申請は、こちらの方ですね？」

「うん、代筆頼めるかな。この人読み書きできないみたいで」

「はいっ」

「それじゃ俺は持ち場に戻るよ。タルシスでも頑張つてね」

兵士は店から出ていった。

残されたのは我と女兒のみ。

「それで、我はなにをすればよいのだ？」

「えっ……男の人の声……？ あっ！ 失礼しました！ なんでもありません！ で、ではまずお名前を教えてください」

名前……

我が人であった頃の名前は体とともに捨てた。

機械の体となってからは肩書きを名乗ることはあったが、個を示す名は考えたことはなかった。

「あの……お名前を……」

女兒が困り顔で言う。

我が黙ってしまったからか。しかし名前などない。なければ作ればよいのだが、私のことを示す名前となれば様々な候補を出してしま

う。

そういえば翼人が我のことを、父なるイシユ、と呼んで崇めていた。全能なるヌウフとも。

「……イシユ。我が名はイシユだ」

「イシユさんですねっ。あと持っていく荷物なんですが、危険物になりそうなのは剣くらいですか？」

危険物になりえるもの……

この二振りの剣もだが、この体自体が危険物である。荷物というわけではないし言わなくてもよいか。

「そうだ」

「はいっ。では明日の正午に噴水広場で馬車が出ますのでこの書類をお見せください」

「これだけでよいのか」

「はいっ。タルシスの世界樹の御触れを出した人が移動費の資金援助してくれるんです。その申請書と証明書ですし、あとはイシユさんがタルシスに到着すれば完了ですっ！」

なんともあっさりとした申請だ。手間が省けるのだから構わぬが。

「あ、そうだっ」

「む？ まだ何かあるのか？」

「余計なお世話かもしれませんが……その、角みたいなのを隠すために必要なと思っって」

そういつて差し出してくるのはカラフルな三角形の布。

そういえば名前を考えるのに集中してしまい角から手を離していた。

「私は使わないので、もしよかったら……」

「ふむ。では我が使うとしよう」

赤を基盤にした三角巾で角を隠すように被る。

「とても似合ってますよっ！」

「角が隠せているのならなんでもよい」

「そ、そうですか……。タルシスでも頑張ってくださいねっ！」

スペインの世界樹、いや、タルシスの世界樹に赴く準備も終えた。
今のところは順風満帆といったところか。

翌日、何事も起きずにタルシス行きへの馬車に乗る。

馬車に揺られながらの旅は数カ月ほどに及んだ。

千年ぶりの大地は、かつての面影など一切感じさせない広大な緑の世界だった。

空は青々と澄んでおり、吹き抜ける風には肺を冒す化学物質など紛れていない。立ち寄る川の水など生に満ちていた。

「もうすぐタルシスにつきますよ、旅人さん」

「うむ、そうかそうか」

「そんなに珍しい景色でもないでしょうに……」

この時代のものから見たらそうなのかもしれない。だが我から見ればかつて夢見た光景の一部なのだ。

あとはあの者達がこの景色の中に入れてくれれば……

「タルシスが見えてきましたよ」

「ほう」

御者が示す方角には巨大な風車塔がそびえ立ち、四方を壁で囲んだ街。

「あれが最果ての街タルシスです」

「ずいぶん守備に力をいれているようだな」

途中見かけた街などはあのような壁はなかったが。この土地はかつて戦争でもあったのか。

「まあこの辺は世界樹に近いですからね。魔物が蔓延ってるんですよ」

「世界樹の影響か」

「ああ、安心してください。魔物と遭遇しないように獣避けの鈴は常に鳴らしていますよ。その効果がない相手には見つからないように走

らせてますし」

世界樹の中だけでなく外にまで影響が出ているとは。とても制御できていないように感じるが……

タルシスの街の、はるか彼方に佇む世界樹の姿を見やる。

……しかし、

「世界樹からずいぶん離れた場所にあるのだな。タルシスは」

「まあハイ・ラガードと比べたらそうですね。詳しいことはタルシスの辺境伯に聞くのが一番ですよ」

「そうか」

冒険者はまず、街についたら辺境伯に会わなくてはならない。そこで支援を受けるために色々とやるのだと聞いている。

その時にこの地の世界樹について様々なことを聞けばよいだろう。街に近づいていく馬車を影が覆い隠した。

「む?」

見上げればいくつもの気球が飛んでいる。

「あー、あれは」

「ほう、気球か」

「あ、知ってましたか。ハイ・ラガードでは見ないでしょう。ここ数年でできたみたいですよ。あの気球艇」

……さりげなく訂正されてしまったが、この時代での名称など知らぬのだ。我とてわからぬことはある。

「俺には空を飛ぶなんて怖くて仕方ないですね。忘れ物はないですか?」

「問題ない」

馬車による長旅もなかなかどうして新鮮なものだった。このように感じるのも人の感性に近づけてダウンロードした結果か。我ながらいいデータがとれたものだ。

いよいよタルシスに入り、この地の世界樹についての調査を本格的に始められる。我の目的に着実と近づいていくのが実に心地よい。

天候もまるで我の門出を祝うかのように晴天であった。

まずは辺境伯とやらの家に行かねばだな。

御者に聞くのを忘れていたが、まあ問題あるまい。

この街の領主のいるところだ。この建物の屋根から目立つ屋敷を
探せばきつとそこだろう。

3. 過去の希望の犠牲者

私にとって、その日はいつもと変わらない一日になるはずだった。朝から快晴で、空には雲と気球艇が浮かび賑やかな街並み……から離れた町外れの一軒家で独り一日を終えるはずだった。

独りなのは理由がある。決して性格に難があるからとかではない。そのはず。

独りでいる理由は、原因不明の奇病に冒されているからだ。

その病には、街にいる医師も匙を投げた。巫師にもすがったがダメだった。

感染するものかどうかもわからない。

わかるのは、確実にこの体を蝕み、変容していくことだけだ。

奇異の視線に晒されるのも、腫れ物を触るように扱われるのも嫌なので、今ではこうして町外れに隠れるように暮らしている。

もうこの病を治すことにほとんど諦めていた。

誰も訪ねてこない独りぼっちの家。そこで独り、人ではなくなるものに変容してしまうのだと。

暇潰しに本を読んでいると、誰も来ないはずの家がノックされた。

「……だれ？」

誰も来ないと言ったが、特定の人物、二人だけ来る。だがその人物は、片方は常に忙しく滅多に来ないし、もう片方も滅多に来ない。来るときはどちらも決まった日にくる。

つまり、今ノックしたのは知らない人だ。

もう一度ノックがされる。

迷子かもしれない。このまま放置するわけにはいかない。

姿見で自身の服装をチェック。問題なし。

裾からは人の手が出ているだけ。他は出ていない。

扉がまたノックされた。さつきよりやや音が大きいのが少し怖い。

「……どちらさまですか？」

扉越しに尋ねると……

「我の名を尋ねるのであれば、まずは汝が名乗るのだ」

やたらと傲慢な態度の声が聞こえてきた。

え？ 本当に誰？

というかなんで私が名乗らないといけないの？ 表に表札あるじゃん。名前書いてるはずなんだけど。

「どうした。名を名乗ることを許すと我が言っているのだ」

「ええ……」

なんなのこの人。

声からして男の人だ。どこか重く響くような低音の声は威圧的に感じる。言ってる内容も凄まじく上から目線だ。どこかのお偉いさんだろうか。でもそれがなぜ私の家に。

「……アルメリアですけど」

「そうか」

……

え、名乗らないの？

「はやく扉を開けるがいい」

「えっと……あの………どちらさまですか？」

なんなのこの人。こわいこわいこわい。

色々と諦観した最期を想像してたけど、こんな怖い人に関わるなんて想像してないし避けたい。

「ふむ……我はハイ・ラガードから来たものだ。このタルシスで世界樹の調査をしたいため冒険者登録とやらをしたいのだ」

……は？

「えと……それは辺境伯の……」

「うむ、そのため辺境伯に会いに来たのだ。わかったのであればはやく開けるがいい」

迷子か、この人。

何故こんな町外れの一軒家と、辺境伯のいるマルク統治院を間違えるの。

それとも辺境伯が不在だったとかで、それで辺境伯の自宅に直訴に来たとか？ それでもこんな辺鄙な場所にある家が辺境伯の家と思う理由がわからない。

色々と訳がわからないけど、一番厄介なのは……

「いつまで我を待たせるつもりだ」

この傲慢な態度の本人に、迷子の自覚が一切ないこと……

どうしよ。ここは違いますよって言ったら逆上されそうな……でもこのまま放置したらもつと怒りそうだし。

ていうかなんで私がこんなに悩まないといけないの。私は何も悪くないよね。

よし、言うぞ。辺境伯はここにはいないと言うぞ。

「えつと……辺——」

「はやく開けるのだ」

「はひ」

と、扉を開けるようずつと言ってたし、まあこれくらいはいいや。開けたら言うぞ。絶対言うぞ。

扉を開ければやたらと傲慢な態度の声の主とご対面。

一度深呼吸をし、いざ扉を開ければ……

「え？ 女の子？」

赤い三角巾で金の髪をまとめた女の子が立っていた。

あれ？ あの怖い声の男の人はどこに……？

「ようやく開けたか。さあ、この紙を受けとるのだ。我ははやく世界樹の調査に赴きたいからな」

「ほひよ!？」

思わず奇声を発してしまった。

だつてさつきまで聞こえてた男の声が、目の前の女の子から出てきたのだから。

これはあれか。男の娘というやつか。

いや、やたらと低音な漢女だろうか。

全然わからない。聞いてもいいんだろうか。いや、でも怖いし。

とうかやっぱり迷子の自覚ない。もしかしたら道を尋ねるために出てきてほしかったとかかも、つて期待をちよっぴりしてただけに残念だ。

「あ、あのー！」

「なんだ」

「へ、辺境伯のいる場所はここじゃなくて、マルク統治院です！」

「……」

どうしよう。怒つただろうか。

いや、私は事実を言っただけだし、怒られるか不安になるのっておかしいかな。

「……ふむ、ではマルク統治院とはどこなのだ」

逆上してこない……！

よかった。態度はともかく思いのほかまともなのかもしれない。

「あの小高いところにある、一番大きな建物です……いい、入り口にたぶん兵士がいるから、そこからは兵士に聞いてくれたら……」

ていうか、普通お偉いさんの建物っぽい場所として真っ先にあそこに行くものだと思うけど。

それに看板とかあるはずだし……

「……灯台もと暗し、か」

「？」

何やらよくわからないが、特に問題なくこの予想外な交流は終わりそうさ。

これで私はいつもの日常に戻ることになる。

「では、頑張ってください？」

「待て」

「ふおわあ!？」

扉を閉めようとしたら逆に引つ張られるほどの力でこじ開けられた。

見た目より遥かに力強いこの人……。それとも私が弱すぎるのだろうか……。どちらもありえそう……。

「な、なんですか!？」

さすがにここで弱気にはなれない。怖いけども。

「……」

「あの……なんなんですか?」

無言で私をじっと見ている。

何か言うかと思えばそんなリアクションでこちらとしても対応に困る。

さらに数秒ほど間をおいて、ようやく目の前の人物が口を開いた。

「袖をまくれ」

「え?」

「汝の袖をまくれ」

袖をまくれ。

今着ているローブの袖をまくれということか。でもなんでそんなことを。それよりも……

「い、いやです……」

先程までとまた違った別の怖さを感じる。感じるが、その言葉通り応じるわけにはいかない。

——だって袖の下まで、もう拡がっているんだから。

「……汝の体から妙な物質が分泌されている。我がかつて幾度となく観測したものと似た物質だ」

「は……？」

何を言っているんだろう。物質？ 分泌？

フェロモンのな？

ひよっとして袖をまくれっというのはこの人なりのナンパだったとか？

ハイ・ラガードから来たって言ってたっけ。ハイ・ラガードは変わった文化があるんだ……

思考が意味不明な方向へ飛んでいくほど混乱していたが、次の言葉は聞き逃すことができなかった。

「汝の体、植物に変質しているのだろう」

なんでそのことを

この病を知っている？

この、体中を植物に変えていく、呪いのような病を？

誰も知らなかったコレを、この人は知っている？

「この地の世界樹計画は制御に心血注がれたはずだったが、今の時代にまで影響が残っているあたり期待はずれかもしれない……」

「計画……？ 影響……？」

「しかし進行が遅いのを見るに、少なからず他とは違う何かがあるか……。個への影響を減らした代償に今の時代にも続いているのか？

しかしこの娘以外には変質していなかったようだが……」

「ちよ、ちよっと……」

「む……？ 汚染の影響がない……？ 確かに精神に異常はきたしてなさそうだが馬鹿な……いやこの数値は正常……」

「あ、あの……！」

「汚染を取り除けるといふことか？ いや、やはりなんらかの制御が働いて……やはり調査はするべきだな」

「ちよつと!! 待つてください!!」
「む?」

やつと呼び掛けに気づいてくれた。

諦めきっていた手掛かり。その人なんだ。なりふり構ってられない。藁にもすがる思いでどんな情報も聞かないと……

「あ、あなたは、この病気について知ってる……ということでもいいんですよね?」

「病気……つまり汝は、いや、この時代のもはそれを病気と考えているのだな」

「……病気じゃないんですか?」

病ではない? なら呪いの類?

でも高名な巫師でもお手上げだった。

「病気などではない。それは古の時代が創りだした希望の植物だ」

希望の、植物……?

こんな、こんなものの、どこが――

「どこが希望だって言うんですか!!」

人を植物に変えていくものが希望だなんてそんなの、おぞまじすぎる。それに古の時代のものが、なんで私の体にあるというのか。

「まったくだ。我も希望になど到底思えぬ。それは、災厄から逃れるために、新たな災厄を創つたにすぎん」

「……」

「本来はその災厄、古の時代で終わるはずだった。何故汝の身に残されているかは我もわからぬ」

「……っ！」

唯一の手掛かりの人も、私の体が蝕まれる理由がわからない。

古の時代の災厄。

ただの奇病などではない、災い。本来は今の時代にはないものということは、治療法もあるのか怪しい。

下手に見せられた希望があつという間に絶望へと変わった。中途半端に見た希望のせいで、より心までも蝕まれてしまう。

結局、人でなくなるのは変わらないのだ。

たとえ絶望が知れたただだが、それでも情報をくれた人にせめても感謝を告げよう。いつか人ではなくなってしまうが、人である間は、人の道理から外れたくはない。

いざ感謝を告げようと口を開く、その前に――

「だが、我ならば治すことができる」

――え

気休めならよしてほしい。

「我は世界樹による災厄を打ち消すために、この地の調査に来たのだ。我が救うべき者たちの名誉を守るためにも」

絶望感のせいだろうか。先程まで、傲慢で怖かった喋りが、今はその自信に溢れた物言いに思えてしまう。希望のように感じてしまう。ついさつき、希望から転落したばかりだというのに。

この人にすがっても、いいだろうか。助けを求めて、声をあげてもいいだろうか。

「私の体も、治る、んですか……」

「我ならば治せる。しかし、我が治す理由は見当たらぬ」
「……え？」

理由？ え？ 理由がないから治さないってこと？ え？ ええ？

……あ、そっか！

「お金なら払います！」

「いらぬ」

「そ、そんな……それじゃあ……」

お金はいらなくなると、後は何を欲しがるの。

……この人、見た目は女の子だけど、声や話し方からして男の人だし……

「じゃ、じゃあ……か……か、体で」

「だから我が汝を治す理由などないと……いや、待て」

く、食いついた……！

藁にすぎる思いで言ってみたけど、こんな効果があるなんて。正直嫌だけど、嫌だけど……植物になるより遥かにマシなんだし……！

「汝、私の研究に協力するのであれば、その体を治してやろう」

「け、研究……？ 研究って……？ あれ？ 体はいいの？」

「先も言ったように、我は救うべき者たちの名誉を守るため、世界樹の調査にこの地へ来た」

「はあ……」

そういえば、救うべき者たちの名誉ってどういうことだろう。その人たちを直接救うんじゃないってこと？

「調査、および研究をし、ハイ・ラガードへ戻る。しかしその研究結果のテストは我ひとりではできぬ。そのためには世界樹に蝕まれているもの、つまり汝に私の研究のテストサンプルとなってもらおう」

サンプル……それはつまり、実験台ということ？

どんなことをするかはわからない。だけど、今を逃せばこの植物から逃れることはできないのだと、なんとなく理解した。

だから返事はすぐさま決まった。

「それでこの体が治るんなら」

その言葉に、この人は満足げに頷いた。

初対面の人物だ。そんな人物をすぐさま信じるのはおかしいのかもしれない。

だけど私はこの日、この人のことを信じてついていくことに決めた。

「それで、どうしたらいいですか？」

「うむ。まずは世界樹の調査のためにも辺境伯のところへ行く」

「あ、迷子だったもんね……」

「……とにかく世界樹の調査にはまず辺境伯と会い、冒険者登録が必要らしい。それに辺境伯から古の時代のことについて知っているか調べたい」

ということとは、つまり……

「今はまだ何もわかってないって状態ですか？」

「この地の世界樹についてはな。だがすぐに全容がわかろう。我がいる限りはな」

やっぱりすごい自信だ。

このタルシスには多く冒険者が訪れているにも関わらず、何年も世界樹には誰もたどり着いていない。

それなのにこの自信満々な姿。

「この時代のものに、我のことは信じられぬかも知れぬがな」

自信満々、というわけではないのだろうか。表情こそあまり落ち込んでいないようにも、自信なさげにも見えないがどこか自嘲気味にその言葉は聞こえた。

「私は信じますよ。まあ、あなたの他にすぐるものがないっていうのもありますけど……」

「汝の信用などどうでもよい」

「ひどい!？」

少しは親しみやすさを見せてきたと思っただらやっぱり怖い人だ。だがひとまずは、こんな怖い人を辺境伯のいるマルク統治院に連れていくのが私の役目だろう。

それにしても何か忘れている気がする……

「あー！」

「なんだ」

「あなたの名前聞いてません！」

ずっと『この人』だの『あなた』だの『怖い人』だのと言ったり考えたりしてたけど、一緒に行動するのなら名前は知っておいた方がいいはず。

「汝に名乗る必要など……いや、よいか。我のことはイシユと呼ぶがいい」

「ちなみに私の名前は覚えてます?」

汝、なんじ、ってばかりで最初に名乗った私の名前を覚えていない気がする。

っていうか汝っていつの時代の人よ。

「……アルメリア」

「まさかの正解……」

記憶力が予想外にもいいようだ。

「ちゃんと名前で呼んでくださいいね」

「何故そのような指図を我がされねばならぬ」

「だってちゃんとその人の名前を呼ばれないと、誰なのかわからなくなりませんか?」

「……我にはわからぬことだ」

「ま、とりあえずマルク統治院に行きましようか。私も冒険者登録しますし」

「汝もか」

「……」

「では案内は任せよう」

「……」

無言で名前を呼ぶように催促してみたが伝わらなかった。

一緒に冒険する、でいいんだよね？ それともサンプルとしての役目以外期待されてない？

これは根気との戦いになりそうだ。

4. 最果ての街の領主

イシユとともにマルク統治院へと向かう。

道中、コミュニケーションとして色々と話をしてみた結果、わかったことがある。

一つ目、イシユは文字の読み書きができない。

しかし全ての文字が読めないというわけではなく、古代文字は読めるらしい。

二つ目、イシユは常識がない。

辺境伯のいる場所を探すために、マルク統治院の屋根によじ登ったらしい。そして、私の家に来たのは他の家からあからさまに離れていたからだとか。足元の大きな建物のことは何故か除外して考えてしまっていたのだとか。

まず屋根によじ登るなど言いたい。というか言った。

言ったら『私の知ってる冒険者などは他者の家に巨木の枝を落とす破壊していた』とか訳のわからない言い訳をし出す。

それに比べたらマシと言いたかったのだろうか。

三つ目、イシユは案外チョロい。

世界樹について私より知っていそうなので、色々聞いてみたいと言えば『何故我が教えなくてはならぬ』と渋っていたが、イシユ以外に頼れる人がいない、イシユは天才だから、などと頼り煽てれば、上機嫌に語りだしたのだ。

ドヤ顔が、あ、いや、得意顔がすごかった。初めて見た笑顔がこの得意顔。

私から聞いたとはいえ、それからずっと講義が続いている。すでに世界樹についての話でなく、やれエネルギーの出力だとか、ビットの反射率と角度だとか、遺伝子に組み込まれた場合の汚染だとか、もはやなんの話かさっぱり。

なので、右から左に聞き流して統治院へと歩みを進めている最中

だ。

ちなみに私も実はマルク統治院に初めて足を運ぶ。

というか、そもそも街を歩くのはかなり久しぶりだ。ずっと家に引き込もっていたのだから仕方ないはず。

人と関わって、健康な体を羨む機会が増えるのが怖かったし、なにより感染する病かもと考えてしまうと自然と外に出れなくなったのだ。

しかし、イシユが言うには私の今の症状は感染する見込みが低いとのこと。

つまりはやっぱり感染の危険性があるということだが、イシユが今はないと言うのなら感染はないのだろう。

だけど服装だけは気をつけないと。罵などがはみ出ていたら恥ずかしいと言うより怖い。不気味がられることが怖い。

そしてそんな時、イシユからのフォローなどはまずないだろうし。だって人の心の機微とかよくわかってなさそう。

「——テロメアに影響を与えるものが世界樹のものなのか、汚染のものなのかを絞りだし——」

「イシユ、お話中ごめんだけどもうつきましたよ。マルク統治院に」「む？ そうか」

表にいる兵士の人に冒険者登録のことを告げ、案内に従う。その間イシユが変なことを言い出したりしなないか不安だったけど杞憂だった。

そして辺境伯のもとへと案内される私達。

……マルク統治院に来るのは初めてだが、辺境伯とは何度も会ったことがある。

あの誰も来ないはずの家に訪れる数少ない人物のひとり、それが辺境伯だったりする。

彼は私の病をずっと気にかけてくれていた。何度も医師を紹介してくれたし、巫師にも掛け合ってくれた。果てには生活費の援助もしてくれた。無償というわけではなく、古代文字の解読を協力することが条件だったけど、それも気負いさせないための方便だと思う。

とにかくそんな辺境伯と久々の対面。それも彼から見れば、今までずっと引き込もっていた人物が冒険者になりたいと申請してくる形。

反対される気がしてきた……

不安をよそに、案内してくれた兵士さんは扉をノックする。中からの返答後、両開きの扉を開け、辺境伯から私達が見えるようにしながら紹介を始めた。

辺境伯は部屋の窓際で子犬を抱きかかえていた。私の家にまで時々連れてきてたあの子、名前はなんだったか……マルガリータだったか。人の言葉がわかってるんじゃないかって思うくらい賢い子犬だ。私事だけじゃなく公的な場でも連れていってると言ってたことを聞いたことあるが、まさか冗談でなく本当だったとは。

「失礼します。冒険者の登録に来た方たちを連れてきました」

「ありがとう。そこの……二人ともかね？」

「はい！」

今少しだけ目を普段より見開いた。やっぱり驚かせてしまったのかな。

「では君は下がってくれたまえ」

「はい！ さ、お二人とも中へ」

反対されてしまうかな。

反対されたら反対を反対しよう。それすら反対されたらさらに反対を——

「——リア君？ アルメリア君大丈夫かね？」

「ほあっ!? だいひつふほ!？」

「汝は何をやってるのだ」「アルメリア君!？」

混乱していたところを急に正気に戻るところなる。そのはず。

名前を呼ばれていたので慌てて返事をしながら歩き、その時に足がもつれて転んでしまった。普通に恥ずかしい。

「やはり病気が進行しているのではないかね……?？」

「あ、いえ！ そうじゃなくて今のは……ただ足がもつれただけで

……」

部屋のふかふかなソファに腰を掛けるよう手でしめされ、どぎまぎしながら腰を落とした。

うわっ、想像以上に沈む……。

何度か座り直して気を取り直す努力は褒められていいと思う。

「そんなことより、汝が辺境伯か。この紙を渡せば我も冒険者として登録が済むのだな」

「うん？ その通りだとも、と言いたいところだが、世界樹を目指すのであれば私の試練を受け、実力を証明してもらわないといけない」

「時間が惜しい。はやくその試練をするがよい」

「物怖じしないというのも冒険者に必要な要素といったところかな」

少しは物怖じしてほしい。

イシユから見たら異国の地の領主なんだろうけど、偉い人なんだからもうちよつと言葉づかいとか……

「ではまず、諸君の関係を教えてくれないかね？」

なんだその質問。

「私は僭越ながらアルメリア君のことを娘のように思っている。そんな彼女が冒険者になりたいと言うのであれば、私は応援しよう。聡明な彼女のことだ。何か考えがあつてのことだろう。それに、どうやら自発的に言い出したようだし反対する気はますますなくなる。彼女の人生は彼女のものなのだから」

いきなりそういうことを言うのはやめてほしい。するなら本人がいないところでやって……いややつぱり恥ずかしいしやらないでほしい。

「とはいえ、私は気になるのだよ。彼女は病が原因とはいえ、アウトドアな性格ではなかった。そんな彼女を外に連れ出した、君との関係が」

……嫌な予感がする。

願わくば、イシユが変なことを言いませんように……

「その者は我の実験のための被検体だ」

あほー……

確かにそんな感じかもだけど、馬鹿正直に言う？ 普通言う？

「被検体……？ つまり、実験動物とでも、言いたいのかね？」

本当にあほー……なんでそういうこと言うの？ 明らかに怒ってるんだけど？

ていうか怒ってるどころ初めて見るかも。今日は初めてだらけだなー。わーい……

「あ、あの……イシュはあの病を治せるから——」

「私はブラックジョークというものはあまり好きではないんだ。もう一度聞くとするが、彼女との関係はどういったものかね……？」

「では我ももう一度言おう。実験動物だ」

「……ふざけるな！」

辺境伯が怒るところなんて、初めて見た。

どうしよう。本当にどうしよう。

せっかく辺境伯が冒険者になるのを許してくれそうだったのに。

「何を興奮しているのだ。ふざけるもなにも、我は問われたから答えただけ」

「君は！ 自分が言っていることを理解できていないのか！」

「あ、あの！ イシュはあの病を治すことができるんです！ そのために実験の協力が必要だからであって！」

「ただ面白半分で言っている可能性もあるのだよ！」

「……やはりこの時代のもは我を信じれぬのが普通か」

辺境伯はすごい怒ってるし、イシュはイシュでなんだかアンニユイになってるし、なにこれ……

「いいだろう。辺境伯よ、我の話を聞くがいい」

そう切り出してイシュが話し始めた内容は、私に話してくれた世界樹の呪いについてのことだった。

「つまり、アルメリア君の病の原因は世界樹にあると……？」

「うむ、そして我はこの地の世界樹を解明したいのだ。我が救うべき者たちの名誉のために」

これでなんとか納得してくれるかな辺境伯……。それで私を実験動物扱いしたことを忘れてくれるかな……。

「その話を否定する材料はない。ないが、肯定する材料もないのではないかね……？」

「でもイシユは体を見せてないのに異常に気づいたんです！」

「それは確かにすごいことだ。しかしもしかしたら隙間から見えていて、それらしい話をうそぶいているということもある」

そんなの疑いだしたら何も信じれないじゃない。

ダメだ。辺境伯は今、かなり疑心暗鬼の状態だ。これ絶対イシユが変なことを言ったからだ。本当にあほ……！

「我が汝に言ったことの否定は、古の時代の否定でもあるぞ」

「世界樹については誰もわかっていないのだよ。君の話した内容も真偽はわからない」

「……我が古の時代の者だと言ってもか」

「それこそますます信用するのが難しいことだ」

この部屋の空気がどんどんとギスギスしていく。もう私にできることはなんだろう。とにかく最悪パターンを考えよう。それを避けることに全力を尽くそう。

考えられる最悪で、なおかつありえそうな展開……

イシユが怒って辺境伯に斬りかかること。

………うん、それだけは絶対に阻止しよう。なにがなんでも阻止しよう。できるかどうかはともかくとして。

「では我が古の時代の者だと証明できればよいのだな」

「できるのかね？」

「言うよりも見せた方がはよい」

何をやる気だろう。

あれ？ ていうかイシユは古の時代の人？ 普通に聞き逃しかけてたけど、そっか。それで色々知ってたんだ……て今は納得より

も、イシユが変なことをしないかだ！

イシユの動きを注意深く見ていたら、腕を外した。腕を外した。

「へあ!？」

なんだか今日は変な声ばかりあげている気がする。

いや、それよりも！ 腕って取り外し可能なものだったっけ？ え？

「それは……」

「この時代の者には想像もつくまい。この体は人のものとは違う。古の技術を注ぎ込んだ、アンドロイド……機械の体だ。我は人であった時の体を棄て、機械の体となって存在し続けてきたのだ」

取り外された手は、体から離れてもグー、パーと動かしてただの義手ではないことをアピールしていた。

「機械の体になった……？ そんな、魔法のようなことが……」

「かつて、ある科学者が言っていた。そこに至るまでの過程を想像できない科学を、人は魔法と言って理解をあきらめる、と。汝らにとっては魔法でも、我にとっては科学の技術なのだ」

「……君が古の者だということは信用しよう。だが、信用と信頼は別だ」

「汝からの信頼など求めていない。我が求めるのは世界樹に関するのみだ。ここで冒険者として認められれば世界樹に関して情報が集めやすいと踏んだから来たのだが……古の知識を継がれていない点を見るに、必要ないかもしれぬな」

取り外した腕を元の場所に戻し、イシユは席を立った。

このまま部屋を出ていきそうな雰囲気だ。というかこれは出ていく。短い付き合いだけど絶対そうすると思えた。

このままじゃダメだ。

どうすれば……イシユの説得？ いや、するだけ無駄だ。イシユの言ってることは間違っていない。イシユが救いたい人達を救う前段階のテスト。それを私ですするというのだ。被検体という認識は事実だ。

となると辺境伯を説得しなくちゃ。私が被検体であることを望ん

でいると伝えれば……

「あ、あの！ 私の意見も聞いてください！ イシユも待つて！」
「アルメリア君……」

イシユが私に視線を向けて動きを止めた。よかった。付き合っ
られぬとか言っつてそのまま止まらず行くかもという不安があつたか
ら。

「アルメリア君、君が冒険者になりたいという気持ちは私も汲みたい。
だが、彼？ と共に行くのは危険だ。確かにイシユは世界樹の知識に
関して誰よりもあるかもしれない。君の病についても知っているか
もしれない。だが……君のことを人として見ていない。仲間として
見ていない」

「私はそれでも構わないです。この体を治すためならそれくらい全然
……」

「君のことを実験動物とまで言い放つほどの人物だ。いくら治す可能
性が高いと言つても——」

「辺境伯……」

辺境伯はお金を持っている。権力もある。

それだけでなく、街の人からも好かれるほどに人徳もある。

高潔で、富みと名声のある人物だ。

だからこそ、私と認識がズレてるのかもしれない。

私はお金なんて持つていない。私の境遇を憐れんでくれている人
から援助を受けて生活している身だ。

いなくなつた両親も権力者というわけでない。当然私自身もそん
なものではない。

街の人から隠れるように住んでいる身だ。好かれる以前に知られ
ていない。

私には何も無いのだ。

「私は、人として見てほしいなんて思つていません。そんなことを思

えるほど、余裕はありません……どんな考えを持ってたっいいいで
す」

善意なんてなくていい。

高潔さなんてなくていい。

「ただ、私が求めてるのは治してほしい……それだけです」

治るのなら、実験動物として扱われてもいい。

イシユが助けた人の中には私はいない。だけど、その過程で助かる可能性があるならそれでいい。私を治すためじゃなくていい。副次的に治るならそれで全然かまわない。

そのためにもイシユには世界樹へ赴く冒険者になってもらうんだ。

「アルメリア君……」

「辺境伯、ですから私をイシユと一緒に冒険者として認めてください
！」

「……それはできない」

「どうしてー！」

「先も言ったように、諸君にはまず、試練を受けて、冒険者として問題
ないと判断されないと認めるわけにはいかないのだよ」

え、と……それってつまり……

試練さえ受ければ、冒険者として活動していいってこと？

「確かに、どんなことを考えていようと、当事者がまず求めることは治
してほしいことだ。私はそれを見落としていたよ」

「じゃ、じゃあイシユについていってもいいんですね!？」

「イシユ君」

辺境伯が厳しい眼をしながらイシユを見つめた。

「試練の内容は、タルシスの近くにある廃鉱から虹翼の欠片と呼ばれ
る鉱石を持つてくることだ。送迎は兵士にするよう手配しておく」

「我は世界樹の情報、もしくは古の時代についてを知りにきたのだ。だが汝らはほとんど知らぬという。ならば我が汝に認められるための試練を受ける必要などあろうか」

「……確かに私は君ほどの知識はない。古代のことも知らない。だが、今の時代については君よりも知っている。そして冒険者を支援するための財力もある。決して君にメリットがない、なんてことはない」

「ふむ……」

「それと、これは強制ではないのだが、できたらアルメリア君を守ってくれないだろうか。君にとっては彼女を仲間と認識できないかもしれないが、それでも……」

辺境伯はそう言ってくれるが、あのイシユが誰かを守るなんて想像しづらい。

チヨロキはあるが、人情味はないイシユだ。実際、人でないということがわかったけど。

イシユはちらりとこちらを見た後に、

「その者次第だ」

と言った。

なんだろう。その言葉だと、私の行い次第なら守るっていうことだろうか。正直かなり意外。

「そうか。では、二人にミッションを課そう。森の廃鉱から虹翼の欠片を持ってきたまえ！」

いよいよようやく、冒険に出ることができ。世界樹へほんのちよっぴり近づくことができる。

実際はまだ冒険者ではないけども。

それでも確実に進めたのだ。

私は逸る気持ちで胸を高ぶらせながら、部屋から出ていくイシユに
慌ててついていった。

5. 廃鉱の魔と暁の王

「イシユ、イシユ」

「なんだ」

ズカズカと歩いていくイシユを追いかける。

すごい堂々とした歩き方のせいか、妙に高圧的な雰囲気のせいか、人が避けて行ってくれてるのが幸いだけでもうちよつとペースを落としてほしい。追うのが大変だ。

「そっちは街門じゃないですよ。兵士さんの待ってる街門はあっち」
「……そうか」

自信満々に進んでいくけど道をよく間違える。

イシユからしたら見知らぬ街で、看板の文字もかつてとは全然違うから読めないのも仕方ないけど。

「……そんなに前を歩いていかななくても」

「先導者として当然だ」

「迷子になりそうじゃないですか……」

「むう……」

ついていくと決めただけど、さすがに変な方向に進まれたら止めなくちゃなんだ。だからそんなふうはどこか恨めし気に見ないでほしい。

「それに街門にすぐに行かず、ちゃんと準備してから行くようにって言われてるじゃないですか。だからまず必需品を買いに行きましようよ」

「必需品？ この時代の常識を我はまだ知らぬ。なんであれ早々に済ませよ」

常識とはまた違うかもしれないけど、冒険者の必需品は大事だろうし。

私の数少ない知り合いの冒険者からは絶対大事と言っていたアレを買いに行く。

たしか取り扱ってるのは……

「文具屋だと……」

店前で呆然としているイシユを無視して中に入る。

このメリー文具店はタルシスの隠れ名店なのだとの人が言っていたのだ。品ぞろえはいいが知名度が低く、客足はないことが、決して多くもない。

そんな事前情報通り、客の入り数はまばらだし、内装も綺麗でなかない。

「イシユ、どうしたんですか」

「どうしたもこうしたもあるか。我は冒険の必需品を求めて文具店にでも行くと考えていたが、文具店だと？」

「だって文具店には置いてないし」

えっと、どこにあるかな。

探しているのはノートとペン。あとインクだ。

どれも安物で妥協はしない。下手に安いのを買うと後に後悔するのだと聞いた。

ノートも高めでかつ実用的なのが2冊必要だ。表紙は黄ばんでいるものがいらいらしい。皮表紙に防水加工がされている証拠なのだとか。やや粗い加工のせいで黄ばみ、訳アリ品として値段も少しまけられてるのが多いとか。

「ただの買い物ならば我は付き合ってもらえぬぞ」

「違うってば。冒険なら地図とか必要なもの」

「地図だと……」

行くのは自然が作りだした迷宮。

そして出会うのは未だ不明な点が数多い魔物。

そのどれもをしつかりと記録していけば、どんどんと楽になる。

そういえばイシユは古代のすごい人だし、そんなメモと違って必要ないのかな。

「イシユは……あ、いや、やっぱりなんでもないです」

「なんだそれは」

考えたら街中で何度も迷子になりかけてるんだった。

地図なんて不要！ なタイプじゃない。いや、ある意味では地図なんて不要！ 読めないから！ ってタイプか。

となると、地図は私が描いていくことになるか。

ノートとペン、インクを無事手に入れて、メリー文具店から外に出る。

「それじゃ次は雑貨店に行きましょう！」

「今度は何が必要なのだ……」

「鞆ですよ鞆。できるだけ頑丈で、たくさん入るやつ」

「知識はかさばりなごせぬ」

「素材はかさばりませぬ」

必要なものはあとちよつとで揃うのだ。

それまでもうちよつとだけ我慢してほしい。

あとは鞆といくつかの医薬品のみ。

今度は探すのに手間取ることはないと思う。メリー文具店では悩みに悩んで50分くらいいた気がするし。

それにしてもちよつと楽しい。

外に出てこうしていろんなものを見れるなんて。まあ、少し汗ばんで暑苦しいがローブをまくるわけにはいかない。その点だけ野暮ったいけど。

まあ楽しむのもほどほどにして早く買い物が終わらせないとね。イシユが怒ってしまおうし街門で待たせてる兵士さんにも申し訳がないから。

よーし、手早くがんばるぞー。

結局、買い物に夢中になり過ぎたあまり、準備を終えて街門についたのは日が暮れかけてのことだった。

「ほんつとうにごめんなさい！ お待たせして本当にごめんなさい！！」

「あはは……いいよいいよ……。冒険の準備は大事だしね……」

兵士さんの疲れ切った雰囲気により申し訳なくさせてくる。

ずっと立ってたのだろうか……来たときも立ちっぱなしで意識失ってたし……

「それじゃあ……あ、それでは、これから森の廃鉱に行くわけですが、準備などは大丈夫ですか？」

疲れのためか崩れていた口調を仕事モードに切り替えたようだ。大変そうだ。

「はい」

「さんざん準備をしたからこんな時間になったのだ。問題ない」

ではどうぞ、とそばにある気球艇に乗るよう促される。

乗り込んでから兵士さんが、そういえば、と思いだしたように聞いてきた。

「辺境伯がギルド名を聞き忘れていたので聞いておいてほしいと言っております。お二人のギルド名をお願いします」

ギルド名。そんなの当然。

考えてなかった。

いや、私が考えるのはおかしいか。だってイシュがリーダーだし。

私ことアルメリアは、イシュについていく実験動物なのだ。たまにお手伝いする実験動物なのだ。

「ギルド名か。なんでも構わぬ」

「え、あ、えっと。私が決めるの？」

「他に誰がいる。その兵士に決めさせるわけにもいかぬだろう」
突然振られても……

ギルド名はこれからその名称で呼ばれるものだから、ちゃんとしたものじゃないとダメだし。かといって名前負けしちゃう感じもいやだし。っていうか咄嗟に出てくるものじゃないでしょうこういうのって……！　せめて他のギルド名がどんな感じなのか知ってから決めたい……！

「じ、実はまだ決まってないので、決まってから報告でいいですか……」

「わかりました。ではそのように伝えておきます」

なんとかこの場は凌いだ……

イシユが決めておいてくれたらよかったのに……

隣にいるイシユを盗み見ると、それはもう楽しそうに空の景色を見ていた。

こうして見ると、見た目のせいもあってごく普通の女の子に見えるんだけどなあ……

……
……
……
……

「お、あの気球艇はワールウィンドさんのじゃないかな」

兵士さんの口調が砕けて、飛んでいる気球艇を指さす。

「ワールウィンド？　あの気球艇のことか？　我らの行先から飛んできたように見えるが」

「タルシスで今のところ最も優れた冒険者だよ。彼の功績で気球艇も発展したんだ。それにしても、廃鉱に何か用事でもあったのかな……」

「ほう。冒険者でありつつ、技術者でもあるのか。……アルメリア、汝は何をしているのだ」

今日購入した大きい鞆を頭に被ってしやがみ込む私を、珍獣のようなものを見る目で見てくるイシュ。

いいじゃないか。隠れなくなっただけなんだ。誰だってそんな時があるのだ。

気球艇はどんどんと近づいてくるようだ。

すれ違いざまに会話を行うのが聞こえた。というか、ややスピードが落ちてる。すれ違いざまと言うよりちよつと普通に会話する気だ。

「やあ、ご苦労さん。新しい冒険者の案内かい」

「ワールウインドさん、お疲れ様です。はい、虹翼の欠片を取りにです」

「そっか。もう少し早ければ廃鉱を俺も案内したんだけど、ちよつとタイミングが悪かったかな」

「何かされていたのですか？」

「ちよつと落とし物を探しててね。もう見つかったからタルシスに向かうところなんだ。じゃあ俺はこれで」

「はい！ お疲れ様でした！」

ワールウインドさんと会話しちやつた。と浮かれてる兵士さん。

そんな人気者なんだろうか。そういうイメージはあまりないけども。

「……あの男も冒険者なのだな？」

「そうだよ！ 見た目は胡散臭い感じだけど……あ、これは内緒でお願いしますね。でも実力は凄まじいんだ」

「……とても冒険者には見えなかったがな」

イシュが何かひつかかっているようだが、まあ見た目は完全に胡散臭いおっさんだしね。ややこけた頬に無精髭、やる気のなさそうな目で基本ニヤけている男性だ。そう思うと冒険者っぽさは全くない。

見た目の胡散臭さで言えば、辺境伯もかなりのものだけだ。

「もうすぐ森の廃鉱につきますよ。数は多くないですが魔物も出る廃鉱です。充分に注意してください」

森の廃鉱。

虹翼の欠片と呼ばれる鉱石が見つかり、近頃はこうして冒険者の試

練に使われている小さな森。

虹翼の欠片が見つかる前は完全に廃れてしまっていたらしく、その時から魔物が棲みだした森だとか。

気球艇を森の入口、少し開けた場所につけ、兵士さんは座り込んだ。

「立ちっぱなしはさすがにもう疲れたからね」

「ご、ごめんなさい」

「あ、いやこちらこそごめんね。虹翼の欠片を持って来たたら声を掛けてくれ。それまでここで休んでるよ」

もう日が暮れてしまった。

お昼頃に辺境伯から手配されていたと考えたら、およそ7時間近くこの人は立ちっぱなしだったのだ。

なら休ませておこう。

地図にこの場所を簡易に描きこみ、よいいこうとイシユに声を掛けようとした。

もう隣にはいなかった。

「もう出発しちやってるの!? マイペースすぎない!」

「ははは、大変だね。ま、気を付けて行ってくるんだよ」

「ありがとうございます! では!」

幸いにも道は一本道。

すぐに合流はできた。できたけど、そりや仲間ではないけど、実験のテストをするための被検体ならもうちよつと、被検体として連れていくためにこう……

そんな文句が出そうになったがやめた。

イシユは何か夢中で小川に手をひたしている。

「何してるんですか」

手を洗っているわけではなさそうだ。

ただ手を小川につけているだけだ。何か気になるものでもあったのだろうかと尋ねてみた。

「……以前の我は、今回の我を人の感性に近づけるため人格データを少し変更した。だからだろうな」

「？」

「温度を感じれぬ。水に触れていても、人ならば冷たいと思うものであろう。それを感じれぬのが少し残念に思えてしまう。何故かは我にもわからぬ」

イシユの体は機械。

正直機械というのによくわかっていない。とても複雑な絡繰りのようなものという認識でいる。

その体になったことを、後悔しているのだろうか。

「何を呆けている。はやくいくぞ」

「あ、はい」

地図を描きながら森の中を歩く。夜だけでも幸いにして今日は晴れ。月明かりが道を照らしてくれている。

一応ランタンは持ってきているけど、使う必要はなさそうだ。

「時に汝、戦うことはできるのか」

隣から地図を覗きながらイシユが聞いてきた。

「実戦はしたことないけども、一応ルーンマスターだから大丈夫です。本を読む時間はいっぱいあったんで」

「ルーンマスター？ 本？」

イシユはよくわからないといったリアクションだ。ちょっと珍しい。

あ、生きてた時代が違うから別の名称なのだろうか。

「えっと、ルーン……印で、大気中の元素に働きかけて戦うやつです。今の時代はルーンマスターって言うんですよ。もしくは印術師とも言いますね」

「……汝は何を言っているのだ？」

え、ルーンマスターの説明ですけど。

しかし伝わっていないようだ。でも他にどういえばいいんだろう。
「む?」

あ、丁度いいタイミングで魔物が。

百聞は一見に如かず。言うよりも見せる方が確実だ。

どこを見ているかわからない目で魔物は草をかじっている。

その大きさは子犬ほどの大きさ。しかし子犬と違って気持ち悪い。
というか不気味だ。

「バッタ……か? 随分と大きいが」

「バッタの魔物ですね」

初めて魔物を見るが本当に大きい。

バッタとはいえ魔物だ。草を食べてるあたり、草食だろうけど人間を襲ってくるらしい。

「それじゃあ私が印術であの魔物を攻撃しますんで、ちよつと見ててください」

「だから印術とはなんだと……まあいい」

草とか食べてるし、火球の印術でいいかな。というかまだ火球しか使えないけど。

印を描き、杖の先に火の球が宿る。

あとはこれをうまく……

「あたれっ」

「……は?」

「やった、あたった!」

初の実戦。不意打ちとはいえないスタートじゃないか。

火の球はバッタに当たった途端に小規模な爆発を起こし、その攻撃力によってバッタは動かなくなった。いや、虫っぽくピクピク動いている。死んだ……よね……

「これ、倒しましたよね? 大丈夫ですよね?」

「あ、ああ……いや待て。今のはなんだ」

「へ?」

イシユはいったい何にひっかかっているのだろうか。

今のって火球の印術のことだよな？ 何って印術としか。

「火の球がどうして杖から出たのだ……」

「？ そりゃ印術で」

「わけがわからぬ……まるで魔法ではないかそれで……は……」

「いえ、術ですけど」

魔法とは違うのだ。

というかイシュに魔法とか言われたくない。イシュの体の方がよっぽど魔法染みている。

「魔法とは理解できない科学を指す……我が理解できない？ これも世界樹の影響なのか……？ 進化の過程か？ しかしハイ・ラガードの冒険者はこんなことしていなかったが、それぞれの地の世界樹によって近くの人間の影響が異なるのか……？」

「もしもし？ もしもーし？」

「……わ、我は全盛期の体と違い、この体は性能が格段に落ちている。演算能力もだ。だからその術の解析ができないのは今の我だからであって……」

「イシュー？」

なにやらブツブツ言ってるけどまあいいや。

なら今のうちにバツタのこともメモしておこう。

魔鋌に出てきたつてことは新種ではないだろうけど、しっかりとメモっておかないと。名称は……バツタの魔物、じゃ恰好がつかないしなあ。まあ新種じゃないんだ。名称については街に戻った時に誰かしらに聞けばいい。

簡単な絵を描き、メモも書いた後にバツタの死骸に近づく。

魔物は脅威そのものだが、資源ともなり得る。

よって魔物が出現する場所は、二極化されがちだそうだ。

魔物の被害によって壊滅させられるか、魔物の資源によって発展するか。

とりあえずとしては使えそうなのは……全然わからない。

どこが資源になるのだろうか？ 食べるのか？ 普通に嫌だ。嫌すぎる。

……バツタと言えば脚力だ。

ならばやたらと逞しいこの後ろ脚をもぎ取るしかないか。

「イシユ、バツタの脚斬ってくれない？」

「う、うむ」

あ、正気に戻っている。

まだちよつと混乱しているのか割と素直に聞いてくれた。

「これもお金になるかもだからね。ちよつと気持ち悪いけど……」

「改めて、我は今の時代の知識は皆無だからな。任せる」

なんだか素直になったものだ。

なんであれ、少しは私も戦えることがわかってもらえたのであれば幸いだ。

時折遭遇するバツタを焼いたり斬ったりしながら森の奥へ奥へと進む。

苦戦することが今のところ全くない。イシユの動きがその自信満々な態度を裏付けるくらいにすごいのだ。

そんな順調に進んでいると立て看板が一つ、月明かりに照らされていた。

「看板……」

「何が書いてあるのだ」

「えつと『警告。この先は、廃鉱のこわい魔が住んでる場所。勇気と蛮勇を履き違えちやダメだよ。死んじゃうよ』って」

「随分砕けた内容なのだな」

私なりにアレンジしました。

まあ嘘は何一つ入れていない。実際そういう内容の文章だ。

「わざわざ書かれるほどだ。バツタなどとは比べ物にならぬ相手なのだろう」

「そういうえば……駆け出しの冒険者はよく狒々に襲われて引退するはめになるって」

「ヒュッ」

もしや狒々も伝わらないのだろうか。これは困った。

「……狒々とはそのことか」

「え？」

イシユが示す場所は木の影になっていてよく見えない。

よく目を凝らしてみると、確かに何かがある。

これは……まずいのでは？

「イ、イシユ……え？ イシユ？」

ズカズカとイシユはその何かがあるところへ歩いていく。

そんな刺激したら危険なのでは。

「何を怯えている」

「いや、あぶないって看板にも！」

「死体がか？」

「……え？」

イシユが木の影から狒々の魔物の死体を引きずりだしてきた。

確かに死んでいる。

「なんで……？」

「見たところ、他の冒険者によってやられたのだろう」

「他の冒険者……？ でも私たち以外なんて……あ！ ワールウィン

ドさん！」

さすがベテランだ。

廃鉱の魔を簡単にやっつけたのだろう。あのすれ違った時の雰囲気からして苦戦したという感じはなさそうだし。

狒々の死体はその体に大きく斬られた痕がある。

いや、これは斬られたというより……

「どうやったらこうなるの……」

「まるで抉られたかのようなだな。あの男がそれほどの怪力を持つように見えなかったが……」

こんなの剣で出来るものなのか。

まるで内側から爆発でもしたかのような傷跡。死んでから時間が経つてたためか、虫が集っている内側が気分を悪くさせる。

「行くぞ。あの男の戦った結果など我らにはどうでもよい。虹翼の欠

片とやらを探さねばならぬ」

「はい……」

狒々の死体をイシユは茂みに向かって投げ、さらに奥へと歩み始めた。

しばらくして、やっとと言うべきか、奇妙な地面を見つけた。

そこは夜のおかげが、やや光っていることに気づけた。

「あ、あれ！ あれ！」

「虹翼の欠片とはあれのことか」

正直言うともうへとへとだ。だけどようやく今回の冒険のゴールが見えた。

あとはあそこから鉱石を掘りだすだけだ。

「やっと……！ あ……」

ゴールが見えた喜びの余りそのまま走りだしそうになって、そして気づけた。

「今度のは生きているようだな」

「狒々の魔物……それも2頭も……」

光っている地面からそれほど遠くない位置に2頭。

思い思いに動いているのか、水浴びをしていたり、毛づくろいをしていたりしている。

見つからないように掘りだすなんて、できるのだろうか。

「……」

大丈夫。魔物とはいえ生き物だ。そのうちどこかへ行く。それまで耐えればいいだけだ。

「……」

大丈夫だ。このままじっとしていれば。なんか隣で誰かが動きだした音が聞こえた気がするけど大丈夫だ。

うん。わかった。

「時間が惜しい」

イシユが待たないことなんてわかってた。うん、知ってた。狒々達に無用心に近づいていく。

当然狒々もそのことに気づき威嚇し始めた。

イシユはその威嚇を見ても、慌てることなく、むしろ鬱陶し気に「知性の欠片もない獣」ごときが我の邪魔などできようものか」

そう言つて、剣を片方掲げた。

「美しき陽光によって焼け死ぬがいい」

掲げた剣の刀身が炎に包まれる。

そしてそのまま……

そのまま……

………何もしない。

「……？ 炎が飛んでいかぬ……？」

「何やってんの!?!」

そのまま斬りつけるんじゃないの!?!

炎が飛んでいかないって印術じゃないんだからそりやそうでしょう!?!

「出力が落ちているからか？ 思えば身体能力のテストしかしていなかったが……」

「イシユ!!」

狒々が何かブツブツ言っているイシユに飛び掛かった。

そしてその両腕を振り上げて、同時に叩き付けたのだ。

「イシユ!?!」

「凍雨と雨氷」

え、なんであの人平然としてるの？

普通に死んでもおかしくないでしょう。今の。機械の体だから？

「これもダメか……」

今度は刀身が冷気に包まれたのか、氷を纏いだした。

狒々から攻撃を受けているのにも関わらず、何事もないかのように

また剣を掲げだす。

「雷鳴と我が身」

刀身が雷を纏いだす。

しかしそのまま『これもダメか』とぼやいている。

っていかさつきからその技名なに？

「剣に帯びさせる程度の出力になっているとは……」

今度は両方の剣を掲げ――

「山行水行」

凄まじい勢いで振り下ろした。

その攻撃の勢いを狒々の筋肉では止めることができなかつたのか、そのまま一頭が切り裂かれた。

「やはり体が小さくなると届かぬ範囲が出てくるな」

何が起きたのか混乱しているもう一頭の狒々を、イシユは愚痴りながら斬った。

「さて、虹翼の欠片とやらを探すか」

廃鋳の魔……あつさり倒しちゃった、この人……

その後、虹翼の欠片と呼ばれる鋳石っぽいを見つけ出し、ついでとばかりに狒々の素材として皮を剥ぎ取ってから、入口で待っている兵士さんの元へと戻ったのだった。

6. 夜闇に舞うは旋風の白刃

虹翼の欠片。

鞆に入れたのに全く重量が増えた感じがしないほどに軽い鉱石だ。鉱石と違っていいものか悩むものだけだ。

とにかく試練として課された内容を達成したことだし、あとは辺境伯へ報告するだけとなったのだが……

「もうすっかり夜遅くになっちゃいましたね」

「辺境伯への報告は明日の朝方をお願いします。さすがにこの時間はちよつと……」

思えばこの兵士さんにはずっと仕事をさせてしまっていたことになる。

昼からずっと待機していて、そしてようやく夜に入りかけで気球艇運転、深夜といえる時間にまた飛ばしてもらって、なのだ。もう何時間だこの人の活動時間。

「それじゃ、明日の朝に報告ってことで、私は一度家に戻りますね」

「うむ、我は酒場にでも赴こう」

「イシュってお酒飲めるのですか？」

「この時間でもやっていそうだから行くだけだ。たいした期待はしていないが情報収集にもなる」

まだまだ元気ということだろうか。

あれだけ動いたのに、私はもうへとへとバテバテだ。

「あ、イシュはどここの宿をとってるんです？ 明日合流するなら私がそつちに向かいますよ」

私の家まで迎えに来てもらうなんてまずない。ていうか絶対そんなことしなさそう。

別に辺境伯のいるマルク統治院前で集合でもいいけども……

「我は宿などとしておらぬ」

「じゃ、じゃあどこで寝泊まりするつもりで……っ？」

まさか酒場でそのまま寝るつもりだろうか。酔いつぶれた酔っ払
いたちと一緒に。

それはダメだ。イシユは見た目だけなら女の子なのだ。見た目だ
けなら。

「そもそもこの体に睡眠など不要だ。ゆえに寝床など必要ない」
寝ることができない、ということ？

戦闘面だけじゃなく、やっぱり全然人間と違う。

「それなら私の家に来ます？」

今日は酒場で一夜を過ごすつもりだろうけど、きつと次からは酒場
にも行かなくなる。イシユはそうする。『期待していた情報が一切な
かった』とか言って酒場も行かず、夜の街をさまよう。

そんな不審人物が生まれるのを防ぐためにも、つい誘ってしまっ
た。

「我は酒場に行くといったであろう。汝の家などでは情報が集まると
思えぬ」

「二応私、辺境伯から古書の解説を任されたりしてるんです。それで
何冊か古い書物が書齋にあつて……もしかしたら古代の情報かもで
すよ」

「ふむ……よかろう」

釣れた。すぐくあつさり釣れた。

ついでに解説が楽にすすい進むはずだ、これなら。

何せ古代の人の力があるんだもの。我ながら策士であるとひとり
ほくそ笑みそうになった。

相変わらず先頭を歩くイシユの後ろについていく。

さすがに一度通った道はもう覚えていいのか、今度は迷うことはな
かった。

あとはその公園を通り過ぎたら私の家だ。レンガの壁で囲って
ある公園は、ご近所の子供が昔スナイパーごっこをして簡易の弓を
ピュンピュン飛ばしていた名残である。壁で囲まないと本当に危な

かったのだとか。

「む？」「うげ……」

もうこの先には、ましてやこの時間なら、まず人はいないはずなのに家の前に人影がひとつ。

その姿を見て、イシユは訝し気に、私はうげえと声をだした。

「やあ、おかえり」

その表情はやっぱりいつものように、ニヤついている白髪の男性。骨ばった頬に無精髭、やる気の見えない目つき。

「ワールウィンドさん……こんな時間にどうしたんですか……」

真夜中に、独り暮らしの女性宅の前に、ニヤついている男性が一人。

普通に通報案件ものだ。

「アルメリアが心配で待ってたんだよ」

「……」

「そんなに睨まなくてくれよ。まあ、その分だと俺の言いたいことはもうわかってるみたいだね」

別にワールウィンドさん自体は嫌いじゃない。

むしろ好きな部類だ。数少ない、というかイシユを除けば二人しかない知りあいのうちの一人。

ひとりぼっちの私を気にかけて何度も家を訪ねてくれた。いろいろな話をしてくれた人だ。

「まさか、あのすれ違った気球艇に乗ってたなんてね」

「汝はここで待ち伏せなどして何がしたい。我の邪魔をする気か」

「いや、君の邪魔をする気はないさ。むしろ新しい冒険者の誕生は素直にうれしい。俺が用のあるのはアルメリアだけだよ」

辺境伯もずっと私に気をかけてくれた。ワールウィンドさんも。

だけど二人はある点では違う。

辺境伯はよくてもワールウィンドさんには気づかれずにいたかった。

「アルメリア」

ワールウィンドさんは……

「本当に心配したんだ……なんで冒険者になるんだい？ 冒険者なんて危険だ。君に何かあったら俺は君の両親にますます申し訳が立たなくなる……」

過保護なのだ。

何年も前に、私の両親に街の外で命を救われたらしい。それ以来恩を返すためにと、両親の忘れ形見の私の世話をしてくれるのだが、凄まじく過保護なのだ。

一時は家に四六時中いたこともあったほど。なんでも包丁の扱いが不安だ。というか包丁を近くに置いておくのがこわい。だから料理は俺がする、とか言つて。

そんなワールウィンドさんが、私が冒険者になるなんて聞いたたら、まず間違いなく反対する。というか今実際に反対してる。

「汝は止められてばかりだな……」

「いや、边境伯から反対受けたのはイシュのせいだからね？」

心底面倒くさそうにイシュが言いだったが、すべてがすべて私のせいというわけじゃないはず。

「边境伯から聞いたよ。世界樹を調べることで病気が治るかもしれないんだってね。なら俺が今まで以上に頑張るよ。だから君は待つてほしいんだ。それが一番安全で、そして確実だ」

「心配はありますがたいんですけど、私はイシュについていきます」

「その人の知識は確かなんだろう。ならその人の知識と俺の経験で世界樹を調べる。だから君は——」

「アルメリアは我についていくと言っているのだ。汝が口を挟む余地などない」

ほあ？

我無関係也。みたいな顔してたイシユが突然の支援。しかも肩を抱き寄せるというアピールまで。誰これ？ 本当にイシユなの？

っていうかこれパツと見あれだよあれ。私を取りあつて言い争う男性二人の図だよ。片方女の子の姿だけど。

「しかし……！ 俺はこの街の誰よりも実力がある、経験もある。そして世界樹に詳しい自信もある。ひとりで冒険をしていたけど、なんなら君に協力したって全然いい」

「話にならぬ」

「……何がだい」

予想外のヒロインポジションだわ。

肩のぬくもりが照れくさきすっごい。今日一日で激動すぎない？ 昨日までの私に今日のこと話しても絶対信じてくれないよ。ヒロインポジションですって。絶対悲劇のヒロインでしょ、はっ。って鼻で笑われるよ。

あ、話聞いてなかった。やっばい。当事者だよ私。

「汝は我のことを信じておらぬ。ならば我が汝を連れる理由はない」

「……まだ初対面だからね。そんなにすぐに信じるなんてできないぞ」

「それだけではない。汝はいくつか間違っている」

「……何かな」

「我は今この街にいる。にも関わらず、この我より実力がある？ この我より経験がある？ この我より、世界樹に詳しい？ 数十年程度の月日で、千年の我が月日より重みがあると言いたいのか」

「……なんなら試してみるかい？」

「よかろう」

一触即発。

そんな言葉が頭に浮かんだ。だけど全然間違っていない状況だ。

イシユもワールウィンドさんも、ピリついている。

「同じソードマン同士、単純に戦闘技術で競おうか」

「同じ？ 我の剣技が汝と同じなわけがないだろう」

「本当に気が強いことで」

私から離れて二人が剣を抜く。

イシユは二刀流。その両手に剣を構えている。

ワールウィンドさんは右手に剣を、左手は大きな鞆をもち、肩にひっかけている。

「ちよ、ちよつと！ さすがに争うのは！」

「大丈夫だよ。大怪我はさせないように気を付けるから」

「争いとは実力が近いもの同士をさす。この場合は争いに含まれぬ」

ダメだ。血の気が多すぎる。

どちらも自信満々すぎない？ 冒険者ってみんなこういうの？

「それじゃあ、いくよ」

「我が力で汝のその思い込みに終焉を与えよう」

不敵に佇んでいるイシユにワールウィンドさんの剣が一気に近づく。

その剣撃を右手の剣で受け止め、瞬く間に繰り出された二撃目の斬撃を左手の剣でイシユは受け止めた。

はっや……。あれ片手でやってるの？

一本の剣であるの早さって何あれ……

「今のを受け止めるか」

「山行水行」

あ、またあの技名だ。

普通に振りかぶって斬りつけるだけにしか見えないのに、何か特別なことでもあるのだろうか。

「そんな大振り、当たるとは思えないな」

「こざかしい……美しき陽光」

なんでもあも恥ずかしい技名を何度も言えるのだろうか。

古代人の感性だろうか。

「リンクフレイム、ソードマンの技だね。着火性の高い薬品に竜血樹脂を混ぜた簡易オイルを剣に塗り込み、斬ると同時に相手にも塗り込む」

「美しい陽光だ」

「たしかにリンクフレイムとはまた違うかな？　そこまで燃え上がるのは知らないね」

「美しい陽光だ」

イシユのリンクフレイムは激しく燃え上がっている。

古代の薬品だろうか。それともあの体の力なのだろうか。なにしろすごいリンクフレイムだ。リンクフレイムだ。リンクフレイムという名称に変えてほしい。

「炎で刀身を見づらくさせても、そんな大振りにあたらないさ」

「……おのれ！」

……イシユの攻撃が通用してない？

狒々の魔物も一撃で下したイシユの攻撃が、まるで容易く避けられている。

炎の斬撃を躲し、ワールウインドさんがまとも斬撃、それも素早い二連撃。

それらを2本の剣で防ぐ。最初の時と同じ流れ。

……どちらも攻撃を当てることができていない。

「どうだい？　俺の力もなかなかのものだろう？」

「減らず口を……」

「それじゃ次は、経験を見せるとしよう」

そう言って剣を構えるワールウインドさんを見て気づく。

そういえばこの人、さつきから片手は鞆に手をかけたままだ。本気じゃない……？

「……！」

剣を構えてから、特に前動作もなく突然一気に踏み込んだ。

動くのを見ていたのに、動いたという認識がズレるような動作。

その剣撃はイシユの左の剣にぶつかった。

「……！」

「……叩き落すつもりだったんだけど、本当に見た目以上の怪力だな」
防げたんじゃない。わざと剣に当てられたのだ。

大怪我をさせないため、という言葉は嘘ではないのだろうけど、こ

れは……

「我を侮辱するとは、思い上がりも甚だしい……！」

「やっぱり……イシユがブチギレた……」

でも怒ったところでこの力の差は埋まらないかもしれない。イシユは確かに強い。とても強い。

だけどそれはあくまで対魔物時のみだ。ワールウインドさんが言っている通り、大振りなのだ。人に対しては、素早い相手には当たらない。魔物がもつ慢心、魔物の防御力を軽々と貫通するあの人外の怪力が強さの秘訣なのだ。

その一方でワールウインドさんは怪力と言うほどではない、と思う。あくまで人の範疇内だ。だからこそ技術がある。自分よりも力が上の相手に対しての。その差が今の戦いを生み出した。

「どうだい、君とは違うソードマンの技を受けてみた感想は」

「ふん、動作の有無を使い相手に錯覚を与えるだけではないか。奇襲としか言いようがない」

「その奇襲が効果的なんだよ」

「ならば、我もそうしよう」

剣をワールウインドさんに突きだしてイシユは宣言した。

これから奇襲しますって宣言しても意味ないんじゃない……

「なっ!?」

「ほわああお!?」

腕が、飛んだ。

イシユの腕が飛んだ。

文字通り飛んだ。

すさまじい勢いで、一直線に飛んだ。

突然迫る剣を持つ腕。予想外の状況にワールウインドさんは一瞬

硬直し、即座に回避する。

「馬鹿な!？」

「嘘おおおお!？」

今度は足が飛んだ。

いや、足を置いて、飛んだ。

文字通り、足だけ置いて行って、そして飛んだ。イシユが腕の時と同じくらいの凄まじい勢い。

なんか足の断面から火が噴いている。それでより勢いがついているのだろうか。

連続の奇天烈な光景。

啞然としているワールウィンドさんに、そのままイシユは――

「終焉だ!」

「ぐあっ!？」

――頭突きをした。

勢いをそのままにした頭突きは激しく、ワールウィンドさんを数メートルほど吹き飛ばすほどだった。

よかった。怒りのあまり剣で斬りつけるとかじゃなくて。

「確かに奇襲というのも効果的だな」

「わけが……わからん……」

ワールウィンドさんの言葉に全面的に同意しかできない。

飛んでいった腕と、置いていった足がひとりでに動きだし、イシユの元へと戻っていく。

なおさらわけがわからん。

理解できないと言った感じでワールウィンドさんは気絶し、傍らで見ている私も理解が追いつかず、ただ一人、イシユだけが満足げな表情を浮かべていた。

……なんでこの2人争ってたんだっけ。

7. 此度の空は狭く煩く

窓から差し込む朝日が眩しい。

つまり、朝が来た。

今日こそようやく冒険者として認められる朝が来たのだ。

昨日は色々あり過ぎて、むしろ全部夢だったのでは？　と思いきうになる。だけどこの両足に来る異常な疲労感が夢じゃないと証明してくれる。

……足の疲労感って、なんか運動不足と言われてる感じがして嫌だな。

「おはよう、アルメリア」

「ひっ……………」

「かなりそれ、傷つくね……………」

なんだ、ワールウインドさんか。

だけど小さく悲鳴をあげてしまったのは許してほしい。朝起きて最初に出会うのはニヤついている無精ひげの男性なんて、そりや悲鳴をあげちやうよ。

昨夜は伸びてしまったワールウインドさんをそのままにするわけにもいかず、今は使われていない父のベッドまで運んだのだ。イシユに頼んでだけど。

机の上に積まれている本が目に入った。

どれもイシユに渡したものだ。

「あれ？　イシユは？」

「彼なら……………いや、彼女？　まあイシユならリビングにいるよ」

やっぱりワールウインドさんもイシユの性別の扱いに悩むようだ。気持ちはずごいわかる。

声が無駄にカッコいいのだ。中性的とかでなく、低い男性的な声で。

性格は俺様系だし……………しかし見た目はかわいい。なんだこの

ギャップ。ニツチすぎる。

「というかワールウィンドさんと二人きりは避けたい。また冒険者になるの反対って言われる。」

「それじゃリビングへ——」

「アルメリア」

ひえっ。

「な、なんですか。言っときますけど、私は冒険者になりますから」

「そのことは今でも反対だ。だけど、考え直してはくれないだろうか？」

「はい」

イシユが冒険者になるのなら私もなる。

つまりイシユが冒険者じゃなくなるのなら、私もならない。まあ冒険者になつてくれる方が、世界樹について調べるのがスムーズになりそうだし、出来るだけなつてほしいけど。

「それなら、これだけは約束してほしい。絶対に無茶しないって」

「それは、はい」

「君の両親に助けられた恩で、君を心配しているんじゃない。純粹に君のことを心配している人はいるんだ。俺だけじゃない、辺境伯だつてそうだ。だから絶対に、自暴自棄になつたりしないこと」

「わかつてますって」

自暴自棄になれるほど、今は希望を見失っていない。

それよりも……

「あの、リビングに行く前に着替えたいんで、出てってもらえますか？」

「あ、うん。ごめんよ」

いくら世話になつている人とはいえ、いつまでも部屋にいられると落ち着かない。それに着替えたいのは本当だったし。

ワールウィンドさんが部屋を出て行ったのを確認してから寝間着を脱ぐ。

脱ぐ際に蔦や枝が引っかかって時々痛いけど、もう慣れたものだ。

「ちよつと背中になで拡がつてる……」

日に日に範囲が伸びていく植物。

今でこそ表皮の一部だけといえど、いずれ体内までも変化させてくるだろう。

タイムリミットはわからない。

進行の具合が測りづらいのだ。

いつそイシユに見せれば少しは進行を遅くしてもらえるだろうか。

「我は研究者ではあるが医者ではない」

リビングでコーヒを飲んでたイシユはにべもなく言い放った。

「そもそもこの地の世界樹はほかの地と違う性質を持つのだ。その筆頭が、汝の体を蝕んでいるものだ。その進行を調整できるのであればそもそも我はこの地に来ることはない」

「君でも知らないことはあるんじゃないか」

「汝は何が言いたい」

「おお、こわいこわい」

イシユとワールウインドさんは相性が悪そうだ。というか悪い。

「そもそも汝はなぜ未だにこの家にいるのだ。ここは汝の住まう場所ではないだろう」

「それを言ったら君もだろ？」

「我はアルメリアからの許可を得た。そもそも我に許可など必要ないがな」

「俺を家に運び入れるように頼んだのはアルメリアって聞いたぜ。じゃあ俺も許可があるようなものだよ」

「減らず口が……」

なんで朝から喧嘩しそうになってるんだろう、この二人。

雨降って地固まるっていう言葉はこの二人に適用されないのだからか。

「朝から喧嘩なんてやめてくださいよー。ごはん食べたなら統治院に行きましよう」

「うむ、ようやくといったところだな」

「その前にひとつ忠告しておきたいんだけど、いいかい？」

ワールウィンドさんが小さく拳手しながら言った。

忠告？ まだ何かあるのだろうか。無茶するな以外にも。

「イシユのことなんだけどね」

「我がなんだ。愚かしい人の仔よ」

「なんか俺に対してはやけに噛みついてきてないかい？」

「我は相応の対応を払ってるにすぎぬ」

「話が脱線するんで本題に入ってください」

「ああ、ごめんね。ま、こいつの戦い方なんだけど、あの腕を飛ばすのとかはあまり人前でしないように注意しておいたほうがいいよ。俺から言っても聞かないだろうからさ」

腕を飛ばす……

あのびつくり攻撃か。

たしかにあれば人前でやらない方がいい。場合によってはイシユを魔物扱いされてしまう可能性がある。

「それは確かに……誰かに見られたらと思うと面倒かもしれないですね」

「だろ？ もちろん君の体だってそうだよ」

「隠し事だらけだ……」

「そう、隠し事だらけの状態で仲間を探すんだ。なかなか大変だと思うけど」

「必要ない」

イシユが否定した。

「元々我ひとりでことが足りる。この街の者の力など不要だ」

「新米は素直に先輩の言うこと聞いておいたほうがいいぜ？ 5人集ってこそだ」

「その新米に敗れたのは誰だ？ そして汝も1人で旅をしているのだから」

あー、もう。さっそく喧嘩しそうだ。

ここまで相性が悪いものなんだろうか。

「二人とも止まってくださいーい！ ワールウィンドさんの言葉はありますがたいですけど、イシユの方針で行きます」

「……あまり甘やかす必要はないと思うよ」

「いえ、イシユは頑固そうだけど、もし本当に必要なら人を集うと思いますから、大丈夫ですよ」

私の言葉が言い終わると同時に、イシユが残っているコーヒーを一気に飲み干した。

そういえば機械の体って言ってたけども、飲食はできるんだ。食費とかイシユ込みで考えないとだ。

「ま、アルメリアがいうなら大丈夫かな。それじゃ俺はこれで」

「あ、はい」

そう言つてワールウィンドさんは家から出て行った。

残るはイシユと私、そしてテーブルに置かれたチーズトーストが2枚。

「1枚どうぞ」

「我は食事の必要は……いや、よいか」

何やら言いながらイシユはチーズトーストをかじりだした。

マルク統治院に昨日ぶりに訪れる。

やっぱりイシユが前を歩いて行ったが、二度目の迷子はなかった。

「うん、たしかに虹翼の欠片だ」

「それじゃあこれで……?」

「ああ、諸君をタルシスの冒険者として認めよう！」

ここで本来なら喜びのあまりハイタッチでもするのが一般的な気がする。

「それで、汝は我にどのような支援を行うのだ」

うん、知ってた。

イシユはそういうのがどうでもいいって知ってた。

「本当に物怖じしないな、君は。まず順番に話そうか」

少し辺境伯もイシユに慣れてきているのかもしれない。

対応がなんか緊張感抜けちゃってる。

「まず、この時代の、この地の私たちは、世界樹から遠く離れている」「うむ」

「そして最も近い街はこのタルシスのみだ。それはなぜか？」

あ、マルガリータだっけ。

暇だからなのかこっち来た。やだ、すごいかわいい。

「巨大な地割れと深い谷が、世界樹への道を閉ざしているからだ」

「気球艇で越えればよいではないか」

「地割れはそれでいけるだろう。しかし谷は別だ。その谷は深い雲で覆われて、中に入れば方向感覚を失い墜落してしまうそうさ。そのため強行突破は断念している」

辺境伯じゃないけど抱っこしたくなる気持ちもわかる。なんだこの子犬。すごいかわいい。

マルガリータちゃんかわいい。

「マルガリータちゃんはかわいいなあ」

「マルゲリータだがね」

「あ、ごめんなさい」

うっかり口に出していたようだ。そしてすかさず名前の訂正が飛んできた。

「おっとすまないね。脱線してしまった」

「つまり現状は世界樹に近づけない、と」

「ああ、だがひとつ奇妙なものがあったね。その谷のそばに大きな樹海があるのだよ。碧照ノ樹海と呼ばれている」

「ふむ？」

あ、マルゲリータちゃんが辺境伯のもとへ行っちゃった。

やっぱり飼い主がいいのね。女の子よりおっさん飼い主がいいのね。

「そして、その樹海の入りに奇妙な紋章が描かれた石碑がある。

それと同じものが谷の入り口にもあるのだ」

「紋章？ 石碑？」

「これは実際に見に行ってもらったほうがいいかもしれないな。私はその石碑がなんらかのカギとなるのではと思っている。そのためにも碧照ノ樹海の解明が必要だ」

「ふむ……」

あ、マルゲリータちゃん辺境伯のところに行こうとして、途中で方向転換した。

あ、こつちくる。来る！

え。あ、ダメそつち。

イシユはこわいよあぶないよ。こつちおいで。

「紋章と同じ、石碑。古のセキュリティが生きているのかもしれない」
「君なら解き明かせるかもしれないな。そして、本題としては私から行う支援はいくつかある」

「その支援とはなんだ？ む？ なんだ、犬よ」

「マルゲリータだがね」

「犬は犬だろう」

「マルゲリータだ」

「……なんだ、マルゲリータ」

なんだろう。ちよつと和んだ。

マルゲリータちゃんはイシユの膝の上に乗ってご満悦だ。イシユはなんだか困惑しているように見える。ていうか動物にも声をかけるタイプだったのね。

「ふふふ。マルゲリータは好奇心旺盛だからな。それで支援だが」

「……うむ、支援とはなんだ」

そのままマルゲリータちゃんを膝にのせて話を続行。

正直膝にのせてるのがうらやましい。

「まずひとつは気球艇だ。この街から碧照ノ樹海までの距離もかなりある。徒歩では厳しい。それに、谷を突破する手段ができればますます徒歩での旅は困難となる」

「一介の冒険者に気球艇をか」

「ああ、もちろん碧照ノ樹海以外の冒険に使ってくなくても構わない。これがまずひとつ」

マルゲリータちゃんが私のもとから離れて手持無沙汰になってしまった。

ただひたすら眺めるだけしかできない。

「そしてもうひとつは情報の共有だ」

「それでは我がただ情報を提供するだけになろう」

「古代の知識についてであればそうなってしまうだろう。だが、共有するのは今の知識、そして今の樹海のことだ。何か手がかりが入れば報告の義務付けられている。そして、その情報を冒険者たちに共有しているのだよ」

「ほう、それでは今集まっている情報はなんだ」

「樹海には地下があり、地下にいけばいくほど魔物が強力になっているらしい」

「……ふむ」

「そしてこのところ、熊の魔物がやけに多いそうだ」

「それだけか？」

「報告は些細なことから重大なことまで集めている。だが、今のところはこれだけだ。今後増えていくとは思うのだが……」

「まあいいだろう。それで、我の気球艇はどこでもらえる」

あ、絶対今立ち上がろうとした。

手の動きが迷ったのが見えた。膝にいるマルゲリータちゃんですつことを断念したのか。

「うん、昨日の街門にすでに手配済みだよ。最後の動力として虹翼の欠片が必要だったのだが、それを諸君に取ってきてもらったからね」

「あれが気球艇の動力になるんですか……すっごい軽かったけど」

「あの鉱石がなければまだタルシスは地を駆けまわっての冒険だったろう。そういうえば、君たちのギルド名は決まっただろうか」

「あ」

完全に忘れてた。

そうだった。そうだった。

ギルド名私が決めるんだった。

「ま、まだ決まってるません……」

「そうか……。まあ決まったら教えてくれたまえ」

「はい……」

このままグダグダ決まらなそうな気がしてしまう……。いいや、私
！ 決めるのだ！ いつか……

とりあえず話は区切りがついたことだし、気球艇をもらいにいこ
う。

あれ？

「イシユ？」

「なんだ」

「あ……」

膝の上でマルゲリータちゃんが寝ちゃっている。

なんか違和感あるなって思ったならそれか。イシユが立ち上がる
より先に私が立ち上がるなんて。

「なんていうか意外。てつきり無理やりどかすとばかり思ってたし」

「我とて普段はそうする。だがこの犬は今、無防備にも我に体を預け
ているからな」

「マルゲリータだ」

「汝はなかなかしつこいな……」

辺境伯の訂正は執念深いものを感じる。

「マルゲリータ、こちらに来なさい」

「む」

お菓子の袋をガサガサと音を立てると、マルゲリータちゃんは飛び
上がりあっさりとイシユの膝からどいた。

「あっさり乗り換えられちゃったね」

「どうでもよい。行くぞ」

そして辺境伯とマルゲリータちゃんに見送られ、部屋から退出し
た。

街門に行くとオレンジ色の気球艇が一隻あった。そしてその前には赤毛の男の人がいた。

「あんたらか？ 辺境伯が言ってた新人冒険者って」

「はい」

「二人だけってのはまた珍しいな。まあいいけどよ。それじゃこいつの運転方法を教えるからついてきな」

「は、はい！」

そうだ。地図だけじゃなく運転までできるようにならないとだ。

「マニユアルは一応あるけど実際に見ながら学んだ方がいいだろう？ それとあんたらはこの気球艇になんて名前つけるんだ？」

「え、名前、ですか？」

「ああ、名前の登録してくれねえとこの子を渡すわけにはいかねえよ。この子って……この人あれだ。

職人氣質っぽい。

「えっと、今決めないと、デス……よねー!？」

めっちゃ睨まれた。

これは後回しにしたらダメなのか。そうか。そうだよ。我が子みたいな扱いなんだねこの気球艇は。

「えっと、えと」

「ノア、と名付けよ」

「おおっと!？」

「渋い声してんなあ……とにかく、ノアだな。じゃあ登録しておくぜ。かわいがってくれよ？」

イシユが名前をつけた。

てつきり何も言わないと思ったから変に叫んじやったよ。

それから数時間ほど、気球艇の操作について教えを受けた。

「よし！俺があんたに教えることはもうあまりねえけど、何かあったら交易場に来な！カーゴ交易場な！」

交易長さんがイシユに楽しそうに告げる。

あんたに教えることはもうない。そう、単数だ。複数形ではない。「んで、そっちの嬢ちゃんだけど……あんたは運転しないようにな？ノアが壊れちまう」

「ハイ……」

全然わからなかったんだ。隣で一緒に話を聞いていたのに、これも古代人と現代人の差なんだろうか。

「それじゃあな！絶対嬢ちゃんは運転すんなよー!!」

「は、ハイ……地図でも描いてます……」

そんなに大声で言わなくても……二回も言わなくても……

「うう……イシユう……どうやって運転覚えたのお……」

「異臭みたいに言うな。我は汝と違いあらゆる才が溢れているだけだ」

「自信満々すぎるう……」

「汝が運転できぬことなどどうでもよい。それよりも早く行くぞ。さっさと乗るのだ」

「あ、はい……」

言われて気球艇に乗り込む。

本来5人組の冒険者用に作られたこの気球艇は2人では広々としている。

運転は完全にイシユ任せになるとして、私は私でやれることをやればいいのだ。

そうだ、地図を描こう。この草原の地図を描くんだ。

気球艇ノアは街門から浮上していく。

この草原は風がかなり強いのだが、それをものともせずどんどんと

北上していく。

風馳ノ草原。

そう呼ばれている草原だ。世界樹からの風が吹く草原とも言われているが、実際は谷で阻まれていて世界樹からの風ではないと思う。

「うわあ」

牛の群れだ。全部野牛らしい。

交易長が言っていた。外で食材を手に入れて生活費を稼ぐこともできると。

あの野牛を捕まえればいったいいくらになるだろうか……

「あ」

ダメだ。

近くにカンガルーがいる。カンガルーの魔物。

これも交易長が言っていた。この草原はカンガルーの魔物が跋扈し、その攻撃は重鎧に身を包んでいようと破壊される一撃を持つと。

それこそ狒々の魔物など赤子のごとくだとか。

「イシュ、あの野牛は断念ですね」

「元より牛などどうでもいいだろう」

行先の調整をしているイシュに声をかけたが、本気でどうでもいいと思っっているような声で返された。

まあそうだけでも。

「まさか空飛ぶ船を再び操作することになるとはな」

「前もしたことあったのですか？」

「我はかつて天の支配者とも呼ばれていたのだ。今飛んでいる空よりもはるか上空を飛んでいた」

「え、それって雲より高く？」

「そうだ」

想像がつかない。

だけどそれも本当のことなんだろう。

「あの時は大勢を収容できた。それほどまでに巨大な船、いや、城だったのだ」

「お城!?!」

「うむ。その城の主だった我は、主として当然、その城の軌道进行操作していた。操作室もこの気球艇よりはるかに広いものだった」

「そんな大きいんだ!？」

「近い。狭くなる。邪魔だ」

「あ、ごめんなさい」

つい身を乗り出しすぎてしまった。

「ひとり操作室にいたあの頃と、ずいぶん違う環境になってしまった……」

「やっぱり時代が変わると色々変わりますもんね」

「……それより、地図を描くのではなかったのか？」

「あ」

途中から急いで描き始める。

地図すら描けなくては、この気球艇の完全なお荷物となってしまう。それだけは避けるため頑張った。

8. 光届かぬはずの地で

風馳ノ草原、ぶらり空の旅。

そんなわけのわからないことを考えるほど、あれである。暇である。

決して地図描きをサボっているわけではない。

ただ、景色がそれほど変化しないのだ。

「別の意味でバテそう……」

先に精神的に参りそうだ。

これからしばらく街と碧照ノ樹海を行き来すると考えると考えるとなおさらだ。

今までずっと家に引きこもっていたから、それくらい平気だと思っていたけども。考えれば家にいたころは本がいっぱいあったのだ。読み終わってもワールウィンドさんか辺境伯が、来るたびに新しい本を持ってきてくれていた。

ではここで本を読めばいいのでは、と一瞬思ったけどそれはだめだ。地図を描かないと。あ、でも一度描いた土地なら別にいい、かな？

「見えてきたな」

悩んでいるとイシユが声をあげた。

その言葉が示したのは大きく、そして局所的な森だった。

「あ、あれが碧照ノ樹海？　なんかあそこだけ不自然なほどに緑生い茂ってますね……」

「確かにそうだ。樹海にしては局所的すぎだ。しかし今回は通り過ぎる」

「え」

てつきり降りると思っていたのに、まさかのスルー。

そのままどんどんと気球艇ノアは北上していく。

その方角は……世界樹。

街から見えていた時と違う、空から見てもその大きさはさして変わらないように見える。つまりそれだけ巨大で、そして遠いのだろう。

だけど、絶対にたどり着いて見せる。

どんどんと北上していく。そして、どんどんと世界樹が見えなくなっていく。

視界を遮る山だ。

世界樹との間に高い山があり、それにどんどんと近づいて行ったせいである。

かっこよく心の中で決意を固めたのに、こうやって姿が見えなくなるなんてなんだかなあ。

「ふむ、聞いていた通りだな」

ほあ？

「谷の雲が進行を阻む。それより高度を上げようにも、どうもこの気球艇では無理なようだ」

「あ、言ってたところですね」

「一度この辺りで降りる。準備せよ」

「はい」

山がずっと隔てるように西から東へ伸びてる中、一ヶ所だけ綺麗に道のように開けられた場所。まさに谷だ。

その谷の入り口に気球艇をつけ、数時間ぶりの大地に降り立った。

「近くで見ても、少し先すら全然先が見えない……」

てつきり霧だと思っていたが、これは確かに雲だ。濃霧なんかじゃない。

こんな近くで雲を見るなんて初めてだ。なんだかチグハグな感じがする。もっと高い場所で飛ぶものだろう雲は。明らかに低すぎる。

「……やはりなんらかの力が働いているようだ。それが偶然の産物なのか、意図的なものなのかはまだわからぬが、おそらく後者であろう」

「やっぱり古代の人の……?」

「わからぬ。近くにあった石碑といい、この雲といい、不自然すぎる。我と同じ時代の者の仕業だとは思えぬ。かといって今の時代のものではないのだろうか?」

「雲を操るなんて聞いたことないですよ。石碑もよくわからなかったんです?」

「なんらかの科学……私の時代の技術が使われていると思っていたが、そうではなかった。どちらかといえば今の時代の技術に近いものを感じた」

古代人によるものではない?

いきなり世界樹への壁が立ちふさがった気分だ。

もちろん簡単な道のりではないとわかっていたけど、時間制限のある体では不安になりそうで……

「谷についてわからぬのであれば、碧照ノ樹海を調べるまでだ。あの樹海も明らかに不自然だ。そして我はこういった不自然に、必ず絡むものを知っている……世界樹以外にありえんとな」

「こんなに離れているのに……?」

「この辺りに魔物がうろついているのが何よりの証拠だ。樹海へ行くぞ。私の研究は確実に前進しているのだ」

なんだこの自信の塊は。

不安になるのが馬鹿らしいくらいの自信だ。そしてそれを信じてしまう私の単純さもなんなのだろう。

「イシユって、実は演説家とか?」

「む? 演説をしたのは一度だけだな。講演なら何度かあるが」
「なんだか納得です」

講演とかするのであれば自信満々じゃないと聞いてくれないってこともありそうだしね。

つまり、私が単純なのではない。イシユがそういった喋りが得意なだけだ。

そんな納得をしていると、良いから乗れ、と顎で示され慌てて気球艇に乗り込んだ。

次の目的地は南下してすぐそこ、碧照ノ樹海。

碧照ノ樹海。

その名の通り、草木生い茂る緑と、阻まれることなく地まで届く太陽の光が照らす森。

その森に気球艇を着陸させる。

その近くには他にも様々な気球艇が並んでいた。

この気球艇の数だけ、冒険者グループが樹海に潜っているんだ。

その中にはワールウィンドさんの気球艇もあった。

そして何より気になるのは……

「谷にあった石碑と同じ紋章か」

明らかに人為的に作られたであろう石碑。それがポツンと置いてあった。

「しかし、どうやらこの石碑は本当にただの石のようだ」

「ただの石？　谷の石碑は違つたんです？」

「うむ。谷の石碑は……どこか汝の印術とやらに近い何かがあった」

「印術とですか？　それならすぐに解明されそうだけど……」

「近い、と言つたであろう。なんであれ、我の時代にはなかつたものだ」

ううむ、とりあえず目の前の石碑はただの石。それさえわかればいいか。

……つてただの石なわけないでしょうに。絶対何か意味あるはず。印術と関係があるかもなら、ここで私が頑張らないと。この紋章とか……睨んでみても全然わからない。

「行くぞ。近くに地下への入り口があるはずだ」

「あ、はい」

樹海の地下。

そして地下をどんどん潜れば潜るほど、強い魔物が多くなる。いったいどんなところだろうか。地下ということは日の光なんて届かない。つまり暗闇での戦いになる。

できる限り戦いは避けるように物音を立てないのがベストかな。

地下への入り口には兵士さんが立っていた。

そっか。タルシスの兵士さんも来ているのか。

そしていよいよ樹海の地下への階段を下る。

降りている最中、私はどうしようもなく気分が悪くなった。

明らかに異常だ。だって、階段なのだ。自然の産物ではない。階段があるってどういうことだ。

つまり、過去に人為的な手が施されたのだ。

その何者かが世界樹への道を閉ざしている可能性がある。

どれほどの悪意をもってそんなことをするのか。私の体を蝕むアレから離れるための道を、どうして邪魔するのか。そう思うとムカムカで気分が悪くなった。

そんな思いを抱きながら、階段を降りきれば――

「はいっ？」

風が草木を揺らし音を立て、流れる穏やかな川の音は澄んだ空気を匂わせて、地に降り注ぐ太陽の光は優しくすべてを照らしていた。

時折どこからか小鳥のような鳴き声も聞こえる。

まるでそれはただの森のような、自然の風景だった。

今、私は確かに階段を降りた。

なのに、まるで外のような、地上のような景色が広がっているのか理解できない。

「い、イシユ、私はいま、幻覚を見てるとか……?」
「む? なんのことだ?」

「え、いや、だって。地下に降りたんだよね? なのに地上の景色が見えるんだよ……?」

イシユは何も感じていないようだ。この景色の異常さを。

古代は地下にも地上の景色が普通だったの? そんな時代こわい。

「……そういうことか。確かに信じられぬ光景に感じるだろう」

「う、うん」

「私も少しばかり、世界樹に慣れ切ってしまったようだ。確かに、明らかにこれは異常だ」

「だ、だよね!」

「おかげで確信できた。この樹海も世界樹だと」

え。

世界樹がここ? じゃあ空から見えてたあの世界樹は?

え、それがここ? いつの間にか山を越えて? あの地下の階段で

? え?

「ちよ、ちよつとイシユ! どういうこと!」

「どうもこうもない。ここは世界樹の一部なのだ」

「いや、だって! 世界樹は遠い地にあったし!」

「地表に出ている世界樹は遠いだけだ。偽りの大地の下は世界樹が根を張っている。この樹海はいわば地下に張り巡らされた根の一部が、地表近くまで盛り上がったものだろう。もしくは……いや、まだこれは根拠が薄い」

「偽りって……!」

「ここでそんな問答など無意味だ。いいから行くぞ」

地下なのに地下ではない、ということだろうか。世界樹というのはどこまでも人の常識を壊してくる。その洗礼をさっそく浴びた。

いつまでも混乱してられない。

ここではそういうものなのだ。切り替えていかないと。とにかく地図を描きながら、イシユのあとを追いかけた。

草木の揺れる音の中に、いくつもの獣の唸りが聞こえる。聞こえているのは本当に獣の唸りか、それとも魔物の唸りか。

「地下に潜れば潜るほど魔物が強いってことは、まだまだ地下に潜るってことですよね……そこも外と同じなのかな……」

「だろうな。私の知る世界樹もそうであった。樹の中でも昼夜はあった。む……行き止まり、か」

「倒木……流木かな？ 向こう側にまだ道はありそうけど……」

何本もの木が倒れ、狭い道を塞いでいる。

少し崩せば全て雪崩れ込んできそうな積み上がり方。

「他に道がなければここに戻るとしよう」

「はい。『積み上がった木、通れず』っと」

「通れないのではない、通らなかつただけだ」

「あ、はい……」

なんだ、そのこだわりは。

地図に書いたメモの内容は直さずにその場を離れる。イシユは気にしなかつたみたいだけど、妙に甘ったるい香りが鼻についた。

歩き回ること三時間ほど。

「……は……」

「さつき来たところですね」

見える景色の変化がわかりづらい。

地図がなければ同じところをぐるぐる回ってしまいそうだ。

イシユに描いた地図を見せる。方角も確認しながら描いているためまず間違いはない。ちよつとした自信作の地図だ。

「ふむ……その川を越えるか、あの流木を越えるか、どちらかといったところか」

「でも他の冒険者はもつと奥に行ってるんですよね……どこか抜け道があるとか……？」

「ここまで通った道は魔物と遭遇してもいいように、やや広く、そして歩きやすい道を選んできた。

あとはイシユが言った川越えか、流木か、それとも道なき道の茂みに潜るか。

「あなたたち、ひよつとして新しい冒険者？」

考え込んでいると、背後から私とイシユ以外の、第三者の声が届いた。

振り返ればそこにいたのは褐色肌の女性。

細身の剣を装備しているため剣士、だと思うけど……鎧は身につけず、身軽さを追求したかのような装い。

とりあえず、どう見ても兵士ではない。つまり同じ冒険者だ。

女性は微笑みながら言葉を続ける。

「街で見かけた記憶はないし、新人だよな？ 私はウイラフって言うんだ。こう見えてもあなたたちと同じ冒険者だよ」

「それで、汝はなんの用で我に声をかけた」

「えっ？ あ、えーつと、その前に自己紹介しない？」

イシユの声を聞いたためか一瞬間を食らったのがわかった。ギヤップすごいもんね……あといきなり高圧的だもんね……

「汝に名乗る必要性が見いだせぬ」

「と、取りつく島もないね……」

「あ、私はアルメリアです」

イシユの紹介もするべきかなと思っただけど、勝手にしたら機嫌が悪くなるかもだしやめておこう。

そんなわけで私だけでも名乗ることにした。

「アルメリアね。ありがとう。そっちの人は……まあそのうちかな」

「あはは……」

このウイラフという女性はなんだか一気に距離を詰めてくるタイプな気がする。イシユの対応にもへこたれない図太さが、それをさらに強めているような。

「ところであなたたち、次のフロアへの道は見つかった？」

「流木の先のことか」

「そう。その先へ行く道のこと」

「流木の近くの茂みから少しばかり回り込めばよいだけであろう」

あ、そうか。無理に流木をなんとかしなくてもいいのか。まともな道以外は壁か何かのように地図に描いてしまっていた。

「残念だけどそれは無理」

なんだかあつさり先に行けるなあと思ったところを否定された。

「何故だ」

「ただ木々や茂みが深いだけじゃないんだ、これ。本当に文字通り、密集してるの」

「密集？ えと、人が通る隙間がないってことですか？」

「そうなの。大人はもちろん、子どもも通ることなんてできないくらいだよ。それもあって、さらにはこの背の高い木々が壁のようになってるんだ。向こう側が、というより少し茂みの奥すら全然見えないでしょ」

言われて念入りに見てみたが、見える範囲は確かに狭い。試しにと茂みをどかせば木の幹が本当に壁のように密集して、そこに存在していた。

「それで、汝は抜け道を知っているとでも言うのか？」

「ええ、まあね」

「え！ そうなんですか！」

やっぱり抜け道はあったんだ。冒険者たちが使っている抜け道が。ウイラフさんはそれを教えるために声をかけてくれたってことかな。すごい親切だ。

「知りたいでしょ？」

「はい！」

「……」

「教えてもいいけど、教える代わりにちよつとだけ手伝ってほしいことがあるんだ」

「え……交換条件、ですか」

親切心での申し出ではなかった。

抜け道を教える代わりに手伝い。

私ひとりだったら、そしてなにも知らなかったら二つ返事をしてしまおうだが、そうはいかない。

「ふざけたことを言うな。情報の共有が決まりではないのか」

そう、辺境伯が言っていた。情報の共有だ。

樹海を調べるのに抜け道は共有してた方がいいに決まっている。

「樹海に関しての重要な発見ならそうね。だけど抜け道程度なら含まれないよ」

しかしすぐさま反論が飛んできた。

その言葉を受けて、イシユもまた言葉を返す。

「流木によって、抜け道しかまともに機能していない現状だ。多くの冒険者に影響を及ぼすであろう。抜け道程度、というレベルの話ではないのだ」

「その流木はここ最近のものじゃないよ。もともと抜け道が正規の道なの。そして抜け道を共有してないことに関しては辺境伯も把握してる。流木がある種の未熟な冒険者へのストッパーとなっているからね」

「ならばなおさら汝の教えなど不要だな。つまり、自力で見つけることが求められているということだ」

私には口を挟むことができなかった。互いにだんだん相手を威圧していく話し方だったので、あまり入りたくないと思ってしまうのも仕方ないよ。うん。

「自力で抜け道を見つかるなんて、ほとんど運頼みみたいなものだよ」

「……汝は何故我らに抜け道を教える。流木はストッパーとしての役目というのであれば、教えられる理由はなくなる」

「流木に悩んでいる間に色々鍛えられるものだよ。それである程度の力がついた時、たまたま通りかかった先輩冒険者が、新人の力を問題なしって判断したら教えていくんだよ」

つまり、実力的にはもう奥に行っても問題ないとウイラフさんは判断したということ？

「あの、私たちここに入ってまだ数時間なんですけど」

「今の話が本当ならば、他の冒険者が通るのを待てばよいということだな」

「他の冒険者が通りかかるのはいつになるかわからないよ？ それなら私の手伝いをちよつとやって教えてもらった方が早くて確実だよ」

「……」
もう手伝ってさつさと教えてもらうのが一番だと思えてきた。チラリとイシユの顔を覗き見る。

み、眉間に皺が……怒ってるっぽい……！

「……我を利用するなど……しかし時間が惜しい……」

「それで、どう？ 手伝ってくれる？ 他の冒険者が通るのを待つ？」

「………手伝ってほしいという内容を言え。その内容次第だ」

「そうこなくっちゃ！」

イシユが折れた。

妥協したとも言える。

ウイラフさんは事情を話し始めた。

「クラントロって知ってる？ すごい臭い植物だね。それを取ってきてほしいって言われてさ」

「たしか香草ですよ。独特な香りから気付け薬としても使われる植物の」

「へえ、そうなんだ。私は依頼で受けただけだからそこまで知らなかったけど、まあその植物の群生地までは絞ってあるんだ」

群生地までわかってるのなら、手伝うことなんてないのでは。

「ただ、そこに行くまでがちよつと問題なんだ……」

道中での問題。

ウイラフさんは見たところソロの冒険者。ひよつとして、厄介な魔

物とか……？

いやいや、それなら新米を頼ったりなんてしない。しない、はず……

「熊の魔物がその辺りを縄張りにしちやってるみたい」

「協力を求める相手間違ってるじゃない？」

熊の魔物で。

今のところ感覚としては、自然の動物と似た魔物は、その動物の強さにたいしていい比例している。

バッタやネズミの魔物と比べたら狒々の魔物の方が圧倒的に強い。

狒々と熊のどちらが強いかはよくわからないけど、かなり危険な相手だということは確定だ。

そんな魔物が関わる協力を新人に求めるのは明らかにおかしい。イシユの戦いぶりを見て声をかけたのならわかるけど、イシユの声を聞いたときに戸惑ってたしそういうわけではなさそう。

「一緒に倒してほしいってわけじゃないよ。クラントロの群生地までの道が一本道でさ。私が囷になってる間にクラントロを取ってきてほしいんだ。もちろん、あなたたちが囷になるでもいいけど」

どこか楽しげに言う。たぶん私たちが囷に、というのは冗談で言ってるのだ。

普通の新人なら囷になる選択肢なんて選ばない。

「別に、その熊を倒してしまっても構わぬだろう」

囷になるどころか、討伐を名乗り出たのはもちろんイシユだった。

「え、本気？ やめときなよ。この樹海の最上位なんだよ、熊の魔物は」

ウイラフさんの反応に比べて、廃鉱での一件を見た私は、やっぱりなあという感想しか出てこなかった。

「それは良いことを聞いた。ならばなおさらのこと、その魔物と戦闘テストをしなくてはならぬ」

「そうやって何人も死んできたんだよ!? どれほど頑丈な鎧も容易く

引き裂く奴らだよ！」

「神となりし我が創りしこの体だ。汝らの鎧とはわけが違う」

ウイラフさんの慌ててる様子を見ると、悪い人ではないんだなあ。

本気でこちらの身を案じてくれてるとわかる。

イシユを止めるのが難しいと判断したのか、私に今度は詰め寄った。

「アルメリアからもなんとか言ってみよ！ 明らかに無謀だって！ 私が囨になるからさー！」

「まあ、イシユは倒せるって言ってますし、大丈夫ですよ」

「だーかーらー！ ……あー、もう！」

変なのに声かけちゃったなあとぼやくウイラフさん。

変なので。いや、変だけど。

「熊の魔物を見てから変更してくれていいからね……本当に」

「ありがとうございます。それより抜け道を……」

「はやく抜け道まで案内せよ」

「あなたたち本当にわかってる!?!」

取り乱すウイラフさんの反応が少し面白い。

とにかくやることが決まったし、そして先に進める。

碧照ノ樹海、地下一階。

まだまだ地図はできていないけど、完成もすぐにできそうな気がしてきた。

9. 乾いた森に始まる序章

「ここだよ。ここだけ茂みの奥の木がトンネル状になってるんだ」
ウイラフさんに抜け道を教えてもらえたが……

「こんなの全然わからないですよ……」

「だよね。虱潰しに探してたらどれだけ時間がかかるかわからないくらい」

そう言いながら茂みを掻き分けて、木が作り出したトンネルを見せてくれた。

トンネルつてこれ……

「小さすぎませんか？」

「よっぽど太ってなければ通れるって。あなたたちの体型なら大丈夫だよ」

「……この我が地を這うことになるとはな」

抜けた先に魔物がいないか見てくると言って、ウイラフさんはトンネル（というか抜け穴）に入ってしまった。

少ししたら私たちも這って行かなくてはならない。

「……こんな道しかないなんて嫌ですね」

少し、といっても具体的な時間などは決めていない。とりあえず戦う音や大声が聞こえたら穴には入るな。そう言われているだけ。

かといつてすぐに入ってしまったら、万が一向こう側に危険な魔物がいて、ウイラフさんが戻ろうとしたときつかえてしまう。

だから少しだけ待っているのだけど、沈黙もあれだし、トイシユに世間話のような他愛のない話をしてみた。

しかし、返ってきた言葉は同意などでなく

「……汝は我のことを知らぬ。にも関わらず、何故我の言葉を信じることができる」

？

突然なんだろう、いまいちよくわからない。

何故信じれるか？ そんなの、別に嘘を言ってるわけじゃないのだし、信じるのが普通では。

初対面の人とは違うのだ。まだ知り合って二日目だけど、イシユほどわかりやすい人はそういないと思う。

とにかく何故信じれるか、と聞かれたからには理由を答えなくては。でもどんな答えを求めてるんだろう。まあ、考えてもわからない。なら正直に言うしかない。

「えーつと……………イシユが嘘をついてないから、ですかね？」

「何を根拠に……………いや、いい。忘れるがよい」「？」

もうよいだろう、とイシユは抜け穴に入ってしまった。

なんだったのかわからない。とにかくイシユに続いて穴に入った。

「クラントロの群生地は北にあるよ。ねえ……………やっぱり私が囿になるうか？」

「我は囿になるつもりはない。調べたいだけだ。汝は汝の目的を達すればよい」

イシユとウイラフさんが前を並んで歩いていく。

その後ろを私はついていく。

……………地図を描きながら。

おかげで手元を見たり、道を確認したり、二人から離れないよう注意したり、後ろから魔物が来てないか確認したり……………

軽いパニックに陥りそう。確認が多すぎる。

イシユがいつものように先頭を歩こうとし、ウイラフさんが道案内と説得のために負けじと前を歩こうとするから、二人はどんどんペースをあげていく。

ダメだ。

このままじゃ置いていかれちゃう。

「そもそもあなたたちがやられたら、その次は私に被害がくるんだよ？ だから危険なことせずに——」

「我が魔物程度に敗北することなどありえぬ。それも、世界樹の影響をただ受けただけの魔物だ。なおさらありえぬというもの」

「どこからその自信が……」

「い、イシュー……」

「む？ どうした、アルメリア」

振り返り立ち止まってくれた。ウイラフさんも同じように立ち止まった。

「ごめんなさい……少しだけ、進むペースを落としてほしくて……」

「あつ、ごめんね！ 地図を描きながらだものね」

「ふむ……汝、ウイラフといったな。アルメリアの後ろにつけ」

少しペースを落としてくれるだけでいいのに、隊列の変更をしてくれるなんて。

イシュがそんな優しさを見せてくるとは思わなかった。せいぜい良くて『ならば地図を描かなければいい』とかかと。

イシュのことは信じられる人だと考えているけど、優しさとかとは無縁な人と思っただけに、本当に予想外。

「いいけど、道は大丈夫？」

「一本道なのだろう？ ならば問題はない。それに、熊の魔物の囷など不要だという証拠を見せてくれよう」

「ハア……ヤバそうに感じたら一目散に逃げるんだよ」

……優しさとかじゃなかった！

単にウイラフさんに強さを見せるためか。あと前を歩くためか。なんかちよつと勘違いしたのが恥ずかしい。

狙いはどうあれ、隊列を変更したおかげか、かなり落ち着いて地図を描かなければ進むことができたので、結果的には良かった。

「もうすぐ縄張りに入るよ」

見た目はなにも変わらない、森の景色。

だけど、近くにある背の高い木に縄張りを示すような引つ掻き痕。引つ掻き痕の位置を見て、その熊の魔物の大きさを推測してみる。

……そもそも引つ掻き痕の位置が4メートルくらいはあるような……

立ち上がってつけたとしても、かなり大きくない……？

「みんなは森の破壊者って呼んでる魔物だよ。この樹海で一番強く、そして数も多いの」

森の破壊者……

ネーミングがちよつとかつこいい……

熊の魔物あらため森の破壊者は辺境伯も言っていた、増えている魔物なのだろう。

そして、この樹海の生態系のトップ。

ウイラフさんの声と、私たちの歩く音、あとは草木の揺れる自然の音くらいしか聞こえない。

「森の破壊者って名前の由来はね」

ウイラフさんが僅かに声を低くして説明を続ける。

何か、何処からか、破碎音が聞こえた。

音は小さく、遠い。

ガサリとそばの茂みが大きく揺れる。

「……！ あ、なんだ。リス？」

茂みからリスが飛び出ただけだった。必要以上に身構えてしまった。

「え、え……？ どんどん出てくるんだけど……！」

リスに続いて兎や鳥、狐に狸。果てには熊までも飛び出してはどこかへ逃げていく。どれも魔物ではない。普通の獣だ。

再び起きる破碎音のあと、何かが倒れる音が聞こえた。大きな何かだ。

「本来あるべき森の生態を破壊していく姿から、破壊者って名付けら

れたんだ……」

「……」

先頭を歩いていたイシュが立ち止まり、剣を抜いた。

「もうわかってるでしょ？ 見つかった。今からでも遅くない。倒すなんてやめてあなたたちは——」

「くどい」

ウイラフさんも剣を抜き、茂みの奥を睨む。木が壁のように密集している、道の外。

地図を仕舞い、ワンドを強く握る。

一瞬、風すらも止んだのか、無音の時間が訪れた。

「——来た！」

まるで紙か何かのように木々が裂かれ、倒れていく。

それを引き裂いた黒い毛並みの魔物は目を爛々と輝かせ、一直線に私たちのもとへと走ってくる。

あれが、森の破壊者。

「汝らは下がって見ているがいい」

ネズミやバッタの魔物はもちろん、狒々の魔物すらもただの獣と思えてしまう重圧。

それを前にしてもイシュは堂々としていた。

森の破壊者はその太い前肢を振り上げながら、イシュに肉薄する。

「——バカ！ なんで避けないのさ!!」

ウイラフさんの慌てるような声。

狒々の魔物の時と同じように、イシュはその一撃をそのまま受けたのだ。

「~~~~!! アルメリア！ 退くよ！」

……まあ、端から見たらあんなの死んだとしか思えないよね。

「——ふむ。ほんのわずかだが、ダメージを受けるようだな」

「はあ!!」

「信じられないでしょうけど……イシュは大丈夫なんです。説明は難

しいですけど」

イシユの戦い方は冒険者というより魔物よりに見えてしまう。持ち前の怪力とか、すごく硬い体とか、油断なのか慢心なのか、回避しないところとか。

仕留めることができていないとわかったからか、森の破壊者はまたも腕を振りかぶる。そして今度は叩きつけるというよりは、引き裂くように爪を用いてきた。

「だからなんで!？」

「さ、さあ……」

避ける気が一切ないイシユの姿に、ウィラフさんは理解できないようだ。

昨日の私の反応を見ているようでほっこりする。

「ほう。爪による攻撃なら人工皮膚を傷つけることはできるか」

まるで森の破壊者を評価するようにイシユは言った。

その顔には引っ掛かれた裂傷がある。

「イシユ!? 怪我がす——え? あれー?」

余裕たつぷりだけど、結構な怪我だった。

すごい怪我、だったのだ。

魔法染みているとしか言いようがない。瞬く間にその怪我が治つたのだ。今はもう傷あとなんて一切ない。

「REPAIRも正常に働くな」

「……あなたの仲間、どうなってるの? 傷が消えたんだけど……」

「私も傷がなくなるのは驚きです……」

完治したイシユは高く翔び上がる。ただ翔んだわけではない。

「如く舞う」

翔び上がりながら、森の破壊者を斬り刻んでいく。体を庇うようにつきだされた前肢を足場にし、そこからまた翔んで斬る。何度も何度も空中で踊るように斬り刻んでいく。

ズシン、と大きな音を立てて森の破壊者は倒れた。

……力業とは全然違う連撃。

破壊者の硬く鋭い爪すらも斬り落としてるようだし、その一撃一撃

はどれも重いものみたいだ。

「……む」

遅れて着地するイシュ。

着地の際に少しバランスを崩したのか、ややよろめいた。

「イシュ！ やっぱり怪我が!?!」

「怪我などない。この体の出力で、如く舞うを再現するのはやはり難しいようだ。威力も範囲も、以前の体に遠く及ばぬ」

あー……

やっぱり技名だったんだ、あれ……………

「森の破壊者がこんなにあっさり……ちよつと自信なくしちゃいそう……」

ウィラフさんが森の破壊者の死体を見ながら呆然としている。

「汝が自信をなくす必要などない。我が優れているだけだ。クラント口を取りに行くのであれば、もう障害はあるまい」

「うん、そうだね。こんなあっさりだなんて、目の前で起きたことなのになかなか信じられないよ」

あ、そうだ。森の破壊者の素材を持ち帰らないと。

やっぱり攻撃に用いていた腕だろうか。でも……重そう……いや、弱気になっちゃダメだ。きつとこの先、もつと重たい素材とかもあるだろうし。

素材解体用に準備していたナイフを突き立ててみたが、刃が入らない。硬いのだ。この熊。

「ところで、アルメリアは何してるの?」

「何って、解体しようど……」

「狩猟民族か何かかな?」

いや、素材として大事でしように。

「持って帰れる量に限度があるよ。魔物の素材としてなら、こいつの場合は爪と牙だね。お肉としてなら……ちよつと私は詳しくないや」「腕じゃないんですか……」

「腕だけでもかなりの重量だよ。30キロはいくんじゃないかな」
うん、爪と牙にしよう。

というか……

「クラント口は取りに行かないんですか？」

「あ、うん。行くよ。行くけど……あれ臭いし、今はちよつとのんびり
したいし……」

そんなに嫌がるほど臭いんだ……

本では独特な香りとしか書いてなかったし、少し気になってしま
う。

「そうだ、二人はどここの宿をとってる？ 今回の納品依頼は二人のお

かげでもあるし、いくらかお礼させてよ」

「お礼って、抜け道の件で済んだんじゃ」

「いいじゃんいいじゃん。細かいことなんて」

「それに私たちは宿をとってないですよ。自宅からですし」

「へえ、純タルシス冒険者なんだ」

純ってなんだ。

いや、まあ言いたいことはわかるけども。

「私はセフリムの宿を使ってるんだ。今度ご馳走するからおいでよ。
女将さんの料理はすごいんだから！ ……ほんと、いろいろと」

どこか死んだ目をしだした。

宿の料理ってことは不味いというわけじゃないと思うけども、何か
あるんだろうか。

「汝、礼をするというのなら、次の階層への道を教えよ」

「……あなたたちなら大丈夫か。本来は奥への道はあまり教えちゃダ
メなんだけどさ」

イシユの言葉に少し悩んだ様子を見せたが、了承してくれた。

地図を貸して。と言われたので自信作を渡し、次の階層への道を教
えてもらう。

なかなかわかりやすい地図だと自負しちゃうくらいの自慢の子(地
図)だ。褒められないかな。

「地図に地下二階へ降りる階段の場所は描いておいたから。私はクラ

ントロを必要数とつたら一度街に戻るよ。もし良かったら、セフリムの宿に一度顔でもだして」

返してもらった地図を見ればチェックがついている。そしてそこへ行くまでの道のりも。

……あとでこっそり描き直そう。線のぶれが気になりすぎる。

「それじゃ、またねっ」

「あ、はい！　ありがとうございます！　また！」

ウイラフさんはさっそく、いや、ようやくと言うべきか、クラント口を取りに向かった。

気付け薬になるというし、お金になりそうではあるが、今はいや。

離れていくウイラフさんの背中を見送って、イシュに地図を見せながら相談する。

「まだ結構距離がありそうですね。ウイラフさんの地図の尺度と私の地図が同じならですけど」

「だがそう違うまい。少しの異なりなど気にすることはない」

「……訂正しながら進んでいいですか？」

「気にすることはないと……」

「訂正したいです」

「……あまり時間はかけすぎないのならばいいだろう」

「はい！」

道のりはわかってるのだ。尺と線の引き、道と川の区切りに色を変えるだけだし時間はかからないのだ。

小さな泉のそばを通り、もうすぐ地下への階段があるというところだった。

前の方から聞こえてくる、鎧の金具がぶつかり合う音と走っているような足音。

誰かが移動している。それもかなり急いでいる。

その人物は、今朝別れた人。

ワールウインドさんだった。

その顔は汗だらけで、肩には鎧を着込んだ兵士が担がれている。なんでそんなに焦っているのかを尋ねる前に、漂ってくる香りで見守られた。

鉄のにおい……

いや、濃厚な血のにおいだ。

「つと……いー 君たちか……悪いけど今はゆっくり話している暇はないんだ。下のフロアにヤバイ魔物が現れたらしい。兵士がやられて見ての通り重症だ」

担がれている兵士さんの顔には包帯が巻かれている。その包帯もどんと赤い染みが広がっているあたり、かなり瀬戸際だ。

治療薬を持つてはいるけど、この様子では慰めにもならなさそう。急いでしかるべきところで治療してもらおうのが一番だ。

「樹海の中は当然死と隣り合わせ。死人が出たとしても、何も慌てるようなことではないだろう。その兵士とて死を覚悟して樹海に入っただけだ。そうでないのならばただの愚か者だ。どちらにせよ、捨て置いてよいものだ」

「い、イシユ!?!」

そんな突き放すような言い方しなくても。

「……っ！ ……俺は急いでこの兵士を連れていく。アルメリア、この先に行くのなら注意した方がいい。少しでも危険だと思つたらすぐに逃げるんだ。いいね?」

イシユのあんまりな物言いに何かを言おうとして、それを堪えてワールウィンドさんは兵士を優先した。

「またも、ワールウィンドさんとイシユとの間に溝ができてしまった。」

イシユの価値観と、タルシスの人たちの価値観が大きく異なっているのかもしれない。

もともとそんな様子は何度か目にしたことはある。

イシユは助けられることができる命であっても、見捨てることを選ぶのに躊躇しない。

思えば最初の邂逅時もそうだった。私の体を治すメリットがなけ

ればあのまま見捨てられていた。

イシユは嘘をつかない。なんとなくそう感じていたけど、その理由がわかった。

イシユは強いのだ。誰かの手助けがなくてもひとりでもできるほどに。

誰かから気に入られようとなんてしない。合わせようともしない。だから嘘をつく必要がない。相手にも、自分にも。

イシユは人の環から外れてしまっているのだろう。

いや、唯一の例外があつた。

イシユがたまに言う、救うべき人たち、だ。

その人たちというときだけは、イシユはきつと人になれる。

その人たちがいる限り、イシユは孤独ではないのだ。

まあ、だからといって今の問題が解決するわけではないけど。

救うべき人たち以外にも、優しさを向けてくれたらなあ……

血のにおいがこもった階段を降りながら、私は溜め息をついたのだった。

10. 死を呼ぶ突風

碧照ノ樹海、地下二階に到着した。

見た目は地下一階と変わりはない。気持ち悪いことだけど、やっぱり地下とは思えない景色を見せてくれる。

ワールウインドさんのあの慌てようから、もっと荒れた状態を想像してただけど。

「雰囲気も、地下一階とそんなに変わらない……？」

耳をすましても、これといって聞こえてくる音も変わりなく——
？

いや、聞こえた。何かが聞こえた。硬質的なものがぶつかるような音。

「イシユ、今……」

「西からか」

明らかに戦う音。

丁度別れ道に差し掛かっていたところ。道は二つ。いや、三つ。

今聞こえた音の元、西に向かう道か、音とは無関係の北の道か、はたまた引き返すか。

「どのような魔物なのか、我が見定めてやろう」

交戦中の音に向かって歩みを進めるイシユ。

そこには当然、人助けという気持ちはない……と思う。あるのは戦鬪テスト、だろう。

「メノウさん！ その倒れたやつを避難させてくれ！」

「……無理、今、すぐく見られてるもの。隙を見せたら引き裂かれるわ……」

「誰かメノウの援護を！」

「ダメだ！ 目の前のやつを相手にするので精いっぱいだ！」
そこはまさに混戦状態だった。

兵士の一団と何組かの冒険者グループ、そして4頭の森の破壊者。戦況はあまり良くは見えない。何人かが負傷して戦闘不能状態に陥っている。

「森の破壊者、か。どれほどの魔物と思えば……ただ数に押されているだけか……」

期待外れ、と言った風にイシユは呟いた。

しかしそばにいる私としては気が気でない。森の破壊者が複数いるというのも当然怖いが、今のイシユの言葉が他の人たちの神経を逆なでしかねないのだ。ワールウィンドさんは兵士さんの命優先で無視して行つたが、毎回そういうことになるかわからない。無用な争いなんておつかない。

幸い今のイシユのつぶやきは誰の耳にも入らなかったのか、睨まれるということはなかった。その余裕がないだけかもしれないけど。

そんな折に、ひとりの冒険者が魔物の狂爪にやられた。

バックラー、小さな盾によって致命傷は避けたようだがどう見ても重傷だ。もう戦えない。だけど森の破壊者は息の根を止めるために、追撃の手を緩めようとしていない。

誰も破壊者の動きを止めにかかれない。そこにいる人たちはみんな自分を守るのに精いっぱい状況だ。

……大丈夫、間に合う。

印術を起動させ、杖の先に火の球を作りだす。

……こんなじゃ倒せない。でも、目くらましくらいにはなる……はず……！

「たやあぁー！」

掛け声と共に火球の印術を放った。

狙い通りに魔物の顔へと飛んでいく。

私のコントロールはなかなかのものじゃないかな。

一瞬とはいえ、足止めにはなった。これで他の人たちもあの倒れた人を助けれる。

「ひ……」

赤く昏い眼がこちらに向けられた。

狙われた、気がする……

いやでも大丈夫だ。他の冒険者たちが近くにいるんだし、いきなり私のほうに向かってくるはずがないし……仮に来ても、どうやら兵士さんと冒険者たちは一定のラインで足止めしているのか、陣形を組んで回り込まれないようにしているのだ。

今さっきひとり倒れてしまったが、この陣形を崩されたままにしているはずがない。

そう考えていたのに……

「まずい、内側に入られた!」

入られた!　じゃないよ。

前線で止めてくれると思っただのに一気に走ってくる。

「イイイイイシユイシユシユ!!」

「普通の人の身ではこの程度の魔物も脅威となり得るか。やはりあの時の冒険者たちが異常だったのか……」

助けてくれるかイマイチわからない!

地下一階の時は離れて見てたけど、近くで見ると本当に大きいのね……

せめてイシユの印象を和らげつつ、義侠心からの人助けなんてするんじゃないかったかもしれない。自分の身も守れないならやっぱりおとなしくしておけば――

森の破壊者はその巨体をひねり、体のバネを使いながら腕を振るつた。

「くっ……………ひ……………」

迫る死に思わず目をつぶれば、硬質な音が近くで鳴り響く。
おそるおそる目を開ければ……

「イシユ、ありが……じゃない!? 誰!？」

線の薄い輪郭に、儂げな印象を受ける金髪。緑のコートを着ながら、その下には重鎧で身を包んでいる人が、森の破壊者の爪撃を盾で受け止めていた。

やだ、美人さん。

「僕はキルヨネン。肩書も名乗りたいところだけど、今はそれどころじゃない。印術師だね? あっちの彼女、メノウの元へ行ってくれな
いだろうか」

「……は、はい!」

示された位置には虚ろな目をしたローブの女性がいる。あの人がメノウさんだろうか。彼女の元へ行つて何が変わるかわからないけど、行つてみよう。

あ、キルヨネンさんにお礼を言えてない。いや、今はそれどころではないんだ。

というかイシユは何をしてるんだろう。

「君も、もしよければ力を貸してくれないか。前線はかなり危険だから無理には言わないが……」

「我にとつてこの程度、危険とは程遠いものだ」

そう言つてはいるが、力を貸す気がまだ出ないのか、剣は収めたままだ。

その様子が見えたのか、メノウさんがぼそりと呟いた。

「キミの仲間……変わってる……」

「え、あ……そうですね。あの、私は何をしたらいいですか」

「印術を使う元気は……まだある?」

「は、はい！」

何か作戦があるのだろうか。この状況を打破する作戦が。

イシュが戦ってくれたらあっさりなんだけど……

「力を貸してくれないならすぐに避難するんだ！　そして救援を呼んできてくれ！」

「私の被検体がそこにいるのだ。手放すわけにもいかぬ。それに、汝ら冒険者は局面になれば思いもよらぬ力を発揮することもあるようだ。汝ら自身がその力を出せるかはわからぬが、我はそれを観察しよう」

「何を言ってるんだ君は……！」

ダメだ。観戦モードになってしまっている。

っていうか揉めてる。キルヨネンさんと揉めてる。キルヨネンさんって性別どっちだろう。イシュとはまた違った性別不詳だ。中性的すぎてわからない。あ、ダメだ。イシュがまた問題行動しそうだって思ったらついつい現実逃避してしまう。

「私たち以外の後衛は、みんな倒れてるの……このクマたちの奇襲で」
メノウさんが話し出した。

「だけど、畏はしかけてあるわ……」

「その畏で、一網打尽……？」

「畏というか……ただのアイテムだけど、それさえ使えばなんとかなの」

それなら……！　あれ？　でも、なんでそれをすぐに使わないんだろう。

「そのアイテムが……あそこ」

「え？」

「あそこ」

メノウさんが指をさした先には森の破壊者たちが3頭いる。3頭相手に5人の兵士と冒険者の混合部隊だ。

勝利のアイテムとは、兵士と冒険者の職を超えた友情なのだろうか。

いや、そんなわけない。いや、友情が芽生えないわけがないとか

じゃなく、ああああ、ダメだ混乱しちゃう。

「えと……友情?」

「キミも変わってるのね……あの人と類友?」

「ええ!」

あの人ってイシユのことだろう。イシユは変人と言われても、古代人だからズレてるという言い訳もできるけども私は現代人。言い訳ができない位置だ。なんとか変人認定は避けたい。

「今ちよつと混乱しちゃっただけで私は変人とかじゃなくて、そもそも私ずつと引きこもってたし!」

「あの熊たちの少し後ろに、瓶があるの。中身は盲目の香」

「聞いてほしいな……って盲目の香?」

盲目の香、名前からして——

「目つぶし……?」

「……催涙性の霧を散布するアイテム」

「あ、はい」

そんな目で見られても、仕方ないじゃないか。ワールウィンドさんから色々話を聞いてはいるけど、冒険に使う道具を全部聞いたわけじゃないんだから。

「ただ、開けられてないの。開ける前に持ってた冒険者が熊にやられてあそこに落としちゃった」

「そんな……」

拾いに行くにはあの3頭をすり抜けていかないといけない。

今でこそ止めることはできているが、それもぎりぎり、防戦状態だ。前衛の防衛ラインを超えればあつという間に樹海の栄養素になってしまう。

「だから私とキミの印術で、盲目の香の入った瓶を壊す」

そう言つて杖を握り、見せてくる。その目は熱く燃えて……いい。虚ろなままだ。

「氷槍の印術は、使える?」

「……火球しか」

「わかった。じゃあ私が瓶を壊すから、キミは火球であの熊たちの視

線を上に持って行って」

「へ」

火球で瓶を破壊じゃダメなの？

「火球で瓶を壊したら、爆発で中の香がちゃんと散布されずに空気中に散ってしまうわ。だから氷槍……そして熊に壊すところは見られたくない。氷槍が飛んでいった先から奇妙な霧が出てくるのを見られたら、警戒されてちゃんと作用しないかも」

「で、でも視線を上にとって」

「何か投げて、それに空中で火球を当てて爆発させたら視線は釘づけ。完璧」

「難易度すごい高くない!？」

そんなガンマンみたいなことを求められても。

でも、それ以外方法はないのかもしれない。瓶を壊しても効果が及ばなかったら意味はないのだ。

「はい、これ」

「これは……」

「マンドレイクの根。いい感じに投げやすい形を選んだ。それに、よく燃えるはず」

「……がんばります」

ここでゴネたってどうしようもない。他に方法はないのだ。

イシュは恐らく言葉通り見てるだけだろう。被検体として私を助けはするだろうが、他の人を助けはしない。もしも他の人を助けたいのであれば、私がやるしかないのだ。

「投げる前にみんなに知らせて。私は大声だすの、面倒臭いから」

「理由がひどい……」

杖の先に、火の球を宿す。

大丈夫だ。いけるはず。バツヤやネズミ、熊の顔にも火の球を当てられたのだ。外したことなどこれまで一度だってない。

……よしー!

「森の破壊者の目を引き付けます！ いきます!! ……たやああ!!」

高く投げるように、思いつき根をぶん投げた。そしてすかさず火

の球を放つ。

「全然飛んでない……」

耳に痛い言葉だ。

そんなに飛ばせない自覚があったからすぐに火の球を放ったわけだけど。

「当たった……!」

当てれた……狙い通り、上空で火球による爆発が起きる。

これでは、メノウさんの氷槍が瓶を破壊すれば……っというか準備してるの見てないけど大丈夫だったろうか。

「みんな、霧が目に入らないように、注意」

メノウさん、もうちょつと声を出してほしい。聞こえにくいわけじゃないけども、それは隣にいるからであって、戦ってる人たちには聞こえてるかどうか。

というかその言葉が出るということは……

「盲目の香か！ うまくいったな！」

「全員、目に入らないように注意しろ！ 効果が出るまでここで押しきれ負けるなよ！」

「目に入らないように、ですわね！ わたくし、どうしたらいいかわからないですが、目薬ならたしか鞆に！」

「何言ってるんだこいつ」

「すみません、そいつバカなんですよ」

前線で戦ってる人たちが思い思いの言葉を出す。

その前にいる魔物の背後には、うっすらと色濃い空気が漂いだした。あれが香だろう。

「キルヨネンさん！ こっちはなんとかかなりそうだ！」

「了解した！ ただ、この魔物は香の届くところまで、連れていけそうにない」

「わかった！ ここの3匹の目がダメになったらそっちに向かう！」

「ふむ。撤退か」

もう観察は満足したのか、今になってイシユが動き出した。

剣を抜いたのだ。

「何をやる気だ、君は」

「撤退はもはや成功するだろう。もう結果が見えてるのであれば、観察など時間の無駄だ」

あー、これは心証が悪くなる……いや、いいけどさ。どう思われようとは私はイシユについていくつもりだけどさ。

しかし、さっきの私の頑張りはなんだったんだ、って言いたくなるタイミングである。

イシユはまず一番近くの森の破壊者、キルヨネンさんが抑えていた熊をあつさりど斬り捨てた。

「……！」

「あとはその三頭か」

そこから一分もかからずに、森の破壊者の群れは死体へと変わり果てた。

「……協力に感謝する」

キルヨネンさんは何か言葉を飲み込んで、イシユに感謝を告げた。あんなにあつさり倒せるならもっと早く動いてくれても、って責められてもおかしくないのだけど。

なのにお礼を言えるのは、よっぽど育ちがいいのか。あ、そうだ。

「えと、キルヨネンさん」

「なんだろうか」

「今更ですが、助けてもらってお礼を言えてなかったもので、ありがとうございますごぞいました」

「礼には及ばないさ。僕は聖印騎士として当然のことをしたまでだ」
優雅である。

なんだかすごい優雅である。

「ところで君たちの名前を聞かせてもらえないだろうか。僕はタルシ

スの冒険者のことをおおよそ覚えているんだが、君たちのことは知らないからね」

「私はアルメリアです。それで、こちらの人は……教えて大丈夫？」

「教える理由などないが、教えぬ理由もない」

「えと、イシユです」

「アルメリアとイシユだね。では改めて、僕の名はキルヨネン。ビヨルンスタットに仕えし聖印騎士の末席を飾る者だ」

なんじやこの優雅な人は。

「僕は負傷者を護衛しながら街に戻るが、君たちはどうするんだい」

「えつと……イシユ」

「我はこのまま樹海へ潜る」

ぶつちやけそろそろ疲れているけど、言いだせない。

まあ今までずっと運動してなかったのだ。その分を取り返すためだと思えばきつといける。

「そうか。では気を付けて——」

突然、木々の奥からそいつは現れた。

それは熊の魔物だった。しかし、その毛並みは鮮血よりも紅く染まっている。

他の兵士や冒険者を無視して、そいつは突風のように近づき、イシユに剛爪を振るった。

「——！」

「イ、イシユ……腕が……」

右腕が、もがれた。

狒々の魔物の攻撃も、森の破壊者の攻撃も、平然と受けていたイ

シユに傷をつけたなんてものじゃない。腕をもぐほどの威力。

「赤い熊……こいつが兵士たちを壊滅に追いやった魔物か……！」

どよめく周囲を気にしていないのか、赤い魔物はイシユにもう一度、破壊の一撃を喰らわせようとし――

「私の体を傷つけることが出来るとはな。大した破壊力だ」

イシユの剣が燃え上がる。

赤い魔物は動きを止め、逃げるように茂みの中へと走っていった。

「ふむ。我との力量差を見抜くか。魔物の割には知能が高そうだ」

「イシユ！ 右腕が！」

「問題ない」

なんでそんなに平然としていられるの。

右腕が取れるなんて、三回目じゃないか！ ………………ん？

あ。

取れても大丈夫なのか。そういえば普通に取り外してましたね。慌てて損した。

「すぐに治療班の元へ行こう！ メノウ、氷を作れるだろうか！」

「ん……」

しかし他の人は慌てっぱなしだ。

まあそりゃそうか。

……どう説明しよう。

11. 汝の呪いは何処より来たる

説明する間もなく医療班のいるところまで連行されたイシユと私。大丈夫だと言っても信じてもらえず、さらにはあの赤毛の熊について報告する必要もあるため、一度タルシスに戻るべきだと言われ、連行されてる次第です。

イシユは不満そうだけど、私としては丁度良かったりする。

ほんつとうにクタクタなのだ。もしもいきなり走れと言われたら、膝が勝手に折れ曲がるレベルだ。

「あの、私たちの気球艇は置いていって大丈夫なんですか？」

手の空いてそうな兵士さんに気になっていたことを聞いた。現在タルシスへ向かっているこの気球艇はノアではない。兵士さんの気球艇なのだ。

「君たちの気球艇なら他の兵士がタルシスまで移動させてくれるよ。それより今は君の仲間の心配をしてやったほうがいい……腕を落とされるなんて……」

「そ、そうですよね……」

さつき見たときはもうひつつきかけてたけど……

「他の人たちもボロボロですね……」

「ああ、森の破壊者の群れにやられたやつは怪我はまだいい。だが、あの赤熊にやられたやつは……」

「……」

森の破壊者の群れと戦う前に、兵士の一団は赤い熊と交戦をしていたらしい。その際に半壊、そしていつの間にか赤い熊はいなくなっていたそうなの。

「おそらくあの赤熊は、森の破壊者のリーダーだ。姿を見せたということは、樹海の調査が進んでいる証拠でもあるが……被害を見れば喜べないだろうな」

「樹海の調査打ち切り、とかになる可能性も……っ？」

「辺境伯の判断次第だな……」

森の破壊者のリーダー。

調査の打ち切りにならなければ、きつと問題ないはずだ。不意打ちでイシユが怪我をしたとはいえ、だいぶ余裕そうだったし。

他の冒険者や兵士の怪我人のうめき声が聞こえる中、そんな風に考えてしまう私はひよっとしたら、イシユの考え方に影響を受けているかもしれない。

夕焼けに染まるタルシスが見えてきた。

辺境伯はどう考えるのか、とりあえず調査打ち切りではありませんように。

タルシスの街に戻って気づいたのは、今までと雰囲気は全く異なる兵士の一団。

ピリピリしているというか、ギラついているというか……どこか怖い。

「アルメリア、無事みたいだね。それから、そのもの」

「ワールウインドさん」

そのものってイシユのことでしょうか。早速喧嘩はやめてくださいお願いします。

「あの兵団は、兵士を襲った魔物の討伐に燃えているんだ。しばらくは碧照ノ樹海の立ち入りは制限されるよ」

「えっ！」

「辺境伯は今回の騒動を重く受け止めてるってことだよ。あの樹海の脅威が去るまでは、調査は中断」

去るまでは、ということはあるの兵団の頑張り次第だろうか。

でもそんなの待ってられない。イシユもそれまで黙っていたが、口を開いた。

「脅威を排除すればよいのだな」

「ああ。脅威の排除、つまりは熊どもの頭を潰すこと。マルク統治院

でそのミッションが今発令されている。ミッションを受けた者は樹海へ行くことを許可される」

「何をするにおいても、統治院へ足を運べということか」

「今回はいつもの自由行動じゃない。脅威の排除、冒険者同士の連携も求められる。冒険者ギルドにも行くようにきつと言われるぜ」

それじゃ、また後で。とワールウィンドさんは街中を歩いていった。

「冒険者同士の連携って、他のギルドの人たちと一緒に行動ってことですかね」

「我が知るよしもない。だが、樹海で大人数での行動など襲ってくれと言っているようなものだ」

そういうものなんだ。

兵団は結構な人数で行動するみたいだけど、イシユから見れば愚かな、みたいなことを考えちゃうのだろうか。

「じゃああの兵団の人数は危険ってことですか？」

「少人数に求めるのは調査であり戦闘ではない。自衛できるだけの能力があればそれでいいだろう。一方で大人数では戦闘、そして示威だが、大人数であれば当然魔物も気づく。そして幾度となく襲うだろう。となれば、継戦能力も必要とされる」

「えつと……つまり、すごい危険？」

「……大人数であればあるほど、連携は必須だ。だが付け焼刃の連携では焼け石に水そのもの。日ごろから団体で行動している兵士なら問題はないだろう。だが、冒険者はそうではないはずだ」

「じゃあ危険じゃないってことですね！」

「魔物に対抗できる能力を持っていれば、の話だがな」

それは暗に、赤熊相手には無意味と言った気がした。

というかそう言ったのだろうか。

「統治院へ行くぞ。辺境伯も我の知識と力を待っていることだろう」

「……あ、はい」

通りすがりの人の目が「何言ってるんだこいつ」みたいな目だった。私もなんだその自信って思っちゃうけども。

マルク統治院はいつもより心なしか、出入りの数が多く感じる。いつも、というほど知らないけども。少なくとも今朝や昨日に比べたらすれ違う人が多い。

それは冒険者姿の人だったり、普通の市民だったり、兵士だったり。表情は様々で、安堵している人もいれば、不安そうな顔をしている人もいる。義憤に燃えている顔、悲しみに暮れる顔、泣いている人もいた。

「ずいぶんと暗い雰囲気だな」

「え……」

「どうした」

イシユがそういった雰囲気を観察するなんて、という驚きを正直に伝えていいものか。

「あ、えと。イシユはそういうの気にしないとってたんで」

「汝は我を全知全能と知っているようだが、我とてわからぬこともある」

「そこまでは思っていないです」

でも自分のことは全知全能だと思つてそうだな、つて思つてました。

「しかし調査が進んだ証拠だというのに、何故ここは雰囲気沈んでいるのだ」

「それは……きつと遺族の人たちなんじゃないですかね。赤熊の被害にあった……」

世界樹への謎に一步近づいたからって、彼らは素直に喜べるわけがないと思う。

「だが——」

「死を覚悟している、なんて言っても、だからって死んでも平気な人なんていませんよ」

「……」

現代と古代。

死生観が違うかもしれない。価値観が違うかもしれない。イシユにとつては不思議でも、ここではこれが正常なのだ。

「遺品くらいは、届くといいんですけど……」

「遺品、か……それが届いたところで、いなくなった者は戻ってはこない」

「そうですね……残された人は、いなくなった人とのつながりを少しでも多く持ちたいものですし……」

イシユは携えた二振りの剣に目を向けだした。

遺品という言葉が出てから見たということは、イシユの時代の人たちの遺品なのだろうか。イシユがこれは自分の遺品になるかも、だなんて考えはしてないと思うし。

「……兵士や冒険者の遺品となれば、たいていは武具になるだろう。武具であっても、遺族の元に戻すべきだと汝は思うか？ 武具であるなら、別の戦える者の手に、とは思わぬか？」

「うーん……私の両親も冒険者だったそうなんですよ。剣士だったそうですね」

だけど家には剣士の武具はない。

消息不明となってしまったのだ。なので遺品はない。死体も見つからない。

「剣なんて使えないけど、それでもやっぱり、その人がいたという証拠として持っていたいですね」

「そうか……」

イシユは今の質疑応答で、少しは現代の価値観を知ってくれただろうか。

それから辺境伯の部屋の前につくまで、イシユは無言のままだった。

「辺境伯よ。この我が報告に来た」

「おおう……し、失礼します」

辺境伯の部屋に入って早々ぶちかますイシユだ。さつきまでの無言はなんだったのか。

「諸君か。すでに話は聞いている。碧照ノ樹海に新種の熊の魔物の出現。そして森の破壊者が群れをなして行動していたこと。あとは……イシユが腕をもがれたと聞いたのだが……やはり大丈夫なようだね」

どこか呆れるような目線が何とも言えない。

「だがすべての者が君のように規格外な生命力を持つわけではない。そこで私は樹海の脅威排除をミッションとして発令した。兵士はもちろん、冒険者もミッションの受領は可能だ。非常に危険な任務だが……」

「我には問題ない」

「君ならそう言うだろうと思ったよ。アルメリア君、君もミッションを受領するかね？」

「え、あ、はい！」

「うん。では冒険者ギルドにも足を運んでくれたまえ。赤い熊の魔物を我々は血の裂断者と呼ぶことにした。血の裂断者は他の魔物より狡猾で知恵も回るようだ。ただ闇雲に動いては警戒されるだけに終わりかねない。そのため今回は異例の作戦行動だ。ギルド長の指示に従って動いてくれたまえ」

「付け焼刃の連携など無駄に終わるとは考えぬのか」

物怖じしないのは、うん。いいことだよ。うん。

居心地がすごく悪くなることを除けばいいことだよ。うん。

辺境伯はもうイシユがどういう人物なのか知ってるからいいけどね、でもやっぱり辛いんですよ。

「無論、その考えがないわけではない。連携といっても単純な内容し

かできないということとはギルド長にも言っている。だが、今まで通り各自自由に動けばそれぞれ確固撃破されかねない相手だ。よって最低限の連携は必要だ」

「ふむ」

「……ところで話は変わるが、谷と樹海の入口にある石碑について、何かわかったかね？」

謎の紋章があるあの石碑。

現状わかっていることは、樹海の入口の石碑はただの石で、谷の入口が特殊……らしい……？

というか、ほとんどわかってないも同然だ。

「あの石碑が濃雲に関わっているのは間違いないだろう。石碑については私の時代のものではない……我は印術というものを知らぬ。あの石碑は我には理解できぬ科学、汝らで言うところの術に近いものがある」

「つまり……君の時代にはなかった技術が使われている。そしてそれは、君の時代より後の時代の技術、ということかね？」

「うむ。私の時代と今の時代。その間に意図的に生み出された壁だ」

「その意図について、何か予測は立てられないかね？」

ほとんどわかってないと思っていたのは私だけだったという事実に驚愕しか出てこない。

なにさなにさ。結構色々わかってるんじゃない。

「明確な根拠はないが、おそらくは世界樹計画の副作用を恐れた、だろうな」

世界樹計画の副作用……それは、

「私の体のと、同じ……」

「本来は古の時代で終わる厄災。だが、調整によって即効性を落とし代わりに、代を引き継ぐ呪いと化したのかもしれない。そしてその原因が来ないように、壁をした」

世界樹へ行くのを遮る壁ではなく、世界樹から来るものを遮る壁。
呪いが来ないように……

「……イシュ。世界樹の呪いは、今なお残っているのかね？」

「アルメリアの体に残っている以上、そうであろうな」

「……でも、なんで」

なんで私の体に呪いがあるんだ。

世界樹との関わりなんて一切ない。世界樹が見える街で生まれ育ったとはいえ、それは大勢がそうだ。

「汝の体に何故呪いがあるか。未だ推測の域を出ないが、ふたつ考えられる理由がある」

「……聞かせてください」

「碧照ノ樹海は世界樹だ。世界樹の一部、と言ったところだ。そこから冒険者か誰かが、呪いを持ち帰り、汝に感染した」

辺境伯も私も何も言わない。

今はただ聞くだけだ。

「もう一つは、遺伝だ。呪いを恐れて壁ができたのであれば、壁を作ったのはこの街の先祖のものだ。その者たちの遺伝子に呪いが刻まれており、アルメリアの代になって表現した。もっとも、この説は弱いかな」

可能性として高いのは前者だ、とイシュは言う。

誰かが碧照ノ樹海から呪いを持ち帰った。

でもそれだと……

「呪いを持ち帰ったということは、その人物も体が蝕まれているので

はないかね」

そうだ。私と同じように体が植物に変容していつているはず。けどそんな話は聞かない。隠せるものとは思えない。

「代を経ているからか、調整のおかげか、呪いの感染力自体は弱い。発症まで行かなければ本来持ちえる免疫力で対抗可能なレベルだ」
「つまり、呪いを持ち帰った人物は発症はしていない、ということか……」

辺境伯が頭を抱えだした。

今の話がかもしも事実だとしたら、樹海へ赴いた兵士や冒険者はみんな呪いを持ち帰る可能性がある。樹海帰りに免疫力が低い人物と接触すれば、私と同じ……？ あれ？

「私ってそんなに体弱いのかな……」

樹海への調査はもう何年も行われている。なのに私以外発症者はいない。

つまりここ何年も、私より免疫力が低い人がいなかったことになってしまう。

「汝の親は冒険者だったそうだな。汝の親が呪いを持ち帰ったという可能性もある」

「そっか……それなら私も幼いし、免疫力は低いかも……」

「どうかそうじゃん。子供のころから名医を探してもらったりしてるじゃん、私。」

今の免疫力は関係ないよ。

でも、親が持ち帰った、かあ……

「……兵士の家族には今のところ、奇病に患ったという話は出ていない。今後出てくる可能性もある、ということになるな……」

辺境伯の言葉に、危険性を再認識する。

世界樹の調査となると呪いを持ち帰る可能性は高い。樹海も世界樹の一部なら、なおのことだ。

「……断言はできぬ。気休めにしかならぬが、今のところは問題ないだろう。我が見た限り、人を変質させるような物質は漂っていないかった。奥深くまで行けばまた違うかもしれないがな」

「……君は呪いが見えるのかね？」

「千年前、我は祖国が世界樹に呑まれるのを見た。そして世界樹があらゆる生物を植物へ変えていく様を見た。我は……いや、我と同じ時代の者たちは皆が世界樹を受け入れたわけではなかった。幾度となく研究をした。人に作用しない世界樹を模索した……。世界樹が大地を創つてからも、我はあらゆる研究を重ねた……。ゆえに人を変えゆく成分は見慣れたものだ。そしてこの体は機械。汝らとは作りが違う。無論、この目もだ」

イシユにとっては思いだしたくないことだったのかもしれない。

祖国が呑み込まれる。きっと文字通りの状況だったのだろう。そのことを語るイシユの顔は険しく、そしてどこか怯えているようだ――

「嫌なことを思いださせてしまってすまない」

「……？ 汝は何を言っている。我は事実を述べたまでだ」

辺境伯も深入りしすぎたと思ひ謝罪をしたけど、イシユは何を言われているのか理解できていなかった。

時折、イシユは自分の感情もわかっていないように見えてしまう。機械の体となった弊害かもしれない。機械の体と聞かされたけど

も、私にはやっぱりただの女の子にしか見えない体だ。声は全然違うけど。丈夫さも。力も。

「君がそう言うのなら、そういうことにしておこう」

「汝がどう思おうと構わぬ。我には関係のないことだ」

「それにしても……世界樹には人々を永劫の楽園へといざなう何か眠っていると言語継がれていたが、呪いとはな……」

世界樹の調査の目的は語り継がれていた内容の真偽を確かめるところと。

そのため各地から冒険者を集めたのが辺境伯だ。

だけどあるのは呪いなら、世界樹への調査はやめた方がいいのかもしれない。

そう考えているのかも……やめられるのはすごい困る。私としては、だけど。

「どういうことだ」

「? 何か、とは呪いのことじゃないのかね?」

「そこではない。語り継がれていたという内容について、我は聞いておらぬ」

「ああ、伝承だよ。内容は先に言った通りだ。楽園へといざなう何か眠っている。それ以外については何もわかっていない」

「問題はそこではない。汝らの先祖が壁を作ったのであれば……壁を作ってまで恐れた呪いを楽園にいざなう何かとは言わぬ」

イシユのひっかかり。楽園と表現するのは黄泉の国を詩的に表現したとか……?

「楽園を天国とか、死後の世界っていう意味で使ったとかじゃない……?」

「可能性としてはある。だが、遠ざけたものを楽園にいざなうなど、希

望を持たせるような物言いでは表現するものか」

「ふむ。つまり、呪い以外に何かがあると考えているのかね、君は」
「楽園にいざなう何かはわからぬ。わからぬが、世界樹の制御についてかもしれない。制御ができれば世界樹はまさに楽園を創ることができる存在だ。そしてその制御は、我が求めているものだ」

「……ふむ。中途半端については危険が降りかかるだけ、か」

辺境伯が思案気に呟く。

さつきまでは調査を打ち切りを考えていたのかもしれない。けど今はそうではなさそうだ。

イシユはそのことを考えて伝承にひっかかったわけではないだろうけど、これはラツキーである。

「なんであれ、まずは碧照ノ樹海の脅威排除が最優先だ。脅威がある限り調査もままならない……頼めるかね？」

辺境伯がまっすぐイシユを見ながら言った。

なんだろう。辺境伯もイシユのことをかなり信用しだしたように思える。

「我を誰だと思っている。あの程度、脅威になりえぬ」

イシユの返事はこれである。

それはオツケーなのかノーなのか。よくわからない返事なのです
が……

「冒険者ギルドとやらに行くぞ、アルメリア」

「は、はいー」

どうやらオツケーということだったようだ。

12. 最果ての街の住民

冒険者ギルドに向かつて足を進める。

仲間になってくれる人を探しに、ではなく樹海の脅威排除の前準備、としてなのが本来の用途と違う感じがする。

それはそれとして、自由奔放な冒険者稼業をしている人たちをまとめる場所だ。そのギルド長となればすごく怖い鬼教官のような人か、それともテキトーな人か。どちらが出てくるだろうか。

鬼が出るか蛇が出るか。そんな気持ちで冒険者ギルドの扉を開ければ――

「ムウンツツ!!」

――ハゲがいた。

「……おっと、客人が来ていたのか。すまん、少し鍛錬に熱が入り過ぎたようだ」

「えと、ギルド長、でしよつか……?」

他にもちらほら人はいるが、この人ほど存在感を放っていない。この人はもうあれだ。いるだけで眩しいくらいの存在感だ。

頭頂部は光り輝き、その体はまさに鍛え抜かれたといってもいいくらい暑苦し……あ、いや。屈強な筋肉で構成されている。肌は健康的な小麦色の肌で、そしてやっぱり暑苦……気迫のある顔つきだ。

「いかにも、ワシが冒険者ギルドの長だ。お前らは冒険者志望か?」

「我らは樹海の脅威排除のミッションを受けた」

「む? しかしお前らを冒険者ギルドで登録した覚えはないが……」

「い、一応辺境伯に認めてもらいました!」

「我はここで人を集う必要はなしと判断した。ゆえにここには足を運んでいない」

登録してないから認めないって言われる前に、辺境伯の名前を出

す。

「む、そうか。本来であればここに来てほしかったが、まあいい。それでお前らのギルドはなんとという名だ？」

「あつ」

考えてないってば。

ていうか二人しかいないのにギルド名って必要なんだろうか。

「えと……まだ決まってなくて……」

毎回これを言うのも心苦しい。というか面倒くさい。いや、申し訳なさはあるのだけど、やっぱりこう、何度もあると面倒なのだ。

「なので決まってからでもいいで——」

「ギルドとはいわば冒険者が掲げる旗印のようなものだ。掲げる旗印もなしに樹海へ入れさせるわけにはいかん。たとえ辺境伯がなんと言おうとだ」

「はい！ 今すぐ決めます！」

気球艇の時といい、ギルド長といい、やっぱり関わりが深い立場の人ほどそういったものにはこだわりがあるみたいだ。

条件反射のように元気よく決めます宣言をしてしまった。けど仕方ないのだ。決めないと冒険者として認めないと言われかねないし。

「い、イシユ、何か候補ってないかな……？」

「我としては何でもいいが……汝は思いつかぬのか」

なんでもいいって言いながら絶対変な名前だと拒否するでしょイシユって。

そんな感じの雰囲気をするし。

「だつて急に言われても……」

「昨日から言われてたではないか……ならば我が名付けよう」

「決まったか？ 後から変更します、なんて出来ないからな。よく考えてからでもいいぞ」

よく考えてからって言っても決めるまでミッション参加認められなさそうなくせに。

「二ーズヘッグ、だ」

「すごい悪そう!!」

「何を言う。我に、そして汝にも合う名前のはずだ」

「名前の意味はわからないけどなんか悪そうな響きに感じたんだもの!」

「ニーズヘッグか。よかろう。その名に恥じぬお前たちの活躍に期待する」

決まってしまった。

まあそうそうそのギルド名で呼ばれることはないと思うけど、決まっちゃったかあ……

「それで、お前らはミツシヨン参加者だな。すでに話は聞いていると思うが、連携をとっての行動だ。だが安心するがいい。これを受け取れ」

「地図、か?」

「樹海の地下二階の地図だ。すでに探索済みのところまで描かれている。まだ調査の届いてない場所はあるが……これに……」

描かれた地図は西のあたりが埋まっていない状態だ。途中で引き返したのか、まだ道は続いている描き方だ。

その地図をギルド長は赤い筆で無造作に塗り込んでいく。

「ああつ!!」

「むっ? どうした」

「そんなべっちやりと……ああああ、線からはみ出て……信じられない……」

「す、すまん……」

「……アルメリアのことは放っておけ。続けよ」

「ウ、ウム」

「あ、あああ……ああ……」

ギルド長は地図の北側を赤く塗っていく。

枠線は黒いから、地図としてはまだ使えるけどこれはあんまりだ。

「その赤く塗ったところがお前らの探索範囲だ」

「他の場所はいいいのか」

「他の冒険者が塗られていない場所を当てる。分担、というよりローラー作戦だな。血の裂断者がいるとすれば西側。背後をとられぬようにローラーのごとく進行を進める。見つければ笛を吹き周囲に知らせ、笛の音が聞こえた者は現場に急行、そして囲む」

作戦はわかったけど……この地図の扱いはあんまりだ……ひどすぎるよ……

「ミッシヨンの参加人数は今のところどの程度か」

「お前らも合わせて今のところ六つのギルドだな。危険と分かりながらも参加するだけあってどいつも腕に覚えがあるやつらだ」

六つ。

北側を私たちが担当するとして、あとはパツと見では南側と中央帯。

単純に二つのギルドが同一の探索範囲になるのかな。

「だが六つのうち、五人で探索をしているのは……二つだけだ。あとはひとりで探索をする変わり者が三つ、そしてお前らが一つ」

「変な人もいるんですね……」

「……………まあいい。予測される危険度から担当範囲の人数にばらつきはある。だが他のギルドと行動を共にする可能性があることだけは考えておくことだ。北側はあまり必要ないかもしれないがな」

何か言いたげなギルド長の顔だったが気のせいだったようだ。

それから、遭遇したら使うようにと、白い笛を受け取って話は終わった。

ローラー作戦と言う性質上、時間を合わせる必要があるので明日の午後1時に地下二階へ行くようにとのこと。

白い笛は私が持つておこう。イシュに持たせたらまず吹かないだろうし。

冒険者ギルドを出たのはもう夕飯時と言ってもいい時間になっていた。

今から帰ってご飯を作るのは面倒だ……あ、そうだ。

「イシュ、イシュ」

「どうした」

「セフリムの宿だったよね。ウイラフさんが言ってたところって」
「それがどうしたというのだ」

ウイラフさんがご馳走するからおいで、と言っていたのだ。せっかくだし今日ご馳走してもらおう。

「ご飯食べにいきましょうー!」

「汝の家でいいではないか」

「宿に出るご飯を食べにいきましょう!!」

「明日の準備はいいのか」

「ご飯を食べて元気になるのが一番の準備ですよ!!」

「まあ我はなんでもいいが……」

クラントロがどんな風に調理されてるのかも気になるし、それにミッション参加者のひとりギルドって絶対ウイラフさんだろうし話もしておきたい。

一石二鳥とはまさにこのことだ。

街中の看板を頼りに私たちはセフリムの宿へと向かった。

セフリムの宿は冒険者が多く利用している施設だ。

タルシスの街には様々な地から冒険者が訪れる。そのため宿は重要施設だ。冒険者にとっても、街にとっても。

おかげでいくつもの宿が大きな宿となっているのだけど、中でも評判がいいのがこのセフリムの宿。

ウイラフさんは中にいるだろうか。まだ戻ってきてなかったらどうしよう。今更すぎる悩みが出てしまった。

とりあえずウイラフさんの名前を出そう。それから考えよう。

それに評判のいい宿なのだ。きっと女将さんも優しくて素敵な人に違いない。

いざ、セフリムの宿へ、だ。

「すみませー……」

「はーい？」

「……………」

中に入ると、血まみれで笑顔の人が出迎えてくれました。

「ほ、ほひゃあ……」

「初めての方ですねえ。ようこそ、セフリムの宿へ。私はこの女将をさせていただけます。……あらあら、私ったら。返り血をまず拭うのが先決ですよね」

「返り血!？」

思っていた宿と違う。

もつと優しくアットホームな宿を想像していたのに、なんで返り血笑顔の女将さんが出てくるの。

「お恥ずかしいです。少し新しいメニューのチャレンジをしてて、血抜きを怠り過ぎちゃったんですよ」

「りよ、料理の結果ですね……!」

心臓に悪いわ。

ウィラフさんが微妙な感じの言い方してた理由がなんとなくわかったわ。この人が原因だわ。

「あの……ウィラフさんって戻ってきてます?」

「ウィラフさんなら……」

「アルメリアにイシュじやない。お昼ぶりだね、どうしたの?」

「丁度戻ってきましたねー」

「さつそくご馳走になろうかなと思ひまして……へへ……」

いざ言うとお恥ずかしさがこみ上げる。なんていうか卑しき全開じゃないだろうか。でもここまで来ちゃったからにはご馳走になる。じゃないとなんのためにあんな返り血女将と遭遇したのかわからなくなってしまう。

「あー、なるほどね。でも、地下二階への件でお礼はいいって言ったのに」

「それを言われるとつらいです……！　でももうご飯作る元気がなくてえ……」

「あはは、いいよいいよ。あなたたちのおかげで私も安全に依頼をこなせたんだし、階段の場所くらいじゃお礼としては物足りないしね。女将さん、今日の夕飯、二人追加できる？」

「大丈夫ですよー。少し増えたくらいでからっぽになるようなやわなお鍋は使ってませんから」

やわな鍋とはいったい。

ともあれ夕飯確保できた。いや、金欠と言うわけではないけども、なんにしる節約は大事だから、うん。誰に私は言い訳しているのやら……

「ウイラフといったな。汝も明日、樹海のミッションに赴くのか」

「ええ、あなたたちも受けたみたいだね」

イシユの問いかけによる答えを聞いて、やはりひとりギルドの変わり者はウイラフさんだと判明。

あとはワールウインドさんが確定だとしたら、もうひとりは誰だろ。

「疲れが溜まっているんですかねえ……」

「女将さんどうしたの？　やっぱり追加は辛い？」

返り血を拭い終わった女将さんが突如として呟いた。

表情はおっとり笑顔なんだけどなあ……

「いえ、それは大丈夫ですよー。ただ目に疲れが来てるみたいで、そちらの方が女性に見えてしまつて」

「あー……」

あー……

「実際どつちなの？」

「何がだ」

ウイラフさんつたらドストレートに聞いてくれた。

いいぞいいぞ。気になる神秘を説明してください。

「あなたの性別。どっち?」

「……ふむ」

なぜ性別を聞かれて考え込むモーションになるのか。自分の性別でしょ? パパッと答えてよ。そしてウイラフさんに今度キルヨネさんの性別聞いてもらおうつと。

「この体を指すのであれば、性別はない。モデルとなった者は女であつたがな」

「? よくわからないけど、女つてこと? 声すごく渋いけど」

「性別はないと言っている。そして声は変声することは可能だ」

「ほへん!」

後半のセリフは今までと違う声音だつた。

渋い男性の声から一転、女性の声に早変わりしたのだ。びっくりして思わず変な声が出た。

「イ、イシュ、声を変えれたんだ……でもなんか違和感すごいですよ。その声もどこか間抜けだし……」

「汝の声だが」

「うそお!」

ウイラフさんが笑いをこらえているのが見える。

何笑つてるんだちくしようめ。こらえるなら隠し通してよもう。

「ふ……ふふ、イシュつて思つてたよりずっと面白いじゃない」

「汝の声にも変化させれるが」

「それはやめて」

本気のトーンだつた。ウイラフさんの却下の素早さとトーンがもう本気だつた。

「あら? あらあら? 男性じゃなくて女性の声? ……やつぱり疲れてるんでしょうか。何を信じたらいいかわからなくなってきました」

女将さんだけついてこれてない……!」

しかもなんでか人間不信になりそうなんだけど……!」

「あ、いけないいけない。そろそろ火を止めないと」

パタパタと女将さんは厨房へと消えていった。結局疲れ云々につ

いての誤解をとけないまま。

いやでも、実際疲れてるかもだし、うん。大丈夫だきつと。

それから少し雑談をし、ウイラフさんが取ってきたらしいブラック
タウルスと呼ばれる牛のお肉がメインの夕飯にお呼ばれた。

「そういえば二人とも、酒場って行ったことないんじゃない?」

さりげなくクラント口を皿の隅に寄せながらウイラフさんが言っ
た。

酒場。そりやまあ行く理由などないし、初日こそはイシユが情報収
集しにいかうとしてたけど、今日もするつもりなんだろうか。

「酒場って言ってもお酒が飲めるだけじゃなくて情報交換の場でもあ
るし、冒険者としては一番実入りのいい仕事の場でもあるから行って
みたらどう?」

「実入りのいい仕事? 酒場でアルバイト、とかですか?」

「冒険者要素どこにいったのき……」

冒険者要素なんて、酒場でできることは限られているし。

「あのねえ、私が今回受けてたクラント口を取ってくるのだって、酒場
を通して仕事として発生するの。樹海や気球艇を使ってできるよう
な仕事を酒場の主人から紹介してもらえるから、それでお金を稼いで
いい武器や防具を買う! かなり基本的なことなんだけど……」

「い、今のところお金にはそんなに困ってなく——」

「我は剣を求める。二本だ」

イシユの剣はまだ大丈夫そうだった気がするけど、どこか刃こぼれ
をしてたんだらうか。

「今の剣、ダメになっちゃったんですか?」

「この剣は本来、我のものではない。本来の持ち主に返すことはもは
や叶わぬが、我が持ち続けることは間違っているだらう」

借りっぱなしでそのまま、ということだらうか。あまり詳しく話し
てくれないからぎつくりとした予測しか立てることができない。

「それで、現在の金銭的には問題ないか」

「えと……買うものに、よるとしか……」

「そうか……」

「まあ、それならやっぱり酒場に行つてきなよ。樹海から何か取つてきてくれつて依頼とかもあるんだし。探索ついでにお金も稼げる、そして街の人も助かるつてなればもう一石二鳥どころじゃないよ」

「それじゃあ、この後にでも寄つてみます」

「酒場なら踊る孔雀亭、武器や防具が欲しいならベルンド工房に行けばいいからね……つてアルメリアは知ってるか。タルシス育ちなんだし」

「あははー」

タルシス育ちがタルシスのすべてを知っていると思うなよ。

10年はまともに出歩いていなかったんだから。

お腹いっぱいになってからセフリムの宿を出る。

ウイラフさんとはまた明日、と別れた。

13. 冥闇の依頼書

たとえ街が夜に沈んでも、すべての建物から明りが消えていくわけではない。真夜中であつてもだ。

酒場なんてものはその筆頭ではないだろうか。

眼前にあるお店、踊る孔雀亭もまた例外ではないようで、窓から明かりが漏れ出ている。

「ごめんください」

「仕事とやらはあるか。この我がこなしてやろう」

初っ端からいきなりドギツイ挨拶をぶちかましてくれましたか。さすがはイシユだ。

カウンターに座っている人が酒場の主人だろうとあたりをつけて見てみれば、なんか色っペー人がいる。

あの人が、酒場の主人？ こう、もつとダハハと笑うのが似合いそうなおじさんをイメージしてたんだけど。

「いらつしやい。お客さん……ではなく冒険者かしら？」

ボンキュツボンな褐色女性は酒場の主人と言うより踊り子だ。売れっこ踊り子だ。お店を切り盛りするにしては若そうに見えるけど、若作りがすごいとかだろうか。

「はい、ここで仕事を受けれるって聞いたんです」

「誰かからもう話は聞いているのね。説明が省けて助かるわ」

「我は剣を二本買うための金が必要だ」

「……これまた濃いのが来たわね」

イシユがズイズイと前へ出る。酒場のお姉さんは第一印象ではミステリアスな大人の女性感があつたのに、なんだらう。イシユへの引き方を見るに案外普通っぽい。なんか、神秘的雰囲気ない。

「仕事はそっちのボードに貼つてあるから、受けたいものを好きに選んで頂戴。受けたいものを選んだら私にその紙を見せるのよ」

「ほほー」

示されたボードには紙がいくつも貼られている。

赤色や青色、黄色など紙の色がいくつかに分けられているのは仕分けか何かだろうか。

「イシユ、何かいい感じのありそうですか？」

「我にはこの時代の文字がわからぬ。汝が選ぶのだ」

「あ、そうでしたね」

探索ついでにやれるやつが望ましい。できれば熊の毛皮が欲しいとかそういうのがあればいいんだけど……ネコが家出したから探してほしいって明らかに樹海関係ないでしょこれ。パンヤ林の群生地
の搜索？ 土地でも開拓するの？ もうこれ個人の依頼じゃなくない？ 依頼主は……辺境伯じゃないか。辺境伯もここ使うんだ……

「樹海の探索ついでに出来る仕事なくないですか!？」

「まあ依頼は早い者勝ちだからねえ……でも樹海以外の依頼はあるわよ。その依頼も、依頼人も解決してほしいって願ってるんだから積極的にやってほしいってのが個人的な意見かしら」

「うぐつ……」

仕事の好き嫌いをするな、と言われた気分である。

だけど、ついでにできるようなものじゃないと……私としてもイシユとしても避けたいはずだ。私は体の制限時間のため寄り道なんてする余裕はない。イシユも時間が惜しいとかいって安全策を取らないタイプっぽいし。

そんな二人組が樹海と無関係の依頼を積極的に選ぶなんて、そう滅多にないのだ。

何かないものか……あ、これだけ黒い紙だ。

「……赤竜？」

黒い紙に赤い竜についての依頼とは。なんだろうこの、ふふってなる気持ちは。

「その依頼はあまりお勧めできないわね」

「赤竜ですもんね……」

赤竜は時折タルシスの上空を通過していく姿が見ることが出来る。人に害意を持って襲ってくることはないが、かといって人を避けて飛

ぶというわけでもない。

赤竜の接近に気づかず墜落したという事件もあつたりするくらいだ。

その強大さ、そして圧倒的な威厳から、偉大なる赤竜と呼ばれるほどの存在。

触らぬ神に祟りなし。竜には近づかず、何もせず、がタルシスに住むものとしては常識だ。

「まあ、竜だからっていうのもあるんだけど……ちよつと不気味なよそれ」

「不気味、ですか？」

依頼の内容は不気味とは思えない。赤竜の討伐を求めているわけでもなく、赤竜が空を飛んでいる間に特定の地点にある石柱を壊してほしい、という内容だ。

すごく意味の分からない内容だが、不気味というのはよくわからない。

「それ、依頼人が不明なのよ……」

「へ？ あ、ほんとだ。書いてない。でもこういうのって依頼人と直接話したりするんじゃないんですか？」

「そうなんだけどね……それは私も貼った覚えがないし、依頼人とも話した覚えがないの。悪戯かと思って剥がしては捨てるんだけど……いつの間にかまた貼られているのよ……」

ああ、気味が悪い。と身震いしながらお姉さんは教えてくれた。

捨てても戻ってくる謎の依頼書。たしかに不気味だ。

「だから今では諦めてそこに貼りっぱなしなわけ。それでも時々剥がしたりするんだけど……やっぱりすぐに戻って……」

「うひい……」

依頼紙を元の場所に戻す。

改めてみるとなんだか禍々しいものに感じてきた。

「イシユ、今のところいい仕事はあまりなさそ……あれ？ どこいったの？」

「あなたの仲間ならテーブルの方に。情報でも集めてるんじゃない

「？」

「どーりで静かなわけだ……」

イシユがお金欲しいと言いだしたのに、仕事を探しているのが私とはこれいかに。

「今は樹海が大変だから樹海関係の仕事も少ないけど、問題が解決したら一気に増えるはずよ」

「それじゃあまた日を改めます……」

「……それ、受けるつもりなの？」

「え？」

言われて自分の手に持つものを見れば

黒い依頼用紙を持っていた。

「ひい!?!」

「あ、やっぱり受けないのね」

「戻したはずなのになんで!?!」

やだやだ、こわいこわいこわい。

確かにボードに戻したはずだ。なのになんで持っているんだ。

「やっぱり、あなたも無意識だったのね……」

「やっぱりってなに!?!」

「あなた以外にも気づいたらその紙を持っていたって人がいるのよ。無意識につて人もいれば、中には絶対に受けないという強迫観念めいたものを感じて受けようとした人もいるの」

「この紙かなりヤバイやつじゃないです……?」

「受けようとした人は仲間に止められたけど……今度お祓いでも頼もうかしらね……それかいっそ誰かに達成してもらえばなくなるかしら……」

というかそもそも誰も受けないよ、こんなの。怖すぎるし。

報酬のところもよくわからないし。何さ、報酬は限界を超える力つ

て。かつてなんだ。

「そういえばあなたたちの名前はなんていうの？」

「私はアルメリアです。で、もう一人はイシュ。ギルド名は……ニーズヘッグです」

「ニーズヘッグね。この黒い紙、不気味だけど受けかけた人はたいてい優秀な冒険者になってるのよ。だからきつとあなたたちもお得意さんになってくれると嬉しいわ」

「素直に喜んでいいかわからない判定法ですね……」

「そうよね……」

微妙な気分になったところでイシュを迎えに行った。といつてもすぐそのテーブル席だけだ。

「あ、メノウさん」

「キミも来てたのね。この人、連れて帰って」

そのテーブルには一緒に戦った人、虚ろな目をした印術師メノウさんがいた。

「この人、私が忙しいって言ってもしつこいの」

「我に印術とやらの原理を説明すれば引き下がると言っているであろう」

「説明したじゃない……それにキミの仲間の印術師に聞けばいい……」

「汝の説明もアルメリアの説明も理解に悩むものなのだ。別の説明の仕方はないのか」

「ない……以上」

メノウさんは本を読み始めた。聞く耳持たず、といった感じだ。

「む？ アルメリアか。仕事は見つかったか？」

「今は樹海騒動のためないみたいです」

「そうか……」

「印術は才能も結構関わりますし、わからないならもうそれでいいんじゃないですかね」

イシュがこれ以上メノウさんに面倒くさい絡み方をしないように、才能という言葉で諦めを促した。実際は初級の術であれば才能関係

なしにできるものだけ。専念すれば上級も可能らしいし才能はやっぱり関係ないけど。

「そうか……ではベルンド工房とやらに行くか」

「あ、行くんですね」

「この際安物でも構わぬ。剣を手に入れる」

今日はなんだかあつちこつちに行つてる。けどきつとこれで今日は最後のはずだ。

ベルンド工房。

ネコっぽい動物の看板がある不思議工房である。

そんな感想が出てしまったけど武器や防具もちゃんと扱っているお店だ。剣とか置いてあるし。

「店員さんは……いないのかな？」

まあ、もう夜だし店じまいの時間かもしれない。

にしても不用心だ。剣とかそのまま置いておくなんて。

「鍛冶場……か。我はこういうものを見るのは初めてだ」

「……ちよつとワクワクしてます？」

「しておらぬ」

「ニヤけてますよ」

「ニヤけておらぬ」

奥にある鍛冶場を見てウキウキイシユちゃんになってしまっている。

ちよつと意外な一面を見てしまった。

「でも誰もいないんじゃないや出直しましょうか？」

「あ、お客さんだ。いらつしやーい！」

工房の奥から、ではなく、外から声をかけられた。丁度出歩いていたらようだ。

「あ、キミたち、見ない顔だね。ここはベルンド工房って言って、えと

ね、えとね」

「……子供ではないか」

「子供じゃないよ！ まだ見習いだけど……子供じゃないよ！ 店番も任されてるんだから！」

イシュが頭を抱えている。なんだかまたも意外な一面を見てしまった気分だ。

それはそれとして、子ども扱いされてプンプン膨れてる子は……実際にかなり若く見える。

10代前半って言われても普通に納得しそうだ。いや、一ケタもありえる……？

金色の髪を後ろでまとめて動きやすくしており、服装も余計なものはなくしましたと言わんばかりの身軽さ。というかスツキリすぎるな服装だ。子どもならではの服装だ。大人は着れない。着れば妖しい感じになってしまう。

「あの、剣を買いたいんですけど、今って工房やってます？」

「剣？ 長剣、短剣、突剣って種類あるけど、何がいい？」

「えと、イシュ」

「長剣を二本だ」

想定より選択肢があると一瞬戸惑ってしまう。

「切れ味はこの際いい。丈夫であればよい」

「アバウトだなあ……でもキミたちに売れるのはショートソードくらいしかないかな」

私たちに売れるのは、ってまるで他の剣はあるけど売れない、みたいな言い方だ。

「条件とかあるんですか？」

「基本的にウチは素材が冒険者の持ち帰ったもの頼りなんだ。その素材を使った武器は持ち帰ってくれた冒険者に優先されるんだ。有り余ってたら他の人にも売れるんだけど……普段ならともかく今は最低限しかなくて」

「ミッシヨンが原因……？」

「あ、知ってるんだね。そうそう。それでいっぱい武器を買い求める

兵士が多くて、あつという間になくなったんだ」

「ショートソードで構わぬ。二本買うことは可能か」

「りょかい！ 二つで合わせて140enだよ！」

あ、結構というかかなり安い。

それにそういえば、魔物の素材を売ってないのだ。ここで買い取りをやってるんだろうか。

「それじゃこれで。あと魔物の素材ってここで買い取ってもらえたりします？」

「まいどありー！ 素材も買い取るよー。じゃ、剣を取ってくるから素材はその机に並べといてー」

バツタの魔物の脚、狒々の魔物の皮、森の破壊者の爪と牙、ネズミの皮、アルマジロみたいな魔物の皮、ごとごとと机に並べていく。全部でいくらになるのだろう。というかそもそも持ってきた部位はちゃんと資源となるのだろうか。使えない部位もありそうだ。

でもまあ熊の爪とかは高価そうだし、結構な値段になるのではないだろうか。酒場の仕事なんていらないかもしれない。

「わー、結構あるねー」

ショートソードを二つを両手で持ちながらお店の子は戻ってきた。

ショート、という割にはそんなに短くない。もつとナイフみたいなのを想像してたんだけど。

「でもキミ、もう剣は二つあるんだよね。その剣はどうするの？ 修理とかウチでしようか？」

「この剣は元々我のではない」

やっぱり聞いちやうよね。

その質問を受けたイシユは、前と答えは変わってない――

「死体から回収したものだ」

……………え。

「し、死体、から……？ 大丈夫、それ？ 呪われちゃったりしない？」

「？ 何故呪いが出てくる」

「装備を奪つたら恨まれるって……」

ちよつとボーつとしてしまった。

お店の子がイシユにドン引きしている。

確かに死体から回収したっていうのはヤバイ気がするけど、そう
だ。樹海での拾得物は拾った人のものになるらしいし、そういうもの
なんだ。きつと。

それにイシユの倫理観がズレているんだ。今と過去とで。

さらに言えば、反省して違う武器を使うって言い出したんだ。今の
時代に合わせようとしてくれてるんだ。あのイシユが。それに文句
を言うわけにはいかない。

「ふむ……装備を奪えば恨まれる、か。体を奪うよりは恨まれなさそ
うだが——」

「イシユ、その剣って樹海で亡くなった人のなんですよね」

「うむ、ハイ・ラガードの冒険者のものだ」

「ハイ・ラガードに今後戻る予定ありましたよね？ その時、樹海の中
で吊つてはどうでしょう」

「ふむ。碧照ノ樹海に、と考えていたが……」

「そ、そこはハイ・ラガードまで返してあげてよ！」

「ハイ・ラガードの方がよいのであればそうしよう」

店員ちゃんという言葉の後押しも入り、イシユは了承してくれた。

特にこだわりはない感じだったが、倫理観が違う以上仕方のないこ
とかもしれない。

私が言うことではないが、これならその剣の持ち主も少しは安らぐ
のではないか。とにかく感謝だ。

「今の時代に合わせてくれてありがとうございます」

「……我の時代でも遺品への想いはあつた。我が忘れていただけだ。
合わせたわけではない……それに、不合理と考えてしまう以上、やは
り我は体を捨てた時にあらゆるものを捨てたのだ」

その感謝は筋違いだと言われた感。

時代の変化による価値観の違いだけでなく、人と人でなくなった身

の価値観の違いもある。

見た目は完全に人だ。だけどその体の力は人を凌駕している。

でも、イシュは少し変なだけで中身はやっぱり人に思えるのは私だけだろうか。まあ少しというよりかなり変かもだけど。

「えつとお、話変えていいかな？　とりあえずショートソードの柄はそのサイズで大丈夫？」

「む？　ああ、我にとって多少の差異など問題ない」

「そういうものかなー……」

剣の柄を握り、軽く素振りをしだした。

「使う人の癖とか、重心の位置とかによつて調整してこそつて言われてるんだ。だからもし調整してほしかったら遠慮なく言つてね」

素振りをするイシュを見ながら思う。

私も何か剣とか持った方がいいだろうか。短剣でもいいし、杖とかちよつと心もとなさ過ぎる。いや、印術師といえば杖つていうイメージはあるんだけど。

「私も剣とか持った方がいいかな……」

そんな思いが自然と口から洩れた。

「およ？　でもキミ、ルーンマスターだね？　それなら剣より杖じゃない？」

「そうなんですけどね……やっぱり印術より早い攻撃手段とかもちよつと欲しいですし……」

「うーん……」

印術の起動を魔物が待つてくれることなんてない。

だからこそパーティを組んで樹海に挑むという形式なんだろうけども。イシュが観戦モードになつてもおかしくないこのパーティは、安心できる要素が少しでもほしいのだ。

あと剣も使えて印術も使えるつてかつこいいし。

「うーん……」

店員ちゃんがすごい凝視してくる。恥ずかしさと不安がくるのですが、そんなに見られると。

「あ、あの……う？」

「ちよつと待っててー！」

「へ？」

奥に行ってしまった。

ひよつとして私に合った剣を持ってきてくれるんだろうか。これは期待。

「やはり剣を変えても炎が飛んでいかぬか……」

「何しようとしてるの!？」

イシユのつぶやきが物騒すぎてびっくりした。

お店の中で炎を飛ばすなんて何を考えてるんだ。

「おまたせー！ キミにはこれがいいかも！」

「これ……?？」

そう言つて渡されたのは、ナイフ。

持ち手の部分が通常と異なるナイフだった。なんというか、ぐつと握ることはできないくらいに短い持ち手部分だ。それが複数本。

「剣、じゃないですよね……?？」

「剣は振れなさそうだし、軽くて咄嗟に使える武器ならこれが一番だよ！」

何気にひよわ認定された。悪気一切なしで言ってくるのが一番ダメージが大きい。

「随分と変わった形のナイフだな」

イシユも素振りをやめて見に来た。

ショートソードの振り心地はもう堪能し終わったようだ。

「投刃用ナイフだからねー」

「投げて使うってことですか？」

「うん。でも投げて使わなくても、咄嗟に振るだけでも効果的だよ！ 印術より早く使えるし、しっかり握れないけど……キミの力じゃ

しっかり握ったところで逆に怪我しそうだし……」

「評価がひどい……あと私の名前はアルメリアです……」

たしかに握りをしっかりしていても、魔物の筋肉に刃を止められて逆に怪我しそうだけだ。

だからってこのナイフでは表皮を軽く斬るだけに終わりそうだ。

「それに練習すれば投げて使うこともできるし、イイと思うけどな」
「むむ……ちなみにお値段は……？」

「五本で40enかな？ ナイトシーカーの人が武器を買ったときにおまけで渡すものだから……実は値段がわかってなく……」

「そんなアバウトな……」

「お、親方には内緒だよ……」

まあ護身用として持っていてもいいだろうし、値段もたいして高くないから購入を決定。

ナイフホルダーまでつけてくれて嬉しいけど、本格的に使うかは微妙です。

「それはそうと……」

「薬品は危ないから渡せないよ」

「あ、そつちじゃなくて、そろそろ魔物の素材がいくらになるか知りたいなーって」

「あ、ごめんね。えつとえつと」

店員ちゃんは懐からメモ用紙を取り出した。

……内ポケットでもあったのだろうか。それとも本当に懐に？

用紙が擦れて痛いとかないんだろうか。いや、考えるな。無心だ。

「熊の爪に牙に……」

あのメモに値段が書いてあるようだ。別の用紙に数字がどんどん書きこまれていく。

それにしても……思ったより安い……かも……。

「合計で251enだね！」

「け、結構安いんですね……」

「素材としての希少性で値段が決まってるみたいなんだ。新種とかならそれなりの値段なんだけど……あ、そうだ。これ」

「？」

渡されたのは一枚の紙。

それを見ると魔物の素材の名称がズラリと並んでいた。名称の横には値段と、備考欄に武器やアイテムの名称が。

「これは？」

「今のところのウチで作れるリストだよ。欲しい武具があったらそのリストにある素材を重点的に集めたらあつという間だよ」

「これ、いただいても？」

「うん、いいよー。でも複数枚は渡せないから、なくしたらダメだからね」

「ありがとうございます」

うれしいリストだ。魔物の素材の値段もわかるし、何よりも、どの部位を持って帰ればいいのかわかるのもいい。あ、バツタの魔物って脚以外に顎も素材になるんだ。

「ここでの用も済んだな。では戻るぞ」

「あ、はい」

明日に備えての準備として、冒険者ギルドにいつてからずいぶんと時間をかけてしまった。

あとは家に帰り次第眠ろう。

「それじゃ、二人とも今後ともよろしく！ このベルンド工房をごひーきに！」

店員ちゃんの見送りの言葉を受けながら、家路についたのだった。だいぶ疲れた。きつとベッドに倒れこんだら10秒も数えないうちに熟睡できる気がする。

14. 薄暗き藪に潜む獣の猛威

何か聞こえる。

何かに呼ばれているような。だけど周りは真っ暗だ。どこを見ても真っ暗だ。

石柱を壊せ？ 訳がわからないけど、それをしてほしいの？

真っ暗の中で聞こえる音の訴えが何故かわかった気がした。

その音が聞こえるたびに、体を這う植物も奇妙な、なんでか怯えるように感じた。植物に意思なんてものがあるはずなのに。

しかし、もしも意思があるとして、そしてその音に怯えているのであれば、音に従うのもいいかもしれない。こんな植物は苦しませるべきなのだ。

石柱を壊せ。

赤と黄色、そして青が守る石柱を壊せ。そう訴えてきている気がする。なんで壊す対象が増えてるんだ。

真っ暗な中、本来見えないはずの世界の中で、黒い影がうごめき形を作る。

巨大な体格に、不気味に光る黄色い眼。

さらに植物が怯えたのがわかった。ということは、この黒い影は味方だ。

黒い影の元へいけば、植物は苦しむはずだ。

そう思い、一歩足を踏み出そうとして――

「間拔けな寝顔を晒してないでいい加減に目覚めよ。よだれなどたらしめて見苦しい」

「何見てるの!?!」

聞こえてきた声に思わず跳ね起きた。

「ほあ!?! ここは!!」

「ここは汝の部屋だ。いつまで経っても起きぬから、この我が起こしにきたのだ」

「あ、あれ? 影は? 音は?」

「何を言っている」

「夢……?」

なんだか奇妙な夢を見た気がする。

石柱を壊せって、昨日孔雀亭で見た……うう、不気味すぎる。

「はやく支度せよ。もう昼と言ってもいい時間だ」

「へ!?! うそお!?!」

壁にかけられた時計を見れば、時間は11時。

地下二階の集合時間は13時。残り二時間。

寝すぎた……! 昨日一昨日と連日かなり疲れてたからだ……!

「す、すぐに支度する!!」

「当然だ」

慌てて服を着替えようとして、動きが止まった。

「イシユ」

「なんだ? はやくせよ」

「いや、出てってもらえないですか？」

「なぜだ」

「着替えるから」

「それはわかっている」

「じゃあ出てってもらえませんか？」

「だからそれはなぜだ」

おうふ。

やっぱり人をやめてるよイシユは。

「あーもう、イシユは女の子、イシユは女の子、イシユは女の子……」

自己暗示をして思い切って着替え続行だ。イシユの説得なんて無駄だとわかっているのだ。

「我の性別は」

「少し静かにしてください」

「む……まあよい」

今は訂正なんていらぬのだ。

自己暗示のためにもいらぬのだ。

「……足にも侵食が始まっているな」

「……………」

着替えている最中に言われた言葉は、目をそらしたいことでもあった。

太ももにまで植物の範囲が伸びている。

あの変な夢を見たことよって、植物が萎えて枯れたりしないかと思っただが当然そんなことなく、むしろ勢力拡大中だ。

っていうか、着替えガン見されるのはちよつと自己暗示かけてもきついです。

「……イシユって、何年ぐらい生きてるんですか」

「む？ 千年は超えているな。それがどうしたのだ」

「……せんねん」

ということはやっぱりすごいお爺ちゃんなのだ。そうだ、だから気

にすることはないはずだ。

それにそもそも時間がない。急がないとなんだ。

着替えをすませ、麦パンをいくつか鞆に放り込む。

「ご飯は移動中の気球艇だ。」

二本の水筒に飲み水をいれるため井戸にも走る走る。

「イシユは先に気球艇を飛ばす準備しておいて！」

「うむ、忘れ物はないようにな」

イシユに先に行ってもらうよう促し、あと必要なものはなんだ。

地図、図鑑、ペン、インク、鞆、パン、水筒、えとえと。ナイフもワンドもある。あとは石柱を破壊するための何かいいものないかな。金槌とかでいけるかな。あ、そうだそれより、

「笛だ!!」

作戦時に必要な白い笛だ。

危ない、思いだせてよかった。きっと遭遇しないだろうし笛なんていらぬいさーとか言う人に限って遭遇するのが世の常なのだ。

だからこの白い笛はある意味お守りにもなりえる。そんな気がする。

これで忘れ物はないはず。次は急いで街門まで……イシユに荷物ちよつと持つてつてもらえばよかったかも。

後悔先に立たず。とにかく今は街門まで行くしかないのだ。

気球艇ノアにて上空に上がってから気づいた。

「医薬品忘れた……！」

「だから言っただろうに……だが医薬品など不要だ」

簡易手当が可能なのと不可能では大きな違いがあるって聞いたのだ。今までずっと鞆に入れっぱなしだったのに、なんで出してしまっただらう。そしてなんでそのままにしちやっただらう。

イシユには医薬品なんて不要かもだけど、私は一般人なのだ。やや植物になっっているけども、一般人なのだ。

「それより、間に合いそうですか……?」

「きわどいところだな。だが遅れたところで支障はたいしてないだろう。参加ギルド数が少ないとはいえ、兵士もミツシヨンに参加しているのだ。何人かが駆り出されるだろう」

「それでも申し訳なさが……」

「寝坊となればな——馬鹿な……」

責めるようなイシユの口調が戸惑いのような、疑念のような、違う口調へと変化した。

麦パンを頬張りながら同じ方角を見ると、そこには

「赤竜……!?!」

「何故こんな場所にも……」

風馳ノ草原に覇者として君臨する、偉大なる赤竜。遠目から見てもわかる、理不尽の塊。

その竜がどんどんと近づいてくるのだ。

「イシユ！ あれは挑んじゃダメ!!」

「わかっている!」

圧倒的な巨躯からは考えられないほどの早さで空を飛ぶ赤竜。

気球艇よりもずつとはやーい……

このまま飛んでも追いつかれるのは決まり切っている状態だ。赤竜の進路上にたまたまいるからこうして危機がきている。なら、進路上から外れたらいい。イシユも同じ判断をしたのか、横切るように進路変更がされた。

「なんで!?! こっちにどんどん近づいてるんだけど!?!」

赤竜もあからさまに進路を変えてきた。

赤竜を見た時は進路に入っちゃダメと聞いていたけど、入っても進路から外れたら問題ないとも聞いていたのに、なんだこいつは。

「ひいひい!? イシユウ!!」

「赤竜、か。偶然発生した存在ではないのか……ハイ・ラグードの世界樹にもいたことを考えれば、世界樹に生み出された存在ということか?」

「イシユまで取り乱さないで!」

今考えることではないでしょうに。現実逃避しているようにしか見えない。

赤竜は気球艇に追いついたと思えば、その場で滞空しながらこちらを睨んだ。

なんでこんなに執着してるんだ。私たちは普通の冒険者なのに。いや、イシユか、イシユなのか。古代人パワーが赤竜を呼び寄せたのか。

混乱しているこちらをよそに、赤竜が動きだす。

赤竜の額が赤く輝きだしたのだ。赤い輝きがどんどん広がり、気球艇に乗っている私たちにまで光に呑み込まれた。

「む……!?!」

「ひい……」

光に呑み込まれたけどなんともない。なんともない感覚だけど、今変なのが出てきた。

私の体からどういうわけか黒い靄みたいなのが、飛び出てきた。

黒い靄はまるで風に飛ばされるように気球艇から、そして赤竜からも離れていく。

その靄を赤竜は追いかけて、そして――

まるで太陽のような、直視できないほどに明るく、触れれば影すら残さないような夥しい業火を吐き出し、黒い靄を完全に消滅させた。

靄が消えたことで満足したのか、赤竜はどこかへと飛んでいった。

「……な、なに今のお……」

「わからぬ……むしろ我が一番聞きたい。汝の体から出たあの黒い空気がなんだ」

「わかるわけないよお……」

なんだったんだろう。本当に。

「しかし赤竜がいるとなれば、ほかにも竜がいそうだな」

「この辺りじゃ赤竜以外は聞いたことないけど……」

「ハイ・ラガードの世界樹にも竜がいたのだ。あんな種が何体もいるとは考えにくい。世界樹が生み出した存在の一種かもしれぬ。もしもそうであれば、雷竜と氷竜がいるはずだ」

「あんなのが、あと二体も……」

冷汗が気持ち悪いくらい出た。

そんな竜が複数いるというのは考えたくない。世界樹に係る生き物だとイシユは言うあたり、遭遇する可能性は冒険すればするほど高まるということだろう。

あ、つていうかそれよりも！

「碧照ノ樹海！ 進路外れちゃってるよ!!」

「む、そうだったな」

赤竜との遭遇で色々頭から飛んだけど、これももう遅刻確定だ。

でも言い訳としては赤竜のせいだし。私のせいじゃないし。だからセーフだ。心証的にはセーフのはずだ。

だから落ち着いていくのだ。

落ち着くために水筒を取りだそうと鞆をあさり、違和感を覚えた。

「んんー？ なんで金槌なんて鞆に入れてるんだろ」

慌てすぎてたからだろうか。鞆に金槌をいれた理由が一切思いだせない。

いくら考えても何故入れたか思いだせないので、金槌は気球艇に置いていくことにした。邪魔だしね。

碧照ノ樹海に気球艇をつける。現在時刻は午後1時。言われていた集合時間である。

ただし集合場所は樹海の地下二階である。遅刻しているのである。つらいのである。

「お前たちは、たしかニーズヘッグだったな。もうミッション開始の時間だぞ」

「はい！ 赤竜が邪魔してきたんですー！ すぐ地下二階へいきま
すー！」

地下への入り口に待機している兵士にすれ違いながら事情を話して一気に通り抜ける。

「急げば30分程度だな。そのペースで汝の体力はもつのか？」

「無理！ かなりきつい！」

「……我がおぶってやろう」

「お願いしますー！」

普段なら遠慮するところだけど、今はその言葉に甘えるとしよう。つて、え。

イシュがそんな優しさを見せてきたとは。

「ええ!？」

「なんだ。早く行くぞ」

「あ、はい」

イシュにおぶられながら、樹海の地下を駆け巡る。

その景色の中に、昨日と違う点はあまりない。

いや、心なしか魔物の数が少ない気がする。

「兵士の一団の効果……?」

「魔物の数のことなら、おそらくそうであろう。団体に刺激されてあぶりだされた魔物が排除されたのだ。露払いとしては上出来だろう」
これなら早くつくかも。

まあ早くついたところですのでに遅刻だけど。

抜け道を通り、地下二階への階段を駆けおりる。

おぶられながらの階段ってなかなかこわい。おぶってくれている人の体格によって、安心感が違うというのもあるかもしれない。

イシユは怪力だけど……体格がいい方ではないし。

階段を降りきった。話ではそこが集合場所なんだけど……

「……やっぱり誰もいない」

待つててくれないかなーとかちよつぱり期待してたけど、そんなに甘いことはなかった。

イシユの背中から降ろしてもらおう。もう開き直っていこうとか考えたわけではない。ただおぶられている姿を見られるのが恥ずかしいと思っただからだ。

この先は兵士がいっぱいいるだろうしね。

「イシユ、どうしましょう。北の担当区域ってもう代わりの誰かが行つてそうだし……」

ギルド長が渡してくれた地図をひろげる。何度見てもひどい塗り方だ。地図はもっと大事に扱わないと。こんな風に扱う神経が全く理解できない。

「イシユ?」

イシユは地図に目もくれず、三叉路で立っている。

「作戦は失敗したようだ」

「え?」

三叉路の西と北を見てイシユが言った。

その言葉で一気に不安が押し寄せる。

地図を折り畳んで鞆にしまい、イシユのいる場所まで進む。

足を進める度に、少しずつ鼻につく臭気に気づいた。

それは、濃厚な血の香り。

その中に妙な甘い香りが混ざっている。

「どこかで嗅いだような……」

「兵士が後ろで支援を行う手筈だったのだろう。だが、その後ろに潜

んでいたようだな」

「……！」

北にも西にも、鎧や剣が散らばっている。それと、人だったモノが。「ほ、他の人たちは!!」

ワールウインドさんやウイラフさんは大丈夫なのか。

親しくなった人たちの安否で頭がいっぱいになった。

「落ち着くのだ。目の届く範囲には兵士の死体しかない」

「……でも今ごろ、後ろから奇襲を受けてるんじゃない」

「だろうな。それで、汝が慌てたところでなんになる」

「……っ！」

「本来であれば汝の好きにさせるが、汝は我の被検体。ゆえに、勝手に死ぬのは許されぬ」

「………はい」

腕を捕まれて引っ張られる。

そのまま北へ北へと足を進めるイシュ。たしかこの道の北は行きどまりだったはずだ。

「イシュ？ この先は行きどまりですよ？ 今は熊の魔物の退治をしないと……うう……なにこの甘いにおい………」

「背中からやられた兵士の位置を見るに、この先から奇襲を受けたはずだ」

「………」

北に行けば行くほど、血の香りより甘い香りのほうが強くなってきた。

「きつ………」

「甘いにおい、というやつか?」

「イシュは何もおわないんですか………」

「臭気を感知する機能はつけていなかったようだ。以前の我は不要と考えたようだな」

行きどまりまで来ると、においはピークに至った。むせそうなほどに甘い。いるだけで胸焼けを起こしそうだ。

「この藪に潜んでいたようだな。それと、倒木も使って姿を隠して

いたか」

あたりに散らばるのは裂かれた倒木や枝などなど。自然破壊のごとしだ。

残骸を見ながら隠れている姿を想像する。

その藪に隠れるにはあの巨体では隠れきれない。そばの倒木を使つて、はみ出た体も隠せば樹海の景色の一部となる。

魔物なのに知恵が回りすぎだ。他の魔物とは全然違う。

「甘いおいを追うことは可能か」

「無理ですよ……犬じゃないんですし」

「ふむ。ではひたすらに奥へ行くしかないか」

イシユは分岐路まで戻り、今度は西へと進み始めた。

「……」

兵士の死体を供養することはできない。

供養している時間がもつたらない。もしかしたらまだ生きている人たちが奥で戦っているかもしれないのだ。

死体も見えなくなってからだだった。

獣の大きな咆哮が聞こえたのだ。遠く離れているはずなのに、心をざわつかせるような叫び。

音の方角はさらに西。

「イシユー！」

「慌てる必要などない。それよりも声を抑えよ。我は問題ないが、汝の体では容易く死を迎える」

熊の魔物にいつの間にか後ろをとられてしまう可能性があるのはわかるけど。

「でも交戦中ですよ！ 今から駆けつけたら——」

助けるのが間に合う？ ダメだ。そんな言葉でイシユは動かない。

イシユを動かすのであれば——

「赤熊と戦えるかもですよ！」

「落ち着くのだ。慌てなくとも赤熊とは探索を続けなければいずれ遭える」

戦いではダメか。

なら……それなら——！

「イシユのすごい戦いぶりを見たいんです！　そして見せたいんですよ他の人に！」

私は何を言ってるんだ。

いくらイシユがチョロいとはいえこれはない。苦しすぎる。

「……」

「……えっと、今のはその」

さすがに怒っただろうか。我を利用するなどーって感じに。

「ふむ、我以外に頼れるものがない、か」

「そ、そうです！」

「少しばかり赤熊との予定を繰り上げてもよいだろう。走るぞ」

そう言っただけの手をつかみ、イシユは走り出した。

……さすがにチョロすぎない？

走りながら進路上の魔物を切り裂いていく。

なんだか通り魔のようだが、そんなことを考えると普段やっていることなんて強盗のようなものだ。

惜しむべきは斬り捨てられた魔物の素材が回収できないことだ。

大きいボールアニマルとか見たことなかったのに……

進めば進むほど、様々な音が聞こえてくる。

熊の咆哮、金属質なものがぶつかり合う音、人間の掛け声、木々の倒れる音。

隣のフロアだ。今の位置がもうわからない。渡されていた地図の範囲外なのだ。ここまで描いている余裕もなかった。

「面倒だ」

「イシユ!？」

手を離れたイシユは木と茂みの壁に向き直り、剣を構えた。

もしかして樹海の壁をぶち抜く気じゃ……

「雷鳴と我が身」

剣が雷をまとい出す。そのまま大きく振りかぶり、

「山行水行」

……デタラメである。

森の破壊者と同じことをやってのけるとか、どういう力なのだ。

雷とイシユの怪力によつて、木々が乾いた破裂音を大きく響かせながら薙ぎ飛ばされる。

デタラメだけど、これで一気に短縮だ。

「君たちー！」

「アルメリア！ イシユも！」

ウイラフさんとキルヨネンさんだ。

他にも以前、熊の群れと一緒に戦った人たちが何人か見えた。

「森の破壊者がまた来たのかと思つたじゃない！」

「赤熊はいないのか」

森の破壊者が三頭。人とは思えない乱入の仕方に驚いているのか動きが止まっている。

「ウイラフ！」

「わかつてるー！」

まるで踊るような動きでウイラフさんの剣が振るわれる。舞うかのように。

戦闘しているとは思えない、まるで舞踊のような動きはとても綺麗で、流れるように森の破壊者の眼を切り裂いていく。

え。

こわ。熊も魅入ってしまったようだけど、気づいたら眼を斬られるとかこつわ。

「……如く舞う」

残った破壊者に向かってイシユが駆け出す。その勢いそのまま踏みつけるように蹴りつけ、空中に翔び、落ちながら何度も斬りつけていく。

「相変わらずの化け物っぷりね……」

その化け物みたいな人、すごくチョロいんですよ。とは言わないでおく。

それよりも

「他の人たちはどこに……?」

聞いてた話では私とイシュを含めて15人。ミッションの参加人数だ。

ただどこにいる冒険者風装いの人数は11人。

兵士も何人かいるので兵士を含めたらもつといるが。

私の質問にたいして、キルヨネンさんが状況を説明してくれた。

なんでも、赤熊と遭遇して追い詰めたと思ったら突然背後や横の木々から森の破壊者が群れをなして襲ってきた。その混乱によってギルドがひとつ、ほとんど壊滅。兵士もかなり散ったらしい。

「そのため多くが犠牲になったよ……僕がいながら……」

「キルヨネンのせいじゃないってば。それより、笛を吹いても来るのは兵士ではなく森の破壊者ばかり……アルメリア、他の兵士を見なかった?」

「二階の入り口にいた兵士は……全滅でした」

「そんな……全滅……?」

信じられないといった表情で、そばにいた別の兵士が呟いた。

「……血の裂断者のほうが上手だったってことか」

「一旦引き返した方がいい。これ以上は僕らも同じように全滅してしまおう」

「わ……ワールウインドさんもやられたんですか?」

この場にはいない人物の名をだす。死体のなかにもいない。あの人はイシュと渡り合えるほどの実力者だ。やられるなんてイメージがない。

「ワールウインドは、血の裂断者を追い掛けてひとり奥に行ったよ。危険だと止めたんだが……」

「あの人なら大丈夫だよ、アルメリア。森の破壊者を軽く斬り捨てながら一気に行っちゃったからさ」

追い掛けて、奥に……

「赤熊は奥か。行くぞ、アルメリア」

「はい」

「行く気なんだね……ま、ワールウインドのこと、頼むよ。私たちは街まで引き返すよ。……殉職した兵士の認識証を持って帰ってあげないと」

「お願いします」

一瞬、私も街に戻るべきかと思ったけどイシユが私を呼んだのだ。それならついていくのみだ。

それにイシユとワールウインドさんだけでは喧嘩してしまいかねないし、仲裁役だ。

血の裂断者よりも、二人の仲裁役のことを考えると疲れてしまうあたり、私もイシユのチョロさを笑えなさそうだ。

イシユがああ赤熊に負ける気など、一切しないほど信じてしまっているのだから。

15. 群れ統べる狩猟者の庭

血の裂断者を追い掛けたワールウィンドさんを追って、さらに樹海の奥深くへと進む。

イシユだけでなく、ワールウィンドさんも戦闘技術で言えば規格外な人だ。あの血の裂断者といえど、ワールウィンドさんに敵うとは思えない。

「まともにやりあえば、だけど……」

いくらイシユと渡り合える実力者とはいえ、彼は普通の人間の体だ。たぶん。確かめてないけどそのはずだ。

血の裂断者どころか、森の破壊者相手でもまともに一撃をもらえば簡単に死んでしまう。良くて重症だ。

今回の熊騒動は今のところ悪い状況だ。こちらの想像を上回るように、あの手この手で奇襲をかけてきているのだ。

ワールウィンドさんがどれだけ強くても、奇襲を受ければそれは……

「階段……」

「さらに地下へ潜れるようだな。この調子ならば懐かしき大地まで降りれるかもしれないな」

「懐かしき……？ それより急ぎましょう！ ワールウィンドさんにもイシユの、ほら、戦いぶりを見せるためにほら！」

「その必要はない」

イシユの言葉はよくわからなかったため、流して救出に急がそうとしたがダメだった。さすがにチョロイシユ期間は終了……？

「いかなる芸術品であろうと、知性のない者には素晴しさを理解できぬものだ」

「……」

意識するとあれだろうか。

ワールウィンドなんてクライだから見たくもない！

って感じだろうか。

この様子だと下手に煽って急がせようとしてもなおさら動きが遅くなるかもしれない。やりすぎて怒られたら最悪捨てられない。

階段を降りながらできることは、ただただ悪い想像を頭から追い出すことだけだった。

碧照ノ樹海、地下三階。

冒険者ギルドで受け取った地図はおそらく調査が届いていた範囲。つまり、地下二階の途中までしか解明してなかった。今回の騒動で熊たちが壁を破壊してできた道、それが奥へと続く通路を作ったのか。なににせよ、この先は人は誰も足を踏み入れたことのない本当の未知の樹海だ。

ワールウインドさんの方が一足早いけど細かいことは置いておく。

「……」

「イシユ？」

いきなり立ち止まった。

まさか赤熊との戦闘よりもワールウインドさんに会いたくないという気持ちが強いのだろうか。そこまで毛嫌いしてないと思っただけども。

「熊の首領は赤熊ではないようだ」

「？」

「静かにせよ。どうやら我らには気づいておらぬ。どう動くか、少し様子を見る」

イシユの目には何か見えているようだ。

私にはイシユのしている方角は、草木生い茂るただの景色だ。

嘘をつく人ではない。となれば、赤熊よりヤバそうな熊がいるということ？

「少し近づくか。我から離れぬようにするのだ」

「は、はい」

赤熊よりヤバい熊。

赤熊は、奇襲だったとはいえ、イシユの腕をちぎるほどの力を持っていた。それよりも危険な存在がいる……

きつとイシユも警戒している。声音や口調こそ普段通り高慢だけど、いつもならズカズカと存在を主張しながら突き進んでいる。

幸い進行方向からの向かい風。私たちにおいては気づかれにくいはず。ていうか樹海の地下でも風が吹く意味がわからない。

不自然な音を立てないように、そして前を行くイシユから離れすぎないように慎重に進む。

「……」

「……」

あぶなかった。声が漏れかけた。

木々の隙間から、イシユが見ていたものが私にも見えたのだ。

森の破壊者や赤熊の倍以上の体躯。熊の魔物特有の、異常に発達した両腕。その両腕に釣り合うように全身を支える筋肉が遠目からもわかる。前のめりが基本の姿勢だった他の熊と違って直立していることも異常性を感じる。

明らかに今まで見た魔物と桁違いの存在だ。

あれも挑んではダメな存在だ。あれは捕食者だ。

異常な魔物は何かを見ているようだ。視線はずっと同じ方角に向けられている。

だからこそ私たちの接近に気づいていないのかもしれない。

木々のざわめきと獣の唸りだけが聞こえる中、轟音が辺りに響いた。

――！

……大丈夫だ、声を押し殺せた。バレてない！

なんだ今の爆発音みたいな馬鹿でかい音は。危うく悲鳴をあげか

けたじやんか。

今の轟音に反応したのは私だけではないようで、異常な魔物も音に反応したのか、動き始めた。

まるで大きく息を吸うように体を仰け反らせ――

「ひゃ――！」

空気の震えが見えそうなほどの咆哮をあげた。

距離があるにも関わらず、思わず耳を塞いでしまう激しい叫び。

「イシュ……今のなに……」

「我に獣……ときの考えなどわかるはずがない」

心臓が激しく音を立てている。耳奥がジクジクと脈打つのが感じる。

自分が生きているという証拠の音であり、命の危機を教える激しい警鐘の音なのだ、とぼんやり思った。

大咆哮の余韻が消えないうちに、ひとつ、ふたつと別の方角から咆哮があがる。

三つ、四つ、と咆哮の数が増えていく。

10を越えた時点で数えるのを止めた。ただ気が狂いそうになるだけだ。

今は逃げないと。ここにはダメだ。今だって危険なのだ。あれほどの数、いつの間にか後ろにいてもおかしくない。地下二階の熊の数でさえ兵士を壊滅させたのだ。その時を軽く凌駕する数だ。ここにいたら死んでしまう。

「アルメリア」

「……、…………！」

イシュと逃げないと。声を出したいのに声が出せない。自身の声が、熊に居場所を教えてしまうのではないか。居場所がバレたら死ぬ。死んでしまう。

「…………、…………！」

「……行くぞ」

「……………っ!？」

イシユはひどく哀れむような目をしたあと、来た道を引き返すことなく前へ足を進めた。

追いかけては、と思うが動けない。衣擦れの僅かな音を立てることすらこわい。

「…………アルメリア。汝は声が大きいだけの獣どもに、我が遅れをとると思っっているのか」

「…………」

イシユが振り返り私に声をかける。

私は動けない。声を出せない。

「我は天の支配者。地を這う獣ごときがいくら集まろうと敵になりえぬ」

「…………」

「汝は我を信じれぬか？」

なんでだろう。

それまではずっと不敵な表情だった。自信溢れる喋り方だった。

信じることができるかどうか、それを尋ねるときだけなんでそんなにも、寂しそうな顔になるんだ。

イシユを信じてついていくと、独りぼっちだった家から出るきつかけになったあの時に決めたじゃないか。

始めはただの直感と、体を治すためという打算もあった。

これまでずっとイシユは嘘をつかなかった。

信じることができるとは要素しかないのに、少し熊がうるさかったからって、信じれなくなるなんてどうかしていた。

「…………ごめんなさい、少し取り乱してた。でももう大丈夫」

「そうか」

ようやく声を出せるようになった。イシユがいるから大丈夫、なんて考えたからかもしれない。

それともうひとつ、動けるようになった理由がある。わかったことがある。これは知られたら否定されそうだ。いや、それどころか怒ら

れそうだ。

「イシユのことを疑うなんて、ありえないよ」
「それでいい」

イシユは——承認欲求の塊なのだ。

あ、間違えた。寂しがり屋なのだ。

思えばよく『この時代の者には我を信じられぬか』とぼやいていた。
アンニユイにもなっていた。

頼られること、信じられることが本当に嬉しいのだ。

そこに気づいた途端、先程の寂しそうな顔にすごく納得がいつてしまふ。

信用がなくなることがこわいのだ。

「……そういうところは見た目相応なんだから」

「む？ 何がだ？」

「なんでもありません、はい！」

あぶないあぶない。口から自然と漏れていた。バレたら絶対否定されたり怒られたりしちゃう。

「あれ？ あの熊っぽい大きいやつは？」

パニックになってしまっていて気づかなかったけど、いつの間にかあの魔物がいなくなっていた。

「奥へと消えて行った。気は進まぬが、あの男と合流する」

「あの男って……ワールウィンドさんの場所がわかるんですか!？」

そこにいる、と指で示すイシユ。

うん、私には見えない。

古代パワーと現代もやしの差は目にまで表れるということだろうか。

邪魔な葉っぱを払いのけて進むイシユの後ろについていく。

まともな道にようやく出れば、そこには言っていた通りワールウイ

ンドさんがいた。

「アルメリア、無事でなによりだ」

「ワールウィンドさんも！ よかったあ……」

いつも通り締めりのない顔のワールウィンドさん。この地下三階にいるということは、彼もあの熊たちの叫びを聞いているはずだ。

……もうちよつとキリツとした表情になれないのだろうか。

「汝は熊の主を見たか」

イシユからの問いかけで無くなりかけた緊張感を取り戻す。

そうだ、今は無事を喜ぶ場面じゃない。ヤバい魔物がいるのだから。

「いいや、俺が見たのは血の裂断者だけさ。やっぱりさっきのは本当のボスの吼え声だったのか」

「そういうえば、ワールウィンドさんは赤熊……血の裂断者を追いかけてここまで来たんですよね」

「あー、それなら……」

何故か言いよどむ。

これは……赤熊には結局逃げられたということだろうか。

この事は触れない方がいいかな。ワールウィンドさんのプライドのためにも。そつとしておこうか。

別のことを話そうとして、ワールウィンドさんの背後の惨状に気づいた。

「赤熊の、腕……？」

赤熊の腕だけが落ちている。

いや、腕だけではない。

腕から離れた場所には赤熊が、その体を大きく抉られている姿を晒していた。まるで内側から爆発させられたかのように、あたりに血肉をぶちまけている。

「汝がやったのか」

「まあ、ね。先に言っておくよ。これは俺の切り札だからおいそれと見せるわけにはいかないよ」

廃鋏の狒々も同じような死に姿をしていた。あの時もワールウインドさんの仕業だった。

人の技でこんな風にできるものなのか。

「それよりも、どうするか決めないか？ どうも相手の数はかなり多いみたいだ。一方の俺たちはここにいる三人だけ。俺としては一度報告に戻るべきだと思うね」

「数が多いといえど所詮は獣だ。ものの脅威ではない」

「君が勝手にやられるのはいいけど、アルメリアまで巻き込むのは見過ごせないな」

「我がやられるだと？」

死体を眺めている私の背後で喧嘩が発生しかけています。

「百歩譲って君が負けなとしても、俺たちの目的達成は難しいんだよ。敵の首領に逃げられたら無駄に終わる。逃げられないように包囲陣が必要だ」

「地下二階の兵士は壊滅した。森の破壊者相手にだ。あの街の兵の練度では包囲陣にもなりえぬ」

後ろの言い争いに参加するべきなんだろうけど、赤熊の死体が気になってしまう。決してグロッキーな姿に魅力がとかではない。ただの怪力や剣技ではない、何かが掴めそうな気がしたからだ。

「……中が、焦げてる？ 皮膚は焦げてない……」

「兵士だけでなく冒険者も募ればいい。熊の討伐ではなく包囲陣を組むためなら危険度はぐっと減る。それなら参加者も増えるさ」

「先の作戦が失敗している以上、集まるとは到底思えぬな」

「右斜めから一回斬りつけて……そのあとに体内に爆弾？ ってそれはないか……」

「それは君の考えだろ？ 実際はどうなるかわからない」

「その言葉、そっくりそのまま返そう」

「らちが明かないな……」

「汝が戻ることに我は何も言わぬ」

「俺だつて君が進むぶんには何も言わないさ。だけど」

斬撃は一回のみ……爆発する剣？ イシユのリンクフレイムの爆発するタイプみたいなの？ でもワールウィンドさんはイシユのような古代パワーを持っていないし……

「アルメリアを巻き込むのはやめるんだ」

「アルメリアは我の被検体。汝が決めることではない」

おおう、いきなり私の名前を出さないでください。

これ以上赤熊を観察してもわかることは少なそうだ。ソードマンが使う薬品をなんやかんやしたとかならさっぱりだし。

それより私も話に参加しないと。名前が出てることだしね。

しかし、私の所属ギルド的に考えたならリーダーはイシユだ。イシユの決定に従うものだし、私の意見は要らない気もする。

「ワールウィンドさん、私は大丈夫です」

ワールウィンドさんに私の意思を示す。

納得がいかないような顔をされた。心配してくれるのは嬉しいけども。

「アルメリア、無茶はよくない。その意思がイシユの機嫌を損ねないためとかなら、認めるわけにはいかない」

「そういうのも少しありますけど、無茶ではないですよ」

「何を根拠に……」

「決まりだな。我らはこのまま探索を行う。汝は街に戻るといい」

苦虫を噛み潰した顔とはこういうのを言うんだらうなあ。ワールウィンドさんの表情に申し訳なさがいっぱいだ。

「……、わかった。だが絶対に」

「無茶はしませんし、危なくなったら逃げます」

「……約束してくれよ」

「はーいー」

私の親ですといわんばかりの心配ぶりだ。

ワールウィンドさんは赤熊を仕留めた証として、千切れた腕を背囊

に入れて帰り支度を始めた。

「あ、そうだ。ワールウィンドさん」

「どうしたんだい？」

「ちよつと待つててください。熊のボスの姿を今から描きますんで」
街に報告するならばボスの特徴とかも知らせてもらった方がいいかもしれない。

隠れながら見たあの姿を忠実に、なおかつ簡易に描いていく。赤毛が髭のようになっていた。あと下半身も他の熊と違ってがっしりしてた。他には……

「上手いもんだね」

「いひひ」

「……」

「珍妙な笑い声だな」

「そ、そうですか？」

調子に乗った途端に手酷い言葉だ。褒めてくれたワールウィンドさんも無言になったということは、そんなにもヘンテコな笑い方だったんだらうか。ちよつと傷つく。

「……思えば、アルメリアの笑うところは久しぶりに見たかもしれないな」

「おお……しみじみ言われると照れ臭いです」

ワールウィンドさんはいったい何目線になっているのか。そうこうしているうちに完成した人相書き。人ではなく熊の魔物だけだ。

「ありがとう。それじゃ、俺は報告に一度街に戻るけど……助太刀ができるよう、なるべく急ぐよ」

「好きにするがいい」

「ワールウィンドさんも無茶しないように、ですよ」

「俺は無茶してもいいのさ」

なにそれズルい。

ふざけた返事だったが、その声音はいつもよりほんの僅かに沈んでいるような気がした。

ワールウィンドさんも街に戻ったことにより、今この樹海にいる人間は私とイシユのみ。

赤熊の死体を食うためにか、気づけば蠍の魔物が死体に群がっていた。

熊だけでなく、当然他の魔物もいる。

気を張り巡らせて挑まなくては。

「アルメリアよ、準備はできたか」

「へ？ あ、はい。いつでも？」

準備つて探索の準備つてことだよね？

「ではまず、この階層の地図を完成させる」

「ほへ？ 熊のボス探しじゃないんです？」

「それも兼ねる。だが、地形を知らぬままでは確かに逃げられかねん。よつて、地下一階にあつたような抜け道も探す」

それに当初の目的は熊探しではなく樹海の調査だ。とイシユは続けた。

つまりは地下一階の時のように、廃鉱の時のように、とりあえず探索しつつ地図を描きつつ、といった具合に初日のようにいけということか。

ただ初日と違うのは、

「では行くか」

イシユが私のペースに気遣ってくれている点だ。地図を完成させるため、そしてその地図をイシユも期待しているため。そんな思惑はあれど、これがなかなか嬉しい。

「ほへっー」

少し前に感じていたの怯えなどすっかりなくなった私は、軽い足取りでこの地下三階を歩き始めた。

16. 狩る者よ、狩られる身の恐怖を知れ

今いる地下三階は、やはり見た目こそ他の階層と同じ樹海だ。ただあの熊たちが原因なのか、いくつか今までと違った点がある。

違いのひとつは魔物だ。

空を飛べる梟の魔物、地上のあちこちにある穴に隠れることができ、
る蠍の魔物ばかりと遭遇する。

きつと身を隠す手段や空に逃げることができなければ、魔物たちも
熊にやられてしまうからだ。

そしてもうひとつの違いは、

「……水筒、いらなかったかな」

綺麗な水場が多いのだ。どれも飲み水として適した泉や川。果実
などもそこら中にあり、自然の楽園に近いものを感じる。魔物さえ
いなければ、だけど。

「まさに夢見た未来の一部だな……」

「生きていくだけならともかく、この環境は本とかがないと私には辛
そうです」

しかし熊にとっては最高の住居だろう。問題があるとすれば、樹海
に足を踏み入れる人間たちの存在か。

少しずつ奥へ奥へと探索範囲が伸びた結果、彼らの逆鱗に触れたの
だろう。

だからといって、引き下がる気はないけど。

歩きながらイシユが一本の剣の柄を右手で持ちだした。手に持つ
ただけで、抜いたわけではない。そのまま歩き続ける。

その姿を見て私も地図をしまう。ついでに鞆から水筒の水をごく
ごく。

これは少し前に決めたことだ。

獣ごとき、とイシユは舐め腐っているが、その油断によって兵士の

一団が全滅したのだ。

それにあの熊のボス。ワールウィンドさんの戦う様子を観察していたと思われる。赤熊の奇襲もこちらの気が弛んだ僅かな瞬間、最大戦力を削ぐのが目的のようにイシユのみを狙っていた。

これらのことから、熊たちはこちらの戦力や様子を探りながら襲ってくる。

熊が近くに潜んでいるのがわかったら、それとなくサインをすることにしたのだ。警戒していることがわかりにくいように。

こちらから追いかけてはダメなのだ。茂みの中を走る熊には追いつけない。誘い出すのだ。

メキメキと前方の木々が裂けていく。

飛び出てきた森の破壊者の顔に向かって、

「とりゃ」

火球の印術をぶつけた。

いるとわかったらこっさり準備するとも。杖がなくても起動はできるとも。

顔で起きる小規模の爆発に怯んだのを見て、ちよっぴり自画自讚したくなる。

しかし、すぐさま背後から乾いた破裂音が鳴り響く。それと同時にイシユが後ろに一足飛びし――

「屍を晒すがいい」

血の裂断者の脳天を剣で貫いた。

……何故そんな台詞が咄嗟に出てくるのか。

「つて、イシユ！ イシユ!!」

森の破壊者が火球の犯人である私に向かって走りよってくる。

「落ち着くのだ」

「ひゃあお!？」

片腕だけ飛んできた。

その腕は勢いのままに森の破壊者を殴り飛ばし、体勢が崩れたところをイシユ本体が斬り捨てた。

他の人の目がないからか、遠距離攻撃もばっちしである。

それにしても……

「襲い方がどんどんと工夫してきてますね……」

「……少しばかり、面倒なことになるかもしれないな」

突然物影から、なんて何度もあるが、少しずつ工夫が凝らされている。

今の襲い方なんて、わざと音を立てて注目させてから、本命は後ろの赤熊とか。ただでさえ魔物は人よりも力がある存在なのに、そこに知能までつけてきているのは理不尽だ。

幸いどうも、隠れるときに使う木などはハチミツでも潰けられていたのかといわんばかりの甘い香りを放っているのばかりだった。おかげである程度は潜んでいる場所がわかる。もつとも、時折それも囮だったということもあつたが。

「確かに面倒そうですね……今はなんとか先手をとれてますけど……」

「そうではない。襲い方が変化しているということは、我らも観察されていくということだ」

「あの、ボス熊に……?」

「わからぬ。だが、警戒が強まってきていると考えていい。このままでは我らの前に姿を見せず仕舞いになるかもしれない」

それならそれで、この階層を調べ尽くすだけではあるけど。

ただ、ずっと見張られているかもしれないとなると、かなり疲労がくる。

「地図の制作は順調か」

「はい、今はこんな感じですよ」

「ふむ」

普通に歩ける範囲は、残りは東側の探索をすれば完成だと思う。西

側は行き止まりまで調べた。抜け道についてはあまり見つからない。そもそもあるのかわからない。

「もうしばらくはこのままで行く。地図ができ次第、なんらかの対策をとる」

「はい」

「もしも奴らの首領に獣としてのプライドがあるのなら、何処かで襲い来るはずだ」

力で群れの首領となった獣が、縄張り荒らしに何もせず見ているだけとは思えぬからな。とイシユは続けた。

碧照ノ樹海は通常の樹海と違い、いくつか異常な点がある。

挙げていくと、地下なのに空があること。魔物の多さ。階段の存在。入り口の石碑。

そして今、追加で異常を発見。

「扉……」

人為的なものがこんな奥深くで見つかるなんて。

歴史学者とかではないからわからないけど、きつとかなり昔に作られたものだ。

材質は木、だと思う。自信はないけど。年月と共に風化しているのならともかく、今なお扉としての役割を果たすかのように佇む様は圧巻だ。

……さすがに熊がこの扉を作ってはいないよね？ 使ってもいいよね？

「何を呆けている」

何でもないかのようにイシユは扉に手をかけた。

もつとこう、扉があるということにリアクションをしてくれてもいいんじゃないだろうか。

「こんな奥深くで扉ですよ。何かこう、あからさまに怪しすぎて畏れなんじゃないかって思うじゃないですか。侵入者を排除するための」

「逆であろう。年々変化していく景色に左右されないものとして、目印となるものだ。それに、この樹海に手を加えた者たちがなんらかを残している可能性が高い」

そう言つて扉を開けていく。

中の景色も今までと変化はない。そもそも扉はあれど、天井があるわけでも人工的な壁があるわけでもない。自然の壁ならあるけど。とにかく本当に目印としての機能にしかなくていなさそうだ。

強いて変化を言うならば

「見晴らしが随分といいですね」

広々としているのだ。木は数本程度しかなく、まったく視界を遮ることはない。隠れる場所などない。

あれ？ この広間の奥にあるのは……あれって……

「入口にあつた石碑と同じ紋章……？」

イシユは特に同意の言葉を返してくれなかったが、紋章に誘われるように私たちは広間の奥へと進む。

この訳のわからない樹海に残された手掛かり、それがようやく見つかったのだから。

突然背後から、何か大きなものが倒れる音がした。

すぐに後ろを振り向く。一瞬音による誘導で、別の場所から襲われるのではと頭に浮かんだが、この見晴らしのいい広場なら隠れる場所はない。

「ボス熊……！」

「……随分と乱雑な封鎖だな」

そこにいたのは、他の熊の魔物よりも一回り以上大きいあの熊だった。

そばには巨木が倒れている。どこから持ってきたのか、それとも近くにあったのを倒したのか。

とにかくその巨木を使って……扉を封鎖されていた。

「我が逃げるとでも思っているのか？ 所詮は獣か」

イシユが警戒していたのは死角からの奇襲。ただどこうも姿を現してくれたら危険はかなり減る。イシユには、だけど。

私にとつては脅威そのものだ。できることといえば、イシユの邪魔にならないように少し離れること。

ボス熊は大きく体をのけぞらせて――

「――っ!!」

巨大な咆哮をあげた。

あの時と同じように、その咆哮に応えるようにいくつもの咆哮がある。

しかしあの時と違う状況が作られた。

「森の破壊者に……赤熊まで……イシユ！ ひよつとしてあいつ、仲間を呼んだのかもしれない！」

「見ればわかる。だが所詮は獣だ。群れの頭を潰せば散り散りになるだろう」

木々を裂きながら、茂みから飛び出しながら、次から次へと熊の魔物が現れてくる。

ひよつとしたらこの階層中の熊が向かってきているのかもしれない。

どんどん増えていく熊に見向きもせず、イシユは剣を構えてボス熊を睨む。

それに対してボス熊は……

茂みへと潜っていった。

え？ 逃げた??

「な——！」

イシユの焦ったかのような声が聞こえると同時に、周囲の熊が雄たけびをあげながら駆け寄ってくる。

「あの獣めが！ 物量で押しつぶすつもりか！」

「ズ、ズルくないそれ!？」

群れのボスの癖に自分は安全圏で観察とかズルすぎる。文句を言ったところで当然熊はそれに応えない。しかしついつい口から出てしまうのは仕方ないことだと思う。

同時に襲ってきた三頭の熊をあっさりと斬り捨てるイシユの姿を見ても、周囲の熊はひるまずに襲い来る。

同種がどんどんとやられているのに、ボスの命令には絶対服従という熊の縦社会なんて潰れてしまえ。

「ひっ！ とやあ!!」

当然、すべてがイシユに向かっていくわけではない。近くまで走り寄ってきた森の破壊者に一瞬怯んだが、火球をぶつける。でもダメだ。私の力では全然倒すに至らない。

「アルメリア！ おのれ、しつこい獣どもが！ キリがない！」

「あ、ありがとう！」

眼前まで迫った森の破壊者をイシユが戻って攻撃してくれた。

しかし不味い。イシユから距離が空けば、私はあつという間に死ぬ。だけどこのままではイシユは防戦一方だ。イシユが息を切らしたところや疲れたりするところを見たことはないが、無尽蔵というわけではない、はず。熊が諦めるか、イシユの体力が尽きるか、そんな勝負になってしまう。

私の存在が今、足を引っ張っている。

「美しい陽光」

一頭の熊を焼き斬っても、どんどんと別の熊が乱入してくる。

熊相手に予想を裏切られたせいかな、イシユがイラついているのかいつもより炎が激しい気がする。

このままではいけない。どうにかしないと。

落ち着くんだ、私。

イシユがここから離れられないのは私と熊たちがいるから。

熊たちの統率を無くすには逃げたボス熊を仕留める必要がある。

それならば！

「イシユ！ 私をおぶりながら、あのボス熊を探しましょう！」

うん。

我ながらすごい最低な提案だ。

恥もへつたくれもないかのように言ったが、私としても本当は恥ずかしいのだ。だけど命に代えられない。

その提案をイシユは、

「ならぬ。あの主は我をひどく警戒している。我が探しに向かったところで、その分だけ距離を取る」

「即座に却下してきた。
熊の攻撃を躲しながらそのまま続ける。」

「……おそらくあの主は近くからこちらを窺っている。この熊どもが命令に忠実なのがその証拠だ」

「ふりゃあ！ は、はい！」

火球以外の術もちゃんと勉強するべきだった。目くらましにしか
なっていないのが悔やまれる。

私の戦いぶりを見てなのか、やけに嫌そうにイシユは言いだした。

「……………ひどく気は進まぬが、誠に気が進まぬが、アルメリアよ。我
の言葉をよく聞くのだ」

「は、はい……………」

何その嫌そうな前置き。

いったいどれほどの時間を戦っているのか。

何頭も仲間がやられて、意気消沈することもなく熊たちは襲い来
る。いや、意気消沈するどころではない。より激しく、まるで今こそ
攻め時なのだといわんばかりに。

肉薄する赤熊が爪を立てて大きく振りかぶる。

イシユはその一撃を避けようとしたが、体をよろめかせてしまっ
た。

集中力が途切れたのか、体力が尽きかけているのか、それは明確な

隙となった。

回避ができず、迫る凶爪に対して、左手で体を庇うように構えた。

——その左手は宙を舞い、私の隣に落ちた。

「ひ、ひえー」

気が動転した私はその左手にすがるように、悲鳴をあげながら拾ってその場から逃げようとする。

残されたイシユは右手だけでもなお、他の熊に応戦しだした。

「ひええー。おたすけー」

私はその姿を見てもなお、そこから遠ざかって逃げだした。

本当にこれでいいのだろうか。

いや、今は逃げなくては。余計なことを考えずに逃げなくては。

倒木で封鎖されてしまった扉の元まで走る。なんでかやたらと抓ってくる左手を無視してひたすら走る。いったい何が不満だというのだ。

とにかく一本の倒木による雑な封鎖だ。なんとかして隙間から出ようとするなり、足場にして飛び越える振りをするなりすればいいんだ。

そうすれば……

「……」

逃がす気はないとでも言うのか、私のひ弱さを見た結果、この程度なら問題ないと判断したのか。

イシユとの距離が大きく離れていることもあるのだろうか、と思う。

髭のような赤毛をした巨大な熊、この樹海の魔物の頂点で、多くの兵士や冒険者を犠牲にさせた元凶。ボス熊がついに姿を現した。

「とやっ！ うひゃ!？」

火球の印術をその髭面に向かって飛ばす。

小さな弱い抵抗だ。無力感を与えるためか、避けることもせずにも口に顔に直撃した。

……しかし余裕たつぷりな姿は長く続かなかった。全く続かなかった。

「驚きすぎて口があんぐり、みたいな顔を予想してたのに……」

私の予想も、熊の勝利予想も当たらなかったようだ。

……まさか、豪快に倒れるほどの威力とは思わなかった。

熊たちのボスが倒れたことよって、一瞬の静寂が訪れる。イシユに襲いかかっていた熊たちがこちらに注目しだしたのだ。

倒れているボス熊はさすがにそれで終わりではなく、すぐさま起き上がりはしたが……

「なかなか上出来ではないか」

ボス熊の両足に、雷を纏った斬撃が深く入る。

これで逃げる足は潰せた。

「あんなに勢いよく飛び出すとは思わなかったんですけど！ ちよっ

とびつくりしたんですけど!」

「何度も見たことがあるだろうに、何を言っている」

地に腕をつけているボス熊は、何が起きているのか全くわかっていないのだろう。

私も少し前なら同じ気持ちになっていた。

「あ、あんぐりした表情だ」

「ふむ、知性の欠片もない間抜けな姿だな」

倒れている横をズルズルとひとりでに動きだした、イシユの左手を見て口があんぐりしている。

その姿に今まで溜まっていた不満が少し解消された気がした。

最初にボス熊が倒れた理由は、イシユの左腕に殴り飛ばされただけなのだ。

「しかしアルメリアよ。汝、やはり狙撃の腕前はなかなかのものだな」
「狙撃で。言われた通りイシユの腕先を熊の方角に向けて投げただけだから」

「見事に直線先が私の希望通り鼻だったのだ。誇るがよい」

「はあ」

イシユの飛ばす腕は真っ直ぐしか飛ばないらしい。その狙いを私につけるように言われていたけど、なんとも素直に喜びにくい褒められ方だ。いつ時代だ。あ、古代か。

「だがもう少し、あの棒読みはなんとかならぬのか……」

「んなっ! 何おう!」

ボス熊を油断させておびき寄せるためのイシユとの演技。それには不満なようだ。

だけどイシユだって演技とか下手そうなくせに。イシユにはセリ

フがなかったからよかつたものの。

他の熊たちは未だに混乱中なのか、それとも自分たちのボスが劣勢で逃げるべきか悩んでいるのだろう。一頭もこちらに来ずに固まっている。

窮地に追い込まれ、仲間が助けに来ないとわかつたからか、状況を打破するためか。

大きく吠えながらボス熊は、腕の力だけでイシユに攻撃を仕掛けようとし――

「山行水行」

片腕を斬り飛ばされた。

ボス熊の悲惨な姿を見て、とうとう他の熊たちは四方八方に逃げ出した。

広間に残ったのはいくつもの熊の死体と、瀕死のボス熊、そして私たちだけとなる。

まともに動くのは片腕のみ。

念のため斬り飛ばされた腕の方を見たが、イシユと違って動く様子はない。まあ当然だけでも。

残った片腕を震わせながら動かし、じわじわと……離れようとしている。今までの姿隠しと違い、今度は本当に逃げようとしているのだろう。

「死して灰燼と化すが良い」

イシユは激しく剣を燃え上がらせて、その熊の命を完全に断った。

碧照ノ樹海の最大の脅威だった魔物の最期は、怯えながら逃げよう

とする哀れな姿だった。

17. 歓喜の中、遠き日の面影

ボス熊もいなくなり、辺りからも熊の気配はなくなった。

残すは数多くの魔物の死体と、入口の石碑と同じ紋様をしている祭壇のような奇妙な物体だ。

イシユは熊たちにうんざりさせられたようで、軽くため息をつきながら紋章に向かっていく、

一方で私は……

「絶対このボス熊の素材つて希少性高いよね……っていうか赤熊も新種だし、素材として高く売れるんじゃないか……いひひ……」

金策に夢中になってしまった。

でも仕方ないじゃないか。イシユにはいい剣を使ってもらいたいし、冒険するだけでなく生活にも色々とお金は大事なのだ。冒険者の収入なんて素材売却しかないのだ。

それに私は古代の知識なんて全然ないのだ。ほんの少しばかり古代文字が読めるけど、古代人であるイシユがいるなら私の読解力なんてたかが知れている。

正直どの部位を持ち帰ればいいのかさっぱりわからない。

そういえばワールウィンドさんは赤熊の片腕を持ち帰っていたっけ。

イシユによってこのボス熊も片腕を斬り飛ばされたことだし……ダメだ。片腕だけでもかなり大きい。

そもそも腕なんて素材になりえるのだろうか。筋肉だし、というか森の破壊者は爪とか牙が素材だったことを考えれば、このボス熊も爪を持ち帰ればいいか。

異常なくらい人差し指に該当する部分の爪が鋭く長いし、もはや鉤

爪だこれは。

同じように他の熊の素材も回収に回る。

ほんの一部だけを剥ぎ取るのも、結構体力を使ってしんどい。

「……………私の知っている冒険者たちに似てきたな」

「絶対明日は昼まで寝よう。絶対に熟睡しよう……………つて、イシユ。紋章について何かわかりました?」

イシユはハイ・ラガードから来たことを考えると、私もハイ・ラガードの冒険者に似てきたということだろうか。褒められているのか悩ましいところである。イシユの知っている冒険者って他人の家に巨木の枝を落として破壊したって前言ってたし。

「なんらかの文字が書かれていたようだが、ほとんど風化していて読むことができぬ。紋章についてもわからぬままだ」

「え……………ここまで来たのに……………」

「だが安置されていた場所と石碑を考えるに、なんの意味もないということにはならぬだろう。谷の石碑は何かを嵌め込めるかのような窪みがあった。大きさ的にもこの石板と一致している」

そう言つて祭壇から取ってきたのだろう。

石碑と同じ紋章の石板を両手に持つて見せてきた。

「……………なんか変な石板ですね」

「うむ。ただの石板ではない。谷の石碑と似た何かを感じるが……………そうか、汝は谷の石碑は見ていなかったな」

「印術に近い何かでしたっけ」

イシユの時代になく、そして今の時代でもない何か。

ただ単純に材質が違ふとかなんかじゃない。

「紋章だけでなく別の共通点を持つ石板だ。安直ではあるが、これなんの意味もないとは考えにくいからな」

「じゃあじゃあ! もしかしたら谷を超えることが可能なんですね!?!」

「うむ。すぐにでも石板を嵌めたいところだが、一度街に戻る」

「辺境伯への報告ですね!」

それもあるが、と言つてイシユは剣を抜いた。

「新たな剣が欲しい。刃こぼれがひどいどころか、刀身にヒビが入っている」

「か、かなり酷使しましたしね……」

まあ剣のひとつやふたつ、きつとこの素材を売り払えば軽々と払えるはずだ。

やることもやったし、碧照ノ樹海からおさらばしよう。

ちなみに扉を封鎖していた倒木は、イシユが動かしてくれた。

気球艇ノアまで戻ると、丁度ワールウィンドさんの気球艇がやってきた。

落ち着いた緑色というよりは苔生した緑色って感じがする気球艇だ。

そういえばすぐに応援に向かうって言った。よかった、すれ違わなくて。

手を振って呼びかける。

「ワールウィンドさん！」

「アルメリア！ それにイシユまで……ということとは、魔物の首領は倒せたのか？」

ニヤけている表情以外のワールウィンドさんはなかなかレアである。

軽く驚きの表情が少し心地いい。

「はい！」

「驚いたな。まさか二人で倒すなんて。これから報告に戻るのかい？」

「はい！ ボス熊も倒しましたし、そして北の谷を超えられるかもしれないですよ！」

「……！」

わずかに目を見開いて驚きを見せてきた。

それもそうだろう。何年も、おおよそ10年近く樹海の調査がされていたのに、この街に来てわずか数日のイシユが谷を突破する手段を

見つけ出してきたのだ。

これはかなりの偉業なのではないだろうか。

「……」

「？ ワールウィンドさん？」

「あ、ああ。いや、ちよつと驚きすぎてね。そうか、これでようやく、谷をひとつ超えることができるんだね」

「はいー！」

なんだかワールウィンドさんとこんな風に話しているのが奇妙な感覚だ。ここ最近ではワールウィンドさんとイシユがいつも喧嘩ばかりしていたし、というかイシユがやけに静かだ。なんでだろうか。

「アルメリアよ。早くノアに乗るのだ。出発するぞ」

「どーりで静かなわけだ!!」

私とワールウィンドさんそつちのけで出発準備を進めていたとは。

「それじゃワールウィンドさんも、タルシスに帰りましょう！」

「そうだね。もうこの樹海に用はないし、タルシスに行こうか」

タルシスに戻って私たちを最初に襲ったのは、ウイラフさんを筆頭にしたもみくちや軍団だった。

「アルメリアー！ イシユ！ 獣王ベルゼルケル相手に無事でよかったです！ 特にアルメリア、無事でよかったです！」

「ウイラフさんすごい痛いです。ハグの力加減間違えてます痛いです、痛いです」

「あ、ごめんごめん。そんなに力を入れたつもりはないんだけど……ごめん！」

体表の植物が変に服の中でひっかかったり絡まったりして痛いというのが大きいかども。でも結構力強かったし間違いいではない。

ウイラフさんの他にも兵士や冒険者が何人も出迎えて口々に賞賛してくれた。その中にはキルヨネンさんもいる。

「まさか二人だけで樹海の脅威を排除してしまうとは、僕も君たちを見習わなくてはいけないな」

「素直に無事でよかった、おめでとうって言いなよ。キルヨネンつたら」

「それはもう君が言ってしまっただろう」

あ、キルヨネンさんの性別についてウイラフさんに聞いてもらわなくては。でもどうやって切り出そう。

「お前たちがあの熊どもを倒してくれたんだな……！　ありがとう、本当にありがとう！」

いつそ私もドストレートにキルヨネンさんに尋ねようかとしたら、兵士のひとりが私の手を持って涙を流しながら感謝の言葉を告げた。

そこまで感謝されるのは、少し居心地が悪い。きつと仇討ちをしてくれたことへの感謝なのだろうけど、ほとんどイシユがやったのだからイシユに思いつきり感謝してほしい。私は付属品みたいなもんだから。

「私よりイシユに……ほとんど、というか全部イシユが倒したので」

「我は感謝など不要だ」

「受け取りましょうよそこは……」

これが謙遜とか遠慮とかでなく、ただ面倒くさいという気持ちから出てるのがすごいわかる。表情が隠す気ないのだ。

「ならば汝が受け取るのだ。我と同じギルドでもある。それに、群れの主を追い詰めた切欠は汝が作りしもの」

「あの名演技のことですね」

「……」

「どちらでも構わないさ！　お前たちのおかげで死んだいった奴ら少しは報われる。だから、本当にありがとう！」

「うひゃあ！　痛い！　鎧が痛い！」

「……………勝手に感謝しているがいい」

私とイシユを同時にハグする兵士さん。一步間違えれば事案だと

思うんです。女の子二人を急に抱きしめるなんて。それに鎧も痛かったし……まあ、それだけ感極まっていたのだろう。

それからも称賛は止まらない。握手だのハグだのもみくちやにされるので私は必死である。主に服がはだけないように必死である。イシユはイシユで複雑そうな顔をしながらされるがまだだった。

いつまでも続きかねないと思ったので、辺境伯への報告しに行かなくては、と言って逃げるように集団から抜け出した。

「あはは、大人気だったね二人とも！」

「ウイラフさんを皮切りに押し寄せてきた感じがするんですけど……というかボス熊を倒したってどうして伝わったんでしょう……」

「そりゃ私が先に言ってたからだよ」

「気が早すぎじゃない!？」

ウイラフさんがなんでもないかのように言うが、明らかに気が早すぎる。着いてすぐにあの称賛出迎えたことを考えるに、私たちの様子を見てから言いだしたわけではないだろう。

「いや、確信はあったからね。イシユの力も知ってるし、ワールウインドが助太刀に行くって言って出発したのに、すぐにあなたたちの気球艇と戻ってきたんだもの。助太刀なしで倒して帰ってきたんだなってわかるよ」

「それなら、まあ……」

「つと、統治院まで来たことだし、私は宿に戻るよ。それじゃ二人とも、また今度話を聞かせてね」

ウイラフさんと別れて、ようやくマルク統治院前である。

つい数日前まで完全に無名だった私には、あんな空気は尻込みしてしまう。イシユも騒がしいところは苦手なイメージがあるんだけど案外おとなしかった。

まあ性格的や言動的に褒められ慣れてなさそうだから、色々戸惑ったという線が濃厚だけど。

辺境伯の執務室。なんだかかなり高い頻度で来ている気がする。
扉を軽くノックする。

「アルメリアです。報告に来ました」

「はいりたまえ」

扉を開ける際、念のため警戒である。自意識過剰かもしれないけど、なんかこう、さつきやたらともみくちやにされたから辺境伯もそうなるのでは、という警戒心がちよっぴり芽生えたのだ。

「？ アルメリア君、どうしたのかね？」

「あ、なんでもないですはい……」

突然のハグなどなかった。

「ふふふ。ここに来るまで熱い歓迎を受けたりして警戒したのかね？」

私も同じことをしたいところだが、執政者としてはそうもいかな
い」

「執政者でなければ同じことをしていたというわけか」

「もちろんだとも」

「……奇妙な者たちだ。それよりも報告を済ませたい」

執政者として、私事だけでなく公的な場でも犬を抱き連れているのは
どうなのか。

そんな疑問が僅かに浮かんだけど無視をする。

「では聞かせてくれるかね？ 諸君が樹海で見聞きしたことを！」

それから私たちは辺境伯に碧照ノ樹海での出来事を話した。

私が描いたモンスターの図や特徴、地図を交えて色々。ちゃんと
した報告の形を成してたかはわからないが、辺境伯はひとつひとつ相
槌を打ったり質問をしたりと、それはもう楽しそうに聞いていた。

ミッシヨンの報告ではあるが、ひとつの冒険譚のようにも聞こえる
内容なのかもしれない。

「ワールウインドから獣王ベルゼルケルの存在を聞かされた時は本当に気が気でなかったが、そうか。諸君が力を合わせて倒したのだな」
「獣王？ ベルゼル？」

「獣王ベルゼルケル。忘れられた動物記と呼ばれる本に記されていた存在だ。その名の通り、獣の王と称されるほどの力を持つと恐れられていたが、諸君の力の前では王にはなりえなかったようだな」

獣王ベルゼルケル。

ボス熊とか呼んじやってたけどそんな立派な名前があったとは。

「それにしても、扉に石板、祭壇か……うむむ……」

「この石板は我が預かろう。明日には谷の石碑に合わせる」

「任せよう。祭壇の方は兵と識者を送り調査させる。諸君が脅威を排除してくれたおかげで、より詳しくわかるはずだ」

石板を鞆にしまい込み、イシユは席を立った。

「我から話すことは以上だ。我はベルンド工房へ向かい剣を探す」

「あ、はい。ってそれなら私も」

「汝はまず家に戻って睡眠をとれ。今朝のような失態を繰り返しかねん」

「う……」

そう言つてイシユは鞆を持って退出していった。私の鞆なんだけどなー。まあ素材とか入れて共用で使っているようなもんだけど。

イシユが去つて行った扉に目を向けていたら、辺境伯が小さく笑い声をあげていた。

「アルメリア君がイシユと冒険に出ると決めた時は不安だったが、良好な関係のようで安心した」

穏やかな表情を浮かべている辺境伯。

今ので良好な関係に見えただろうか。なんだか寝坊助呼びわりさされただけのような気もするけど。

「生まれた場所も時代も、全く異なっていようとも、手を取りあうことはできるのだな」

「できるんでしょうけど、やっぱり困難な気がしますね」

イシユと辺境伯の最初の邂逅を思うと素直に領けない言葉である。
いや、それを乗り越えたからこそ言える言葉なんだろうか。

「それじゃ私もそろそろ帰ります。明日も寝坊したら何を言われるか……」

「そうしたまえ。だがその前に今回の報酬を渡そう」

報酬。

そうだった。報酬のことをすっかり忘れていた。世界樹への道が開けるかもという興奮のせいだ。だけど忘れていたからこそ、よりお得感を感じてしまうのはなんでだろう。

「お金と……本？」

「金銭だけでは味気ないと思ったのだよ。君とイシユが成し遂げた偉業を考えればこそだ」

「はあ……」

しかしこの本はなんだというのだ。

一冊だけじゃなく四冊も。

「術式書……？」

「谷を越えることができても、冒険はまだ続くだろう。ぜひとも役立ててほしい」

「あ、ありがとうございます！」

術式書は本当にうれしい。

もともと入手が困難なもので、行商が時折商品として持ってきても高くて手が出せないものらしい。おかげで大多数のルーンマスターは知りあいのルーンマスターに術式書を見せてもらうなど、ある程度コネが必要になってくるのだ。

私は辺境伯から借りた本に火の術式書があつたので扱えるようになったが、それ以外は辺境伯も持っていなかったため火球のみとなつてしまった。

だけどそれもこれまでの話。

これからは火球以外を扱えるというもの。いひひ、三属性を扱えるルーンマスターになる日も近い。

四冊の術式書を大事に抱え、辺境伯に何度も頭を下げながら家路へ

とついた。

はずむ気持ちをこらえながら部屋まで本を持っていき、ベッドにダイブ。

寝転がりながらの読書としゃれこむのだ。

「まずは……おおお。爆炎の術式書！」

火球なんかとは比べ物にならない炎の術式だ。

ただ強力な分扱いも難しいと言われていているもの。炎の範囲が広いから精密な制御が要求されるのだとか。

「他の術式書は何かなく」

鼻歌が自然と出てしまいそうだ。良かった。イシユと別行動中で。鼻歌が出てても今なら問題ない。

「お、おおおお！ 却火の術式書！」

火球なんかとは遥かに異なるレベルの炎の術式だ。

ものすごく強力だが、術式書を持っていてもそもそも扱える者は一握りだとか。術式が複雑すぎるのだとか。まあ今の私にはまだまだ早いだろう。爆炎の術式を理解出来てから少しずつ解読していこう。

「爆炎も却火も扱えるようになったら、ウルカヌスの印術師を名乗れちやうなく。いひひ。あとの二冊は……」

ウルカヌスの印術師。

炎を専門としたルーンマスターのことを言うらしい。特に何か認められたりする必要はないので、火球だけでもそう名乗ることは可能だけど、やっぱり火の術式全般を扱ってこそだと思う。

「……火球の術式書。ダブったかあ……」

まさか四冊中の三冊が火関係とは。

ということに残り一冊では三属性を習得は無理だ。まあ仕方ないか。

「……なんでこれだけ表紙ボロボロなんだろ」

ボロボロの表紙。何度も何度も読み返されたのか、溝はゆるゆる、背もわずかに千切れている。よくもまあ原型が残っているものであ

る。

かすれているタイトルは……

「……凶鳥烈火の、術式書？」

聞いたことない術式書だ。

悪戯で適当に作られた術式書の可能性もあるが、ボロボロに読みこまれた様子を見るとそう断言するのは難しい。

だけどひとつだけ思うことがある。

「四冊全部火つておかしくない!？」

「何を騒いでいるのだ……」

「あ、おかえり……ちよつとね……」

イシユが丁度戻ってきたようだ。

もつとバランスよく本を仕入れてほしかった……

翌朝、いよいよ谷を越えられるかもしれないという話が広まったのか、街門は多くの冒険者が集まっていた。

石板を持つ私たちの出発後、自分たちも谷越えを行う算段らしい。

一番槍は譲ってやるよ、みたいなことを言われたりもしたが、何が待ち受けているかわからない未知の世界だ。一番槍は一番危険な気がする。

谷の石碑がある場所に気球艇を着地させて、嵌め込むときがとうとう来た。

「世界樹を目指し初めて冒険者を集めたのは、確か10年前になるんですよ」

「む？」

イシユは突然語りだした私に少しだけ視線を向けた。

10年。

気球艇の普及こそは4年、いや5年だったかな。だけどその前から世界樹への道を探されていた。

ずっと谷に阻まれていた。草原の魔物に阻まれていた。樹海に辿りつけるのも僅かだった。

イシユという古代パワーがあつたが、それまでの積み重ねも無意味じゃないと思う。そう思うとなかなか感慨深く……

「うひっ、まぶしっ」

「雲が払われたな。これで谷の問題もない」

「……いいですけど」

イシユが石碑を嵌め込むと突然石碑が発光し、思わず目をつぶってしまった。

そして全身で感じる強い風が吹き荒れ、再び目を開けたころには谷の濃雲はなくなっていた。

……勝手に感慨深くなってしみじみしてただけだからいいけどさ。そんなあつさり嵌め込まなくてもいいじゃないか。私がなんかこう、シリアス気味に語りだしたのに。

わずかに不満気な私を無視してイシユは気球艇に乗り込む。

早速出発して谷を越えるのだ。

しかし、気球艇に乗り込みながらイシユは言った。

「今後の研究や調査に、10年も年月をかけるつもりはない。汝の体が完全に蝕まれる前に世界樹に辿りつき、求めるものを手に入れる。私の言葉は絶対である」

くそう。

かなり嬉しく感じてしまった。

気まぐれなのか、ただの言葉の綾なのか、はたまた単なる自信の表現か。なんにしろ、私の体のことも言ってくれるとは全く思ってたな

かった。

はやく乗れ、と急かされて慌てて乗り込む。もつとこう、感慨深く今の言葉を噛みしめさせてほしいところだ。

「はい！ 信じてますから！」

第二章

18. 瘴気の中で出遭う異種

風馳ノ草原の北。

ずっとタルシスと世界樹を阻んでいた深い谷。その谷の中を気球艇で進んでいく。

北からの向かい風がやや強く、風馳ノ草原に吹く風は本当に世界樹からの風と思えてしまいそうだ。

そんな谷を抜けた先にある景色は、

「ずいぶん違う景色ですね……」

大地は赤く、その上に草木が生い茂る。緑と赤の合唱である。ちよつと不気味。

そして四方には遥かに高い山が囲んでおり、そのせいで日の入りが少し悪い。日照時間が少なそうな土地だ。

とはいえ、植物は遅しく生い茂り、地上に何匹も生き物が走り回っている様子を見ると、決して悪い土地ではなさそうだ。

西側には川が流れている。きつと生き物たちの大事な水分補給場だ。となれば、人間にも大丈夫なはず。

気球艇ノアは北へ北へと進む。

た見え見慣れぬ土地であっても、そもそも目的地はずっと見えている状態なのだから。なんせ世界樹は大きいのだから。

しかし……

「……」

「……」

「……絶壁ですね」

「……ノアの浮力ではこの高度が限界か」

どこから回り込もうとしても、壁が阻む。壁と言うか自然が作りし絶壁というか絶崖というか。

「ど、どうしましょう」

最悪崖をよじ登る、だろうか。

羊の魔物がひよいひよいと崖をよじ登っていく様を見ながら思う。

絶対無理だ。私には無理だ。

「アルメリア、舵をしばらく握っているのだ」

「へ」

「我は球皮の開口部を見てくる。虹翼の欠片の生み出す浮力で足りぬのであれば、熱を送り上昇を試みる」

「へ？ いや、あの？」

「操舵しろというわけではない。ただ握っているだけでいい」

「え、あ、ちよつと！」

そう言っただけでイシユはノアの支柱をひよいひよいと登っていった。

……ま、まあ、声を出せば届く距離だ。

それに握っているだけでいいのだ。そんなすぐに墜落することはないはずだ。そうだ、だから大丈夫。

舵を握るのは交易長の指導以来だ。

結局私は操縦しないように、と言われたあの日だ。

「なんだか冒険譚の主人公みたい」

舵を握るだけでそんな気持ちになれてしまう。

まあ冒険者だし、実際冒険譚とか作れそうだけど。

気球艇の球の方からいつものイシユの声が聞こえた。美しき陽光と言うのはお決まりなのだろうか。

その瞬間、気球艇が大きく揺れた。

「な、なに今の!? あ、やばっ」

なんかよくわからない杖っぽいのを動かしてしまった。なんだろうこれ。聞いたことはあるはずなんだけど、なんだっけか。

必死に思いだそうと謎の物体を睨んでみたが、思いだせない。思いだせないのなら仕方ないと、顔をあげれば、

「ひよあー！ い、イシユーー!!! はやく、はやくー!!!」

「騒がしい、いったいどうし——何をしている!?!」

景色が上へ上へと移動していく。

高度が下がっているのだ。そして目の前は絶崖の壁。

「なんか揺れて！ 杖にあたって！ そしたら気づいたらー！」

「舵から手を離さぬか！ ……おのれ、止むをえまい、一度着地させる
！」

「深く反省しております」

「当然だ」

イシユは少し機嫌悪そうにしながらノアの点検を行っている。私
はじっとしていろとのこと。

着地させた場所は暗い森だった。

崖に挟まれるように存在しており、ものが見事に日が当たらない。
そして何よりも

「この森、臭い……」

ひどい臭いがするのだ。服とかに染みつかないか心配だ。

「イシユー……早く出発しましょう。ここすごく臭い」

「くさい？ どのような匂いなのだ」

「どのようなって……ウツ、ってなるような……」

「……まあよい。出発はまだだ。少しこの森を調べる」

「ええー！」

こんな臭い森を調べたくはない。ないけど、イシユが決めたことだし従うしかない。

靴からとりあえず地形を描くためと、魔物がいる場合メモするためにと、二冊本を持ちだす。あとはワンドとナイフと……

準備ができたのでイシユに声を掛ければ、いつぞやの如く、近くの水場に手をつけていた。

「イシユ？ 準備できましたよ」

「む？ そうか。汝の引き起こした事故もなかなか面白い事態を呼ぶな」

「へ？ っていうか、臭……」

どうやら今回はただ手を水につけていただけではないようだ。

イシユの手には小さな青い石がいくつか握られていた。

「やはりこれが臭いの原因か」

「なんですか、それ……」

「鉱石の一種だろう。ただの鉱石ではなく、虹翼の欠片と似た性質の鉱石だ。気体を発生させるようだが、その気体が臭いの原因であり、先ほどの大きな揺れの原因でもあるのだろう」

「はあ……」

あの揺れってイシユの陽光のせいだと思ってた。

「なによりも重要なのが、発生させている気体の浮力が高い。これを気球艇に組みこめばより高く飛べるはずだ」

ということは、よじ登る必要はない？

これはあれか。棚から牡丹餅か。なんにせよ躓いたと思った冒険が、案外スムーズに行くということだ。

「できるだけこの石を多く回収して持ち帰る。そのためにもこの森を探索する」

「はいー」

そうとわかればやる気もはるかに上がるものだ。

この程度の臭さなんてへっちゃらだ。

「この森は動物どころか魔物も全然いませんね。やっぱり臭いのは魔物にも辛いんでしょうか……って言ったそばから魔物……」

キノコ型の魔物を発見したが、イシユにとつてたいした脅威ではない。

ていうかキノコが歩く姿って案外かわいいかもしれない。

そんな可愛い姿を見せようとも、イシユの剣は一切鈍らずキノコを斬った。

斬った途端にキノコから胞子が舞う。

「うげえ……イシユ、大丈夫ですか？ 胞子がすごかったですけど」

「問題はない。繁殖のための胞子というよりは、外敵を減らすための胞子のようだ」

「それって問題なんじゃ……いや、どっちもよくないけども、キノコが体から生えたりとかホラーなのはやめてくださいよ」

「私の体はこの程度の菌にどうしようもできぬ。汝の体では別だが――」

「絶対キノコには近づかないようにします」

可愛い姿であろうとやはり魔物は魔物だ。危険な存在だ。

危険な魔物として、キノコの姿をメモしなくては。

傘は水色と紫の毒々しい色で……大きさは膝くらい……胞子を使って攻撃？

ん。

んん………？

視界が少しにじむ。まさかこの臭気に目でもやられたんだろうか。いや、胞子が実は届いていたとか？

「……う」

お腹の方から何かせりあがってくる感覚。ダメだ。このままりバースしたら地図と凶鑑が汚れてしまう。ちゃんと畳んで鞆にしまわないと。リバースするならそれからだ。

「イ、シユ……」

これをただの嘔吐と思うほど私は冒険不慣れではない。まだ数日
だけしか冒険稼業してないけど。

いきなりこんな嘔吐感に襲われるのは異常だ。

視界が白く染まっていく。チカチカする。

なんだか頭から何かが離れていくような、考えることが難しくなっ
てきた。

「アルメリア、何をしている」

ワンドを普通の杖のようにして体を支えていると、動かなくなった
私にようやく気づいたのかイシュが声をかけてくる。

「――」

ダメだ。イシュがなんて言ったかもわからない。

近づいてくる地面、いや、私が倒れているのか。

そこで私は意識を手離れた。

意識を取り戻した時、気球艇の上だった。

舵を取っているのはイシュ。まるでいつもの光景だ。時間も夕暮
れなのか、空は赤い。南下しているということは一度タルシスに戻る
のだろう。まるでいつもの光景だ。隣には知らない人がロープで縛
られている。手足を縛られている。

私はだいぶ体調が楽になったが、もう一度目を閉じた。

……隣の人、誰？

え、なんで縛られてるの？

え？ 本当になんで？

「おい、貴様」

やたらと高圧的な声が聞こえる。知らない女性の声だ。イシユではない。

目を閉じながら考える。貴様とは誰を指しているのだろうか。声の主はきつと縛られている人だとしたら、私かイシユにだろう。けど私とこの女性は初対面。縛ったのはイシユだとしたら、うん。イシユだ。イシユへの呼びかけだきつと。

だから私は寝たふりをしよう。状況がよくわからないし。

「寝たふりをするな。貴様のことだ、目を覚ましたのだろう。おい」

すごい不機嫌そうだ。

そりやそうか。縛られてるんだものね。そして超怖い。

そして私のことか。そりやそうか。さつき思いつきり凝視しちゃったし。

このまま目を閉じていたいけど、そうすると今より怖くなりそうだ。観念するしかない。

「な、なんででしょうか……」

でも、と声を出しながら思う。

イシユが意味もなく人を縛るなんてきつとないはずだ。うん。

この人はもしかしたら盗賊とか野盗の類で、毒とかを撒いていてそれによって私が倒れたとか。そしてイシユは犯人をとつちめた、とかはどうだろうか。そういう線もあるのではないか。

「この縄を解け」

頭が回ってきた私は、素直に言うことを聞くつもりはない。
危険人物の縄を解くなんてとんでもない。

「事情が全くわからないんで……その……」

「私が事情を知りたいくらいだ。その化け物が突然私を縛りだした」

「え」

女性はイシユのことを恨めしそうに、いや、憤怒の表情で睨んでいる。ってというか……

「人間じゃ、ない……?」

「何をおかしなことを言っている。当たり前だ。ここでは人間は貴様だけだろう」

女性は顔に長く白い髪の毛を垂らしているが、その皮膚の色はとても健康な人間のそれとは見えない。縛られている手足も異常に細く、下手したら枯れ木のように見えてしまう。首元はまるで植物の根が浮かびあがっているかのようだ。

「目を覚ましたか。アルメリアよ」

不機嫌な目の前の女性と比べ、どこか上機嫌なイシユの声が届く。それは勘違いではないようで、こちらに向けた顔はすこぶるドヤ顔だった。反対に女性の形相は鬼のごとくだったが。

「イシユ、あの、この状況はいつたい?」

「汝はあの森で意識を失ったのだ」

「あ、はい。それはわかります。あの、こちらの方は……?」

「うむ。里に案内せよと言ったのだが逃げようとしたのだ。そのためその者しか捕らえることができていない」

「えと？ あなの？ いや、なんで捕らえたんです？ 何か有毒なものをこの人が撒いてたとか、です……？」

「その種族から情報を得たいからだが？ 汝が倒れたのは確かに毒だ。鉱石が作る気体だったが、その種族は関係ない」

「つまり……誘拐？」

「見方を変えればそうなる」

……どうしよう。

もう一度意識を手離したい。

「私が縛られる理由がないことを、貴様も理解したか」

「は、はい！ すぐにほどこきます！ 本当にごめんなさい！」

この人からしたら、突然自分たちと違う種族がやってきて、里へ案内しろと言ってきて、怖くて逃げたら捕まって縛られて連行中だ。そりゃ不機嫌にもなりますよね。本当にごめんなさい。

それにしても、本当にほっそい……

見てると不安になってくる。ちよつとしたことで折れちゃったりしないだろうか。

「……」

「……………あ。ご、ごめんなさい！ ジロジロ見てしまつて」

「貴様は普通の人間だと思っていたが、少し奇妙だな。まあいい」

そんな怪奇そうな目で見ないでください。私は変じゃないです。ちよつと思わず凝視しちやっただけなんです。

「人間よ。私はウロビトの方陣師を束ねる者。名はウーファン」

「わ、私は——」

「貴様の名などどうでもいい」

……

この人ちよつとイシユに似てるわ。

「人間は今でこそ我らとの絆を断ち切ったとはいええ、かつて我らを導いた者たちだ。そのため、私の判断で一度だけ忠告しよう」

「は、はあ」

ところどころ気になる言葉があるが、とりあえず一度話を聞いてからだ。

忠告ってなんだろうか。

「そのこの悪魔はこの世に存在しているいいものではない。すぐにでも縁を切れ。姿こそ人間だが、命を持たぬ化け物だ」

「……イシユのことですか？」

「悪魔の名など知る気もおきない。どういう理由で悪魔と行動を共にしているのか知らないが、あれはこの世の摂理に反する存在だ」

イシユは随分と嫌われたようである。

まあ突然縛られたりしたらそうなるか、と単純に納得していいものではないだろう。どういうわけかイシユが人の体でないことを見抜いているようだし。

「イシユは確かに人間の体ではないです。だけど、心はちゃんと人間ですよ。少し……いや、かなり……とても、変ですけど」

「心は、だと？」

「ま、まあそりゃ、突然誘拐されたらそうは思えないのもわかりますけど……」

「随分と盲目的に信じているものだな。それが悪魔の狡猾さなのか、それとも貴様らの愚鈍さなのか。どちらであれ、忠告はしたからな」
なんとも頑なというか。まあ彼女の状況から見たら当然だし、仕方ない反応だ。

とりあえずイシユにはこの人を元の場所に帰してあげるように言わないと。タイミング的に、あの森で出会ったんだろうし。

「……って、もうタルシスじゃないか……」

「うむ」

今から戻るのもあれだろうか。考えたら結構大事だよ今回の件。私たち個人でやっていいやり取りとは思えないよ。未発見の土地の一族との邂逅だよ。辺境伯の指示がほしい。

そう考えるともういつそ一晩タルシスに来てもらった方がいいか

もしれない。そして謝罪を精一杯して、ウーファンさんの一族と橋渡しをなんとか……何とか……できる気がしないなあ。

「あの、ウーファンさん？ 申し訳ないですけど、今から戻ると真っ暗になっちゃうでしょうし、今日のところは街でゆっくりしてもらってもいいでしょうか……？」

「……」

すっごい嫌そうな表情である。今まで見た人たちの表情の中で、一番の苦虫をかみつぶした表情である。

「今は貴様らに従う以外どうしようもないのだろう」

「す、すみません……」

寝泊まりの場所は……辺境伯に相談しよう。というか辺境伯に報告しないとだし、この件。

「イシュ、マルク統治院に行きますよ……」

「ふむ。確かにこの種族のことは報告するべきだな」

「……」

拉致したことも報告対象だよ。

19. 知られざる伝承の歪み

「まことに申し訳ない！」

マルク統治院の執務室内で、辺境伯の謝罪の声が響く。

それを言われた女性、ウーファンさんは

「……」

だんまりである。

そうとうご立腹だ。その原因であるイシユは我知らぬと言わんばかりの顔である。

「辺境伯よ、何を謝っているのだ。汝が何かをしでかしたわけではなからう」

しでかしたのはイシユだもんね。

「それよりもこの者の尋問が優先されるだろう。世界樹に深くかかわる存在だ」

我関せず、な態度のイシユの発言がこれである。そうなんだ。それは初耳だけでも。

それならなおさら機嫌を損ねるのはより不味いと思うよね。

「……」

ウーファンさんは錫杖から手を離すことなくイシユを睨みつけている。

「……イシユ、いったいどうして誘拐まがいのことをしたのか、聞かせてくれるかね？」

ウーファンさんがだんまりである以上、話の矛先はイシユに向けられた。

私もかなり気になっていることである。

世界樹に関わると言っていたことから、なんらかの手掛かりなんだろうけども……

「その者はかつての人間が創りし種族だ」

「……我らウロビトの祖を創ったのが人間だ。私自身は人間に創られてなどいない」

「ウロビト、それがあなたたちですね。人間に創られたと……イシユ、古代では、科学の力で他種の命を生み出すことができたということか
ね?」

「古代の者すべてができるわけではない。我と近い叡智を持つ科学者が可能とする技術だ」

辺境伯の問いにイシユは答えたが、今の言い方だとまるで、

「イシユも創ったことがある……?」

「うむ。かつて翼人という種族を創ったことがある」

つまり……子持ち?

いや、うん。なんか違うってわかるけど。うん。この場合パパ?

ママ? いや、違うとわかるけどなんかそう思うとちよつと面白く。

「彼女の祖先が人間に創られたことと、今回の誘拐がどう繋がるというのかね?」

「我と近い技術を持つ者、となれば世界樹に関わっている可能性が高い。それにその者は気になる言葉も漏らしていた……聖樹の護り、とはいつたいなんだ?」

聖樹の護り?

なんか最近どつかでそんな言葉を読んだ気がする。聞いたことはない。けど……あ。凶鳥烈火の術式書だ。その一節にあった文だ。

たしかあの本に書いてあった文章は、凶鳥烈火のことを『聖樹の護りにおいて、巨人の両腕を焼き払った術』みたいなことを書いていた。

「悪魔の問いに私が答える義務などない。人間に聞けばいいだろう」

あの本、やつぱりふざけて書かれた悪戯本とかじゃなかったんだ。

聖樹の護りなんて、聞いたことないけども実際にあったということだし。

「辺境伯よ。汝は聖樹の護りというものについて、何か知っているか」
「いや……何も知らないな」

辺境伯は知らないと答えた。

術式書の中についてまではさすがに把握していないのだろう。

しかし、その答えに納得がいかない人物が冷たい声を出した。

「何？ 貴様、本当に何も知らないのか。貴様ら人間は……！」

ウーファンさんだ。

彼女はまるで知らないことを軽蔑しているかのようだ。

私も口を出したほうがいいだろうか。だけどあの本には聖樹の護りについては全然書いていなかった。ただ引き合いにだされた場面が聖樹の護りだっただけだ。

つまりほとんど知らないのは私も一緒である。

「巨人から逃げた人間の祖は、自分たちの汚れた歴史を認めたくない恥知らずか」

巨人……

新しい単語であり、凶鳥烈火に乗っていた文と一致する単語でもある。

「少し待ってほしい。聖樹の護りというのも、巨人というのも、私たちは知らない。いったいどういうことなのか教えてもらえないだろうか」

「……いいだろう。祖が語り継がなかったために貴様らは無知なのだ。ならば今一度、私が知る全て、貴様らの祖が隠した真実を話そう」

ウーファンさんが語った内容。それをまとめると、

かつて世界樹の麓で、たくさん人間が平和に暮らしていた。

世界樹の世話のために、人間はたくさん種族を創った。

だけどその平和は続かなかった。

ある日突然、巨人が現れて世界樹を覆い隠してしまった。

それまで世界樹の恵みで暮らしていた人間も、創られた種族もそれによって死んでいった。

人間は巨人を恐れて逃げだした。

ウロビトや他の創られた種族は、力を合わせて巨人と戦い、そして

最後には討ち倒した。

巨人を倒したことによって、また世界樹は姿を見せ、今の平和な世となつてゐる。

「……世界樹は我らウロビトにとつて崇めるべき豊穡の神樹。神樹を守ろうとせず、我が身可愛さに逃げだした人間をウロビトは軽蔑してゐる。人間は我らの創造主ではあるが、巨人から逃げたことを我らは許すことができない」

もう語ることはないと言わんばかりに、ウーファンさんは言葉を切り、目を閉じた。

「巨人とはいつたいなんだ」

イシュが真つ先に聞いたのは、巨人のことだった。

もう何も喋らない的な態度を取りだした人に対して、そんなの無視して聞いていく精神は素直にすごい。

「……」

「答える気はないか。まあいい」

私も少しはイシュを見習つて、気になったことを言つてみてもいいかもしれない。

イシュを悪魔だのなんだのとすごい毛嫌いしているようだし、イシュよりは答えてもらえる可能性はありそうだからなおのこと。

「あの……世界樹が神樹とか、聖樹とか、それって本当ですか？」

「……どういう意味だ」

反応があつたことは嬉しい。嬉しいんだけど、すごい冷たいというか、やや怒つてゐる声音だ。

だけど私としてもあんな忌々しい樹が、そんな高尚なもの扱いなのは納得がいかないのだ。

「私にはとてもあの樹が聖樹なんて呼ばれるほどの立派なものには思えないからです」

「……貴様、少しばかり世界樹と似た気を持つてゐるといふのに、どこ

まで愚かなのだ」

「世界樹と似た……？ し、知っているんですか！」

世界樹と似た気。気が何を指すかはわからないが、連想はしてしま
う。

それは、人を植物へと作り変えていく、世界樹の呪い。

何も知らずに聖樹だのと崇めていると思っていた。けど知ってい
て崇めているのなら、対処法を持っているからそういった心の余裕が
できるのかもしれない。

「我らウロビトは地脈と気の流れを把握し、利用することに長けた一
族だ。貴様の取り巻く世界樹に似た気くらい見ればわかる」

「なら！ 呪いの治し方もわかりますか!!」

「呪い……？」

怪奇そうな顔をするウーファンさん。

その姿はまるで、世界樹の呪いを知らないように見える。いや、も
しかしたら彼女たちは呪いと認識していないだけかもしれない。

じれったい。

言うよりも、見せる方がはるかに早い。

街の人には絶対に見せてはダメだけど、ここにいるのはイシユと辺
境伯、そしてウーファンさんだけだ。

「それは……」

私は腕をまくり、体を蝕み続ける植物を、世界樹の呪いをウーファ
ンさんに見せた。

これだけではただ服の内側で植物のお世話をするのが趣味の人だ
ろうか。それならば、

「アルメリア君!! 何をするつもりだ!」

「脱いで呪いを見せるんです！ 腕だけじゃ呪いとわかってもらえな
いかもですし!」

「腕だけでいい！ わざわざ脱がなくていい！」

「脱―が―せ―て―！」

「何をやってるんだ汝らは……」

辺境伯が私の行動を邪魔してきた。

くそう、お腹でも見せたらそこに根這っている様子を見せれるのに。

「今のは……なんだ……」

「アルメリアが汝に見せたのは世界樹の呪いだ」

「世界樹の、呪いだと……?」

「汝らウロビトが、聖樹だ神樹だと崇めているあの樹が放つ呪いだ」

私と辺境伯のドタバタの中、イシユとウーファンさんの会話が聞こえる。

あの言い方的に、イシユって結構、いや、かなり世界樹のことを嫌っている気がする。私もだけど。

「……そうか。悪魔、貴様が何かしたのだな」

しかしウーファンさんは、世界樹の呪いのことを認めてくれないよ
うだ。

それどころかどうもイシユのせいにしようとしている。

「呪われし人間よ、貴様はこの悪魔に何か甘言を囁かれたのではない
か」

「甘言って……イシユは確かに人の心の機微に疎いですが、悪魔だの
なんだのと言われるほどの人じゃないです」

拉致誘拐したことはこの際度外視する。

「そもそもなんでそんなにイシユを悪魔呼ばわりするんですか。そ
りや……誘拐はまあ……とにかく！ イシユは悪魔ではないです！」
「ウロビトは生き物の気を感じることができない。だが、その悪魔は
気を持たない。命を持っていない。それだけでもありえぬことなの
に、世界樹を陥れようとしているではないか」

「その世界樹が悪いんじゃないですか！ 呪いを振りまく世界樹が

!!

「貴様の呪いが世界樹と関係あるわけがない！」

「決めつけないでもらえますかぁー！」

なんだかどんどんとイライラしてきた。

このウーファンさん、いや、ウーファンはさつきからやたらと高圧的でエラそうに、何も知らずに決めつけて喋っているのがなおのことイライラする。

「辺境伯よ、あの鉱石は結局使えるのか？」

「あ、ああ。港長が言うには今まで以上の高度で飛行が可能になるそうだ。明日には全気球艇に取りつけれると言っていたが」

「ふむ。では明日にあのウロビトとやらを里に送ろう。あの個体ではまともに情報を集めれそうにない」

「……君も原因ではあるのだがね。送るのは君ではなく、ワールウインドに任そう。君ではより溝が深くなりそうだ……」

「貴様のような馬鹿は悪魔に利用されるのが分相応だな！」

「はぁー?? 世界樹の呪いのことも知らずに人を馬鹿呼ばわりですかぁー?? はぁー??」

「……イシュ、君はアルメリア君にどれだけ悪影響を与えたのかね。あれほどに口を荒らげるとは……」

「我は関係ない」

結局、ウーファンは呪いのことを知らないということがわかった。

だがウロビトの里には長と、世界樹の巫女と呼ばれる存在がいるらしい。ウーファンではわからないことでもその人たちならわかるかもしれない。そして、辺境伯としては友好関係を結びたいそうだ。

ウーファンが終始不満そうだったので、文句を言ってやろうとしたらイシュに腕を捕まれ執務室から引きずりだされた。辺境伯がイシュに頼んだそうな。

そんなわけで今は帰り道の途中である。

「うう……やなやつ……」

「落ち着くのだ。汝がこれ以上あのウロビトともめても仕方がない」
「そうですね……明日ウーフアンを送るのって誰か別の人になった
んですっけ？」

言い争っている最中に辺境伯とイシユがそんなことを話してた気が
するが、あまり聞いてなかったので今尋ねる。

「あの男、ワールウインドが送ることとなった。それと、ウロビトと友
好を築くために辺境伯も同行するそうだ」

「ワールウインドさんと辺境伯が……」

「我らはウロビトなどどうでもよい。明日は世界樹への道を探す。い
つも通りだ」

「はい！」

そうだそうだ。

ウロビトとの友好についてはできなくてもできなくても、私たちには関
係ない。世界樹について何か知っていると聞きやあまり知らな
かったし。世界樹との距離を少しでも埋めないといけない。

「そういえばあの鉱石でより高く飛べるんですね」

「うむ……汝に舵を握らせるつもりはない」

「……わかってます」

そんな他愛のない話をしているとき、通り過ぎようとしたお店から
出てきた人に声をかけられた。

「あら、ニーズヘッグのお二人じゃない」

「あ、孔雀亭の……」

「む？」

踊る孔雀亭の店主、ミステリアスっぽく見せて実は結構俗っぽいお
姉さんだ。

「あなたたちの活躍、聞いたわよ。碧照ノ樹海の魔物騒動を解決した
期待の新人ってね」

「その期待の新人が今日誘拐騒ぎを起こしましたけどね……」

「濃いわね本当に……ま、まあそんなことより！ いい仕事あるんだけど、あなたたち受けてみない？」

「いい仕事？」

イシユの方を伺う。

「我は世界樹の調査しかする気はない。以前は金銭が必要であったが、今は求めるものはない。もののついでにできること以外は受ける気はない」

「あなたたちは前回もそうだったわね。ま、一度依頼ボードを見ていってほしいのよ」

「は、はあ？」

半ば引つ張られるようにお店へと誘われる。

何かそんなにお勧めしたい依頼でもあるのだろうか。一定の力を持つ信頼できる者にしか紹介できない仕事の。

そんな予想をたてながら紹介された依頼は、

「……………キノコ集め」

「ええ、セフリムの宿のオカミさん、知ってるでしょ？ 彼女が新メニューを作るためにキノコがたくさんいるのよ」

「……………世界樹の調査ついでな感じじゃないです」

「北の大地、丹紅ノ石林の調査で詰まってるって聞いたわよ。ならついでに石林のキノコを取ってきてもいいじゃないの」

「押し付けてきてません!？」

「まあ冒険者の自主性に本来任せるべきよね。というわけで、ボードを見て色々決めて頂戴」

「無理やりここまで引つ張っておいて!？」

いったい何がしたいのか。

まあせつかく来たのだし、ついでにできることを探すことにする。

といっても、碧照ノ樹海のように地に足をつけてやれること全般が、今回はついでの範囲外だ。

相も変わらずの色とりどりのボード。

そして……

「え、増えてる……」

以前は一枚しかなかった黒い紙の依頼用紙が、二枚になっていた。

「そうなのよ……」

店主さんの言い方的になんとなくだけど、

「これを見せたいがために店に引きずり込んだとか……?」

「……」

目をそらした。

「……」

「………だ、だって仕方ないじゃない。不気味なんだから。誰かと一緒にこの気持ち分かち合いたいって思うでしょ!」

「だからって私を巻き込むのはどうかと思いますよ!」

「ちようど店の前にいたし……」

「選んだ理由がテキスト!!」

なんて店主だ。

私はただでさえ世界樹に呪われてる身なんだ。こんな呪いの黒紙みたいなのにまで関わらせないでほしいところである。

「その依頼がどうかしたというのか」

「あ、イシユは聞いてませんでしたっけ。この依頼、すごい不気味なんですよ」

新しく増えた黒い依頼用紙を手に取り内容を確認する。

やっぱりだ。内容が意味不明だ。雷鳴と共に現る者、黄金の雷竜が空を飛ぶとき、特定地点の石柱を破壊しろと……

「つて、雷竜!」

「む? 竜に関する依頼なのか」

赤竜以外にも本当にいたんだ。

場所は、丹紅ノ石林。つまりあの赤い大地に雷竜はいるということだ。

空飛ぶ災害はどこにでもいるということか。

「いい加減お祓いでもいくべきじゃないです？　そういえば私、あの日！　なんか不気味な夢を見たんですよ！　絶対この紙のせいですって！」

「夢については知らないわよ。お祓いは頼んだんだけど……みんな薄気味悪いことを言うばかりで解決できずなの」

「またそうやって不気味情報を出す……！」

「なんでもこの紙から、真つ黒の竜を幻視したそうなの。そして、目を閉じる度に、黒い竜の黄色い眼にずっと見られている気がして眠れないんですって……。というわけで強めの睡眠薬を求める依頼が出るわ」

「したたかすぎませんか？」

それよりも、真つ黒の竜？

竜に少し関係する黒い依頼書だから、といった連想なのではないだろうか。

いや、でも黄色い眼というのは気になる。夢で見た影も黄色い眼をしていた。

「イシユ、黒い竜って知ってますか？」

「我は聞いたことがない。竜といえば、赤竜、雷竜、氷竜の三体しか知らぬ。それ以外にもいるにはいるが、力をたいして持たぬ存在ばかりだ」

イシユも知らない存在。

黒くて黄色い眼の竜。

だけど依頼の内容は黒い竜など一切関係なさそうだ。

「そもそも依頼の内容はどういったものなのだ」

「あ、えっと。なんか石柱を破壊しろっていう内容なんです」

「石柱？」

「どこの石柱でもいいわけじゃなく、竜が空を飛んでいるとき、特定の地点にある石柱を壊せとのことですよ」

考えれば考えるほど、この条件もよくわからない。

何故竜が空を飛んでいるとき限定なのだろうか。飛んでいるときじゃないと壊せないとか？ どういう原理だ。

まあこんな依頼は無視だ無視。

他の依頼を探そう。あれから増えているようだし……蛾の卵は絶対やめよう。なんだかひとつだけ滅茶苦茶隅っこに貼ってあったから気になったけど、内容がきつい。

他は……光粘菌？ 薬の素材になる光粘菌がついた木を探して、その場所を教えてほしい？ これくらいなら石林探索中にやれそうだ。依頼主は……辺境伯とは。結構あの人はここを使ってるんだ。

「それじゃ、これとこれ、お願いします」

「二つ受けるのね……え？ これ、受けるの？」

「……その黒いのは取りやめです」

背筋が寒くなる。

なんで前と同じことが起きているのだ。

無意識に提出した黒い依頼書を取り下げようとしたら、横から手が伸びてきた。

「この依頼も受ける」

「ほあ!? イシュ!?!」

「本気……? というか正気?」

イシュまでこの黒い紙の謎パワーにやられたのではないだろうか。

そう思いイシュの顔をガン見してみるが、ダメだ。正気かどうか全然わからない。基本的に表情が無表情かドヤ顔ばかりだから困る。

「明日は北の大地、丹紅ノ石林で世界樹への道を探し回ることになるはずだ。ならばついでにやれそうな依頼を受けるのはごく当然のことだろう」

「いや！ これは不気味って！」

「不可解なことを。わからぬからと遠ざけてはいつまで時間を経ようとわからぬままだ。いざ調べれば拍子抜けな現実ということもある」
ダメだ。

イシュは正気のようにだ。だからこそなおのことダメだ。説得のし

ようがない。

「本当にいいのね？ 途中キャンセルはいつでも受け入れるから……」

「問題ない」

おおう。

店主さんもこんな展開になるとは思わなかったようだ。すごい微妙な表情だ。

「では我らは家に戻るか」

「あ……はい……」

「なんだかごめんなさいね……お早いお帰りを」

ウーファンを送るといふのは嫌だったので、ワールウィンドさんが送るといふのは嬉しいことだった。

だけどこれならそっちのほうがよかった。

割と本気でそう思うほどに、気分が沈む明日の予定である。

20. たおやかな朝の風景

街はずれの一角にある一軒家。そこに朝日が差し込む。

窓から当たると日の光は眩しく、夢の中から現実へと引き戻してくれた。

「朝、かあ……」

今日はあの影の夢を見なかった。

黒い依頼書に触れちゃったから夢に出てくると思ったが、そんなことはなかった。

店主さんが言うには、お祓いに来てくれた人たちは黒い竜を幻視したそうだけど、私も一度見たけど今回は来なかった。よくわからないものである。

「……少し息苦しいや。あの依頼書のせい、じゃないかな……」

黒い依頼で気が重いから息苦しい。そんな感覚だったらよかったが、どうも違う。胸に手をあてれば、返ってくるのは柔らかい感触などではなく、ガサリと茂みのような抵抗感。

それと同時に体に走る痛みと大きくなる不安。

あの森の空気のせいだろうか。進行が早くなってる。

いまだ体を治すすべは見つかっていない。あとどれだけ持つだろうか。

窓を開け、朝一番の風で不安を吹き飛ばそうとし……

「……しつこいなー!」

「猪口才な!」

何故か庭先で争っている二人が見えて、不思議と疲労感が沸きあがった。

今日の朝食は黒パン。何日か置いておいたせいか、少しだけ堅くなっている。

それにバターと塩。あとチーズだ。

「アルメリア、ちゃんと野菜を取らないとダメだよ」

「朝はバターバタしがちなんでこんなもんでいいんです」

庭先で争っていたうちの一人、ワールウィンドさんが口やかましく食バランスについて語ってくる。

それよりもまず言うことはないのだろうか。具体的には争っていた理由について。

「アルメリアよ。砂糖がなくなった」

「もうですか？ そんなに使った覚えはないんですけど……」

「こいつさつき砂糖を滅茶苦茶入れてたぜ」

「コーヒーには入れるものだろう」

今度砂糖を買っておかないと。

というか他に言うことはないのだろうか。具体的には争っていた理由について。

このまま待っていてもダメなようだし、こちらから切り出そう。

「あの、二人とも何か言うことってありませんか？」

「ん？」

「む？」

二人して頭に疑問符である。

しばしの思巡ののち、ようやくわかったのかワールウィンドさんが言い出した。

「ああ、ごめんよ。いただきます、だね」

「違います。いや、それは正しいですけど違います。いや、ていうか何でワールウィンドさんまで朝食一緒なんですか」

すごい自然というけども、朝食は宿で取ってないのだろうか。

「……我から言うことなどないだろう」

「いや、ありますって。いや、イシユは思いつきり当事者ですって」
二人とも争っていた理由について話さないのはなぜなのか。
それとも私が気にし過ぎなんだろうか。いや、でも普通気になるものではないか。

「朝から二人が庭先で争っていた理由ですよ！」

「ああ、そういうことか」

言われてようやく納得といったワールウィンドさんである。その一方でイシユはなんでそんなことを気にするかわからないといった表情である。

「俺がウロボトを里まで送るのは知ってるだろ？ それで送る前にアルメリアに会っておこうと思ってね。で、この家に来たんだけど……」

「その男が我に模擬戦をしたいと言いだしてきたのだ」

「全然話の繋がりが見えません」

ワールウィンドさんがウーフアンを送るのは知っている。

なんでそれで私に会いに来たかはよくわからない。まあ過保護だからって理由かも知れけど。そしてそこからなんでイシユと模擬戦なのかもつとわからない。

「ははは、模擬戦についてはなんとなくだよ。冒険者の行動に理由なんて聞いても無駄なことが多いさ」

そういうものだろうか。

冒険者経験が僅かな私ではわからないことだ。だけど今までのワールウィンドさんはなんらかの意味がある行動しかしてきてないイメージなんだけど。顔の胡散臭さに誤魔化されがちだけど、真面目な人だとばかり。

「でも、アルメリアに会いに来た理由は心配だからだよ」

そこは、やつぱり、としか思い浮かばない。

別に怪我をしたわけでもないのに心配になるってよっぽどだと思っうけど、過保護なワールウィンドさんだしなあという納得しか出てこない。

ワールウィンドさんはそのまま言葉を続けていく。

「今までずっと碧照ノ樹海で足踏みをしてしまっていた。けど、そいつのおかげで碧照ノ樹海は越えた。気球艇の改善もされた。ウロビトも発見できた。里の場所も把握することができる。一気にことが進んだんだ」

そいつ、というのはイシユのことだろう。

ワールウインドさんとイシユが仲良くなる日は遠そうだ。

「もう少しなんだ……もう少し。けどだからこそ、アルメリアの体が心配だ。冒険に出たことで体の調子がひどくなったりしてないかい？ 本来は安静にしているのが一番なんだ。体の疲労が増せば増すほど危険も増える」

「確かに、進行は結構進んでいます……だけど今はまだ大丈夫で——」
「今回だけでいい……今回だけ、俺と一緒にウロビトの里に来てくれないか」

「ほひ？」

てつきり冒険者活動は休んで家でおとなしくしてろ、とつなげるかと思いきや、一緒に来てくれと言う。

しかも、よりにもよってウーファンがいるウロビトの里へだ。というかタイミング的にウーファンと同じ気球艇に乗れということだ。

これは遠回しの嫌がらせなのだろうか。

いやいや、そんな意図はないと思ってますとも。だけど本当の意図が全くわからない。

「えつと……？　いったいなんですか？」

「それは……ウロビトはタルシスの人より世界樹についての知識がある。だから、呪いの進行を止めれる可能性もある」

「そうでしょうか……ウーファンを見てる限り、あまり期待できないというか」

「俺も詳しくは言えない。言えないが……ウロビトの里には呪いに対抗する何かがあるはずなんだ」

その何かがなんなのか。

詳しく言えないってこれまたなんでなのか。

そこらへんを詳しく聞きたい衝動にかられる。

「頼む、今回だけでいい」

ワールウィンドさんは深々と頭を下げた。

「こうでもしないと、俺は……」

どうしよう。

ここまでされたら今回くらいは、という気持ちにもなる。それに何よりも、今日の予定はあの怪しげな依頼をこなすことだった。それを避けるチャンスである。

しかし、イシユは納得がいくだろうか。

イシユも連れていくとかならって条件を出してみる？ それなら

納得がいくだろうか。

「イシユ、今回だけでも——」

「我はどちらでも構わぬ」

「え」

反対すると思ってた。

「ウロビト自身が持つ世界樹の情報は期待できぬ。創造した人間の情報も同じだ。だが、書物などで情報を残しているかもしれない。ゆえに全くの無意味とは断じることはいできぬ。もともと、可能性は低いだろう。ゆえに我は予定通り動くがな」

可能性は低いけど、零ではないと。

そして私がウロビトの里に行っている間に、イシユは丹紅ノ石林の探索、およびあの依頼をするつもりなのだろう。あ、あと光粘菌の木

搜索。

「じゃあ今回は手分けして、つてことですね？」

「うむ。我はそれで構わぬ」

ウーファンと一緒にするのはひどく嫌ではあるけど、あの黒い依頼に関わらないのは嬉しいことだ。まあ、イシユが関わるけども、イシユなら大丈夫だ。

「ワールウィンドさん。では今回だけ、お願いします」

「ああ、ありがとう。イシユも、感謝する」

私の体を気遣つてのことだし、むしろ感謝はこちらがするべきだと思うけども、まあいいや。

「それで、いつ出発なんですか？」

「気球艇の改造が終わり次第。といつても俺のはすぐさ。ウロビトを送るためにも、少しでもはやくつてことで俺の気球艇が最優先さされているからね」

それじゃ、すぐにでも用意しなくちやか。

「ちなみに君たちの気球艇は一番最後に回すらしいよ」

「え。なんでまた！」

「あの鉱石を見つけ出したのは我だ。その功績をあげたにも関わらず後回しだと？」

さすがにこれにはイシユも納得がいかないようだ。

私はノアが後回しでも今回は関係ないが、理由を教えてほしいところだ。明らかにあの鉱石の発見は誉められることなのに。

「ウロビトの拉致がね……」

「あー……」

私はもう納得しました。

問題行動ですよねそりや。

「後回しとは言ったけど、今日中には終わるはずさ。きつとね」
「……」

イシユは納得してなさそうである。

「あとで交易長に急がせる」

「……そこは我慢して待ちましょうよ」

あの交易長は急かされたとしても怒鳴り返してきそうなイメージがある。気球艇のことに關してのことだと特に。

まあ今回に限っては私は關係ない。ないっつたらない。

とりあえずウロビトの里に行つて……イシュとの合流場所は……

「ウロビトの里つてどれくらいの間いる予定なんですか？」

「ん？ 色々調べたいこともあるし、数日は滞在したいところかな」

「け、結構長いんですね……」

日帰りだとしたらあの黒い依頼書に間にあつてしまうと心配したが、まさかの数日。

「さすがに何日も里にいる気はないです……」

「……わかつたよ。辺境伯も同行することだし、確かに何日もいれないか。だけど最低でも一日はいてほしい。それから滞在期間を延期するか、もう一度考え直してほしいんだ。もしかしたら気が変わるかもだからね」

ワールウインドさんはいったい何を考えているのだろうか。

もはや確信めいた何かがあるのではないか。まあ聞いても答えてくれないのだろうけど。

「一日経つても考えは変わらないと思いますけど……その時はイシュの元まで送つてもらえますか？」

「……ああ。もちろんだ」

まあイシュの方からウロビトの里に来るかもだけど……いや、来ないかなあ……

石林の調査次第かな。

イシュがウロビトの里に来る場合は何か詰まつて他に探すものがない状態つてことだし、あまりそれは望ましくない。

「それじゃ、食べ終わったら辺境伯の元へ行こうか」

「はい。イシュは今日のところはこれからどうしますか？」

「我は先も言ったように交易長を急がせる。それに、ベルンド工房に剣を取りに行く。以前渡した素材を剣に加工するために目を開けるように言われていたからな」

「以前……あのボス熊ですね！」

「うむ。あのこざかしい獣だ」

「獣王ベルゼルケルだよ」

立派な名前だったとは覚えてたんだけど、覚えにくいのだ。ボス熊でいいじゃないか。

その後は他愛のない世間話をしながらの朝食だった。

どっかの印術師の家が印術の実験に夢中で全焼したとか。こわい。

イシユと別れ、ワールウインドさんとマルク統治院へ向かう。

だけど気分はあまり優れない。何故ならウーフアンも一緒になるとわかってるからだ。

まあ、別にウーフアンとわざわざ話す必要などないし、辺境伯も一緒だし、辺境伯がきつとウーフアンの相手をしてくれるだろう。というかずつとだんまりかもしれない。あの女のことだし。

よし、別のことを考えよう。もっと有意義なことを。

私の歩く速さを気遣って、ゆっくり横を歩いているワールウインドさん。ちなみにイシユの場合もこちらにペースを合わせてくれるが、頑なに前を歩く。それはともかくワールウインドさんを見て思う。

いつも肩に引っ提げている荷物の中身はなんだろう、と。

最初はただの魔物の素材や採集品かと思っていたけど、いつつものに何かはいつているのだ。冒険帰りとかならいっぱいでも理解できるけど、今日はこれからというのにすでに何か重そうな雰囲気である。

「ワールウインドさん」

「なんだい？」

「その荷物ってなんですか？　なんだか重そうですけど」

わからなければ聞く。

私の予想では鎧と見た。

ワールウインドさんはかなり軽装なのだ。イシユやウイラフさんのような軽装剣士というのにはいるが、重鎧の剣士だって珍しくない。考えればワールウインドさんが魔物と戦っている場面を見たことがないし、実は樹海に行くところから鎧を取りだして着込んでいるのではないか、そんな予想である。

「ああ、こいつは俺の故郷の……お守りみたいなものさ」

「そういえばワールウインドさんの故郷ってどこなんです？　すごい今更ですけど」

考えれば10年顔を合わせているのにワールウインドさんのことを全然知らない。

「そうだな……故郷に戻れる時に教えるよ。それはきつともう少しだ。だから、それまでのお楽しみで頼むよ」

「いや別に楽しみではないですけど」

「手酷いな……」

しまった。ちよつとワールウインドさんがしよげてしまった。

「それよりも目先のこと集中しようか。先のことばかり考え過ぎて失敗なんてしてられないしな」

雑談をまとめたところでマルク統治院に到着した。

私はワールウインドさんほど張りきれない。だってウーフアーンいるし。

というかワールウインドさんはなんだかいつもよりも随分と張り切っている気がする。まあいいことだけど、そこだけ少し気になった。

「おはよう諸君。イシユと一緒にじゃないとは、珍しいものだね」

「おはようございます」

「辺境伯、今日はアルメリアも連れていきたいんだ。イシユは別行動だね」

私を連れていくことを事前に話していなかった見切り発車っぷり

にびつくり。

辺境伯は少し思案した後、許可を出してくれた。たぶんイシユがいたら出なかった気がする。

そして辺境伯とワールウィンドさんは今日の打ち合わせを始めた。ちなみにこの部屋にはまだウーフアンはいない。

ふと気になったことがある。聞くなら今しかないと思い、横から話に入ることにした。

「辺境伯自ら里に行くのって危なくないですか？」

「うん？ そうかね？」

「そこは俺も同意見だね。タルシスの領主という立場なわけなんだし」

ウロビトの里がどんな場所にあるかまだわかっていないが、ウロビトは人間を好んでいない。ウーフアンが例外という可能性もあるけど。

とにかくそんな敵地みたいな里へ、親睦を深めるためだなんて危険である。

「ふふふ、心配ありがとう。だがこれは私自ら行かないといけないことなのだよ。理由は……誘拐まがいの謝罪の方が重要だからな。誠意ある謝罪をしなくては、彼らとの溝を埋めることができない」

「……まことに申し訳なく思います」

誘拐を手紙ひとつで謝ってさらには親睦をーなんて出来っこないか。そりやそうか。

イシユの件は思った以上に厄介なことになってしまっている。イシユ本人が謝罪した方がよりよいのでは、と思うけど……無理だわ。イシユの謝罪とかレアすぎる。

「あとアルメリア君、昨日のような言葉は控えるように頼むよ」

「は、はい……」

私もたいがい問題児という認識なようだ。でもあれはウーフアンが悪いのだ。私は悪くねえ。

「ウーフアン殿が言うにはウロビトの里は崖の上の深い森の中だそうだ。そこには魔物も出る。なので諸君には私とウーフアン殿の護衛

という名目で一緒に来てもらいたい」

「ああ、問題ないよ。ただ、里についたら少し調べ物がしたい」

「里で自由に動けるかはウロビト次第だが、こちらからも可能な限り善処しよう」

「水を差すようで恐縮なのですが……」

「何かね？」

「ウーフアンの態度を見る限り、ウロビトと友好は難しい気がします。いくら大昔は一緒に過ごしていたからって言っても……」

「それは調べてみないとわからない。本当に我々とウロビトの関係が、修復不可能なものなのかどうか。それに、ウロビトは複数の長老が大きな決定権を持つらしい。彼らと会話をして手を取りあうことのできるようにする。それが私に課せられたミッションといったところだな」

諸君の協力もお願いするがな、と辺境伯はウィンクをしながら言った。茶目つ気たつぷりであるが声音は真剣そのものだった。

話も一区切りついたところで交易場の作業員から、ワールウィンドさんの気球艇の改造が済んだとの知らせが届いた。これでいよいよ、客室のウーフアンを迎えに行ったら出発となる。

辺境伯もワールウィンドさんも真剣だ。

私も真剣に行こう。ウーフアンは嫌だけど、真剣に頑張ろう。

「では行こうか諸君！　タルシスとウロビトを繋げるために！」

そう力強く辺境伯は言い放ち、マルゲリータを抱きながら歩き始めた。

真剣であつても犬は連れていくようだ。

2.1. 深い霧が隠すは道か心か

『ウーフアン、今日は世界樹が起きてるの!』

巫女は、シウアンは、とてもうれしそうだった。

『それでね、あの子が教えてくれたの。下の森に懐かしいものが来てるんだって!』

世界樹の巫女。

世界樹と意思を交わすことができる、神聖な方だ。人間でありながら、我らウロビトと共にあられる方だ。

他のウロビトがいるときは毅然と務めているが、私と二人きりのときは無邪気な様子を見せてくれる。それはとても嬉しくあり、それは逆に心苦しくもある。

自由を許されないウロビトの里にいることは、シウアンにとって果たして幸せなのか。

『ね、ね、わたしが迎えに行ってもいい……?』

シウアンは私と二人きりでも、何かをおねだりすることはなかった。

このときが初めてのおねだりだった。

しかし、世界樹の巫女を里の外に出すわけにはいかない。

だから代わりに私が、その懐かしいものを迎えに行くことにした。

巫女の、シウアンの初めてのお願い。それすらも叶えることのできない私は――

扉のノックする音で目が覚めた。

うたた寝していたようだ。昨日から心身が疲れているかもしれない。

原因はわかっている。

今いるこの場所が、いつものウロビトの里ではなく、人間の街だからだ。

「失礼します。送迎の準備が整いましたので、ご足労をおかけします」
「ようやくか」

何も言わずに一日空けてしまった。そのためシウアンに心配をかけてしまっている。

今は一刻も早く里に戻りたい。

「ウーフアン殿、ゆつくり休めたかね」

「……悪魔が潜む人間の街で安らげるものか」

辺境伯と呼ばれていた人間が声を掛けてきたが、どうでもいい。

「悪魔って……」

「また貴様か……」

辺境伯の後ろにいた人間が、何か不満気にしていた。こいつは昨日も散々突つかかってきた馬鹿な娘だ。

昨日はいなかったもう一人の男が馬鹿な娘をなだめている。

どうやら今日はあの悪魔はいないようだ。

やつはありえない存在、ありえてはいけない存在だ。

命を持たずして、命があるかのように振る舞う。

そして人間を甘言で惑わし、心のうちに入り込み破滅へと追いやる。世界樹を陥れ、人間に奇妙な刷り込みをしているのもあの悪魔の仕業だろう。

「ウーフアン殿、今日は私とアルメリア、そして昨日はいなかったが

ワールウインドの三人で送らせていただく。それと今回、私としてはウロビトと友好を交えたい」

「……長老たちと取り次いでほしいと言いたいのだな」

「是非ともお願いしたい。過去に我々とウロビトの間に溝ができてしまったようだが、今の時代までその溝をそのままにしておきたくはないのだ」

「すぐにでも拒否したいところだが、私個人で決めていいものではない。」

長老会議による決議が必要だ。

「いいだろう。だが里で勝手な行動は許さない」

長老に話すまでもないと、この場で拒絶することもできた。

それをしなかったのは、もしかしたらシウアンのためになるのでは、という気の迷いでもあった。

シウアンをこのままウロビトの里に閉じ込めていていいのか。

同じ種族である人間とともにいたほうがいいのではないか。

巫女の付き人としてあるまじき考えが昨日の朝から幾度となくよぎる。

ウロビトの里を思えば、巫女は里に在るべきだ。

だが、シウアンを思うのであれば……私はどうするべきなのか。

物珍し気に見てくる視線が鬱陶しい。

街中を歩いている最中はじろじろと不躡な視線が多く感じられた。だがそれももう終わる。

空飛ぶ魔物と初めは思ってしまった物体。気球艇に乗り込む。

昨日もこれと同じものに乗せられたが、あの時と違って手足は自由だ。

「誰かを乗せることになるとは思ってなくてね。ゴンドラの中は散らかってて人に見せられないんだ。悪いね」

ワールウインドと呼ばれていた男がしまりのない顔をしながら言ってきた。

ゴンドラというのが何かはわからなかったが、その物置部屋のとだろう。誰も入れないように大きな荷物を扉の前に置いて通さないようにしていた。

「組み立て椅子なら人数分用意してあるから、これで好きなどころに座ってくれ」

「あ、ありがとうございます」

「マルゲリータの分が見当たらないが？」

「……抱きかかえてたらいんじやないか？」

「ふふふ、それもそうだな。マルゲリータ、こちらに来なさい」

奇妙な毛玉の生物は魔物ではないようだ。だが意思疎通はできない。

今のところは、この乗り物に乗っている生物は正常だ。

あの悪魔のように命がない存在ではない。

「……この椅子、どーぞ」

悪魔に良いように騙されている娘が私に椅子を差し出した。

ただの愚かな被害者ではあるが、世界樹に似た気が感じられるのが腹立だしい。

そしてその気を勘違いしたのか、世界樹の呪いだとふざけたことを主張していた。

世界樹がそのようなことをされるはずがない。

仮に人間を植物に変えていくのだとしても、それは人間へ下した罰だ。

「……もしかして、この椅子の組み立て方がわからないんですか？」

「そんな単純な構造がわからないわけがないだろう」

確かに初めて見るものだが、他の人間が使っている様を見れば理解

できる。

それくらい予想がつくものだろう。

「……………やっぱり高慢さはイシユと同じだわ」

「何か言ったか」

「いえ、なんでも」

何を言ったかはわからないが、愚かな娘のことなどどうでもいい。空からの景色という、異常な光景を今は楽しむことにしよう。

シウアンへのいい土産話にもなる。

眼下には瘴気の森が見える。

崖を登る必要がないというだけで、想像より早く里に戻れそうだ。

日が沈む前ならば危険な黒猿もいない。

「ウロビトの里ってどのあたりなんだい」

「そのまま進んだ先だ。谷の上にある、深い霧に覆われた森。その中にウロビトの里がある」

この大地で一際大きな森だ。たとえ遠目からであつても目を引くものだというのに、

「濃雲の谷……………」

「碧照の石碑と同じものまであるぞ……………」

愚かな娘はさらに北の谷を凝視していた。辺境伯という男も、何やら奇妙な筒を覗きこみ北の谷を見ているようだ。

「ウーファン殿、あの北の谷にある石碑と同じものを知らないかね？」

「石碑なら谷上の森のそばにある。貴様らが何を気にしているかは知らないが、寄り道なら貴様らだけでするのだな」

「そうだな、すまない……………む？　谷の上の森ということは、ウロビトの里のある森でもある？」

「それがなんだというのだ」

この人間たちは何を気にしている。

「魔物が多いですか？」

そういうことか。

この人間たちの街と違い、魔物の危険性が多い土地柄だとは理解できているか。

「当然、魔物が多い。だがそれは道中までだ。里の中までは入らぬように壁と方陣を敷いてある」

「方陣？」

「我らウロビトが編み出した術だ」

この娘もなんらかの術師だとは思うが、やはり方陣については知らないか。

「それにしても深い霧だなあ。あれは自然発生した霧なのかい？」

今度はワールウインドとかいう男から質問があがった。

「我らの祖が強力な術を用いて発生させた、と私は聞いている」

「祖つてことは今は同じ術は使えないのかい」

「その術に関しては伝承しか残っていない。術の記録は受け継がれていない」

「霧を発生させれるって……あの、北の谷の濃雲も術で作ったとかだった……しますか？」

先程から質問ばかりだな。

そろそろ律儀に答えるのも馬鹿らしくなってくる。

「伝承ではそうだ。巨人の進行を妨げるためにウロビトは結界を張った。それがあの谷の濃雲となったのだと」

「神話の時代の術ってわけか……」

ワールウインドのつぶやきを除いて他の二人は黙りこんだ。この人間たちはもしや、世界樹に近づこうとしていたのか。だとしたら無駄なことだ。伝承ではあるが、実際にあの谷は結界としての役割を果たしている。

「なんで……いや、あの濃雲は消せますか！」

「すでに失われた術だ。消すことはできない。できたとしても、消すわけにはいかない」

今この娘、舌打ちしたぞ。

「アルメリア君」

「ごめんなさい、つい……」

咎められた娘は本当に愚かしい。

この人間たちはウロビトと友好を結ぶつもりで来ているというのに、稚拙な、そして私的な感情で台無しにしかねない。私としてはどうでもいいことだが。

ワールウインドから声がかかる。

「森の中には気球艇を降ろせないな。少し歩くことになるけどいいかい」

「もとよりそのつもりだ」

「私も構わないとも」

「わかりました」

ようやく到着か。

武器を持つということとは、多少は武の心得があるのだろう。魔物に通用しない程度の実力でないことを祈ろう。

「この森の案内は任せてもいいんだね」

「ああ。それとこの森は、深霧ノ幽谷という名称だ」

そこらの森と我らウロビトの術が施されている森を一緒にされているようで、我慢できずに訂正をいれた。

「深霧ノ幽谷、か。ここにあいつがいないことが残念なような、良かったような、よくわからないな」

「イシユのことですか？」

「ああ、あいつの意見も聞いてみたいと思つてね」

イシユというのは確か、あの悪魔の呼び名だったか。

「あの悪魔は里に入れさせるわけにはいかない」

「こいつ……!」

「アルメリア、落ち着くんだ。あいつが悪魔かどうかは置いておくと

して、その辺りも長老会議で決めてくれないかい。個人の意見じゃなくてさ」

長老に話すまでもない。魔物の類を里に入れさせる愚者など、我らウロビトには存在しない。

「ま、今決めることじゃないか。それよりもこの深霧ノ幽谷には他の森より魔物が多いのかい」

「そうだ。貴様らがどれだけ戦い馴れているかは知らないが、せいぜい油断はしないことだな」

「碧照ノ樹海と同じ点が多いのだな。異なる点はウロビトたちの住居も内包されているということか」

「……ウロビトから協力を得られたら、この幽谷の調査もスムーズかも知れませんか」

「そうだな。だがそのような打算は抜きにしても、私は彼らとの友好は深めたいのだよ」

辺境伯という男はずいぶんと聞こえのいい言葉ばかりを言うものだ。それで私から好印象を得て長老たちに上手く取り次いでほしいとでも考えているのか。そんな悪人顔でよく演技するものだ。

この三人について少しわかってきた。

へらへらしているワールウインドという男は尋問役。そのふざけた態度とだらしなさから、甘く見せて情報を抜き取る役割。

悪人顔の辺境伯という男は甘言を使い、内に入り込もうとする役割か。

愚かな娘は……何故いるのか。こいつはよくわからない。愚かだからか？

ウロビトは地脈を読み、例え視界の悪い濃霧の中であろうと道を見失うことはない。

私の案内がなければこの人間たちは、濃霧の中をさま迷い続けることとなる。つまり、私からはぐれることは命の危機に繋がることだ。

……だというのに。

「貴様ら、先程から何をしている」

「ん？ これかい？ 地図を描いてるだけだよ」

「同じくです。でもここ、なんか変ですよ。方角は結構気にしながら描いてるのに……ズレていくというか」

「俺も同じ状況だ。やっぱりこの霧は普通の霧とは違うのかもしれない。方向感覚を知らず知らずのうちに狂わすなんて、谷の濃雲と同じだ」

何故私はこんな奴らの案内をしなくてはならないのだ。

「ウーファン殿、すまない。……諸君、案内を受けているのだから地図を描くのは遠慮したらどうかね」

「冒険者としてのサガというか。次からは案内なしでも行来できるようにしとかないとして建前もあるんだぜ」

「私は最近趣味になってきたというか……」

やはり人間というのは腹立だしい奴らだ。しかし案内するという言葉を翻すわけにもいかない。くだらない奴らに私の言葉を嘘にするなど屈辱でしかない。

それに奴らは、いや、あのワールウィンドという男は、

「……魔物だ」

戦士としてかなり優秀だ。

この濃霧の中、いち早く魔物の接近を悟る。さらには戦闘技術も並大抵の腕ではない。

「うげえ……キノコ」

「印術で頼めるかい？ 俺は隣の山猫を仕留める」

「わ、わかりました」

一方で愚かな娘は、魔物の感知は遅く、戦闘技術も拙い。印術という方陣とはまた違う術を扱うが、特異性を除いても戦士としては未熟そのものだろう。

しかし、あの印術というのは方陣より遥かに攻撃性が高い。シウアを守るためにもあのような術も習得するべきかもしれない。

考え事をしている間に厄介な気が接近してきている。まだ距離は

遠いが注意を促した方がいいか。

「……面倒なやつが近づいてきたな」

「魔物の増援かね」

「そうだ」

それは、巨大な蛾の魔物、ビッグモス。

その鱗粉には生物を錯乱させる毒をもち、鎌のような脚で獲物を裂き肉を喰らう虫。

この幽谷の中でも危険性がかなり高い魔物だ。

幸いにももうすぐ戦闘は終わる。あの虫が来る前に対処の時間がとれそうだ。

「貴様ら、死にたくないなら今から音を立てるな。危険な魔物が近い。その魔物は音で獲物を探る。蛾の魔物が見えたら絶対に、動くな」

「その魔物を倒すとかは……」

「なんでも倒そうとしたらこっちの体力が持たない。避けられるなら避けるべきだよ。その魔物は目が見えないってことでいいのかい？」

「そうだ」

この娘はどこまで愚かなのだ。

有象無象と比べ物にならない魔物もいるということを知らないのか。まあいい。

それよりも、蛾が近づいてきた。

決して早くはない速度でフラフラと飛ぶ巨大な蛾。

一番の不安要素であった小さい獣も、本能で危険を感じているのか身動きひとつしない。

その鎌のような爪には血肉がこびりついている。どこかで他の魔物を捕食したのだろう。ウロビトはこの同族すらも喰らう魔物の危険性、そして特性を学んでいる。

目を使わないため幻術も掛からず、常時飛行状態のため方陣の影響も薄い。ある意味ウロビトと、幽谷の奥に潜む奴らの天敵に近い魔物だ。

接近を悟れたら決して動かず、それが鉄則。

音の発生源を探っているのか、進む速度は遅い。

人間たちも、あの愚かな娘も息を殺して通り過ぎるのを待っている。さすがに危険性を肌で感じる事ができたか。

「もういいぞ」

「気持ち悪すぎる……」

通り過ぎるまで五分近く時間が掛かった。ついには諦めたのか、他の音を探してどこかへ行つた。

「イシユと一緒にいるせいで感覚が麻痺してたかも……挑んじやいけない魔物がいるってわかってたのに……」

「また近づかれては面倒だ。里へと急ぐ」

小うるさい娘もいることだ。

この調子では夜になってしまいかねない。

もう少しでウロビトの里というところで、シウアンの唄が聞こえた。

22. 巫女の守り手たち

シウアンが里の外に出ている。

浅い層だから、やつらはいないだろうがそれでも魔物はいる。里の外は危険だと言い聞かせたのに、何故外に出ているのだ。

「歌声……っ！」

「里が近いってことかな」

私が戻ってこなかったからだろうか。だとするなら、己の不甲斐なさが情けない。

だめだ。今は一瞬でも早くシウアンのもとへ行かなくては。

「……っ！」

「ちよ、急に走らないでー」

人間の案内などより、シウアンの身の安全が何よりも優先される。のろのろと歩いている間にシウアンが魔物に襲われでもしたらと思ってもたつてもいられるか。

進むにつれて唄声がよく聴こえてくる。

世界樹と語っているのか、それとも子守唄を聞かせているのか。

この唄は……語りの方か。

そういえば、瘴気の森に來た存在を世界樹に知らされていたな。

少しばかり落胆してしまう。

シウアンが里の外にまで出てきたのは、戻ってこない私を心配してくれたからと考えたが、世界樹に言われた存在が気になって、ということだからだ。

もちろん、シウアンは私の身を心配もしてくれているだろうが、他の思惑もある可能性を考えてしまってもどかしく思う。勝手な思いだとはわかっているが。

だが今はそれよりも、シウアンのそばに行かなくては。もうすぐそこだ。

「シウ……、……」

姿を見てすぐに名前を呼びたかったが、その衝動を堪える。慣れぬ空の移動で気が弛んでいたのだろう。自身のすべきことを見失うなど。

シウアンは……巫女は今、世界樹と語っておられるのだ。それを邪魔するわけにはいかない。

私に許されることは、語りの最中に魔物が来ないようにするまでだ。

私は、巫女の付き人なのだから。

「！ウーフアン！ よかった！」

しばらくして、巫女は私が来たことに気づき唄をやめてしまった。

「巫女よ、語りの邪魔をしてしまい申し訳ありません」

「ううん、そんな風に謝らないでよ。あのね、世界樹がここにいればウーフアンが連れてきてくれるって教えてくれたの」

「瘴気の森にいた存在ですね。その事について話すのは、ひとまず里に戻ってからにしましょう」

「——っと、追いついたあ……！」

「ウーフアン、殿、急に走って、いったいどうしたのかね……」

「辺境伯、大丈夫かい」

「あ、ああ」

「え……にんげん……？」

「……」

置いていくつもりではなかったが、追いついたことが少しばかり気にさわる。

「巫女よ、この者たちについては後で話します。ひとまず里に戻り——」

「ワールウインドさん!? 人間の子供がいます!?!」

「ひゃ……!?!」

「アルメリア、その子が驚いてるから落ち着くんだ」

言葉を遮るあの奇声はなんなのだ。

「あ、ごめんなさい！」

「にしても驚いたな。迷子……ってわけじゃなさそうだね。もしかしてウロビトの里には他にも人間がいるってことか？」

「貴様ら、説明は里でしてやる。今は黙っ——」

「ウーフアン！ 人間だ！ 私とおんなじだよ!!」

「シウアン、今は一度里に戻っ——」

言葉の途中、背中を強く押された。

勢いのまま、シウアンまでも巻き込んで転倒する。

「なにを——!」「いたっ！」

「伏せる!!」

男の怒声が聞こえると同時に頭上を過ぎ去る雷の槍。

この術は知っている。

ウロビトとは異なるこの術は……

「ホロウだど!？」

「知り合い……にしては物騒だな」

二体のホロウがいつの間にかそばまで来ていた。何故こんな表層に。

「アルメリア、辺境伯を守るんだ」

「は、はい！」

ワールウインドが指示を出しながらホロウに対し、白兵戦に持ち込もうと接近した。

その恐ろしく速い剣撃はただの魔物であれば回避することは叶わないだろう。だが、相手が悪すぎる。

ホロウは魔物とは異なる存在。

魔物でなく、ウロビトでもなく、人間でもない。

見た目こそ脆そうな姿だ。だが幻術の類を得意としており、その姿を見た時点で術中に嵌ってしまう。

「手ごたえがない……?」

「ワールウィンドさん! 右!」

攻撃が当たったように、本人には視覚上認識されるが実際はただの空振り。強い幻術ではなく、相手の認識にズレが起きるものだ。そのせいで現実と視界の離反が起きる。

出鱈目に攻撃すればまぐれで当たることもあるが、その前に雷の槍で貫かれるか、氷の弾で碎かれる。

「!」

左右から挟みこみ、ワールウィンドを貫こうと振りかぶるホロウ。

娘の杖から火の球が飛ぶ。

二体のうち一体の背後、その足元へと飛んでいくその攻撃は、幻術でズレが起きるなど知らないだろうに爆発で巻き込むことを考慮されていた。ただの偶然か、それとも少しは戦いに工夫をこなせるのか。

だが、

「見もせずに……!?」

ホロウは回避した。

一切見向きもせずに、正確に。

「ウーファン! はやくあの人たちを助けてあげて!」

ホロウが二体、私ひとりであれば手こずる。人間たちは相性こそ悪いが、思いのほか戦えるようだ。

「巫女よ、あまり私から離れないようにしてください」

巫女の願いもあることだ。今回は、その相性の悪さを埋めてやろう。

「今からホロウを封縛する。貴様らはそれまで粘れ」

「封縛? なんであれ粘れって言うなら粘ってみるさ。アルメリア、どうもこいつらは変だ。攻撃を当てようとせずにさつきみたいに足

元を狙ってくれ」

「は、はいー」

方陣を展開するまでの時間稼ぎとしては充分なはずだ。

規模は広すぎなくていい。ホロウ二体を収められる広さ。ホロウ以外の気を対象から外すように、地脈と方陣の調整を行う。

中心から陣が広がり、この場にいる全員を飲み込む。

白く光る方陣に人間たちが戸惑いを表した。

「なにこれ……」

「貴様らに対して害はない。無駄話は後だ。ホロウを仕留めろ。やつらの立ち位置は幻術で実際の位置と少々のズレが生じる。突きや唐竹ではなく横に薙ぎ斬れ」

脚封の方陣。

流れる地脈と対象の気を絡ませ、その場に押し留める術。

これはホロウの幻術に対して単純かつ有効な対抗策となる。

本来であれば、ホロウの雷の槍や氷の弾への対抗する術も必要だが今はいいだろう。この人間たちの力でなんとかなる。

「お、ようやく手ごたえありだ」

「こつちもー」

幻術によって生じていた相性の悪さを方陣によって埋めた効果が大きかったのか、すぐに戦いは終わった。

「今のは、魔物……なのかね？ それにその子はいつたい」

「質問は後にしろ。今は里に入ることが優先だ」

里には報告することが山積みになったな。

人間たちの存在、表層まで出てきたホロウ、悪魔の存在。それに、人間たちが巫女に何をするかわかったものではない。

「里にはもう近いのかい？」

「質問は後にしろと言ったはずだ。まあいい。もう見えてくる」

「扉……」

「アルメリア君、どうしたのかね？」

「あ、いえ。碧照ノ樹海でも扉があったのでちよつと気になって」

「そういうことか。だがこの幽谷にはウロビトの里があるのだから、扉があつても何ら不思議ではない」

「そうですね、ちよつと神経質になり過ぎた」

平時であれば一度里の外に待たせて、先に中のウロビトに説明をしておきたいが今回は止むをえまい。ホロウの出現があるため、共に中に入ってもらおう。

妙な真似をしないように釘を刺してから扉を開けようとするれば、先に巫女が扉を開いた。

「みんな、ようこそウロビトの里へ！」

「あ、ありがとう」

……とうとう人間を里に入れてしまった。

物珍し気にあたりを見回す人間の姿が、なおのこと不安を駆り立てる。

「人間だと!? 何故ここに!」

「ウーフアン、無事だったか! だが何故人間と共にいる! 巫女様まで!」

ウロビトの兵士は弓に矢を番えながらも、私と巫女が共にいることから攻撃まではしなかった。

巫女がいるにも関わらず攻撃を行うような愚か者はウロビトにいるとは思いたくないが、少しばかり不安だった。

「瘴気の森で私が人間を発見した。その後、訳あつて人間の街にいた。その事についての説明と、我らウロビトと再び絆を結びたいそうだ」

「人間が我らと再びだと? そんな言葉信用できると思っているのか?」

「我ら個で判断するわけにもいかない。長老会議に決定を委ねるつもりだ」

「だからといってこの里まで連れてくる必要はなかっただろう」

「私がウーフアンに迎えに行つてあげてつて頼んだの!」

巫女の言葉に兵士は口ごもる。

「し、しかし巫女様」

「この人たちは悪い人じゃないよ。さつきもホロウから守ってくれた

もの」

「ホロウから？　っホロウが出たのですか!？」

巫女と兵士のやり取りを見ていた人間たちが何やら顔を見合わせ話始めた。

「なんとも歓迎されてるとは言い難い雰囲気だな」

「ああ、だけどこれが普通さ。タルシスみたいに何でも受け入れるのがおかしいだけだよ」

「押し付けるのはよくないことだが、この件に関してはタルシスのあり方を受け入れてもらえるように努力しなくてはな。誰もが協力し合う、そんな未来のためにも」

「前向きだねえ」

「ふ、二人とも、それよりあのミコちゃんって子について気にならないんですか」

この愚かな娘はどこまで愚鈍なのだ。

「気安く巫女を呼ぶな、人間。この方は世界樹の巫女なのだぞ」

「世界樹の、巫女？」

そういえばそんな単語を聞いたことがあるような、と小さく漏らしたのが聞こえる。

思っていた以上に馬鹿だった。

昨日たしかにこの娘はあの場にいたはずだというのに。

それよりも、

「巫女よ、私は長老へ報告に行ってきます。彼らは人間ですが、あなたと同じ善なる者とは限りません。注意してください」

一度長老たちの耳に入れなくてはならないことが複数ある。

後回しにすれば里中が混乱しかねない。報告前に、兵士に巫女を代わりに守るように言っておくのを忘れない。

「ウーファン、大丈夫だよ。この人たちは悪い人たちじゃないよ」

「巫女……」

やはり、同族である人間と共にいたいのだろうか。

「貴様ら、妙な真似は決してするなよ」

「それは心得ているとも。ところで報告に私もついていってもいいだ

ろうか。タルシスの冒険者があなたを誘拐したことについて、謝罪に伺いたいのだが……」

「そのことに関しても報告にあげる。謝罪を受け取るかどうかは長老たちが決める。それまで貴様らは何もするな」

「ウーファン！ そんな言い方しなくても！」

「巫女、信じることは美徳ですが、人間たちの祖は背を向けて逃げだしたのです。ゆめゆめ、それを忘れなきようお願いします」

巫女は不満そうに頬を膨らませている。なんとも微笑ましくあり、この場から離れることが惜しくなる。だが、強いては里のため、急ぎ報告は済ませなくてはならぬ――

「わっ……！」

「わひよあ!?!」

大きな雷鳴が里中に、いや、それよりも広い範囲。幽谷よりも外、大地中に轟いた。

何人かが空を見上げる。雷雲は付近にない。

「……雷鳴と共に現る者」

「なんだい、それは」

「雷を操る竜だ。だが案ずるな。かの竜は空を飛び回りこそするが、わざわざ谷や森に来ることはない」

「赤竜と似たようなものか」

もうすぐ夕暮れだというのに現れるとは。現れる法則など存在しないが、それでも珍しく思える。二日前にも一度現れていた。これほど短期間で出現するのは初めてかもしれない。

かの竜の在り方など我らには理解はできないことだが。

「だ、大丈夫かなあ……」

「お姉ちゃん、どうかしたの?」

「あ、ううん。ちよつとね。私のえーつと、知り合いが竜に関係しそう

なことやってそうで……」

人間の娘に、シウアンが声をかけた。お姉ちゃんと。許しがたい。何故そんな愚かな娘をお姉ちゃんと呼ぶのだ、シウアン。

「まあ、さすがに竜相手は危険ってわかってるみたいだったから大丈夫だと思うけど……」

「竜関係ってあいつ、随分と滅茶苦茶なことやろうとしてるんだな」

「ワールウインドさんは知りませんか？ 孔雀亭にある黒い依頼書」

「ああ、知ってるよ。噂になってるくらいだよあの黒いのは」

いかん。人間たちの竜の話よりを聞いているよりも、早く長老への報告を済ませて巫女の元に——!?

突然、鎖が千切れるような音が聞こえた。

同時に襲うおぞましい程の寒気。

「っ……なんだ今の音は」

人間が何かをやったのか。

だが何か妙な動きをしていたわけではなかった。人間どもの独自の術か何かか？

「アルメリア!? どうしたんだい、アルメリア!!」

「な、何が起きたというのだ。巫女殿まで」

しかし、人間の娘が頭を抑えて蹲っている。巫女も同じく。周囲を見れば何人かのウロビトも今の音による影響か、変調をきたしている。

何らかの攻撃か？ しかしこの影響の差はなんだ。

「貴様ら、さっきの音はなんだ！ 巫女に何をした！」

「お、音？ ウーフアン殿、音とはいったいなんだ」

「とぼけるのか貴様！ 今の音が聞こえなかったわけがあるまい！ あれほどの音を！」

「……………ウーフアン、だめだよ……………その人たちじゃないよ」

「巫女！ 大丈夫ですか！」

「うん……世界樹がすごく怯えてる」

再び雷鳴が轟いた。それは激しく、まるで怒りを表現するかのよう
に。何度も、何度も。

「いったい何が起きているというのだ……！」

「ウーファン！ 何があった！」

異変を察してかウロビトの兵士が状況確認のためやって来た。だ
が私もわかっていない。

「わからない、だが今の音で何人かが不調に」

「音？ どんな音だったんだ」

「な……」

聞こえてなかっただと？ あれほどまでに身の毛のよだつおぞま
しい音が？

あの人間たちだけでなく、ウロビトの兵士までもあの大きな音が聞
こえていない。種族に関係なく作用する音に関する術か何かか？

ホロウの新たな技術？ だがこの雷鳴はいつたい。

「……う」

「アルメリア！ 気がついたかい！」

人間の娘も気づいたようだ。いつの間にか身の毛のよだつ不気味
さがなくなっている。

「今の、は……う？」

他のウロビトたちも気がつき始めたのか、少しずつ不安と動揺が広
がりだしている。

「……私は長老に報告へ向かう。今の件について、巫女が気になるこ
とを仰られた。その事も含めてな」

「あ、ああ」

「その人間たちが原因ではないらしいが、警戒を怠るな」

「わかった」

里の中を進んでいると、どうやら先ほどの音で不調をきたした者は

方陣師として優れた者ばかりのようだ。

もしも今、ホロウが襲ってきていたらどうなっていたか。

報告に向かってもなお、空では激しく雷鳴が轟いていた。

23. 己が選択に悩んだ軌跡の上

鎖が切れる音がしたとき、意識が遠のくほどの不気味さを感じた。なんだったんだ、あれはいったい。

ウロビトの人たちも何が起きたのかわからないらしい。ワールウインドさんや辺境伯もだ。

それどころか二人は音が聞こえなかったという。

「鎖が切れる音、か。ウロビトの方でも聞こえたやつと聞こえなかったやつで別れてるみたいだな」

「聞こえた者には何か共通点でもあるのかもかもしれないな。今はもう大丈夫かね？」

「はい……」

少しぼやつとするが、今はもう問題ない。

遠雷が聞こえるということは、今の鎖の音も竜に影響があつたのかもしれない。イシュは大丈夫だろうか。

ここにはいない、女の子と呼んでいいかわからないイシュの身を案じていると袖をくいくいと引っ張られた。

「ほい？ あ、えつと、ミコちゃ……巫女さん？」

「あ、そっか。自己紹介してないね。私の名前はシウアンっていうの。お姉ちゃんたちの名前はなんていうの？」

ヤダこの子、礼儀正しい。

ウーファンとは大違いだ。

「私の名前はアルメリアです。で、こちらのお髭の方が……」

辺境伯の紹介をしようとして思った。

名前なんだっけ。

辺境伯って言うのもぶつちやけあだ名らしいからなあ。もう辺境伯でいいや。

「辺境伯です。で、こちらの白髪の人がワールウィンドっていう人です」

勢いで辺境伯は辺境伯と済ませる。

紹介を受けた本人も訂正する気はないようだ。辺境伯って呼ばれ方を気にいつてるみたいだからいいことなんだろう。

「シウアン殿、よろしくお願いします。先ほどの音の影響はもう大丈夫ですか?」

「もう大丈夫。アルメリアに辺境伯、ワールウィンドだね。こちらこそよろしくね!」

笑顔を浮かべる巫女に、近くの兵士が小言を言う。

「巫女様、まだこの人間たちが信用にたる存在かわかりません。あまり近づかない方がよろしいかと」

「もう、ウーファンみたいなこと言うのね。この人たちは大丈夫だよ」
「ですが」

「むー、ここじゃゆっくり話せないや。アルメリア、一緒に来てほしいの」

「へ? 私?」

突然の個別指名である。

見たところこの子は、シウアンはウロビトの里の中でもお偉い立場のようだ。他のウロビトの反応を見る限りは。世界樹の巫女らしいからそうなのだろうけど、そんな人物が私を個別指名だ。

「巫女様」

「大事な話があるから、お願い」

巫女に強くは出れないからか、兵士は言いよどみながら私をじろじろと見……

「……その人間とだけですよ。その人間、念のため武器となるものはそこに置け」

私に対して力がないと判断したのか、一応は許可が出た。ひよわ認定はうれしくないけどまあいいや。

武器といってもワンドは武器に含まれるのだろうか。とりあえず投刃用ナイフはワールウィンドさんに預ければいいかな。ワンドも

置いておこう。

ワールウィンドさんはそれらを受け取りながら、少しだけ真面目な顔をして小さく言葉を漏らした。

「ここに来る前、君の家で話してたことを覚えてるかい？」

「え？ えーつと？ 砂糖が無くなってた？」

「……この里にはもしかしたら、呪いをなんとかするものがあるかもしれないって話だよ。それがどんなものかは俺もわかってないが、巫女なら知っているかもしれない」

「つわかりました！」

さりげなく聞いてこいってことだろう。ここに呪い解除の方法がある根拠は聞いてないけど、聞かせてもらえなかったけども、まあベテランの勘とかそんなのかもしれない。もしくは……いや、今はいや。

「えっと、巫女様？ お待たせしました」

「シウアンでいいよ。あつちで話そう」

そういつて手をひいた先は小さな家だった。

中には誰もいない。壁に掛けられている服はシウアンに似たサイズの僧衣のようだ。というかシウアンのだろう。つまりここはこの子の家かな。

「それでシウアン、話っていったい？」

誰にも聞かれたくない話だろうか。家にまで連れこむなんて。

しかしなおさら私を選んだ理由がわからない。

「へ？ はい？」

シウアンは私の手を両手でつかみ、瞑想でもするかのように目を閉じた。

話じゃなくて唐突な瞑想である。戸惑っている私を置いてけぼりにするかのように、状況はさらにわけのわからないものになる。

彼女の、いや、彼女と私の周囲に、小さな明かりが灯りだしたのだ。

蛍や火ではない、と思う。

明かりはふよふよと周囲を漂い明滅していたが、だんだんと私に向

かって近づいてくる。

これ、あたっても大丈夫なんだろうか。

「大丈夫だよ」

見透かされたかのように、優しく話すシウアン。

そのまま明かりは私の胸に触れて……

「え……う？ あれ……う？」

明かりは消えていった。

だけど、明かりが消えたことよりも奇妙な感覚がある。

呼吸が楽だ。

息苦しさがない。

今まで感じていた腕の痺れもない。じくじくとした痛みもなくなっている。

袖をまくればそこには………見慣れた、植物に変わりかけの腕があった。

「ごめんね。世界樹にお願いしたんだけど、世界樹でもこれ以上は無理だって」

「……ど、どうなってるの？ 治ったわけじゃないのに、楽に……世界樹にお願い……？ どういうこと？」

治ったわけではない。未練がましく腕に植物がひっついてる、というわけでもない。引っ張ってみたら痛かった。だけど明らかに今までと違う。今朝なんて息苦しさが付きまとうほど悪化していたのに。

世界樹にお願いした？ 世界樹がお願いに応えた？

そんな馬鹿な。世界樹は遠い地にある。いや、碧照ノ樹海を思えばここも世界樹内部という可能性があるけど、そもそも世界樹に意思があるみたいな言い方じゃないか。

世界樹の巫女だから世界樹と疎通が可能？ ただの巫師か何かじゃない？ ワールウィンドさんが言ってたのはこの子のこと？

「えっと、ごめん。ちよつと、混乱してて……」

疑問しかない。

だけどその疑問より先に、確認しないといけないことがあるはずだ。

「この、植物になる呪いは……治ったってわけじゃない……？」

「……うん。今は世界樹にお願いして、少しだけ止めてもらったの」

やはり治ったわけではない。

その事に落胆などしてられない。治ったわけではないが、今までにない事態なのだ。呪いに対しての有効手段となる切欠が見えたのだ。

「えっと……世界樹にお願いって言ってたけど、アレって意思疎通とかできちゃうもんなの？」

「うん、でも私しかできないみたい。ウーファンたちは世界樹の声が聞こえないんだって」

「それで、世界樹に頼んで私の体を楽にしてくれた？」

「うん。あの子がね、あなたたちのこと、気にしてるの」

事情などを把握しようとして努めてみたけど、なおのことわけがわからない。

世界樹の声？ それは聞こえて大丈夫なものなの？ 幻聴とかじゃない？ 聞いてたら記憶を奪われて洗脳されたりとかしない？

世界樹が私たちを気にしてる？ 何を言っているんだこの子は。

「世界樹が、あなたたちが来ることを教えてくれたんだ。今、世界樹は何か怯えてるの」

「えつと、ちよつと待って。全然わけがわからないんだけど。いや、本当にわけがわからないんだけど」

「あ、いっぱい色んなこと話されたら驚いちゃうよね。ごめんね」

世界樹が怯えているとか、いつたいなんのことだろう。というか、もつと怯えてしまえ。そう言いたくなるけど世界樹の巫女の前でそんなことは言えない。

怯えているといえば、以前見た夢を思い出す。

この体の植物が黒い影に怯えていた夢を。

世界樹の呪いの植物だからこれも世界樹に入るのだろうか？ だとしたら怯えている対象は影？ 幽霊に怖がる子供か世界樹は。

「怯えているって黒い影みたいなのには？」

「世界樹の声が聞こえたの!?! すごい！ すごいすごい！」

「おわおう!?!」

「アルメリアにも聞こえたんだね！」

「ち、ちがうんです！ ちがうんです！ ごめんなさい違うんです！」

「え？ 違うの？」

ものすごい勢いで詰め寄られた。世界樹の声が聞こえる仲間が見つかつたという喜びだつたのか、それに配慮せずに正直に話してしまつたけどよかつただろうか。いや、騙し通せるものじゃないし今のでいいはず。

「この、呪いの植物が怯える夢を見たことがあって、その怯えてた相手が黒い影だつたから……」

夢の内容を出会って間もない少女に話すのってすつごい恥ずかしい。

「そうだつたんだ。でも、たぶん世界樹は同じものを怖がつているよ」「でもその怯えているのと私たちに何の関係が……」

「……あなたたちの仲間に、すごく長生きの人っている？」

「なんでそんなことを？」

「世界樹が言つてたの。懐かしい存在がいるって。その存在がもしか

したら助けしてくれるかもって」

長生き。世界樹が言う懐かしい存在。

心当たりがある人物は一人。千年は生きているイシユだ。だけどイシユはハイ・ラグードの世界樹としか関わりがない。世界樹を創った時代の人物だから懐かしいということだろうか。

さらに言えば、イシユが世界樹を助けるなんて想像できない。あの人も私も、世界樹のことが嫌いだし。いや、そもそも助ける云々は予言じゃなくて願望っぽいから違うか。

「その体の植物については……ごめんなさい、それはあの子の力によるもの。あの子の力の影響は谷を越えてないはずなのに……」

考え事をして黙り込んだのをどう思ったのか、シウアンは呪いを謝った。

この呪いが世界樹によるものだと知っている。今の言い分だと、何故私の体に呪いがあるのかはわかっていなさそうだ。谷を越えていないはず、というのは丹紅ノ石林よりさらに北の谷を言うのだろうか。

「……私はこの体を治す方法を探しています」

謝られたって困る。

いいよ、だなんて許せるはずもない。かといって、よくも呪ってくれたな、って恨み言を言おうにも、向こうさんも知らず知らずにとって状態だ。っていうかシウアンは板挟みになるだけだし、ただの八つ当たりになっってしまう。

だから私からは、治す方法を知っているなら教えてくれ、としか言えない。助けを求められてもそんなのは後回しだ。

「だから、それ以外のことには力を注ぐ余裕はありません」

「そっか……」

……

……

……いや、そっか……。じゃなくて。

こう……他にないのだろうか。それなら呪いを治す方法知ってるから教えてあげる、みたいなのかな。それとも解呪方法を知らないってことだろうか。そういうの本気で困る。

でも安らげることはできていたし、弱めることと解呪することは全然違うってこと？ 巫師じゃないからさっぱりだ。

それとも子供だから、こういった言葉の裏を読むのが難しいとか？ そもそもこの子は見た目通りの年齢なのだろうか。イシユという例外がいるんだし、それに世界樹の巫女なんだし。

うん、そうだ。本当に人間なのだろうか。ダメだ、どんどん気になることが増えてくる。余計なことを考えずにもうストレートに聞こう。

「この呪いは治せないんですか」

「……わかんない」

……ふりだしに戻る。そんな感じだろうか。

いや、少しだけ制限時間が伸びたのだ。その分だけプラスなはずだ。

「でも、治せると思う……さっきの感覚、何か足りないだけで、それさえあれば治ると思う。それが何かはわからないけど……」

「何か、ですか」

曖昧すぎて気休めの言葉にも感じる。世界樹の巫女って言われてるし、そんな気休めとか言わなさそうだけど、年齢的には言いそうな気がするし判断に悩む。

「でも、抑えることならできるよ。そばにいないとだけど……」

「さっきのみたいに、ですか？」

「うん。その場合、アルメリアにはこの里に居てもらわないとだけど

……」

冒険はやめてここにいれば制限時間は無限になると。

正直すごい魅力的な話でもある。里の中なら冒険による危険もないだろう。制限時間の恐怖もない。

イシユはどう言うだろうか。

世界樹による災厄を打ち消すためにタルシスへ来たイシユ。シウアンはある意味それに最も近い存在だ。なにかが足りないというのであれば、イシユはそれを探しに行くだろう。そして本当にそれで災厄を打ち消せるかどうか、テストのために私が必要となるだろう。となると、私が死なれては困るはずだ。そのためたびたび守ってもらった感があるし。

あれ？ これひよつとして、私は里にいるべきなのでは。

というか冒険時の私って何か役に立ったことあったろうか。こないだなんて気球艇墜落させたよ。あれ？

イ、イシユは寂しがりだから一緒にいてやらないと？ いや、でも目的一直線タイプでもあるし、この話に賛成しそうだ。私の存在意義とはいったい。あ、実験のテストか。じゃなくて、冒険的な意味では……あれ？

「ええつと……」

というか私はなんでこんなにこの話を拒否する理由を探しているんだろう。

利点しか見当たらない。悪い点はせいぜいウロビトの里の排他的雰囲気くらいだ。そんなのは10年近く引きこもってた私に効果が薄い。

考えてた以上に、あのめっちゃくちゃな冒険が好きになったのだろうか。

イシユと私の目的を思えば、この話は乗るべきだ。冒険が好きだとかそんなのを優先してすべてがダメになってはひどすぎる。

「……………返事は今じゃなくても、いいですか？」

乗るべきなのに、返事は後回しにしてしまった。

結構私は優柔不断なのかもしれない。イシュと相談して決めよう。
うん。勝手に決めちゃ怒られそうだしね。

「うん、いつでもいいからね。でも、この里にいる間は私と一緒にいたほうがいいよ」

「そうですね。シウアンが良ければお願いします」
「うんー！」

世界樹を助けてほしいみたいな話を断ったのに、この子ったら優しい。

「アルメリアさえ良かったら、いろんなお話聞かせてくれない？ 私、この里から出たことないんだ」

「箱入り娘とな。いいですよーって言っても私も引きこもってたし……………ここ一週間の冒険の話ならできますよ」

「聞きたい聞きたい！」

どうせなら凶鑑や地図を持ってきて、それらを見せながら話を聞かせたいところだ。今から取りに行こうか。でもあのウロビト兵士さんに邪魔されそうだしなあ。

仕方ない。ここは私の話術で頑張るしかない。あとは持っているものでなんとか……………何か魔物の素材でも入れてないかとポケットをまさぐれば、出てきたのは白い笛だった。そういやこれポケットに入ればなしだった。

熊騒動のとき、ギルド長から受け取った笛だ。ローラー作戦のためのものであったが結局吹かず仕舞いでずっと忘れていた。

しかしこれはなんの変哲もないただの笛。話を盛り上げるには難

しい。熊の話になったら小物として出そう。
それから私はシウアンに、今までの冒険譚を聞かせた。

——警鐘が鳴り響くまでは。

熊のポーズを取りながら冒険譚を聞かせている最中に、突如鳴り響いた警鐘。それと同時に聞こえてくる怒号。

「ホロウが入り込んだのかも……」

「よくあることなんですか？」

今の私に武器はない。なくても印術を使うのには問題ないけど。

そもそもウロビトの兵士がいることだし、何もしなくてもよさそうではある。

「何度かあつたよ……だけどなんだか、いつもよりおかしい……」

家の外からは激しい音が聞こえる。怒号に悲鳴、戸惑いの声。

背筋に冷たいものが走る。

どうするべきだ。そうだ、辺境伯。あの人を守らないと。

家から出ようとしたが、外から抑えられているのか開けられない。

「誰かそこにいるんですか！」

「開けるな！ ホロウの襲撃だ！」

「私も戦えます！」

「ホロウ相手に人間の力が通用するものか！ 人間がどうなろうと構わないが、巫女様に危険が及ぶ可能性があるのだ！ お前はそこにいろ！」

あの兵士だちくしよう。

ほっそい腕のくせに案外力が強い。私が弱いのか。

「……やっぱりおかしい」

シウアンは目を閉じ何か集中しだした。

私としては辺境伯が無事か気になりすぎて落ち着かない。ワールウインドさんがいるから大丈夫だとは思うけど。相手はホロウ。

ホロウといえばあの奇妙なやつらだ。結局説明は受けてないが、まるで人影と霧を混ぜたような存在。目からは血涙のようなものを常

に流していた不気味な存在だ。

幻術が得意であり、それとは別に背後から迫る攻撃をも感知してみせた。

「ホロウの数が……多い……？ それもすごい……」

シウアンが戸惑うように言った。

ウーファンと同じように、敵の感知技術があるのかもしれない。

「そいつらを止めろー！」

外から聞こえる声が、争いの音がどんどん近づいてくる。

押されている……？ 落ち着け、焦るな。

ホロウが何かわかっていないけど、情報はいくつかある。幻術を使うこと、回避能力が高いこと。遠距離攻撃を扱うこと。

そしてここは家の中だ。入ってくるとしたら、扉からだ。

前の戦いでは、ホロウの幻術にいつの間にか嵌っていた。それならホロウを見ないように、扉に向かって印術を放てばいい。

外から兵士の叫び声が聞こえる。

いよいよだ。

扉のきしむ音とともに、火球を投げつける。

小さな爆発音。

いくら回避能力が高くても、幻術が関係ない状態で避ける場所もなければ当たるのだ。

聞いたことのないような悲鳴とともにホロウが倒れた。

数が多いのだ。まだ気は抜けない。

次のホロウが見えたと同時に、同じ場所に向かって火球の印術をぶつける。それをひたすら繰り返す。中に完全に入られたら危険だ。

繰り返すこと何回だろうか。早くもきつくなってきた。

頭がぼーっとしだした。一回でも不発になれば終わるといふのに、集中力が途切れかけている。

外ではまだ争う音が聞こえる。

助けを回す余裕はなさそうだ。あるいは、助けに向かつてはいるが足止めを食らっているか。

次が来る。

入ってこようとしているホロウは今までのやつより大きいやつだ。ホロウのボスだろうか。それなら、倒せばきつと熊の時と同じように散っていくかもしれない。

希望が見えてきた。火球もうまく起動ができています。

「クイーンまで……!?!」

シウアンの驚く言葉が聞こえる。やはりボスクラスの存在のようだ。

ならば、倒せばこの戦いも終わりが見える。

放った火球は外れることなく、ホロウのクイーンにあたり小規模な爆発を起こす。

——倒せていない。

ホロウクイーンが家の中に入り、その姿の全容が露わになる。

輪郭はまるで豪華なドレスを着こんだ婦人のようで、その白く何も写していないような不気味な眼からは、ほかのホロウと同じく血の涙のようなものが見える。

頭の髪なのか、飾りなのかわからないが、その装飾は他のホロウと違い翼のごとく広がり、もしも人間であれば王族か何かと思えそうな立ち振る舞いだ。

ホロウクイーンの足元から影が伸びる。

伸びた影は途中で千切れ、意思を持ち出したかのように形を変えて蠢きだす。

影は大きくなり、人の形を取り出した。腕が生え、眼が生まれ、血の涙を流しだす。

「……なにそれ」

ホロウを生み出した……？

どれだけ倒しても、このクイーンを倒さないと意味がないってこと？

それなら、ここまで来た今が最大のチャンス。

「あ……」

ホロウクイーンと眼が合った。

それだけで脳を揺さぶられるような感覚が起きる。

体から色が失われていく。まるで影と霧を混ぜたかのように、暗くて透明な紫色に。

自身の眼からは血の涙が溢れだす。自分という個がなくなっていく。

「アルメリアに手を出さないで!!」

クイーンの前には保護すべき子が立ちふさがった。

保護すべき？　なんだっけ。そうだ、お守りしなくてはいけない。それが私たちの使命。

周囲に小さな灯りがともる。これは保護対象の……

いや、私たちの使命ってなんだ。

私は何を見てたんだ。何を考えてたんだ。

手を見る。普通の人間の手だ。服の内側はともかく。幻覚……？

「シ、シウアン！」

呆けている場合じゃない。シウアンがホロウクイーンと対峙しているのだ。

「シウアン下がって！ 危ないから！」

「アルメリア、ごめんね。こんな状況になっちゃって。一緒に呪いを止めたかったけど、ごめんね……」

「シウアン！」

ホロウクイーンが動き出す。体がかがめ、視線を合わせるように。あの眼はまずい。さっきのことを思い出すだけでおぞましい。自分を見失わせるような強力な幻術。

不味いとはわかっているけど、対抗策が出るわけもなく。

「シウ……」

シウアンが倒れ、私もまた倒れてしまった。

「あ、れ……う？」

意識を取り戻したとき、見慣れない台座の上だった。

「――」

周囲を見渡すと、前にいるのはゆらゆらと揺れているホロウクイーン。隣にはシウアンがいた。

どういかわけか私はまだ生きている。シウアンも生きているようだ。寝息がかすかに聞こえる。

ホロウクイーンは唄を歌っている。鼻歌のように、歌詞などのない唄だ。どこかで聞いたようなリズム。

周囲を見渡せばクイーンの他にもホロウが数体。どういうわけか襲ってくるわけではない。

あの襲撃は誘拐が目的だったのだろうか。未だにホロウとウロビトの関係がわからないから予想も立てにくい。

なんにしろ、今は無事だけどいつまた襲ってくるかわからない。何らかの儀式の準備とかをしている最中、なんてこともあるかもしれない。

まだ少し頭がぼんやりするが、印術は使える。

このままいるより、強引に突破を目指すべきか。

『絶対に無茶しないって約束してくれ』

ワールウインドさんとの約束が脳裏によぎる。

印術の起動は中止した。

さすがに無茶すぎる。現在地がわからない状態で、敵地の真ん中。自分だけでなくシウアンもいるのだ。

少なくとも今は待つべきだ。

ウロビトの里にはワールウインドさんがいた。あの過保護な人のことだ。今頃助けに向かっているかもしれない。

ならば、今の私がすることはひたすらに待つことだ。

24. 迷える路に終わりなし

シウアンが、巫女がホロウたちに連れ去られた。

その事態が発覚したのは、ホロウたちが撤収した後のことだった。

長老たちの守護などより、巫女の守りに徹するべきだった。

「なぜ巫女をお守りできなかったのだ！」

負傷した兵士に聞いたです。兵士は沈痛な面持ちのまま答えた。

「すまない……クイーンも紛れていて、私ではどうしようもなかった」
「ウーフアン、責めるのはよせ。あれほどホロウが大挙に押し寄せてくるなど今までになかったことなのだ」

何を呑気なことを言っているのだ。巫女が連れ去られたというのに。

そうだ、シウアンが連れ去られたのだ。すぐにでも連れ戻さなければ。ここで話していても時間の無駄だ。

「動ける者はすぐに準備しろ！ ホロウから巫女を連れ戻す！」

先の襲撃で死傷者はいなかった。だが大勢が負傷している。戦いに赴けるのは20人、いや10人いればいい方か。

ホロウの拠点を襲撃するのであれば、心もとない人数だが巫女を取り戻すためにも弱音など言っていられない。

「ウーフアン、勝手に決めるな。今回のホロウは今までと違う。まずは長老の決定を待つべきだ」

——何を言っているのだ、この兵士は。

シウアンがどのような目にあわされているかもわからない状態で、悠長に長老会議の決定を待つというのか。シウアンの身を案じずに。

「待つだど？ 待てば事態が好転するとも言えるのか？ そんなわけ

がないだろう！」

「長老会議の決定は必要だ。お前もわかっているだろう。巫女様がこの里に来る前から、我々は長老会議に従って今までやってこれたではないか」

「だったらどうした！ 決定が出ればホロウが巫女を帰すとも言うのか！」

「巫女様を救出する目途がない今、無策に挑んでは無駄死にだろう」

「貴様ら……！ 巫女の神託にどれほど私たちが助けられたかを忘れ、何かあつたら自分の身の心配か？」

目の前のウロビトたちと、我が身可愛さで巨人から逃げだした人間たち。これでは大差がないではないか。

長老会議が無意味とは思わない。だが、決定を待つ時間は無意味極まりない。どのような決定であろうと、巫女を助けるという方針になるはずだ。もしもならないのだとすれば……我らウロビトも人間と変わらぬ恥知らずということになるのだろう。

「私は行くぞ！ 何もせず長老会議の結果を待っている貴様らに期待することなどない！」

ここまで発破をかけても動こうとしないとは。もういい。ひとりででも巫女を取り戻しに行く。

ホロウの目的など考えてもわからぬ以上、とにかく動くしかない。

「待ってくれ」

その言葉に、巫女を連れ戻す覚悟をようやく決めたのかと思い振り返れば……

「……なんだ、人間。今は緊急事態だ。貴様らに構っている暇などない」

人間の男、ワールウィンダだったか。その男を先頭に辺境伯という人間もともに来た。

「アルメリアを見なかったか。どこを探してもいないんだ」

「アルメリア？」

「俺たちと一緒に来た女の子だよ」

あの愚かな娘か。

確かに見当たらないが、どこかの物陰にでも隠れているのだろう。

「あ、あの人間の少女なら、巫女様と一緒にホロウに連れていかれた……」

「なんだと……！」

未だにそばにいた兵士が答えた。

理由はわからないが、巫女だけでなくあの娘まで誘拐か。

……このワールウィンダという人間は、それなりに武に心得がある。

「どうやらそうらしい。私は巫女を取り戻すためにホロウたちの居住地に行く。貴様はどうする」

ものは試しにと人間の意思を聞く。

伝承通り、我が身可愛さから逃げだす人間か。それとも――

「俺も行こう。絶対に取り返さなくてはならない」

今までの飄々とした態度はそこになく、研ぎ澄まされた刃のような雰囲気の方がそこにいた。

こっちがこの男の本性か。

あの娘とどういう関係かはわからないが、利害は一致する。私は巫女を、この男はあの娘を、連れ戻す。

「ならば私から離れるな。奥に進めば進むほど、幽谷の霧は進む道を惑わす」

「辺境伯、俺は聞いての通りアルメリアを連れ戻してくる。辺境伯はこの里で待っていてくれ」

「ああ、私がついていっても何もできないだろう。頼んだぞ、ワールウインド」

私が聞いていた伝承と違う人間たちとウロビト。

時代があり方を変えたのか、たまたまこの者たちがそうなのか。伝承への疑心が、僅かに芽生え始めた。

「地下への階段を降りても、やっぱり景色は変わらずか」

深霧ノ幽谷では地下が地下ではない。

傍から見れば異常なことだろうに、ワールウインドはまるで予想を ついていたかのような反応を示した。

「無駄話に体力を割く気はない」

「もちろんだ。だが聞いておきたいことはある」

「……なんだ」

人間の男の装いは里へ向かっていた時と違い、肩に背負っていた荷物は今はない。急ぐためにも身軽さを重視して置いていくと言っていた。

合理性のあることだ。普段の雰囲気とは裏腹に、その実真面目なのだろう。ならば、聞いておきたいことというのも重要なことと見ている。

「あんたらが言うホロウについて、俺は全く知識がない」

これから対峙する相手の情報か。確かに必要な情報だ。

しかし、

「……ウロビトも、ホロウのことは実のところわからないことが多い」
「わかる範囲でいい。教えてくれ」

ホロウが現れたのは10年ほど前。丁度巫女が里に来てから幽谷に現れるようになった。

それからホロウについてわかったことは、

「……ホロウは個を持たない」

「個を持たない？」

「奴らは個というものが無い。個がない奴らは、言葉もなくすべての情報を共有している。意思を統一している。貴様も見ただろう、背後から迫る火球を見もせず避ける様子を。あれもそのひとつだ」

「……他の個体が背後から迫る火球を見て、その情報が共有されたから避けられた、か」

「そのため奴らに奇襲は難しい。どれか一体にでも見られれば、すべてに伝わる。前方からイノシシの魔物だ」

「まるで理想の軍隊だな……っ」と

黄色い毛並みの猪の突進を軽々と避け、すれ違いざまに斬り捨てた。

「ウロビトにも奇襲は難しそうだな。この霧の中でよくわかるもんだ」

「我らは地脈と気を読むのに長ける。この濃霧の中でも迷わずにいるためには必須の技術だ」

逆に言えば、我らウロビトの案内がなくては濃霧の中で彷徨い続けることとなる。どれほど戦力を保有していようとだ。運がよければ抜けることはできるだろうが、それまでにどれほど消耗してしまうことか。

「それにしても、幻術と死角なし、か」

「奴らにはクイーンと呼ばれる存在がいる。そいつだけは他のホロウと違い、個を持つ存在だ」

「ということとは、ホロウたちの意思を決定している存在か」

「ああ、そしてホロウたちを生ま出している存在でもある」

「生ま出す？ まあなんでもいいさ。つまり、そのクイーンが今回の元凶ということだな」

「ああ、ホロウについてわかっていることはもうない」

あとはくだらない噂話程度だ。

ホロウは掟を破ったものに罰を与える存在。掟破りをしたウロビトの命しか奪わないだとか。そのため、断罪者と呼ぶウロビトもいるほどだ。

他にもホロウは聖樹の護りにおいて、死んでいった戦士たちの怨念が生ま出した存在だとか。血涙が怨念を訴えるのだとか。

くだらない与太話は今は不要だ。

「……あの植物の魔物は一撃で倒せ。それからそのカズラは斬つたらすぐに離れろ」

赤い花卉を咲かす魔物と爆弾カズラ。

どちらも情報がなければ死につながりかねない魔物だ。浮いている魔物は接近が感知しにくいのが難点だ。

魔物の詳しい説明を求めるでもなく、ワールウインドは言われた通りの動きを行う。

「案外脆い魔物だな」

「その分危険な花だ。カズラも時間をかけるな。そしてすぐに離れろ」

「ああー！」

花の魔物は脆いが、その花粉が非常に危険なものだ。

強力な眠気を誘う効果がある。下手に刺激をするだけではただただ危険な存在。確実に仕留めなくてはいけない。

爆弾カズラのほうは、魔物として特異な存在。

外敵に対して行うのが、自爆。絶命時にも最後の力を振り絞ってか、爆発するため剣士などは非常にやりにくい相手だ。

そしてもうひとつ、厄介な点がある。

「おおっ……！ とんでもない魔物だな。情報をくれて助かったよ」

「礼はいい。早くここから移動するぞ。今の爆発音に他の魔物が寄ってくるはずだ」

発生する爆音によって、周囲の魔物が刺激されてしまうことだ。

音の大ききのせいで離れている存在まで接近しかねない。蛾の魔物、ビッグモスのような音に敏感な魔物もやってくる。その前に距離を取らなくてはならない。

「自らの身を犠牲にしてまで外敵を排除しようとするとはね。おつかないもんだ」

ある意味であの爆音が囮になったのか、素早く離れることができたため魔物の気が遠くにしかない状態となった。そんな中、人間が先の魔物のことを漏らす。

「巨人から逃げだした人間には理解できまい。だが……今となってはウロビトもそのことを笑えないか」

「そう悲観するなよ。自分の命を惜しむのは当然のことだろ」

「……巫女から受けた恩を想えば、命を投げ出すのは当然なはずだ」

奴らは巫女よりも古いしきたりの方が大事なようだ。そんな奴らが私と同じウロビトなど、考えたくもない。

「どれだけ恩や大義があっても、命がなくなればそれで終わってしまうんだぜ？　巫女を大事に思うのは良いことだけど、それであんたの命がなくなってしまうえば、残された奴はやりきれない気持ちになるもんだ」

「聞こえのいい言葉で、臆病風の正当化をしようとするな」

「……ま、俺からはこれ以上は言わないさ。俺も何が正しいかなんて、わからないままだからな」

残された者のためになどと言って命を惜しみ、恩を返さぬ恥知らずになる方が非礼だ。

私は巫女のためならばこの命など惜しくない。

……私がいなくなれば、シウアンは悲しんでくれるだろうか。私を

惜しんでくれるだろうか。

人間であるシウアンをウロビトの里に押し込めている私を……今までは他の人間の存在を知らなかった。今は違う。私がいなくても、同族の人間がいるのだ。

……私は何を考えている。巫女が私を惜しまなくても構わない。巫女は我らウロビトの里にとって、欠かせない存在なのだ。ならば私の命など、それこそ惜しむに値しない。

「——ファン。おい、ウーファン」

「……なんだ」

「ぼーっとしてどうしたんだよ。幻術というやつか？」

「いや、なんでもない」

見たところ何度も声を掛けられていたようだ。少し疲労が溜まっているせいかもしれない。

「俺たち以外にもホロウを追いかけた奴はいたのか？」

「何を……ああ、そういうことか」

あの口論の場を見ておいて何を妙な質問をしているのだと思えば、男の視線の先を追って理解できた。

ひとりのウロビトが、道の真ん中に佇んでいる。

「ホロウたちに私たちのことが気づかれているようだな」

「やっぱり罠か。ま、あの爆発音じゃバレるのも仕方ないことか」

ウロビトの兵士が追いかけるとしたら、まだ時間が掛かる。

長老会議の決定がどれだけ早く決まろうとも、先行する私たちに追いつけるはずがない。

にも関わらず、前方にいるウロビトの存在はありえないものなのだ。

その証拠に、

「あの兵士はすでに死んでいる」

「……死体を利用、か。騎士道なんて知らない奴らなんだろうが、気分はよくないな」

「……本当に私は腑抜けていたようだ。周囲の気を探れば、かなりの数に囲まれている。」

数は……20は越える。

「すまない。ホロウに囲まれているようだ」

「……そうか」

ウロビトの方陣は、なんの偶然かホロウに対して特化された術。

とはいえこれほどの数相手に囲まれるのは厳しいものがある。

今はまだ、死体を使った罠で様子を見ている段階だが、罠を看破したことを悟られれば襲い掛かってくるだろう。

「包囲網から抜けるためにも一点突破かな」

「気軽に言ってくれる」

「連中をいくら倒しても、クイーンがいる限り意味はないんだろ。なら他に道はないさ」

そう言つて兵士の死体に近づいていく。

これ以上止まっていたは罠に気づいたことを悟られてしまいかねない、か。

「……西に進めば扉がある。扉の先に行けば多少は奴らからは逃れられる」

「奴らからは、ね。何かいるわけだ」

人間が死体に触れる距離まで近づいた。

「縄張り意識の強く、危険な魔物だ………来るぞ！」

後方から雷の槍が、氷の弾が飛ぶ。

「……！」

「さすがに軽いな」

力強く腕を引っ張られ、その場から移動させられた。直後に先程までいた場所を過ぎ去っていくホロウの攻撃。

「西のホロウたちにあの足下が光るやつ、あれをやってくれないか。やっぱり強行突破は難しそうだ」

攻撃が飛んでくる度に激しく引つ張られる。

これだけ激しく動かされて上手く方陣を扱えると思っっているのか。だが、できないなど口が裂けても言えるものか。まだ巫女を取り戻せていない。それまでやられるわけにはいかない。

「……少し集中が必要だ。それまで耐えるんだな」

「俺の悪運の強さなら、この程度でやられはしないさ」

減らず口を抜かすものだ。

だが今はそれに頼るのが最善か。

集中するために目を閉じる。動きに振り回されながらも周囲の感覚を捉えようとし――

【心を護る役目は委任された】

――声が頭に響いた。

なんだ、今のは。知らない声、いや、ホロウに近い声だった。しかし奴らとの対話は不可能だ。奴らは他種と言葉を交わせない。

だが今のは……

【心の願いを優先することは叶わず、危機迫る状況。故に旧守護種から本来の在り方、眠らぬ者が守護する】

「……人間、何か聞こえないか」

「ホロウの攻撃の音しか聞こえない！ そんなことより急いでくれ！

こいつら、少しずつ攻撃が激しくなっている！」

人間には聞こえていない。幻聴にしては明確すぎる。

しかし可能性としては、ホロウの幻術。

視覚に作用せずに聴覚に影響を与えるだと？ 今まで使用したことの無い術だ。

【心の願い叶えられぬ存在では力不足】

幻術の言葉に、何故かひどく心を乱された。

「……どういう意味だ」

「ウーフアン？」

幻術の言う「心」というのは何を指しているかわからない。

だが「願い叶えられぬ存在」「力不足」という言葉から、私のことを言われている気がした。

すると「心」とは、シウアンを示すようで――

「貴様ら、私にはシウアンを護れないと言いたいのか！」

「ウーフアン！ どうしたんだ、おい！」

【力不足。心のことを優先せよ】

「……黙れ！」

「まさか幻術か!? しっかりしろ！」

すぐにでもこの耳障りな声を引き裂いてくれる。

ホロウに何がわかるというのだ。私はシウアンと何年も共に過ごしてきた。私とシウアンを引き離そうとする貴様らに力不足などと言われる筋合いはない。

本当に私で力不足かどうか、その身をもって知るがいい……！

「本当に厄介な奴らだな！ 怪我したって恨むなよ！」

私の腕を掴んでいた人間の手が首に移動し、そのまま首根っこを強く引つ張られる。

まだホロウを一匹も引き裂いていないのにこいつは何を……！

西へ西へと強引に引つ張られる。後ろから、前から幾多もの攻撃が迫るが、それをものともせず進む勢いは止まらない。

「くっ……！」

全ての攻撃を避けきることはできなかつたのか、一瞬動きが鈍る。それでもなお、剣を振るい進路上のホロウに斬撃を放つ。避けるホロウに追撃を狙うことなく、扉を目指し……

痛みを堪える声に、ようやく状況を呑み込めた。

ホロウに惑わされ、あの戦況で私がすべき役割を果たすことができていなかった。

この人間は私の力を不要と判断し、強引に包囲を突破をし、扉を越えたのだ。

「——つと！ さすがにきついな……ウーファン、正気に戻ったか？」

「……すまない。私としたことが……」

「正気みたいだな。索敵を頼む。少し手当てがしたい」

そう言いながらその場で腰を降ろす。未だ危険な場所だということに呑気なと思った。しかし、見れば人間の足から血で滲んでいた。

……あの強行突破の代償。

いや、こんなものは言い訳だ。私の未熟さが招いたことだ。シウアンを取り戻すための貴重な戦力を削ぐような、あまりにも酷い己の失態。

ホロウは扉の向こう、先程までいた広場から追う気はないのか動かない。

この先は駝鳥の魔物、ジャイアントモアの縄張りだ。知能はそれほど高くない魔物なため、少人数で慎重に動けば接触を回避することは難しくない。

そのため、ホロウが追ってくるにしても数が減ると踏んでいたが……

「周囲に魔物やホロウは近づいてきていない。しばらくは大丈夫そうだ」

「そいつはありがたいね」

慣れた手つきで負傷した足に水液をかけ、背囊から包帯を取り出し

手当てを行っていく。最後に小瓶を取り出し、瓶の中身を飲み干した。それで治療は完了したのか、男は立ち上がる。

「彼女たちを助けるためにもゆっくりしてられない。急ごう」

「……………ああ」

この人間は何故私を責めない。負傷した原因は私にあるというのに。

何故ホロウに拐われた二人を助けることに迷いが無い。私のような足手まといがいるというのに。

力不足。

まさにホロウの言う通りだと思える。あれほどまでに心を乱されるのは、自分でもそう思っていたからだろう。

シウアンの願いを叶えられない私が。

シウアンとは違う種族である私が。

どうしてシウアンに幸福を与えることができようか。

シウアンのことを想うのであれば、私はどうすべきだったのか。

最初からシウアンと、世界樹の巫女と距離を取るべきだったのではないか。

そうすれば、ホロウの幻術に心乱されることはなかった。足手まといとなることはなかった。

なによりも、そうすれば、巫女と同族である人間に嫉妬せずにいられたのではないか。

「……………幻術つてのはただ幻覚を見せるものだと思ってたんだが、何か聞こえていたのか？」

「……………その足で、貴様はどこまで戦える」

「……………正直なところ、連戦は無理だな」

「そう、か……………」

私の未熟が、私の嫉妬が、私の手で巫女を救う、その可能性を自ら摘んでいた。

このままではホロウの住居まで辿り着くことすらできない。それ

にもう、私では巫女を救えない。

「……しばらく戦闘は私に任せろ。死んでも巫女とあの娘を貴様に救わせる。それと……」

死力を尽くしてでも道を拓く。私の手で救えなくても、巫女を救わせる。

それと、人間には勝手な話かもしれない。こんな頼みをするなんて、ウロビトからも勝手だと恨まれるかもしれない。だけど……

「シウアンを、人間の街に連れていってくれ。私では、ウロビトの里では……シウアンは幸せにはなれない」

シウアンと共に在った日々は私にとって幸せだった。まるで夢のような時間だった。

だがそれは、私の独り善がりの夢だ。

シウアンを想うのであれば、シウアンは人間の環に入るべきなのだ。

「……まるで死ぬつもりみたいな台詞だな」

「貴様もわかっていているだろう。私の力では、巫女を救えない。貴様の方が可能性は高いと」

「……………」

人間は答えない。互いに死なずに救う、などと綺麗事を言わない。それだけ現実が見えている。

どこか遠くから、破壊音が聞こえた。爆弾カズラがこの階層に侵入したウロビトの兵士と戦闘したのか。果たして何人がここまでこれるか。先程の広間にはウロビトが多く待ち伏せている。

「必ず、巫女たちのもとまで貴様を守り抜く。だから……頼む」

「……待て」

「ウロビトの兵士に期待はできない。あのホロウの包囲網を打破するまで時間がかかる。それに、できた頃には消耗も激しいだろう」

「いや、そうじゃない。……ひとつ聞いていいか」

あまり時間は掛けたくない。だから、今はこの人間を頼る他はない。

「巫女を救う方法は、可能性が高ければ高いほどいい」

「？ ああ、だからそのためにも——」

「そのためなら、嫌いな奴にも頼ることができるかい？」

人間はそれまでの真剣な雰囲気が消えて、まるで里に向かうときに見せていたような、どこか飄々とした雰囲気を纏いだした。

わかりきった質問をして、ふざけているのだろうか。

今すでに、嫌いな人間に対して私は最期の頼みをしているというのに。

「無論だ。巫女を救うことが私の望みだ」

「じゃあ、もうすぐだ」

「何を言っている？ 増援は期待できない」

また破壊音が聞こえた。

木々が裂け、倒れる音。遅れて爆発音。

——何故爆発音が遅れて聞こえた？

爆弾カズラの爆発によって木々が倒れたわけではないのか？

「信用が一切できない奴だ。性格も難がある、というか難しくない。やることは出鱈目ばかり。だけど——」

またも聞こえた破壊音。

今度は先程よりもかなり近い。

「その実力だけは、俺もよく知っている」
「さっきから何を——」

この人間は何を言っている。問い詰めようとした途端、異常をより鮮明に気づかされた。

広間にあつたホロウたちの気が消えていく。

ウロビトの兵士？ 感じる気は、ウロビトの気がひとつだけだ。

ひとりでホロウたちを倒している？ それほどの実力者はいなかったはずだ。だが気はひとつ。

先の爆発と木々の破壊音のズレといい、何が起きているというのだ。

「ま、あなたの言葉を少し借りるなら、悪魔と取引するってところかな」

「なっ！ まさか——！」

瞬間、壁となっていた木々が膨れ上がり、メキメキと音を立てたかと思えば、一気により強い衝撃を受けたかのように吹き飛んだ。

破壊された壁の向こうには——

「本当に出鱈目だな。今度から森の破壊者って名乗ったらどうだい」

「我の山行水行を、獣のそれと一緒にするでない」

——
気を持たぬ、命を持たぬ悪魔がそこにいた。

25. 疑心と信者の道標

タルシスにて。

「ノアの改造を優先せよ」

「ふざけんなボンクラ」

私の言葉に対し、品性の欠片もない返答をカーゴ交易場の交易長は返した。

どうやらあの男、ワールウインドの言っていた通りノアの改造は後回しようだ。となれば、説得をするしかないか。

「汝も理解しているであろう。私の功績によって今回の動力改善に繋がったことを。ならば私の気球艇を優先するのが道理ではないか」

「鉱石だけじゃなく現地民の誘拐かましたって聞いたぞオイ。そんな馬鹿やらかしておいて優先しろとかありえねえだろ」

「世界樹の調査進展のためだったのだ。問題などどこにもない」

あのウロビトの件をタルシスの者は問題視している。

奇妙な話だ。

ウロビトは人間によって創られた種族。ならば創造主たる人間に協力するのは当然のことではないか。

だが、タルシスの者もあのウロビトの個体も、そうは思わなかったらしい。

「世界樹への到達は確かに目的だ。だからってなあ……やり方は考えろよ。目的のためなら何をしたいいいわけじゃねえんだよ」

ずいぶんと甘いことを言うものだ。

目的を果たすためならば、形振り構っていられるものか。

だからこそ千年前、世界の洗浄という目的のために多くの者たちが自らの命を諦めたのだ。

命を諦めなかった者たちも、生き長らえる目的のために祖国を捨て

ざるを得なかった。

我もまた、長き研究のために人の体を捨てたのだ。だからこそ、我の積み重ねた経験があるからこそ、強く確信を持って言える。

「目的のために手段を選んでいては、何も得ることはできぬものだ」
「本気で言ってるのかボンクラ」

交易長は呆れたように、溜め息をついた。
たとえばのような言葉を述べようと、我の確信は変わらぬ。

「今回みたいなあなたのやり方で何かを得たってよ、周りには誰もいなくなってるじゃねえか」

「――」
城から去っていった者たちの背中が記憶に浮かぶ。
我を残し去っていった彼らは――

「おい……おい？ 大丈夫か？」

「……異常はない」

「あー……悪かったよ。言い過ぎたかもしれない」

「何を謝っている。汝の主張を我は否定する気などない」

「そうは言ってもなあ……そんな泣きそうな顔されちゃ謝るしかできねえよ。あんた、結構繊細なんだな」

「……何を言っているのだ、この男は。」

「……顔を形成する表皮に異常があるのかもしれない」

だが異常があるとしても、ここでは直すことはできぬか。我が叡智を込めて造り上げた城でなければ……

「謝りはしたけどよ、間違ったことを言ったとは思ってねえ」

「我と汝で主張が異なることなど構いはせぬ」

「……ま、だからよ。今のうちに少しは改めた方がいいと思うぜ。あ

んた自身のためにもよ。じゃねえとあの嬢ちゃんもあんたから遠ざかっていくぞ」

あの嬢ちゃん、とはアルメリアのことであろうか。

アルメリアが我から遠ざかるなどあり得ぬ。あの者は私の被検体。そして私のことを信じて行動を共にしている。

千年前、我を信じ、ついてきてくれた者たちのように――

「……」

「あんたらがどういう関係か知らねえが、今のままじゃ本当にそうなるぜ」

アルメリアが離れることなど、我にはどうでもいい。そのはずだ。我にとって重要なのは、千年前に我を信じ、ついてきてくれた者たちのためとなる行動のみ。

ゆえに我は、被検体としてアルメリアを必要としているだけだ。被検体が離れるからなんだというのだ。被検体なくとも、私の研究に――
狂いはない？

「狂いはない……私は狂ってなど、いない。狂っていたのはかつての我」

「お、おい？」

かつての我は狂っていた。あの頃は狂っているなどと思わなかった。だが確かに、狂っていた。

ならば、今の我は本当に狂っていないのか。あの頃のように、自己認識ができていないのではないか。

我は狂ってなどいない。

なのになぜ、誰も城に残ってくれなかった？

我は、始めから狂っていたのではないか？

「……汝は我を狂っていると思うか？」

「はあ？ どうしたんだよあんた」

「答えよ。正直に言うが良い」

「……俺から見たら頭のネジが何本もブツ飛んでるな」

「……………そうか」

「だけどそりゃ俺から見たら、だ。あんたのことはあまり知らねえしな。あの嬢ちゃんなら俺よりあんたのことを知っているんだ。そつちに聞いてみな」

確かに。交易長とアルメリアでは違う。なにより、そうだ。我にとって、この時代の者はどうでも良いはずだ。

千年前の彼らからの認識、それを確かめる術はもうない。ならば多少なりとも共通点のあるアルメリアの認識を確認すればいい。彼らと同じく、我を信じているアルメリアの認識を。

「汝の言葉、参考にしよう。それより我の気球艇を優先せよ」

「黙れボンクラ。弱気になったかと思えばふざけたこと言ってるな」

我は至って真剣であるというのに、ふざけたと評すか。

「そーいやあんた、よくあの鉱石が動力になるってわかったな」

「む？」

「気球艇の知識なんて冒険者にはあんまりいらねえだろ？　なのに改造を持ち掛けてくるなんてよ」

「探索範囲を広げるためには必要だからだ」

「ま、俺としては気球艇をより飛ばせるならなんでもいい」

そう言いながらそばにある気球艇の点検を開始する港長。その気球艇はノアではないのがやはり納得しがたい。

「移動範囲の増加もだが、気球艇に防衛能力を持たせることはできないのか」

この機会にと、以前から疑問であったことを尋ねる。

現状、気球艇で空を飛ぶ魔物と遭遇した場合、対抗策が何も無い。いかに冒険者として能力が高かろうと、気球艇が落とされれば終わりだ。ゆえに、なんらかの攻撃手段は必要だ。

「ああ。理論上は可能はずだぜ。理論上はな」

「では何故持たせない」

「武器を積もうとなると今の気球艇だと小さすぎでな。で、一時大きな気球艇を造ろうってなったけどよ。ワールウインドのオツサンが言ったんだよ。北の谷を越えるには大きな気球艇じゃ駄目だってな」
「ふむ……」

「それにコスト面もキツくてな。ま、そんなこともあつて気球艇には兵器がないんだよ。空での戦う手段が完全にないからこそ、安全に飛ぶことを心掛けている面もある気がするし、俺としてはこのままがいいと思ってる」

ワールウインドの意見、か。

あの男は最初に気球艇の動力貢献をしたと聞いていた。今の話も聞く限り、もともと技術屋の観点も持っていると考えていいだろう。

「それよりも我の気球艇、ノアを優先——」

「出てけこのボンクラ!!」

カーゴ交易場から追い出されてしまった。

よもや交易長があれほどまで頭が固いとは思わなかった。

また後程交易場に行くとして、ひとまずはベルンド工房に足を運ぶことにした。

工房では慌ただしく店の者たちが動き回っていた。気球艇の改造のために、今日は冒険者の多くが街にいるからか、工房にも来客が多いようだ。

「いらっしやーい！　って、イシユさんだー！」

工房の娘が子供のよう大声で出迎えた。実際に子供ではあるが。

それにしても、ハイ・ラガードの武器を取り扱っていた店といい、この工房といい、何故子供が労働しているのか。

「剣を取りに来たんだよね」

「うむ」

「もうできてるから、取ってくるねー。それまでテキトーにしてて！」
奥へと引っ込んでいく娘。他の客は、他の従業員が相手をしてい

た。

さすがに従業員全員が子供ではない、か。少しだけ安心した。待っている間、他の武具を眺めることにする。

人間であった頃の我は、刀剣の類とはとにかく無縁であった。いや、機械の体となってからもか。このアンドロイドの体になるまでは、原始的な剣など使っていなかったのだから。

長剣、棍棒、弓、短剣、突剣、杖、と武器が並んでいる様子はなんとも興味深い。原始的なものではあるが興味深い。

杖が武具として並んでいるのは理解できないが、この時代ではそういうもののだと飲み込むしかない。

そのまま横へ横へと視線を動かしていく。すると、槍や斧も並べてあった。

兵士は槍を使っていたが、冒険者で使っているものを見た覚えがない。

斧はハイ・ラガードで使う冒険者を見たことがある。斧を扱いながらも剣士だとか。我からすれば斧は剣に含まないが、これも時代の変化なのだろう。

「お待たせー。熱心に見てるけど、何か気になる武器あった？」

二振りの剣を抱えながら店員の娘が戻ってきた。

「む。ただ見ていただけだ」

「なんだー。てつきり剣以外も使うのかと期待しちゃったや」

「その予定はないな」

剣以外も扱うことは可能ではあるが、全盛期に少しでも近くなるのはやはり剣だ。

「……剣より斧とか鎚の方が合ってると思うよ？」

「何故だ。我にはそう思えぬ」

「こないだ渡したショートソード……ふつうは一日であんな風にはならないよ！ そりゃ安い剣だったけどさ！ どの武器も粗悪品なんてないのに芯までヒビが入ってたんだよ！」

「私の剣技にあの剣が耐えられなかっただけのことだ」

「ぜったい剣技とかじゃなくて力業とかでしょ！ どういう力の込め

方したの！ そのままじゃどんな剣も数日持つか怪しいよ！」

それは剣が脆いせいではないか。いや、この時代の技術で私の力に耐える剣を造れというのは酷な話か。

しかし、かといつて今日の所で斧や鎚の丈夫さ、破壊力を力説した娘の言う通りに武器を変えるつもりはない。

「何を言われようと剣以外を使う気はない。たとえ剣が戦闘で折れようとこの工房を責める気はない。ゆえに汝らは気にしなくていい」

「せめて剣を大事に使ってよー……」

「それより剣を渡さぬか」

「むー……ファルクスとスクラマサクス。いちおうキミが使うから頑丈に加工したけど、あまり過信しないでよー。大事に使ってよー！」

鉋のような形状の剣とベルゼルケルの爪を加工した剣。ショートソードよりも脆そうに見える。

「ファルクスは刃が内側だから使い勝手はかなり違うはずだよ。もともかなり頑丈な素材だったから、ショートソードより丈夫だと思う。スクラマサクスも片刃、切れ味を落として頑丈さをあげてあるけど……どっちも大事に使ってよー！」

「ふむ」

渡された剣を手に持ち、以前と同じく素振りをする。美しき陽光も試そうかと思つたがやめておいた方がよいか。

スクラマサクスはともかく、ファルクスはもともと熊の爪と思えば木々の壁を破壊するのに向いていそうだ。

……我の力だけでなく、壁を破壊するから剣が壊れやすいという可能性もあるか。

赤熊を内部から爆発させたような武器、ワールウィンドの武器を破壊用に持つのもひとつの手か。

あの男は武器を見せなかったが剣ではあるまい。

「時に、爆発する武器はあるのか」

「へ？ バクハツ？」

「うむ。タルシスの冒険者の武具はすべてここで扱っていると聞いた」

「そうだけど……爆発するものなんてないよ?」

「……なに?」

娘は嘘を言っているようには見えぬ。嘘を言う必要性もない。

つまり、あの男独自の技術があつた死骸を生み出したということか。

まあよい。ないならそれで、今まで通り剣でやればよいだけだ。

素振りを終えて剣を腰に差す。

「また剣が壊れたら来る」

「だから壊さないでつてばあー!! でもまた来てねー!!」

剣も新調し、あとはノアの改造が終わるのを待つ以外できることはなくなつた。

あの交易長は相当に頭の固い。

「……」

ゆえに急かすことなく、終わり次第すぐさま出発できるようにガ―ゴ交易場で待つことにした。

「……」

「……」

朝に来たときよりも気球艇の数が減っている。

だがまだ数は多くある。それぞれ所属が別だとわかりやすくするためにか色は異なる。ノアの色はオレンジ。我としては金色が良かったが、些細なことか。

「……」

「……」

金色といえば、雷竜の依頼。石柱の破壊にどういった意味があるか

は我にもわからない。

そもそも竜に関して不明な点が多い。千年の間、世界樹で研究を続けていたが、いつの間にか竜は世界樹内に発生していた。汚染が形を成したにしては害が少なく、かといって新たな動物にしては強力すぎる。獣のように本能で生きているわけではなく、なんらかの意思を持って動いているようだが、意思疎通ができた例がない。

「……」

「……なんか言えよ。黙って見られてると落ち着かねえんだよ」

赤竜のことを思うに、ハイ・ラガードの竜と強さもそれほど違いないだろう。

赤竜といえ、風馳ノ草原で遭遇したとき、アルメリアの体から溢れたあの黒い塊はなんだったのか。あの時、竜は黒い塊を確実に狙って行動していた。

黒い塊は黒い竜とやらと関係があるのか。そして黒い竜と赤竜は敵対している？ いや、それは早計か。黒い竜とやらは幻視したものの。世迷言のひとつだ。

我はとにかく依頼にある通り、雷竜が空を飛んでいるときに石柱を破壊すれば良い。その後の竜の動きや変化を調べれば何かわかるかもしれないぬ。

「……」

「………そんなに見てもあんたのところは後回しで決まってるからな。つーか聞いているか？ おい」

雷竜が空を飛ぶとき、か。石柱は当然空でなく地にある。雷竜に見つからぬように、ということか。理由としては、見つければ妨害されるため。だとするならば、黒い竜はやはり三竜と敵対していると考えるべきか。

「……」

「………わかったわかった！ ノアの改造に入るから一旦出てけ！」

「よかろう」

「聞いてんじやねえか!!」

おおよそ一時間後。

「もう飛べるようになったぞちくしょうが」

「よくやった」

「この問題児が……!」

改造を施されたノアは外見上の変化はない。

「あなたの見つけてきた鉱石はほとんど虹翼の欠片の上位互換だ。気体の発生のさせ方は同じで水につけりやいい。欠点としては、発生させる気体は体によくねえってとこだな」

「高度上昇に問題なければ良い」

「今のところこれが精一杯だ。あとよ……」

「む?」

「気球の皮口が焦げてたんだが……何しやがったよ」

ふむ。

交易長は頬をひくつかせながら笑顔を浮かべている。

「……もう飛べるのだな。時間が惜しいゆえに我はもう行く」

「絶対火つけただろ! この皮は熱に強い素材じゃねえんだぞ! 聞いてんのかボンクラ!」

やはり交易長は憤怒したか。職人氣質というのは難儀な性質だ。試行錯誤した結果という弁明も聞かぬことだろう。

我は黙々と出発することにした。

丹紅ノ石林を飛びながら、アルメリアから渡された地図を確認する。

指定の座標に印はついているが、以前はそこまで探索が届かなかった。原因は高度不足のため。

だが、今回はその心配は不要となる。

印のついた座標、石柱のポイントに行く前に、まずは世界樹への道を探す。ただ北上するだけ。

ほどなくして発見した光景は、風馳で見た光景と共通点が多い。

霧に覆われた森と、その北にある濃雲の谷。そして手形の紋章が記された石碑。

碧照と同じく霧の森の中に、石碑に一致する石盤があるのだろう。

だがその前に、森に入る前に石柱の破壊をするか。世界樹もだが、竜も常識が通用しない存在。石柱の破壊がどう作用するかわからぬが、まずは試してみてもいいだろう。

印のついた座標の近く、岩影に隠すようにノアを着陸させる。

理由はタルシスで想定した内容、黒い依頼書は竜に妨害される可能性があるため。

石柱の破壊ができたとしても、竜がどう動くかわからぬ。暴れ狂い、ノアを破壊されれば面倒だ。

ゆえに近場で隠す。

そこからは足で向かう。竜と戦闘するわけではないが、相手が相手。最低限の警戒は必要だ。

もうじき目的地が見えてくる。

徒歩での移動のため、魔物と遭遇があると考えていたが、不思議と周囲に魔物はいなかった。

不思議と、ではないか。石柱が竜に関係するのであれば、この辺りは危険領域。

「いよいよ目的の石柱が見えてきた。
それともうひとつ、

「……飛ぶときに破壊、か。確かに飛ばねば破壊が困難だな」

金色の輝きを持ち、東洋の龍のような長い体躯。その顔には長い髭と巨大な角。

翼を持たずして宙に浮かぶ雷竜の姿があった。

たしか、雷鳴と共に現る者だったか。依頼に書かれていた名称は。もう日が沈みかけにも関わらず、竜の居場所は眩い光で溢れている。

目的の石柱も光に照らされ鮮明に見えた。奇妙な文字が書かれた石柱だ。

竜はその場を旋回しながら飛ぶ高度を上げていく。

金色の体の輝きが、より一層強くなり――

稲光りと轟音が鳴り響き、一瞬にしてその場からいなくなっていた。

その後、遠い空から聞こえてくる雷鳴。

雷鳴と共に現る者。

実にその名の通りの在り方だ。近くに潜んでいた我に気づかず飛び立ったが、あの様子では感心している暇はない。

破壊目的の石柱を調べる猶予もあまりないと判断し、即座に剣を振りかぶった。

「美しき陽光」

燃え盛る剣を振り下ろし、石柱が呆気なく壊れる。

特殊な材質というわけではない、普通の石だ。

「……む!?!」

壊れた石柱から黒い煙のようなものが噴出し、体にまとわりつく。

その場から飛び退いたが、それはまるで意思を持つかのように執拗にまわりつく。

煙の成分は不明。現状、我が体に異常はない。

口から、目から、体内に侵入された。かと思えばすぐさま体外に出てくる。何かを探っているかのようだ。

煙はほどなくして体から離れていき、勢いよく北へと散つていった。

結局成分は不明のまま。推測しようにも材料が足りなさすぎる。毒素はなかったが、生身の人間であればなんらかの異常を来していたかもしれぬが、それも不明。

途端に落雷が幾度も付近を襲う。

雷竜に気づかれたか。

得られたものはほとんどないが、あの黒い煙が北に散つていったことを考えると、北でなんらかの変化があるかもしれない。

ならばもうこの場に用はない。

雷竜の目を盗みながらノアを飛ばし北へ向かうとするか。

谷に変化がなくなれば、霧の森を調べれば良い。

26. 見えざる音と聞こえぬ光を頼りに

赤い頭巾で金髪をまとめた、一見ただの人間の女に見える存在が剣を鞘に納めながら近づいてくる。

「な、なぜ……」

「時間が惜しかったからだ。木々の壁など我には関係ない」

そういうことではない。

なぜ悪魔がここに来ているのだ。ウロビトとホロウの争いをかき乱しに来たのか。

「そういうことを聞いてるわけないだろ。これだから脳筋は」

「我を愚弄するか。愚か者は己を愚かだと認識できないものだから困る」

「そっくりそのまま返すよ」

「なぜ悪魔がここにいるのだ！ ここに来るまでにウロビトの里があつたはずだ！ 貴様、里の者に何をした！」

この幽谷の霧の中、ウロビトの案内なしで目的地に辿りつくのはほとんど不可能だ。彷徨い続けては魔物に襲われ、体力気力を削がれて最後には死に至る。よほどの幸運を持っていたとしても、必ず奥に行くには里を通る必要がある。悪魔をウロビトが通すはずがない。

「……またこのウロビトは喚いているのか」

まるでうんざりしたかのような言い方だ。

「汝の問いに答えてやろう。我がここに来た理由は私の被検体を回収に来ただけだ」

被検体？ 何を言っているんだ、この悪魔は。

「汝らの里の者には道案内を任せただけだ」

「ウロビトを脅迫したというのか……！」

「何故そうなる……辺境伯がウロビトに頼んだのだ。我に協力するようにな」

面倒くさそうに答える姿に、より一層疑心が募る。

人間は悪魔に利用されている可能性が高い。そんな言葉を信じられるものか。

「ウーファン、我らウロビトは脅されてなどいない」

悪魔がここに来るまでに感知できた気の持ち主、ウロビトの兵士の一人が話に入ってきた。

その顔には脅されているような弱々しい表情を浮かべてはいない。

「汝がどう思おうと勝手だ。だが我の邪魔をするのであれば排除する」

それは、脅しや決意を込めた言葉ではなかった。ただ淡々と、これからの予定を述べたかのような言い方だった。

どうする。ここで悪魔を咎めても私の力では止めることができない。その二人も悪魔の力を借りようとしている。

たしかにホロウたちの群れを壊滅させる力や、壁を破壊する力は、今まさに欲しい魅力的なものだ。

だからこそ、疑ってしまう。あまりにも都合がよすぎる。

思案する私をよそに悪魔と人間は情報交換を始めた。

「アルメリアはまだ奥か」

「ああ。ホロウの巣に連れてかれたと思う。おそらく世界樹の巫女も一緒だ」

「巫女とやらはどうでもよい。我は我の被検体を取り戻す。それと石盤を回収する」

「そう言うなよ。巫女は俺たちが欲しがっている情報を持っているかもしれないんだぜ」

「貴様！ 巫女様をどうでもよいだと!？」

「……ウロビトというのは何かと騒ぐ種族なのか？」

悪魔が巫女をないがしろにする発言をしておきながら、咎めた兵士

に対してウロビトを愚弄するとは。

……不味い。

壁を破壊された時点ですぐに移動するべきだった。音を立てすぎたからか、強い力が近づいてくる。かなり、速い。

悪魔の手を借りずに戦えば、よくて辛勝。だが辛勝ではダメだ。巫女を救えない。

「……魔物が来る。ジャイアントモアだ」

「！ ほ、本当だ。不味いぞ人間ども！」

私の呼びかけをきっかけに、兵士も魔物の接近に気づいた。

ジャイアントモアと呼ばれる鳥の魔物は単純に強力だ。凄まじい脚力から繰り出される突進。それを用いて対峙する敵を圧殺する。遠くから弓で射ろうと、怯むことなく突き進むタフさをも持ち合わせる。

「感知能力はそこのウロビトのほうが高いか」

軽快な足を蹴る音が聞こえる距離まで接近されている。

すぐに鮮やかな黄色と青の色合いの巨鳥が見えてくるだろう。ワールウインドは音の方角を見やり、悪魔はなぜか私を見ている。

「き、来たぞ！ ウーフアン！ 方陣を！」

「ああ」

悪魔の力を借りるかどうかは今置いておくしかない。

脚力が凄まじいならその足を封縛すれば、対処は容易だ。タフさを貫く力が必要だが、ワールウインドにそこは任せればなんとかなるだろう。

「丸い鳥だなあ」

「雷鳴と我が身」

肉薄すると同時に響く雷鳴。

突進の勢いを止められたどころか、大きくのけぞる魔物の姿が見えた。

……どういう馬鹿力だ。いや、考えれば壁を破壊できていた時点で

こうなるのが普通か。

「随分と分厚い肉だな」

絶命は免れたが、剣から迸る雷によって体が痺れたのか、立っているだけで精いっぱい、の魔物にとどめを刺そうと歩み寄っていく。

一方でワールウインドが私のそばにやってきた。どこか面白がるかのような表情で。

「ウーファン。見ての通り、あいつは強さだけならとんでもないやつだ。人格的には問題しかないけどね」

「あ、ああ」

「あいつの力があれば、巫女を助ける可能性がぐんと高まる」

悪魔が来る前の先のやり取り。

嫌いな奴に頼ることができるか。という問いに対して私は無論と答えた。

その言質をすでにとっているからこそ、この男はこれだけ面白がる表情なのだろう。この男も人格的に問題ありそうではないか。

「あの悪魔が巫女に危害を加える可能性はないのか」

「さあね。だけどその時はあんたが守ればいいんじゃないか？」

「いい加減なことを言う……」

「さっきまで命を投げ出す覚悟を固めてたじゃないか」

それは、託す相手が人間だったから。

シウアンと同じ人間だったからこそ、だ。シウアンを助け、そして人間の街へ連れて行ってほしい。そう願ったからこそだ。そこに悪魔の存在など想定していない。

「あんたの願いはなんだ？ 巫女を助けることじゃなかったのかい」

「……巫女の……シウアンの幸せが私の願いだ」

「なら——」

「悪魔がいて、シウアンを幸せにできるとは思えない」

「……だから、それならあんたが巫女を守ってやればいいだけだろう」

——私がそばにいて、シウアンは幸せになれるとは思えない。

そばにいて守る。それをして幸せなのは私だけだ。

シウアンのそばを離れたくない。シウアンの幸せのために離れなくてはならない。

さつきまでは選択肢などなかった。

選べる道などなかった。だからこそ、覚悟を決めれた。

「汝らは何をしている。……ここがホロウの巣ではあるまい。道草を食っている暇などないはずだ」

ジャイアントモアの息の根を止めて無表情に言い放つ悪魔。

貴様の与えた選択の余地が、私の足を止めているというのに……いや、これはただの八つ当たりか。

「あいつの言う通りだ。あまり時間をかけられない。巫女の幸せのためにもまずは救出すべきだろう？」

「だが、私がそばにいては……シウアンは幸せになれない……」

悩んでいようと、まずは助けに行くべきだ。

だがこの迷いを持ったままではまた足手まといになってしまうのではないか。それにもう、私の案内などいらなくなった。まだ未熟だが、ウロビトの兵士が一人来ているのだから。

だから、私を置いていけばいい。決断することすらできない私を。

「シウアンとやらが誰か知らぬが、その者の幸せ、不幸せは汝の主観で話でしかない」

「お、おい。お前が話に入るとややこしくなりかねな——」

「どれだけ時間をかけて考えようと、己が主観が本当に正しいかなど、

己で判断できるものではない。たとえ千年の時を過ぐそうとだ」

「この悪魔は何を言おうとしている。」

「ゆえに、我はアルメリアに聞きに行く。我の主観ではない第三者の目を持って、我が正気か狂気かを判断する。己の主観に疑心を抱くのであれば、汝も同じことをすれば良い」

「同じこと、だと……」

「……残念な頭の持ち主だな」

「な……！ 貴様、私を馬鹿にする気か！」

「なんでそうなる！ 喧嘩しようとするな！」

ワールウインドが私と悪魔の間に入りこんだ。

喧嘩などではない。このタイミングで人を愚弄する悪魔の挑発だ。

「ウーファン。とりあえずこいつが言いたかったことは、巫女が本当にあんたのそばにいると幸せになれないか、直接本人に聞けばいいってことだよ………たぶんね」

こいつが助言だと？ 瘴気の森で私を縛り上げたこの悪魔が？

言葉の最後に目をそらしたワールウインドも同じように信じられないのだろう。誰かに助言するこいつの姿を。

「……これ以上決断できぬのならば、汝に用はない。感知能力は低いがそのウロビトに引き続き案内してもらおうまでだ」

「あ、あれを案内と言えるのか……壁を破壊しては人の首根っこを鷲掴みにして引きずり回しておいて……」

首の裏を何度もさすりながら兵士は嫌そうに言った。

私の決断を待っていた理由は感知能力か。損得勘定での説得だったか。

なんとも悪魔らしい話だ。

「……悪魔よ、ひとつ聞かせろ」

「我のかつての所業は確かに悪魔だっただろうな……聞きたいことはなんだ」

「貴様は私に道案内を望んでいるのだな」

「うむ、でなければ汝など捨て置いて奥へと向かった」

「ならば、取引だ。シウアンの救出に協力しろ。私が貴様をホロウのもとまで連れていく。だから貴様は、私にもう一度シウアンの手を掴ませろ。悪魔なら悪魔らしく、取引に応じろ」

書物にある悪魔は対価を求め願いをかなえた。だが、実際は悪魔など空想上の生物だ。取引など無意味なものだろう。

それでも、決断するための背中を押す何かとして、言葉がほしくて

「取引を成立させたいのであれば、早く案内せよ」

連れていけば取引に応じると言う言質。

その言葉だけで、錫杖を持つ手に力が入る。

もう一度この手にシウアンのぬくもりを掴むことができる。そのとき、シウアンと話をしよう。怖がらずに。

そのためにも、もう立ち止まってなどいられない。

「もうちょつと素直な言い方ないのかよ」

「まったくだな。このウロビトは」

「いや、イシユ。お前のことだよ」

「汝の目は不良品と見える。我が不要なものを取り除いてやろうか」

なぜか私と悪魔の仲裁に一度は入ったワールウィンドが、悪魔と喧嘩をしかけていた。

濃霧の中、ひたすら走る。

ただの問題の先送りでしかないかもしれない。だが、もう迷いはない。だからだろう。感覚が研ぎ澄まされている。魔物やホロウの気が手に取るようにわかる。

「次の曲がり角の出会い頭にホロウが三体。壁ごとやれるか」「よかろう」

破壊され、吹き飛ぶ木々の濁流に呑み込まれ悲鳴を上げるホロウたち。

奴らの共感覚でも理解することはできないだろう。目視される前に壁ごとの攻撃など。

「このまま北西に向かう。そこに最奥への階段がある」

「邪魔する者はいないか」

「ああ、付近にはいない」

ワールウインドたちが上手くやってきているようだ。

その後、私と悪魔、ワールウインドと兵士で二手に別れて行動することにした。

ワールウインドは負傷しているため、戦いが激しくなるであろう奥地へは危険だったからだ。

ただ里に帰還すればいいというのに、激しく音を立てて移動し、この階層の魔物がある程度ひきつけながら撤退すると言い出した。

そのときもつともいやそうな顔をしたのはウロビトの兵士だったのが少し恥ずかしい。

扉が見えてきた。

手で開けることすら惜しいとばかりに扉を蹴り破る様は野蛮人そのものだ。

「扉の使い方を知らないのか貴様は」

「剣を収める時間さえも惜しい。汝の決断が遅すぎるのも一因だ」

「悪魔の甘言に即答できるものか」

「確かにかつての我は悪魔であったが今はただの研究者であり冒険者だ。我のことを畏怖をもって呼ぶのであれば暁の——」

「たしか、イシユだったか。私にとっては悪魔は悪魔だが、まあいい」

「暁の上帝……まあ良い」

階段を駆け下りながら何か言いたげだったが、きつとどうでもいいことだろう。

ホロウたちの住居がある階層にたどり着くと同時にわかる感覚。

……やはり数が多い。

ホロウの数は当然のこと、魔物のほうは数こそ上の階層より少ないが、強力な魔物の数だけを見れば多い。

「アルメリアたちはどこだ」

「数が多すぎて探りづらい……とにかくまずは東へ行くぞ。扉を開けた先にホロウが五体」

「多いならば減らせばいいだけの話か」

脳筋か、と言いたいとこだが現実ではある。

それをするだけの力がある。

扉をまたも蹴り破り、ホロウへとどびかかり肉薄する悪魔……いや、イシユだったか。

扉を蹴るたびに大きな音が鳴ってしまうのだが、数を減らすために寄せる必要もあるか。

どういうわけかこいつはホロウの幻術が作用しないのか、攻撃があ

まり外れない。幻術関係なしにホロウに回避されることはあるが、それは奴らの単純な肉体的能力とこいつの大振りのせいだ。

気を持たぬ体だから幻術が無効なのかはわからないが、なんであれ良い流れとなっている。

あとはあの太振りさえなんとかしてほしいところだが、方陣でカバーが可能か。

「ふらふらと……！　む？」

「方陣だ。さつさと終わらせろ」

「印術といい……また理解しがたい技術か……」

動けなくなつたホロウたちが雷の槍を放つも、意に介さず突き進み切り裂いていく。

……その姿は魔物と言つても謙遜がない。確かに槍があたつたはずだが。

「……さすがに雷は少し厄介だな」

「ならばもう少し苦し気にしろ」

苦痛に歪む表情ではなく淡々とした無表情。

だがホロウに対してはこの無表情さが有効すぎる。奴らの共感覚によつて、こいつには雷の槍の効果が薄いことが伝わつたはずだ。実際薄いようにしか見えないが。

「……」

イシユの戦闘よりも今は気を探ることに集中すべきだ。

かつて、ホロウが現れる前にここに訪れた時と道が変わっている。

記憶違いか、ホロウが霧の中で何かをしたか。

10年近く前のことだから記憶が薄れていても仕方ないことかもしれない。だからこそ気を探っていけばいい。

場所の移動と数を五体減らしたただけではたいした影響もないか。シウアンの気が探りづらい。

「数が多すぎる……まずは奴らの数を減らすことを優先していくぞ」

「待て」

「なんだ」

イシユは霧の中で一点を見つめて制止をかけてきた。気を探れぬ身で霧の中何かを見つけれはすがない。ただの霧ではなく術が掛かった霧なのだから。

だが……こいつは幻術が効かない、か。霧も効果がないか、薄いのかも知れない。

「……蛍、ではないな」

蛍と見間違う何か。

心当たりはひとつある。

「シウアン!!」

「シウアン……巫女とやらの手掛かりか？」

「ああ！ シウアンにも術師としての素養がある！ 場所を知らせてくれているのだ！」

「だが光はもう消えたぞ」

「ホロウたちに悟られないようにしているのだろう。急ぐぞ。シウアンは無事なのだ。光は最後にどこへ向かった？ その方角へ進めばいい」

「南……む？」

またもイシユが止まった。

今度はいったいなんだというのだ。

「北だ」

「何を言っている。南に向かって光が消えたのだろうか？ ならば南だ」

「笛の音だ」

笛の音？

言われて耳をすませば、わずかに聞こえてきた。この笛を吹いているのはまさか……

「アルメリアだ。ギルド長から受け取った笛をまだ持っていたか」

「あの愚かな娘か……何を考えているのだあいつは。笛など吹いてはホロウや魔物を刺激してしまうことくらいわからないのか……！」

「汝にはそう思えるか」

それ以外にどう思えというのだ。

だがこいつはそうは思っていないのか、今までの無表情とは一転、愉快気に笑っていた。

「我が来たことを破壊音で気づいたのだろう。そして、我がそこまで来ることを愚直に信じているのだ」

「なんだっていい。その期待に応えるためにも急がねばならないのならば、早く南へ行くぞ」

「巫女は我を知らぬから南へ導こうとしたのだろう。汝も見たはずだ」

北の壁に向かって歩みだす。

そこまで見て理解した。

ワールウィンドが言っていた出鱈目ばかりというのは本当だな……

その両手には剣を構えて、大きく振りかぶり――

「山行水行」

壁を破壊すると同時に、遠く感じていた笛の音がより一層聞こえるようになった。

さらには掴みづらかった気がわかる。シウアンとあの娘だ。そばにある大きな気はホロウクイーンか。

「そのまま直進した先にいる！」

「では行くか。今の時代でもなお、我を信じている者を救うために」

こいつもたいがいだが、こんなやつを信じるあの娘も出鱈目すぎるものだ。

助けに来ないかもしれない、などと疑うことを知らないのだろうか。愚かすぎるからか？

アルメリア、だったか。

今だけはその愚かさを認めてやらないこともない。

27. 守り手として、その宿業を果たさん

小さな明かりと笛の音に導かれて辿りついた小さな広間。
ホロウたちの鳴き声のような呻きが至る所から聞こえる。
そして、

「ウーファン！」

「イシユ！」

シウアンの声が聞こえた。シウアンの姿が見えた。あとついでにあの娘の姿もあった。

二人の周りにホロウが四体、見張るように立つ。

さらには遮るように、私たちとシウアンたちの間にホロウの首魁、ホロウクイーンが立ちふさがった。

「シウアン、すぐに助ける。あと少しだけ待っていてほしい」

「うん……！」

シウアンが見ているのだ。それだけでもう、負けることなどもうない。
い。

「イシユ、私にもあんな感じの言葉をお願いしたいです」

「……汝、日に日に厚かましくなっていないか？」

……こいつら悪魔と愚か者はやはり私には理解できない存在のようだ。

ホロウクイーン以外のホロウは戦う気がないのか、シウアンと馬鹿娘を逃がさないようにしているのか、動こうとしない。シウアンたちを人質に使っている様子もない。

が、それがいつまでも続くとは考えづらい。

錫杖を立て、そこを中心に広間を覆うような光の陣が顕現する。

対象はホロウたち。

「封縛する」

動きさえ封じれば、あとはイシユの火力がものを言う。

「む!？」

——はずだった。

ホロウクイーンの腕から翼のような、鎌のような、奇妙な形をかたどった影が伸び、イシユの剣を根元から斬り落とした。

クイーンに封縛が決まっていなかった？ いや、手ごたえは確かにあった……解除された？

クイーンを中心に暗い蒼の風が吹く。ただの不気味な風ではない。その風は地脈とのつながりを乱していた。それにより、クイーンだけでなく他のホロウたちも封縛が解除される。

「ふむ……また工房に行かなくてはならぬか」

「剣ひとつでも問題ないか？」

「当然だ」

こいつの馬鹿力なら素手でも問題なさそうか。

一方で私は方陣による封縛が無効化されてしまっている。クイーンの眼が暗く輝く。

幻術を使うつもりか。一瞬精神を揺さぶるように違和感が訪れるが、すぐに消え去る。幻術に嵌ったわけではない。

幻術の影響を受けない奴がクイーンに攻撃を行ったからだ。

「……凶体の割に素早い」

「貴様が大振りすぎるんだ……」

もつとも、その攻撃も避けられたが。

幻術の影響下ではないのに避けられるのは剣士としてどうなのだ。現状、方陣を使えない私が文句を言えた義理ではないが。

「ならば、これはどうだ」

腕を突きだしたと思えば、突然飛んでいく片腕。

人間に化けている悪魔だと主張していた私としては、せめて人間のフリをもう少し務めてほしくも感じる。

迫りくる拳をクイーンは冷静に避ける。奴らの動揺を狙った攻撃だったかもしれないが、感情が読みづらいどころか、感情そのものがあるかわからないホロウたちだ。ある意味当然の結果と言える。

しかし、腕が回避されることを前提としていたのか、イシユ自身がホロウクイーンへと迫る。足を置いて。

………人外同士の戦いに心乱されては駄目だ。方陣以外にできることを私はやらねば。

「アルメリアの知り合いって、すごいんだね……それとも人間の街にはいっぱいあんな人がいるの……？」

「あの人が特別なだけです、はい」

あいつの姿はどうやらシウアンへの教育に悪い。

唾然としたような声を聴きながらできることを考える。方陣が意味をなさないのであれば、方陣を破棄して攻撃に転じる、破陣：亜空絞破。展開されている方陣の力場を収束し、敵を締め付ける術だが……陣の中心にしか収束された力は向かわない。

つまり、中心にクイーンを持ってこなくてはならない。その中心は、今の私がいる位置。

あいつの攻撃は先の奇襲も含めて尽く躲されている。誘い込める可能性は薄い。破陣の準備をしつつ、別の手も必要だ。

悩む私にいくつもの影が覆う。

「ウーファン！」

シウアンの声に見あげれば氷の礫が上空に漂っていた。

ホロウクイーンが唄うような声をあげ、それに合わせて数多の礫が降り注ぐ。

——避けれない。

迫る氷の凶器に対し、せめてもと両腕で頭を庇う。

「たやああああ！」

襲う衝撃に備えれば、なんとも間の抜けた掛け声が聞こえた。すぐさま続いて重々しい爆音。

見れば氷はなくなっていた。代わりに残ったのは熱気と降り注ぐ冷たい水。

これはまさか……

「で、できちゃった！ 爆炎の術式！」

「貴様！ シウアンのそばで危険な真似をするな！ ホロウたちの矛先がそこに向いたらどうしてくれる！」

「はあー?!?!? 助けられて最初に言うことがそれ!? はあー?!?!?」

助けられたことには感謝するが、そばにいるシウアンに危険が迫りかねない動きは駄目だ。

シウアンたちを囲むホロウたちが、アルメリアを危険とみなしたのか槍を作りだし貫こうとしている。にも拘わらず気づいていない、あの馬鹿は。

走って間に合う距離ではない。走りながら陣を展開しなす。せめて一瞬でも奴らの動きを止められるように、展開するのは麻痺の方

陣。

展開される僅かに黄色い陣。しかし槍を止めることができない。あんな奴に助けられて借りを返せずなど、屈辱すぎる。

陣の効果が及ぶまでの時間差、それがこれほどまでにもどかしく感じるのは初めてだ。

「アルメリアー！」

「ほひよっ!?!」

シウアンに半ば押し倒される形で雷の槍から難を逃れる。シウアンはなんと出来た娘であろうか。

——見間違いでなくば、シウアンに当たりかけた槍の動きが一瞬鈍った。

方陣が作用し、ホロウたちの動きに異常が入る。それも長くは続かない。クイーンから風が吹けば元に戻る。

それまでに、

「さっさとそこのホロウどもを焼いてしまえ！」

「はああー!?!」

馬鹿丸出しの声をあげながら、動けないホロウに向けて大きな火球が放たれる。

当たると同時に大きく燃え広がる爆炎が、他のホロウたちを巻き込み倒していく。

仲間を倒されたホロウクイーンが片腕をあげた。片腕は形を変え、剣を斬り飛ばしたときのように翼の形状となった。振り下ろした先はまたもあの馬鹿のいる位置。

「うひいっ!?! 痛あつ!!」

「だ、大丈夫!?!」

「け、結構深く切れた……だいたい植物がだけど。それより、なにこの

青い光……」

ホロウ以外のこの場にいる者たちを明るく青い光が包みだす。それと共に消えていく展開された方陣。

破陣：命脈活性。方陣に展開された力場を地脈に注ぎ込み、その上にある存在の生命力を強化させるもの。アルメリアの体を蝕む植物までも生命力を強化させたが、そのおかげで致命傷は避けられたか。

ホロウクイーンは迫るイシュの猛攻を避けるためにこれ以上の追撃は難しいようだ。

それでも時折こちらに向かって攻撃しようとしているのがわかる。だが、今ならシウアンの元まで妨害がないのだ。

「シウアン、怪我はないか！」

「ウーフアン！ 私は大丈夫！」

「私は怪我あるんですけどー？ あるんですけどー？」

二人とようやく合流ができた。

最悪の事態は避けれた。次にすることはこの場からの離脱。

理想を言えばここでホロウクイーンを仕留めることだが、イシュは大振りばかりで一向に攻撃が当てられない。一度引いてワールウインドも連れてくるべきだ。

「シウアン、あとついでに貴様も。ひとまず里まで戻ろう」

「う、うん！」

不満そうなアルメリアを無視してシウアンの手をひいて走りだす。

里へ戻るまでの道はイシュが壁破壊をして短い距離となっているはずだ。

途端にホロウクイーンの動きが止まる。

その視線はシウアンを、いや、私を見ている。

「我を無視するとは、その愚かさを後悔するが良い」

立ち止まったホロウクイーンに、破壊の一撃が接近する。

ホロウクイーンは避けるそぶりをせず、両腕を振り上げた。

視線は私を見ている。

両腕は左右に広げられ、そして勢いよく前方に振られた。

ただそれだけのはずなのに、そこからの光景がすべて遅く見えた。

ホロウクイーンの振り下ろした腕の延長線上にあった、イシユの体が切断された。

まるで空間からズレたかのように、綺麗に斬られた。

空間のズレは止まることなく迫る。次に切断されるのは私だ。遅く見えているのに、体は動かない。

「急に立ち止まらないで!？」

「はっ」

「きゃっ」

後ろから押され地面に倒れこむ。

途端にすべての動きが早く、正常に戻った。

「鼻が……鼻が……いたい……」

「ア、アルメリア、重い……」

「ご、ごめん!」

背中でシウアンとアルメリアのやり取りが聞こえる。そして重い。遅れて背後の木々が倒れる音が響いた。

「え、どゆこと……ってイシユ!? 大丈夫!？」

アルメリアは全然状況を理解できていなかったか。こんな奴に二

度までも救われるなど屈辱すぎる。

「……ホロウクイーンの腕に警戒せよ。私の体ですらこの通りだ」

上半身と下半身が別れた状態でイシユが返事をする。

………あいつは死ぬことがあるのだろうか。

しかし、さすがに腕や足と違ってすぐさま戻るわけではないのか、分断されて横たわったままだ。

ホロウクイーンはイシユに戦う力がもうないと判断したのか、完全にこちらを見据えている。

「イシユ、ボス熊の時と同じ作戦……とか……？」

アルメリアが鼻を抑えながらすすがるようにイシユに尋ねた。

鼻血でも出たのかもしれない。それよりボス熊の時と同じ作戦、というのがわからないが、何か方法があるということか。

「無理だ。このホロウに通用するとは考えにくい」

「ど、どうすればいいの!?!」

倒れたまま喋る奴と、倒れた奴にすすがる者。傍から見れば異常な光景だ。

そんなものに気を止めずにホロウクイーンが近づいてくる。

その体から影が伸び、ホロウが生み出された。

シウアンの手から震えが伝う。数の有利がひっくり返ったのだ。状況がまたも一転し、悪い流れとなってきた。

「……汝らでこのホロウの動きを止めれぬか。止まりさえすれば、我が終焉を与えてやれる」

「それこそ無理だ……方陣は無効化される……」

ホロウクイーンの動きを止める方法を必死に考える。

方陣ではない方法。奴から出る解除の風は方陣の力に対してのみ作用している。ならば毒薬を用いればあるいは……しかしそんなもの持ち合わせていない。

我武者羅に攻撃を行い怯ませる、という手もあるが、そこまでの攻撃力が今いるメンバーにない。いや、アルメリアの火ならばありえるか？

「あの爆炎でホロウを一掃できないか」

「……ごめん、もう撃てない。形が上手く作れない」

「……そうか」

あれほどの術、何度も連続で使えるはずがないか。無理やり使ったところで威力が落ちてしまうだろう。

亜空絞破を狙うしかないか。

「シウアン、ウーフアン……ちよつと危ないことしてもいい？」

準備のために方陣を展開しようとして、アルメリアが鼻血を垂らしながら呟いた。

この場面でふざけたことをするわけではないだろう。それにこの娘も、ワールウィンドたちと同じく旅を生業とする者ならば、逆境に対して何か秘策を思いついたのかもしれない。

「勝手にしろ」

「今のはね、任せるってー！」

「わかったー！」

シウアンの言葉を聞き、アルメリアは手を口元へ持っていく。

その手に掴んでいるのは——白い笛。

「アレが来たら、動かないでよ!!」

そう叫び、強く、強く笛を吹いた。

辺りに響く笛の音。遠く離れていても聞こえた音だ。耳が痛くなるほどに大きく甲高い音を立てる。

その行為の意味がわからない。ホロウたちが大きな音を嫌うというわけではない。

「あれだけ戦いの音を響かせてたんだから、きつと近くにいるはず……ウーフアン、シウアンも！ 今から音は立てないで！ じつとじてて！」

言いながら小さな火の球を作りだし、ホロウたちの足元へ投げる。小規模な爆発が起きたが、それに巻き込まれたホロウはいない。

何を考えているのだ。まだ文句を言おうと思ったが、任せると言った以上、厳密には言っていないが任せた以上、今は音を立てずにじつとすることにした。

はたはたと、静かに不気味な羽音が壁の向こうから聞こえてきた。

それは壁を飛び越え、ホロウと私たちの間に降りてくる。ふらふらと、ゆらゆらと。

巨大な羽からは鱗粉を振りまきながら。

深霧ノ幽谷の厄介な魔物、ビッグモスが何も映さぬ複眼で、この戦場に現れた。

ビッグモスは最後に大きな音を立てた場所へと近づいていく。

その場所は、先の火球が爆発した場所。そこにいるのは、ホロウたち。

ホロウたちもこの魔物の特性は知っている。目で獲物を認識しな

い魔物だ。音を立てなければ大丈夫だが……近すぎる。

音を立てぬように動きを完全に止めていたホロウたちの体に異変が走る。

痙攣するかのように、何度も体が跳ねる。

ビッグモスの接近により、鱗粉を多く被ってしまったのだ。

ビッグモスの鱗粉には麻痺性の毒がある。たとえ音を立てなくても、あまりにも距離が近くにいると鱗粉によって体の自由を奪われ、痙攣し自ら場所を教えてしまう。

音を立ててしまったホロウは即座に切り刻まれる。振り回された鎌のような爪が、他のホロウにあたり犠牲がまた生まれる。

どんどんとホロウたちの数が減る。そして無事な者は、鱗粉によって次の犠牲になるため音を立てる。繰り返していくうちに、どんどんとホロウクイーンへと近づいていくビッグモス。

魔物が完全に接近する前に、クイーンが唄うように声をあげる。

その声に釣られてビッグモスが一気に距離を詰めた。だがその爪が当たる前に、ビッグモスにいくつもの氷の礫が降り注いだ。

氷の礫に羽を千切られ、魔物は頭部を押しつぶされた。

さすがにクイーン相手には、他のホロウのようにはいかないか。

魔物が断末魔をあげる。それは長く不気味な叫びだったが、一際大きな氷の礫によって途切れさせられた。だが、まだ終わらなかった。

「ひっ……！」

断末魔の叫びに寄せられたのか、二頭のビッグモスが新たに降りてきた。

正確には、一頭は落下してきた状態だ。羽は切り刻まれており、胴体も傷だらけだ。おそらく長くはない。

もう一頭も傷がいくつかついているが、生命力あふれている状態。おそらく共食いをした結果だろう。

だが、今はビッグモスの共食いに対して思うことなどない。突然落

ちてきたビッグモスにシウアンが小さく悲鳴をあげてしまったのだ。
新たなビッグモスは、断末魔をあげた魔物の元へ行くか、シウアンの元へ来てしまうか。

魔物は静かに降りてきて、

「やはりか……！ シウアン！」

こちらに向かってきた。

じつとしては先ほどのホロウたちのようになってしまう。ならば距離を取り続けるしかない。

最初の一頭はすでに死に、落下してきた一頭も瀕死だ。今接近しようとしている一頭とホロウクイーンを警戒をすればいい。

「こ、これでー！」

アルメリアが火球をホロウクイーンの足元に投げ、爆発音を立てる。

しかしビッグモスは見向きもせず近づいてくる。

「一度獲物として見られたらほかには気もとめない！ 倒す以外にないー！」

背中にシウアンを庇い、錫杖をビッグモスに向ける。

印術とやらを私にも使えれば……

ないものねだりをして仕方がない。覚悟を決め、一か八かで脳天を貫こうと錫杖による突きを放とうとし

——ビッグモスにホロウクイーンの巨体が投げつけられた。

「なっ——！」

「他のホロウがいなくなると死角ができるようだな。この我に騙し撃

ちなどさせるとは、まったく手間をかけさせる」

ホロウクイーンの胸から、爪のような剣が背後から貫かれている。苦し気になっているところを見るに、まだ死んではないようだ。

投げた張本人は上半身のみのまま、体を起こし不敵にこちらを眺めていた。

「アルメリア、我をその蛾のもとまで運べ」

「は、はい！ ……内容が情けない気が」

ホロウクイーンの下敷きになっているビッグモスは、のしかかっているものを退かそうと爪を立てながらもがいている。それによつてより一層ホロウクイーンが弱つていき、身動きが取れなくなっている。

「それじゃちよつと失礼して……へ、変なところ触つたらごめんなさ……重っ」

「汝が非力なだけだ。この体は人間の平均と大差ない」
「でも重い……ちよつとこっち手伝ってくださいー！」

ホロウクイーンもビッグモスも風前の灯火だ。すぐには動けそうにない。

「シウアン、ホロウクイーンに近づかないように。私はあの馬鹿共の手伝いをしてくる」

「うん。でもウーフアン、馬鹿って言うのはひどいよ」
「正当な評価だ」

頬を膨らますシウアンの頭を撫で、馬鹿共の元へと行く。

「貴様らは何を遊んでいるんだ。とどめを早く刺すぞ」

「遊んでませんー！ 文句なんて言ってないでイシュを運ぶの手伝ってくださいー！」

「腕の時のように引つ付いたりはしないのか。貴様の胴体は」

「外傷による切断だ。REPAIRで戻りはするがさすがに時間がかかる。その時間を待つ前に外敵は排除しなくてはならぬ」

言葉の意味を完全には理解できなかったが、とりあえず胴体が戻るといふことはわかった。こんな奴をいちいち常識と照らし合わせても無駄だ。

「アルメリアには左腕を持ってもらい、私は右腕を持ってイシュの体を運ぶ。」

その時、途切れ途切れの唄が流れだした。

ホロウクイーンが唄を歌う。何を言っているかわからない歌声は、戦っている最中にも聞いたものと同じだ。

——まだ抵抗する力があるのか。

「爆炎は出せるか」

「自信ないけど……や、やってみる」

「腕を放せ。我がここから拳を当てる」

上空にいくつもの氷の礫が生まれます。今までよりも数は膨大。どんどん増えていき、一つの巨大な氷塊となった。

イシュの腕がホロウクイーンに放たれると同時に氷塊がシウアンに向かって放たれた。

「――！」

途端、虫の不気味な断末魔が辺りに響いた。

氷塊に押しつぶされたのは、蛾の魔物ビッグモスだった。羽を切り

刻まれて落下してきた魔物。

そいつがシウアンの背後にまで移動していた。

今の氷塊は魔物狙いだということのか。それではまるで、

「シウアンを、守った……？」

アルメリアの唾然とした声が届く。

ホロウがシウアンを守るなど……だが今は確かに守った。

ひとつ上の階層で見せられたホロウの幻術を思いだす。あの時の言葉は理解できないことだらけだが、ホロウが巫女を守るという意味にも聞こえたのは確かだ。

考えれば、ホロウがシウアンを傷つける場面はなかった。

奴らと我らは、シウアンを守るという目的は一緒だった？

そんなはずはない、と言いきれない。我らはホロウについてほとんど知らないのだから。

ホロウクイーンに今更尋ねようにも、

「さすがに死んだようだな。蛾の魔物も頭を潰せばよいか」

イシユの放った拳によって首から上をもがれていた。

そこにあるのは亡骸のみ。

「クイーンが……」

敵だと思っていた存在の別の一面を見て、私もシウアンも戸惑っている中、イシユだけが淡々と蛾の魔物を駆除していた。

やがて、シウアンは体についた汚れを払い、ホロウクイーンの亡骸の前に立つ。

「……ありがとう。さっきのことも、あと、きつと今までも、だよね。」

あなたたちのこと、よくわかってないままだけど。今までずっと私のことを気にかけてくれてたってことは伝わったから……今までありがとう」

何も応えない亡骸の前で、シウアンは感謝を告げた。ホロウは何も応えない。

静かに風が吹いた。

風によって運ばれたのか、どこからか水晶玉のようなものが転がってきた。

この水晶玉は見覚えがある。水晶玉と言うより、眼球だが。

ホロウクイーンの眼球。

ホロウたちの目的はほとんど謎のままだが、巫女を守ろうとしたのは事実だ。

そう思うと憎しみなど消え去り、ただ哀愁のみが残る。

ホロウクイーンの力がまだ宿っているかもしれない眼球。ホロウもシウアンを守ろうとした。私たちと同じく。ならば今度は、共にシウアンを守ろう。

決意に対して眼球が応えることなどないが、力を貸してくれるかのようにだった。

「イシユー！ 石盤ありましたよー!!」

「壊さずに持ち帰るのだ」

「はーいー!」

あの馬鹿共は雰囲気と言うのがわからないらしい。

何はともあれ、いつまでもここにいるわけにもいかない。

ひとまず安全のためウロビトの里に戻らねば。

少しだけ、拒絶されたらという不安がまたよぎった。その不安が表にわずかに出てしまい、シウアンへ自信なさげに手を差し出した。

「シウアン、里に帰ろ……里に行こうか」

私にとっては帰る場所であるが、シウアンにとってはもう帰る場所ではないかもしれない。

そう思うと自然と言いなおされた。
しかし、

「うん！ みんなで里に帰ろう！」

「……ああ、そうだな」

言いなおした甲斐などなく、言われてしまった。

掴んでももらえないと思っていた手は、シウアンへ差し出した手は、確かに握り返されたのだ。

28. 開かす心と開かぬ真意

ホロウクイーンとビッグモスと私たちの戦いは終わった。

ビッグモスは笛で乱入させただけでも、まあ終わったのだ。

「イシユ、まだ引つ付かないんですか？」

「急かしたところでどうにもならぬ」

戦いは終わったというのに未だにウロビトの里には戻れていない。

イシユの体が上半身と下半身で分離したままだからだ。このまま戻ってもパニックになるので、引つ付くまで待っているのである。それに戦力的にも復活してくれてからのほうが安全だし。

タルシスの街じゃないし、ウロビトにはイシユが人間と違う体だというのはどうやらバレているみたいだから、そのまま里に行くのもありではあるんだけど……ホロウたちはいなくなったが、魔物自体は残っているのだ。ウーフアンの索敵能力があれば滅多にぶつかり合わないけど、イシユを運ぶにはそもそも手が足りない。重いのだ。

一般の人と同じくらいだと言いつ張るが、そもそも私のようなもやしと、ウロビトの細腕、そしてシウアンの子供の手。この三人でイシユを運ぶのは辛いのだ。

「せめて人手が足りればなあ……」

「ごめんね、アルメリア。私ももつと力持ちなら……」

「シウアン、自分を責めることはない。こいつが重いのが悪いのだ」

「ウーフアンの言う通りだよシウアン。イシユがもうちよつと軽ければ良かっただけだし」

「我は別に重く設計されていないのだが」

イシユの小さなつぶやきが耳に残る。

「ごめんよ。重く設計されていないんだだろうけど、武器とか戦いの後に拾った石盤も含めると重いんだ。私たちには。」

「せめてワールウィンドさんがいてくれたらなあ……」

「というかあの人がてつきり助けにくると思っていたんだけども、来たのはイシユとウーフアンだった。」

　　あの過保護な人が来ないとは、いや、いいけども。別に血縁関係とか無二の親友とかそういうのじゃないし。

　　「ただどあの人がここにいれば、イシユを運ぶのが楽だったはず。それどころかもつとあの戦いは楽だったかもしれない。」

　　「そういえば、あの人はウロビトの里で呪いをどうにかする方法があるかも、と言っていた。その正体はシウアンだったわけで……シウアンから呪いを止めるため共に里にいないかと言われていたことを思いだす。」

　　話を持ちかけられたときは、答えを保留にした。自分に言い聞かせた言い訳はイシユと相談しないと、である。

　　今、その相談を試してみるのがいいかもしれない。

　　シウアンもいるし、イシユもいる。ウーフアンがいるのはちよつと面倒臭いけど。

「イシユ」

「なんだ。まだ時間が必要だ」

「あ、そうじゃなくてですね。世界樹の呪いについてなんですけど……」

　　あ、しまった。もつとぼかした言い方をすればよかった。じゃないとまたウーフアンが「世界樹が呪いなどするわけがない」とか噛みついてきかねない。

　　そんな予想と裏腹に、ウーフアンは変わりなかった。

「……あれ？」

「ジロジロと見て、いったいなんだ」

「あ、いや、なんでもありません。はい……」

　　ま、まあいつか。

「呪いの進行をシウアンが止めれるんです」

「ほう？　それも術とやらの力か？」

「えと、そうじゃなく……」

「私が世界樹にお願いしたの」

どう言おうか迷っていたらシウアンが入ってきた。

しかしその説明でわかる人ってそういないのではないだろうか。

「……とにかく術なのだな」

「そうじゃないよ。世界樹にお願いして、抑えてもらったの」

「だからそれが術による効果なのだろうか？」

「だーかーらー！ 術じゃないって言ってるじゃない！ 世界樹に協力してもらったのー！」

シウアンの助け舟があまり意味をなしていない。

そんな中、また別方向から助け舟が出た。

「シウアンは世界樹の声を聴くことができる世界樹の巫女だ。世界樹は巫女と意思疎通が可能なのだ」

ウーファンの説明である。

しかし大前提である、世界樹に意思があるということこそそもそも納得するだろうか。

「……そう言った宗教染みた内容は専門外だ」

そうなりますよね。

「絶対信じてない……あ、そうだ。世界樹はあなたのこととも言ったよ。懐かしいものって」

「そうか、人違いだ。我はこの地の世界樹計画と無関係だからな」

「でも、あの子の生みの親と同じ時代の人なんですよ？」

「……」

さっきまでは子供の戯言みたいな扱いをしていたけど、ここに来て初めて考え込んだ。

傍から見ればイシユの実年齢なんてわかりっこないのだから、それが説得材料のひとつになっているのかもしれない。

「我のことはアルメリアから聞いたか」

「いえ、私が言う前からイシユのことをシウアンは知っていました」

ここですかさず私のフォローである。

もうひと押しかもしれない。いや、別に世界樹に意思があることなんてどうでもいいけど。

「ふむ……ウロビトの感知能力か？」

「……我らは氣を読むことに長ける。貴様が生命の持つべき氣を持たぬから人間ではないことを見抜けた。貴様が存在していた時までには我らも知ることはできない」

傍から見ると、よつてたかつて胴体を切断された女の子を言葉で追い詰める図。

そんな馬鹿なことを考える余裕があるほど追い詰めてきた。

「この際方法などなんでも良い。とにかく、アルメリアに掛かっていた世界樹の呪いを抑制できたというのだな」

「はい。治ったわけじゃないですけど」

「何か足りないの。たぶん、世界樹をもっと身近に感じれる何かがあれば治せると思うんだけど……」

「曖昧なことだな」

何か、がなんなのかわかってないし、治せると思う、だから断言でもない。宙ぶらりんな感じが確かにするけど、手掛かりとしては唯一のものだ。

前置きはこれくらいにして、本題に入ることにしよう。

「それで今、シウアンからウロビトの里に一緒にいないかかって言われているんです。シウアンと一緒になら呪いの進行を抑えることができますから」

「……？」

何を言っているんだこいつ、みたいな顔された。

ちゃんと説明したはずだけど、何か説明飛んじやってただらうか。でも思い当たる部分がない。

それとも、なんだかんだで結構私の存在がイシユの中で大きく……？

だとしたらニヤけてしまいそうだ。だめだ。笑うな……まだ笑うな……。笑うタイミングじゃないどう考えても。

「何故ウロビトの里にいる必要がある」

「え。いや、シウアンに呪いを抑えてもらうならそうしないと——」

「その者を連れていけば良い話だ」

「当然のように誘拐発言はやめてください」

イシユだしなあ……そうなるよねえ……。

ちよつとでも、イシユが私と離れたくなくて理解できていないとか思っっちゃったのが恥ずかしい。

そしてこの場での誘拐発言はダメすぎる。ついさっきまでホロウに誘拐されてたシウアンに、昨日、いやもう一昨日か。イシユに誘拐されたウーファンがいるのだ。冗談と捉えるのは難しすぎる。冗談じゃないだろうけど。

それにシウアンはウロビトの中でも重要な立ち位置っぽいのだ。私たちの都合で里から連れ出すのはさすがにちよつと。絶対ウーファンとか猛反対だろうし――

「シウアンは、どうしたい?」

「え?」

「ウーファン?」

怒るわけでもなく、猛反対するわけでもなく、シウアンの意見を求めた。

私も、シウアンさえも予想していた反応と違い過ぎてきよんとしてしまった。

「ウロビトのため、誰かのため、なんて考えなくていい。シウアンの望み通りにすればいい。どのような選択であっても、私はそれを尊重する。協力する」

「……」

シウアンはウーファンをじっと見つめた。

答えがでなくて悩んでいるのか、ウーファンの真偽を確かめようとしているのか、私にはわからない。

今はあまり口出ししない方がいいだろうと思い、イシユの肩を揉みながら傍観することにした。肩こりに悩まされているわけではないけど、イシユが何か余計なことを言いそうになったらさすがに口を閉じ

させるためである。

ウーファンの変化に驚きだが、イシユもなんだかちよつと変わった気がする。

実際は肩もみなんてしようとしたら「邪魔だ」とか言われて払われると思っていた。それならそれで気をひけるからいいと考えていたんだけど、黙って肩を揉ませてくれる。ぶつちやけ硬い。疲れてきた。

「……急に言われても、どうしたらいいかわかんないよ」

「シウアンが一番やりたいことを考えたらいい」

「やりたいこと……」

今まで里にずっといたのに、急に外に出てもいいと言われたらどう思うだろうか。

私の場合は自分の命が危なかったから、助かる可能性が外に見いだせたから、喜んで外へ出た。人でなくなるのが怖かったからそうすることができた。

けどもしも、呪いなんてなかったらどうしてただらう。そもそも引きこもってはいなかった……と思うけど……。

「世界樹がね、怖がってるの。だから私、世界樹を助けない」

とりあえずイシユの口を手で押さえた。

しかし手に息が当たらない。呼吸とかもいらぬのかもしれない。まずい。手で押さえた程度では普通に喋れるかもしれない。

「汝は先ほどから何をしているのだ」

「い、一応私たちは口出ししないほうがいいかなと思って……」

案の定、普通に喋られた。ひよつとしたら今ので雰囲気壊れたかもしれない。だとしたら申し訳ない。

「世界樹を助けるにはどうしたらいいかわからないけど、もしかした

らアルメリアたちならできるとは思ってるの」

「この二人が？」

「世界樹が気にかけてた二人。だけど二人とも」

「世界樹を助ける余裕なんてないです」

「我が世界樹を助ける理由などない」

「……これだから」

申し訳ない。

だけど正直な意見なのだ。

私たちの意見を聞いて少し苦笑しながらシウアンは続けた。

「だから、二人の手助けをしたい。それが巡りに巡って、世界樹を助けることになるかもだから」

「そうか……」

「アルメリアたちについていっても、いい？ その……怒ってない？」

「怒るものか。協力すると言っただろう？」

「……ありがとう！」

ウーフアンの言葉に嬉しそうにするシウアン。

私としても嬉しい話だ。シウアンと一緒に来てくれるなら、私は冒険者が続けてもいい。時間制限も気にしなくていい。だからといって寄り道なんてしないけど。

ウーフアンはシウアンから私たちに視線を移動させた。その目は泥棒猫め、みたいな嫉妬はない。

「アルメリアにイシユ。貴様らに頼みがある」

「む？」「はい？」

「……貴様らの旅に、私も同行させてほしい」

深く頭を下げながらの願いだった。

イシユと同じく高慢な彼女の必死な願い。

でも……

「てつきり最初からシウアンとセットだと思ってたんですけど」

「私も。ウーファンは一緒に来てくれるものだ」と

「ねー」

「ねー」

「なっ——」

むしろ反対しても絶対シウアンのいるところに来るとばかり。

シウアンと互いに同意しながら笑っているとウーファンは絶句である。

「汝が来たいのであれば構わぬ。汝の索敵能力は有効だ。反対する理由などない」

「あ、ああ。感謝する……。し、しかしシウアン、私がついていくことに不満はないだろうか」

「？　なんで？　むしろ、ウーファンと一緒に来てくれないことの方が不満かな」

「そ、そうか」

ウーファンの中で何か下手な考えがずっとぐるぐるしていたのだろうか。そんなに戸惑うとは思わなかったけど、ちよつとだけ面白かった。

私とシウアンは一緒にそんなウーファンを見て笑った。イシユはよくわからないといった顔で、ウーファンはしばらく頭をかいたあと、

「そうか……私は一緒にいて、いいのだな」

穏やかに、嬉しそうに呟いた声が耳に届いた。

イシユの体が引っ付き終わってからようやく里に戻る。

途中、あまりにも遅いため非常に安全な帰り道となった。迎えに来たため非常に安全な帰り道となった。

里に着いてすぐにウーファンは長老たちに話してくると言っただけ私たちと離れた。シウアンも一緒に話に行くと行ってウーファンについていった。

辺境伯とは会話する暇もなく、彼もまた、ウーファンに連れていかれた。

人間とウロビトの友好を取り次ぐためにだそうだ。ウーファンからも説得してくれるのだろうきつと。ホロウクイーンの件もあり、他のウロビトもかなり友好的になったようで、うまくいく気しかなかった。まだ少し戸惑っている様子も見受けられるけど。

そんなわけで私とイシユ、そしてワールウィンドさんの三人となった。

「足の怪我、大丈夫ですか？」

「ありがとう、大丈夫さ。俺のことより君のことが心配されるべきだと思うけどね」

「私は見ての通り大丈夫です」

「ちよつと鼻が赤いけど」

「大丈夫です」

「鼻血でも出たのかい？ 血の痕が」

「大丈夫です」

鼻を強く打っただけだから。あまりジロジロ見ないでほしい。普通に恥ずかしい。

「そういえば、谷の石盤も見つかったのかい？」

私の意思が伝わったのか、話は鼻から石盤へと移動した。

北の谷を抜けるために必要な石板。その点は問題なく回収している。

「はい、この通り」

「やっぱりここでも奥深くに置かれていたんだね。他には？」

「へ？ 他？」

「世界樹に関連する物とかなかったかい？ 呪いをなんとかするよう
な、何か……」

何かを探るような眼でワールウィンドさんは尋ねる。

勘というには正確過ぎた今回の呪い云々。その点についてこちら
からも聞きたいけど、シウアンだとは知らないようだ。実は知ってい
たのでは？ という疑問はそのズレによって、やっぱり勘なのかな？
と悩ませる。

「奥には他はなかったです。でも、シウアンが呪いを抑えることがで
きるんです」

「……………シウアン。世界樹の巫女、か」

「はい。それで、シウアンも私たちと一緒に来るって言ってくれたの
でしばらく呪いは大丈夫です。安心しました？」

いつも過保護が過剰なワールウィンドさんに朗報と思わしき情報
である。

遠回しに過保護すぎることを指摘したつもりだけでも。

「そうか、君たちと…………」

何故だろう。その顔は安心したという顔ではなかった。

一瞬だけ苦々しい表情を浮かべた気がした。だけどそんな表情を
浮かべる理由がわからない。

何故だろうか。

目の前にいるはずなのに、すごい遠い存在に思えてしまった。10
年も顔を合わせてるはずなのに、初対面の時のような…………いや、それ
以上の距離を彼から感じた。

「うん、安心したよ。それなら呪いの心配も少ない。けど絶対に無茶
したらダメだよ」

急にいつもののにやけ表情に戻り、いつもの声でやっぱり過保護な
ことを言いだした。

だけでもいつもの過保護さとはまた何かが違う。込められた意味
が違うようにも感じた。

「ワールウィンドさん」

「なんだい？」

この人については知らないことばかり。

10年前は見知らぬ謎の人だった。私の両親が行き倒れていたこの人を助けたことが、始まりだった。

それから数年、私の両親がいなくなっても、受けた恩を返すためと私のそばにいるようになった。とても過保護な、でもやっぱり謎の人だった。だけど知ろうと思わなかった。どうせ私は長くないと諦めていたから。

つい最近まで、過保護な謎の人のままだった。今更探るなんて、なんだか変な気がしたから。

だから、それ以上知らなくてもいいと思っていた。

「何か、隠してますよね？」

だけど、今は知らないままでは落ち着かない。

この人の奇妙な点が棘となって、心にひっかかるのだ。

「……………隠し事がないわけじゃないけど。隠し事だからこそ、言えないよ」

そりやそうだ。

だけどこのまま隠させていいことか。しかし言及しようがない。疑問を思ったことは、どれもあいまいなままだ。尋ねても、のらりくらりと躲されてしまうことばかり。

「だけど、これだけは言えるよ。君に悪いようにはしない。絶対に」
「……………そうですか」

頭を撫でながら聞かされた言葉に、私は引きさがるしかなかった。

10年前から知っているこの掌に、それでもなお噛みつくことはで

きなかった。

「話は終わったか」

イシユがやけに静かだと思っていれば、話が終わるのを待っていたようだ。

私もワールウインドさんも無言になったところでようやくとばかりに入ってきた。

「へえ。君でも少しは遠慮とかできるんだね」

「汝の軽口に付き合う気はない。汝は席を外せ。我はアルメリアと話がある」

「俺には聞かれちゃまずい話なのかい？」

「余計な意見を聞いてアルメリアの意思が揺れるのは望ましくない。我はアルメリアの率直な意見を確認したいのだ」

「……ま、わかったよ。それじゃ」

流れるように喧嘩すると思ったら流れるように話が決まった。

私に話、というより意見を確認したいってなんだろうか。

イシユが私の意見を聞きたい、っていまいち想像がつかない。どこまでも我が道を往くみたいないなタイプなのに。

ワールウインドさんが離れていき、私とイシユの二人だけ。

「えっと、話ってなんですか？」

「まずは聞くがいい。我がハイ・ラガードでやってきた所業を」

淡々と、イシユは過去のことを語り始めた。

29. 善意のない救い

千年前の厄災。それを解決するために創られた世界樹。

世界樹に呑み込まれる国々。

次代のためにと自分たちの命を諦め、次に託した人々。

命を諦めきれず、世界樹から空へと逃げた人々。

逃げた先ですら、安全ではなく、それを打ち破るために研究を重ね続けた。

それがイシユ。

何故私はその話を聞かされたのか、なんとなくわかった。

私が似ているのだろう。命を諦めきれず、逃げた人々と。イシユに頼り生き延びようとした人々と。

話はそこで終わるわけではなく、続いた。

イシユを信じ、ついてきてくれた人々は空から地上に降りることを選んだ。空であつても、逃げることでできないと考えたから。

イシユはその人たちを引き留めなかった。その人たちの考えを尊重した。そして、心変わりしていつか戻りたいと思つた日のために、合言葉を決めて見送つた。

それからずっと彼は研究を続けた。

研究の内容は、彼を信じ、ついてきてくれた者たちが死から逃れる方法を。

研究の方法は日に日に過激になっていった。

いつからそんなことをしたのかは正確に記憶を引きだすことができならしい。ついてきてくれた者たちがいたころからその過激さを持つていたのか、いなくなつてからなのか、今となつてはわからない。

「——そしてある日、狂った我を打ち倒した者たちがいた。だが我は完全に消滅することはなかった。予備としてあつた体に我のデー々が引き継がれ、紆余曲折を経て今に至る」

その声には打ち倒された悔しさも、止めてくれた感謝も、何も込められていない。

「我の今の目的はかつてとは違う。我が魔物にしてしまった哀れな成れ果てを世界樹から解放し、我の狂気の遺産を消すことによって、我を信じ、ついてきてくれた彼らの名誉を守ること」

「だけど、今の言葉だけは強い意志が込められていた。

それが最善なのだと思われないような決意の言葉だった。

イシユと出会った時に言っていた「救うべき者たちの名誉」

その意味がわかった。

「ここまでに聞いた汝に聞きたい。今の我は、狂っているのかを。汝の率直な答えを我は求めている。それがたとえ、我を貶す言葉だとしても構わぬ。そのことで汝にくだらぬ仕返しなどしない」

過去の所業。それだけ見れば確実に狂っている。

私の今まで見てきたイシユ。そこだけ見れば性格をこじらせすぎた変な人。

そして、今のイシユの目的を知った私には、

「……………狂ってます」

「そうか」

イシユを正気だと思ふことができなかつた。

狂ってなんていない、と言いたかった。だけど無理だ。

イシユは嘘をつかない。今話された内容は嘘が一切ない事実なのだとかつてしまう。だからこそ、狂っているとしか思えないのだ。だって、イシユの目的は

「イシユによつて魔物に変えられた人たちを………救いたいわけじゃないんですね」

今もなお、苦しめられている人たちを見ていないのだ。

人でないモノに変えられるおぞましき。植物に蝕まれている身としては他人事ではない。

それがなくとも、正気であれば変えられた人々を救いたいと思うのが普通なんじゃないだろうか。

「……そう、だ。汝の指摘、確かにそうだ。そう考えるのが正常か」

だが、とイシユは続ける。

「指摘を受けてもなお、哀れな彼らを救いたいと思えない。あくまで我を信じ、ついてきてくれた者たちの名誉を守るための手段としか考えられない」

一緒だ。遺品について、この時代に合わせてくれた時と一緒のような答えだった。

いや、あの時よりひどいのかも知れない。

「我は彼らのためにある。たとえ狂気と言われようと、これだけは変えることができない」

「イシユ……」

イシユの中で固定されている優先順位。

一番は、千年前にイシュを信じ、ついてきてくれた人たち。その人たちのために人の体を捨てたイシュ。

「その人たちは、イシュから離れていったじゃないですか……そんな薄情な人たちをいつまでも——！」

人の体を捨ててまで、尽してくれたイシュを見捨てた人たちを、いつまでも思う必要なんてない。

そう言いたかった。だけど、言葉が続けられなかった。

「いくら汝とて、彼らを侮辱することは許さぬ」

喉元に剣を突きつけ、冷酷な眼差しでイシュは言った。

イシュに怒りをぶつけられたのは初めてだ。それも、ワールウィンドさんと喧嘩しているときの怒りとは全くの別物。この人にとって、千年前の人たちは絶対に触れてはいけない逆鱗。

「」

「……次に彼らを侮辱すれば、汝の喉笛を裂く」

「……………はい」

ゆつくりと、剣は鞘に納められていった。

縮まったと思っていた。

一緒に冒険をして、一緒に過ごして、一緒に危機を乗り越えて。だけど、縮まってなどいかなかったのかもしれない。いや、縮まってもなお、この距離なのだろう。

まるで埋まる気がしない。

イシュとの心の距離が。

「汝は今後どうする」

「……………えっ？」

先ほどまでの怒気が一切なくなり、唐突に予定を尋ねられた。そういうところも狂っていると思います。あ、違った。変な性格だと思えます。

「汝の言う通り、我は狂っているとわかった。ならば狂人と共にいることなどないだろう。我はひとりでも世界樹を調べ上げる。汝がついてこなくても問題ない」

「い、いや！ ついていきますよー！」

「ついてこなくても世界樹の調査が済み、実験の段階で汝に協力させるつもりだ。ゆえにタルシスカウロビトの里で待つという手もある」
「ですからついていきますよー！」

「無理する必要はない」

「だーかーらー!!」

普段言葉の裏とか一切読まなくせに、なんで今回はやたらと言葉裏を読もうとしているのか。何も込めてないよ言葉の裏に。

あれか。狂っているって言われて地味に結構傷ついているのか。私だつて傷つけちゃうなつて不安になりながら答えたんだ。ついでいかそういうところは全然狂つてなんかいないよ。メンタル強いのか弱いのかよくわからないよイシユは。

「汝はわかったのだろう。我が狂人だと」

「そんなの！ 初対面の時から！ 変人だとわかってましたよ!!」

「……む？ 今へん——」

「だけど私はついていきたいんです！ そりやイシユのやってきたことを聞いて思うことがないわけじゃないですけど……だからついでいいか、ついていかないかは話が別ですー！」

「そ、そうか」

「ていうか私が辺境伯に言った言葉、覚えてますか!？」

「いったい何の話だ……」

今の話で狂人とわかった。だけどその前から、イシユは変人で、メンタル弱めの承認欲求超強めだとわかっている。あと寂しがり屋だということも。

今更狂人だとわかったところで私の行動は変わらない。変わるはずがない。

言葉の勢いのままに強く言う。

「たとえばどんな考えがあっても、当事者にとっては治してほしいって思うものなんです！ 魔物に変えられた人たちだって、今更と思う前に治してほしいと思っっているはずです！ 自分たちを治すためじゃない、別の人たちの名誉のために治されるとしても、それでいいんです！」

治す行為に意思なんて、高潔さなんて、正常な想いなんて求めているのだ。

「イシユは確かに狂っているけど……だからって、私にとって離れる理由にはなりません！ わかりましたか!?!」

「……ふむ」

ふむ、じゃないよ。わかったのかどうかそれじゃ私がわからないよ。

「わかっていたことだが、汝は変わり者だな」

「今の流れでその結論!?!」

「狂人とわかっていながらもついてくるなど、変わり者としか言いようがない」

とりあえず、ついていくことをわかってもらえた？

何故か変わり者認定を受けたけども。

……勢いで一気に言ったけども、ひとつだけ言わなかった理由がある。

イシユから希望をもらったはずの千年前の人たちは、イシユから離れていった。私はその人たちのことが嫌いだ。

イシユから希望をもらったのに、狂人だからとここで離脱することは、千年前の人たちと一緒にになる気がしたから。

言えば確実に今度こそ、喉を裂かれる。

だから言わない。

だけど、この考えはずっと変わることがない気がした。

イシユとの話も終わり、ウロビトの里で色々と見て回る。

ウロビトは錫杖と弓で戦う種族のようで、剣を用いて戦うことは滅多にないらしい。

さらに言えば、あの方陣術が主体。印術主体の私と似ているのだ。

何か冒険の、さらにいえば戦いの手段が増えないかと思いきや色々見て回ってはいるのだけど。

「……弓って案外硬いんですね」

ウロビトから渡された弓を試しに引いてみようとしたが、全然弦が引つ張れない。ちよつとこの弓壊れてるんじゃないだろうか。子供用のおもちやの弓なら引けたんだけど、ここまで違うものなのか。

「汝の非力さでは弓など扱えるわけがないだろう。大人しく短剣の練習をしていたほうが有意義だ」

「ぐざい……お返しします……」

弓を貸してくれたウロビトの手元に戻す。

苦笑しながら「印術で頑張れ」と言ってくれた。せめて鍛えたら弓も使えるよ、みたいなフォローが欲しかった。

「アルメリアー！ イシューー！」

胸の前で手のひらを合わせ、互いの手のひらを押しように力を込めてみる。バストアップのためではない。筋肉のためだ。

そんなことをしていたらシウアンの声が聞こえてきた。こちらに向かって走ってくるシウアン。その後ろには辺境伯とウーフアンの姿が見える。

「話し合いは終わったようだな」

「ですね」

それも良い方向に終わったのだろう。

向かってくる彼らの顔を見ればわかりやすすぎる。

「ウロビトとタルシスで今後交流が開かれることとなった。諸君の尽力のおかげだ」

「と言っても、まだ様子見といったところだがな」

辺境伯が話し合いの結果を言い、補足するようにウーフアンが続けた。

「様子見、ですか」

「ウロビト全員がタルシスとの交友を賛成というわけではないのだよ。だが、全員が反対というわけでもない。そのため人間の街に興味があるウロビトや、悩んでいる者だけでも互いの生活圏を見てみないかとなったのだよ」

「そして、タルシスから訪れる冒険者に対してもウロビトの扉は開放する。よほどの無礼者でないものに限るがな」

「それで充分だとも」

完全に友好状態というわけではないけど、始めを思えばかなり前向きな状態なのだろう。

マルゲリータを抱きかかえ、撫でながら不敵に微笑んでいる辺境伯はとても嬉しそうだ。惜しむべくは、その表情が知らない人から見れば悪だくみをしているようにしか見えない人相という点である。

「それでね、それでね。私とウーフアンがアルメリアたちについてい

くことも許可されたんだよ」

嬉しそうに報告をするシウアン。

その点は本当によかった。いや、もちろんタルシスとウロビトの友好もよかった点だけど、シウアン関連は本当に。

最悪またイシユがシウアン誘拐とかれて、タルシスとウロビトの間に溝を作りかねないから本当によかった。

「ニーズヘッグだったよね！ 二人のギルド名！ これからよろしくね！」

「私からも、よろしく頼む」

二人に頭を下げられたけど、私じゃなくてイシユにいうべきではないだろうか。一応この人がリーダーなんです。

「というかギルド名そんなだったね。忘れていたよ。忘れてかったよ。」

「お、辺境伯。話し合いは終わったのかい」

「ああ、ワールウインド。すまないがタルシスまで私を送ってもらえないかね？ あまり長く空けるわけにもいかないからな」

「辺境伯は忙しいことだね。わかったよ。それじゃ君たち、またな」

ワールウインドさんが合流と思いきや、すぐさま離れていった。その後を辺境伯がついていこうとして、その前に。

「アルメリア君、イシユ。巫女殿はウロビトの代表者と言っても過言ではない」

世界樹の巫女だからかな。

「ということとは、シウアンに何かがあればそれは友好に傷が入ることになりかねないということだろうか。つまり全力で守れ、と。しかし守るには力が必要で、その力を持つのはイシユであって私ではない。」

イシユが守るかどうか……とにかく辺境伯を安心させよう。

「シウアンを何がなんでも死守です。わかりました！」

「少し違う。巫女殿を守るだけでなく、諸君自身も守るのだよ」

辺境伯は私とイシユの肩を叩いて、ワールウインドさんの後を追いかけて行った。

「なんとまあの人らしいというか。だけど少し、いつもより言葉が重

かった。

二人だけだった時と違って、今度は四人だ。人数の分だけ責任が重くのしかかったということだろうか。イマイチわからない。

「では出発するか」

「は、はいですね……」

イシュが人数もそろったことだしと言わんばかりに出発を告げる。けどどう、シウアンとウーフアンはこれからウロビトの里を離れるのだから、お別れとかを……

「構わない。私たちはいつでも里を出れる」

「うん、みんなと離れるのは一時的なことだもの。冒険が終わったらちゃんと帰ってくるって約束したから」

今生の別れにするつもりはさらさらない。そのことは彼女たちも同じだったようだ。

それなら惜しむようにお別れ会、なんてする必要はないのかもしれない。10年引きこもりにはわからないけどそういうものなのだ。

「異論はないようだな。ではノアのもとまで行くか」

「は、はい！」

「まずは北の谷に石盤を嵌め込む。その後、一度タルシスに戻る」

二人から四人になったパーティ。

そんな中、これからの予定を話したイシュが今までになくまともに見えた。

「タルシスに戻る理由はあるのか？」

「武器を新調する。ホロウクイーンに剣をひとつ破壊されたからな」

ウーフアンの疑問にも返していく姿はリーダーっぽい。

そういえばイシュは指導者だったことを考えるとできて当然なのかもしれない。何故私と二人のときはできなかつたのかが謎だ。あ、実験動物としてしか見てなかつたからか。

そう考えると、埋まる気のしなかつたイシュとの心の距離は、確実に、少しは縮まっているのかもしれない。

「では、行くとするか」

イシユの声に、私たちはそれぞれ返事を返した。

ある者は世界樹を助けるために。

またある者は世界樹の巫女を助けるために。

そして私は、自分の体を治すために。それと、寂しがり屋から離れないために。

第三章

30. 白き大地で温もりを消さぬ為

タルシスの外れにある我が家。その近くには小さな公園がある。

壁で囲まれた公園は、昔子供たちがスナイパーごっこで、弓で遊んでいたなごりで壁に的が書いてあるのだ。今の利用者は基本的にない。

「ただどここ一週間。」

「とやあー！」

「また当たった！　すごいよ！」

利用者がいなくなった公園に、私とシウアンが常連となっている。

「ナイトシーカーに今からなっても遅くはないかな……ふふふん」

「ナイトシーカーって前衛でしょ？　アルメリアには無理じゃないかな？」

「ひどい」

雑談をしながら、的に当たって落ちたナイフを拾ってまた練習を開始する。

今更練習して意味があるのか。

ていうかそんな余裕があるのか。

以前の私ならそう考えたかもしれない。だが今は違う。

ひとつ、呪いの進行を抑えてくれるシウアンがいるので時間の余裕が生まれた。

ひとつ、爆炎の術式を使えるようになったが、精神的に消耗が激しい術式なので温存手段があった方が調査がスムーズになる。そのため練習には意味がある。

そしてなにより、

ここ一週間、世界樹の調査に出れなかったのだ。
明日も出れるか未だに不明である。

遡ること一週間前。

石盤を嵌め込み、次の大地を見る前に街へ戻ることにした。
理由はイシユの剣が一本ダメになったため、新しい剣が必要となったのだ。

ベルンド工房でイシユが店番の子に怒られていたのはちよつと面白かった。

「ふつつう一日で壊さないよ!? なんで!?」

「敵が壊したのだ。我ではない」

「じゃあなんでファルクスまで痛んでるの!?」

「……言うほど痛んでないではないか」

「頑丈な素材をさらに頑丈に加工されてたんだよ!? 外装剥がれてるよこれ!」

「……」

こんな具合だった。

結局ファルクス（ボス熊の爪の剣）も加工し直しが決定。

新しい剣をと思ったが、深霧ノ幽谷では魔物の素材をイシユは一切拾わなかったのだ。状況が状況だったしそれはまあいい。そのためスクラマサクスをまた打ってもらおうこととなった。

「前に売ってもらった素材分はこれでおしまいだからね。新しい剣が必要ならまた素材持ってきてよ。っていうか壊さないでよ!」

「問題ない」

「問題しかないよ!」

二人とも金髪ということも相まって、音声さえなければなんだか姉妹に見える微笑ましい光景だった。音声さえなければ。

そんなこんなで、新しい剣およびファルクスの加工まで一日は最低でもかかるとのこと。

まあたまには、ということでもゆっくりしようとしたのだ。

その空いた一日で、世界樹の調査が躓く事態発覚となった。

それを知ったのは旅に出ようとした時だった。

シウアンとウーファンがパーティに入ったため、今までのように家を拠点としていては狭い。

辺境伯から今回の報酬金も受け取り、お財布も余裕ができたため四人ともセフリムの宿で寝泊まりをすることとした。

イシユの剣もできたことだし、世界樹の調査に今日からいくぞーと宿を出ようとしたとき、珍しい来客が訪ねてきたのだ。

カーゴ交易場の交易長。

赤い髪の人相こわめのお兄さんだ。考えたらタルシスで人相優しそうな人って少ない気がしてきた。

「動力が凍るだど?」

「ああ。あんたらはまだ丹紅ノ石林より北の大地を見てないから知らないだろうけどよ。そこは寒くて寒くて仕方ねえらしい。一面雪景色だそうだ」

交易長はイシユに話があってきたそうなの。

その内容は、気球艇の問題。起きている問題とは、気球艇の動力が新しい大地に厳しい状態らしい。

「雪景色って、雪が降ってるの?」

「ん? ああ、あんたがウロビトの里からきた巫女だな。そうらしいぜ。見てきた連中が言うにはずっと雪が降り続けてたらしい」

雪。タルシスでは雪は降らない。

本での知識で、雪とは白くてとても冷たい粉のようなものと認識している。

そんなものがいっぱいな景色。

……爆発とかしないだろうか。

「動力が凍るなど欠陥もいいところではないか」

「……そう言われちゃ何も言い返せねえが、あんたも知ってるだろ。今の動力は鉱石だ。水につけることによって浮力の高い気体を発生させる特殊な鉱石。突風で気球艇が揺れても零れたりしないよう、水と鉱石の密封性は高くしてあるけどよ。気温変化には対応できてねえ」

「水が凍りつき、浮力が気球口にいかないか。それで、我にその話をした真意はなんだ」

「あんた、結構技術屋としても優秀だろ。頭のネジが何本か抜け落ちてるけどよ。だから気球艇の改造を手伝ってほしいんだわ。色々と考え案はしてんだが、どうも上手くいかなくてな」

イシユに何かを頼むとき、まずは褒めるとたいていの場合はずんわりいくのです。

そのことを理解して言ったわけではないと思うけど、それをうまくついた交易長の言葉にイシユはそりやあもう、ふんぞり返るレベルでドヤってから了承したのです。我が優秀とはよくわかっているではないか、みたいな感じで。

イシユと交易長の話が終わり、ニーズヘッグは気球艇の改造までお休みということが決まった。

急に予定がなくなりどうしようと思ったところ。

「やあ、碧照でのミッション以来だね」

「キルヨネンさん」

中性的すぎて性別がわからないキルヨネンさんに話しかけられた。

この人もセフリムの宿利用者のようだ。

「聞いたよ、ウロビトの里での騒動を君たちが解決したとね。それに仲間もできたようだなによりだ。おっと、申し遅れた。僕の名はキルヨネン。以後、見知り置きをいただきたい」

後半の台詞はシウアンとウーフアンに向けられたものだ。

「私の名はウーフアンだ。見ての通り、ウロビトであり方陣師でもあ

る。人間の街には未だ慣れていない身ゆえに迷惑をかけてしまうかもしれないが、他のウロビトともどもよろしく頼む」

「シウアンです。こちらこそよろしくお願ひします」

「……こう言つては失礼だと思ふが、イシユの仲間にしては存外まともなのだね」

「すつごい失礼だ!？」

「す、すまない」

うっかり漏らした本音のような評価が耳に痛い。

考えたらキルヨネンさんはイシユの悪癖部分を目の当たりにしているのだ。そこからイシユ基準となればそうなくても仕方ないかもしれない。

「やはりあいつは人間の街でも浮いているのだな……」

「で、でもちよつとずつ街に馴染んで来ているんです! た、たぶん……!」

その証拠にさつきも交易長と話盛り上がったたし!

「君たちは丹紅ノ石林のさらに北の地、銀嵐ノ霊峰についてももう知っているかい?」

「あ、はい。名前は初めて聞きましたけど今さつき、交易長が来ててそれについて教えてくれました」

「それなら話が早い」
「?」

何か追加情報でもあるのだろうか。

交易長が知らないような追加情報とか。それともまた別の何か?

キルヨネンさんは話を続ける。

「気球艇の動力が凍りつく問題には、僕たち冒険者も交易場の彼らも頭を悩ませている。気球艇について、僕たちはあまり知識がない。だからといって甘えてばかりではいられないと思つてね」

「はあ」

「これから冒険者ギルドで勉強会を開こうと思ふんだ。君もどうだろうか」

「是非ともお断りします」

条件反射のように言ってしまった。

だけど仕方ないことだろう。だって意味がわからないし。

「そうか……アルメリアにも悪くない話だと思っただが……」

「勉強会が必要なほど私って頭悪そうに見えます……？」

気球艇の知識がないから勉強会をするってことでしよう。今から気球艇について学んでも、専門家に任せたほうが断然いい。

ひよつとしてキルヨネンさんは天然さんなんだろうか？ 残念系なのだろうか？ でも美人の天然とか得しか感じないのは何故だろう。

「私は空いた時間……少し投刃の練習でもしたいんで、勉強会は断固拒否です」

「アルメリア、そこまで嫌がらなくても……私もその練習見てていい？」

「いいよー」

シウアンもさりげなく勉強会から逃げる口実として私に便乗してきた感がする。

世界樹の巫女もちやつかりものかもしれない。

「アルメリアとシウアンは不参加か。二人にも参加してほしかったが……ウーフアン、君はどうする？」

「その前に勉強会と先の話、繋がりが全く見えないのだが」

「ああ、すまない。勉強会と言うのは」
説明しながらキルヨネンさんは鞆から一冊の本を取り出した。

物語本ではなさそうな表紙。少し古い感じのものだ。

「氷の聖印、その術式書を僕が所持している。それを多数の冒険者が扱えれば動力を凍てつく寒気から守れないかと思ってね」

え。

「氷の聖印……印術師の技術か？」

「ああ。魔物の凍てつく息吹から仲間の身を守る術。これを応用すれば気球艇の動力にも効果があるかもしれない。それで術師の才がありそうな冒険者を集めて勉強会でもと思ってね」

え。

勉強会の内容って術式書なの？ え、行きたい。

「私も参加していいだろうか。印術師ではないが、印術には興味ある」
「もちろんだ」

私も参加したい。

うん、今からでも前言撤回していいよね。うん、言うぞ。参加するって言うぞ。

「あ、あの、私も——」

「では、私はキルヨネンと同行する。シウアン、アルメリアからはぐれないようにな。あと貴様、シウアンに怪我をさせるなよ」

「ウーファンったら過保護なんだから。ちゃんとアルメリアと一緒にいるから大丈夫だよ。勉強会、頑張ってね！」

ああつと？

シウアンったらそんなに私と一緒にいたいのかしら？ せつかくだし三人で勉強会に行きましょ行きましょ？

「シ、シウアン、私も勉——」

「では二人とも、ウーファンを借りるよ。また後ほど」

まじか。

「それじゃアルメリア！ 練習にいこっか！」

「……」

「投刃ってナイフを投げて攻撃するんでしょ？ すごいカッコよさそうー！」

「……うん、期待して、見ててね……」

キラキラな目線を向けるシウアンのためだ。

うん、そのためだ。

いいもん。私は火の印術師だもん。

そんなわけで現在もなお気球艇改造計画中であり、氷の聖印応用会進行中である。

そのため冒険には出れず仕舞い。

とはいえ気球艇改造計画は現在、全冒険者の気球艇を改造しているわけではなく、まずは何隻かだけである。そのため冒険者全員お休みというわけではない。

気球艇を動かせる者は近くの森や樹海、廃鉱などを調べ何か気球艇の改造に使えるものを探したり、気ままに冒険を続けていたりいろいろだ。

氷の聖印応用会は気球艇改造計画の保険だそうだ。

そもそも冒険者のパーティすべてに印術師が含まれているわけではない。それに術師の負担が大きすぎるので最悪の保険。頻繁に聖印を組み直す必要があるそうなので、ややその保険も頓挫しかけられなかった。

しかし思わぬ発見。

ウロビトの術師はかなり長時間聖印を使うことが出来たらしい。

今では勉強会は勉強会兼ウロビトの冒険志望者引き抜き会になっているそうなの。

勉強会に参加したウーフアンも何度か声を掛けられたそうだが、断固拒否したらしい。シウアンがいるところには行かないとかなんとか。過保護極めり。

しかし一週間目立った変動がないのが何とも言えない。

セフリムの宿でイシユやウーフアンと顔を合わせるが、二人ともあまりべらべら話してくれない。どちらも弱点をつけば教えてくれるけど。

イシユは煽てればあっさり話すし、ウーフアンはシウアンが聞けばあっさり話す。

それによると一応順調ではあるそうだが、まだ確実性が薄い、というのが現状とのこと。

「そろそろ休もう？ 一度呪いを抑えないと」

また一本、的に刃の部位を当てて落ちたナイフを拾っているとシウアンからの休憩の提案。

もう少し腕力があれば本気でナイトシーカーかスナイパーの凄腕になれた気がする。

「うん、それじゃいつものお願いー」

「はーい」

ナイフをすべて拾って公園のそばの家に入る。一週間、宿で寝泊まりしてばかりで我が家の使い方が、練習後のシウアンによる祈祷場所となつてている。

蛍のような明かりが漂い、体内に入ってくる。

何度やつてもらってもよくわからないものだ。

「どう？」

「すごい楽になつてくう……」

疲労が取れるわけじゃないけども、この瞬間は確かに楽になつていく。普通の体に戻れたような錯覚が起きるほどに。

と言つても抑えているだけだし、祈祷が終われば十分としないうちにまたいつもの体の感覚に戻るけども。

もしもこの祈祷がなければ今頃どうなっていたらろうか。

進行速度がよくわからなかった呪いだけど、シウアンならある程度わかつたりするのかな。

疑問に思つたのでそのまま聞いてみることに。

「シウアン、もし抑えてもらえなかったら呪いつて今頃どれくらい進行してたかわかる？」

「本当に聞きたい？」

「なんで勿体ぶるの……不安になるんだけど……」

「たぶん、もう人の形は保ってないかも」

勿体ぶつたかと思えば割と素直に教えてくれた。まあ内容は残酷

だったけど、やっぱりかあといい気持ちもある。それと同時に幸運だったなとも。

人の形を保っていない。

改めて言われると薄ら寒さを感じる。もしも、の話とはいえ、かなり可能性の高い話だったのだし。

人として生まれたのに、人ではないモノに変えられる。

ハイ・ラガードでの話を思いだしてしまい、少し気分が沈んだ。

だけどシウアンには悟られないようにしなくては。ハイ・ラガードの件はシウアンには無関係だ。それにこのタイミングでどんよりすると、シウアンの話のせいって勘違いされかねない。

自分もシウアンも誤魔化すためにとニヤけながら、ふざけることにした。

「……シウアン様々だわ。あ、巫女様だっけ」

「普通に呼んでよ、もう。今のアルメリア、なんだかワールウインドみたいだったよ」

「えっ、そんなに老けてそうだった？」

「雰囲気那不真面目って意味」

ここにワールウインドさんがいなくてよかった。

老けているだの不真面目だと評価されている彼が少し不憫である。

「……アルメリア」

「? どしたの」

のんびりと笑い合ってたのに、急に真面目な顔に切り替えられるとびっくりする。

とはいえシウアンはある意味私の主治医状態だ。真面目な話になるのなら、私も真面目に聞かなくては。

「……抑えている分だけ、日に日に強くなっているの」

何が、とは聞かなかった。

「それはいつか……抑えきれなく、なるってこと?」

「ううん……抑えて落ち着かせても、だんだんと侵食する間隔が早くなっているの」

「えっと、今は一日一回の祈祷で済んでるけど、いずれ一日二回必要になる的な？」

「うん……だから私からあまり離れないでね」

真剣な面持ちで聞かされた話に対して、なんだそんなことか、という感想しか出てこなかった。

もとよりシウアンから離れるという考えはあまりない。というか離れようもないと思う。ウロビトの里の事情でシウアンが戻らなくてはってなったとしても、その事情を解決しに行けばいいだろうし、それでもなお里にいないとってなったら、私が里に行くか、イシュが誘拐騒動を起こすだろう。後者はやめてほしいところである。

「もちろん。それにしても、私から離れないで、かあ。ウーファンが聞いたら嫉妬に狂いそう」

「ふざけないでよ、もう」

頬を膨らますシウアンの頭を撫でながら笑う。なんとも平和な日である。

宿への帰り道、時々すれ違うウロビトの人には巫女様をお願いしませと何度も頭を下げられたり、筋肉質なギルド長にもっと筋肉をつけるようにと言われたりしながらシウアンと歩いていく。

「あ、どこか行ってたんですか？」

「む？ 汝らか。新たな気球艇の素材を求めて少しな」

街門から出てきたイシュと遭遇した。

いつもの恰好に、背中には大きな袋がいくつも。見るからに重量がありそうな袋だ。

背負った大袋から紫色の魔物の皮を見せてくる。やたらとゴツゴツしている硬そうな皮だ。というか行くのなら一声かけてくれたら手伝ったのに。大した戦力にならないとは自覚しているけども。

「いっぱいあるね。これで空を飛べるようになるの？ 重たそうだけど」

「まだ実験段階だ。断言はできない」

「動力が凍るのが問題なんですよね。この皮で解決しそうですね？」

「まだ実験段階と言ったではないか」

それにしてもこんな皮の魔物を見た覚えがない。

あの幽谷の魔物だろうか。それとも他のどこかの森の魔物？

イシユは皮の有用性について教える気はないようだが、煽て作戦に切り替える。

「でもイシユの予想なら正確だと思うんで聞きたいんです」

「ふむ……予想程度ならばまあいいだろう。動力の根本的な問題は冷気だ。ならば単純に冷気が届かぬ構造にするか、熱で温めればよい。熱を、火を使うにしても気球艇の安全性のため、然るべき措置が必要だ。そこでこの皮だ。この皮はワニの魔物のもの。耐熱性は優れたものだった。冷気にひどく弱かったがな」

ものすごーくべらべら話しだーす。なんてチョロイシユ。

「えーっと……この皮で火を囲って、動力を温めるってことですか？」

「うむ。それと、構造と球皮も変更を加える。早ければ三日後には完成しているはずだ」

「予想から急に具体的な数字が」

「早ければ、だ。多少延びることもある。だが準備はしておくのだ」

「はい」

準備。

準備と言っても何があるだろうか。地図を描くためのものは常備している。医薬品も入れっぱなしだ。あ、防寒着とかいるかな。寒い地らしいし。

あとは……あ、そうだ。踊る孔雀亭にあとで寄っておこう。

何かついでにいい依頼がないかを探すのだ。

そういえば、前回の依頼の報告してもうしているんだろうか。イシユがひとりで行動していた時の依頼。というかその内容の顛末を

聞いていない。黒い依頼書と光粘菌の木だっけ。

「イシユ、前受けた依頼って報告しました？」

さすがにしているだろうと思いつながら、念のため聞いてみる。

依頼は成否どちらであろうとなるべく報告しないとけない。理由としては報酬のこともあるけど、多方面に迷惑が掛かるのだ。色々。

「していないが？」

そっかー。

そっかあ……していないのかあ……

孔雀亭、行きたくなくなってきたなあ……

31. 其の黒きものに触れるな

踊る孔雀亭が扱う依頼は、指定のない限りダブルブッキングを避けるために、誰かが受諾中は他の人が受けられないよう配慮するそうだ。つまり報告が来るまで、依頼主は待ちぼうけである。

仲介者である孔雀亭も、成功失敗どちらであろうと報告が来るまで待ちぼうけである。

つまり、たとえ失敗であつても報告には行かなくては迷惑をあちこちにかけてまくるのだ。

ちなみに依頼受諾者が生死不明の場合、街に戻らず一月経てば失敗と判断されるそう。死亡が確定している場合も同じ。

「黒い依頼書は達成した。もうひとつはする暇がなかったので放置したが、それが問題になるのか？ 緊急性も薄そうなものだったが」「報告していないのが問題なんですよ……」

イシュは、というか私たちは未報告のまま何日も過ごしてしまつた。

しかもひとつは未達成という。

遅ければ遅いほど不味いと思い、セプリムの宿で荷物を下ろしてから孔雀亭へと向かう。

シウアンは置いて来た。あの子は今回の失態と関係ないから。

お説教とかあるんだろうか。今から既に気が重い。

なんだか世界樹への道が開くたびに怒られる事態が発生している気がする……やっぱり世界樹は敵である。

どれもこれも世界樹が悪いのだと責任転嫁を心の中でしながら、重たい足どりで向かった。

孔雀亭の中は以前と違う様相だった。

ウロビトが増えたから、というのもあるかもしれないが、街の兵士までも多くいる。非番だとか休憩中に、といった具合ではない。

依頼ボードのそばで周囲を警戒するようにしている兵士の姿から、嫌な想像をしてしまう。

依頼すつぽかしたイシユを取り押さえるべく、兵士がいるのではないかと。

でもそれならまず催促に来てほしいものである。

自己責任？ 自己管理？ 知るか。

心の中でかなり口が悪くなったがお首には出さない。というか出すわけにはいかない。とにかく報告である。

「こ、こんにちはあ……」

怒られる可能性が高いせいとか、自然と声が震えてしまった。自分で言うのもなんだけど、冒険で結構図太くなってきた気がしてたが気のせいだったかもしれない。

ダメだダメだ。

こんな調子じゃ後ろめたいことがあるんですと自ら言っているようなものだ。追及されるまでは素知らぬフリがベストだ。

「あら、いらつしやい」

「依頼の報告に来ました！ ……黒い依頼書は達成で光粘菌の依頼はできてませんキャンセルをお願いします黒い依頼書は達成です！」

一息で言った。しっかりと言った。勢いで誤魔化す大作戦だ。

報告は果たした。聞き漏らしてたとかなら向こうの責任に少しはなるはず。なので途中のキャンセル云々については聞き漏らしてますように……！！

「え……？ ちょっと待って」

「はひっ！」

あ、ダメだこれ。

勢いで誤魔化しきれてないっぽい。待ったかけられたとかもうダメだ。

「あの黒い依頼、達成できたの……？」

「ごめんなさつ……そっち？ あ、はい！ そうです！ だよね!?!
イシユ、できたんだよね?！」

「うむ。石柱なら破壊した。もう一つの依頼は——」

「というわけで黒い依頼書は達成しました!」

黒い依頼書のほうに話の注目が集まっているのだ。もう一つの依頼なんてどうでもいいのだ。辺境伯が依頼主だっけ。申し訳ないけど今はどうでもいいのだ。

すると周囲から小さななどよめきが起きだした。

「本当に……?」

「虚偽の報告をする理由がない」

「そうよね。疑ったりしてごめんなさい。少しだけその話、詳しく聞かせてくれないかしら」

私からは話せない。依頼をこなしていた時の様子はイシユしか知らないからだ。

「詳しく、か。破壊対象の石柱があつた場所には竜がいたな」

「……やっぱりそうなのね」

「竜が飛び立った隙に石柱を破壊したが、すぐに竜が戻ってきたため撤退した。ゆえに石柱を破壊する意味はわからぬままだ」

タイミング的に、ウロビトの里で雷鳴を聞いていた時だろうか。

そういえばあの時、雷鳴が鳴り始めてしばらくしてから、奇妙な音を聞いて倒れてしまった。目を覚ましたら雷鳴がより激しく鳴っていて……これは関係性があるのだろうか。

「それとひとつ、破壊した石柱から黒い靄が噴出した。それは私の体に纏わりついた後、北へと昇っていった」

「黒い靄? また新情報ね……勘弁してほしいわ」

「新情報? 何かあつたんですか?」

イシユの報告を聞いた彼女は頭を抱えながら愚痴った。

黒い依頼書について何かあつたのかもしれない。それが店内の雰囲気の変化の理由かもしれない。

「ええ……あの黒い依頼書、また増えたのよ……」

「うへえ……」

兵士のそばに置いてある依頼ボードを見れば確かに黒い依頼書がある。枚数は二枚。

「あれ？ 前から二枚じゃなかったです？」

「あなたたちが一つ達成したから三枚にならなかったんでしょうね……」

あ、そういうこと。

じゃああの二枚のうち一枚は、赤竜が飛んでるときに石柱を。

もう一枚は……流れる的に三体目の竜だろう。たしか、

「氷竜か」

「ええ、そうよ。氷嵐の支配者、氷竜が空を飛ぶときに石柱を壊せて」

北の谷が開けるたびに黒い依頼書が増えている。この調子なら次もまたあるのかもしれない。いや、特別な竜は三体だけだっけ。

しかし、不気味さはすごいけどあまり驚きはない。

丹紅ノ石林に行けるようになった時も増えたんだ。今更という感じがする。

「それでももうわかったと思うけど、石柱のある場所は竜の寝床なのかずつといるみたいなの。当然こんな依頼は危険すぎるから今は誰も受けないようにしているんだけど……」

竜には触れず、が常識だ。

今までは竜関係の依頼とはいえ、石柱と言う意味不明さ。そして竜が飛んでいるとき、という文言から竜の寝床とまでは考えていなかった。だからこそ受諾可能だったのだろう。

だけど危険度がひどく高いとわかったから受けないようにしている。それもわかる。

「ひよつとして、あの兵士さんたちは黒い依頼を受けないように？」

「そうよ」

「……やりすぎでは？」

危険性が高いから受けさせないようにすると言っても、冒険者って勝手に受けたりしそうである。冒険者の命ははつきり言って自己責任だ。だからこそ私が冒険に出ることを辺境伯やワールウインドさ

んは渋ったのだから。

黒い依頼書が超危険、竜の寝床かもしれない。と受諾しようとする人に言えば、あとは自己責任なのではないだろうか。

「あなたも知っているでしょ？ あの依頼書は無意識に受けようとした人がいるって」

「あ……はい。私もそれでしたね」

「ひとこと注意をしたら正気に戻ってくれたけど、今はそうじゃないの」

「へ？」

無意識じゃなく、意識的に受けようとするってこと？

竜関係とわかってて、自分から受けようとする無謀さは意味がわからないけど、それなら別にありなんじゃないだろうか。少し残酷だけど。

「黒い依頼書に触れた人はどう見ても正気じゃなかった。いくら仲間が声を止めても……そしてひとりで石柱に向かったわ」

「仲間を置いて……？」

「ええ、まるで操られているかのように……幸い見るだけならまだ大丈夫だけど、あなたも絶対に依頼書に触れちゃダメよ」

おそらくひとりで向かった人は無事じゃないだろう。赤竜のいる石柱なら、骨すら残っていないかもしれない。

前から人を無意識下に操るかのような紙だったが、完全に洗脳レベルになっているじゃないか。不気味さが格段に上がっているじゃないか。

兵士がボードのそばにいる理由がわかった。あの黒い紙は人を殺す紙だ。

誰かが触ろうとしたら止めるためにいるのだろう。

「とにかくあの黒い依頼書については絶対禁止。辺境伯に相談して、今は学者さんたちに竜について調べてもらっているの。赤竜も雷竜も、氷竜も他の地域にも存在しているらしいから」

彼女はそこで一度話を区切り、次の言葉から少し声を落として話に出した。

「……この依頼、なんていうか嫌な予感がするのよ……達成してもらったら同じのはなくなるみたいだけど、やってはいけないというか……」

ボードに貼られている黒い紙を睨みながら彼女は呟く。

仲介者としての勘が告げているのだろうか。達成しても危険なものだと。漠然とした不安を解消するためにも、まず調べるといった流れになったのだろうか。

「イシュ、何か知ってたりは……」

「竜については我も知らぬ。奴らは世界樹と関係があるのだろうか、不明な点が多い」

「そうですか……」

私のほうでも少し調べてみようか。

といっても家の本に竜のことなんて書いてなかったけど。というかタルシスは各地から冒険者を集められている。それに最近はウロビトも増えた。

誰かしら竜に詳しい人がいるかもしれない。

その人に三竜について、そして黒い依頼書について何か知ってないか聞いてみよう。いれば、だけど。

「学者さんたちにもあなたが言ってた黒い霧について報告しておくわ。それで、今日はどうする？」

「ついでにやれそうな依頼をーって思ったんですけど、ちよつとボードに近づくのは怖いですし……今日はもう帰りますね」

「あら、たまには依頼とか関係なしに居てくれてもいいじゃない」
がっしりと手を掴まれた。

「あの？　ちよつと、手が痛いんですけど……結構握力あるんですね……？」

「ねえ、居てくれてもいいと思わない？」

「あの……？」

さらに手を掴む力が込められている。

なんかこわい。

「わ、私お酒とか飲めないんで、居てもなあって……なので帰りたい

な—って……」

「お酒が飲めなくても居てもいいのよ。大事なお話があるもの」

「えと、黒い依頼書についてはもう聞きましたよ……?」

笑顔が怖い。

手をすごい力で掴みながら浮かべる笑顔は怖い。アルメリア、学んだ。

「あなたたちがこの10日間、何をしていたのか知りたいのだけど、教えてくれるかしら?」

「は、はい? えっと、ウロビトの里で色々あつて……」

「ああ、そうね。里からタルシスに戻ったのはだいたい一週間前かしら?」

「は、はい」

話の流れが見えない。

世間話が出来ただけなのだろうか。私たちのここ最近の近況が聞きたいなんて。

「我はタルシスに戻ってから気球艇の改造計画を進めていた。それももうすぐ終わりを迎えるだろう」

「そうなのね。街のため、なら仕方がないかしら。で、アルメリアは?」

「え、えと。トレーニングを……」

「一週間ずつ?」

「は、はい! おかげでナイフの扱いは上手になりました——」

「光粘菌の依頼報告、なんで遅くなったのかしら」

……

……危険な流れだな? これは。

「難航していて、なら途中報告がほしかったんだけど、トレーニングをしてみたのよね。ナイフの扱いがうまくなるのは冒険者としていいことね?」

「え、えへ……へへへ……」

勢いで誤魔化す大作戦。

どうやら誤魔化せていなかったようだ。

笑って誤魔化す作戦。希望は薄そうだ。

「辺境伯が時々依頼の状況を聞きに来るのよね。まだかねって。まだ報告がないって知ったあと、アルメリア君なら真面目な子だし、きつと今頃頑張ってくれているのだなとか言っていて帰っていくのよ」

「へへ……へへへ……」

「何を笑っているのかしら？」

「……ごめんなさい」

「それは何に対しての謝罪かしら？」

「依頼報告の遅さと……キャンセルすること……辺境伯の信頼への……」

その後、報告の遅延により掛かる迷惑と、依頼放棄による処置などを長々と聞くはめになった。

イシユは先に宿に帰っていった。度しがたい。

私が取れる行動は、ひたすら謝り倒すことしかなかった。

「まあアルメリアさん、お帰りなさいー」

セフリムの宿の女将さんの声が癒される。

責めてこない女将さんに癒される。何故私はこんなにも心労が募っているのだろうか。

「なんだかお疲れのようですけど、何かあったんですか？」

「ああ、いえ……ちよっとお説教をくらってまして……」

「あらあら、大変ですねー」

イシユが悪いのにイシユの保護者としてしつかりしろとまで言わ

れてきました。

私の知っている保護者という分類の中には四桁の年齢を保護している人なんていないのですが。

「そんなときはたくさん食べてゆっくり休みましょう。今日のご飯はウロビトメニユーですよ。ウロビトの里で採れる木の実と香草を使った精進料理です」

「はい。あ、女将さん女将さん」

「はいはい？ どうしました？ 苦手なお野菜でもあるんですか？」

「いえ、そうじゃなくて。竜とか呪いに詳しい人とかって知りませんか？」

このタルシスの宿泊施設の利用者は、ほとんどが冒険者である。

それもだいたいがよその地域から来た人たちだ。その中に竜について、黒い紙について何か知っている人がいるかもしれない。そういった人に心当たりがないか、宿の主人に聞くのが手っ取り早いと思った。

呪いについてと言い換えたのは、オカルトチックな雰囲気でしたからだ。

「竜と呪いですかー」

「実際関係するかわからないんですけど、孔雀亭の黒い紙がなんだか呪いの紙みたいでして。そして竜にも関係しているかもしれないなーって思ってます」

「そうですねえ……竜について何か知ってそうな人はいますけど」

「おおー！」

「その人が言いまわっているわけじゃないですし、勝手に教えていいものか」

「おおー……」

その人は竜について詳しいということと秘密にしたがっているということだろうか。考えてみれば、竜に詳しい冒険者なんて悪目立ちしそうである。学者か、竜殺しの英雄か、高名な騎士か、それとも夢追い人か。そう見られるだろう。良い方向に捉えられてプレッシャーとなってしまうし、悪い方向に取られたら仲間を作りづらい。

まあ私も絶対知りたいたいというわけではない。少しでも孔雀亭が使いやすいくならないかなと思っただけだし、心証的にプラスになるかなって打算もあつたりするし。

関われないなら関われないでいいや。そう判断つけようとしたら、「私からその人に聞いておきましようか？」

女将さんからの提案である。

私が直接会わずでもいいなら聞いておくと。

「いいんですか？」

「いいですよ。その人もここのお客さんですし、答えてもらえるかどうかはわかりませんが」

「それじゃあお願いしたいです。えっと……質問内容は、三竜について、黒い竜について、竜が関係しそうな呪いについて、です。あ、呪いの内容は人を操るもので！」

「なんだかすごそうな内容ですね。わかりました、聞いておきますねー」

「できれば、程度のご感覚ですので気楽にお願いします！」

情報が得られたとしても、私たちの旅に関係するかわられると微妙な所である。なので相手が渋ったら別に聞かなくても大丈夫ですと言外に伝えたつもりだ。

女将さんとの話はそれくらいで終え、取っている部屋に戻る。部屋にはイシユはもちろん、ウーファンとシウアンもいた。

気球艇さえなんとかなつたら次に行く場所は寒い場所。

明日は防寒着を人数分準備しよう。

シウアンと一緒に色々選ぼう。シウアンが選んだと言えば、ウーファンは微妙なデザインであっても大喜びしそうだしね。私が選んだって言えば良くて無反応、最悪小姑状態だ。

そう考えるとウーファンの防寒着選びのときは似合わなさそうな色を勧めよう。ピンクとか黄色とか。

イシユのはどんなのがいいだろう。

好きな色とか知らないしなあ。

「もうすぐ気球艇もなんとかかなりそうなんですよね。明日防寒着を買おうと思うんですけど」

「明日はナイフの練習はいいの?」

「うん。だからシウアンにも一緒に買い物付き合っしてほしいんだけど、いい?」

「うん!」

もしもシウアンがここで断っていたら、ウーフアンの防寒着選びが面倒だったので了承してもらえて良かった。

「防寒着か。私は行けそうにない。聖印の応用ももうすぐ終わるため外せそうにない」

「イシユも気球艇で来れませんよね? なので二人の分は私とシウアンで選んでおきます」

「貴様がか……」

「ウーフアンの分はシウアンに選んでもらいますね」

さりげなくピンク色の防寒着を勧めておきますね。

「それでイシユって、好きな色とかってありますか?」

「金色だな。次に銀色だ」

「……あれば選択肢に入れておきますね」

絶対ないと思うけど。

金色の防寒着なんて絶対ないと思うけど。

「あったとしても我には不要だ。我は温度を感じぬ」

その言葉に思いだすのは、森の廃鉱で水に手をつけていた時の姿。

あの時も温度を感じれないと言っていた。

「あ……いや、でもひとりだけないっていうのも」

「イシユ、貴様も防寒着を着るべきだ。貴様が温度を感じないのはこの際いいとして、薄ら寒そうな姿では見ている側も気が気でないのはい」

「ウーフアンの言う通りですよ。見ている側もうひやあってなりますよ」

「うひやあって」

「うひやあです」

シウアンの復唱。

言いたいことはわかるけど上手く言葉にできないときだってあるはずだ。そんなときはニュアンス寄りの言葉になってしまうのは仕方ないと思う。

「ならば任せるとしよう」

「はい！」

「神々しさを感ずる金色が望ましい」

「はい……」

あつたとしても買わないでおこう。

そんな服を着ている人が隣にいと目が痛そうだ。

3.2. 三体の竜の話

銀嵐ノ靈峰対策のためか、手袋やコート、毛糸の帽子にマフラー。防寒着の品ぞろえがどこも充実しつつある。雪と無縁のタルシスでは珍しいラインナップだ。

とりあえずコートと耳当てだけでいいかな。

そんなわけで、ウーファンの防寒着は真っ赤になりました。

血とかではなく、単純に服の色の話である。耳当てはピンクに。

シウアンはその逆。防寒着が淡いピンクで耳当てが赤。微妙にお揃いという感じの説得で乗り切った。ウーファンに対しての嫌がらせ目的ではない。純粋な善意である。

私は白色、イシユは落ち着いた緑色という無難な配色。耳当ても同じ色だ。

「アルメリアさん、この間のことですけど」

「はい？」

防寒着を買うという予定もあっさりと終わり、シウアンは街をぶらついてくると言ってどこかへ行った。

そんなわけで予定もなくなり、宿で凶鳥烈火の術式書でももうちよつとよく読もうかなと思ったら女将さんに呼び止められた。

「あ、竜のことですか？」

「はい、それですよ。その人が今日のお昼ごはんでも一緒にどうかと。その時にお話してもいいとのことですよ」

「直接会って話すってわけですね」

別に伝言形式でも良かったのに。

ご面談である。それなら私ではなく酒場の彼女とか、辺境伯とか学者さんとかと話してくれればいいんだけど。

「それなら一番知りたがってるのは私じゃなくて別の人ですし、その人を呼んで……」

「うーん、アルメリアさんのお知り合いですし、他の人には話さないかもしれませんが」

「あらまあ」

私の狭い交友関係の中に竜について知っている人がいるとは。さらにいえばセフリムの宿の利用者。だいぶ絞れてしまうではないか。ワールウィンドさんは確か別の宿。だとすれば、ウィラフさんかキルヨネンさん。どちらかである。

女将さんに言われた部屋までのんびり歩いていく。

部屋までご飯を持ってきてくれるそうだ。もしもシウアンが戻ってきたらウーフアンのところへ行くように書置きはしておいた。

いざ扉の前まで来たらなんだか緊張してきた。

知り合い、おそらくはウィラフさんかキルヨネンさん。どちらであれ竜に関して知っていて、冒険者となれば竜殺しと関わりがあるということだ。そう考えたらすごい人ということだ。

そういう目線のハードルが嫌で言いふらさないのだろうけど、自然と身構えてしまう。

いつも通り、いつも通りを心がけるのだ。

胸に手を当て深呼吸。ちよつと苦しい。

ノックをすると中から声が聞こえた。

「どうぞ」

あ、ウィラフさんだ。

聞こえてきた声はよく聞いたもの。見た目や立ち振る舞いからは竜に関係する知識を持っているとは思えない人だ。だからこそ秘密にしたがっているのだろう。

中から入室許可をもらったことだし扉を開ければ、

「や、いらつしやい」

「お邪魔しているよ」

「あれ？ あ、こちらこそお邪魔します」

気軽な挨拶をしてくるウイラフさんと、優雅な雰囲気を漂わせているキルヨネンさんがいた。

中に入りながら考える。ウイラフさんはひとりギルドだったはずだ。しかしここには二人。

ひよつとして二人は一緒のギルドになったのだろうか。さすがにひよりは辛くなって、とか。それならありえるか。

「お二人は同じギルドになってたんですか？」

まだ早とちりの可能性もあるし、いきなり本題に入るのもなと思いい簡単な話題として選択。

「ううん、違うよ。キルヨネンも竜について色々調べてたからね」

「僕のほうはアルメリアと違う目的だけだね」

「キルヨネンさんも竜について……」

「ま、私が二人の知りたがっていることに答えることができるかはあんまり自信ないけど。食べながら話そっか」

アワビのような茸と香草のバター焼きと黒パン、卵スープが三人分用意されていた。

話の参加者はこれ以上増えないようだ。

にしても、キルヨネンさんがいるってことは氷の聖印は完成ということだろうか。

「氷の聖印の応用はもうだいぶ出来上がってるんですか？ かなり佳境みたいないメージありましたけど」

「ああ。あとは各々が習得するだけになっているからね。ラメントという印術師が暴走して全身しもやけになったくらいで、特に問題はな
いよ」

「ラメントさんに問題大ありじゃないですか」

問題ないと言われちゃうラメントさんが不憫である。誰か知らないけど。

「今は工房も交易所も、術師たちも大忙しみたいだね。冒険稼業しかできない私は退屈で仕方がなかったけど」

「気球艇の問題が解決すればウイラフも忙しくなるさ」

「私も術師なんですけどね……あまり手伝わず申し訳ないです」

自分のトレーニングばかりで依頼報告も遅かった私はもう、謝ることに慣れてしまったよ。言い訳や弁明より先に謝るようになってしまったよ。

「気にしないで大丈夫さ。ニーズヘッグのウーフアンにはかなり助けてもらったしね」

「とうかアルメリアたちはかなり貢献してるからね。碧照ノ樹海といい、丹紅ノ石林の突破といい……私のほうが冒険者としては先輩なんだけどなー」

ここにイシユがいたらドヤ顔もとい得意顔を盛大に披露していたに違いない。

イシユは謙虚と言う言葉を千年前に置いてきてしまったから。いや、千年前から元々持っていないかもしれないけど。

「アルメリア、ニヤけてるよ」

馬鹿な。

「そ、それより竜について話しません？」

私まで謙虚さが無いという認識をされてしまったらニーズヘッグはとんでもない集まりになりかねない。高慢イシユに高圧的ウーフアン、常識人たる私とシウアンというギリギリのバランスなのだ。

蒸し返される前に本題に突入することにした。

「そうだね、雑談はこれくらいでいいだろう。ウイラフ、聞かせてくれるかい」

キルヨネンさんも私に同意してくれた。どうでもいいけどこの人まつ毛長いなー。ほんと美人さん。

あ、しまった。

雑談ついでにキルヨネンさんの性別確認しとけばよかった。私から聞く勇気がないからウイラフさんにしてもらう形で。もう雑談する雰囲気じゃないしまったの機会かなあ。

「いいけど、その前に約束してもらっていい？」

「はい？」

「私の出自とか、秘密にしてほしいんだ。あんまり知られたくないし

さ」

「ああ、言いふらしたりはしないよ」

「くくくくとキルヨネンさんの言葉に頷く。

「私の家ね。竜殺しを家業としている家なんだ。変な家でしょ」

「竜殺しか。騎士にとって魅惑の響きだ。変な家などでなく誇れるものだと思うよ」

「ま、兄さんとかはまさに竜殺しの戦士って感じだけど、私には重すぎるものだよ」

「お兄さんがいたんですね」

ウイラフさんの人懐っこさは兄がいたからだろうか。末っ子属性的な。

その点キルヨネンさんは一人っ子なイメージ。

「うん。兄と、姉が一人ずつ。家業は兄さんが継いだよ。だから私は竜殺しの戦士ってわけじゃない、ただの冒険者、ウイラフ」

「君がそう扱ってほしいというなら、僕も当然そのようにしよう」

「私もです。ウイラフさんがすごい家の人って言われても、ピンとこないし……ウイラフさんは、リアクションが面白い冒険者ウイラフさんですよ」

「……」

「……………家業は兄が継いだとして、ウイラフは竜についての知識はあるのかい」

私の場を和ませる努力の言葉は流された。

私には冗談の才能がないのだろうか。しばらく黙っていたほうがいいかもしれない。

「うん。父さんからいろんな竜について聞かされてきたよ。竜を超えるには、人の知恵と技。そして、束ねられた力ってね。技も力もないけど、知恵なら任せて」

「それなら聞かせてほしい。蒼い異形の竜……氷嵐の支配者について」

氷嵐の支配者。

孔雀亭の彼女が言っていた氷竜。つまり、三竜のうちの一体。

その姿形については私は知らないけど、キルヨネンさんは異形の竜と言った。ということは何らかの理由で関わるがあったのだろうか。それでウイラフさんの話を聞きたく？

「……ずいぶんとまた、とんでもない所からだね」

「僕の仕えるべき王、その方の息子の命を奪った存在だ」

キルヨネンさんの手が硬い握り拳を作る。もしかしたら、その子供と親しかつたのかもしれない。

「氷嵐の支配者について、幾度となく調べた。三つの首を持ち、十二の瞳を持つ異形の竜。その名の示す通り、氷の世界を君臨する存在。だがそれ以上はわかっていない。奴と我が王の戦いを見たが、僕を理解を超えるものだった」

「仇討ちなんだろうけど、あまりお勧めできないよ。私の情報を聞いて、挑んで死なれちゃ困るし」

「聞けなかったとしても、僕は氷嵐の支配者を探しだして挑むつもりだよ」

石林の先は白銀の世界。

氷嵐の支配者がいる可能性が高い。というより確実にいるだろう。あの黒い紙にも書いてあったのだから。

私は竜に挑むつもりはない。知りたかった理由は色々あるけども、護身のためというのが大きい。

竜についての知恵があっても、勝てるとは思えないのだ。

このままではキルヨネンさんは死ぬ道を行きかねない。

「イシユから聞いたんですけど、三竜は各地にある世界樹付近にいるかもって……この地の竜はキルヨネンさんの探している個体とは違うんじゃないでしょうか」

すぐに竜に挑まないように、対象が違うのではということを書いてみた。結局竜探しをやめさせるわけではないが、問題先送り大作戦だ。

「そうかもしれない。だが、そうじゃないかもしれない」

「氷嵐の支配者を全滅させるまで戦うつもり？」

「さすがにそこまでうぬぼれてはいないよ。僕の探す竜の瞳は我が王の攻撃によって一っだけ潰れている」

さらっととんでもない王情報である。

「……仇を見つけても挑まないでほしいっていうのが本音だけど、教えなかったら情報なしに挑むつもりだよね」

「ああ」

「すっごく気は進まないんだけど……わかったよ」

ウイラフさんはため息をひとつついてから話し始めた。

「氷嵐の支配者は、他の三竜と違って魔法みたいな力を持つてるの」

「……魔法？」

「そう、魔法。斬りつけた方が何故か傷を負ったり、突然氷柱が出てきて人を貫いたりするんだって」

氷竜の説明を聞いた私は、私だけでなく、きっとキルヨネンさんも同じことを思ったのだろう。

「それは、竜が印術を扱うということだろうか」

「いや、違うけど」

なんだ、違うのか。

でも氷柱とかを出すって氷の印術にあるんだけども。あ、ウイラフさんは印術師じゃないから印術の種類なんて知らないか。

「まあ印術も魔法みたいなものだよね」

「印術は印術ですよ。魔法とは違います」

「ああ、ルーンを扱った術だ」

「ごめん、全然わかんない」

イシユと同じような反応をし出すウイラフさん。

イシユも印術は魔法と同じじゃないかとブツブツ言ってた時があった。ちよつと懐かしい気持ちになれる。

「魔法じゃないですよねえ」

「ああ」

「魔法にしか見えないんだけど……」

2対1だ。多数決により印術は魔法ではないと証明された。

「一応言っとくけど、タルシス近辺以外じゃ印術なんて存在しないからね?。」

「そうなのか? 名称が違うだけとかではなく?。」

「アーモロードなんかじゃ占星術師っていう術師がいるらしいけど、そっちはエーテルを利用して星の力をなんかしているって。詳しくは知らないけど、岩を飛ばしたりとか」

「魔法じゃないですかそれ」

「私から見たらどっちもどっちなんだけど」

岩を飛ばすってなんだ。エーテルってなんだ。星の力ってなんだ。

「……アーモロードは確か、世界樹がある街だったね」

「そうそう。姉さんがアーモロードに行っちゃってね」

世界樹がある街、というか国といえば、ハイ・ラガードもだよな。

他は知らなかったり。

キルヨネンさんはどこか自信なさげに言った。

「世界樹の近辺以外には魔物は存在しないらしい……」

「うん? そうだね」

「魔物の生態については不明な点が多い。だが、通常の動物と類似点が多い存在がほとんどだ。世界樹近辺でばかり目撃されることから、まるで世界樹によって動物に特殊な力を与えられた存在だ」

そこで一度言葉を区切り、

「僕ら印術師も、占星術師も……方陣師も、世界樹によつて魔物と似たようなことになっているのかもしれないね」

キルヨネンさんのその言葉を最後に、室内に沈黙が訪れた。

「それで、他に氷嵐の支配者について何かあるだろうか」

「いきなり話を戻されてどう返したらいいのさ」

「与太話だよ。確かめようがない話だし、事実であっても術師は術師である前に人間であることに変わりはない。考えても仕方のないことをいつまでも考える気はないさ」

「ま、まあそうですね……」

確かめようのない仮説だ。

否定する材料が見当たらなかったけど、仮説なのだ。

世界樹の影響があるとしても、人間は人間だ。私にとっては印術は普通の技術だ。

「まあ言い出しつpegがそう言うならいいけどさ……といつても氷嵐の支配者については、最大の特徴がその魔法みたいな力。あらゆるものを一瞬で氷漬けにしたりするとか。あと、氷嵐の支配者の咆哮は、まどろみに沈ませるらしいってくらいかな」

「とにかくやばいってことですね」

「アルメリアって結構ざっくりしてるよね」

「そんな!？」

私への評価が気になる言葉である。

「魔法に咆哮……ありがとう、参考になったよ」

「どういたしまして。今でも挑むのはやめてほしいけど、ダメだよね?」

「ああ。僕の使命だからね」

「……じゃあせめて、挑むのは瞳が足りない氷嵐の支配者だけにしときなよ。関係ない奴に挑んで死んじゃったりしたら笑い話でしかないからね」

「ふふ、そうだな」

優雅な微笑みをいただきました。私の周りの人たちってだいたい笑顔が胡散臭かったり悪人面だったりが多いから新鮮。

「それで、アルメリアは何が知りたいんだっけ」

「私は竜なのかどうか、わからないんですけど……大雑把に言えば孔雀亭の黒い紙についてですね」

「うん、大雑把すぎてよくわからない」

聞きたいことはなんだったか。色々あったけども。

黒い紙について。黒い竜は存在するか。人を操る竜は存在するか。石柱と竜について。

「じゃ、じゃあまず、黒い竜って知ってます?」

「黒い竜? うーん……」

「孔雀亭の黒い依頼書で、黒い竜を幻視したそうでした、何か関係あるかなーと」

「うーん……ごめん、黒い竜についてはさっぱり」

黒い竜は知られていない? それとも存在していない? 元々幻視だから存在していないというのもありえそうだけど、私だけでなく何人も見たらしいし……果てには世界樹の巫女たるシウアンまで言っていた存在。知られていない存在と思っただ方がいいのかも。それが別の姿とか。

とりあえず黒い竜については後回しだ。

「じゃあ呪いとかと関係ある竜とかって知ってます?」

「呪い……」

「これも黒い依頼書関係なんですけど。呪いとかありそうですし、あれは何故か竜に関する依頼だったのだから」

「雷鳴と共に現る者。呪いだったらその竜かな」

雷鳴と共に現る者といえば……雷竜。丹紅ノ石林の竜だ。

「三竜のうちの一体、か。僕も他人のことは言えないが、三竜に関わるのは危険だ」

「私は関わらずに済むように知りたいだけです。黒い依頼書について、ちよつとでもわかればってのもありますけど」

知ることによって避けることができるかもしれないね。

「雷鳴と共に現る者って雷竜ですよ。氷竜と違って魔法じゃなく呪い専門家?」

「専門家かは知らないけど……うん、翼を持たずして空を飛び、長い体躯を持つ黄金の竜」

「翼がなく長い体……竜というより蛇みたいです」

「それで、呪いを扱う竜というのかい?」

「うん。最近で有名な話なら、南西の国でかの竜を討とうとした国があつたんだって。だけど、竜を討つと決めた日から毎夜、悪夢に魘されるようになって日に日に衰弱していったとか」

竜を討とうとするなんて破滅願望の持ち主にしか思えない。今の話だと呪いというよりその国の人が変だっただけではないだろうか。思ってしまう。

「雷鳴と共に現る者は実際、呪術のような力だそうだよ。曰く、その遠吠えを聞いた者は狂死する。曰く、その尾に触れた者は命を奪われる。曰く、その姿を見た者は体の自由を奪われる。いろんな話があるよ」

「見ただけで体の自由が奪われるとかズルすぎませんか？」

「私に言われても……」

氷竜も攻撃した側が被害を受けるとか言う出鱈目っぷりを考えると、やっぱり竜はおかしい。

「魔法のような力を持つ氷竜に、呪いを扱う雷竜か。赤竜も似たように何かあるのかい？」

「赤竜は単純に圧倒的な肉体の力。足踏みで地を割ったりとか」

「まるで役割分担している感じですね……」

前衛に赤竜、後衛に氷竜と雷竜とか想像してしまった。悪夢以外の何物でもない。

「竜は人間への理不尽な試練とも言われているからね。それぞれの分野が違うのがまた試練みたい……って話が逸れてるか。とにかく呪いに関しては雷竜だけど……黒い依頼書と関係あるかって話でもあるんだっけ」

「あ、はい」

「私も黒い依頼書の変なウワサは聞いてるけど、雷竜とはまた違うと思うよ」

「黒色ですしねえ……」

「色とか関係なしにだけ……私が聞かされた雷竜の呪いは衰弱と束縛。人を意のままに操ってるんじゃないかって話でしょ、黒い依頼書は……でも石柱だっけ、依頼の内容」

石柱を破壊。

竜と戦えつて言わないだけ優しいと思うべきだろうか。いや、人を操っている疑惑があるし優しきなんてないか。

「推測でしか言えないんだけど、絶対にやったらダメだからね。その依頼」

推測と言う割には強い語調。

孔雀亭の彼女もやっつてはダメな気がすると言っていた。ひよつとしてみんな、第六感的なのがすごいんだろうか。

「竜を封じた伝承とかもあるんだけど、その時に使われるのは石柱」

「石柱によって何かが封じられているかもしれない、と?」

「三竜とはまた違う危険な何か……まあ、そもそも竜がいる場所だから危険だけど、イシユが変なことしそうだし……」

ウイラフさんとキルヨネンさんの頭の中で、イシユが暴走でもしているんだろうか。二人ともため息をついてしまった。

……すでにイシユが石柱をひとつ壊していますって言っちゃダメだろうか。

ま、まあ3つあるみたいだし、3つとも壊してなかったらセーフなはずだ。

33. 雪の花に誘われて

今日もタルシスでは心地よい風が吹いている。

それはいつもと変わらないようで、だけど少しだけいつもと違う光景。

約二週間ぶりだろうか。

気球艇ノアに乗っての空の旅は。

「こんなに一斉に飛んで大丈夫なのか？」

「すごいね。いろんな気球艇がいっぱいだ」

ウーファンとシウアン……おのぼりさん二名には珍しい光景のようだ。

かくいう私も珍しく感じているけど。

イシユが運転している間、私含めて三名は暇である。

私は新天地にいたら地図を描くから、今の間だけの暇である。

「ほとんどの冒険者が足踏みさせられましたからね。おかげで皆横並びになっちゃいましたけど」

「別に競争しているわけでもないだろうに……」

いよいよもって、石林よりさらに北。銀嵐ノ霊峰へと行く目途が立ったのだ。

気球艇の動力部は以前と違って変な囲いがある。気球皮も素材を変えたらしい。そしてこれは一部のギルドだけだけど、緊急用にと氷の聖印を覚えた術師がいる。

「まだ大丈夫ですけど寒くなったらちゃんとコートを着るんですよ」

「あの色合いのをか……」

「シウアンが選んでくれたものですよ？」

「そ、そうだな」

私が強く推薦したものでもあるけど。真実は闇の中だ。

「みんな気球艇の色は違うんだね」

「おかげで見分けが付きやすいよね。私たちのはオレンジ色で……ワールウインドさんのは緑色。キルヨネンさんは青色」

交易長に渡された気球艇の色はすでに決まっていたけど、なんだかその人のイメージにあっただ色で統一されている気がする。ワールウインドさんはくたびれた感じの……もとい渋めな配色で、キルヨネンさんはクールで知的な感じが青色を。ウイラフさんは明るいし赤、みたいなの。

だとしたら私たちのオレンジはなんだろうか。オレンジってどんなイメージがあるんだろ。

「柑橘系……」

「どうしたの？」

「あ、なんでもないよ。うん」

考えていたことがそのまま口から垂れ流しになっていたようだ。

おのぼりさんの二人にはこのまま空の旅を満喫してもらおう。

そう思い、我らのリーダーであるイシュのもとへと行く。

……気球艇に乗りこんだときは普通の恰好だったのに。

「イシュ、まだコートを着るのは早いと思いますよ」

「どうせ後から着るのならば、今着ようと変わりはない」

「まあ、いいですけど」

モスグリーンのコートを着こんで運転しているイシュを見て、それ以上は言わなかった。着ないよりかは全然いい。

「順調に飛んでますね、みんな」

「この我が協力したのだ。当然だ」

「あ、はい」

「……」

「……」

銀嵐ノ霊峰でも順調に飛べそうですねーって続けようとしたけど、そんなこと言われちゃ続けられない。参った。会話のネタが尽きた。

話すことがないからと言ってここでシウアンたちの元へ戻ると、イシュだけ真面目に運転しているみたいで微妙な気持ちになる。何か話題を出すんだアルメリア。こう、ウイットに富んだ話題を！

「……交易長から聞いたが、タルシスでは雪が降らないらしいな」
「ウィット……あ、はい！」

「汝の呪いも多少は緩和されている。また世界樹への道が閉ざされていた場合、少しばかり雪を楽しんでもいいだろう」

「へ……？」

今の言葉、聞き間違いだろうか。

これは本当にイシユだろうか。中身違う人ではないだろうか。

「不要か？ ハイ・ラガードの世界樹で四季を再現したが、冬も必要があつたのだが」

「あ、いや！ ちょっと驚いちゃって！」

再現とかその辺は突っ込まないことにしよう。

それよりもなんだこれは。なぜだかニヤけそう。最近表情筋が働き過ぎだ。

「ま、まあ今日は一斉に気球艇が飛んでますしね！ 私たちだけ景色を楽しんでも罰は当たりませんよね！」

「何人たりとも我を罰することなどできぬ」

「あ、はい。そうですね」

あとでシウアンとウーフアンにも今日の予定を教えておこう。

ウーフアンからは文句が言われちゃうだろうか。いや、シウアンの反応次第かな。大丈夫な気がする。

丹紅ノ石林の北の谷を抜けている最中、どんどんと空気が冷たくなっていた。

吐息が白く染まり、耳も冷気の風があたり痛いほどだ。

そして空からは、白い綿のようなものが降り注いでいた。雪である。

「おおー」

人生初めての雪だ。

なんというか、

「結構大きいんですね。もっと細かいものだと思ってました」

「充分小さくない？」

もっと霧状というか粉状のものが降り注いでいると思っていた。

「しかしまだ谷を抜けている最中だというのに、かなり寒いな……」

コートと耳当てをばっちり装備したウーファンが震えながら呟いた。

種族柄の顔色と真つ赤なコートに真つピンクな耳当て。ハイセンズだと思う。

「手袋も買っておいたほうがよかったかな」

地図を描くときや武器を持つときに普段と違う感覚になるかな、とか考えて買わなかったけど、袖から手を出したくない状態である。

「シウアン、もし辛かったら無理せずゴンドラ内に入っておくように」

「はーい」

ブルブル震えているウーファンが真つ先に入るべきだと思うけども。

「というか二人ともゴンドラに入ってたて大丈夫ですけど。特にウーファンとか滅茶苦茶震えてるじゃないですか」

「なんのことだ……これは見知らぬ土地ゆえに武者震いというやつだ」

「無理ありすぎじゃないですか？ タルシスでもそんなに震えてましたっけ？」

「貴様こそ、寒いのならゴンドラに入ったらどうだ」

私は地図を描くためにも外にいるのだけど、何故かやせ我慢大会がウーファンの中で始まっているかもしれない。

結局誰もゴンドラに入らないまま谷を抜けきった。

「谷を抜けると、そこは雪国であった」

「イシユ、何か言いました？　ごめんなさい、風音がすごくて聞き取りづらく……」

「なんでもない」

谷を抜けると一面雪である。

白銀の世界とでも言うべきか、太陽の光が一面の雪に反射されどこも眩しい。

少し視線を動かせば、谷や崖によってちよつとした風の曲がり道になっっている場所がある。そこで風が唸り強い風音を出している。

ひどいところは局所的な竜巻が発生しているほどだ。

なんとも綺麗とごちゃごちゃを混ぜた感じの場所である。

ノアを含めた多くの気球艇は高度を上げていく。

入り組んだ道を避けて、高々度で移動するようである。改造ついでに高度もより上昇できるようにしたとか。

「うひっ」

高度を上げたことにより、風を阻むものがなくなったため今までより強く風を感じる。

これは凍ってしまう。水なんてあつという間に凍ってしま……あ。

水筒大丈夫かな。

今からでも遅くはない。水筒はゴンドラに入れておこう。

さすがに新天地ということもあつてか、今まで群れのように一緒に行動していたいくつもの気球艇は、それぞれバラバラに動きだした。

西に小さな洞窟があつたり、東に入り組んだ場所があつて怪しく見えたり、ひたすらに北に進んだり。

私たちは北グループである。北には世界樹が見えるのだから。

もつとも、

「また谷がありそうですね……」

あきらかに阻まれている立地である。

念のため近距離まで飛ぶようだけでも。

「ウロビトの結果なんですよね……どうにかできませんか」

「前も言っただろう。今や失われた術だ」

神話時代の結界が今なお道を妨げる。

ウロビトの術があるということはこの辺りにもウロビトの里でもあるのだろうか。いや、そうとは限らないか。風馳ノ草原にもあった結界だ。張ってから移動したということだろう。

壁の足元が見えてくる。そこにはやはり、濃雲の谷と石碑があった。

それとタルシスの兵士の気球艇が何隻かある。

「一度降りる」

「はい！」

他の谷と違う点がないか確認だろうけど、一応は鞆や装備を忘れない。

石碑のそばにはやっぱりというか、タルシスの兵士が何人か、それとウロビトもいた。

「おつかれさまです」

「あ、ありがとう、ここは寒いな。ニーズヘッグも一直線にここに来るんだね」

何も言わないのもあれなので、と兵士に声を掛けたらなんだか気になる言葉が。

「ここに来るのって珍しいことなんですか？」

「そういうわけじゃないけどね。世界樹を目指しているのか、冒険がしたいだけなのか。前者ならたいてい真っ直ぐここに来るからね。さりげない意識調査に丁度いいところなんだ」

そんな唐突な抜き打ち検査はやめてほしい。

「でも谷で阻まれているって遠目でわかったらここまで来ないんじゃない？」

「そうだね。あ、別にこれは報告する内容とかじゃないから気にしないで大丈夫だよ。意気込みなんて人それぞれだからね」

「報告する内容がそれでないのなら、汝らはここで何をしているのだ」「石碑の調査、その護衛だよ。まあ……進展はあまりないけどね」

ウロビトの術師も混ぜて色々調べているんだろうけど、芳しくないようだ。

「何か他の石碑との違いなどもなかったか」

「全然だね。紋章も同じ、せいぜい色が違うだけだよ。ただ……ひとつだけ」

「む？」

「気づいていることかもしれないけど……谷の結界、開けるための石碑が谷の南にしかないんだ。それらしきものもない。風馳と丹紅の間の谷と、丹紅と銀嵐の間の谷。そのどちらも南からしか解除できないようになってる」

気づいてなかったですとも。

でもそれがわかったところであまり意味がないような……

「伝承では巨人の進行を阻むための結界だ。巨人が北から来るのに、北に解除方法があつてはおかしいからではないか？」

兵士との話にウーファンも入ってくる。

「それが本当に巨人の進行を阻むためのものか、つていう状態に今なつちやつてて……」

「何？」

「ウロビトの術師が谷の結界の効果を調べたら、巨人に対しての結界にしては弱いつて主張してね……どこかで伝承がその……ちよつとズレちゃったのか、結界の対象は本当に巨人相手だったのか……不明な点が増えてきてね」

「……そうか」

巨人が対象でないなら呪いではないだろうか。言おうと思つたけど、兵士は呪いについて知っているかわからない。ここは黙っていたほうがいいのかもしれない。

「君たちはこれから石盤を探しに行くんだろ？ それならここから少し南下すれば竜巻に囲まれた洞窟がある。そこにおそらく石盤があるよ。いつもの石碑があつたからね」

竜巻に囲まれたつて、危険すぎないだろうか。

もう兵士と話すことはないのか、イシユは気球艇に乗りこんでし

まった。ウーファンもそれに続いていく。きつとウーファンは真っ直ぐゴンドラ内に入るだろう。かなり震えていた。

私とシウアンは兵士にお礼をしてからノアへと乗りこんだ。

せっかくなくれた石盤情報を活かすのはまだ先だけど、情報感謝である。だけど今日は、雪景色を楽しむ旅になるのだ。

一面雪景色。

どこを見ても雪、雪、雪。

「こんな環境でも魔物はいるんですねえ……」

舵をとるイシュの隣でぼそりと呟く。

青白い巨大なカマキリがお肉を食べている姿が見えたからだ。

「魔物の生命力は特別高い。だが、魔物だけでなく野生の動物もいるではないか」

「今その野生の動物の命が散った瞬間ですよ」

「うむ」

カマキリの餌食となった兎さんである。雪景色に上手く溶け込み姿を隠していたようだが、カマキリの魔物を誤魔化せなかつたようだ。

カマキリの表情などわからないが、どこか嬉しそうに兎肉を貪っている姿にげんなりしつつ視線を外す。

せっかくのワクワク雪景色観光が血みどろ観光なんて嫌である。

「イシュ、あつちはまだ行ってませんよ。西に行きましょう」

「うむ」

ちなみにウーファンとシウアンはゴンドラ内である。

ウーファンのあまりの寒がりっぷりを見かねたシウアンが「私も寒いからウーファンも一緒に入ろう？」と気遣いを見せたのだ。それによりようやくゴンドラ内で暖を取ってくれた。

「わぁ……」

西に進んだ先にあるのも雪。

しかし雪だけではなかった。

「あんな花があるんですね！」

「身を乗り出すな」

白い輝きと幻想的な花の景色。そんなものを見てしまったら、よりよく見ようとしてしまうに決まっているじゃないか。

「あそこ行きましょう！ あの花園！」

「落ち着くのだ。あれは花ではない。雪が形を崩さずに凍りつき、いくつも積み重なってできた産物だ。花ではない」

「そういう夢を破壊するのはやめましょうっ！」

「事実だ」

見たところ周囲に魔物の姿もない。

花をじっくり見ることができるとは。花ではないらしいけど、綺麗な花なのだ。

気球艇を着陸させ、花園を堪能するためにノアから降りることにした。

「これは……なんとも見事だな」

「すごいねー！」

ノアからウーファンとシウアンも降りてきて花園を眺める。

「……し、シウアン。寒くはないか？」

「もう寒いのか？ 早くない？」

さっきまでゴンドラ内で温まっていただろうに、寒がるのがちよつと早すぎないだろうか。

それともウロビトはそういう体質なのだろうか。余分なお肉とか

一切ないし、寒さに弱いとか。

「全員で行動を共にする必要などない。自由にノアに戻れば良い」

「私はもうちよつとお花を見ておきたいかな」

「そ、そうか……」

「これは花ではなく——」

「イシユ、ストップ」

無暗に夢を破壊させはしない。

綺麗なものは綺麗って感覚でいいのだ。これはこういう理屈で、
とかなんでも解明するの、よくない。ロマンがないよロマンが。

さすがにずっと震えられていると気が気でないのか、シウアンは花
よりウーフアンを心配げに見やる。

「ウーフアンはノアに戻った方がいいと思うよ……?」

「し、しかし……」

「そんなに震えられてたらシウアンも楽しめませんよ」

「うう……」

シウアン優先で話をすれば、バツが悪いのかすごくごと引き下がっ
た。

青い顔をしながら震えている彼女の姿を見ると、この地ではダ
メダメな予感をすごく思わせてくれる。

ノアに向かっていく後ろ姿を見届けてから。

雪の花の横に雪だるまを作ろうと思う。

完全に冒険者感がないのは自覚している。

「というわけで、シウアンは頭を！ イシユは手とか鼻になりそうな
枝とか探してください！ 私は体を作ります！」

「うんー！」

「だるまに手があるのはどうなのだ」

本に書いてあった挿絵には人参の鼻と木の枝の手だったのだ。雪
だるまのだるまは手があつていいということである。

さてさて私は雪だるまの胴体だ。

結構力がいりそうだけど、この役目は譲りたくない。枝を探しに行
くより雪玉を大きくしていく方が絶対楽しいに決まっているからだ。

楽しむ気持ち満点で挑んだ雪だるまづくり。

早くも心が折れそうである。

「手が痛い……痛い……」

「うん……」

イシユは枝を探しに行ってしまった。

私とシウアンは雪の冷たさを舐めきっていた。手袋なしではこれ無理だ。手を吐息で暖めながらだましましたましに作っていたが、もう無理だ。

「もうやめておこうか……これ以上は無理……」

「だね……」

イシユが戻ってきたらもう出発しよう。

イシユの姿を探して辺りをざっと見渡す。

雪の花、雪の花、大きな雪の塊、木々、イシユと見えた。当たり前だけど雪の花だらけだ。

……あんなでかい雪の塊、さつきまでなかったはず。

目測で高さ2メートルはありそうな大きな雪塊が一か所だけ不自然に盛り上がっている。

よりよく凝視すると、雪じゃない。白い色の何か。

背筋がぞわぞわする。

嫌な予感とでもいうのか、それとも経験による勘とでもいうのか。魔物と対峙したときの緊迫感が押し寄せる。

あれは白い魔物だ。

雪によつて景色に半ば溶け込んでいた魔物。それも敵意があるタイプだ。

「アルメリア？」

私が動かなくなったことに不思議に思ったのか、シウアンが呼びかけた。

どうしたらいいのだろう。

シウアンもイシユも気づいてないようだ。ウーフアンはノアの中。イシユを呼ぶか、ノアまで逃げるか。少し思巡した結果。

「イシユー!! 魔物、魔物ー!!!」

全力で助けを求めることにした。

その大声が刺激となったのか、魔物も動きだす。2メートルほどの盛り上がりだと感じていたその体は、伏せていた姿だったようだ。立ち上がった姿は3メートルに届くかもしれない大きさ。二足と長い尾を使って器用に立つ魔物は、大きく肥えた白い鰐の姿をしていた。手足は短く、その走り方はひどくドタドタとしたもの。遅くはないが、速くもない。

イシユも駆けだすのが見えた。頼ってばかりで申し訳ないけど直感が告げるのだ。この魔物、私じゃ絶対勝てないと。

イシユが来るまで自分の身の安全を守らなくては。

「シウアン! 走るよ!」

「う、うん!」

あの魔物の速度程度なら、なんとか逃げに専念すれば大丈夫なはず。

「そやあ!」

牽制に火球を飛ばしたが、全然堪えることなくドタドタ走っていく。

やっぱりダメだ。寒い地域にいるなら熱いのは弱いんじゃないかとか期待したけどダメだ。

踵を返して走ろうとして、足が雪に取られる。

「……!」

まともに走れない。

シウアンも同じようだ。

あの魔物の速さなら、と思っていたがダメだ。それ以上にこちらが遅くなっている。

雪が強くなっていく中、イシユの腕が飛び、魔物に当たるのが見えた。

まともに直撃したのに、少し重心が揺れた程度でそのまま走り続ける。

急いで走らないと。

雪がこんなにも厄介なものになるなんて、おまけに何故か降ってくる雪の量も増えてきた。視界が悪い。冷たい風が強く吹きだしている。

シウアンの背中を押しながら走る。足が、太ももが、重い。

無理に雪を掻きわけようとするたびに、もつれるように転びそうになる。

逃げきれない。それならせめて、怯ませるなりして時間を稼がなくては。

シウアンが逃げきれる時間とイシユが追いつく時間。そのどちらも今はほしい。

意気込んで振り返れば、すぐそばまで鱈は来ていた。

「あ……」

鱈の魔物は短い両腕を広げながら大きな口を開けた。

左右から迫る鱈の腕と、頭上から迫る大口。

「アルメリア！」

「――！」

叫ばれる自分の名前を聞きながら、来たる衝撃にそなえて目を強く閉じる。

「……、……………？」

痛みが来る前に、急に風の音が止んだ。

一瞬で絶命したということだろうか。痛みを感じる前に。

いや、でも体を感じる寒さ、冷たさは相変わらずだ。耳当ての感触もある。

もしかして、と思う。

思い出すは碧照での熊事件。あの時も熊が目前まで迫ってもう駄目だと思つた時に助けられた。

あの時はキルヨネンさんに助けられたが、今回も同じように助けが間にあったのでは。キルヨネンさんはこの場にはいないからないと、

恐る恐る目を開ける。

視界に映るのは白い鰐の魔物——の氷漬けの姿だった。

「……………なにこれ」

思つていた光景と違う。

イシュの助けが間に合つたのかと思つたら、鰐の氷像。

「ア、アルメリア……」

「シウアン、これって——」

声に振り向き、何が起きたのかを尋ねようとした言葉が止まった。

視界に映るのは蒼い巨体。

その体を見上げていけば、三つの首。十二の瞳。

それは、話に聞いた竜の特徴と一致していた。

「氷嵐の、支配者……」

三竜のうちの一体。氷の世界に君臨する竜。

その妖しげな十二の瞳が、私とシウアンを捉えていた。

「アルメリア、そして巫女。汝らはあまり動くな」

イシユが剣を構えながらこちらを見ずに言った。いつもの余裕あふれる態度は一切なく、真剣な視線を氷竜に注いでいる。

パキ、と音がした。

音はそばの鰐の氷像。

まさか動きだすのかと警戒したが、そうではない。

鰐の体ごと、氷が砕け散ったのだ。

火球も、イシユの拳も、物ともしなかつた魔物のあつけない幕切れ。それを引き起こした竜は未だに私とシウアンから目を離さない。イシユには一切見向きもしていない。

3つも頭があるくせになんでそんなにガン見してくるんだ。首を動かしてはいろんな角度からこちらを眺めてくる。

ちよつと気持ち悪さが恐怖を上回ってきた。

「雷鳴と我が身」

イシユの剣に雷が帯びる。

バチバチとはじける音がしているのに見向きもしない。

イシユが大きく跳び上がる。

氷竜の頭部に届くほどの高さまで跳び、雷を帯びた剣撃を放つ。

「なっ——！」

氷竜は一切見向きもしていない。

せいぜい、一瞬青い壁のようなものが氷竜を覆ったくらいだ。攻撃もしていない。

だがその壁にイシユの剣が当たった瞬間、宙を舞ったのはイシユの腕だった。

一步、氷竜が私とシウアンの元へ距離を詰めた。

たかが一步でも、私たちにとってはそれなりの距離だった。それが今や至近距離だ。

「我を無視するだけに飽き足らず、我についてくる者を狙うなど許せるものか！」

片腕状態のままイシユが吠える。

それに応じるように刀身に雷が纏い輝くが、氷竜の意識はイシユに動かない。

氷竜が何かをしようとしたとき、奇妙な音が、鎖が千切れるような音が聞こえた。

「……っ！」

「いや……！」

途端に走る頭痛。あの時と一緒だ。ウロビトの里で起きた時と同じ。

だけどあの時と違う点、目の前に竜がいるのだ。意識をしっかりと持たないとだめだ。意識を失ったらどうなるか……

「何をした！」

イシユが氷竜に向かって叫んでいる。

痛む頭を堪えながら氷竜を見上げると、執拗に舐め回すように向いていた視線が遠い方角に向けられていた。

南東の空に3つとも頭が向いている。

何故か口がわなわな震えている。何か焦っているかのような姿。

「くっ……!?!」

突然、氷竜は咆哮をあげながら空に飛び上がった。

そのままこちらに見向きもせず、南東の空へと消えていった。

「何が……いや、今はそれよりも」

氷竜が消えていった方角を見ながらイシユが呟く。

そして私とシウアンのそばに来て、両肩に荷物を担ぐかのように私たちを持ちあげた。

……まあ二人いるしね。持ち上げ方もそうなっちゃうよね。

「イシユ……」

運んでくれることに感謝を告げたいが、頭痛の他に安心感が一気に押し寄せたせいか、瞼が重い。それとも最後の咆哮のせいだろうか。急激に眠くなってきた。

「アルメリア？ どうしたのだ、アルメリア」

「……」

あ、だめだ。もう無理。寝る。

何度も揺すられながら名前を呼ばれているが、ちよつと無理。

こうして、私は意識を手離した。

34. 遭遇、岩窟の牛頭

暑い。

ひどく暑苦しい。

体中がじとじととした汗をかいている。

それが気持ち悪く、眠りから覚めてしまった。

寝起き特有の不機嫌さよりも、暑苦しさに対するイライラでどんと悪い方向に頭が覚醒していく。

ダメだ、暑すぎる。せめて汗を拭おう。

「うがあ」

「……気がついたか」

「ほあ!?!」

暑苦しきによるイライラから謎の唸り声をあげてしまった。まさか人がいるとは、いや、そりゃいるか。何で私は変な声をあげているんだ。

「イ、イシュー！ ここはいったい……っていか暑くないですか!?!」

「ここは洞窟の中だ。金剛獣ノ岩窟と言うらしい」

「ほへー」

辺りを見渡せば洞窟内にノアが着地していた。ノアの上方には外が吹雪いているのが見える。天井が丁度ないようだ。

私の隣にはシウアンとウーフアンが眠っている。二人とも暑さのせい、やや表情が魘され気味である。

ウーフアンもあの音で倒れていたのだろうか。

というか二人ともコートを着ぱなっしである。白い世界でならともかくこの洞窟内は何故か暑いのだ。このままじゃまずい。

二人の防寒着を脱がす。それだけでだいぶ表情が和らいだ気がする。ここがまだ暑いのは変わりないが。

「あれからどうなったんですか?」

イシュが脱がしてくれてたらと思っただけど、温度には鈍い体質になっっている人だ。仕方ないことかもしれない。むしろ私の防寒着を脱がしていたことに驚きだ。

それよりも状況把握のためにあの後のことを尋ねた。

氷竜と鎖の音。

氷竜は飛んでいった。それは覚えている。

その後意識を失った。何故洞窟に入ったのか、タルシスに戻らなかったのか気になるところである。

「汝と巫女だけでなく、ウロビトもノアの中で倒れていた。容態は全員ただ気を失っているだけだったが不自然すぎる。タルシスまでの移動の間、容態が急変してもおかしくないと判断した」

「はあ……」

それで洞窟へ？

それはそれでまた奇妙な話だ。

「話し声が聞こえるが旅人よ、仲間の意識が戻ったのか？」

突然第三者の声が入ってきた。

他にも人がいたなんて。さっきの私の謎の唸りが聞かれていたのでは、と不安になる。

「うむ。どうやらここの温度は高いようだな」

「だから言ったであろうに……ほれ、綺麗な冷水だ」

その声の主は瓢箪を見せながら近づいてきた。

随分と大きな体の持ち主である。お礼をと思い、顔を見ようとして、

「ひゃあ……」

「おお、驚かせてしまったようだな。拙者は見ての通り、お主らとは違う種族の者よ。よろしく頼む」

声の主の姿に驚きの声が洩れる。

その体は人とは違う姿。ただ肌の色が違うなどではない。毛深い人というわけでもない。獣毛で覆われた体だ。

そして何よりも特徴的なのは、頭部。燃えるような色をした頭髪は

逆立っており、それだけでも目立つが大きなねじれた角が二本ある。右目には古傷のような痕があり、何よりも、どう見ても、

牛の顔である。

牛の頭を持つ人物は、動物の顔でありながら器用に、にっかりと笑いながら挨拶をしてきた。

「ほれ、緋衣草を煎じた水薬だ」

「……あ。ありがとうございます」

「気にするでない。種族は違えど助け合うことができる。それが獣に堕ちぬイクサビトとしての誇りよ」

渡された水薬は少し刺激がある味だ。刺激と言うかこれは……

「熱う!？」

「ほれ、これを飲め」

この反応があるとわかっていたのか、すぐさま蓋を開けた瓢箪が渡される。中にある冷水を勢いよく口に流し込んだ。

……舌がヒリヒリする。

「な、なんですか今の水薬!」

「どうだ旅人よ。拙者の薬学も大したものだろう」

「私の時代の緋衣草とはかなり違うな……」

「場所が変われば物も変わる。適応が大事ということだ!」

「私の話を聞いてー?」

なんでこの牛の人とイシユは普通に打ち解けているのだ。

どういう馴れ初めなんですかもとい本当に色々説明がほしい。

「おお、すまんすまん。今の薬はお主に害を与えるものではない」

「すごく熱かったんですけど」

「説明もなしだったのはすまなかったな。あの薬は……呪いを和らげるための薬だ」

呪い……

……………呪い!?

何故呪いのことを知って、もしかして見られた？ でも服は着ているし、ウロビトの時と同じで何かの気配？

「汝の発汗がひどかった。ゆえに服を脱がした時、その者と遭遇した。その者の里には汝と同じく呪いに蝕まれている者が多くいるそうだ」
「脱が……………」

「拙者は里で薬師をしておる。薬草を求めて里から離れていたところをお主らと会ったのだ」

「脱がしたって……………」

「うむ？ ああ、汝の体を布もなく岩窟につければ火傷すると止められた。そのため、服はまた着せたのだ」

「そつすか……………」

年齢四桁の人だ。まあ他意は一切なさそうだ。

牛の人も種族の違いのせいか、特に何も気にしていないようだ。なんだか疲れた気になって、おざなりな返事になってしまった。恥ずかしがるのが馬鹿らしい。

「つていうか!!」

「む？」「おお？」

「この土地の現地民の人じゃないですか!!」

「う、うむ」

ウロビトの時のような拉致誘拐はしていない、よし。

向こうの態度は友好的、よし。

イシユがもめ事を起こしていない、最高によし。

「えと……………私はタルシスと言う街から来た者です！ タルシスでは世界樹に辿りつくため多くの冒険者がいて、えっと最近この地に来ました！」

「存じているとも。朝から何組もの人間が里に訪れたからな」

「あ、私たちが最初の遭遇ってわけじゃないんですね」

「じゃあ他の人が辺境伯に報告してくれるか。」

「そこの二人も気が付いたらイクサビトの里を訪ねるといい。皆気の

いい連中ばかりだ」

牛の人はそう言いながら瓢箪を手を持ち直した。

「この岩窟は魔物も蔓延る危険な場所だが、お主ら冒険者とやらなら大丈夫だろう。里までの道は岩窟の壁に示しておく。では、拙者はこれにて」

「え、あ、はい」

「急に現れただけでなく、急に去るようで申し訳ないが拙者の帰りを待つ者たちがおるのでな。里に来た時、改めて歓迎しようぞ」

去って行く後姿をぼへーっと眺めながら思った。

怖そうな見た目なのに、ものすごく好印象な人である。心優しい戦士、みたいな。

背中に背負っている金棒には血がこびりついている点が怖いけど、魔物が出る場所なら普通である。

それにしても……

「世界樹に近づいているからですかね……あの人の里に呪いを受けている人がいるって」

「脱がせた云々に意識を持っていかれた件を、掘り返すようにイシユに言った。

「そうかもしれぬな。タルシスとは違い、ここでは何人もが呪いにやられていそうだ」

「……」

呪いを和らげる薬を牛の人は煎じてくれた。あくまで和らげる、だ。治す方法を牛の人の種族も見つけていないのだろう。

和らげる薬、シウアンの祈祷、この二つを受けた身としては、やはり世界樹の巫女であるシウアンの効能のほうが強い。今の薬は本当に、気休め程度のものだった。

その気休めにも継らないといけない状況……

「あ、そういえば名前聞くの忘れてた……」

仕方ない。しばらくは暫定的に牛の人だ。

あ、でも種族が違うんだから、他の人も牛頭だったらどうしよう。いや、次からは名前を聞こう。

「それよりも、意識を失った理由はわかるか」

「ほへ？」

「汝らが意識を失った理由だ。汝と巫女だけならば、氷竜との遭遇によるものと考えられるがウロビトは違う。わかる範囲でいい、答えよ」

この様子だとイシユは鎖の音が聞こえなかったようだ。

ワールウインドさんや辺境伯と同じだ。聞こえた者と聞こえなかった者。何か条件があるはずだ。

「奇妙な音が聞こえたんです……氷竜が飛んでいく前に」

「音？」

「前も同じことがあったんですけど、聞こえる人と聞こえない人がいるみたいで、聞こえる人は頭痛が起きたり気を失ったりしてて……原因は音なんですけど、何の音かは……」

あの時はウロビトの里で聞こえた。

ウロビトの多くも音が聞こえてパニックになったらしいけど、そういえば今の牛の人はなんともなかったようだ。イシユ、牛の人、ワールウインドさんに辺境伯。わかっている範囲で聞こえていない人たちはこれだけ。

「……もしかしたらですけど」

「むっ？」

「……あの黒い依頼書かもしれませんが」

「黒い依頼書？ 酒場のか」

「はい」

ウロビトの里では鎖の音の後、雷竜の起こす雷鳴が轟いていた。

今回も鎖の音の後、氷竜が一目散に飛んでいった。

石柱に何かがあったのかもしれない。イシユが石柱を破壊したとき、竜はすぐに戻ってきたと報告の時に言っていた。壊すたびに鎖の音が鳴るのであれば、あの依頼書と何らかの関係がある。

もしも石柱が壊れているとしたら、今頃孔雀亭の黒い依頼書は一枚になっっているはずだ。

「黒い依頼書に音か。我には聞こえなかったところを見るに、実際に

音を発生させていたわけではあるまい。今の時代特有の術とやらか何かだろう」

「術……」

イシユには印術などがさっぱりだった。

ウイラフさんもそういえば印術を魔法みたいだと言っていた。印術が使えない人から見たらそうなのかもしれない。ワールウインドさんも同じなのかもしれない。

ひよつとして、と鎖の音による共通点を浮かべ想像する。

わかっている範囲で音が聞こえたのは、私、シウアン、ウーフアン、ウロビトの多く。

ウロビトは方陣師、術師の才が高いらしい。

私は印術師だ。シウアンは術師ではないが、キルヨネンさんが誘っていたあたり、術師としての才もあるのだろう。

術師にのみ影響を及ぼしている？

狙ってのものなのか、術師だから知覚できただけのものなのか、そのあたりは不明だ。

「う……んん、は……」

背後から起き上がる音が聞こえた。

ウーフアンが先に目覚めたようだ。じきにシウアンも目を覚ますだろう。状況説明は、二人が起きた時一緒にじゃダメかなあ……

「イクサビト……伝承で聞いたことのある種族だな」

シウアンも目を覚まし、先の出来事を話したところウーフアンの台詞である。

「伝承でってことは、実際に会ったことはないんですね」

「ああ。聖樹の護りにおいて、共に戦った種族らしい」

「……」

聖樹の護り。タルシスには伝えられていない戦い。

その戦いにおいて、人間は逃げだした。だからウロビトは人間への当たりが強かった。

そう考えるとイクサビトからも人間は歓迎されない気がするけども、あの牛の人はすごく友好的だった。

「もつとも、それ以上のことは知らないがな」

「とにかく聖樹の護りに関係する種族なんですね」

イクサビトの里にいたら突然襲われる、なんてないと思いたい。

とても優しい人だったからそんなことはないはず……

このまま里に行くべきか不安になってしまった。

「イクサビトの人たちも呪いで苦しめられているんだよね？ それなら早く行こう。ほっとけないよ」

「シウアン……」

そうだ。

私と同じ呪いに苦しめられているんだ。悩んでいる間にも辛い思いをさせてしまう。

「イクサビトが呪いを受けていることも気になるが、ここは石盤がある岩窟。なんであれ里に行くことは必要事項だ」

シウアンは助けるためにも行こうと言ったが、イシユは石盤のためにも行くべきだと言う。

まあどちらにしろ行くことは決定である。

「ノアはここに置いておいて大丈夫でしょうか。他の気球艇は見当たらないんですけど」

出発しそうな雰囲気の中、気になったので聞いてみた。

あの牛の人がいうには他の冒険者が来ているようだけど、ここにはノアしかない。どこか別の入り口があるのだろうか。そつちへ気球艇を動かしたほうがいいのではないかと思ったのだ。

「問題ない。見境なく暴れる魔物がいたとしても、気球艇をどうにかできるような大きさの魔物がここにいるとは考えにくい」

そういうものなのか。

まあここからイクサビトの里への道はあの牛の人が壁に書いてくれているらしいし、せつかくの厚意を無駄にしないためにもこのままのほうがいいか。

この暑さじや防寒着もいらないだろう。ノアの中に置いて、金剛獣ノ岩窟の中を進むことにした。

中に進めば進むほど、熱気をより強く感じる。

洞窟内部だというのに明るい景色は熱源が至る所にあるからだろうか。

「なんでこんなに暑いのか……」

「この辺りの地脈は随分と活性化しているな。洞窟全体が熱を伝えているのはそのためかもしれない」

「ウーファンは平気そうですね……」

暑さで汗がだらだらと止まらない私とは反対に、ウーファンは涼しい顔である。良く見れば汗を少しかいているため、暑さを感じていないわけではないようだ。

「確かに暑く感じるが体調を崩すほどのものではない。そもそも貴様は火の印術を扱うのだろうか？ 何故そんなに暑がりなんだ」

「印術と体は関係ないです……」

地図を描いては汗を拭う。

「いつそ腕まくりでもしようか。いや、ここにはタルシスからの人も来ているのだ。ばったり鉢合わせして、体を蝕む呪いを見られるのは避けたい。」

ああ、今だけは外の寒気が恋しい。せめて冷たい水でもないだろうか。それで顔を洗いたい。

「あ、水……！」

そんな願いが通じたのか、少しだけ広くなった道の先にはちよつと

した池があった。

「待て、愚か者」

「ぐひっ」

駆けだそうとした時、ロープの後ろを引っ張られて少し首がしまつた。

「いったいなんなのだ。もうちょっと止め方を考えてほしい。」

「な、なんですか！」

「魔物もこの水場を使っているのかもしれない。その角に魔物が一体だけがいる」

魔物も生き物。だとすれば水場の近くにいてもおかしくはない。

当たり前のことなのにすっぽりと頭から抜け落ちていた。

「魔物がいるのならば排除すれば良いだけだ」

「魔物を避けて進むという発想は……貴様らに言うだけ無駄か。アルメリア、せめて貴様はイシュより後ろにいろ」

「わ、わかってますよ。さつきは暑さでちよつと頭が回ってなかったんです……」

角を、というより今いる通路を抜けた場所にいざ進めば、草がいた。長い触手のような、腕？ 根っこ？ とにかく腕っぽい根を水につけている。

「マンドレイク？ 少し色が違うかな……」

碧照ノ樹海にいると言われているマンドレイクっぽい魔物だ。マンドレイクとは私自身遭遇したことはないが、その根っこは見たことがある。投げて燃やしたけど。

「こちらにはまだ気づいていないようだな。今ならやり過ぎせるが――」

「排除する」

「だろうな……」

ウーファンはあきらめたように呟いた。しかし、一緒に行動するならイシュの過激行動には慣れてもらわないと。この先何度も同じようなことがあるだろうし。

水しか見ていないのか、マンドレイクもどきは近づいていくイシュ

に全く気づいていない。

そのままフアルクスで斬り捨て……

「!!」

反射的に耳を抑えてしまうほどの絶叫が洞窟内に響き渡った。

「警鐘を鳴らすタイプの魔物か」

「……っ！ 分析している場合か！ 今の叫びで魔物が寄ってくるぞ！」

「数はわかるか」

「最低でも八だ！ 地面に足をつけている魔物の数だ！ それ以上いる可能性がある！」

八体の魔物。前衛ができるのはイシユのみのパーティだ。これは不味い。

「か、壁！ イクサビトへの道は、北です！ こっち！」

牛の人が残してくれていた道しるべを見つけ、移動先を指さす。がむしやらに進んで行き止まりなんて最悪だ。

「その方角から魔物は来るか」

「三体だ」

「その程度なら問題ないか」

さすがに数が多いのは面倒なのだろう。先頭をイシユが、その後ろに私、シウアンと続き、最後尾はウーフアンで移動することにした。

せつかくの水だったのに、今は我慢するしかないなんて……

「アルメリア、大丈夫？」

「うん、いざつてときは水筒あるし……大丈夫だけど……」

でも、冷たい水が恋しかった。水筒の水はもうぬるくなってそうだし。

いや、今は魔物に集中しよう。囲まれる前に抜けないと。前方からの三体を速やかに倒さないとなんだ。

「つて、三体じゃないんですけどー！」

溶岩のような魔物が二体、コウモリが三匹、蛙が一匹。合計六匹だ。

「飛んでいるやつは感知しづらいんだ」

「なんであれ、排除するのに変わりはない。アルメリア、爆炎でコウモリを一掃するのだ」

「コウモリだけじゃなく、魔物全部巻き込んだらいいじゃないですか！」

天井がそれほど高くないのだ。

コウモリと蛙は巻き込んでいいとして、あの溶岩みたいな魔物は明らかに火とか意味がなさそうである。意味がないだけならいい、火で強くなったり大きくなったりしないか不安なところだ。

「構わぬ」

「は、はい！」

地面が光だす。

幽谷で何度も見た方陣だ。敵の移動を阻害するやつだろうか。

飛んでいるコウモリには無意味なようだが、敵の中央にイシユが飛び込んだ。敵の注意を引いてくれているのだろうか。それとも印術起動まで待つのが面倒になったとか。

「もう爆炎出せます！」

「そのまま放て」

「イシユにも当たりますよ!?!」

「汝の火力程度であれば問題ない」

それはそれで嫌な話である。

一応爆炎の術式は強力な術なのだ。使い手によって威力が多少変動するとはいえ、その評価はむうつとなる。

「早く放て」

「と、とおおう！」

魔物たちを夥しい炎が包む。それによって生じる熱風のせいで、頬がチリチリと痛む。

考えたらこの爆炎によってまた魔物が近づいてくる可能性もあるんじゃない……

炎は役目を終えたかのように消え去り、そこに残ったのは焼け落ちて絶命したコウモリたち。

それと、イシユ、溶岩の魔物……と、蛙。

方陣で縛られているから、避けられたわけではない。

まさか蛙にも耐えられてしまうなんて、ショックである。そこは魔物の耐久力と言ったところだろうか。

「凍雨と雨水」

溶岩の魔物が口から燃えた岩を吐き出すも、冷気を纏うイシユの剣によって岩ごと斬りつけられた。

急速に冷やされたからか、魔物の色は黒く変色して砕け散る。

斬撃でのダメージというより冷気でダメージを受けたかのようだ。残るもう一体の溶岩の魔物も同じようにして砕いていく。蛙は方陣によって動くことができないのを見るに、肉弾派な魔物なのだろう。

耐久力を見せた蛙も何もできないまま、両断された。

コウモリ掃除はできたが、私の爆炎はひよつとしてここだと役立たない気がしてきた。

金剛獣ノ岩窟に生息する魔物。この魔物は炎に強い耐久力を持っているのだろう。熱気に満ちた場所が場所なだけに。

「ここ、私は戦力外な気がしてきました……」

「む？」

「蛙の魔物も倒せてなかったですし……火の印術じゃ……」

前方を進むイシユに少し弱音を吐いてしまう。

最初は何を言いたんだと言わんばかりの反応だったが、やがて理解したのか、

「そういうことか。気にする必要はない」

「イシユ……い！」

なんて優しい言葉だろうか。

イシユが最近甘くなってきたのを知っていてその言葉を引きだしたけども、それでも嬉しい言葉である。

「今まで、汝を戦力として数えたことはない。たとえコウモリも倒せなかったとしても、汝が気にする必要はない」

「……そうですか」

これでフオローしたつもりなのだろうか。

いや、本気だなこれは。本気で言っているなこれは。

私は冷めた心のままに、岩壁に書かれた道しるべを頼って奥へ奥へと移動していった。

35. もうひとつの伝承

「近くに魔物はいないようだ」

「やっただねー……」

ウーファンの索敵によって、ようやく一息つける状況となった。

走りっぱなしでシウアンもへとへとのようなようだ。年下の女の子より先にへばるわけにはいかないと、ずっと取り繕っていた呼吸も少しくらい崩していいかもしれない。流れる汗は誤魔化せないけど。

「魔物の素材の回収などしなければもう少し余裕はあったのだがな」

「別にいいじゃないですか。余裕がありそうなきは回収しておきたいですし、今後の役に立ちますよ」

ベルンド工房に売却した素材がもう枯渇しているっぽいのだ。またイシユが剣を壊したりしたら次はショートソードになってしまう。どうせならいい剣がいい。あと頑丈なやつ。

「これとかすごい価値がありそうですよ。溶岩の魔物の素材。すごい硬いですし、武器の素材としてもいい予感が！」

黒く変色し、凝固した魔物の素材を見せつける。

これを使えばきつといい剣になるのではないだろうか。それにあの魔物は強そうだったし、素材価値は高い状態のはずだ。

「ただの石屑にしか見えないが……」

「冒険者素人ですもんね、ウーファンは」

「貴様も大して変わらんだろう」

たとえわずか数日の差であっても私のほうが経験は上なのだ。

そんな冒険者としての勘が、この素材は良い値段で売れると告げている。

「あ、もうすぐみたいですよ。イクサビトの里」

ウーファンを無視して壁に書かれてある文字を見れば、この先の角を曲がればイクサビトの里だとあった。

魔物が近くにいないのはイクサビトの力によるものかもしれない。

里の入り口は池に囲まれているようだ。

その上に簡易な橋が架けられている。橋の向こうに見えるのは、牛の人ではないイクサビトの戦士。

……今度は馬頭だ。

この分じゃ牛や馬以外もありそうだ。

大きい動物以外の頭とかもいないのかな。リスみたいなのとか。リスなら可愛らしそうだし、目の保養に……

私たちが来たことに気付いたのか、馬の人はそれまでリラックスしていたのに急に体中に力を入れだした。

「……ぼ、冒険者とやらでござるな？　こ、ここ、このような洞窟によくこそ。歓迎いたしますぞ。きや、客人ひよ」

いかつい風貌からは想像しづらいほどのどもり様。

その姿を見せられただけでこちらの緊張感が自然となくなってしまう。ひよつとしてこの人を入り口に配置しているのはそれが狙いだろうか。

ある種マスコットの的な。いや、それはこの人に失礼か。

「汝に問う。石盤の在り処を知らないか」

「せ、石盤？　あ、あなたがたはそれを探しておるのか？　しかし拙者に心当たりはないでござる……」

「ふむ、ではこの里の代表者はどこにいる」

「キ、キバガミ殿ならば里の奥におられるだろう」

イクサビトの里は門を広く開けているようだ。

初対面でも里の代表者の居場所を教えてくださいなんて、懐が広いのか、それともただ単にこの門番の人がちょっと抜けているのか。

いろいろ考えてみたけど、タルシスだつてここと似たようなものかと考え直した。辺境伯の場所なんて尋ねたらすぐ教えてもらえるし。

それはそうとして、代表者の名前はキバガミというらしい。

いったいどんな人なのか、まず頭は何の動物だろうか。考えても何もわからない。とりあえずあまり怒らない人であることを願おう。

「それじゃ、中にお邪魔して大丈夫ですか？」

一応入っていいか聞いてみる。いいとはわかっているけどやっぱり確認はとりたい。

なお、イシユは返事を待たずに先に入ってしまった。

「も、もちろんでござる。里の中には魔物が入らぬよう、拙者がここで見張っております……おる。だから安心して入られよ」

「ありがとうございます」

「れ、礼には及ばむ！」

「およばむ」

「……及ばぬ！」

馬の頭で顔色を窺うのは難しいが、恥ずかしがっているのがすぐいわかる。

もうちよつとこの人とお話しもとい、からかってみたけど、シウアンに背中を押されて仕方なく里へと入ることにした。

イクサビトの里。

やはりというか、すでに何組かの冒険者が訪れているため、あちこちにイクサビト以外の姿がある。ウイラフさんやキルヨネンさんの姿もあった。中には以前碧照で共闘したメノウさんたちもいた。

里、というよりは洞窟内の広間といった環境。

壁には点々とたいまつに火が灯してあり、何かの壁画やオブジェが置いてあることから、普段からここで生活しているのだろうと思わせる。

それにしてもこの里に広がる香ばしいにおい。

見れば冒険者もイクサビトも、それぞれが手に皿を持ち、何か食べているようだ。もしや料理をふるまってくれているのだろうか。大

歓迎すぎる。

「あなた方は、今しがた里に来られたばかりのようですね。あなた方もお腹は空いてませんか？」

優し気に話しかけられればそこにもイクサビト。

女性のイクサビトだ。その頭部は白兔のように白い毛並み。

「あ、ありがとうございます」

配膳でもしているのだろうか。魚の切り身を煮た汁物を私たちに人数分渡し、香りの原因だと思われる鍋の元へと戻っていった。

この暑い洞窟内で熱い食べ物は……

しかし受け取ったからには食べなくては。意を決して口に入れると不思議な感覚。確かに熱く、体の芯からさらに暖められるような感覚だけど、不快さはない。むしろ心地よくなった。

なんだか自然と汗も引いてくれるような、この気温も気にならなくなったような、そんな気がする。

「なんとも、ここまで歓迎されているとはな……」

ウーフアンはわずかに戸惑い気味のようだ。

ウロビトの価値観としてはそうなってしまうのも仕方ないかもしれない。この辺りは種族としての気質の違いもありそうだ。イクサビトの人たちは見るからに戦うのが得意そうだし、一方でウロビトは戦うとしても後方からが基本だろうから、里の門は堅くなっても仕方がない気がしてくる。

キバガミさんという人を探しにあちこちを歩いているであろうイシュを探すため、里の中を適当に歩いていると怒号が聞こえた。

「世界樹が悪魔の樹だ?!」

「お、おい、落ち着けて」

声の主はウロビトの冒険者のようだ。それを周囲がなだめている。

怒りの矛先は、イクサビト。

「シウアン、少し行ってくる」

「ウーフアン？」

「大丈夫だ。何があったかはわからないが、あのウロビトをなだめてくるだけだ」

「私もいく」

「しかし……」

「私だって、ウロビトに喧嘩してほしくないもん」

二人仲良く騒動の元へと行ってしまった。

私だけぼへーっとしてたけど、このままじゃダメだよ。このままだと、あいつパーティーメンバー放置して魚食ってやがる、とか言われちやいそう。だ。

あああ、でもイシュも探さないとなのに……

「汝は何を悶えているのだ」

「つてイシュ！ こつち、こつちです！」

イシュがいつの間にか横にいた。

ならばとばかりにイシュの手を掴み、ウーファンたちの後を追う。

これでパーティー丸となっている状態だ。

「落ち着け。一体何の騒ぎだ」

「ウーファン！ それに巫女様も！」

興奮した様子ウロビトでは話を得られないと思ったのか、ウーファンはイクサビトへと向きなおった。

「……すまない。私の同族が何やら迷惑をかけたようだが、一体何があったのか聞いてもいいだろうか」

「うーむ。それがしが考えるに、我らイクサビトと其方らウロビトの伝承に齟齬があつてな。それがその方には許せぬ齟齬であつたようだ」

怒りを向けられていた、門番とはまた違う馬頭のイクサビトは、まるで気にしていないかのように事情を話した。

伝承の齟齬。

ウロビトは世界樹を神樹と崇めている。そして先ほど聞こえてきた悪魔の樹という単語。

イクサビトに伝えられている伝承では、世界樹は悪しき者つてこと

だろうか。それならウロビトが怒っているのも納得がいく。納得はするけど理解は出来ない。私も世界樹は悪者派だ。

しかしちよつと不味い。事情を聞いてウーファンまで怒りだしたら不味い。

「伝承の齟齬……すまないが、私にもその伝承を聞かせてくれないだろうか」

「うむ、それがしは構わぬ。我らの歴史を聞かせてしんぜよう」

「ありがたい」

「ウーファン！ この者たちは世界樹を悪魔の樹と言ったのだ！ そのような者たちに——」

「方陣師たるものが感情をみだりに表すな。それに我らの伝承とて真実とも限らない。伝承を妄信した曇り眼では何も見出すことはできないと心得よ。貴様のそのような振る舞いでは、多くの者に迷惑をかけることもな」

誰だあれは。

ウーファンがウーファンらしくない。

騒いでいたウロビトは少し冷静さを取り戻したのか、うつむき静かになった。

そういえばウーファンは方陣師を束ねる者とか言ってたっけ。実は結構ウロビトの中でも立場があるのでは……

ただのシウアン過保護勢ではないとは……

「すまないな。たとえどのような伝承であろうと、聞かせてほしい」

「あいわかった。では我らイクサビトに伝わる伝承を語ろう」

その話は以前、ウーファンから聞かされた聖樹の護りの伝承と酷似していた。

突然、巨人が現れたこと。

人間によって創られた種族たちが力を合わせ戦い、巨人に打ち勝つたこと。

しかし決定的に違う点があった。

ウーファンから聞かされた内容では、巨人が世界樹を隠した。巨人を倒したことによって、世界樹が再び姿を現した。

その一方で、イクサビトから聞かされた内容はというと、

「世界樹が、かの巨人……」

「細かに言えばあの大樹は、世界を滅ぼす巨人の住処。それがしはそう聞いておる」

「それで悪魔の樹か……」

イクサビトは目を伏せながらも話を続ける。

伝承を語るだけにしては、やけに力が入っているような。

「巨人は邪悪にして不死身。歩けば地は割れ、近づく者は巨人の呪いにより……その身を変えられる」

呪い。体を変えられる。

「呪いを受けた者は、体を樹や草に変えられてしまったのだ」

世界樹の呪いと一致している。

同じことを思ったのか、一瞬ウーファンがこちらを見た。

「しかし、我らの祖は諦めなかった。そして遂には巨人を長き眠りにつかせたのだ。巨人の不死たらしめる三つの象徴、心臓、心、冠を奪うことによつて」

いきなり不死の象徴とか出てくると困る。

心臓と心と冠？ 心臓はわかる。心と冠ってなんだ。心を奪うつ

てなんか違う意味に聞こえそう。

「その後、巨人が再び目覚めぬように、三つの象徴はそれぞれが保管することとなった。我らイクサビトは巨人の心臓を。智に長けた同胞は巨人の心を。肩を並べ共に戦った戦友は巨人の冠を」

智に長けた同胞とはきつとウロビトのことだろう。

だけど巨人の心とは……いや、一人心当たりがある。

世界樹の声を聞くことができる、世界樹の巫女。それは言いかえれば、巨人の心を理解できる存在だ。

共に戦った戦友というのは……他の種族だろうか。

それとも人間？　だけど人間は聖樹の護りにおいて逃げだしたと聞かされたし……いや、ここも齟齬のうちかかもしれない。人間が逃げたとなれば、これほどイクサビトから歓迎はされていない。

「その戦友っていうのは……？」

「其方ら人間のことだ。どうやらその様子では、人間の里に伝わる伝承とも齟齬が生じているようだな」

話の大筋は同じなのに、いくつものズレがある。

共通点としては、どちらもかつて巨人と戦ったということ。

イシュはどう考えているんだろうか。

隣にいることだし、と小声で尋ねることにした。

「イシュ、今の話ってどう思います？」

「伝承など尾ひれがつくものだ。巨人というのは世界樹を見立て、時代とともに話の中でも姿を変えていっただけのものか、もしくは世界樹が生み出す魔物の脅威を巨人と評したただけかもしれない」

イシュの中ではただ尾ひれがたっただけという結論のようだ。

「不死身とかは……」

「世界樹が生み出す魔物はしばらくの時を経れば蘇る。我がハイ・ラガードでしたことと同じだ」

聞けば聞くほど、巨人は世界樹が生み出した魔物。そういう方向性で固まりつつありそう。

「だが……今では蘇らないことを鑑みるに、まだわからないことがあるということだろう」

蘇る不死となった人たちを死なす。それが目的に含まれているイシュにとつては、聖樹の護りは興味を引くに充分なようだ。

「聞かせてくれて、感謝する」

「構わぬ。それがしは創造主たる人間から残された言葉を果たしたにすぎない。外から来た者に、イクサビトの歴史を語れ……という言葉にな」

「それでも感謝することには変わりはない」

「ではその感謝、受け取ることにしよう」

伝承を聞き終わり、満足したのかウーファンは感謝を示していた。それが腑に落ちないのか、最初に騒いでいたウロビトが口を挟む。

「ウーファンは今の話を信じるつもりか!？」

「話を聞かせてもらったというのに、すまないな……」

イクサビトに一言謝罪を入れてから、ウーファンはウロビトに向きなおる。

「ウーファン!」

「完全に信じるわけではない」

「ならば感謝など——」

「だが、貴様と違って私はウロビトの伝承も、信じれないようになったのだ」

「なっ……! ウロビトの方陣師ともあろう者が何を!」

「我らウロビトはいい加減、里の外にも目を向けるべきだ。いつまでも己が正しいなどと妄信しては、体が外に出ているだけで心は里

に閉じこもったままだ。貴様も里で教えられたことだけでなく、様々なことを見聞きして、自分の正しいものを見つけて」

ウロビトは何かを言おうとしたが、言葉が出てこなかったのか、やがて目をそらしその場を離れていった。

「本当に我が同胞がすまない」

「なに、場所が変われば考えもまた変わる。さすれば主張がぶつかり合うことなどよくあることよ。我らイクサビトはそれでよいと考える。それに其方らウロビトは智に長けた者、ならば争いなど無意味だとすぐに気づくだろうよ。あの若者も、しばらくすれば冷静さを取り戻すであろう」

そう簡単にいくものだろうか。

少し斜に構えてしまったが、考えれば何人か他にウロビトがいるのに、騒いでいたのは今の人だけだった。

少しずつ、ウロビトの意識も外へと向けられつつあるということかもしれない。

ぼんやりと考えていると突然、後ろから肩に手を置かれた。

「アルメリア」

「ひい!？」

すぐさま聞こえてきた壮年の男性の声。

「わ、ワールウインドさん」

変質者かと思いかけました。

ワールウインドさんもすでに里に来ていたようだ。

「そこまで驚かれると傷つくよ」

「す、すみません」

「我らに何か用か」

またいつもの如く、言い争いでもするつもりだろうか。

さつき言い争いが収まったばかりだというのにやめてほしい。

「ああ。君たちに来てほしいところがある。巫女の力のある人物に見

せてほしいんだ」

「シウアンの？」

世界樹の声を聞くことができる様子を見せてほしいとは。

あ、違うか。

牛の人から知ったことを考えるにきつと、

「うん、この里は呪いに苦しめられているからね」

呪いを抑えることだ。

36. 名乗れる日はまだ遠く

今日はまことに奇妙な日だ。

この金剛獸ノ岩窟に、多くの人間が訪れた日。最後に人間が来たのはいつだったか。確か……10年前であったか。

10年前の客人たちは装いが統一されていたが、此度の客人たちは自由な装い。

巨人の呪いに蝕まれ、日に日に数を減らす我らイクサビト。このままでは滅びゆく運命を辿ると半ば諦めかけていた。

だがその時を前に、再び人間が訪れたのだ。

巨人の呪いにより滅びたとしても、イクサビトという種族がいたことを人間が覚えてくれる機会。我らがいた証が吹雪に埋もれることなく、人間が記憶してくれる。人間は呪いを受けていないがゆえに。そう思っていた矢先に、呪いに苦しめられている人間の娘と出会った。

——人間にまで、呪いがすでに拡がっているというのか。

彼らは呪いの恐怖を知っていてもなお、あの悪魔の樹を目指し旅をしているのか。その理由は理不尽な呪いへの、怒りか。

右目の古傷が疼く。

あの者たちと拙者は、種族が違う。生き方が違う。背負っているものが違う。

怒りで動いていると決めつけるなど、彼らを愚弄しているようなもの。おそらく怒りではあるまい。

だが、拙者と同じく怒りだとすれば——その先に待つのは悲劇のみ。

里に戻れば、普段と異なり賑やかな雰囲気であった。

多くの人間が訪れているおかげであろう。

普段となれば、鍛錬の声と……童どもの苦し気な呻き声。

「今戻ったぞ。緋衣草だけでなく、なかなか活きのいいアユも獲れた。今日の夕餉にでも頼む」

「キバガミ殿、戻られましたか。キバガミ殿に旅人からなにやら重要な話があるらしく」

緋衣草と銀アユを受け取りながら、イクサビトの戦士であるモノノフが拙者に耳打ちをした。

旅人からの重要な話というのは気になるが、少しばかり訂正をさせる。

「……拙者はキバガミを辞退したと言ったろうに。今の拙者はただの薬師よ」

「貴殿以外にキバガミたる者は務まりませぬ。先代も貴殿に託されたではありませんせぬか」

キバガミ。

その名はイクサビトを率いる者に与えられる名。

その名を継げる者は一人のみであり、イクサビトの頭目となる存在。

心、技、体。このすべてを鍛え上げ、皆を導くモノノフを示す名。

「確かに襲名試合を拙者は制したが、拙者の心は未熟そのもの。その名は拙者には重すぎる」

「そのようなことはありませぬ」

「……お主はまことに頑固よな。ならば仕方ない。今このときだけ、その名を名乗るとしよう」

「キバガミ殿ほどではありませんまい」

頑固者なモノノフは、旅人を呼んでくると言つてその場を離れていった。

己がキバガミに相応しいとは未だに思えぬが、代表のいない種族の里などと思われるわけにもいくまい。旅人の話が何かはわからぬが、キバガミとして話を聞こうではないか。

連れてこられた旅人は、灰のような髪の毛だった。

身軽な装いに長剣を携えているが、その体は鍛え上げられたもの。重心も鐘のように沈み安定している。重武器でも人並みに、いや、それ以上に扱えると思わせる。

「君がイクサビトの長、キバガミかな」

「……いかにも。拙者は今このとき、キバガミを名乗つておる。それで旅人殿よ、このキバガミに何用か」
奇妙な男だ。

最初の言葉は代表者に対しての言葉とは思えないもの。拙者としても堅苦しい言葉は好かぬが……どこかかみ合わぬ。

言葉の不真面目さに対して、佇まいは堅く真面目なものだ。

ふざけた雰囲気演技しているとも思ったが、言葉は随分と自然に出たような響き。

ではせめて佇まいを真面目に演じているのかというと、それもまた異なる。

不真面目と真面目、どちらも兼ね備えた矛盾した男。それが第一印象となった。

「俺は、冒険者でワールウィンドと名乗っている者だ。単刀直入に言うよ。呪いを払う方法があるから協力してほしい」

「それはまことか？」

里の者から巨人の呪いについて聞いたのか。いや、人間にも呪いが襲っていることを鑑みれば、当然の帰結か。

男の言葉通りならば、断る理由はない。

だが、その言葉に即決できるものではない。男の言葉に嘘がないかわからぬ。男の言葉に嘘がなくとも、呪いを払う方法そのものが嘘であり、男も騙されているという可能性も捨てきれぬ。

「ああ、必要なものが揃えば呪いを払える。そのためイクサビトの力を借りたい」

「必要なものを揃えるために、か。その必要なものとは何であろうか？」

「君たちの伝承にあった、巨人の心臓」

「……ワールウィンド殿よ、それはならぬ」

「どうしてだい」

拙者の言葉に対し、男はわずかに動揺を見せた。

すぐさまその様子を潜め、冷静さを保っているがどこか焦っているのやもしれぬ。

「巨人の心臓は我らイクサビトにとって禁忌の代物。おいそれと誰かに触らせるわけにはいかぬ。それに、お主は巨人の心臓があることを何故知っておる」

「……君の同胞から伝承を聞いたからだよ」

「伝承では確かにイクサビトは巨人から心臓を奪い、自らの里に持ち帰った。だが所詮は伝承だ。実際に巨人の心臓があると、ましてや今もなお保管されているとどうして確信できようか」

ただの好奇心で心臓の在り処を知りたかったのか、何が別の思惑があるのか。

「……俺の知り合いに、呪いに苦しめられている子がいる。その子を治してやりたいと色々調べたんだよ」

「やはり、人間の街にも呪いがすでに襲っているか……」

「いや、タルシスで呪いを受けているのは一人だけだ。とにかく、俺はその子を治すために様々な文献を調べてきた。呪いは巨人の血のようなものらしい。心臓に働きかければ呪いを払いのけられる、と」
呪われている人間は一人だけ、となるとあの娘だけか。

男の目は嘘をついているようには見えない。治したいというのも、調べた内容にも嘘偽りはないのであろう。しかし、

「お主は確かに嘘はついていないようには見えぬ。だが、先も言ったように巨人の心臓に触れることは禁忌に触れること。これは掟だからというわけではないのだ……お主の気持ちに嘘はなくとも、その調べ上げた内容が真実かは拙者にはわからぬ。かといって、では試してみるか、などと気軽にはできぬのだ」

「そりゃあ、君から見れば初対面の旅人だ。信じられないのはわかる。だが……」

「これはお主らのためでもあるのだ。巨人の心臓に触れることによつて、呪いを受けてしまうかもしれない」

男は顎に手をそえ考え始めた。

どう説得しようか悩んでいるのか。だが考え込んだところで拙者を説得できるものが出てくるだろうか。

「聞いてくれ……呪いを払うには心臓に働きかける必要がある。心臓に働きかけるのは、誰がやってもいいわけじゃない」

呪いを払う方法を説明しだす。

しかし説明を聞いた程度では拙者の答えが変わるわけでもない。

「巨人の心臓に働きかけるのは、世界樹の巫女。それで呪いが払えるんだ」

「……」

「信用できないとは思う。だからまずは見てほしい。巫女には、巨人の心臓がなくても呪いを抑えることができるそうだ。今頃ここに向かっている。巫女の力を見てから、もう一度考えてほしい」

百聞は一見に如かず、ということか。

いくつもの言葉を積み重ねるよりも、一度見せたほうが早く確実にある。

「呪いを抑える、か。拙者には俄か信じがたい話だ」

「頼むよ。君だつてこのまま呪いで倒れていく仲間を見たくはないだろう?」

「……巫女の力を見てからと言つておつたな。つまり拙者の前で呪いを抑えるところを見せるといふことか」

「ああ」

「呪いの恐ろしき、お主はまことに理解しているのか? 巫女の力が真実でなければ、呪いは巫女に襲いかねないのだぞ」

巫女の力を試すといふことは、逆に言えば巫女の身を危険にさらすこと。

少しでも巫女の力に疑いを持っているのであれば、この言葉に何らかの反応があるはずだ。

拙者の猜疑の視線を受けながら、男は答えた。

「呪いの恐ろしきなんて、とうに知ってるよ」

目は逸らされない。

虚仮を張ろうと力んでいる様子もない。どうやらまことに、この男は呪いの脅威を理解できている。

「……あいわかつた。巫女殿が来られたら拙者に知らせてもらえぬか」

「! それじゃあ……」

「ああ、その力が真実であるかどうか確かめさせてもらう。巨人の心臓についてはその後改めて考えよう」

「今はそれでも充分だ」

来たらすぐに呼ぶと言い、男は里の入口に向かつた。

巫女の力に疑いを持っていないからこそなのだろう。

「巨人の心臓、か……」

巫女殿が来られるのはいつになるかわからぬ。

それまでに少し心の整理をしたい。
そう思い、墓前まで足を運ぶ。

そこにあるのは、先代キバガミの墓。

数年前、拙者と共にホムラミズチと呼ばれる魔物と戦い……彼奴の毒に命を奪われたお方。

「拙者は、またホムラミズチと刀を交えるやもしれませぬ……」

目を閉じながら報告する。

瞼の裏に見えた先代は、厳しい表情である。

先代キバガミ。里の誰よりも強く、賢く、そして優しく。その背についていけば間違いなど起きないと思えるほどのお方であった。まさに理想とも言えるキバガミ。

稽古は厳しくあったが、稽古が終われば愉快なお方であった。何度となく笑った顔を向けられたというのに、その笑顔を思いだせない。しかめ面ばかりが浮かぶ。

心臓を取りに行くことになれば、あの魔物と相對することとなる。魔物は心臓を保管している大広場に巢食う。

最後に討伐されたのは10年前。二代前のキバガミが討ち取った。

だが、かの魔物はどういう原理なのか、討たれて何日かした後に再び大広場に姿を現したのだ。それから討たれることなく、今もこの金剛獣ノ岩窟を歪めている。

思いだすは先代と共に、ホムラミズチに挑んだあの日。

キバガミとなった拙者はあの日、呪いを払うために巨人の心臓を探し、ホムラミズチと相對した。

巨人と戦ったわけでもない、関係のない子どもが呪いで倒れていくことが許せなかった。巨人の心臓があるから呪いがあるのだと、怒りに任せ飛び出した拙者を先代は止めようとしていた。

「あの時、貴殿の言葉に耳を貸していれば……過ぎたことを女々しく考えてしまうとは、やはり拙者にキバガミの名は重すぎる……」

ホムラミズチの脅威を強く語ってもなお、拙者を止まらなかつた先代は、共にホムラミズチに挑むと言った。

キバガミを継いで慢心し、魔物程度と侮る拙者を見捨てることができずに、共に挑んでくれた。

右目の古傷が疼く。

その結果が、拙者は右目に傷を負い、先代は命を失った。

——ホムラミズチを討つことができれば、キバガミの名を胸張って名乗れるであろうか。

誰も犠牲にすることなく、ホムラミズチを討てれば……

「もう、誰もホムラミズチに討たせはせぬ……皆をあらゆる脅威から、守ればその時こそ……」

それが出来た時、ようやくキバガミを名乗れるのではないか。瞼の裏に見える先代は、やはりしかめ面を浮かべていた。

里の広間に戻れば先の男が向かってきた。その後ろには見覚えのある者たち。

あの娘は、呪いに蝕まれていた者。となれば、あの集団の中に巫女殿がおられるのだろう。

呪いに蝕まれながらも旅ができるということは、呪いを抑えることができるという話は確かなのやもしれぬ。

「あ、あの時の」

「ついさっきぶりであるな。してワールウインド殿よ。巫女殿はどなたか」

気を失っていた時よりもはるかに顔色が良い姿に安心を覚える。

呪いを抑えることができれば、この娘のように子どもも動きまわることができるかもしれぬ。

「この娘だよ」

示された娘は冒険するには不向きな夕日色の装束を身に纏う、年端のいかぬ少女だった。

「この娘が？」

「ああ、世界樹の声を聞くことができる巫女だ」

想像以上の若さに疑ってしまう。それと同時に心配も胸中に生まれる。

呪いは体ができあがる前ほど受けやすい。つまり、幼いほど呪いの影響が強い。大人であればかからない、というわけではないが、この巫女ほどの若さであれば呪いを受ける可能性は高い。

本当に頼ってよいものか、巫女の力が及ばぬ場合、この幼い娘に危険が及ぶこととなる。

拙者の訝し気な思いを悟ったのであろう、巫女殿は拙者が何かを言う前に話し始めた。

「お願い、私を信じてほしいの。助けられる力があるのに、何もできないなんていやだよ」

「……」

一度はワールウインドの言葉を信じ、巫女の力を借りることを決めたが……どうすべきかと思ひ悩む。

「私からもお願いします。シウアンの……巫女の力は本物です。その証拠に、この子のおかげで私は今も動いています」

「……あいわかった。ついてきてもらえぬか、案内いたす」

寝床につくと、苦し気な呼吸ばかりが聞こえてくる。そんな中、後ろから静かに息をのむ声が聞こえた。

見れば、呪いに蝕まれている娘が悲しげな表情を浮かべていた。

「……人の里では、まだ呪いはお主の身だけに留まっているようだが、我らの里ではこの状況だ」

「ここにいるみんな、苦しめられているんですね……」

「……お主の呪いは体の表面に広がっていた。その手のは稀なのだ」
「……?」

この娘の呪いは胴を中心に伸びていた。胴から腕へ、背中へと表面積を広げるように。

それは、不幸中の幸いというやつなのだろう。

「……表面に広がる前に、中まで樹に変えられた者はもはや動くこともままならぬのだ」

少し、口が軽くなりすぎた。

このような話、ここですべきではなかった。それに娘に言う必要もなかった。ただ悪戯に不安にさせただけではいか。

「中も変えられた者は生きている状態なのか?」

案内した集団の頭の風格を漂わせる女子おなごが、顔色ひとつ変えずに質問してくる。

その歳で、この有様を見てなお冷静でいられるのは旅による賜物か。

「生きておる……自ら動くことはままならぬが、生きてはいる」

「ふむ、ならば好都合だな」

「イシユ！」

——好都合と言ったか、この者は。

あまりにも配慮の欠ける言葉を、見過ごすことができなかつた。

「どういう意味か……聞かせてもらえぬか」

イクサビトの怒気にあてられてもなお、動揺を見せない姿は戦士として良いものなのだろう。

女子は変わらぬ様相のまま言った。

「世界樹に深く侵食されている状態でも治るのか、我は知る必要があるのだ。治すことができるのであれば、ハイ・ラガードにいる人の成

れ果てを解放することができるともしれぬ」

人の成れ果て……ハイ・ラガードという地は聞いたことがないが、この女子の出身地なのだろう。そこにも呪いがあるということか。

その者たちを救うために、旅をしているということか。

となれば呪いに苦しむ者を見てもなお冷静であることも納得がいった。この女子の住んでいた里は、呪いで壊滅的被害を被ったのだろう。そこで多くの呪いを受けた者を見てきたのだろう。

「……そうか」

「す、すみません！ イシユは感情とかに疎くて……！」

「先の言葉の意味、理解したが……お主がどのような旅路を歩んできたか知らぬが、言葉には気を付けたほうがよいぞ。無用な争いを生むことになりかねんのだからな」

「ふむ」

心の機微に疎くなるほど、心が壊れるほどに、凄惨な光景を見てきたのか。

まだ少女と言えるような年齢でいったいどれほどの地獄を見てきたのか。

気づけば怒りを込めて睨んでいた目線は、憐みの目線となって女子を見てしまっていた。

同情など、この女子には余計なことやもしれぬが。

「さて、巫女殿よ。この状況を見てもなお、お主は信じてと申せるか？

ここで止めても構わぬ。止めずに触ればお主にも呪いが降りかかる。それでもなお、お主はできるのか？」

「大丈夫だよ。私を信じて」

拙者の問いかけに、迷いなく倒れた者たちのもとへ足を進めた。

巫女は静かに目を閉じると、周囲に小さな光が浮かぶ。

光は倒れた者たちの周りに集い、溶け込むように体へと入っていた。

「これは……」

すると、先ほどまで苦し気に呼吸を荒げていた童たちが、穏やかな寝息を立てだしたのだ。

その顔には苦悶の表情は浮かんでいない。

「……私ができるのは、この子たちの苦しみを和らげることだけ。だけど、世界樹にもっと近い物があれば……呪いを払えるよ」

「そのためには巨人の心臓が必要だ。協力してほしい」

巫女の言葉を継ぐように、ワールウィンド殿が協力願いを改めて申し出た。

子どもがこれほどまでに安らげているのは、いったいどれほどぶりか。長く苦しい時から、一時でも解放させればと幾度となく願った。

それが今、目の前で叶った。

もはや疑うこともできぬ。

巫女の力を確かめることができた。すでに心の整理はついている。

「巨人の心臓は、ここより遙か地下にある大広間に祀られている。道中はもちろんのこと、広間にも魔物が住まう危険な場所よ」

「荒事には慣れているから大丈夫さ」

「お主らは里で待っているのだ。拙者が心臓を持ち帰ってこよう」

「留守番って、俺たちに気を使っているのなら遠慮なんていらんのだが」

「申し出はありがたいが、呪いはイクサビトの問題。それに心臓のある場所には難敵が待ち受けている」

この者たちのおかげで里の存続に光が差した。それだけでも、感謝してもしきれぬほどだ。なのにこれ以上世話になるわけにもいかぬ。ましてやそれが、命の危険に繋がることであればなおさらだ。

「勝手に決めるな。汝に任せて無駄に時間を浪費する気はない。私も行く。汝は道を案内せよ」

「……呪いはお主にも関係のある話か。危険が付きまとうが覚悟の上か？」

この女子も、呪いを払う方法を渴望している。ならばただ待つのは苦痛か。

この問いかけに意味がないとわかりつつも聞いた。

「我を誰だと思っている」

「よかろう、お主はついてまいれ。他の者は里で待っているのだ。必ずや吉報を持って帰ろうぞ」

「え、ちよつとちよつと！ 私も行きます！ 私も呪いと関係あります！」

慌てて声をあげたのは呪われた娘。この娘も呪いと無関係ではない。だが、戦士としては頼りなさすぎる。術師なる者であろうが、それにしては放つ気配が未熟だ。

「お主もここで待っておるのだ。お主の体を考えると、あまり巫女殿から離れるわけにもいくまい」

「でも！」

「アルメリア、その人の言う通りだよ。私はこの子たちから離れるわけにはいかないし、アルメリアの呪いも危険だから」

巫女が娘を引き留める。

その言葉には逆らえなかったのか、引き下がってくれた。

「ウロビトの術師殿よ、お主もだ」

「……貴様ら二人だけで大丈夫なのか？」

言葉を返す前に、盗み聞きでもしていたのかイクサビトのモノノフたちが入ってきた。

どのモノノフも面構えは戦場に赴く兵の顔。だが、

「イクサビトの問題なれば、我らもついていきますぞ」

「ならぬ。お主らまで来れば里の守りはどうするのだ。ここは拙者に任せよ」

「ですが……ホムラミズチ相手にその御仁とお二人だけでは危険は確実。ホムラミズチはあれからも討たれておりませぬ。あの時以上に強くなっておりますぞー！」

「拙者として、あの時以上に腕は上がっているとも。確かにホムラミズチは難敵、だからこそお主らは連れていけぬ。戦場で敵からお主らを守るには、拙者の力はまだ足りぬ。だから頼む、ここで待つてはくれぬか？」

モノノフにとっては力が足りぬと言われることが、どれほど屈辱なものかはわかっている。

わかってはいるが、いたずらに犠牲者を増やすわけにはいかぬ。ひとりならば、まだ守れよう。だが、拙者の腕では守るものが増えれば増えるほど、取りこぼすものが多くなってしまう。

「どうか、あらゆる害意から、お主らを守らせてくれぬか」

頭を深く下げ、頼み入る。

キバガミともあろうものがと嘲笑されても構わぬ。ただただ頼むのみ。

「汝らは待て。これ以上この話を長引かされてはいい迷惑だ」

「だがしかしー！」

「全くもって面倒な……この者の行動理由を少しは考えたらどうだ。しかし、そうだな。一日も掛からぬだろうが、ここで一日待て。一日で戻らねば好きにすればいい」

「イシユが言えるかなあ、それ……」

この女子は話をまとめようとしてくれているのか。見知らぬ地についていく身としては不安も大きかろうに、不安が大きいほどに味方

も大勢ほしく思えそうなものだ。にも拘わらず、拙者の意志を汲んでくれるというのか。

「感謝を申し上げる……」

「よい。これ以上進展のない話など無駄なだけだ。さつさと行くぞ」

「あいわかった。ではお主らは、一日だけでいい。一日だけ信じて待っておれ。必ずや心臓を持ち帰ってこようぞ」

話はもう終わったとばかりに切り上げる。

これ以上何か言われる前に、出発するとしよう。女子も準備は終わっているようだ。拙者も武器は常日頃から身に纏っている。

「では行って参る。お主らはそれまで里の守りを頼んだぞ」

ホムラミズチ。

かの魔物を討ちて、先代キバガミの背に少しでも追いついてみせようぞ。

その時初めて、拙者がキバガミを名乗れるであろう。

37. 猛き炎は愚者の足止める

地を滑るように迫る、人より大きな亀の突進を避ける。

亀は勢いのままに壁にぶつかると、反動を受けた様子もなくすぐに次の攻撃の準備に入った。

だがその前に、鎧のごとく堅牢な亀の魔物を、背負っていた金棒で甲羅ごと叩き潰す。

刀で斬れば刃こぼれは避けられぬ相手。

女子は戦いに手を出すことなく後ろで眺めているだけだ。

「心臓の在り処はまだ遠いのか」

「ウム、まだまだ先だ。重ねて言うが、お主は手だし無用で頼む」

「わかっている」

「すまぬな」

冒険者とはどういうものか拙者はよく知らぬが、何もせずにいるのは歯がゆく思うことだろう。それでもなお、拙者の頼みを聞き入れてくれる女子には頭が上がりそうにない。

「汝は我に気にせず戦うがいい。我も汝の在り方に興味がある」

「拙者に？」

「汝は言ったな。あらゆる害意から守ると」

確かに言った。

あの言葉には拙者の嘘偽りのない思いが込められてある。

「……かつて、同じような言葉を口にした者がいたのだ。その者は失敗に終わったがな」

「拙者がその者に似ていると？」

「我にはそうは思えぬ。だが口にした言葉は同じだ。我が興味あるのは汝のその先、その者と同じように失敗に終わるか、それとも奇跡か偶然で、その者が成し遂げられなかったことを成すのか」

拙者をその何者かと重ねて見ているというわけか。

「その者と拙者は違う。拙者は必ずや皆を守る。それがイクサビトのためならば」

「……興味深いものだな」

その言葉は自然と漏れたものなのだろう。

小さく呟かれた言葉から、遠い誰かと拙者をまた重ねたようだ。もしかすれば、また同じような言葉を言ったのやもしれぬ。

「そういえばお主、名は何と言うのだ？」

「何故我から名乗らねばならぬ。知りたくば汝が名乗れ」

「ウ、ウム、確かにその通りだな」

言われた言葉はもつともなことだ。

だが拙者には名乗れるほどの力があるのか、それを確かめに行くのだ。襲名される前の名ならばと考えたが、それは先代への裏切りに感じて以前の名も名乗れず。

「しかしすまぬな。拙者は名を捨てた身。里の者からはキバガミと呼ばれてはおるが、お主に名乗れる名をもっておらんだ」

「……ならば仕方ない。我はイシユ。そう呼ぶといい……それで、汝は何を拾い集めているのだ。それは今やらなくてはならないことなのか」

イシユ殿は拙者の手に握られたものを訝し気に見た。

外の者としては当然の疑問。傍から見れば氷でできた杭を物珍し気に拾うモノノフか。

「ホムラミズチはこの岩窟を歪めておる。ここは本来、底冷えする冷気の岩窟……奴は冷気を嫌い、この地を熱気籠る岩窟へと変えた。この氷杭はそれを正すのに必要なものよ」

「そのような小道具で環境が大きく変わると思えぬ」

「奴は自らの熱き鱗で岩窟の霊脈を貫き、岩窟全体を活性化させ熱気を作らせておる。霊脈を穿つ鱗から熱を奪えば、しばらくすれば岩窟は本来の姿を取り戻すのだ」

本来の岩窟は奴にとって居心地の悪い環境。地の利を得なくば勝てる戦いも制すことはできぬ。

投げやすい形の氷杭をいくつか見繕い、再度足を進める。

道順は問題ない。時を経ても忘れることができそうにない道なのだ。

黙々と進み続ける。

時折遭遇する魔物を時に斬り伏せ、時に叩き潰しながら。その間もイシユ殿はただ見ているだけ。

拙者が頼みこんだことゆえに、退屈させているのは忍びない。

「……道中退屈であろう。どうせなら話でもしながら進まぬか」

「我から話すことなどない」

「ならば拙者が話そう。お主は退屈しのぎに聞き流してくれればよい」

なんともつれない言葉であつたが、イシユ殿はそういう性格だということとは少ないやり取りでわかつていた。

「イクサビトの里に巨人の呪いが蔓延るようになってからのことだつた。呪いは体ができあがる前の抵抗が弱い坊主どもばかりを苦しめた」

イシユ殿にとっては、きつと見知つた光景なのだろう。

我らより深く呪いを見たであろう女子には、珍しくもない話。

「ある日、剣の腕前だけ里一番の者が義憤にかられた。伝承の戦いにより巨人の呪いはイクサビトを襲つた。だが、今の時代の坊主どもにまでその毒牙をかけるのは許せぬ……とな」

「それで、その男は何をしたのだ。ただ喚き散らしただけではないだろう」

「その男は、巨人を討つことを考えた。しかし巨人が眠る悪魔の樹は谷に阻まれて遠い。だが、この岩窟には巨人の心臓がある。男は心臓があるために呪いが蔓延るようになったと考えた」

実際は、心臓を使えば呪いを払えるなどとはな。皮肉な話だ。

「男は心臓の破壊を企てた。心臓がある場所には強力な魔物がいるが、男は慢心していた。里一番の腕前となつた己の敵ではないと、侮つておつたのだ」

あの頃は自信に満ち溢れていた。

敵を知らぬがゆえに、世界を知らぬがゆえに。

「だが、男の慢心を見抜いた者がいた。その者は男を止めようとした。だが、男は止まらなかつた……ついには男を止めることを諦め、男についてくることにした。愚かな男はより慢心した。止めようとした者は男の尊敬していた人物。その者と二人でならば、なおのこと負けることはないとな」

火を吹く梟の翼を斬り落としながら話し続ける。

あの時と同じく、今こうして二人で岩窟を進んでいる。ホムラミズチを指しながら。

慢心していたあの時とは違うはずだと己に言い聞かせながら。

「いざホムラミズチと対峙してもなお、男は愚かなままだった。相手の力量を把握もできず、刀を抜いて斬りかかった。もしも、相手を格下だと愚弄せずに挑めば結果は変わってたかもしれぬ。今となってはすべて遅いがな」

「惨敗か」

「……ホムラミズチの攻撃を躲し、凌ぎ、懐に潜りこんでは斬りつける。あるいは殴りつける。戦いは順調に思えた。だが男の慢心を、油断をホムラミズチはついた」

右目の古傷が、主張するかのように疼く。

かつてを思いだすように。愚者の罪を忘れさせぬように。

「ホムラミズチは長く硬き尾を用いて男の右目に傷をつけた。致命傷には至らぬ傷のはずだった。だが、その尾には猛毒が含まれていた。男は思わぬ激痛に足を止めてしまった……男の異変に気づいた同胞は、男を守るためホムラミズチの気を引き付けた。その間に逃げるように、と」

引け、と言われた。

だが引かなかつた。

「男は、愚かだった。里一番の腕前の矜持が撤退を選ぼうとしなかつた。痛みを訴える右目を無視し、同胞の呼び止める声にも耳を貸さずに挑みかかった。しかし、愚か者の前に業炎の壁が生じた」

あの壁はホムラミズチが生み出したものだろう。焰蛟の魔物は炎を巧みに扱った。

「愚か者は炎の壁に怯み、足を止めた。進めば業炎に身を焼かれる。かと言って引くという考えもなく……」

立ちすんだ結果、炎壁の中から伸びてきた腕に突き飛ばされた。

突き飛ばされ、尻もちをつきながら、無事な左目で見た光景は、

「愚か者は先代に……同胞に庇われたのだ。ホムラミズチの毒尾から……」

ホムラミズチの尾は鎧をもともせず、同胞の腹を容易く貫いた。

「そこでようやく、愚か者は敵わぬと悟り、深い傷を負った同胞を背負って逃げることを選んだ。這う這うの体で里まで逃げることできたが……同胞は息を引き取る結果となった。愚か者を止めようとした同胞は命を落とし、愚か者だけが生き長らえた」

「それで、その愚か者が汝というわけか」

「お主は言いにくいであろうこともズバリ言うな……だが、その通りだ」

男だの愚か者だの、まるで他人のように言って聞かせたが見抜かれていたようだ。

他人のように語ったことも、己の弱さがそうさせたようで嫌になる。

「だが心配するでない。拙者はもう二度と慢心せず、油断も一切なく、ホムラミズチを討つと決めたのだ」

そうしなくては、できなくては、キバガミの名を託した先代に申し訳が立たぬ。

「我にとつてはどうでもいい話だ。我が汝に期待することは、心臓の在り処までの道案内。それと汝があの時口にした言葉の証明」

「そうであったな。そのどちらも期待に込めてみせよう。お主は拙者の後ろで見ているといい」

もうすぐだ。

キバガミの名を、名乗れるその時はもうすぐそこなのだ。

わずかに広い場所に出る。

これまでの道と比べ、さらに熱気の籠る部屋の中央には赤熱した巨大な鱗が地に突き刺さっていた。

「あれがホムラミズチの鱗よ。奴の熱を未だに内に秘め、地脈を突いてこの地を歪めている原因だ」

周囲の空気が歪んで見えるほどの熱気を持つ鱗。

拾った氷の杭をいくつか押しあてると、見る見るうちに氷は溶けてなくなったが鱗もまた変色していく。熱が奪われ、明るさすら持っていた鱗はすっかり黒く変色していった。

「これでしばらくは正常な状態になる」

「しばらく?」

「熱を奪えるのは一時的なものなのだ。数週間は持つが、やがて再び鱗が熱を持ちだす。そうすればまた岩窟は熱気籠る地となる」

「ならば鱗を砕いてしまえばよいだけだろう」

「そうなのだがな。この地は長く寒暖激しい地となってしまうた。魔物だけでなく、動植物もそれぞれの環境に適応しておる。ゆえに鱗はそのままにしておこうという考えがあるのだ」

それに、たとえ鱗を砕いたとしても、ホムラミズチが鱗を置きにここまで来るやもしれぬ。

それだけならまだいい。他の場所にまで鱗を置きに移動し、里を襲うなどとなつてはいかん。

「時にイシユ殿」

「なんだ」

「お主、寒くはないか? 話している間にこの階層は凍てつく冷気の

岩窟となった」

「問題ない。汝の里も温度が変わるのか？」

「ウム。今頃客人は驚いているであろうな」

「あのウロビトが寒がるだけだ。問題ない」

「お主の仲間のウロビトか？」

「そうだ」

あのウロビト、とは随分と他人行儀なものだ。

名前を名乗れなかった拙者が言うことではないが、名前を知らぬわけでもあるまい。名で呼んでもいいものだが。

「寒暖の変化で魔物も姿が変わるのか？」

唐突なイシユ殿の質問。

質問をした理由は目の前の魔物にあった。氷塊の獣がそこにいたからだ。

「この魔物と溶岩獣のみが姿を変える。他の魔物は寒暖変化に適応しておる」

「そうか。はやく終わらせよ」

「承知」

刀ではなく背中の中を金棒を用いて叩き砕く。

一撃では完全に砕くことが叶わず、氷塊の礫が襲いかかった。

礫を躲すことは無理と考え、そのまま二撃目を振り下ろし、魔物を粉碎する。

「その調子で汝は成し遂げられるのか？」

「無論、拙者の言葉に偽りはない……そろそろ頃合いだろう。先へ進もうぞ」

今の戦いでできたかすり傷に葉草を擦りつけながら、奥へと向かう。

地下へと続く道。そこは熱が籠っている状態では深い池で通れず、無理して通ろうものなら天井に張り付くコウモリどもの餌食になる通路。それが冷気によって氷の道となっていた。

氷の道を渡った先には、さらなる地の底へと続く階段。

「これより先は一層厳しい場所となる。命に危険が迫るのは避けられ

ぬと思え」

「我には関係のない話だ」

「ふ……そうであったな。拙者がホムラミズチを討つのだ。ならばお主は大船に乗ったつもりでいるのだ」

「汝が負けようと我には関係ない。我を脅かす魔物など存在しない」
「そ、そうか」

凄まじいまでの豪語。一瞬面食らったが、そのくらいの気概がなければ旅はできぬということであろうか。冒険者たちの認識を改める。人間の街、タルシスとはこのような者が多くいるのかもしれない。

階段を降り、次なる階層は再び熱気籠る岩窟だった。

「この階層の大広間に、ホムラミズチがいるはずだ。そしてそこには」
「巨人の心臓だな」

巨人を不死たらしめた象徴のうちのひとつ、巨人の心臓。

かつては破壊しようと思論んでいた物を、今度は回収のために目指すこととなるとは。

「壁画か」

イシユ殿がどこか珍し気に声をあげた。

その視線の先は祖が創りし壁画。巨人の姿が描かれているもの。

「これが汝らの言う巨人か」

「近づく者すべてを草木に変える悍ましき巨人、それとの戦いを描いたものであろうな」

頭部が枝分かれた樹のようになっている巨大な人型が、緑の瘴気を振りまいている壁画。その巨人の向かい側には四つの小さな人型が武器を構えている姿がある。

「巨人との戦い、立ち向かったのは四つの種族だったのかもしれない。我らの口伝による伝承では三つの種族しか伝わっていないが……残り一つの種族には申し訳ない話だ」

「我から見れば、巨人と戦ったという話は尾ヒレがついたものにしかな思えぬ」

「お主の知る呪いは巨人の呪いだろうに」

「世界樹の呪いだ。世界樹を巨人と見立てた作り話、それが汝らの語る伝承だろう」

イシュ殿は巨人の存在を信じてはいないようだ。だがそれも仕方あるまい。呪いは実際に見ることができれども、巨人は確かめようがない。

伝承、神話の存在。

それに、ましてや外から来た者に我らの歴史を信じてもらうというのは難しい話だ。

互いの主張をぶつけたところでどうにもならない。

今の時代に巨人はいない。呪いだけがある。今はその呪いを払うことだけを考えたほうがいい。

並ぶ壁画を横目に見ながら、大広間へと進む。時折現れる魔物を薙ぎ倒しながら。

進めば進むほど、熱気が強くなってくる。

それは、ホムラミズチへと近づいている証拠ほかならぬ。

奴と戦う前にイシュ殿に話しておかねばならん。

「イシュ殿、ホムラミズチは霊脈に鱗を突き立て、岩窟全体を熱くしておる」

「それはすでに聞いた」

「ゆえに、ホムラミズチと対峙した際、拙者はまず霊脈を貫く鱗を冷やすつもりだ。戦いの始めこそ慌ただしいであろうが心配めされぬように言っておこうと思つてな」

今回の勝負、その最大の山場は戦い始めにあるのだ。

ホムラミズチの得意とする環境を破壊するまでの間、万全の奴の攻撃を凌がねばならぬ。それさえ凌げばあの業炎は出せぬであろう。

始めこそ劣勢に立たされるであろうが、それは予想の範疇だとあらかじめ伝えておきたかったがこの御仁には無用なようだ。

早く先へ進めとばかりに歩かれる。

「待たれよ。すぐその門をくぐれば大広間、ホムラミズチのいる場所よ。お主は遅れて入られよ」

「ならば早く行け」

「ウ、ウム」

言葉に出されて急かされてしまった。
少し締めりのない状態だったが、かつて扉があつたであろう門をくぐる。

その先には、ほのかに黄色く発光しているような体躯、四肢の先と尾の先端は毒々しさを主張する紫で染められた、先代の仇である魔物。

ホムラミズチがそこにいた。

さらに一步、中へと足を踏み入れる。

招かれてもいないのに訪れた侵入者に気づいたホムラミズチは、狩りの体勢に入った。

仇敵から目を離さず、されど周囲全体に意識を回す。
今優先すべきは、霊脈を穿つ鱗。

「――馬鹿な」

さして時間もかからずに、鱗は見つかった。

しかし、その光景は目を逸らしたくなるかのようなもの。

「いったい……どれほどの数があるのだ……」

十に迫りかねない数の鱗が、至る所に突き立てられていた。

この数すべてが霊脈を刺激しているものとは考えにくい。すべてに氷杭を当てようにも、杭の数が足りない。足りたとしても、冷やすまでに奴の攻撃を凌げるかは怪しいものがある。

持っている氷杭ではせいぜい三つが限界。

奴の攻撃を凌ぎながら三回。それはいささか厳しい。
ならばいっそ、初めから敵に刀を向けるまで。

己に喝を入れるように咆哮をあげ、炎の魔物に向けて強く踏み込んだ。

38. 先行く者の背を追って

イシユと牛の人が心臓回収のために出発して一時間ほどのこと。
イクサビトの里は微妙な雰囲気である。

牛の人についてくるなど言われたイクサビトの人たちはずっと沈んでおり、奇妙に思った冒険者が何かあったのか尋ねたのだ。その結果、里の呪いについて冒険者たちも知ってしまったということも、里の微妙な雰囲気の原因のひとつかもしれない。

かといって今は特に目立った問題があるわけでもなく、私たちは里の中でただただ時間を潰していた。

望んだわけではない空いた時間、持ってきていた凶鳥烈火の術式書の解説にあてることにした。結構読んでいるし、術式の形もわかっているのだけど、

「出ないんだよねえ……」

「何を唸っているんだ貴様」

思わず漏らした言葉にウーフアンが気づいたようだ。

正直に話せば嫌味でも言われそうな相手である。

しかしウーフアンは方陣師のお偉いさん。さらにいえば聖樹の護りについて知っている。凶鳥烈火についても何か知っているかもしれない人物だ。

ここは素直に聞いてみるかと考えた。

「この術式書なんですけど……ほとんど解説は済んだのに術が発動しないんですよ」

「これは……凶鳥烈火……貴様が持っていたのか」

「え？ ま、不味かった？ あ！ これは辺境伯から貰ったものなんぞ！ 私は盗んだりしてないですから!!」

反応的にウロビトの大事なモノだったのかなと不安になったので、すぐさま保身に走る醜い私の図。

「何を焦っている。別に責めたりはしない」

「はあ」

「しかしほとんど解読が済んでいるんだったな」

「そうですそうです。なのに術が発動しないんですよ……」

凶鳥烈火の術式。解読した通りならば、発動すれば業火の壁をもつて敵を焼き払うものだ。

だが試しに何もなくて使っても発動はせず、まるで術式書自体は偽物のようである。

「古代の術式、それも特別な術式だ。私も似たものを持っている」
そう言ってウーフアンは自身の鞆から一冊の本を取り出した。

「幻豹黒霧の術式書だ。これも聖樹の護りにおいて、巨人を封じるために編み出された術」

「なんだかすごそうな」

「ウロビトの方陣師はみな、この術式書の解読は済んでいる。だが使えた者はいない」

聖樹の護り関係の術式書は皆胡散臭い疑惑が芽生えつつありそう
だ。

使えた者がいない術式書って詐欺なのではないだろうか。

「馬鹿丸出しの顔をするな」

「はあ？ 誰も使えたことがなかったら偽物じゃんこれ」

「少しそれを貸してみろ」

代わりにとばかりに幻豹黒霧を渡される。

ものは試しに読んでみるが、理解しようという気持ちは一切ない。
だって詐欺じゃん。

「凶鳥烈火にも書いていないか……」

「なにが？」

「里にあった書物に、古代の術は精神力ではなく使命を持って用いる
とあったのだ」

「使命？ ふわつとしすぎじゃない？」

言っておいてなんだけど、精神力もたいがいふわつとしている。
もつとこう、理解と体力とかこう、他に言いようはないだろうか。

「まだその時ではないだけか、それとも強い使命感に駆られなくては使えないのか。凶鳥烈火も幻豹黒霧も聖樹の護りで用いられた術だ。使命感に駆られようはずだ。もしくは……」

「もしくは？ 何？ もったいぶらないですよ」

「……貴様は一度口が悪くなると面倒臭いな。もしくは大きな戦いでの高揚感が使わせているのではないかと思っただけ。我らウロビトは感情を抑えて戦う。高揚とは真逆での戦いを主とする。それが術を使わせない正体なので、と考えた。根拠の弱い話だがな」

高揚感？ 戦いでの高揚感で術が使える？ 聞いたことのない話だ。だけど、

ウロビトの方陣師の戦い方は詳しく知らないけど、印術師も戦いのできる限り冷静が基本だ。術式を編むためにも落ち着くことが前提。根拠の弱い話とは言ったが、ちよつとした共通点でもあるわけだ。

「今度興奮しているときに試してみるかな……」

「結果が出たら聞かせてくれ」

「自分で試す気ないの？」

「幻豹黒霧は攻撃する術式ではない。試しがたい術だからな」

それなら凶鳥烈火の術式書あげるから自分でも試してほしいところである。

しかし、これなら却火の術式書解読に努めたほうがよさそうだ。凶鳥烈火はこれ以上わからない。

今度は鞆から却火の術式書を取りだして、そちらを読むことにした。

読むことしばらく。

正直あまり頭に入ってこなかった。

あまり集中できなかったもので、これ以上は意味がないと判断。だからといってできることはあまりない。冒険者同士での情報交換とかも考えたけどどこかピリついている。

それは冒険者たちだけでなく、イクサビトも同じようだった。

なんとも嫌な雰囲気だ。

こういう時、辺境伯のような統治者がいてくれればマシになっただろうか。

早くイシュたちは戻ってきてくれないだろうか。

「先に行った二人が心配かい、アルメリア」

「ワールウインドさん」

振り向けばにやけ面である。

悪意があるわけじゃないとわかっているけど、キリつとしてほしい顔である。

「イシュたちは大丈夫だと思うんですけど、それよりこの里の雰囲気……」

「ああ、確かにね」

イクサビトの人たちは力量不足と言われたようなものだ。里の大事の時に言われて、悔しさや惨めさを堪えているのかもしれない。

だからといって勝手に飛びだしたりしないのは、忠義に厚いからだろうか。

「今はまだ彼らも耐えているけど、そのうち何人かは我慢の限界を迎えてしまうだろうね」

「え？」

「彼らだけじゃなく、冒険者の中にも同じような気持ちを抱えつつあるんだ」

冒険者が？

呪いのことを知ったとはいえ、彼らは呪いを受けてはいないのになんでまた。

続きが気になってワールウインドさんの顔を見る。無精髭剃ればいいのに。

「呪いを解決するために自分たちも協力したいとき。彼らはアルメリアが呪いを受けていることを知らないはずなのに、出会ったばかりのイクサビトのために何かしたいそうだよ」

お人よしだよな、とワールウインドさんは疲れたように笑った。

確かにお人よしだとは思うけど、その前に誇らしくも感じた。呪い

を知ってなお、恐れず助けようとしてくれているのだ。タルシスで引きこもってた頃、少しでも彼らを信じていればもつと外を見れたらろうか。

「イクサビトは代表の言葉があるからすぐには動くことはないだろう。けど、冒険者は止める者がいない。今でこそ堪えているけど、時間の問題だ。そしてひとりでも心臓に向かおうとすれば、あとは雪崩のように続くだろうね」

さて、と言いながらワールウィンドさんはイシユたちが向かった先、そこで待機しているイクサビトの元へと視線を向けた。

「冒険者が義憤に駆られて暴走すれば、里長の言葉を守るイクサビトと衝突してしまう。その前に俺はちよつと小細工をしてくるよ」

「小細工？ 何か企んでるんです？」

「ひどい言いようだね……衝突を避けるための努力だよ」

イクサビトの元へと向かうワールウィンドさんの後をなんとなくついていく。

里から出ることはシウアンに禁止されているけど、里の中ならある程度自由なのだ。とはいえることがあまりなく、それならワールウィンドさんのする努力というのがどんなものか見てみようと思っただ。

「待たれよ。この先は危険な地……客人に怪我をさせるわけにはいかぬ」

近づいてくる私たちに忠告をする馬のイクサビト。

その言葉からは怒りが伝わってきた。番をすることしかできない自己に対しての。

「怪我は覚悟の上だよ。命すらも、覚悟の上で旅に出るのが俺たちだよ」

「さようか。だがこの先に行くのは許可できぬ。お主もあの話を聞いていたであろう？」

「聞いていたからこそ、俺は君に……いや、君たちに聞きたいことがある」

ワールウィンドさんの言葉に訝し気な視線を向ける馬の人。

顔が獣だからわかりにくいけど、絶対怪しんでいるというのがわかった。

「本当に君たちはこのままでいいのかい？」

「……どういう意味であろうか」

「わかってるだろ？ 里の存続を賭けた状況で、君たちはお留守番だ。そんなの君たちも嫌だろう？」

衝突を避けるための努力とか言ってたワールウィンドさん。しかし、なんとか挑発のようにはしか聞こえないのはなぜだろう。顔のせいかな、喋り方のせいかな、両方かな。

己自身に向けていた怒りが私たちにも向けられたのがわかった。空気がさつきよりもはるかに重たい。

「……我らはキバガミ殿から里の守りを頼まれた。ゆえに、ここにいろのだ」

「確かに里の守りは重要だ。帰る場所がなくなるなんて最悪だからな。だけど、守りにそんな多く必要かい？ 俺が見たところ、この里の出入り口からして十人、いや、八人いれば充分だと思うけどな」

「……」

冒険者が暴走する前に、イクサビトの人たちを説得して一緒に暴走しようという作戦なのだろう。だけど彼らは、里の代表の言葉を背くようには見えない。見るからに忠義者みたいな種族だし。

ましてやその説得が胡散臭い人筆頭のワールウィンドさんである。ここは意図をくみ取った私も協力しないと。

「あの、ワールウィンドさんはすごく胡散臭いですけど、何かと隠し事をしてそうですけど、悪い人ではないんです。ただ……見た目がちょっとアレなだけで」

「アルメリア、さすがに傷つくよ」

酷いことを言ったなどは自覚しているけど、見るからに武人肌な相手には馬鹿正直に話したほうがいいのだ。だいたい物語譚とかでも、武人肌相手にはそういう手がいいのだと書いてあった。

「あー……とにかく、だ。主君の……いや、里長の言葉を厳守するだけで本当にいいと思ってるのか？ 長だって君たちと同じ種族だ。部

外者である俺が言うことじゃないかもしれないけど、長の言葉を妄信して、取り返しのつかないことになる。そんなことだつて世の中はありえるんだぜ」

「お主の言いたいことはわかる……このまま任せ、ただただ待つていて本当によいものか……」

「それなら——」

「だが、キバガミ殿と並び立てるほどの腕前は誰も持つておらんのだ……それで我ら自身が危険に晒されるのは構わぬ。力及ばなかっただけのこと……しかし、キバガミ殿は優しすぎる……我らを庇い窮地に陥りかねん。なによりもそれだけは避けねばならんのだ」

助けに行つて、逆に足を引つ張るかもしれないと恐れている。

キバガミつていうのはあの牛の人、だよな。たぶん。一応あとで本人に直接確認するとして、とにかくこの人たちの不安は理解した。

豪胆そうな見た目だけでも、思慮深いというか、どこか弱気な考えが根付いている。過去に何かあったのか。それとも呪いでずっと沈んだ気分させられていたのか。

私も呪いで引きこもっていたころはずっとネガティブだった。体験談からできることは、イシユのように強引に外へ連れ出すもとい、牛の人の元へ向かわせる？

方法を考えてみたけど思いつかない。案外難しい……

「何事も試してみなくてはわからないだろう」

「おお、急に入つてこないでくださいよ」

馬の人とワールウィンドさん、そして私の三人の場に、急に四人目となつて現れたのはウーフアンだった。

試してみないとわからないってそんな無責任な。いや、それぐらいのほうがいいのかもしれない。

「そのようなことをして、失つてからでは遅いのだぞ」

「このまま考え込んでいたところで何も進展などしない。己だけで悩んだところで、正しいかなどわからないぞうだ」

何故そこで断言でなく伝聞形式。

急に入ってきたけど説得するという目的があることは悟れていないのだろうか。

ウーファンを止めるべきか悩む私を無視してウーファンは続きを言う。

「私もかつて、思い悩んでいた。自分のすることは本当に喜ばしいことなのか、何もしない方がいいのではないかな。だが……奇妙な奴らの言動や、その時の状況が悩ませてくれなかった」

「助言に感謝致す。だが、その時のお主の状況と、今の我らの状況。同じと考えていいものであろうか」

「当然すべてが一緒とは言えないだろう。だがここで悩み続けても私の時と同じく答えはでない。それなら下手に考え込まずに、馬鹿みたいに後先考えず行動した方がいいときもあるはずだ」

何故今ちらっとこっちを見た。馬鹿代表とでも言わんばかりに私を見るな。このタイミングで何故私への悪態を混ぜようとした。

やはりウーファンはダメだ。任せてはダメだ。

「私の知り合いが言っていました。竜を倒すには知恵と技、それと束ねられた力って。誰か個人に任せずに、皆で協力すれば竜すらも倒せる力になるんだって」

「イクサビトの問題だと貴様らは言うが、ウロビトもタルシスの人間も協力したがつている。どうか、その想いに応えるためにも頼む」

ウーファンが頭を下げた。それに釣られるように私も慌てて頭を下げる。

「……頭をあげてくれぬか。お主らが頭を下げる道理はない」

そうだろうか。そうかもしれない。

よくわからないまま、雰囲気の流れされるまま頭を下げてしまった。私としてはイシユがいるならまあ大丈夫だろうっていう楽観視があったりするからしつかり考えれていないだけかもしれない。

「頭を下げるべきは、協力を願う我らのほうよ」

「なら……」

「我らはいつまでもキバガミ殿の背に守られるわけにはいかぬよな」

「長の言葉に背いたって怒られたら、胡散臭い男に騙されたって言いな」

馬の人の言葉にワールウインドさんが反応する。あ、ワールウインドさんだけ頭下げない。私も戻そう。

ワールウインドさんの言葉に、笑いながらこくりと馬の人は頷いた。

その後、大きく息を吸い、

「これより我らイクサビトは！ 先行した彼らの助太刀に向かう！

客人も含め、我こそはと思うものは種族を問わぬ！ 得物を持ちてここに集え!!」

びりびりと里中に響くような大声をあげた。

その叫びは里全体に広がり、やがて少しずつ溶け込んでいった。

叫んだ言葉の意味をじわじわと理解してきたのか、小さなどよめきと各々の武具が立てる金属音が聞こえてくる。なんともこれは、ワールウインドさんの言った通りかもしれない。一度動きがあれば、雪崩のように後を続いていく。切欠をみんな待っていたのだろうか。

各々準備を終えたのか、どんどんと集まってくるイクサビトに冒険者。その中にはあの時揉めていたウロビトもいた。

「客人……いや、我らイクサビトの恩人たちよ。里の存続に繋がる光明だけでなく、此度の協力。まことに感謝致す」

「気にかけることはないさ。俺たちは俺たちの目的があつて動いているんだ。今回もそのひとつだよ」

「この男の言う通りだ」

ワールウインドさんとウーフアンの物言いに、それでも、と感謝を告げる馬の人。

「あ、わかつていると思うけどアルメリア。君はここで待っていてくれよ」

「やっぱりですか……」

「当然だろ。それにここの守りは薄くなる。いざという時は君が巫女

を守るんだ」

「はい」

ワールウィンドさんに釘をさされ、大人しく返事をしておく。そういえば里にはどれくらい残るんだろうか。

「安心されよ。イクサビトのモノノフすべて出払わせるわけにはいかぬ。守りに必要な人数を回すとも」

ということとは、私はあまりさつきまでと変わらず退屈かもしれない。

みんなが戦っている最中に不謹慎なことではあるけども、そういう時間になってしまいそうである。

残るイクサビトの戦士のモノノフとやらを誰にするか決めている間に、ウーフアンに質問をしよう。

シウアン関連でなら頭を下げまくりそうな彼女だが、シウアンが関わらなければプライドが高すぎて頭を下げない。そんな人物像がぶれてしまったのだ。

いったいどういう考えで説得などを行ったのか聞いてみたくなった。ちよつとした好奇心である。

どうして頭を下げたのか、そんな問いをかければ、

「他意はない。このまま放っておけば諍いが起きる。その時、伝承の齟齬をやり玉に上げて騒ぐウロビトがいなくても限らないからな」

おおむねワールウィンドさんと同じような理由だ。少し違うのは伝承の違いにも問題が移るかもしれないと危惧している点か。

「おそらく、あの辺境伯はイクサビトとも友好を取りあうだろう。その時は当然ウロビトもそこにいる。互いの悪印象はなるべく抱かないようにさせたいだけだ」

「ほああ」

「馬鹿みたいな声を出すな。いや、馬鹿だったか」

「少しは感心したのにこいつ……」

「それよりも、私も彼らと同行する。シウアンを頼むぞ」

「それよりもじゃないんですけど……ええ？」

あれ？ ウーフアンも行くんだ。

「私は方陣師を束ねる者だ。ならば方陣師の代表として彼らに助力する。今後のためにもな」

「打算こみこみじゃないですか」

「だから言っただろう。目的があって動いているんだと。それに……」

何故か途中から照れながらウーファンは言った。

「私が誰かのために行動することは、シウアンにとっても嬉しいことらしいからな」

「あ、はい、そつすね」

シウアンの入れ知恵つきだった。

子離れならぬシウアン離れも少しはするべきではないだろうかこいつ。

「まあ、そういうことならすごい納得です」

「とにかくシウアンのことは頼んだぞ。それと私の防寒着は持っていないか?」

「はい?」

「なんだか冷えてきた……」

「確かにそんな感じもしますけど……防寒着はノアの中ですよ」
「そ、そうか……」

ウーファンに言われて初めて気づいた。確かに少しずつ温度が下がっている。というか結構下がっている。

このまま下がりが続けるようだったら、あれである。

ウーファン寒がってまともに動けないんじゃない?

方陣師の代表とやらの、この先が不安になった瞬間である。

39. 業炎の中で、戦士の心強く輝く

巨人の心臓を祀っている大広間。

そこにいるだけで、防具の金具が熱を持つほどの熱気囲まれた場所でホムラミズチとの戦いが始まった。

周囲の鱗は放置せざるを得ない。地の利が敵にあれど、もう引くわけにはいかぬと武器を構え挑んだ。先代の仇、そしてイクサビトの存続の道を妨げる難敵に引導を渡すため、幾度と攻撃を放つ。

——何故。

迫りくる二本の角を左手の刀でいなし、右手の金棒でホムラミズチを殴りつける。

手ごたえを感じる間もなくすぐさま迫るはしなる毒尾。前に出していた右腕で頭部を庇い致命傷は避けられた。

「ぐっ……い」

尾による攻撃と同時に距離を取られる。

次の攻撃が来る前に、巾着から準備していた解毒薬を口に含んだ。

飲み干すと同時に今度は巨大な火球が飛んでくる。溶岩獣が使う火球とは比べ物にならない破壊力を秘めたもの。直撃すればどれほどの深手を負うかわからない。咄嗟に金棒で受け止めるも、火球の衝撃を防ぎきることが出来ずに全身に痺れが走る。

火球が数発ほど続き、収まったところで目前までかの魔物が迫っていた。

近接での戦闘は望むところ。

刀は腰に戻してある。今度は金棒の渾身の一撃を喰らわせてみせる。

両手に持った金棒を大きく横に振った。素早い動きに翻弄される

もその一撃は尾を覆う鱗に当たる。
やつは怯むことなく、角撃がこの身を襲った。

——何故だ。何故。

懐に潜りこまれている状態では金棒も上手く機能しない。金棒から手を離し、抜刀と同時に斬りつける。狙うは角撃を繰り出したあとに伸びきった首。

狙い通り刀が斬りつけるも、首を落とす前にやつの身体から炎が噴出した。炎が生み出す風に飛ばされながらも己を鼓舞する。

首を落とすことは叶わなかったが、深く斬ることはできた。

この分なら奴に引導を渡すことができるはずだ。

己を奮い立たせるように咆哮をあげ、気合いのままに斬りつける。弧を描いた斬撃は吸い込まれるように奴の体に傷をつけた。

——確実に、拙者の攻撃は奴に届いている。

なのに、何故。

何故、奴の傷が無くなっている。何故、拙者の攻撃に堪えた様子を見せない。

深く斬りつけたはずの首にはもう傷が見当たらない。金棒で砕いた鱗もすでに生え変わっている。つい先ほど入れた弧月による傷もすでになくなっている。

拙者の攻撃は届いているはずなのに、何故だ。

逆に奴の攻撃は、そのどれもが重く響く。

金棒ごしに浴びた火球は体の芯にまで衝撃を走らせ、尾撃を受けた右腕は解毒を済ませたにも関わらず、蝕むような痛みを訴える。角撃はイクサビトの堅牢な鎧で貫かれることこそ避けたが、鎧に大きなヒビを入れるに至った。次は貫かれることを暗に示すかのように。

何かカラクリがあるはずだ。

魔物といえど、この傷の再生力はいえぬ。

まずはカラクリを見極めなくてはと、観ることに注力する。
ホムラミズチが首をのけぞらせた。まるで深く息を吸うように。
不味い、と思った時には遅かった。

ホムラミズチの口から、排熱器官から、広間を覆い尽くすほどの火炎が吐き出された。

体中を焼かれながら池に跳び込む。

池の水は湯と言えるほどの温度になっていたが、池の外に比べたら冷たいものだ。

炎が収まるまでは池から出れまい。その隙をやつが見逃すとは思えぬ。

未だに炎は止まない。何度も何度も火の手があがるのが水の中から見えていた。

しかし一向にホムラミズチの姿は見えない。火炎が目くらましとなり池に跳び込むのが見えなかったのか。

——違う。

あの火炎。大広間を埋め尽くすほどだった。大広間には拙者とホムラミズチだけではない。イシユ殿もいた。

「イシユ殿！」

ホムラミズチから離れていたとはいえ、あの火炎が迫ったはずだ。深手を負っているかもしれない。距離があった分だけ火炎の勢いも弱まっていたかもしれないが、そのせいで逆に今、いたぶられているやもしれぬ。

あの細い体で、ホムラミズチと対峙すればどうなるか、想像するまでもない。

池から出れば、辺りの鱗が限界を超えた熱を持ってしまったのか、

鱗からも炎が飛び出ている始末。

そのせいで火炎が未だに止まなかったのを悟る。

だが今はそれよりも、拙者の後ろに控えていた女子のことが重要だ。

広間の入口に目を向ければ、

「生きていたか」

「イシユ殿……」

岩をも焼く火炎の中、ホムラミズチの角を掴みながら立つイシユ殿の姿があった。

その細腕で角撃を掴み防いだというのか、ホムラミズチは体を揺すり投げ飛ばそうとしているようだが微動だにしない。

信じられぬ怪力だ。力だけならイクサビトに匹敵しかねない。いや、ホムラミズチの動きを止めるほどならば、イクサビトをも超える力だ。

イシユ殿は拙者を見た後、ホムラミズチから手を離した。

「なっ……！」

「汝が生きているのであれば、我が手を出すわけにはいかないか」

理解が追いつかない。

確かに手だし無用と拙者は言った。その言葉を、ホムラミズチを仕留めれる状況に置いても守るものなのか。イシユ殿にとっての望みは巨人の心臓が何よりのはず。拙者の在り方を見たいとは言っていたが、傍から見ても劣勢だったはずだ。

にもかかわらず、まだ拙者の在り方を見ようとするのか。

「何を呆けている。汝は皆を守るのであろう？　ならば呆けている暇などないはずだ」

勝つことを期待しているわけではないだろう。拙者が敗れても何も問題ないのだろう。

ただ淡々と、己の興味を満たすために眺めることを選ぶ。この女子にとつて、拙者の命の有無はどうでもよいことなのだ。拙者の言葉を成せるか成せないか、それさえ知ればいい。

「……承知！」

何を拙者は呆けている。イシュ殿に手だし無用と頼んだのは拙者自身。

確かに尋常じゃない精神性ではあるが、この状況を招いたのは己の選択。ならば言葉を嘘とせぬためにも、勝たねばならぬのだ。

痛む体は無視し、刀を拾いホムラミズチへと攻め寄る。

ホムラミズチはイシュ殿から距離を取り、どちらと敵対するか悩んだ末に拙者に向きなあった。

「この身、羅刹となりて討つ！」

ホムラミズチにまたあの火炎を出させる隙は与えぬ。

隙を与えず、なおかつ奴の再生力を見極める。

氷杭を投げつけ、氷杭の上から刀で斬りつける。

氷刺。この熱された地では本来の技は発揮できない。ならばと氷杭を用いて再現するまで。

そこで初めて、拙者の攻撃にやつが怯んだ。

冷気と斬撃の複合。だがここからだ。傷が再生するカラクリ。それを見極めない限り、今の一撃も無意味なものとなる。

ホムラミズチの体が炎を纏うように吹きだす。炎から逃れながらも奴から目を離さず見極める。

「馬鹿な……」

纏った炎の下。

そこにはもう、傷はなくなっていた。

「炎を纏えば、傷が癒える……？　それでは……」

炎を出させないようにしなくては、傷を負わせても意味がない。だが奴の今の動きは一瞬だった。止めようがないほどの早さ。

心を折られそうになる。だが、まだ勝ち筋はある。

一撃で奴の息の根を止める。それ以外はない。

奴の強靱な四肢は縦横無尽に駆け回らせる。その動きに翻弄されることなく、首を落とす。頭を潰す。

できるのか、と考え巡らせ、やらねばならぬと己に言う。

ただ斬りつけるだけでは無意味。確実に首を落とすため、次の一撃にすべてを賭けるために集中する。感覚を研ぎ澄ます。

次に奴と距離が詰められた時、全身全霊の一刀を持ってたたつ斬る。

放たれる火球を躲し、接近を待つ。

遠距離の攻撃を無意味と思わせなくてはならん。

ただ耐え忍べ。

必ず近づくはずだと己に言い聞かせ、集中する。

五つ目の火球を躲すと、間合いまでホムラミズチが詰っていた。

火球に意識を逸らさせて接近する。先もやられたことだ。すでにその手は見た。

代々イクサビトに伝えられし奥義、爪神。

魂をも寸断する一閃を持って、その首もらい受ける。

はずだった。

刃がホムラミズチに届く寸前、奴の体から熱気を持った煙が噴出した。煙に燻された程度で斬撃は止まらない。だが、その煙は拙者の両

目から視界を奪った。

手ごたえはあった。何かを斬った、その手ごたえは。状況が見えない。どうなったのだ。

目を拭いながら視界を確保しようとして、

「ぐ、う……！」

熱の衝撃がこの身を襲った。うめき声を噛み殺し、意識を強く持つ。攻撃が来たということは、まだやつは生きていているということ。まだ戦いは続いているということ他ならぬ。

心もとない視界でホムラムズチの姿を探す。

二本ある尾のうちの一本、それを斬り落とされた奴の姿が見えた。

迫る白刃を、尾で受け止めたというのか。あの一瞬で。

さすがに斬り落とされた尾は、あの脅威の再生力を持つても回復しないようだ。だが、首を落とせなかったことは残念ならない。

状況は依然悪いまま。

尾を斬られた魔物は怒りの視線を持って拙者を睨む。

刀はまだこの手にある。もう一度、今度こそ首を斬り落としてくれる。

迫りくる魔物に刀を構える。

幾度と業火に炙られながらも、その刀身は未だ健在。

されど刀を握る手には力が入らなかつた。

おそらくもう、攻撃を凌ぐことはできまい。ならば刺し違えてでも、奴を討つことに専念するのみ。

だが、それでいいかもしれぬ。

この場にはイシュ殿がいる。巨人の心臓を持ち帰るのは、彼女に託すでしょう。イクサビトの里、最大の脅威である呪いは巫女殿が払ってくれよう。

結局、拙者はキバガミを名乗ることはできなかつた。先代のように

皆を導くことは叶わなかった。

先代の遠い背中を思いながら、迫る魔物の姿を見た。

——落としたはずの金棒が、ホムラミズチの横腹に飛んできた。

「な……い！」

この場にいるのは拙者とホムラミズチ、それとイシュ殿だけだ。イシュ殿が手を貸してくれたのか。そう思い目をやると腕を組みながら傍観しているイシュ殿の姿。イシュ殿はこちらを見ていない。その視線の先を追えば、

「お主ら、何故ここに……！」

イクサビトのモノノフたちが、武器を構えてそこに立っていた。

「キバガミ殿の金棒を投げたこと、あとで深く詫びます」

「そのようなことはどうでもいい！ 何故ここに来たのだ！」

拙者の力では、己の身すらホムラミズチから守ることができぬこの力では、また犠牲を出してしまうというのに。犠牲を出さぬためにも拙者はひとりで戦っていたというのに。何故ここに……！

「キバガミ殿、我らは——」

「いかん！ 下がれ!!」

彼らが言う前に、ホムラミズチが大きく息を吸いこんだ。

また、あの業炎を吐き出すつもりなのがわかった。乱入してきた者たちをまとめて焼き払うことにしたのだ。せめて距離を離すように叱咤するが、間に合うとは思えなかった。

「な、何が起きているのだ……」

業炎を吐き出す前に、空を飛ぶ腕がホムラミズチの顔を殴り飛ばした。

面妖な腕はその後、イシユ殿の元へと飛んでいく。

「イ、イシユ殿か、今のは……」

「汝はあの言葉を成すことができなかった。汝が守ると豪語した者たちは今、危険に晒される場所まで来てしまった」

反論は浮かばなかった。

今のイシユ殿の攻撃がなくなれば、ホムラミズチの炎を止めることができずに彼らは炎に焼かれていた。

「客人殿、先ほどは感謝致す。だが、我らはただ守られるだけにあらず」

「汝らの力ではあの魔物に敵わぬように見えるが」

「我ら個々の力では及ばぬでしょうな。されどここは戦場であって、試合ではない。ならば我らは力を束ねて敵を討つべきと考えます。危険な地だからとて、我らはキバガミ殿おひとりに任せるなどできません」

たとえ数でかかろうとも、犠牲は避けられない。それでは意味がないというのに、何故だ。

何故……拙者の背で守らせてくれぬのだ。

「お主らはすぐに里に戻れ」

「それはできません。我らはキバガミ殿の背をずっと見てまいりました。ずっと我らをその背中で守っておられました」

「ならば、ならば今も守られてくれんか……!」

「できません。キバガミ殿、我らはモノノフ。イクサビトの戦士。背に守られるだけでなく、背中合わせて共に戦う同志でありたいのです」

離れた場所から、再びホムラミズチが火炎を吐き出そうとしているのが見えた。

イシユ殿に警戒の目を向けながら、深く息を吸い込んでいる。今度は止められない。

ホムラミズチから火炎が放たれる直前、奴の前に影が現れた。

「魔物相手に言っても無駄だろうが、大事な話の最中に水を差すのはいただけないよ」

「さっすがキルヨネン！ キザったらし〜！」

「放っておいてくれないか、ウイラフ」

人間の冒険者が奴の口に盾を押し当て炎を塞ぎ止めた。

モノノフだけでなく、人間までここに来ていいるのか。

ホムラミズチめが体を捻った。突然現れた人間を尾で薙ぎ払うつもりか。

「脚封」

小さな声とともに、地面が光り輝く。すると奴は身動きが取れなくなったのか、地に足が縫い付けられたかのように奇妙な姿勢のまま止まった。ただただ体をもがくように動かししているが、何か異常に陥つたのだろうか。

「この状況でいつまで揉めているんだ」

「ウロビトの者までも……」

何故危険とわかりながら、ここに来てしまうのだ。

それほどまでに、拙者は頼りなかったのか。やはりキバガミの名を、拙者は名乗ることができぬというのか。

「お主らは！ 拙者にキバガミの名を名乗らせてはくれぬのか！ 皆を守れずしてキバガミの名は名乗れんのだ！ 何故それをわかつてはくれぬ！」

「わかりませぬ！ 貴殿が名乗れなかりうと、我らは貴殿をキバガミと認めているのです！ それに我らはイクサビトのモノノフでありたいのです！ 戦いをキバガミ殿だけに任せてどうしてモノノフを名乗れようか！ 我らをイクサビトのモノノフたらしめるためにも、肩を並べ共に戦わせていただく！」

意志を曲げるつもりはないとばかりに刀をホムラミズチに構えるモノノフたち。

彼らの背中を見て、ようやく気づいた。

この者たちは、拙者が守らずとも戦える強き者たちだ、と。

拙者では到底率いることが叶わぬ強さを持っている。ホムラミズチを前にしても、闘志を揺るがさぬ戦士。

「強さの違いもあつたが、守られる者の自覚の差もあつたな」

「イシュ殿……それはいったい……」

「汝の言葉を守れなかったのは汝自身の弱さ。それと、守られるべき者たちが自ら窮地に来る愚行だ。我……の話した者は守れる強さを持つていた。守られるべき者たちは、この者たちのような愚行を犯さなかつた」

地に縫い止められたホムラミズチは、身動きがとれなくも炎を操り暴れ狂っている。

決して安全ではない。だが誰も恐れていない。

イシュ殿には、この者たちの行動は愚かしく見えるのか。

「イシユ殿……確かに拙者はお主の語る者にはなれなかった。お主の言う通り、拙者自身の力量不足……それと彼らの行動がゆえに」

あらゆるものから守るといふ言葉は、成せなかった。

「だが、拙者はこれで良かったと今は思える」

「己の言葉を成せなかったというのにか。我には負け惜しみのようにしか聞こえん」

「そうかもしれない……だが、やはりこれで良かった……拙者には、お主の語る者は哀れに思える」

「……何を言っている」

庇護すべき者たちがいた。庇護するだけの力を持っていた。

いかなる時もたった一人で戦っていたのであろう、その者は。

鬼気迫る状況であっても、たった一人。守るために。

見返りが欲しくて戦っているわけではない。だが、

それはあまりにも、哀しく思える。

「お主はそうは思わぬか？ 結局その者は、最後は守れなかったのだ

らう。その時を前にしても、独りだったのではないか？」

「……………」

イシユ殿は踵を返し歩いていく。ホムラミズチとは真逆へと。里へと戻る道を進みだした。

「イシユ殿？」

「我がいなくとも、この戦いはもう勝ったも同然のはずだ。ならば先に戻っても構わんだらう」

「ウ、ウム」

気を悪くさせてしまったか。

イシユ殿がいなくとも、勝てはするだろうがきつと犠牲は大きくなる。

そうはならないためにも……拙者ひとりで挑まずに、皆で協力するべきだな。なんとも、まるで伝承にあつた状況ではないか。

「まだ仕留めれないか！ こいつ、熱で地脈ごと歪めているぞ！ そろそろ封縛が外れる！ 急げ！」

「生半可な傷ではあの回復力を越えられぬか……」

「なりふり構わず攻撃すればあるいは……だけど炎の壁が……」

ウロビトの術師が、イクサビトのモノノフが、人間の冒険者が、それぞれ壁にぶつかった。

「ウロビトの術師殿よ、もうしばらく奴めを縛ってください。さすれば拙者が奴の命を頂戴できる」

「キバガミ殿、いかがなされるおつもりで……？」

モノノフが訝し気に聞いてきた。おそらく拙者が命を顧みぬ捨て身を行うのではと不安がつているのであろう。先ほどまでの己のあり方を思えば、そうなくても仕方ないか。

「心配するな。拙者は里に戻らねばならぬ。これでも里一番の薬師でもあるのだからな。それに、お主らは拙者をキバガミだと言って聞かぬのであろう？ ならばお主らと共にあるためにも、まだ死なぬよ」「ちよつとちよつと、何する気か知らないけど、今のあいつは近づいたら炎で焼かれるよ！ 弓か印術でもないと危ないよ！」

モノノフは何も言わず、代わりに冒険者の者が止めにかかった。

確かにホムラミズチは周囲に炎の壁を作りだしている。何も近づかせないように。

あの時の炎の壁よりも、白く燃えている様はより熱く見える。
止めてくれた冒険者に礼を言い、されどホムラミズチに近づいてい
く。

一步、一步と進むごとに皮膚を焦がす熱が襲う。

炎の中に入る前に、感謝を告げる。

「ウロビトの術師殿よ、魔物を封縛してくださり感謝致す。冒険者殿
よ、共に戦ってください感謝致す。そして……モノノフたちよ、ここ
におられる方々に拙者の体は重いものだ。拙者の巨体を運ぶのはお
主らに任せたぞ！」

笑いながら、炎の中へと入っていった。

左手の金棒を下段に持ち、右手の刀を上段に構える。少し変則では
あるが、この技の意味を込めれば同じものだろう。

「奥義・牙神」

その名が意味するは一对の牙。

身を焼く炎の中、強靱な下顎と鋭さのある上顎を持って、ホムラミ
ズチの喉笛に喰らいつかず。

封縛によって動くことできぬホムラミズチは体を逸らすことしか
できない。だが一度喰らいつかれた状態では、自由に動けたとしても
逃れられない。

下顎の金棒が体の芯まで揺さぶらせる。この牙が、捕らえた敵を逃
すはずがなし。

——先代、拙者は貴殿のように皆を導くことはできなかつ
た。貴殿の背中をずっと追っていた。追いつけずとも、命を賭してで
もその背に届きたかった。されど、

貴殿のあり方と違うキバガミとして、皆と一丸となり生きていくこ
ととする。

鎧をも焦がし、肉を焼く炎はより強く燃え上がる。

されど下がりはいらない。

今の拙者には共に肩を並べ戦う戦友がいる。この背で守るべき者たちではない。

この炎で立てなくなっても、彼らの肩を借り里に戻れるのだ。拙者はひとりにあらず。

「ホムラミズチよ、お主はまことに、強敵であつた！」

その言葉と共に、魔物の首が一对の牙によって噛み千切られた。

それと同時にそれまで包んでいた炎が塵のように消えていく。

魔物の最期を見届けたあと、仰向けに倒れこむ。全身焼かれて感覚がないが、里に火傷に効く薬を置いてある。里までモノノフたちに運ばせるのだ。拙者の言葉を守らなかった奴らへの意趣返しということにしておこう。

「……ホムラミズチとの戦、我らの勝利である！ 客人殿よ、心臓の回収は頼みます。我らはキバガミ殿含め、負傷者を運びましょうぞ。力仕事は我らにお任せあれ！」

あの頑固な馬面モノノフの仕切る声が聞こえた。

結局あの頑固さに、拙者は根負けしたのかもしれない。いや、あの者だけでなく、

「モノノフに拙者も負けた、だな……」

「キバガミ殿、何か仰いましたか？」

「いや、何でもなし。それより早く里まで連れてってくれぬか……さすがに痛む……」

「は、ははあー！」

何を畏まっているのか。

火傷の痛みで全身が痛いというのに笑わせてきた馬鹿者は、あとで
一発懲らしめてやろうと思った。

瞼の裏に浮かんだ先代の姿は、面白そうに笑っていた。

40. 翻る旋風

里で待っていた私はすることが一切なく、シウアンと一緒にイクサビトの子供たちとお喋りを興じていた。

ウロビトの里でシウアンに聞かせたような冒険譚、それに、それからの冒険譚も含めたもの。

「——勇敢な少女は怯えることなく目を開けました。そしたらなんと、鰐が凍りついていたのです」

「アルメリア、あの時すごく震えてたよ」

「シウアンもじゃない……」

冒険譚なんだから少しくらい盛ってもいいじゃないか。そんな思いが私にはあるけどシウアンは野暮な突っ込みばかりである。

そのたびに子供たちは笑ってくれるから、まあ結果的にはいいけども。

「あ、イシユ、お帰りなさい」

誰かがこの部屋に入ってきたので振り向けばイシユがいた。

他の人たちは見当たらない。先に戻ってきたのだろうか。マイペースすぎる。

「イシユって熊を殴り倒したイシユー?」

「壁をぶち抜くイシユー?」

「ごめんなさい、子供たちにイシユのことを聞かせたらこんな感じになっちゃって」

ちなみに子供たちからは結構人気である。

常識離れした強さと言うのは憧れの対象になりやすいのかもしれない。それに子供は純粋だ。疑わずにまず信じてくれる。

「……じきに他の者も戻る。我は少し、疲れたのかもしれない」

「え!」

イシユが疲れた？ そんなの初めてだ。

よっぽどハードな戦いだっただろうか。確かに服が所々焦げているけども。

イシユはそれから何も言わずに部屋の奥へと向かった。

「なんだかいつもと違ったね」

シウアンの心配げな言葉。

疲れたとは言っていたけど、メンタル面で何かあったのかもしれない。イシユが沈んだ姿は一度見たことあるけども、それとはまた何か違う感じがする。

疲れたのかもしれない、なんて曖昧な言い方。何か自信を無くしているのか、思い悩んでいるのか。

何かあったか素直に話してくれたらいいんだけど、うまい方法は思いつかなかった。あの様子では煽っても効果が薄そうだし。

まあきつとそのうち話してくれるだろう。なんだかんだでパーティのリーダーらしくなってきたのだ。ひとりで思い悩むことなんてないはずだ。

やがて、大勢が戻ってきた。

牛の人はひどい怪我を負っていたが、本人が火傷にいい薬があるからすぐ治る、と笑いながら言った。周りを安心させるためというより、そう信じて疑わない発言のようだった。

イクサビトは見るからに屈強そうだし、治癒力も高いのかもしれない。他のイクサビトも大なり小なり心配そうではあるけども、大丈夫だと信じているようだ。

「あ、ウーフアン！」

「シウアン、ただいま」

ウーファンも赤い宝石のようなものを持って戻ってきた。

「それが心臓だね」

「ああ、あとは頼めるか」

「うん、これさえあれば……！」

あれが、巨人の心臓。

けどどう見ても宝石のようには見ええない。心臓って言ったらもっとグロイものでは。まあ常識なんて関係ないか。シウアンがすぐに心臓と分かったあたり、本物なのだろう。

拳程度の大きさの宝石を両手で大事に持ちながら、シウアンは子供たちのそばで目をつぶりだした。

「アルメリアも、こっちにきて」

「あ、うん」

そうだ。

これでいよいよ、呪いを払うことができるかもしれないんだ。

小さく喉を鳴らす。

10年の間、体を蝕む呪いを追いだせる。長いようで短くも感じる月日。諦めから、再び希望を見出してあつと言う間だった。

これでも呪いを払えなかったらどうしよう。

シウアンを、というより彼女の握られている宝石を中心に、周囲を光り照らし始める幻想的な光景。

その光を浴びると、イクサビトの子供の体に憑りついていた草木がポロポロと崩れ落ちていく。

その下には彼らの種族らしい毛むくじやらの体毛が覆っていた。

他の子供も同じように植物が落ちていく。体表だけでなく、足が完全に植物と化していた子も、みるみるうちに正常な足になっていた。

そして、私の体も。

服の下で起きた変化がわかった。蔦はすべて剥げ落ち、皮膚は本来の柔らかさを取り戻していた。落ちていく枝や蔦が服の中でごちゃ

ごちゃになって、元に戻った皮膚と擦れて痛い。とても痛い。痛いから涙が出てきた。痛いからだ。

「アルメリア……本当によかった。ほら、これ」

いつの間にかそばにいたワールウィンドさんが、まるで自分のことかのように嬉しそうに言いながらハンカチを差し出してくれた。

傍から見たら私はイクサビトの子の呪いがなくなって、嬉しさのあまり泣いている聖女ではないだろうか。その実態は枝が痛くて泣いている少女である。

「今まで本当に、大変だったね……」

枝が痛くて泣いているだけなのに、その言葉でさらに涙が出てきた。

みつともないほど大泣きをしてしまった。

私が呪いを受けていたことを知っている人たちはまだいい。けど知らない人から見たら、私の感受性がすごい高い子というイメージになってしまった気がする。ウィラフさんあたりに揶揄われそうだ。

とにかく里の呪いが払われてから、イクサビトはお祝いムード。ムードと言うか実際に宴だと騒ぎだした。シウアンは恩人だとすごく感謝されていて、それに対して恥ずかしがる姿がちよつと可愛らしかった。

いつの間にか完全に温度が下がったイクサビトの里だけど、その空気はとても明るく暖かなものである。

「お主はもう食べぬのか？ まだまだ馳走はあるぞ」

声をかけられ振り向けば、牛の人がいた。

体には包帯が巻かれているが、もう動きまわれるようである。回復力がすごすぎるのか、薬の効き目がすごすぎるのか。

「ちよつと体を冷ましてまして……すごい熱気ですからね」

「そうだな！ 本来の冷たき岩窟であっても、今宵の温もりを落とせずにいるほどの熱気よー」

「牛の人は宴に行かなくていいんです？」

「牛の人……」

「あ……」

しまった。アルメリアちゃんつたらついうっかり。

だけどこれは私のせいではないはずだ。だって自己紹介受けてないし。何か言われる前にそう弁明をと決めた。

「だ、だって自己紹介互いにしてないじゃないですか！」

「そ、そうであつたな」

「私はアルメリアです！ それで、あなたのお名前は!!」

勢いで強く言う。牛の人は若干引き気味である。

しかし、名を告げて、名を尋ねれば、

「拙者の名はキバガミ。イクサビトのモノノフ、キバガミだ」

自己紹介をすることが嬉しかったのか、やけに気持ちよさげな笑顔である。

変わった牛の人もといキバガミさんである。

「ところでイシュ殿が見当たらぬが、どこにおられるだろうか」

「イシュ？ イシュは……まだ休んでるのかな。戻ってきてから疲れたって言ってあの寝所の奥に引っ込んだんじゃないんです」

「なんと……教えていただき感謝致す」

「何かあつたんですか？」

そう言えばキバガミさんはイシュと二人でしばらく行動してたのだ。イシュがああなった理由を知っているかもしれない。

「拙者の発言がイシュ殿の気を悪くさせてしまったようだな。謝罪をしたくて探しておつたのだ」

「い、いったい何を……」

「勝手に事情を説明するわけにもいかぬ。イシュ殿の過去に関わることもかもしれぬからな」

キバガミさんはかなりの真面目タイプか。うっかり話してくれただっていいだろうに。

というか過去に関わることなら私だって結構知っている。張りあって話し出してもダメだろうから我慢するけど。

「さて、拙者はイシュ殿の元へ行くが……お主はもつと食べたほうがよい。お主を蝕む呪いは消えたのだ。ならば精をつけよ」

「す、少し休憩してからにします……」

「そうか。なくなりにはせぬだろうが、飯が冷める前に食うのだぞ！」

笑いながら去って行くキバガミさんを見て思う。

あの人、なんだか変わった気がする。最初に会った時より明るいよ。うな。里が呪いから解放されたからだろうか。

まあそれよりも、せっかくのご馳走だ。言われた通り、多少無理してでも食べよう。勝手に栄養を奪っていきそうな植物はこの体から消え去ったのだから。

宴の中心に向かおうとすると、ワールウインドさんとシウアンがやってきた。

「アルメリア、ここにいたんだね」

「ワールウインドさん、シウアンも。もうご飯はいいんですか？」

私を探していたかのような口ぶり。探されるような心当たりはあまりない。また過保護でも発動したのだろうか。

……にしても、ワールウインドさんはシウアンの手を掴んでいる。傍から見れば事案だ。

シウアンと一緒に私を探していたのだろうか。だからって手を掴んで探すのは、ちよつと……ひよつとしてロリコ……いやなんでもない。気のせいだきつと。

「私は疲れたから抜け出したくなって……そしたらワールウインドが抜けださせてくれたんだ」

「なるほど」

あれだけ褒められたら居心地も悪くなるか。彼らは善意100%だけでも。かくいう私も曰ごろシウアンと接してなかったら、同じように崇めていただろう。いきなり距離感を変えるのは抵抗があったから普段通り接してられるのだ。

「アルメリア、大事な話があるんだ」

「はい？　なんです？」

「あ、私は離れていようか？」

シウアンが気を利かせるかのように言った。

だがワールウィンドさんは手を掴んだままだ。シウアンにも聞いてほしいことだろうか。

「いや、巫女も一緒に聞いてほしい。少し場所を移そうか。他のやつには聞かれたくないからね」

ワールウィンドさんは案内するように歩きだす。その方角は里の入口側。宴とは正反対の位置。誰もいない冷たい場所だった。

宴の方は暖かそうなのに、聞かれたくないとはいえこの差はちよつとあれだ。せめて暖かい食べ物が恋しい。

「いったいなんです？　シウアンと私に話って」

「俺はずつと君の呪いを解いてあげたかった。それがようやく叶った」

「はあ」

大事な話と言われたが、いまいち見えてこない。

確かにワールウィンドさんは何度も私を心配していた。呪いを解くために色々と調べてくれた。

「アルメリア、もう君を蝕むものはない。だけど君の家には誰もいない。君の両親はいない」

「……」

「俺はやらなくてはならないことをやり遂げた。だから故郷に戻ろうと思う。だけどその前に君に聞きたいんだ」

後方からの、宴の騒がしい音が遠く聞こえる。

ワールウィンドさんの顔にはいつもののにやけた表情はない。これは、誰なんだろうか。時折真剣な表情を見たことはある。冒険者として、ワールウィンドとして真剣な姿は見たことがある。

「ただどそれとはまた違うような、知らない人の顔。」

私は何をポエミーなことを考えているのだ。誰ってワールウィンドさんはワールウィンドさんだ。

にしても、本題でありそうな聞きたいこととはなんだろうか。若干溜められている。流れ的に、故郷に一緒にとかだろうか。求婚か。ロリコンか。

「俺と一緒に、俺の故郷に来な——」

「お断りします」

マジでロリコンか。

私とワールウィンドさんの年の差は結構あるよ。私はロリってほどじゃないけど年齢差的にロリコン適用してもいいと思うよ。そう考えて思わず速答してしまった。

「ず、ずいぶん早い返事だね……」

「アルメリア、今のはないと思うよ……」

「何故私が責められているのか、納得できませんが」

「なんだ、告白への返答もムードが欲しかったのだろうか。」

「ならシウアンと一緒にいる時点でおかしい。私は何も間違っていない。」

「あー、その、言い方が悪かったね。別にプロポーズとかじゃあないよ」

「え、違うの？」

「違うよ……」

シウアンの意外そうな顔に、苦笑しながらワールウィンドさんは答える。その間もその手はシウアンを掴んでいた。本当のプロポーズ相手はシウアンだろうか。それはもつとヤバイ。

「俺は故郷に戻る。タルシスでするべきことは終わったからね。だけ

どそうすると、君はひとりになってしまう」

「そんなことは——」

「君の知りあった人たちは皆冒険者だ。彼らはまだ冒険を続けるだろう。だけど君はもう、旅をする理由はなくなった。呪いを解くために今まで旅をしていたんだからね」

「あ……」

言われて初めて気づく。そうだ。

私の旅をする理由は、なくなってしまったのだ。

「い、イシユの手伝いを……」

「あいつは君を必要としていなかったはずだよ。あいつは君の、呪われた体が必要としていた。実験がどうか言っていただろう？」

宴の場から離れたここは寒い。底冷えする寒さというやつだろうか。

そのせいだろう。体中が冷える。

「タルシスに残れば、君はひとりになる。だから俺と一緒に来てほしい」

そんなはずはない……

だっていろんな人と知りあったんだ。イシユだけじゃない。ウィラフさんやキルヨネンさん、シウアンにウーファンもついでに入れておこう。他にもメノウさんや——

みんな、旅に出てしまう人たちだ。

「無理強いはしない。俺のすべきことは君の呪いを解くことだった。とはいえ、君の両親のためにも君を独りにさせたくない。だからこそ、国に連れて帰りたい」

「……」

「アルメリア」

ワールウインドさんの提案に乗るべきかどうか。さつきまで乗る気は一切なかったのに、今は激しく心が揺れている。

またひとりになってしまうかもしれない。呪いで引きこもっていた時と同じような日々を。

そう思うと、断る勇気がしぼんでいく。

けども、

「お断り……します」

「……本気かい？」

「はい。ちよつと悩んじやいましたけど、私はタルシスに残ります。だって、残ってみんなと別れるかもしれないからって、ワールウインドさんと一緒に行ってみんなと別れることを決めるのはおかしいじゃないですか」

まだひとりになると決まったわけじゃない。まだ置いていかれると、別れると決まったわけじゃない。旅に出ていつてしまっても、また戻ってきてくれるかもしれないのだ。なのに決めつけて、自分から別れるのはおかしい。

「うん、私はタルシスに残ります！」

「……そうか」

「ワールウインドさんには申し訳ないですし、ちよつと寂しくもなりますが……とところでいつまでシウアンの手を掴んでるんです？」

「だよね、私もなんで掴まれているんだらうって思っ……痛い！痛いよ！」

突然シウアンが痛みを訴えだした。

そしてワールウインドさんの手を外そうとしている。とても強い力で掴まれている。

「ワールウインドさん!?! シウアンが痛がってますよ！ 離してあげ

てください——なにを!？」

シウアンを力任せに引き寄せ、彼女のお腹に拳を放った。ワールウインドさんが。

痛みあまり気を失ったのか、シウアンは倒れ伏す。そんな彼女を肩で担ぎ出し、冷徹な顔つきでこちらを見ている。

「ワールウインドさん……？ どういう、つもりで……」

断られた腹いせとか、そういう感じではない。カツとなってやったにしては、その目は嫌に冷徹すぎる。

「騒がれると面倒だからな」

「答えになってないんだけど……」

「悪いが、君にも気を失ってもらおう。君の望み通り、君は連れていかな
い」

印術を起動するよりも先に、腹部に衝撃が走った。

一瞬で距離を詰められたのだと理解したときには、意識が薄れゆく
ころだった。

——なんで

「——丈夫か！　しつかりするのだ！」

「う……？　ア……」

肩をバシバシ叩かれる衝撃で、意識が戻ってくる。

「しつかりせよ！」

めっちゃ痛い。すごい痛い。声を掛けてくれてる人が叩いているのだろう。その声の持ち主はキバガミさんだ。

「目を覚まさぬか！」

「痛すぎるんですが!!!」

「お、おう!？」

目を開ければ視界のほとんどを埋め尽くすキバガミさんの巨体。

その後ろには何人もの見知った顔があった。

すぐさまキバガミさんをどかして周りを見渡す。どこを見てもワールウインドさんとシウアンの姿はない。

「何があったのだ？　お主はそこでひとり倒れていたが」

「シウアンは!？」

「巫女殿？　巫女殿は……誰か見ておらんか？」

本当に連れていかれた……？　なんでそんなことを。何を考えて

……

「何があったのだ。アルメリアよ、答えよ」

「イシユ……!？」

「き、キバガミ殿！　門兵が！」

「何があった！」

「ワールウインド殿に斬られて……！　ワールウインド殿が巫女殿を誘拐したとの！」

「……どういふことだ！　順を追って話せ！」

気を失っていた時間はそんなになくようだ。

それなら早くワールウインドさん止めないと。混乱していく場では集団行動など無理だろう。すぐに動けそうで、なおかつワールウインドさんを止めれる可能性が高いイシユに言った。

「ワールウインドさんが、シウアンを連れ去りました！　理由はわからないですけど、強引に連れ去りました！」

「……あの男が？」

「な、なに……！ シウアン……!!」

一緒に聞いていたウーファンが歯ぎしりをしそうなほどの形相を浮かべた。

「ワールウィンンド殿……どういうつもりだ……巫女殿は我らイクサビトの恩人、すぐに連れ戻すぞ!!」

キバガミさんも慌ててとりとめのない報告をする人より、私の話のほうを聞いてくれたようだ。

おかげですぐに追いかける。

「あの男が何を考えているかわからぬが、巫女の力は我にとっても必要なもの」

イシユも今回は乗り気なのか、すぐに走りだしてくれた。

私もじつとしていられない。

「誰か、ワールウィンンドさんの気球艇はどこに！」

「わ、私たちと同じ場所！ 案内するよ！」

「ウイラフさん！ お願いします！」

すっかり冷気に満ちた金剛獣ノ岩窟を走る。

ワールウィンンドさんを追って。移動には気球艇を使うはずだ。ならば最初の目的地はそこ。

いくつもの気球艇が並べられた岩窟の入口についたが、そこにはワールウィンンドさんの姿も、彼の気球艇もなかった。

「くっ……！ おい貴様！ 気球艇を飛ばせ！」

「わかって——なにこれ……！」

「今度はなんだ！」

ウーファンがイラつきを隠さずウイラフさんを怒鳴る。

今は私も気を使っている余裕はない。

「気球艇が、動かない……！ 動力が壊されてる!?!」

「……他の気球艇を確認しろ！」

追われないように、小細工をされた……

他の気球艇も調べたが、そのどれもが動力部を壊されている。兵士のも冒険者のも、すべて。一か所だけ不自然に空いた空間があるのは、ワールウィンドさんの気球艇があつた場所だろう。

それ以外の気球艇を壊された。

「イ、イシユ……」

「走るぞ。ノアは別の場所に停めてある。あの男はそれを知らぬ。ノアにまでは小細工していないはずだ」

「……！ はい！」

そうだ。ノアだけは別の場所。そこまで小細工はいつてないはず。

「拙者も行かせてくれ！ 巫女殿を取り戻すためにも！」

「勝手にしろ。巫女は我にも必要なものだ」

「感謝する！」

「いいから急げ！」

気球艇のほとんどに小細工をしていた分だけ出発は遅れているはず。

まだ間に合う、そう信じてノアまで走った。

ワールウィンドさんの真意がわからないまま、ただひたすら走った。

第四章

4 1. 黒き砲口が示す道

月明りに照らされ降り注ぐ雪の中、銀嵐ノ霊峰にて緑の気球艇、ワールウインドさんを探す。

今は寒いとか言つてられない。全員がゴンドラに入らず望遠鏡でそれらしい気球艇を探した。

「うむう……い。もうこの地にはおらぬのか！ あの者が行きそうな場所はお主ら知らぬか！」

「タルシスに戻ったとは考えづらい……ウロビトよ、巨人の心臓を回収したとき、石盤は誰が回収したか知っているか」

「……あの男だ。やつは北に行ったのか!？」

北の谷に望遠鏡を向けると、谷を覆う濃雲はなくなっていた。

「雲がなくなってます！ 谷を抜けたのかも！」

「イシユ、急げ！」

「向かっている」

……あの人は国に帰ると言っていた。君は連れていかないとも。

谷の北、世界樹の近くにあの人の国があるということだろうか……もしもそうだとすれば、シウアンを連れていった意味はなんとなく想像がつく。彼の国でも呪いが蔓延しているのだろうか。でもそれならそれで話してくれたら良かったのに、強行する意図が掴めない。今はいくら考えても答えは出ない。会って話を聞かないと。

決してノアが遅いわけではない。だけど先を行った気球艇を追うには歯がゆい速度。

気球艇の速度がこんなにももどかしく感じたのは初めてだ。

谷を進むと雪が少なくなっていく。また気候が、大地が変わるのだ。

平時であればワクワクしたその景色の変化も、今じゃ楽しむ余裕なんてない。

谷を抜けきると、大きな水道橋が西から東へと伸びていた。その橋の下から覗く景色もまた水道橋。

少し視線をあげればタルシスが追い求めていた、世界樹の姿があった。

その麓まで、阻むものはない。

自然の阻むものは、ではあるけど。

世界樹と私たちの間には、気球艇が浮かんでいた。

ワールウィンドさんの緑色の気球艇ではない。

「黒い気球艇……？」

月明りに照らされた三隻の黒い気球艇が、谷から抜けたノアを囲むように近づいてくる。

それはタルシスの気球艇と比べてはるかに大きく物々しい。

「大砲が積まれていますよ……あれ……」

「球皮の紋様の統一性、どこかの軍艦だな」

「なんだって構わん！ シウアンを探すことに変わりはない！」

望遠鏡で黒い気球艇をよくよく見れば物騒なものが見えた。

ノアには、いや、タルシスの気球艇に武装はない。大砲なんてなく、装甲もなく、完全に旅をするために、散策するために作られたものなのだ。

そんなノアが軍艦に囲まれる。攻撃を受けようものなら一発で木っ端微塵。

怒り状態のウーファンを置いておき、場が緊張に包まれる。キバガミさんも状況が危険だとわかつているようだ。

「イシュ……」

「突然攻撃はしてこないはずだが、我らからアクションは起こせない」「イシュ殿の言う通りだが、あまり友好的には見えぬ……」

ノアをこの先に進ませないでもいうかのように配置された黒い軍艦。

そのどれも砲口からイシュの言葉も気休め程度にしか感じれない。

【警告する。貴殿らは我ら帝国の領地に足を踏み入れようとしている】

突然、何重にも重なって聞こえるような大音声が響き渡る。聞いたことのない人の声。軍艦に乗っている人の声だろう。大きなメガホンでもこれほどまで聞こえるものなのか。

【貴殿らがこの地に訪れるであろうことは既に聞き及んでいる。ついでは、我らが大騎士の取った行動について説明し、平和的に事態を解決する準備がある】

【そこで明日の正午に貴殿らの主、タルシスの辺境伯にお越しいただきたい】

【それまでの間、貴殿らにはこの絶界雲上域での行動を許可できない】

重く響き渡る声の内容は、随分と一方的なものだった。

いくつか聞き逃せない点がある。私たちが来ることを聞いていた。

大騎士の取った行動について。この二つ。

これはつまり、

「……ワールウインド殿はこの者たちの一派のようだな」

「こいつらがシウアンを攫ったのか……!」

ウーファンは未だに怒りで頭に血が上っている。イクサビトの里

で見た立派な方陣師は幻だったようだ。

「気に食わない話ではあるが、今は従うしかあるまい」

「何を言っている！ イシュ、貴様シウアンを見捨てるつもりか！」

「巫女をこの者たちから奪い返したいのなら冷静になれ」

わけのわからない黒い軍艦の言う通りにするしかない状況。私だつて腹が立つ。

それにしたつてウーフアンは取り乱しすぎだ。

「ウーフアン、今私たちがやられたらシウアンを助けることができません。だからまずは従うしかないんです」

「くっ……」

頭の片隅では理解していたのだろう。悔しさを噛みしめながら、ウーフアンは黙りこんだ。

ノアは元きた道を戻り、谷へと入っていく。

後ろを確認すれば、谷の出口には未だ黒い軍艦が浮かんでいた。

谷を抜け、辺境伯に報告と同行を願うためにタルシスへ向かう途中の銀嵐ノ霊峰に戻ったときだった。

「イシュ殿よ、すまぬが一度金剛獣ノ岩窟につけてもらえぬか」

キバガミさんの申し出に怪奇な表情を浮かべるのはウーフアンだ。

シウアンを救出する最短を行きたがつている彼女には寄り道などしている時間は許されないのでだろう。

そんな彼女が何かを言う前に理由を話した。

「イクサビトの里に残った者たちに説明をせねばならん。それに、彼らも助力してくれるだろう。そのためにも一度金剛獣ノ岩窟に降ろしてほしいのだ。そして勝手だが、お主らが再び敵の元へ向かう時に拙者を乗せてほしい」

「あの軍艦相手の囷ぐらいには使えるか」

「その扱いでも構わん。もつとも、ただの囷で終わる気はないだろう」

がな」

「なんだか二人の話の流れが、完全にあの軍艦相手に敵対することを前提としている。」

「い、一応あの軍艦、話し合いで平和的解決とか言っていましたけど……」

「確かにそう言っておった。だが、砲口を向けながらそのようなことを言う輩の言葉、信じれるほど拙者は素直ではないのでな。だがまあ、心配なさるな。話し合いとやらを壊す気は毛頭もない」

「汝の望み通り、金剛獣で降ろす。汝の一族が先走らぬようにしておけ」

「任されよう」

イシユとキバガミさんは話し合いが平和的解決にならないと予想しているようだ。ウーファンは無言のまま。私は私自身、よくわからない。シウアンを無理やり連れていったのは呪いに追い詰められているからだと思っている。そのため、話し合いも酷いことにはならないのではないかと。そりゃあ砲口向けてるのは腹が立ったけども。裏を返せばそれだけ切羽詰まっているとも思えたし。

呪い……ワールウインドさんの国も呪いに侵されている。

何故話してくれなかったんだろう。イクサビトのために危険を承知で戦った彼らが、信じられなかったのだろうか。10年も顔を合わせていた私までも、信じられなかったのだろうか。

いや、私に関しては違うか。

何度か考えてしまった、憶測。

もしかして、という引っかけが今回の件で、やっぱり、という形に変わった。

——彼は今までずっと、後ろめたさがあったんだろう。

キバガミさんを降ろしてからタルシスに到着する。

当然というか、緑色の気球艇はそこになかった。

とにかくマルク統治院、辺境伯がいるであろう執務室に急ぐ。

一応、あの軍艦は話し合いをする姿勢は見せてきている。明日の正午に連れてこいと言っていた。真っ直ぐ移動すれば充分に間に合う時間。だけど内輪で話し合うには少なすぎる時間だ。

「辺境伯よ、異常事態だ」

イシユが呼び掛けながら扉を開ける。

もう夜遅い時間。だけど辺境伯は執務室に残っていた。机の上にはさまざまな書類と紅茶の入ったカップが置いてある。中身がまだまだありそうなところを見るに、まだ仕事を頑張る予定だったようだ。

「こんな時間にどうしたのかね？ 随分と慌てているようだが……まさか、金剛獣ノ岩窟でイクサビトと何か問題が起きたのかね？」

「あの男、ワールウインドに巫女が拐われた」

「……うん？ ふふ、おかしなことを。イシユも冗談を言えるとはな」

「辺境伯！ 冗談なんかじゃ——」

「冗談でもシウアンを拐うなど許せるものか！ 今の話は真実だ！」

鬼気迫るウーフアンの怒鳴り。

辺境伯もウーフアンがシウアンに関して嘘は言わないと知っている。

先程まで困った集団を見る目だったが、状況を噛み締めつつあるのか、戸惑っている表情になってきた。そばにいたマルガリータちゃんには尻尾が股に挟めるかのように垂れている。

「まさか、本当に……？ いや、君が巫女殿に関して嘘を言うはずがないか……どういうことか、順に報告してくれたまえ」

私たちの知っていることを辺境伯に話した。

金剛獸ノ岩窟で呪いを払った後に、ワールウィンドさんがシウアンを無理矢理連れ去ったこと。追いかけてしようとしたが、ノア以外の気球艇は壊されたこと。追いかけた先に黒い軍艦があったこと。明日の正午に辺境伯と来るように言われたこと。

余すことなく伝えた、と思う。

「……なるほど。私が行かなくては説明もしないか」

「巫女は奴らの手中にある。表面上は従い、隙を見て奪い返すべきだ」
イシュの提案に辺境伯は渋い顔をした。

「巫女殿を拐ったことは問題だ。だが、拐った理由は予想できなくもない。平和的解決の準備があるというのなら、それを信じて動こうと思う」

「砲口を向けて一方的に条件を呑ませる無法者を信じるだど？」

「それだけ彼らも追い詰められていたということだろう。それなら互いに手を取り合うことができるはずだ。そのためにも、まずは信じてみないと始まらないのだよ」

辺境伯は真っ直ぐイシュの眼を見ながら言い切った。その言葉に嘘はないとでも主張するように。

少しして、空気を弛緩させるように辺境伯は笑った。

「とはいえ、保険はかけたいものだ。私のモットーは慎重に！ かつ大胆に！ ……私は大胆に、彼らの話し合いに従おう。そして慎重に、諸君に護衛を頼みたい。話し合いが破綻し、力で訴えてきたときのために」

少し前の言葉と比べて……なんというか、

「信じてみないと、って言っていましたけど信じきれなくないませんか？」

「ふっふっふ、アルメリア君。私個人で終わる話ならば護衛は頼まないがね。タルシスの領主としては頼まざるを得ないのだよ」

「はあ……」

いや、いいんだけどね。全然いいんだけど。

私の微妙な反応を流して、辺境伯は紙に何か走り書きし、マルガ

リータちゃんに啞えさせた。

マルガリータちゃんはすぐに走り出して部屋を出ていった。

「明日の正午まで13時間。諸君は今のうちに休んでくれたまえ。移動時間を多めに考えて、明日の9時にまたここに来てくれるかね」

「……マルガリータちゃんに何か頼んだんですか？」

「マルゲリータだがね。招集を頼んだのだよ」

名前を間違えてた。

それよりもこんな時間に招集。絶対に明日について何か関係することだ。

果たして私たちはこのまま休んでいいものか。

「明日の準備か？ ならば私も残ろう。シウアンを助けるためにも休んでいられない」

「ならばなおのこと休んでくれたまえ。諸君の正念場は明日だ。諸君は彼らの言う平和的解決が、許容できないものであったときのための切札なのだよ」

それはつまり、魔物相手ではなく人間と戦うことになる可能性があるということだろうか。

その言葉を聞いても、なんだか実感というか、未だに地に足つかない感覚のような、イメージがつかない。

辺境伯は一息つくかのように紅茶をひと口飲み、私を見たあとにイシュに視線を向けた。

「イシュ、アルメリア君の体は治ったのだね？」

「そうだ。その体にはもう呪いはない」

話が急に変わった。

この流れの行き先は予想がつく。

「アルメリア君、君は——」

「私は冒険者を続けます」

遮るように行った宣言に、辺境伯は言葉を途切れさせた。

冒険をする理由、呪いが体からなくなった。ワールウインドさんかと言われた時は少し迷ったけど、今は迷うことはない。だってやらなくてはいけなことができたのだ。ここでやめたら後悔し続ける。

「私もシウアンを助けたいです。それに……ワールウィンドさんともう一度、話さないといけないんです」

「……彼らの話次第では、剣を向ける相手は人間になるのだよ」

「それは……辺境伯も言ったじゃないですか。信じてみないと始まらないって。なら、そうはならないと私も信じてみます」

私は辺境伯と違って立場なんてないのだ。保険なんてかける必要もないのだ。うん、開き直りだこれ。

辺境伯は諦めたように溜め息をついた。

「……私自身の言葉を否定するわけにはいかないな」
「ですです」

私の意志が通じたようだ。少し嬉しくなって、イシユにピースサインを送ってみた。

イシユは無反応である。そりやそうですよね。

「アルメリア君……いや、ニーズヘッグ。明日はよろしく頼むよ」

「……」

「……」

「……」

全員無言である。

ギルドへの頼みなんだから、リーダーであるイシユが答えるべきだろうにイシユ無言。

どうしようこの空気。辺境伯もちよっと困ってるのか視線が迷いだした。

「イシユ……?」

「なんだ」

「いや、ここはイシユが返事するべきかと」

「汝が意志を示したのだ。ならば汝が答えるものだろう」

「え? でもギルドのリーダーはイシユですよ」

「だが辺境伯は汝に呼び掛けた。ならば汝が答えを返すべきだ。早く答えてやれ」

え、私が悪いのだろうか。

いやいや、そんなはずがない。

「締まらない奴らだ……」

「他人事みたいに……!」

ウーフアンも同じギルドだと言うのにこの反応。
キツと視線を向けたがどうでもよさげである。

取り残され気味の辺境伯が咳払いをした。

「とにかく、明日の9時にここに来てくれたまえ。それと休む前にベ
ルンド工房へ行くといい」

「工房にですか?」

「明日の朝までに新しい武具は間に合わないだろうが、良い武具を融
通するように通達しておいた。今回だけだがね」

それはなんともうれしい話である。

「ではまた明日に!」

「ああ、明日は頼んだよ。ニーズヘッグ」

「……」

「……」

「……………はい!!」

やけくそ気味に私が返事をした。絶対リーダーであるイシユの役
目だって、これ。

なんだか最後の方はぐっだぐだな報告の印象となっていました。

4.2. 其の武器を向ける先は誰か

夜も遅いのに、灯りがまだまだ消えないマルク統治院を後にする。統治院だけでなく、街の灯りも点々と灯っていた。

今の時刻は日付が変わる境目。明日の9時に統治院にと考えれば、体を休めるには十分な時間だ。ベルンド工房に武具を受け取りに行くとしても、時間はそれなりにある。

「汝らは宿に戻って眠ると良い。工房へは我が行く」
ここでイシュのこの発言。

イシュは眠れない体だ。効率とか優先しての発言だとは思いう。リーダーの言葉でもあるし、そろそろと全員でいく必要はないけども、

「私も工房に行きたいです。資金に余裕はあると思いますし、私も何か新しい武具を……」

というわけで私も工房に行く主張。決してイシュだけ行かせるのが不安だからという理由ではない。

結構イシュもタルシスに馴染んでいるのだ。もしくはタルシスの人たちがイシュの性格に合わせてくれているか。

しかし、ベルンド工房つてもう閉まっている気がするんだけど、今から行って本当に大丈夫だろうか。

たぶんマルゲリータちゃんに渡していた紙にそういう指示があったんだろうけど、開店してたらお疲れ様ですと言いたくなる。

「私は明日のためにも早めに休ませてもらおう」

「はい、ウーフアンの装備はこっちで選んでおきますね」

「頼む」

あ、そうだ。

「ウーフアン、今日は家で休みます」

「そうか。貴様はその方がよく休めそうだな。私は宿に戻る」

「はい。また明日、統治院前で。おやすみなさい」
「ああ、おやすみ」

長く過ごした実家で少し落ち着きたい。そんなわけで宿には私は戻らない。

「イシユはどうします?」

「何がだ」

「工房のあと、宿に行くか……私の家に来るか、ですけど」

二人で旅をしていた時のように家に来るかなと思いついてみる。

特に深い意味はない。宿にはイシユの興味を引きそうなものはないし、それなら私の家にある古書を読んだ方が良いのではと思っただけである。

「ならば汝の住居に赴こう」

「はい!」

「汝一人では以前ののように寝過ごしかねない」

「そんなことしませ……してましたね……」

熊騒動の時のことか。

あれは冒険に全く慣れていなかったため疲労困憊だったからだ。今は違うはずだ。断言する勇氣はないけど。

ベルンド工房に歩みを進んで行くが、さすがに夜遅い時間。ほとんどのお店がやっていない。

イシユが家に来るとわかったのだし、ちよつと買いたいものを思い出したんだけど……

「この時間ってほとんどお店閉まってますよねえ」

「酒場ぐらいか」

「それじゃあ工房の後に寄りませんか?」

「?」 また報告が滞っているのか

「違いますよ。明日の朝食と、砂糖を買い足したいんです。ほら、砂糖がないってイシユ言ってたじゃないですか」

「そうか」

なんとというか、落ち着く。

明日を思えばゆっくりなんてしてられないのに、こんな呑気な会話

ができることが落ち着く。

ウーファンがいたら緊張感を持ってと怒られそうだ。

イシユのマイペースさが落ち着きをくれるとは、出会った当初では考えられない。

まあ酒場で砂糖やらパンは売ってないだろうけど、そこは交渉である。孔雀亭ならそれなりに何度か顔を合わせてるんだし、あの人結構俗っぽいし、少し値をあげてなら売ってくれるだろう。

そんなわけでベルンド工房である。

本来ならもう閉店だというのに、店の入り口まで灯りが漏れていった。

「ふあ……いらつしやい……」

「ね、眠そうですね」

店番の子の、いつもの元気いっぱいな姿は睡魔と戦うためになりを潜めていた。

普段と違うあくび混じりの出迎えも新鮮でたまにならないかもしれない。やっぱり子供なんだなあみたいなの微笑ましきがあるし。

「あ、ごめんね。いつもならもう寝てるから……詳しくは聞いてないけど、キミたちすごい大変な仕事をするんだよね。売ってもらった素材以外でも工房にある武器とか売るようにって聞いてるよ」

「眠いのなら他の人に任せれば良かったんじや……」

工房には他にも従業員がいるんだし、この子は店の重要人ってわけでもないはずだし。

「親方にもそう言われたんだけど……こんなこと初めてだし、きつとイチダイジなんですよ？ だったら私も何かしたいからねっ。まあ……店番しかまだ任せられてないけど」

「でもすごくありがたいですよ。話しやすいですし」

「ホント？ なら良かった！ あ、でも今回だけだよ。次回からはちゃんと素材を持ってきてね！ あとお金はちゃんともらうからね！」

話しているうちに眠気も飛んだのか、普段の元気さが出てきた。

そして武器が無料でないことはちよつと残念。いや、当然なことだけれども。

「一応魔物の素材をもつて帰ってきたんですが、買い取りも今つてできますか？」

「ダイジョーブだよ！」

いつぞやのように机の上に素材を置かせてもらう。金剛獣ノ岩窟の魔物の素材である。

と言つても、イクサビトの里までの道中しか拾つてないからそんなにないけど。

「じゃあちよつと値段調べてみるね。それまで欲しい装備考えておいてー」

紙を渡しながら店番ちゃんも素材を持って工房奥に引つ込んでいった。

渡された紙には武器や防具の名称と簡単な説明書き、値段が書いてあつた。

急いで書いたようで、インクが滲んでいて読みにくいところもあるが、やれることを精一杯してくれたことを思うと文句よりもやつぱり微笑ましい。

「一番いい剣は……ファルシオン？」

刀身の先が太くなって斬りやすい！ と説明が書いてある。

「強度があればよい」

「切れ味とかは……」

「我が使えば全て名刀となる」

「あの子と相談ですね」

イシユのは後にするとして、ウーフアンと私の分も考えなくちゃ。印術師と方陣師。どちらも相手に距離を詰められたら厳しい。となると、剣……

私もウーフアンも筋力がなあ……

「ウーフアンは頑丈で軽い杖でいいか」

もしかしたら方陣師は杖が必要不可欠かもしれないし、そうだった

ら短剣であつても邪魔だろう。

精々咄嗟に身を庇える頑丈なものがいい。

これまた店番の子と相談だ。

後は私の武器。

正直杖はなくても印術は使える。かといって剣やナイフをうまく扱えるかというところ……投刃なら……

一応短剣あたりにはしておこうか。

あ、ルーンが刻まれた短剣とかもあるんだ。ルーンマスターにぴったりなのでは。

「サンクトウス……」

随分と武器としては変わった名前だ。

炎の加護があるよ！ と説明書きにある。炎の加護とはいったい……だけど火の印術師としてますますぴつたりだ。これは運命である。いや、もはや運命を越えてデイスティニーである。

私以外の武器はお店の子と相談、というかオススメでも売ってもらおう。話し馴れた相手ならではの結論だ。

「イシュ、防具は……」

「我には不要だ。この体を上回る鎧は我にしか創れぬ」

あつた方が良くと思うけど、腕を飛ばしたりするとき邪魔かな。

私とウーファンのは……重い鎧なんて着たら動けないし、普段通りローブと法衣でいいか。

「お待ちせー」

お店の子が戻ってきた。その手には小袋がある。中身はお金だと思うんだけど……なんだか想像してたよりもすごく……少ない。

すごい硬い素材とかもあったんだし5000くらいはあると思つてたのに。

「2104enだよー」

「安くありません……？」

所持金はそんなに苦しくはないけども、安い売値だとちょっと怪しんでしまう。

そもそも知らない素材ばかりのはずだ。イクサビトの里まで行か

ずに戻った冒険者もいるだろうけど、それにしたってまだこれらは希少な素材なはずだ。

「すごそうな素材とか結構ありましたよね？　硬い魔物の素材とか」

「……黒い石屑のこと？」

「あれは溶岩の魔物だったんですよ！　硬いし武具には良いものかと！」

「あのね……あれは素材にならないよ。一応お得意さんだし、lenで買い取りしたけど……ただ硬いだけの石屑だって。加工もできないみたい」

「け、結構強い魔物でしたよ!？」

「素材価値としては強さはあんまり関係ないから……それよりも！　何買うか決めた!？」

「流す気だ!？」

「頑丈な剣を二振り。ファルクスより頑丈なものだ」

「キミはそうだよね……どれも簡単には壊れないから……ファルシオンかなやつぱり」

これ以上買い取りについてごねても仕方ないとばかりにイシュが注文した。まあたしかに、この子にごねても仕方ない。それに時間のかけすぎもあまりよろしくない。

「あ、あと頑丈で軽い杖とかありません？　仲間の方陣師に使ってもらうつもりなんです」

「頑丈で軽い杖……」

「それとサントウスと投刃用ナイフを何本か売ってもらえたら」

「ちよつと待っててねー。持ってくるから」

「待て」

「およ?」

また奥へ引つ込むその前に、イシュが呼び止めた。

「ローブの下に着れる防具を求めろ。動きを阻害しないものだ」

「ローブの下?」

「アルメリアの防具だ」

「じゃあアルメリアさんはついてきて。寸法合わせないとだから」

ぐぐいと手をひかれて私も奥へ。

私の意見が何一つ出る前に決定していく。今まで防具は買わなかったのに、今更感。

工房の奥は想像していたよりも少し涼しかった。夜だからだろうか。

「心配されてるんだねー」

「心配、ですよねえやっぱり……」

嬉しいとは思う。しかし……ウーファンの分の防具については言わない辺り、なんだか複雑というか……扱いの差が少し気になる。特別扱いは嬉しいけども、少しだけ不安だ。千年前の人たちと重ねられているような……

「皮鎧も厳しいよね……レッドダブレットなんかがいいかな。動きやすいし、伸縮性もいいし」

「あんまりよくわかりませんが、よろしくお願いします?」

「えつとねえ……耐火性が高い服みたいな感じかな。着用者の体に熱が届かないようにしてくれるよ」

火の印術師が火に強い装備で火の加護のある短剣を扱う。火に特化しすぎなのでは……

ちようどいいサイズがあった、と渡されたそれは、どう見ても普通の服である。呉服屋にでも並んでそうだ。たしかにこれならローブの下に着れそうだけど、防具なのこれ?

「耐火性は本当にいいものだけど、布地だから防具としては過信したらダメだからね。けど繊維は布地にしては丈夫だから!」

「ははあ」

ないよりまし、程度で考えておいた方がいいかな。

「あとね、あとね、頑丈な杖ってわけじゃないけど、これなんてどうかな」

そう言っで見せられたのは二つの杖。

ひとつは短く細いが、先端に宝石が埋め込まれている杖。

もうひとつは細長く、先端に羽飾りがある杖だ。

ウーファンが今まで使っていた杖と近いのは羽飾り。だけど宝石

の杖も少し気になる。なんかすごそう。

「ジュエルスタッフは見た目より軽いから取り回しは便利だよー」

「でもお高いんでしょう？　宝石ですし」

「宝石じゃないよこれ？」

宝石じゃない？

宝石について詳しいわけじゃないから自信はないけど、こんなに綺麗な石なんて宝石以外考えられないけども。

「蛙の目玉だよ、これ」

「ウインドロッドでお願いします」

なぜそんなものを綺麗に加工したのか。正直知りたくなかったかもしれない。

「持ち手部分の太さはこのままでも大丈夫？」

「あー……たぶん大丈夫です。使うのは私じゃないですけど、たぶん」

「あとこれ。ちよっと振ってみて」

渡されたのは刃の部分にルーンが刻まれている短剣。たぶんサンクトウスだと思う。

「柄が太すぎたりしない？　振った拍子にすっぱ抜いたりしなさそう

？　明日の朝までには間に合わせれるから遠慮なく言っておね」

「たぶん……大丈夫かと……」

「たぶんってさつきから多くない？」

仕方ないじゃないか。だって短剣なんてまともに振ったことがないんだし。投刃用ナイフは別だ。

「違和感を覚えたらすぐ言っておね？　とりあえずこのまま渡すけどさ」

「はーい」

ついでに投刃用ナイフを何本かもらう。

やっぱり薬品までは渡すわけにはいかない模様。

「それにしても、すごいよねー」

「何がです？」

「冒険者に大事な仕事を任せるならってつきりワールウインドのダンナが任せられると思ってただけだよ。キミたちがダンナを押しつけて

任されるなんて、破竹の勢いつてやつだね！」

杖を布で包みながらそんなことを言われた。ワールウィンドさんのことは何も聞いていないのだろう。

「……ワールウィンドさんは、日ごろニヤケ面ですから今回は外されたんですよ」

「あー、たしかにそうかも。でもダンナはフラフラしてそうだけど、イシユさんも不安なところ多いからなー」

「あの人は我が道を行くタイプですからねえ……」

購入を決定した武具を二人で持ちながら工房の入口へ移動する。

最近金銭感覚がおかしくなっていたのかもしれない、とそれぞれの値段を頭に浮かべてはため息が少し。

宿を節約のためと大部屋にしてて本当によかった。それぞれ個室にしてたら財布がからっぽになっていたかもしれない。

今回の件が終わったら、報酬は術式書ではなく金銭にしてもらう。

入り口ではイシユが壁に立て掛けられている武器を眺めながら待っていた。

「お待たせー。イシユさんは今までと柄のサイズ同じで大丈夫だよね？」

「うむ」

ファルシオンを受け取り、代わりにボス熊の剣を引き渡すイシユ。三本も剣はいらないうことだろうか。

「今回の購入の足しにせよ」

下取りということだろうか。なんにせよボス熊剣はどうとうお役御免なようだ。

長い間お疲れ様である。最後に財布の足しになってくれるなんて、本当にありがたい剣だ。

しかしボス熊剣の値段はひどく安く、大した足しにならなかった。

43. 似たような朝食

また眠気がぶり返してきたのか、あくびを必死に堪えている店番の子に見送ってもらいながら工房を後にする。

次の目的地は踊る孔雀亭だ。

目的が情報収集や依頼を求めてじゃなくて、砂糖とパンを売ってもらいにというのがあれだけ。

ま、まあついでに黒い依頼書について確認したい。

予想が確かなら、きつと氷竜関連の依頼書もなくなっているはずだ。

だけどメインの目的は砂糖とパンである。あとチーズとかもあればいいな。

「そんな理由でここに来たってわけね……」

疲れ気味の言葉をくれたのは孔雀亭のお姉さんである。

時間など関係なく人がいるイメージだったけど、今は閑散としている店内。一応何人か兵士の人もかもあるけども。

「まあ、今日は全然お客さんが来なかったから色々余っているけどね……だからってうちは定食屋じゃないのよ？ おつまみとかは作ったりするけど」

「そこをなんとかお願いします……この時間だどこも閉まっていますもん……」

「はあ……しょうがないわね……」

「わーいー」

しかし今日は本当に人が少ない。

金剛獣ノ岩窟での立ち往生のせいだろう。そんな彼らも明日には戻ってこれるはずだ。きっとその時はイクサビトも混ざってそうだとはいくか確実に混ざっている。

それはそうと、と依頼ボードに目を見やる。

「……黒い依頼書、とうとう一つになってますね」

前回は二枚あった黒い依頼書。北の濃雲が払われたのに、増えずにいたということはやはり三竜限定のようだ。

残っている内容はきつと赤竜。

氷竜の石柱はやはりあの遭遇時、どこかのギルドか兵士が破壊したのだろう。助かったような……助かっていないような……

ウイラフさんが言うには絶対にやるな、とのことだし……なんとも言えない。

「ええ、誰かが依頼を達成したんでしようね。自分の意思でやったのならいいんだけど……」

食パンと薄く切られたチーズを厨房から持ってきたながら、お姉さんが気だるげに言った。

兵士が止めていても、結局誰かが達成してしまったことを考えるとやはり喜べないようだ。

「ほら、パンとチーズ。あと砂糖はこれね」

「あ、ありがとうございます」

砂糖の入った小瓶と液体の入った小瓶の二つを渡された。

なんだこれ。

「そっちは蜂蜜よ。おまけでつけといてあげるわ」

「あらまあ。でも絶対何かあるんですよね……?」

「まあいいじゃないの。で、その代わりなんだけど……」

「やっぱり何かあるんですね……」

この蜂蜜は返したくなってきた。

いや、蜂蜜分もお金払うので穏便に済ませてほしいところである。

「特別なことじゃないわ。今回はお代を取らずに譲ってあげる。だから次回はあなたたちが何かご馳走してくれない?」

「はい？ そりやまたなんでです？」

「私も冒険者との付き合いは長いのよ。そんな付き合いによる勘……かしら。何か大きなことが起きるって……だから少しでも、縁は作っておきたいじゃない？」

「……そんなんだから俗っぽいイメージが消えないんですよ」

要するにコネ作りではないだろうか。

まあ思ってたような面倒事じゃなくてよかったけど。

「あら、いいじゃないの別に。近寄りがたい雰囲気よりは親しみやすさがある方が断然お得だわ」

「したたかすぎますよ……まあ、それならお財布に余裕ができたら奢りますよ。今は無理ですけど」

「ええ。楽しみにしてるわ。ついでに依頼を見ていかない？」

金銭面がかなり苦しくなってきたし、やれそうなものを探すのもいいかもしれない。

「断る。明日に備えてアルメリアを休ませたい」

「そう。もう遅いものね。こんな時間なのに兵士や統治院はまだ動いているみたいだし、明日は勝負所なのかしら」

「まあ、そんな感じですかねえ」

「なら今日はもうゆっくり休みなさい。また来てくれたらいいわ」

完全にお帰りムードになったので、流されるままに孔雀亭の外へ出た。

まさか本当に食料と調味料をもらうだけになるとは。

明日を無事に終わらせて、報酬をもらって、ワールウィンドさんからも迷惑料をもらって軽いお金持ちになったらまた来よう。

その時はきつと孔雀亭の客入りも元に戻って……いや、もっと多く入っているだろう。

明日が無事に終わる想像をして、ようやく気づけた。

先のことを約束して、少しでも無事を祈っているのだろう。

ダメだ、気づいてしまうと、心配されてると思うところ……ニヤけちゃう。嬉しさとかでほら。しょうがないのだ。

このまま真っ直ぐ家へと戻り、私は久しぶりの自分の部屋で就寝した。

イシユはリビングに何冊も本を持ってくつろぐことにしたようだ。古書じやないものまで手を出していたあたり、もしかしたら今の時代の文字も読めつつあるのかもしれない。

雄鶏の鳴き声が聞こえてくる。

その声により、少しだけ微睡の中意識を形作った。朝が来たのだ。

しかし雄鶏の鳴き声で動きだすのはちよつと早すぎる。確か時間はまだ余裕がある。

7時を知らせる鐘の音はまだ鳴っていない。それまではまだ寝てもいいだろう。

二度寝の誘惑とは強いものなのだ。

セフリムの宿では皆一緒の部屋だったから、あまり深く寝入った気がしない。繊細さを私は持っているのだ。涎垂らしながら寝てたりしたら恥ずかしすぎるしね。そんなことを考えてたら二度寝など出来なくて。

つまり今の二度寝への誘惑は凄まじいものなのだ。

そんな誘惑に抗えるわけも、なく――

「起きよ。間拔けな寝顔に気の抜けた寝息を立てて……まったく見苦しい」

「デリカシーを！ 持ってきてくれませんか!？」

聞こえてきたひどいお言葉に跳び起きざるを得なかった。

昨日は早く休ませたい的のことを言っていたんだから、もうちよつと寝かせてくれてもいいじゃないか。

「まだ早くないですか？ 前みたいな時間ぎりぎりとかでもないですし」

「もう充分休めただろう。それに、他の者の準備にどれほど掛かるかわからぬ」

「まあ休めましたけども……」

いつもよりはるかに休めたけども……

体の呪いがなくなつて初めての眠りだったのもあるかもしれない。嫌な起き方だったけども、すごいスツキリである。

もはやイシユの前で着替えることに慣れつつあつた私はすぐに着替え、リビンググへ一緒に向かう。

朝食は昨日もらったパンとチーズ、蜂蜜を使う。砂糖はイシユのコーヒーに全部突っ込んであげよう。何気に甘党なようだし。コーヒーじゃなくジュースじゃダメなのだろうか。

食材のシンプルスから特に手の込んだことはしない。チーズトーストに蜂蜜をぶっかけてやるだけだ。

そんなわけで我が家の朝食として食卓に置かれたのは2人分の蜂蜜チーズトースト。

あとコーヒーと水である。コーヒーはイシユである。家主は私のはずだけどまあいい。

「しかし……」

「？ どうしました？」

「汝はこれしか作れないのか。前も一緒だったが……」

「食材が今はこれしかないからです。たまたまです」

そういえば前もチーズトーストだった。

熊騒動時はドタバタして朝食抜きのようなものだったし……しかし文句を言うのであればイシユも手伝ってほしいものだ。

「ていうか前より一応豪勢なんですよ。蜂蜜かかってますし」

「食べ終わったら統治院へ向かう。我ら以外の動きも把握しておいた

ほうがいいだろう」

無視ときたか。

蜂蜜による豪勢さアップを主張したのに無視である。

今日の話し合い。無事に終わればいいんだけど。

向こうもきつと呪いに苦しめられているのだろうし、話し合いが穏便に終わってもシウアンは忙しくなりそう。そうなるとうーファンが怒りそうだ……

「……そういえば、シウアンの力があればイシュの目的は叶うんですか？」

先のことを考えて、ふと気になったことを尋ねた。

イシュの目的はハイ・ラガードの魔物になった人たちの解放。そのために、世界樹のあり方を変える方法を探していた。

「巫女は確かに世界樹へ働きかけることができると確認した。それがハイ・ラガードでも通じるかは不明だ。だが現状、巫女の力は最も可能性が高いのも事実」

「はあ」

「私の目的が達することができるとか、確かめるためにもまずは巫女を取り戻さねばならぬ」

そう言い終えて、チーズトーストに齧りついた。

シウアンが戻ったら、ハイ・ラガードへ行くつもりでことか。

言うとしたら今だろうか。

「……あの、私もハイ・ラガードについていいですか？」
「む？」

「タルシス以外も見てみたいですし……ダメですか？」

観光という気持ちもあるけど、たぶんイシュは目的が達成したらもうタルシスに訪れることはない気がするのだ。それなら私から足を運びやすいように、一緒に行って土地勘を培うつもりである。

「我が禁止する理由もない」

「一緒に行動しようと思ってますから、許可は欲しいなあ」と

「私の邪魔をしないのであれば問題ない」

許可が出たことに安心しながら残りのトーストを食べる。適当

に蜂蜜をかけたただけなのに、案外美味しい。ちょっと焦げちやつてるけどその分パリパリでもあるし、よし。お手軽だし今後も作ろう。お弁当には向いていないけど……あ、蜂蜜の上にチーズをのせて焼けば……

今後得意料理は、と聞かれたらチーズトーストと答えよう。そう思うくらいには真剣に考えた。

朝食も食べ終わり、旅支度を整えてマルク統治院に行く。

忘れ物はないし、戸締りも完璧である。ちゃんとウーフアンの杖も持った。ローブの下には普段のインナーと違い、レッドダブレットが着こまれている。

統治院前にはまだウーフアンの姿は見えなかった。

入口の兵士にウーフアンが来たら中で待っていることを伝えてほしいと頼み、辺境伯がいるであろう執務室へと向かう。

ノックを形だけして、返事を待たずして中にイシユは入っていた。

……まあいいや。

「ああ、諸君か。予定より随分早いな。しっかりと休めたかね？」

中にいたのはいつものように辺境伯。

それと、

「気合充分と言ったところか。やはりそれくらいの気概がなければだな！」

「力み過ぎもどうかと思うけどな。ま、あんたが早く来たのはそういうわけじゃねえだろうけどよ」

むさ苦しい筋肉ことギルド長と、チンピラ風人相のカーゴ交易長が

並んでソファに座っていた。

「うん？ ウーファン殿はどうしたのだね？」

「後から来るだろう。時間までには間に合うはずだ」

「そうか。ならば構わないが……せっかく早く来てくれたのだ。今日の打ち合わせを少しでもしていたほうがいいだろう」

ギルド長も交易長もここにいるということは、この二人も今日は同行するということだろうか。

かけたまえ、とソファに勧められて先客二人の向かいにあるソファに腰かける。相変わらずのふかふかさ。

「帝国が指定した時と場所、そこに私が赴くこととなる。そこまでの移動、及び護衛としてニーズヘッグに依頼を頼みたい。ここまではいいかね？」

「問題ない。続けよ」

「領主相手でもあんたはその態度なんだな……」

「構わんよ」

交易長であるチンピラ……もといお兄さんはそういえばイシュと辺境伯の会話を見るのは初めてか。というかほとんどそうか。

こうして同じ場に揃うのは珍しいことなんだろう。

「指定された場所に赴く前に、一度金剛獣ノ岩窟、イクサビトの里へ行くつもりだ」

「俺のこの作業員を連れてな。立往生を喰らっちゃまった連中の回収だ」

「彼はその後、我々と共に来てもらう予定だ。我々の気球艇技術は本来、帝国の技術なのだろう。本場の技術を見て、少しでも吸収できればと思っただ」

「それに、話し合いの最中にまた気球艇をいじられたら困るからな。見張りも兼ねてだ」

交易長がこの場にいる理由を聞いて、私が思ったことはひとつ。

「交易長もイシュのこと言えない言葉遣いじゃありません……？」

「……ほっとけ」

「……ほん、と辺境伯が咳ばらいをした。ぐだりかけた流れを流すつも

りのようだ。

「ギルド長にもついてきてもらう。岩窟で冒険者の回収が済んだ後も、何割かはタルシスに帰還せずに絶界雲上域に向かうかもしれないからな。その者たちの指揮を頼みたい」

「ウム。相手は野盗や魔物とはわけが違う。勝手な暴走はさせんとも。だが……」

「ああ、彼らの動き方次第では荒事になるかもしれない。しかしその時は撤退を大前提としてほしい」

「承知した」

ギルド長も言葉遣いはたいがいではないか。

私以外みんなひどいものじゃないか。どうなっているんだ。

「さて……アルメリア君、イシユ。ギルド長にも言った通り、最悪の場合は撤退を大前提として護衛を頼むこととなる」

「巫女を取り返し、撤退すればよいのだな」

「……巫女殿がその場にいれば、それが一番望ましい。だが話し合いの場に巫女殿がいるとは限らない」

「ならば奴らを追い詰めるまでだ」

撤退とはいったい。

「我にはそれをするだけの力がある。気球艇同士の争いでなければ、我に勝てる者はそういない」

自信満々の発言。実際そばで見ているその力をよく知っている身としても、嘘ではないとわかっている。ギルド長などもイシユの戦う姿は見たことないはずだけど、実績があるのは知っているのだ。

しかし、

「向こうにはワールウィンドさんがいるんですよね……」

「それがどうしたというのだ」

イシユは認める気はないだろうけど、ワールウィンドさんはイシユと互角に近い実力の持ち主だ。二人が最初に会った時の戦いではワールウィンドさんの方が優勢であったくらいだ。イシユは腕飛ばしというトンデモ攻撃で無理やり勝ちを奪ったけども。

しかし今はすでに手のうちがバレている。奇襲は通じないだろう。

「あのオッサンか……」

交易長が難しい顔をしながら言葉を漏らす。

「タルシスの気球艇に武器を備え付けるのを一番反対したのはあのオッサンだった。理由はサイズの問題だのコストの問題だのと並べられたけどよ。思えば、自分の都合が良い部分だけを教えてたんだろ
うな……」

「この街に来た時から……始めから、ワシらを出し抜くつもりだったか。いずれ敵対することを見越して気球艇の技術を絞る。抜け目のないことだ」

「……あんた、あのオッサンに戦うところを見られたりとか、あるか？」

見られるどころか一緒に戦ったりなどもあつたりするけども。それどころか手合わせとか言つて朝から人の家の庭先で戦っていたり……

「何度か戦った。どれも我の勝利だったが」

あの時の手合わせは、あらかじめイシュの力を計り直すつもりだったということだろう。腕飛ばしに警戒したとき、どういった動きを見せるのか、把握するために。

「てことは、完全に手のうちはバレてるわな……あのオッサン、10年前から計画してたんだ。障害となりえそうな相手はしつかりチェックしてるはずだぜ」

「……イシュ、もしもの場合はやはり撤退を念頭に入れておいてくれ」

辺境伯は改めてイシュに頼むように言った。

「小細工を弄しようと、我の力に対抗できるとは考えづらいが」

「それでも、だ。何度か君と戦ったということはそれだけ警戒している。もしも君を失うことになれば、一方的な展開がありえるのだよ」

「ふむ……状況次第だな」

実際に一番警戒を向けられるのはイシュだろう。ここ最近の世界樹への道に大きく貢献した存在でなおかつ、古代の知識を持つ人物。さらには力もある。そして常識がない。

考えてみるとほんとに動きが読みづらい厄介な人物だ。

「辺境伯よ。ワシらにとってはお前さんも失うことは避けたい。それはわかってくれているな？」

「もちろんだとも。だが一つ訂正をさせてもらえるならば、誰も失ってはならないと言ったところだよ。それはこの場にいる者だけではない」

扉がノックされ、部屋の外から兵士の声が聞こえてきた。

ウーファンが来たことと、気球艇の準備ができたと伝えにきたようだ。

「さて、では行こうか諸君！ 帝国と手を取りあう可能性を捨てないためにも」

44. 南の聖堂にて卓囲む

空を飛ぶノアの前にも後ろにも、気球艇が並んでいる。

金剛獣ノ岩窟までは大所帯の空の旅である。どこかの気球艇にギルド長がいるのだろうか。

ちなみにノアには交易長と辺境伯が乗っている。

「結構安定した飛び方じゃねえか」

「当然だ。私の腕にかかればこのレベルの気球艇など、玩具に等しい」

と、操舵しているイシュと楽し気な交易長。

「アルメリア君、困ったことにマルゲリータがもよおしたようで……トイレはどこだろうか？」

「え、ええ……そんなの備えてませんよ!？」

「なんと……」

「なんとか耐えさせてください!」

こんな時でも犬を連れてきた辺境伯と、落ち着きがない状態のマルゲリータちゃん。

「……何故こうも緊張感がないのだ」

「イシュー! マルゲリータちゃんがー!!」

「あ! 辺境伯! いくらあんたの犬でも気球艇になんてことしてんだ!」

「す、すまない……」

「本当にこいつらは……なんともやかましい……」

新しい杖に慣れるためにと一人瞑想をしていたウーフアンが、心底面倒くさそうにつぶやいた。

マルゲリータちゃんの排泄物は掃除用の雑巾と汚れた布で包むこととなった。

「なんとも気の抜けた話であるな……」

金剛獸ノ岩窟でキバガミさんと合流後、彼が放った第一声がこれである。

ゴンドラから漂う臭気について説明したらこれである。

「締まりのない話で申し訳ない。あなたがイクサビトの代表、キバガミ殿ですね？」

「いかにも。拙者はキバガミ。イクサビトを率いる者なり。お主は、見たところ冒険者とはまた違った身なりのようだが……貴殿が人間の長、辺境伯殿か」

随分とご機嫌なマルゲリータちゃんを横目に辺境伯とキバガミさんが挨拶を交わした。

「はい。あなたの里については彼らから聞いております」

「我らは巫女殿に恩がある身、イクサビトは巫女殿のためにも貴殿らに協力を申し出たい」

「ありがたい申し出……感謝いたします」

少し前までのゴタゴタが嘘のように真面目な雰囲気二人話し合っている。そのまま今日の話し合いでの動きについてキバガミさんを交えて改めて打ち合わせを開始した。

もつとも、私たちにとっては出発前に聞いた内容と一緒に。キバガミさんへの説明が大部分の意味を占めた話である。

「では、拙者もイシユ殿たちと共に護衛としていつでも構わぬだろうか」

「大人数にならなければ恐らくは可能だと思し、私は構わないのだが……イシユ、君はどう考えるかね？」

「……誰がいようと変わらぬ。ゆえにいろいろがいまいが、どちらでも構わぬ」

少し返答に間があったが、いつも通りの答えである。以前キバガミさんと何かあったようだから反対するかもと少しだけ思ったけど。

「おーい、そろそろ谷を抜けるぜ！」

操舵していた交易長が少しテンション高めで言った。

状況が緊迫していても、新天地というのは人を惑わせるものなのかもしれない。あの人なんか浮かれてそうで不安だわ。

前回見た時は三隻の軍艦がお出迎えしていた世界樹の麓の大地。

今回は一隻だけが砲口を向けてのお出迎えである。

【辺境伯はおられるか。疑うわけではないが、念のため甲板にお姿を見せてもらいたい】

指示通りに辺境伯が甲板へと、軍艦から見えやすい位置に立った。

【……確かに辺境伯の特徴と一致しているな。ではここより東にある建物に向かってくれ。そこで我らの主が貴殿に説明される】

「変な動きをしたら撃ち落とすって感じだな……」

「今は従う他あるまい……」

東には年季の入った建築物があった。隣には軍艦が一隻着陸している。その上空にはまたも黒い軍艦。

「それじゃあ着けるぜ……辺境伯、気合入れていけよ。ニーズヘッグは変なことしすぎんなよ」

「任せたまえ」

交易長と辺境伯がキリつとした雰囲気できり取りしている中、キバガミさんが何とも言えない表情で私に声をかけてきた。

「……ニーズヘッグというのはお主らのことだな？ お主ら、日ごろ

から妙なことをしているのか？」

「キバガミさんも今は私たちと同じ変人の仲間入りですね」

「なんと……」

シウアン奪還の間だけだろうけどもキバガミさんも仲間入りである。

メンバーは常識のない高圧的イシユ、高慢なウーファン、平凡な火の印術師の私、ちゃっかりものな世界樹の巫女シウアン、そして脳筋っぽいキバガミさんだ。

私が気絶しているときに起こそうしたあの馬鹿力は忘れてなどいないのだ。

話し合いの場の建物は所々風化しているようだが、崩れる雰囲気は微塵も感じさせない。手入れが行われているようには見えないが、こういうのも歴史的建造物というのだろうか。

建物の入口には青銅の全身鎧の兵士がいた。

その背中には見たことのない大きな剣がある。

「タルシスの代表者、辺境伯ですね。お連れの方々もどうぞ中に」

そう言つて扉を開けた。中は多くの本棚が並べられているのが見えた。ここは図書館だったのかもしれない。

「俺は留守番だ。いつでもノアは飛べるようにしとく」

「わかりました」

交易長の発言を聞いても兵士は特に動かない。

目の前でこのやり取りつて不味いんじゃないかと思つたけど、気に留めるほどじゃないと思つたのだらうか。それだけ話し合いが決裂しないと確信できているのか、微々たる抵抗とでも思っているのか。

「ここは、図書館のような施設に見えるが……」

辺境伯の感想に答えたのは入口の兵士ではなく、私たちでもなく――

「ここはかつて学び舎だったそうだ。もつとも、帝国が建国するより

もさらに前の時代の話だ」

黒い鎧に身を包み、背中には大きな剣、いつもは何の手入れもされてないような白髪の手髪は、今は整髪剤でオールバックに整えられていた。

だけど、口元には変わらず無精髭が生えていた。

ああ、もう。

いつものヘラヘラした雰囲気はどこにいったのだ。親しみやすいだらしなさはどうしちやつたのだ。

「ワールウインド、貴様……！！ シウアンを返せ！！」

「ウーフアン止まって！ 今は落ち着いて！」

私も言い寄りたい気持ちがあったけど、その前にウーフアンが暴れだしたおかげでなんとか堪えられた。

暴れるウーフアンを私とキバガミさんで抑える。キバガミさんの常識人ポイントアップである。

「ワールウインド……」

「辺境伯殿、こうして会合の場に足を運んでいただき感謝します」

「……らしくないじゃないか。いつもの君ならそんな形式張った挨拶などせずに——」

「余の騎士ローゲルは、その姿こそが本来のものである」

聞きなれない声が間に入ってきた。

その声は、この場にそぐわないと思えるような少年の声だった。

「よくぞ参られた、辺境伯。余はバルドゥール。皇帝アルフォズルの長子、皇帝の代理人である」

ワールウインドさんや他の兵士と似たような鎧を身につけた少年

は凜とした佇まいのまま話す。

皇帝の長子、ということとは皇子。

整えられた白髪の一部が栗色になっており、若々しきを感じる大きな瞳。見たところ、歳は多く見積もっても10代後半といったところか。その若さで皇帝の代理人を名乗るとは。

「貴公ら人間の同胞と再会できたこと……帝国の代表として、心より嬉しく思う」

「前置きはいい。巫女はどこだ」

「……貴公は？ いや、貴公がイシユか。ローゲルから話は聞いている。古代の人間だと」

「我が問いに答えよ。巫女はどこだ」

イシユの態度に入口の兵士とワールウィンドさんが剣に手を掛けたのが見えた。

それらを抑えるように皇子は手のひらを向けて言った。

「よい、手を出すな。巫女はここにはいない。別の場所にて来賓として扱わせてもらっている。無下な扱いはしていないことを約束しよう」

「イシユ、抑えたまえ。我々は争いに来たわけではないのだ」

「正式な話は奥で行いたい。辺境伯よ、こちらに」

「我にもその話を聞かせよ」

イシユの言葉に僅かに沈黙が流れた。

いくらよその国とはいえ、皇子相手にあの物言いはそう滅多にないのだろう。だけど今はあの物怖じのしなさは本当に頼りになる。向こうのペースにならずに済むのだ。

「イシユ、殿下の——」

「よい、ローゲル。許可しよう。だが多く交えて話をするつもりはな

い。よってそのイクサビトとウロビトは待っていてもらいたい」

どうやら辺境伯から引き離されずに済みそうだ。

だけどウーファンとキバガミさんは留守番。キバガミさんはあの見た目から、どう見ても武闘派という感じがわかるからそばにいてほしくないとしても、ウーファンは……まあ興奮しっぱなしだし話し合いの場においても騒ぐだけになりかねないからだろうか。

「ローゲル、お前も会合の場に。よいか、辺境伯よ」

「ええ、構いませんとも。それとマルゲリータも連れても?」

「う、うむ。ではついて参れ」

マルゲリータちゃんに少し戸惑った様子を見せたが快諾してもらえた。そのまま彼は奥の部屋へと向かった。

その後が続くようにワールウィンドさんが、そして辺境伯とイシユが進む。

「アルメリア」

「はい?」

私も行こうとしたらウーファンに呼び止められた。

「幽谷でのことを覚えているか」

「は、はい? まあ忘れようがないですけど」

「私たちは外で待っている。必要なときは同じことをしろ」

そう言っつて小さな物を渡してきた。周りに見えないように。

「……これ」

何か言う前に扉に向かって押される。

これ以上話すことはないということだろう。それと同時に入口が開き、外から全身鎧の兵士が何人も入ってきた。

「私はキバガミとともにここで用意して待っている。わかったな」

「……はい」

「拙者には何が何かわからんのだが」

「貴様は私を守れ」

キバガミさんだけ置いてけぼりだけど、説明している暇はない。あとはウーフアンに任せよう。私は締め出される前にと奥へと向かった。

奥の部屋の景観は先ほどと全く変わっていないと言ってもいい。部屋の中央に大机があり、それがなければ壁のように並んでいる本棚である。

ちよつと本が多すぎではないだろうか。学び舎というよりやつぱり図書館だ。

どうやらみなさん待っていたらしく、まだ話は始まっていないようだった。

皇子を待たせた一庶民って結構やばい。

「さて、まずは改めて紹介しておこう。余の忠臣たる騎士ローゲルだ」「はっ」

紹介を受けたワールウインドさん、いや、ローゲルさんだろうか。本当の名前は。

「ローゲルは10年前、皇帝アルフォズルと共に結界越えを行った。そしてタルシスにて名を変え、使命を果たしてくれた」

「……いくつか質問をしてもよろしいでしょうか？」
「構わない。貴公の問いに答えよう」

「ワールウインド……いえ、ローゲルの使命とは何か聞かせてほしいのです」

「ローゲル」

辺境伯の問いに対して、そばに控えていたワールウ……ローゲルさんに答えるように示した。

「課せられた使命、それは世界樹の起動に必要な三つのアイテムを見つけて出すこと」

世界樹、三つのアイテム。

真つ先に浮かんだのはイクサビトから聞かされた伝承。その中の巨人の不死の象徴である三つのアイテムだった。

巨人の心臓と心、それと冠。

心臓はシウアンが持っていた。心はおそらくシウアンのこと。冠は……なんだろ。

三つのアイテムについて聞く前に、ひどく冷たい声が聞こえた。

「愚かな……世界樹の起動だと？ 汝ら、何を考えている」

千年前にも世界樹の起動を目にしたイシユだ。

祖国が世界樹に吞まれていくのを見たと言ったイシユは、その恐ろしさを深く知っているのだろう。

「帝国は荒れ果てた大地にある。作物はまともにも育たず、周囲は魔物も多く存在する地だ。さらには世界樹の呪いの影響も少なくない。それらを打開するためには世界樹の力が必要だった」

「世界樹の力があれば確かに荒れた大地であろうと緑は生まれよう。だがその緑は汝らの国をも……いや、この大陸すらも塗りつぶすものだ。全てを巻き込み自ら滅ぶつもりか」

イシユとローゲルさんがにらみ合う中、補足するように皇子も口を挟みだした。

「千年前から存在する古代の者よ。貴公の言い分は余もわかっている。だがそれは、世界樹が暴走すればの話」

「汝らごときが、世界樹を制御できるとでも言うのか」

「できる。そのために我ら帝国はあらゆる努力を重ねてきたのだ」

「思い上がりを——！」

「イシユ！ 抑えたまえ！」 「落ち着いてイシユ！」

「っ……………糧になりえぬだろうが、続きを話せ」

席を立ちかけたが、ぎりぎり思いとどまってくれたようだ。

腕を組み話を聞く姿勢を見せた。

それを見て、同じく席を立てて武器を抜きかけたローゲルさんも座り直し、説明をしだした。

「世界樹の起動には三つのアイテムが必要だ。それはウロビトが守る巨人の心たる世界樹の巫女、イクサビトが祀る巨人の心臓。そして、タルシスに受け継がれていた巨人の冠」

タルシスに冠があるなんて聞いてない。

確認するように辺境伯を見たら、なんか「あつ……………」って感じの顔である。ものすごい心当たりありそうな顔である。

「へ、辺境伯……………」

「う、うむ……………家宝として硝子細工の冠があつて、気球艇の進展の功績としてワールウインドに渡したことがあるな……………」

「だ、大事なモノなのに!?!」

「し、知らなかったとはいえ、すまない……………」

マルゲリータちゃんが辺境伯の腕元を蹴って私の胸へと跳び込んだ。なにかと思つたら顔をやたらとペロペロと舐められた。

普段そんなことしないくせに、可愛さで主人を守ろうというのかこ

の子は。

「ま、マルゲリータちゃん、やめなさい！ やめなさい！」

「アルメリア君から離れなさいマルゲリータ！」

「くくっ……」

ぐだぐだ雰囲気を纏いつつあった私たちの耳に、ワールウインドさんの頃のような、聞きなれた雰囲気の笑い声が入ってきた。

「……殿下の前で失礼しました。辺境伯とその付き人よ、話を戻しても構わないだろうか」

だけどその雰囲気も一瞬で霧散し、帝国騎士としての顔が戻る。

「世界樹の起動。それ自体は巨人の心臓だけでも可能だ。心と冠、この二つは巨人の制御に使われる。巨人の冠を携えた者の言葉を、心が聖なる言葉に置き換え世界樹へと囁くことによつて制御が可能となる」

「……イシュ、私は世界樹について君ほど詳しくない。今の話は事実だろうか」

「この地の世界樹は制御に力を注がれていた。ゆえにある程度は事実だろう。だが……」

私たちの中で一番世界樹に詳しいのはイシュだ。

イシュもこの地の世界樹については特別詳しいわけではないにしても、一番参考になる人物。

そのイシュが、今の話に異を唱えた。

「この地の世界樹は一度暴走している。各種族に伝えられた伝承がそれを物語っているのではないか。伝承では、心臓、心、冠を揃えて起動したのだろう。にもかかわらず聖樹の護りとやらが起きたのだ。その点はどう説明するつもりだ」

「それは……」

ローゲルさんが言い淀んだ。

反論ができないこと。つまり、世界樹の起動はやはり危険ということだ。

「その点も問題ない」

言い淀むローゲルさんに代わり、皇子が言った。

その場しのぎのような、迷いのある言い方ではない。確固たる自信を持つての物言いだった。

「殿下……」

「ローゲル。お前がいなかった10年の間、計画を洗い直した。ここからは余が説明しよう」

「はっ」

暴走の問題をローゲルさんがいない間の10年で解決したということだろうか。素直に凄いと思う。

イシユの方をちらりと盗み見る。無表情に腕を組んでいるため、何を考えているかよくわからない。怒っていないか不安だったけどさっぱりだ。

「世界樹……巨人の制御というのは向かう先を決めれる程度のものである。行き先を聞かせるために、冠を携えた者は巨人のそばにいる必要がある。しかし巨人は呪いを振り撒く。冠を持つ者も例外なく、呪いを受けて草木と変わる。冠は巨人に回収され、制御できる者がいなくなり暴走したのが伝承の正体だ」

説明を受けて、辺境伯が言葉をあげる。

「……では、指示を出してはすぐに距離を取り、接触を最低限に抑えれば良いと?」

「馬鹿らしい。大地を浄化するために起動するとなれば、呪いの力は最大限に発揮される。距離をとる前に辺り一帯を植物へと変えるだろう」

「イ、イシユ。言葉をもっと優しく……!」

これはイライラしてそうだ。最初に愚弄する言葉が出てきたあたりが特に。

冠を持つものは巨人のそばにいないと言葉を聞かせれない。そばにいれば呪いを受ける。

草木となる前までは制御できても、草木に変貌すれば制御を失う。距離をとる前に草木に変えられるということは、よくて数分?

たった数分は制御できるなんて、制御と言えるものなのだろうかそれは。

しかし皇子の話はまだ終わっていない。

「冠を携えた者の死は世界樹の暴走に繋がる。冠には長く生きてもらわねばならない。そのために、ウロビトとイクサビトの力を用いる」
「……? 彼らの力で何が変わるのですか?」

「ウロビトの扱う結果は呪いに抵抗できるものだ。伝承で巨人に立ち向かえたのもウロビトの力あつてのもの。そしてイクサビト。彼らは強靱な肉体、そのため生命力も強い。その肉体をウロビトの術によつて守る。冠を持たせてな」

「ふむ……かなり危険ではあるが、呪いを受けたとしても完全な草木と変えられなければ、後に巫女殿に治してもらうことが可能、か」

辺境伯の言葉。

それを否定したのはイシユではなく皇子だった。

「それは無理だ。世界樹の巫女は巨人に取り込まれることとなる。ゆ

えに呪いを治す手段はない。彼らはすべてが終わり次第、呪いが広まる前に処分する。その前に結界が持たずに草木と成り果てるとは思うが」

——なにそれ

「殿下、何を——」

「ふざけるな!!」

辺境伯の怒号が部屋に響く。

荒れる辺境伯に対し、皇子はまるで言い聞かせるように言った。

「辺境伯よ、ウロビトもイクサビトも、我ら人間の祖が人間の手助けとなるように創りし種族。ならば我らのために犠牲になってもらうのも、彼らの役割であるぞ」

「犠牲になる役割などあるはずがない！ あつてなるものか！ 彼らは私たち人間と変わらない。家族がいる。仲間がいる。私たちと同じくこの地に生きているのだ！」

「タルシスは今でこそ豊かな地なのだろう。だがいずれ帝国と同じく荒れた大地となるだろう。そうなる前に、我らが手を取り合わさず何とする？ 理想郷を作るためにも貴公には理解してもらいたい」

「私には理解などできない……屍の上に築く理想郷にどんな価値がある！」

皇子は辺境伯の様子から説得は無理と判断したのか、ため息を小さくつきながら言った。

「貴公にはより詳しい説明が必要と見える……ローゲル、辺境伯をお引き留めしろ。護衛の判断は任せる」

「……はっ」

一瞬だけローゲルさんが戸惑った気がした。だけどすぐさま席を立ち、背中の大剣を素早き抜き放った。

その斬撃の先にいるのは、

「剣とは言い難いものだな。このような粗末なもので、我を倒せるとても思ったか」

イシユは迫り来る大剣を右腕で受け止めた。

……いや、そこは剣で受け止めてほしかった。

「……君の腕は切り離しが可能だったか」

「それがどうした。だからといって、重量に任せた剣で我の腕を断つことなどできん」

「少し試してみるか」

ローゲルさんの剣から、低く響く駆動音が鳴りだす。

その刀身は震えだし、熱を持ちだしたのか変色しだした。

「辺境伯、こつちに！ イシユ！ 剣から術式が！ 離れて!!」

術式が漏れ出ていた。道具に術式を込める方法もある。起動符にあたるものがそれだ。並大抵な術式ならイシユに対して効果はない。

そのことを、ローゲルさんは知っている。にもかかわらず術式を起動するということは――

危険な予感がしたので辺境伯を二人から遠ざける。いつの間にか皇子は部屋から出ていったようだ。

離れて、という言葉聞き入れてくれたのか、イシユがローゲルさんを蹴りつけた。それと同時に駆動音が一気に高くなり――

「ぐっ……！」

「ひよあつー！」

——轟音のような粉碎音が部屋中を響き渡った。

立ち上がる土埃によつて、よく見えないが人影が二つ。硬質的な音を立てているということは、戦っている。

「いつものように余裕ぶつて受けないとはな……」

「つけあがるな！」

土埃が晴れた先に見えた姿は今までに見たことのないものだった。

ローゲルさんの剣は高温を帯びたように赤熱していた。

一方でイシユの右腕は繋がっている。繋がってはいるが、その中身が完全に露出していた。

——肉を抉られた。

銀色の骨のようなものだけで体と辛うじて繋がっているが、まとも機能していないのか右腕は使わず左手のみで応戦している。

「イシユ！ 撤退しましょう!!」

「殿下の命令だ。逃がしはしない！」

「汝ごときが、我を止めれるものか！」

ダメだ、イシユが暴走気味というものもあるけど、撤退の余裕がなさそうである。

イシユの手助けをと思い印術を起動しようとして、ウーファンから渡された物を思いだした。

『私はキバガミとともにここで用意して待っている。わかつたな』

きつとそういう意図なのだろう。

用意は済んでいるはずだ。時間はかなりあったはずだし、大丈夫。これで違う意図だったら全力で文句を言ってやる。そう心の中で

眩きながら思いつきり息を吸って

——渡された白い笛を全力で吹いた。

「アルメリア君!」

突然の私の奇行に反応したのは辺境伯だけだ。戦っている二人は余裕がないようである。

辺境伯が何かを言う前に、地面が白く輝きだす。合図に応えた証。

「これは……! くそっ!!」

地面の異変に気づいたローゲルさんは跳びはねるように退き、地面に足をつける前に剣を床に突き刺し、それを足場にした。

「この部屋にまで届く方陣を準備していたとはな……」

足蹴にしている剣をいじりながら忌々しそうに方陣を見るローゲルさん。

まさか封じるの失敗したとかだろうか。ウーファン何やってんの。だけど地に足つけなければきつと封じる、はず……。方陣を知られていたらからいち早く反応されたのだろう。

足場が制限されたローゲルさんは迫るイシユの攻撃を凌げない。

攻撃が当たる前に足の剣を蹴り、今度は本棚へと飛び移る。猿か。

「さすがに分が悪い。悔しいがここは引かせてもらう」

「汝の言葉を返すでしょう。逃がしはしない、とな」

「いいや、逃げるさ」

地面に足をつけずに逃げれるとは思えない。

だけど妙に自信がある姿が嫌な予感をまたも誘わせる。

途端にまた聞こえてきた駆動音。

あの剣はローゲルさんの手元にはない。イシユのそばだ。
またも刀身は振動しながら発光し、術式が起動している。手元から
離れても爆発する——？

「イシユ！ そこから離れて!!」

「——むっ!?!」

「次に会う時は容赦しない」

先と比べ、より強大な爆発音。

しばらく耳鳴りが続き、ようやく落ち着いたところにはローゲルさん
の姿はなかった。

「イシユ！」

代わりにあったのは、爆発の被害を最も受けたイシユの——

「……………服、脱げたんですね」

見事な裸だった。

背中が抉れているが、前は無事だ。だけど服は完全に吹き飛ばさ
れ、そりやもう裸だった。

ていうか本当に人間にしか見えないけど、機械の体なんだよね。抉
られた箇所見なかったら裸の少女だよ。

「武器を暴発させるとは……………」

「イシユ、大丈夫なのか？ その傷は……………」

「数時間もすれば再生する。それまで少し動きが阻害されるが問題な
い」

出鱈目再生力である。

少し落ち着いたが、部屋の外からは怒号が聞こえてくる。

ウーファンとキバガミさんが戦っているのかもしれない。そっちにも向かわなきや。

扉を開けた先には――

方陣によって身動きが取れなくなった帝国兵を申し訳なさそうに一人ずつ気絶させていくキバガミさんと、方陣に集中しているウーファン。

身動きが取れない状態でせめてもと、卑怯者―とのしり精神的ダメージを与えようとしている帝国兵たちだった。

「お主ら、無事か。すぐにノアに戻ろうぞ！　なんというか、心痛む戦いで辛かったのだ」

「やつと戻ってきたか。ここにシウアンはいない。ならばこんなところに用はない」

「あ、うん……そつすね」

こうして、会合は終わりを迎えたのだった。

シウアンは取り戻せないまま、決裂という形。

一方的な展開をして申し訳なさげなキバガミさんと、不機嫌そうなウーファン、裸のイシュ。私と辺境伯という奇妙な心境と状況のままノアへと戻り、ひとまずイクサビトの里まで戻ることとした。

45. 帝国の野望を挫け

「その様子だと、展開は悪い方向に転がったようだな……」

金剛獣ノ岩窟、イクサビトの里まで戻った私たちを見たギルド長の言葉である。

あの時のウーフアンの方陣は部屋だけでなく、気球艇にまで届くほどに広げられていた。そのためノアに対して攻撃は受けていない。空に待機していた軍艦は皇子とローゲルさんに乗せて北へと行つたとは交易長の談だ。

「彼らの提案した意見は到底受け入れがたいものだった」

辺境伯は会合であつた話について、その場になかったギルド長と交易長、キバガミさんとウーフアンに説明します。

その間に私はイシュの服をどうにかしよう。体の再生はできても服はできないだろうし。

イクサビトの寝所を貸してもらい、イシュにはそこで横になつてもらおう。

「一応確認ですけど、服は再生しませんよね？」

「うむ」

堂々とした返事である。

服など不要だ、とか言つてごねてこなくてよかった。そこに羞恥心も付け加えてくれたら完璧である。

イクサビトも鎧とか服を着ているし、余つた布や服を譲つてもらえたらいいんだけど。あ、キバガミさんに頼もう。話が終わつたら頼もう。

いかん、やる事がなくなった。

「……イシュ」

「なんだ」

「彼らの言ってた計画、イシュはどう思いますか？」

会合での話は辺境伯たちが今やっている。

その話に参加すればいいのだが、その前にイシュの意見を聞いておきたく思えた。

シウアンとウロビト、イクサビトの犠牲を前提とした世界樹の起動計画。

「馬鹿げた計画だ」

はつきりと示された否定の意見にほつとする。

あの皇子はウロビトとイクサビトは人間のために創られた種族と言った。それに賛同してしまうんじゃないか、という不安があったのだ。

「あの者たちは世界樹に幻想を抱き過ぎている。アレは厄災だ。自ら厄災を起こすなど愚かにもほどがある」

……ウロビトとイクサビトを犠牲にするのが許せないから、という理由ではなさそうな反対の仕方がちよつと不安だ。

けど変にその点を尋ねて藪蛇となつては嫌だしそつとしておう。

「でももう計画は阻止できましたよね。伝えることができましたし」

あの会合から抜け出すことができたおかげで、ウロビトとイクサビトの各種族に計画を伝えた。だから帝国の計画が成就することはなくなった。

あとはシウアンを取り戻すだけだ。

「まだだ。世界樹の起動のカギとなる存在がまだ向こうの手の内にある」

「はい、辺境伯もこのままにはしないはずですよ」

「絶対に世界樹の起動を許してはならない。すぐにでもあの者どもに我が神罰を下してくれる」

「はい、もうちよつと寝ててくださいねー」

やる気がどんどんと満ちてきたのか、体を起こして動き出そうとするイシュを引き留める。まだ裸なんだから。服が手に入るまで待っていてほしい。裸で恰好をつけられてもダサイのだ。

「もう体は再生した」

「全裸だといくらイシュでもちよつと……かなりダサイですし」
「む……」

「今はここでゆつくりしてください。キバガミさんからイクサビトの余った鎧か服を譲ってもらえないか聞いてみますから」

辺境伯たちの話が終わるまで待つていようと思っただけど、こちらから出向くことにしよう。

ダサイという言葉は自尊心がちよつと傷ついたので、大人しくなっただけどもいつまで持つかわからない。

……そういえばキバガミさんも、辺境伯も交易長も、果てはギルド長もイシュの裸を見たわけだけど、何のリアクションもなかったのはいつたい……

ひよつとしてイシュは外見すら女の子扱いを受けていないのでは……深く考えるのはよそう。

キバガミさんを求めて里の広間に戻る。

広間では絶賛話し合い中だった。

「万が一辺境伯が捕らえられてたら、知らず知らずのうちにワシらは計画に協力させられていたかもしれない……」

「でもよ、辺境伯に計画を正直に話す理由なんてなくねえか？ 帝国の皇子がどっかのボンクラみてえに頭のネジが抜けてるって言うなら別だけだよ」

「計画が成された場合、犠牲になるのは我らイクサビトとウロボイト。騙されたという事実が今後の付き合いに響くと考えたからではないか？」

父さん、母さん。

真面目な話し合いの最中に服ください、と言いに行く度胸を私にください。

「もしもの話はそこまででいいだろう。シウアンは未だ奴らに捕らえられているのだ。シウアンを助け出すことに集中すべきはずだ」

「それもそうか」

お、話が切り替わるタイミングが訪れた。

ここを逃せば時間がかかる。今しかない！

「キバ——」

「ギルド長！ 偵察に行った方々が戻ってきました！」

「おお、そうか。全員無事だったか？」

「ええ、大丈夫そうでしたよ」

ああつと!!

元気のいい兵士に私の言葉はかき消されてしまった。

偵察つてなにさ服より大事なのかそれは。

普通に大事そうだ。

「偵察？ ギルド長、何かしていたのかね？」

「ウム。辺境伯らの会合の結果を待つだけではと思つてな。絶界雲上域の地理を調べさせていた」

そこで広間に何組か団体が戻ってきた。

見知った顔ばかりなのは、金剛獣ノ岩窟で足止めを食らった仲だからだろうか。

「お前たち、全員無事だな。良く戻ってきた！」

「ええ、気球艇も問題なく飛べたよ」

「帝国の軍艦が飛んでいて一部調べることができなかった。わかった範囲内はこの地図に」

ウイラフさんとキルヨネンさんが地図をギルド長に渡した。

キルヨネンさんが書いた地図はちよつと見てみたい。優雅な人の書く地図なのだ。きつと上品で綺麗な地図に違いない。地図書きとしては参考にしたい。

ちよつとした好奇心と使命感に駆られ、さりげなくギルド長の斜め後ろに移動する。

広げられた地図は想像と違うものだった。

「ウイラフさんの地図？」

「え？ あ、うん。そうだけど、どうしたのアルメリア？」

「いや、ちよつとがっかりしちやっただけで……気にしないでください」

「……気になる反応をありがとうね」

ウイラフさんの地図は雑ってわけじゃないんだけど、色合いとか線の太さとかかがちよつと私と合わないのだ。キルヨネンさんの地図が見たかった……

「ふむ……水道橋に囲まれた場所が白紙だが、ここに軍艦がおったのか？」

「はい。最初は二隻だけでしたが、途中から会合場所から二隻合流しました。計四隻の軍艦が東西南北を見張るように飛んでいます」

「途中誰かそこで降ろしてたから、その中で何かしているのかも」

なんとというかそれは、

「あからさまだな……」

大事ですと言わんばかりの配置。

補足するようにキルヨネンさんが説明を続ける。

「それ以外の建築物は南東に一つ、西に一つ。それぞれ会合場所と似たような建物だった。そこは放置しているのか軍艦も帝国兵の姿もなかったよ」

「ふむ……む？ 北東についている印はなんだ？」

「それは……」

「あー、それよくわからなかったんだよね」

言いよどむキルヨネンさんに代わり、今度はウイラフさんが答えた。

「なんだか魔法陣みたいな変な絵があつてね、その中央に石像が置いてあつてさ。何かあるとは思っただけどよくわかんなくて、とりあえず書いておいたってわけ」

地図に書いてあるメモには『翼のある石像、竜？』と自信なさげに書いてある。

「竜の石像、ですか」

「私は見たことない形のね」

竜殺しの家系のウィラフさんが知らない竜の形の石像。気にはなる。

気にはなるけど、

「状況が状況でなかったら調べたいものだな……となると、目ぼしい所はやはり水道橋の中央か」

辺境伯の言う通り、この状況じゃ調べるのは後回しだ。

「相手さんは皇子自ら出てきてるつてことは、護衛は必須だよな。あからさまでも本命なんじゃないか?」

「ウム。それに罠であろうと挑むしかあるまい。こうしている間にも巫女殿がどのような目にあっているか……」

「……会合の結果、敵対したつて感じ? つてことは魔物相手じゃなくて国になるんだよね」

ウィラフさんとキルヨネンさんはそういえば状況を把握していなかった。だけど話の流れからわかったのだろう。頭を抱えながらぼやいた。

そんな彼女に声を掛けたのは辺境伯だ。

「いや、彼らと戦うつもりはない」

迷いのない断言。

その瞳は決意に燃えているかのようだ。

「彼らの生活圏は追い詰められているらしい。だからこそ、今回のような強硬手段に出たのだろう……」

「つても向こうはやる気満点だしな……ん? そういやなんでだ?」

「港長、何か気づいたのかね?」

頭を捻る交易長は何か引つ掛かったようだ。

問われて疑問に思ったことを口にしだした。

「こうして俺たちに計画がバレたんだ。もうウロビトもイクサビトも協力なんてするはずがないだろ? なのに向こうは見張るように軍艦を飛ばしてる。その理由がわからねえ」

「そんなもの、シウアンを手放したくないからだろう……」

「そりゃあんたの話だろ。他の理由として、呪いを解くためにならわかるけどよ、それなら警戒する理由もねえ。計画は諦めるから呪いの件だけは協力してほしいって頼めばいいだけだ」

一蹴されたウーファンは置いておいて、交易長の疑問。

向こうにはこちらのことを知っているローゲルさんがいる。呪いを解くためならこちらも協力するという予想は難しくはないはずだ。いくら計画が非人道的なものだったと露見したとはいえ、呪いに関してはまた別と考えるのが難しかったのか。

この疑問に対する答え、というか予想は、それまで静かだったキバガミさんから出てきた。

「……計画を実行するつもりなのかもしれん」

「む？　だがウロビトもイクサビトも協力はしないはずだが」

「自分たちだけでも計画を実行することはできるはずだ。地図を見たところ付近に人里はない。自国の民を巻き込まず、民の利益となるために自らを計画の礎とする。追いつめられているのであれば、拙者ならそうしていた……」

沈黙が訪れる。

10年タルシスで活動していたローゲルさんが強硬するほどということは、10年前から帝国はピンチだった。ずっと細々と生きながらえていたとすれば、愛国心が強ければ計画を行う可能性がある。彼らの気持ちの強さはここにいる誰もわからない。だから、誰も今の話を否定できない。

「……だが彼らだけでは制御ができない。自国を滅ぼしかねない行為だ」

「僅かな時間は制御が可能ならば、自国に被害がでないように、巨人の進行方向を示すだけでいいのだろう」

「……世界樹より南へ、最果てと呼ばれる地に巨人を進めれば帝国に被害はない、ということか」

わなわなと震えながら辺境伯自身が辿りついた結論は、あんまりなものだった。

しばらく目をつぶり、天井を仰ぎ見るようにしたあと、咳ばらいを一つ。

「彼らの目的がどうであれ、我々のやるべきことは変わらない。巫女殿の救出が最優先だ。それが彼らの計画の阻止にもつながる。重ねて言うが、彼らと戦う必要はない」

「戦う必要はないというが、お主の街にも被害を及ぼしかねないのだぞ」

「そうですね。だが彼らと争ったところで何も実らない。彼らの抱える問題、それを解決しない限り遺恨が続く。問題を解決するためにも手を取りあう必要があるはずだ」

「だが――」

「キバガミ殿。これがワシらの大将だ。髭面が似合うようになって心は青臭い輩でな」

ギルド長の発言に対して、辺境伯は見せつけるように髭を撫でながら笑った。

髭二人がちよつと濃いです。

「そんな青臭い輩だからこそ、ここまで来れたのだとワシは思う。であれば、ワシは辺境伯の理想に尽力するまで」

それに、と続ける。

「先を見据える力はこの男が一番だからな。ワシら武闘派は、難しいことを考えるのは性に合わん！」

「脳筋じゃ――」
「ご、ごめんって！」

ウイラフさんの野暮なつつこみが聞こえた気がしたけど気のせい

である。

咄嗟に頭を庇った姿を見るに、ゲンコツをよく喰らってそうだなとか思ってしまった。

「だが辺境伯よ、降りかかる火の粉を払う程度は許してもらえるな？」
「もちろんだとも」

返事を聞くやいなやギルド長は、ここは冷えていかん、と言いながら立ち上がり体を動かした。

「アルメリアよ、イシユを呼んできてくれんか？ あやつを交えて話
がしたい」

「あ、はい……ってそうだ。キバガミさん、余った服とか鎧ってあります？ イシユの着替えがなくて」

「あやつに恥じらいなどないだろう」

「そうかもですがギルド長もデリカシーを持つべきです！」

「そ、そうか。すまん……」

あんまりな言い様にデリカシーの欠如を怒鳴りながら指摘する。
ちなみにイシユとキバガミさん、交易長と辺境伯も含まれている指摘だ。

「服か。イクサビトのサイズだと合わんだろう。里の者に急ぎ準備させよう」

「ありがとうございます」

「なに、拙者はお主のギルドに所属させてもらっている身。気が効かなかったことに申し訳なく思うほどよ」

簡単な服でもできるまで時間がかかるだろうし、それまでは毛布で体を隠してもらおう。

やや私もデリカシー配慮が足りない気もしたが、時間がないのだけだ仕方がない。

「辺境伯と港長よ、お前たちはタルシスに戻れ」

「あん？ ……まあ俺がいたところで何もできねえか」

「いつまでもタルシスを空けているわけにもいかんだろう。ここはワシに任せよ。お前たちはタルシスに残された兵士や冒険者たちに正式な説明をしてやれ」

「……私は諸君に命令権を持っていない。ゆえに、今回の件もミツシヨンとして発令する。無事にことを終えたら、必ず報酬を受け取りに来るように」

周囲に言い聞かせるようにした後、辺境伯は何人かの兵士と交易長と共に去って行った。

ミツシヨン、ニーズヘッグが受けるのは熊騒動以来かもしれない。なんやかんやで協力したことによって報酬をもらったりはしたけど、正式に発令を受けたのは久しぶりというか二度目だ。

熊の時も命の危険があった。今回も当然ある。

しかし、必ず帰るように、という意味を込めた今回の発令。これもしっかりと応えなくてはならないものだろう。

小さな決意とともに握り拳を作り、ひとまずイシユを連れてくることにした。

結局裸ではないか、と文句を垂れるイシユには毛布で体を隠してもらいながら里の広間へと来てもらう。

「イシユを連れてきました!」

「おお、すまん。では作戦会議といこうか」

辺境伯と交易長がいなくなったとはいえ、結構な顔ぶれである。呼びにいつている間にも人が戻ってきたのか、人口密度が上がっている。

「端的に言おう。ワシらと帝国、正面切ってやり合うのは不可能だ」

ギルド長の消極的な言葉に対し、誰も動揺は見せなかった。

相手は軍艦。対してこちらは武装のない気球艇だ。近づく前に撃ち落とされるのが見えている。むしろここで正面からぶつかると

か言われたら逆に動揺する。

「そもそも争う必要がない。ワシらの狙いは一つのみ。巫女の救出だ」

辺境伯の希望は帝国とも手を取りあうこと。

帝国とだけではなく、すべての種族と、というレベルである。巫女の救出。ウロビトとイクサビトの無事。帝国との和解。欲張った目標だが、できてしまいそうなのは何故なのか。人柄か、偶然か。

とにかくそれらを達成するためにも、確実にやるべきことはシウアの救出だ。

「水道橋の中央にある建物を守るように帝国の軍艦が配置されている。巫女の居場所は其処のはずだ。奴らにとっての計画の要、重点的に守るだろう」

床に地図を広げ、上に軍艦と見立てた小石を四つ置いた。

全員に見やすいように大きい地図を新たに描いたのだろう。

……これ描いたの絶対ギルド長だ。なんでこんなに線からはみ出た地図ができちやうのだ。神経を疑う。

「建物の中はわからん。だが周辺には魔物の存在も確認しておる。ゆえに中は魔物も蔓延っているだろう」

空には軍艦、地上には魔物、内部は不明。

なんとも困難だらけな前提だ。

「軍艦の目を掻い潜り、内部へと侵入、内部の魔物や帝国兵とも渡り合う力が必要となる」

ギルド長は地図から目を離し、イシユへと、いや、私たちへと目を

向けた。

「ワシらは総力をあげてニーズヘッグを中へと送りこむ。今回の肝は、お前たちだ」

ニーズヘッグというギルドが立ちあげられて、まだ一ヶ月も経っていない。いわば新参ギルドだ。

この作戦会議の場にはもっと古くからの、熟練のギルドがいくつもあるというのに選ばれた。

しかし、反対の声はどこからもあがらなかった。

私自身は自信がないが、ギルドとしての自信はすぐくある。

イシユを筆頭に、方陣師のすごい人っぽいような気がするウーフアんと、イクサビトのリーダーキバガミさん。私はあれだ。火の印術が使える一般人だけだ。

「他の者は軍艦の気を引き付けることに専念してもらおう。ワールウインド……あの男が最も警戒していたギルドを奴らの懐に送るためにも頼むぞ」

それぞれが思い思いの返事を返す。

ある者は力強く任せろと胸を叩き、またある者は私たちに、自分たちの分だけ暴れ回ってこいと激励した。中にはワールウインドをぶん殴ってこいという過激な激励もあったほどだ。

気持ちが高揚してきたのかそのボリュームは膨れ上がっていく。正直うるさいレベルだ。

「落ち着かんか！ 今のはまだ方針だけだ。細かい打ち合わせをするから一度沈まれ馬鹿共！」

「細かい打ち合わせなど不要だ。我さえいればどうともなる。相手が誰であろうと、我の独壇場だ」

ギルド長のなだめる声もなんのその。それぞれ激しく盛り上がった。しまっていたが、イシユの言葉が聞こえた途端何故か静かになった。

冒険者の勘、というものだろうか。今の発言はヤバイという謎の勘が働いたようだ。かくいう私も今の発言はなんだか危険な気がした。具体的な根拠はない。勘である。

「作戦の続きをお願いします」

「ウム」

「だから私の独壇場だと……」

「イシユ、ここは念には念を入れましょう？」

この作戦の失敗なんて、あつてはならないものなのだ。
不安要素が勘というものであっても、極力排除はすべきである。

46. 警戒すべきは誰なのか

けたたましく叫びながら、白く長い剛腕を振り回す魔物の懐へと強く踏み込む。

そのままその白い猿の魔物、シロシヨウジヨウを砲剣で斬り捨てた。

世界樹から特に近い位置にある木偶ノ文庫は、魔物が多く巢食っている。

殿下の計画成就が近いというのに、魔物ごときに妨害されるわけにはいかない。

「お見事ですローゲル卿。ドライブを使わずにあのシロシヨウジヨウを討つとは……以前よりもはるかに腕を上げられたのではないのでしょうか」

そばで控えていた帝国兵が囁きたてるように褒め言葉を述べてくる。

腕をあげたのは、ここ一ヶ月ほどの間に気に食わない奴と手合わせを何度かしたからだ。

「……この程度で褒めるのはよしてほしい。それよりも守備はどうなっている」

「はっ。依然、タルシスの気球艇は近づいておりません。数刻ほど前に周辺を飛び回っていたようですが、こちらの防衛を見るや否や引っ込んだようです」

「外は今のところ問題ないか……中の門番たちは問題なく動いているのか？」

「それが……やはり古いためか敵味方の区別がつかないようでした

……」

「そうか。門番が配置されているフロアは空けておけ。それと魔物以外との交戦は控えるように。侮辱するつもりはないが、君たちの体では戦えない」

帝国兵の練度であれば、一介の冒険者相手に後れをとることはまずない。だがここにいる兵士のほとんどが訳アリの体だ。

……殿下には、辺境伯との会合が決裂することも想定範囲内だったということだろう。

「しかし本当に来るのでしょうか……彼我の差は歴然。よしんば飛行船から逃れて中に入ろうとも、魔物蔓延る木偶ノ文庫です。敵となりえるとは思えません……」

「相手はただの人間じゃない」

「イクサビトとウロビト、ですか。武に長けた種族と智に長けた種族。組めば恐ろしい敵でしょうが——」

「相手は千年前の人形だ」

「——は？」

千年前の人間が創り出した人間の形をしたもの。人形だ。

会合の時に砲剣のドライブと暴発で深手を負わせたが、規格外の化け物だ。恐らくはもうすでに治っていると考えたほうがいい。

奴に関しては常識で考えては駄目だ。首が飛ぼうとも斬りかかってくると見たほうがいい。

「最も警戒するべきは金髪の女みたいな剣士だ。声は男だが」

「なおのことわからないのですが？」

「言葉通りに聞いてほしい。警戒すべきは金髪の女剣士、そいつの乗っている気球艇はオレンジの球だ。その接近だけは絶対に阻止するように外の兵士にも伝えておいてくれ」

「了解しました」

考えれば考えるほど、あのギルドは危険だ。

千年前の人形イシュといい、方陣師の有力者ウーファン、会合時を見るにあのギルド所属となったのだろう、イクサビトの頭キバガミ。ウーファンの方陣によつて、南の聖堂ではほとんどの兵士が動けなかったらしい。あの時陣に捕まっていれば、自分は今こうしてここにいることはなかっただろう。

キバガミの実力はホムラミズチとの戦いで少しばかり見せてもらった。その戦闘技術から、単体での脅威で言えばイシュを上回るものだ。技をよく磨いた武。正攻法による攻略を得意とした者だ。

そしてイシュ。見た目にそぐわない怪力と常識に収まらない体。腕を飛ばす、足を切り離して飛ぶなどの予想外な行動によつてペースに乗せられれば最後。取り戻す間もなく破滅へと追いやられる。隠し種が他にないか調べるために手合わせをしたが、不明なままだ。あの性格は強がりなのか隠し種があつての自信なのか、判断がつかない。

一応アルメリアもあのギルドのメンバーではあるが……彼女は何故まだ冒険者をつづけるのかわからない。もう危険なこととはしなくてもいいのに。関わったからには何らかの力になりたいと思つて行動しているのだろうか。そういうところは本当に両親に似ている。

だが、彼女の實力は脅威となりえない。仮に火の印術をどれほど巧みに扱つても、間合いを詰めれば大火力は出せなくなる。

よつて警戒に足る相手ではない。

とはいえそれでも危険な相手が三人だ。

三人相手に立ちまわれる場所を確保するために、木偶ノ文庫の地下へと足を進めた。

木偶ノ文庫、地下三階。

ここに降り立ち階段のそばを陣取る。

方陣の警戒のためだ。

一度方陣に捕まれば、自由に動くことができずに敗北を喫する。だが深霧ノ幽谷でウーファンの方陣を見る限り、地脈というものを読むため少し時間が必要だということにはわかっている。

階層の変化により読んでいた地脈をリセットさせる。そのためにも戦いの場は階段のそばだ。

奴らの侵入は必ずここで食い止める。

もつとも、外の警戒を掻い潜って来ればの話だが。

以前、森の廃鉱で落としてしまった首飾りを取りだす。

その中には10年前の仲間達の小さな肖像画が入っている。だがそれを開けて中身を見ようとは思わない。

今開けてしまえば、仲間たちを深く思いだしてしまえば、どうなってしまうかわからない。

今回の計画が成った暁には帝国の領土が拡がることだろう。

資源は溢れ、作物にも困らず、まさに豊穡の神樹の恩恵を受けられることだろう。

その帝国の姿を拝む日が訪れることは、この作戦の参加者には来ないものだが。

殿下も死を覚悟されている。

臣下として、止めるべきなのだろう。だが自分にその資格があるのか、わからない。

10年だ。

10年の間に、罪を重ね過ぎた。

殿下の父君、アルフォズル陛下を守ることができずにこのうとうと生き延びた。

タルシスに辿りつき、過ごした10年。

許されないとわかっていながら、そこでの生活は決して悪いものではなかった。そんな心の驕りが、10年もの月日を経たせた。

死に物狂いでやれば10年も碧照で足踏みをするなどなかったのではないか。

現にイシユはタルシスに訪れて数日足らずで碧照の突破を果たした。方や俺は10年何も成果を上げられず。

その10年の間、殿下はどれほど苦しんでいたことか。帰ってこない父。

幼き皇子の力を疑う臣下。

政敵だらけの上層。

飢え苦しむ民の嘆き。

やせ細っていく帝国の大地。

それらすべてを、たったひとりで背負い、戦い続けてきた殿下だ。この10年、間違えてきた俺とは違う。

殿下の選択を否定できるはずがない。ならば俺は、殿下の剣となり、計画の邪魔をする者を排除する。

俺は、いや——俺たちは、殿下を信じてついていけばいいのだ。

静かに精神統一するかのごとく、目を瞑っていると階段から鎧が落ち合う音が聞こえる。

兵士が急ぎながら降りてきているのだろう。その慌て方からある程度の予測がついた。

「ローゲル卿！」

「……奴らが動いたか」

「は、はい。東西南北あらゆる方角から気球艇が現れました」

「オレンジの気球艇は？」

「まだ確認しておりません。どこかに隠れているのか……」

このままじっとしているとは思っていなかったが、とうとう動きだしたか。

現れたタイミングが一致していることからして、誰かしらが指揮を取っているのだろう。キバガミか、ギルド長か。辺境伯自らという可能性もあるか。

全方向から気球艇が出たということは一見我武者羅な作戦だが、すべてが本命を隠す陽動という可能性のほうが高い。

数刻前の偵察を考えれば大勢押し入るのは不可能と判断するはずだ。送りこめて一隻か二隻。

迷宮内部で継戦能力を誇るギルドでないと無理だろう。となると、街の兵士では荷が重い。

「……………駄目だな」

「はい？」

「いや、何度考えてもあのギルドが来る気がしてな…………」

「オレンジの気球艇、ですか？」

「ああ、俺の予想では本命はそれだ。他は陽動と考える」

欲を言えば、オレンジの気球艇は撃ち落とさずに捕らえたい。だがそれは難しいだろう。

10年守っていたアルメリアを撃ち落とすことになるが、殿下の目的のためやる必要がある。

いくら警戒したところで、崩れた水道橋に囲まれた地だ。死角は多い。

上で頑張ってくれている彼らには悪いがあまり期待はしていない。

中継の彼はまた階段をどたどたと走ることとなるだろう。彼の体のことや年齢のことを考えると酷なことだ。

そう思うやいなや、またも階段から聞こえてくる慌ただしい金具音と足音。

「ローゲル卿！」

「…………オレンジの気球艇に侵入されたか」

「金色です！ 趣味の悪い金色の気球艇に侵入されました！ オレンジの気球艇は近づいたと思えば逃げるばかりで…………！」

「金色？ そんな気球艇…………いや、そうか。俺としたことが単純なこと引つかかってしまったか…………」

俺が相手の情報を知っているということ、向こうも知っている。警戒を向けるのがオレンジ色の気球艇だと知られて当然だ。ならばオレンジ色の気球艇を逆に陽動に使えばいい。本命は乗っている奴らなのだから。

「外の奴らには引き続き警戒を。これ以上の侵入を許すな。侵入した奴らは放っておけ。魔物か門番が排除するだろう。それで止まらなければ、俺がここで迎え討つ」

「はっー！」

「あとそれから、以降はここまで報告に来なくていい。君も大変だろう？ 敵はすべてここで止めるさ」

中継の兵士は鎧で隠しているが、その両腕はもう使えなくなっているのだろう。ずつと腕が固定されている。その鎧の中はもう、

「……いえ、もうまともに戦えない身ですが、足は動きます。兵士として、帝国のために最後まで戦えることは誇りになりますゆえ、引き続き中継を行いますよ」

「……そうか。それなら頼んだよ」

雨上がりの森のにおいのような、濃厚な植物の香りを漂わせながら中継の兵士はまた階段を上がっていった。

果たして中継も、あと何回できるだろうか。

鎧姿で動き回れば呪いが悪化する。今の彼は腕から重点的に拡がっていることから、次は胴体だ。肺に伸びるか、気道に伸びるか、なにしろ動ける時間は少ないだろう。

「計画が成れば、この地にいるものは皆同じところへ行く……」

無駄死にはなりえない。自分たちの犠牲が、帝国の未来を掴み取るのだから。

それから数時間。

中継の兵士は戻ってこなかった。

階段を降りてくる複数の足音が聞こえる。

帝国の兵士ではない。

数は四人。

やはり魔物では止められなかったか。

木偶ノ文庫の門番でも止められなかったか。

眼を開ければ、タルシスで見慣れた彼らの姿があった。

多少の装いの違いはあるが、いつもの姿だ。

違うのは敵として立っている点。

「ワールウインドさん……」

アルメリアの声が聞こえた。

今更彼女に取り繕うつもりはない。その必要も、ない。

「俺の名はローゲル。帝国騎士ローゲルだ」

「それがお主の本当の名か」

かつて名乗っていた名前は、ワールウインドはもういない。

ここにいるのは殿下の剣となりし騎士ローゲル。

「シウアンはどこだ」

「……この先には行かせない。ここが君たちの終焉の場だ」

「この先というわけだな」

方陣の展開には杖を地につき集中する必要があるのは確認した。

ついてすぐ発動するわけではない。今はまだ杖を構えているだけ

だ。

だが優先的に警戒すべきなのに変わりはない。

「ローゲルさん……世界樹の起動なんてやめさせてください」

「……その言葉を聞く理由がない」

「理由はどう考えてもあるでしょう!? みんな呪いの犠牲になるんで

すよ!?!」

呪いに蝕まれていた彼女には恐ろしい計画だとはわかっている。

わかっているが止めるわけにはいかない。

「だが、帝国は生き延びる。この計画は殿下が決めた答えだ。殿下は帝国のために行動されている。殿下の行動に従うことは帝国のためとなる。俺は祖国のためにも、殿下を信じて動く」

「……！」

砲剣を向けてもなお、武器を構えようとしない彼女の姿にもどかしい思いが募る。

今更言葉で止まるはずがないと、なぜわからないのか。やはり彼女は戦いの場にいるべきではない。だが、もうこの場に来てしまったのだ。

「イシユ。キバガミさん、あとウーフアンも」

アルメリアが仲間たちに声をかける。

心優しい彼女のことだ。この場に及んでまで、俺を傷つけないように戦ってくれとでも言うつもりだろうか。もしくは少しズレたところもある点を考えれば、奇妙なことを言うのかもしれない。

たとえ彼女が相手でも、どれほど温いことを言おうとも、その甘さに付け込んででも俺の砲剣の前に散ってもらう。

「先に行ってください」

………三人に、先に行けと言ったのか？

………本当に。

本当にどこまで、覚悟が足りないんだ。この娘は——！

アルメリア一人で俺を封じれると思っっているのか。それとも親しい者が言葉を尽くせば俺が止まるとでも思っているのか。10年の付き合いで、俺の忠義が揺れるほどに親しくなったとでも思っているのか。

「アルメリア殿、何を言っておるのだ」

「シウアンはこの先で、急いで計画を阻止しないとイケない。ここで止まってるわけにはいきません」

「それはそうだがしかし、この男は強者だ。それに意志の固い目をしておる。言葉で止まる相手ではない」

「大丈夫です」

キバガミが考え直すように彼女に言い聞かせているが、先に行くようにと一点張りの彼女。

10年、外を知らない子供には都合のいいことしか見えていないのか。呪いが解けたことも、必然と思うようになってしまったのか。

「何か勘違いをしているようだが、俺は誰であろうと斬るつもりだ。それに、誰も通すつもりはない」

「何も勘違いなんてしてませんよ。大丈夫です」

大丈夫です、だ？

何が……

「何が大丈夫だ!!」

思わず怒鳴ってしまった。

だが止まらない。どれほど無謀なことを言っているのかわかっていない彼女に対して激情が止まらない。

「君一人で本気で俺に敵うと思っているのか!? それとも俺が情けをかけるつもりでも思っているのか!?!」

「……」

「確かに10年、君の世話をした! だがそれと今は別だ! 俺は、君たちの敵なんだ!!」

怒鳴っても、彼女の表情は変わらない。怯える様子もなく、言葉を撤回する様子もなく、怒鳴り返すわけでもなく。

ただ淡々と、冷静な姿を見せていた。

「私一人で大丈夫です。だからイシユたちは先に行ってください」

「まだわからないというのか……！」

「あの男の言う通りだ。アルメリアよ、汝一人では死ぬだけだ」
「大丈夫です。イシュもたまには私を信じてください」

どうしてだ。

敵である俺の言葉も、味方である彼らの言葉でも、彼女は意思を曲げないのだ。

10年の付き合いが、彼女を妄信させているのか。
ワールウィンドという男に幻想を持っているのか。

「ならん。汝では——」

「世界樹の起動阻止と私の命、比べるまでもないと思います」
「……何を言っている」

「世界樹の起動までどれくらいの間があるかわかりません。それなら一秒だって惜しいはずです。イシュは、世界樹の起動を許すつもりですか？」

「……」

「イシュ、ここで揉めている時間が惜しい。アルメリア、貴様は本当にそれでいいんだな？」

「はい」

こいつらは、何を言っているんだ……

誰も通さないと言ったはずだ。情けをかけないとも言った。
アルメリアを一人残したところで、すぐに殺せる。
彼女は戦力足りえない。

「イシュ、キバガミ。行くぞ」

「——ちいっ!!」

ウーファンの呼びかけとともに、地面が光りだす。方陣だ。
意識の誘導だったか。

完全に注意を逸らされた。いきなり手札の一つを切らされることとなるとは。

砲剣を光り輝く床に突き刺し、剣の中に仕込まれた術式を起動、ドライブを放つ。

「なにっ!？」

爆音とともに、床の破片が飛び散り周囲に散らばった。

それとともに方陣が途切れ、足に自由が戻る。

ホムラミズチ戦の時に熱で地脈を歪められ、陣が持たないと言っていたことから陣が発動しても弱点があると思っただが、ビンゴだったようだ。

ドライブを放ったことによって砲剣を冷ます必要になっちゃったが、足の自由を取り戻すためだ。

「なっ——!」

ウーファンに斬り込もうとした足を止める。

突然目の前に業火の壁が走ったからだ。

見たことがない火の術式。

彼女しかいない。これほど強力な術が使えるようになっていたとは知らなかった。あながち一人でやれるという言葉は自信に裏付けされたものだったのかもしれない。

「三人とも！ 私は大丈夫です！ 先に行ってください！ 計画を止めるためにも!!」

「……っ！ 誰も通さないと云っただろ——ぐっ!」

業火の壁に踏み込もうとした途端、膝もとに鋭い痛みが走った。

見れば鎧の関節部にナイフが突き立てられている。深くまで刺さってはいないようだが、肉に届いていた。

このナイフは投刃用のもの。飛んできた方角は……

「アルメリア……!!」

投刃用ナイフの練習をしていたことは知っていたが、ここまで精密なコントロールができるとは。

だが手がわかれば脅威ではない。

最大の脅威は炎の壁の向こうにいる三人。

「三人に手を出させません!」

炎の壁が効果が切れて無くなると、そこにはもう三人の姿はなかった。

あたりを見渡してみても、いるのはアルメリア一人。

問題ない。すぐに彼女を始末して、追いかければいい。予想より火力は高いが間合いさえ詰めれば大火力は出せない。すぐに殺せる。

ここは迷宮だ。奴らは道がわからない。先回りは充分可能だ。

「……悪いが手加減は一切しない。君には死んでもらう」

「……私も先に謝つとききます」

アルメリアが奇妙な短剣を構えながら言った。

「これからローゲルさん。あなたに八つ当たりをします」

言葉を終わると同時に、彼女を中心に爆炎が起き、部屋中を炎で満たし始めた――

47. 千年前の彼らを殴りたかった

自身を巻き込む爆炎の術式。

「どういう発想に至ればそんな行動を起こせるのか理解ができない。それに木偶ノ文庫は書物と植物で満ちた古の図書館だ。

こんな場所で火を扱う危険はどれほどのものなのか、容易に想像がつくはずだ。なのに何故。

術式による爆炎は収まっても、着火により広まる火炎は終わらない。

部屋中を炎で満たしている。

刺し違えてでも俺を止めるつもりだったか。

だがそんなものは無駄だ。部屋をひとつ出ればこの炎は届かない。部屋の仕切りは本棚ではなく、その内側に石壁がある。熱こそ多少は伝わるだろうが、完全な無駄死にだ。

「——っ!?!」

火炎の中、飛んできたナイフを砲剣で弾く。

爆炎の中心にいたのに、未だに生きていると言うのか。

いくら火の印術に適性が高いと言っても人間と体は変わりない。なのに何故。

「馬鹿な！」

続いて飛んできたのは火球。

術式を放てるほどの気力が残っているという証。死に体ではないということ。

木を燃やす渴いた音が、熱により歪める視界が、紅蓮の炎の幕が、彼

女の姿を隠している。

戦力足りえないはずの彼女の姿を。

「くそっ……!!」

再び飛んできた術式。今度は爆炎の術式だ。

夥しい火炎が迫り、砲剣を盾にしながら体を伏せて抵抗する。

——不味い。

先行した三人を追わなくてはならないというのに、この女一人に手こずっている。

いや、それどころか追い詰められている事態。

火炎もろとも吹き飛ばそうにも、先の方陣破壊でドライブを放ってしまった。

今は砲剣を冷やさないと使い物にならない。

しかし周囲の火炎がより一層、砲剣に熱を与える。

——まさか、それが狙いか。

この火炎は姿を隠すためだけではなく、砲剣を無力化させるために。

そのために自らを巻き込みでの爆炎を放ったのか。

だが自身を炎から守る術はいつたいたんだというのだ。身ひとつでは不可能だ。

「皇子を信じて行動するって、言っていましたよね」

赤く染まる部屋の中、彼女の声が聞こえる。

声の方向に目を向ければ、悠然と立つ姿があった。

その姿は普段のローブの姿と違い、赤い服を身に纏っている。耐熱性の優れた防具といったところか。だがそれだけであの爆炎

を防げるものか。

「それが……どうした!」

「……っ!!」

またも放たれた火球を躲し、距離を詰める。

砲剣のドライブが使えなくても、斬ることは問題ない。

対するアルメリアは、短剣を前に構え、肉薄する寸前で再び爆炎を放った。

「……っ!!」

またも己を巻き込む荒業。

「……っ!!」

爆炎に吹き飛ばされ、またも彼女の姿を見失う。

……認めるしかない。どういうわけか彼女は炎を物ともしないようだ。

自身を巻き込む術式を連発している様から、先ほど見えた姿から、もはや素直に認めるしかない。

火の印術師は距離さえ詰めれば無力化できる、などと言う考えは排除すべきだ。

距離を詰めてもなお周囲を飲み込む炎を放つ、人型のホムラミズチと対峙していると考えたほうがいい。

これは侮れる相手ではない。戦力足りえない相手ではない。人を焼き尽くす魔物と思つて対峙しなくてはならない。

「皇子が間違つてたら、とか考えないんですか」

火炎の中からまたも声がする。

戦いながらも揺さぶりをかけるつもりか。10年守っていた少女は随分と強かになったものだ。

「そんな言葉に惑わされると思っているのか……殿下は10年もの間、ひとりで帝国を導いてきたんだ！ 殿下がたとえ間違つていようと俺たちは彼を信じて行動するのみ！」

「間違えるはずがない、とかじゃないんですね……」

「殿下とて人間だ。間違えもする。だがそれがどうした！ 間違えようとも、俺たちは彼についていく！ その決意は変わらない！」
「そうですか……安心しました」

どこにいる。

炎の中から聞こえる声は、彼女はどこにいる。

声は動きながらなのか、移動していることはわかる。次はどこから。

途端、左頬に衝撃が走った。

ナイフによる攻撃ではない。術式による攻撃ではない。

これは……

「拳だと……？」

「痛あ……頬骨張っててむかつく!!」

この局面で、拳で殴りかかるなど。

「侮辱しているのか!」

「八つ当たりって言ったでしょうが!! さっきのふざけた答えのおかげで何の遠慮もなく八つ当たりができると思ったのに! やっぱり殴るって難しい!」

その言葉に思わず面食らいながらも斬りつける。

あまりの理解不能さに一瞬思考が真っ白になってしまった。

今度は爆炎を放たれる前に剣が届いた。だがそれは前に突きだされた短剣の鏢によって止まってしまふ。

この細腕に止められるほど気が抜けてしまっていたようだ。今ので確実に決めるべきだった。

「くそっ!」

「あつぶな!!」

ふざけた掛け声と共に再び吹き荒れる爆炎。
取り乱した結果、チャンス逃してしまった。だが収穫はある。

「……その短剣か。火の聖印を纏っているな」

彼女は聖印は扱えなかったはずだ。

聖印は攻撃的な術ではなく、身を守る術。火の聖印はタルシスで覚えていた者はいなかったはずだが、短剣のルーンが起動式となっているのだろう。

爆炎が起きる前に短剣から奇妙な発光があった。

火の聖印。それは敵の火炎から仲間を守る術だ。そいつを使い、自身の炎から守るといふ形か。さらには耐熱優れる防具も着用しているときだ。

随分と考えて防具を選んでいたようだ。冒険者として思いのほか優れていたか。周囲に埋もれていたため気づかなかった才能だ。

返事は帰ってこない。

あの装備なら今の爆炎も問題ないのだろう。こちらはかなり痛みを堪えている状態だと言うのに。

「……八つ当たりとはどういうことだ？ またイシュが何かやらかしたのかい？」

普段話していた時と同じような、タルシスにいたところと同じ声音で問いかける。

まるで日常会話のように。

声をあげれば場所がある程度わかる。まだ若い少女は日常を求めて今の声音に釣られるはずだ。

「イシュは、何もやらかしてません」

——引つかかった。

声の方角に顔を向ければ、視線を落としている彼女の姿。炎に揺られて見えづらいが、確実に姿を捕らえた。

「やらかしたのは……そうさせたのは……！」

爆炎もかなり放ったとはいえ、まだ扱ってくると考えて行動した方がいい。

向こうの姿を先に補足できたアドバンテージを捨てるわけにもいかない。

未だ姿を見失っているフリして、視界の隅から彼女の姿を見逃さないようにしなくては。

移動をした瞬間、あるいは術かナイフを攻撃に使った瞬間、距離を詰めて斬る。

「イシユにそうさせたのは……あなたたちじゃないですか!!」
「なっ……!?!」

爆炎とも火球とも違う攻撃が視界を埋め尽くす。当然ナイフでもない。

奴らと分離される際に見た業火の壁。それも最初の時より遥かに大きな炎が呑み込むように迫ってきていた。

呑まれないように距離を離す。

だが業火は追いかけるように迫るのをやめない。

「厄災を前に、たった一人を頼り続けて！すべての選択を委ねて！責任をたった一人に背負わせて!!」

炎の向こうで彼女が吠える。

その叫びに呼応するように炎がより強く燃え上がり、勢いつけて迫りくる。

「信じてついていった？ 間違えても構わない？ その重荷を背負わされた人は、どれだけ影を落とされると思っているんですか!! 千年もずっと背負い続けてたんです!!」

この業火は止まらない。どういうわけか、彼女の感情に大きく影響を受けているようだ。

引つかかった獲物はとんでもない化け物だった。

「どうして誰も止めなかったんですか！ どうして誰も、一緒に悩んであげなかったんですか!!」

もう砲剣の温存など考えていられない。

迫り来る業火をかき消すためにも、暴発させて吹き飛ばすしかない。

「気づいたときにはひとり城に取り残して……なんで誰も、あの人と一緒に降りようとしなかったんですか!! 無理やりにも引つ張ってあげればよかったのに！ 手を振り払われても、何度もその手を掴んであげたらよかったのに！ なんで!!」

走りながらの砲剣のドライブを起動させる。

途中で暴発しないように砲剣から注意を逸らさず、迫る業火に呑み込まれぬように足を止めず。

「千年前と同じことをあなたたちはしようとしているんです!! だから代わりに、八つ当たりさせてください!!」

こんな炎での八つ当たりなんて。

「たまったもんじゃないな!!」

叫びながら暴発寸前の砲剣を業火に投げ入れた。

業火の中に呑み込まれた瞬間、辺り一面の火炎を吹き飛ばす暴風が生まれる。その暴力的な衝撃をまともに浴びないように地に伏せて身を委ねた。

「……………化け物か」

見えた姿に思わず悪態をつく。

どこが戦力足りえないというのか。この惨状を見て、そう思えるというなら今すぐ代わりに戦ってほしい。

迫る業火の壁がなくなつたというのに、次の術式をもう用意しているのか。

それもまた違う術式。火球とよく似たものだが、込められた威力が圧倒的に違う。

却火の術式。

鎧ごと焼き尽くさんばかりの火の球が用意されていた。

防ぐ手立てがない。砲剣はもうどこに飛んでいったのか。そもそも形を残しているのかわからない。

この鎧は優れたものだが、却火相手では持つとは思えない。仮に耐えたとしても、肉体は持たないだろう。すでにこちらは息も絶え絶えの状況だというのに。

「……………」

完敗だ。

10年間、守らなくてはと思っていた少女に完膚なきまでに負かされた。

殿下の計画を遂行するためにも止まるわけにはいかなかったが、手の打ちようがない。

「……」

「……抵抗しないんですか」

「帝国騎士の証、殿下から賜った砲剣はなくなってしまった。防ぐ手立てもないし、避ける余力も残っていないさ……」

それに、と続ける。

「君に、討たれなくてはならない理由があるからね……他の奴だったら、死に物狂いで抵抗するけど君になら、まあ因果応報って受け入れられるさ……」

「……理由、ですか？」

早くその火を放ってほしい。

こうしている間にも、少しずつ息が整っていく。燻されるような熱さの中でも、呼吸を取り戻すことができてしまう。

体力が戻れば、抵抗する理由が生まれてしまう。

だがもう、疲れたんだ。

10年前に時間が止まってしまった、彼らの元へと送ってほしい。

10年ぶりの殿下の姿を見るのも、俺には辛く思っていたのだ。きっと彼らには怒られるだろう。怒って、殴られて、それでもまた、仲間として迎えてもらえるはずだ。

「なんだい……まだ、気づいてなかったのかい……」

どこか頭が悪いんじゃないか、と時折思わせていたが、まだ答えに辿りついていなかったのか。

それなら、答えを教えてやろう。

それが切欠で、その火が放たれるだろうと見込んで。

「10年前……君に、呪いを運んだのは俺だよ」

結界越えを強行した際、服か荷物に呪いが付着していたのか、発現せずに俺の体に潜伏していたのか。なんにしろそれが、遠い最果ての地タルシスでアルメリアに感染した。

少女は何も答えない。

「10年前、結界越えを果たしたが……瀕死の状態だった。そんな時、君の両親が俺を助けたんだ」

「両親が助けたのは以前、聞きました」

「そう、だね。だけどこれは聞いたことないだろう……？ 君の両親が、死んだ理由は……」

楽になりたいという一心で、この少女に隠していた理不尽をぶつける。

いや、正しい仇の在り処を教えることとなるのだ。ならばいいだろう。

「俺を助けようとして、碧照ノ樹海に潜ったんだ……結界を越えるための秘密を探るために、まだ世界樹の調査の知らせが出ていなかったのに……ほんと、お人よしだったよ……」

冒険者稼業をやめていたのに、見ず知らずの行き倒れの事情を聞き、手助けをしようとして樹海に潜った夫婦。

もしも、結界越えを果たしてなければ夫婦は樹海に行くことはなかった。夫婦の娘も呪いに蝕まれることはなかった。

「君の両親が戻ってこないまま、幾月もの月日が流れた……俺は樹海には向かわずに、君の家に入り浸った。探しに行かずに、両親から君を頼まれたからと自分に言い聞かせ……その結果、呪いは君に感染した……」

もしも夫婦を探しに樹海へ赴けば、変わっていたかもしれない。

夫婦は危機的状況から助かり、俺は夫婦の娘と接触が少なくなつて呪いが感染することなく消滅する。

そんな、もしもを浮かべるたびに罪悪が心を押しつぶす。

「もうこれでわかつただろう……10年間、君の呪いを解いてあげたかつた理由は——君の両親への恩じゃない」

「罪滅ぼし、ですか」

「ああ……直接的ではないにしろ、君の両親の仇は俺だ。そして、君に呪いを運んだのも……俺だ」

思いを吐露するというのは、気持ちがスッキリすると言っていたのは誰だつたらうか。

10年前の仲間たちか、それとも10年の間に知りあつたタルシスの奴らだつたか。

なんにしろ、ほんの少しだが肩の荷が下りたような気持ちになれた。

「そんなの——前から知つてたに決まつてるじゃないですか」

「………嘘はよくないよ」

「いや、なんでこのタイミングで嘘なんて言うんですか。具体的には深霧ノ幽谷でもしかしてって思つてましたよ、本当に」

「——は」

そんなに前から、気づいていた？

確かにあの時、一度疑われたことがあつた。だが彼女はそれ以上踏み込まなかつた。

それ以外、特にこれといった変化は見せなかつた。

もしもそうだとしたら、ずっと演技をしていたのだろうか。たいした役者ぶりだ。

「ずっと……復讐する機会を探していたのかい……？」

「物騒すぎませんか？」

何を言っているんだとばかりの反応。

気づけば準備状態だった却火は霧散していた。

「引きこもっていたままの私じゃないんですよ。いろんな人、というには偏ってますけど、特殊な人をいっぱい見てきたんです。だから、どういう思いで過ごしていたかもちよつとぐらい想像はつきます」

「……同情してくれてるのかい？」

「そう、なるんですかね……？ 10年、私のためにしてくれたことを思えば仇討ちだーってならないです。それと、私としてはイシユの味方でいたいんです」

あいつの……？

話の繋がりが見えない。突然出てきた傲慢な奴の名前。

「ワール……ローゲルさんは、イシユが慕っている、千年前の人たちと少し似ているんですよ」

「俺が……？」

「はい、だから八つ当たりしました」

わけがわからん。

あいつの味方がいたい。あいつの慕っている人に似ているから八つ当たりをした。

嫉妬というにはその八つ当たりも物騒極まりないものだった。

「ローゲルさんは、いや、帝国の騎士はたった一人の背中に持たれかかってるんです。イシユに頼った千年前の人たちのように。このままだと皇子はイシユと同じ道を歩みます」

「……そうはならないさ。殿下は、我らと共に世界樹に吞まれることとなる……口惜しいがな」

「結果はそうですが、同じ気持ちにはさせるはずです」

「……それと、あいつの味方でいたい理由が繋がるのかい？」

「イシユが今のイシユになったことは、幸福とは思えません。イシユはずっと過去に囚われてますから……。私はそれから解放してあげたい……。けど、イシユはそれを許さない」

少し目を離れた間に随分と入れ込んだものだ。

それともひな鳥のように、最初に手をひいてくれたから強く懐いたのだろうか。刷り込みのように。

「皇子が今進んでいる道の先は、第二のイシユです。信じ、ついてきてくれた人たちの希望を全て背負い、自身が潰れることも許せず、ただひたすらに力を尽くす存在……。希望のために、間違いを厭わずに……」

「俺たちは、殿下が間違っついでいようと——」

「正す気がない、完全な思考停止の信頼なんて……。背負わされる方には重荷だけです。あなたたちが楽になりたいだけの、自分勝手な願いです」

肉体だけでなく、言葉でも追い詰める気が、この少女は。

「今ならまだ皇子が第二のイシユになるのを止めれるはずですよ。どうか止めてください。千年前にイシユを信じついでいつた人たちは違う姿を、イシユに見せてください。あの人に、千年前の人たちを見限らせる切欠を与えてください」

却火を消した理由はそれか。

殿下を説得し……。重なる状況から、希望のある光景をイシユに見せてあいつの目を覚まさせる。

自分勝手な願い、という言葉をそっくりそのまま返してやりたい。

「……そんな言葉で俺が従うはずがないだろう。イシユがどう思おうと、俺には関係ない。俺は、あいつが嫌いだ」

「皇子が苦しむことになっても、ですか」

「……」

「皇子が間違えていると、ワーゲルさんも言っていましたよね。皇子はそのことに気づいているのかどうかわかりませんが、必ず彼は後悔します。ひとりで希望を背負うような責任感の強い人を、ずっとそばで見してきた私が言うんです」

「ローゲルだ……」

「ローゲルさん、皇子を苦しめたいと言うのなら、これ以上は何も言いません」

「……」

話は終わりとばかりに、少女は倒れている俺から離れていく。

遠ざかっていく小さな背中を、眺めるだけだ。ボロボロの身だが、死に至るほどではない。武器はなくなつたが体力を取り戻せば、少しは戦える。

戦えるようになったら、どうすればいいのだろうか。

かつての仲間たちならば、殿下を止めに行くだろう。仲間たちを想像しようするべきだ。

殿下を苦しめることなど、騎士としてありえてはならない。あの少女の詭弁だとしても。

だが、もう己に砲剣はない。帝国に仕える証である、砲剣が。

砲剣と共に、騎士の誇りを見失ってしまった気分だ。

何か、もうひと押し欲しいと思ってしまうのは情けないことだろうか。

殿下を止める理由に、もうひと押し。

「……あるじゃないか」

思いついた理由に、自然と笑みが浮かぶ。

仲間たちもこの理由を聞いたら、笑うのではないだろうか。陛下も笑うだろう。それと同時にもっと早く立ち上がれとも叱られるだろう。

「俺はイシユが嫌いだ」

だから、殿下をイシユと同じになどさせてなるものか。

殿下がイシユより優れているところを見せてやればいい。それはイシユへの最高の嫌がらせになる。

殿下はイシユと違って、間違いを正してくれる味方がいるのだと。

「ああ——、俺は騎士より、冒険者のほうが向いていそうだ」

砲剣がなくても、もう立ち上がれる。

先に出ていった少女の後を、迷いのない足取りで追いかけるのだった。

48. どこに本物の僕がいる

部屋を出てすぐだった。

追いつかないと思っただ少女の姿は部屋を出てすぐのところへばっていた。

戦っていた時の姿は精一杯の虚仮を張っていたのだろうか。不思議とそのへろへろな姿に安心感を覚える。

「アルメリア、大丈夫かい？」

「……うげえ」

「その反応は傷つくよ……」

あれだけ発破をかけておいて、変質者を見る目で見るのはやめてほしい。

「どうするつもりですか？ 皇子を止めるのか、それとも私を、私たちを止めるのか……」

ああ、さっきのは変質者への目じゃなくて、敵かもしれないという疑惑の目か。

それならまだ安心だ。やはり10年世話をしてきた少女に変質者扱いを受けるのは辛いものがある。

「殿下を止める」

敵ではないということを感じてくれたのか、彼女は俺から顔を逸らして前へと歩きだした。後ろから斬りかかってくるのでは、といった警戒が一切ない。随分とあっさり信じるものだ。

この信用を、今度こそ裏切らずに応えなくてはいけないだろう。

「シウアンと皇子はどこかわかります？」

「ああ、この文庫の地理も問題ない。最短距離で行けるさ」

「助かります。正直、もうへとへとで……戦いも任せたいくらいで……」

「あー……俺も武器がないから戦いは任せたいんだが……」

「……」

「……」

互いに自然と足が止まり、沈黙が流れる。

先に沈黙を破ったのはアルメリアだった。

「……熟練冒険者ならここは俺に任せろ！ とか言ってく下さいよ!?
なんでかなり年下のひよわな印術師に戦いを任せるなんて発想に
なるんですか!?!」

「あれだけ馬鹿みたいに燃やしておいて、ひよわな印術師なんて通用
するわけないだろう!?! 武器ありの俺を負かせたんだから任せても
問題ないだろう!?!」

「どう見てもへとへとなのわかりませんか!?!」

「それだけ大声を出せる元気があんならまだまだ術を使える余裕があ
るって知っているからな!?!」

こんな風にこの子と、裏表なく大声を出しあう日が来るとは思わな
かった。

それがなんだか奇妙に感じて、自然と笑いそうになる。

「うげ……急にニヤけないでくださいよ。も、もしかしてやっぱり口
リコン……」

「本気で失礼だね君……どこで教育を間違えたんだか……」

「うだうだ言っていないで行きますよ。戦いは任せますからね」

「そうだな。さっきの怒鳴りあいのせいで魔物が寄ってくるかもしれ
ない。戦いになったら任せるよ」

「……」

「……」

流れるように押し付けようとしてくる変人に、負けじと押し返す。

その時ちらりと視界の端に何かが映った。

「あ……」

「……なんですか？ まさか道を間違えた、と……か?」

そこにいたのは青い体躯のカンガル……のような魔物。ブルー
ワラビー。

完全に戦闘態勢に移行しながらこちらを見据えている。腹の袋に

入っている子供もこちらを見据えている。

「……印術の出番だぞ」

「……無理です、明らかにタフそうですよあの魔物。近接メインっぽいですし、今こそ騎士の力じゃないですか」

「……無茶言うな。殴りあいが得意な魔物相手に徒手空拳で挑むなんて自殺行為すぎる。剣のない騎士に期待するなよ」

「……どうするつもりですか」

「逃げるぞ」

「はい」

自称ひよわな少女を脇に抱えながら、卓越した平衡感覚をもって魔物から脱兎のごとく全力逃走を行った。

冒険者として大事な素質は生き延びることだ。足腰は大事だということを、先輩冒険者として抱えられている少女に見せつけてやった。

本棚を引き倒したり、棚の隙間にある抜け道を駆使して振りきることが叶ったが、本気でしんどい。

「全力で走ってましたけど、道はあってるんですか？」

「問題、ない……すぐそこ、だ……」

「歳なんじゃないですか？ 息切れひどいですよ」

自分は抱えられていただけのくせに、こいつ……！

ああ、思えばこの少女は、ウーファン相手にやたらと噛みついていて。一度気にいらないうつらな相手には性格がひどくなるようだ。これほど生意気な子になるとは。

息切れしたまま扉を開ける。殿下のいる場所までもうすぐだ。

それにしても、どうやらイシユたちはまだここまで来ていないようだ。

この場にいるのは俺たちと、帝国兵だけだ。

「ローゲル卿……その者はいつたい」

「……糞生意気な化け物だよ」

「紹介おかしくないですか!？」

喚く彼女を無視して兵たちと向きなおる。

なんとか呼吸は落ち着いてきた。今更恰好をつけても遅いかもしれないが、彼らとの決別でもある。瞬間だけでも決めておきたい。

「……俺は殿下を止める。この計画はアルフォズル陛下のお考えから大きく外れたものだ。だからここに来た。そして、この先の殿下に会いに来た」

「あなたは……そうですか。決意されたのですね……」

「ああ、悪いな。俺がこれからすることは、殿下の10年の否定だ。それは君たちの10年、その否定にもなるだろう」

「10年、殿下にただ従うだけだった我らの、ですね……」

忠言と捉えるか、謀反と捉えるか、それは彼ら次第となる。

だが彼らは剣を構えなかった。

「……いいのかい？ 止めなくても」

「何を仰いますか。魔物以外との交戦は控えろと命じたのは他ならぬあなたと聞いてます」

「その命令に従う理由はないはずなんだけどな」

「いいえ、あなたは大騎士です。傷つく覚悟を受け入れながら、忠言を行うその姿はまさに帝国騎士です。ならば我々が従う理由としては上出来でしょう」

ついさつき、騎士より冒険者のほうが自分には合っていると思ったばかりだというのに随分と褒めてくれる。

「私は自分の気持ちに正直になれたあなたが羨ましい……」

「自由に慣れすぎちゃったからな。君はまだ、正直になれないんだね」

「……申し訳ありません」

「いーざ……」

その言葉の裏にあるもの。それが、本音の答えのようなものだ。それが背中の後押しとなる。

話していた彼は砲剣を差し出した。

それと一緒に認証キーまでも。

「見たところ、砲剣を失ったご様子。私の剣をお使いください。己の10年を否定するのが怖くて動けない身ですが、この剣は問題なく動きます」

「……10年が千年になる前に、否定しといた方がいいぜ」

「はっ」

「いや、なんでもない。ではお言葉に甘えましょう」

もう一度砲剣を握ることになるとは。

冒険者兼帝国騎士として、託された想いに応えましょう。

兵士たちに見送られ、木偶ノ文庫の最奥へと足を踏み入れる。

巫女の最終調整までの猶予はあとどれほどか。

最奥の部屋は大きな広間となっている。天井は今までの回廊と比べ遥かに高く、地下にも関わらず届く日の光が、静謐な古き図書館の空気を照らしている。

大広間にいるのは世界樹の巫女シウアンと、バルドゥール殿下。

「ローゲル、何をしにきた」

「アルメリア！」

シウアンの意識はまだある。最終調整はまだ済んでいない。

ならば、まだ間に合う。

「その者はタルシスの……捕虜として捕らえた、というわけではないようだが」

「殿下、恐れながら申し上げます。計画の見直しが必要です。犠牲を伴う計画は陛下の、父君の願いとかけ離れたものです！」

殿下の眼が見開かれた。

まるで信じられないものを見るように。ただ驚愕に染まった顔。

「ローゲル、お前までも……余を信じられぬというのか」

「殿下！ 帝国の民は皆殿下を信じております！ ですがこの計画だけは、賛同するわけにはいかないものなのです！」

「民が信じているのは皇帝アルフオズルだ。誰も余を信じてなどいない」

「そのようなことはありません！」

「……」

「殿下ならば、陛下の志を必ずや継いでくださると皆信じております！」

その言葉の次の瞬間、それまでの王族としての姿は消え、10年前のような幼き面影を見せた。だがそれは癩癩という形である。

「——今のお前の言葉が、信じていないことを物語っているではないか！ お前も、家臣たちも！ お父様の名ばかりあげる！ ああ、僕の力はお父様に遠く及ばないことは自覚している！」

「それは殿下に陛下のお心を継いでほしいと——」

「やはりお父様の心だけを求めているではないか！ お父様の願いと離れている？ お父様の心を継いでほしい？ ……この言葉のどこに僕がいる!?!」

頭をガツンと殴られたかのような衝撃を受ける。

強く睨みつける大きな瞳は、怒りに染まり切っている。何故気づかなかったのか。

殿下の間違いを直すことだけを考えていた。

自分たちの考えについては、何も考えていなかった。自分たちが殿下の姿の先に何を見ていたのか。

「皆が僕にお父様の姿を求める！ だが僕の力は及ばないのだ！ お父様に及ばない僕が、お父様すら成せなかった犠牲のない世界を作れ

るはずがない！」

激情のまま叫ぶ姿は年相応の、いや、10年前に見ていた子供と同じだった。

周囲の視線が、期待が、陛下と同じ立派な指導者という仮面を無理やり被らせていた。

それが今、完全に剥がれている。

仮面の下に隠れていた悲鳴をあげる殿下の姿は痛々しく、叫ぶたびに奇妙な黒い靄が鎧の隙間から溢れていた。

……なんだ、あの靄は。

いや、今は靄に気を取られている場合ではない。殿下と向き合わなくてはならないのだ。

「お父様に成せなかった世界、僕には届かない……だが犠牲を覚悟に進めば、僕でも、余でも帝国を導ける！ たとえこの身が計画の礎になろうとも、帝国の未来に光を差せる！ この内に潜む力だけがここまで余を導いてくれた！」

遅すぎた。

気づくのがあまりにも遅すぎた。

10年戦い続けた殿下は、ずっと追い詰められていた。父親の幻想に。

追い詰められて、逃げるように辿りついた先が、あの計画なのだ。

父のようになれず、

父の名を汚さぬように成果を求め、

父の遺した帝国の希望を掴み取る。

「ローゲル、今更お前がどれほど言葉を募ろうと、余は止まるわけにはいかない！ たとえ世界中を敵にまわそうとも！ 余の帝国は未来を得——！」

殿下の魂からの叫びは、乾いた甲高い張り手の音によって中断させられた。

隣でアルメリアが「うわ、痛そ……」と呟いたが同じことを思ってしまった。突然のことすぎて思考が追いつかない。単純な感想しか出てこない。

うわ、痛そう。

「な、何をする!?!」

突然の狼藉を働いた者に、殿下は問い詰めた。
ビンタされた右頬をさすりながら。

「みんなが求めてたのはあなたのお父さんじゃないよ」

シウアンが腰に手をやり堂々とした姿勢で答えた。

「何も知らぬくせに——」

「みんなが求めてたのは、誰とでも手をつなぎ合える世界だよ。誰とでも友達になれる世界。世界中を敵に回すなんて、誰も求めてないよ」

「そんな夢物語では何も満たせないのだ!」

「その夢物語をあなたに作ってほしかったんじゃないの!?!」

シウアンが殿下に呼応するように叫んだ。

世界を知らない箱入りの、あまりにも青い話だ。生きていくうちに薄れていく青さを、真っ直ぐにぶつけてきた。

「それはお父様の、皇帝の願いだ!」

「みんなの願いだよ! あなたのお父さんだけの願いじゃない! その願いの中にもあなたも含まれてるって、なんでわからないの!?!」

「う、うるさい! だからなんだと言うのだ! 今更後戻りなどでき

るものか！ 計画まであと少しなんだ！」

「今からでも遅くないじゃない！」

「もう遅いんだ！ 帝国はもう長く持たない……世界樹の力が必要なんだ！ だから、巫女よ……」

殿下がシウアンに手をかぎす。その反対の手に持っているのは、巨人の冠。

——まずい！

「シウアン、離れる!!」

「え——?」

シウアンを照らすように殿下の手から閃光がほとばしる。するとシウアンは力が抜けたように倒れこんだ。

「シウアン!?!」

「アルメリア、こうなったら力づくでも殿下を止める！」

「は、はい！」

シウアンの、巨人の心の最終調整がすでにほとんど終わっていたとは。そして今、心の調整が終わった。

駆け寄る俺たちを見据えながら殿下は天を仰ぎ見、叫ぶ。

「我が身に流れる古の血に応えよ、揺籃の守護者よ！ 巨人の心を狙う侵入者を討ち、己が使命を果たせ！」

その言葉に応じるように、殿下までの道を妨げるように巨大な石像が降り立った。

砲剣と似たような駆動音を立てながら石像は拳を振り上げる。

「アルメリア、絶対に当たるなよ！」

「当たり前たくありませんよ!?!」

石像の拳が振り下ろされた箇所は大きく抉られ、周辺に破片が飛び散った。

その破片ひとつひとつが大砲と思えるほどの威力を秘めてあちこちを破壊する。

「こ、こいつ何なんですか!」

「木偶ノ文庫に配置された番人だ! 殿下、お待ちを!!」

揺籃の守護者の向こう、奥にある祭壇へと進む殿下の姿が見える。止めたいのにこのデカブツが邪魔だ。

祭壇の奥に入られたらここからじゃ追うことができない。早く止めないといけないというのに。

ただの剣ではこの石像の破壊は無理だろう。

「アルメリア、破片に注意しろ!」

砲剣ならば、破壊はできる。

拝借した砲剣のドライブを起動させる。放つはショックドライブ。イシユの弱点が雷だと聞いたとき、密かに隠れながら練習していたもの。衝撃の流し方はよくわかってる。

「ま、まさかまた爆発ですか!?!」

「君にそんなリアクションされたくないな!」

自分を巻き込む爆炎を連発していたやつに言われたくない。

完全に発動寸前となった砲剣を構えて、迫る岩の拳を避ける。

伸びきった腕を足場にしながら駆け上り、胴体へと斬りつけながら

圧縮された雷の術式が爆発するように、いや、実際に爆発しながら破壊する。

「……くそつ、硬すぎる」

刀身に熱がこもる。

ドライブはしばらく放てない。暴発させるといふ手もあるが、これは自分のものではない。それに暴発させたところで、この守護者を完全に破壊するには至らないだろう。

「まさか表層が多少剥がれただけで終わるとは……」

「とやああー！」

アルメリアの掛け声とともに火球が飛んでいく。

何故この場で火球。もつとあるだろうに。却火とか、あの業火の壁とか。

いくら表層が剥がれた状態とはいえ、その下にも石像の硬い体だ。あの程度ではたいした影響も出ない。

迫る火球に黄色い顔の石像は避けるそぶりも見せない。

小回りの利いた行動はできないというのが大きいだろうが、避ける必要がないのだろう。あの硬さがあるのなら。

そして当たった火球は、

「……つくづく化け物か」

石像の体に大きなヒビを入れさせた。

どういう原理だ。火球の起こした小さな爆発は遥かにショックドドライブより小さかった。

何かしら理由があるはずだ。込められた威力が違う、なんてことはないはず。ドライブのほうが威力は上だ。

いや、今は考えるよりも先に

「アルメリア、もつと火球を連発しろ！ ホムラミズチみたいにして！ 同じ火の魔物だろう！」

「私！ 人間！ です！ て、てやああー！」

二つの火球が飛んでいく。

迫る火球は吸い込まれるように胴体へと向かうが、その前に石像が奇妙な動きをした。

首が回転したのだ。

ただそれだけのこと。

だが、それだけで結果が先ほどから大きく変わった。

「ぜ、全然効いてないみたいなんですけど……け、結構カツカツなのに！ とやああああ！」

「……いや、今は休んでてくれ」

赤い顔のような状態の石像は悠然としている。

さつきまで黄色だった。色で鎧の性質が変わるということだろうか。あまりにも単純だが、今はその仮説を信じてみるしかない。

暴走時の保険として残した弱点という可能性もある。揺籃の守護者は古代から続く門番だ。魔物ではない。

黄色が雷だとしたら、赤は火。

回転した際に確認した顔は四色。赤、青、黄色、白。

ということは、

「セオリーなら、冷気に弱いってところかな！」

砲剣で斬りつける。剣に圧縮された氷の術式はまだ起動できない。

だが、この砲剣に塗りつけたものが大きく影響を与える。

石像の鎧に亀裂が入った。

「リンクフリーズ……ソードマンの技だって俺は使えるんだぜ！」

続いてもう一撃、と斬りつけようとした途端に脳内に警鐘が鳴り響く。

己の勘に従って斬ることはやめて距離を取った。

「——っ！」

途端、石像の上半身が轟音を立てながら回転を起こした。巻き込まれれば弾け飛ぶどころか粉々になりかねないほどの速度。離れたはずなのに風圧を感じるほどの威力。

「ワーゲルさん!!」

「うおっ……!!」

突然間に入るようにアルメリアが短剣を構えながら立った。

途端体を感じる暖かな感触。そして目の前に迫る火炎。

回転しながら、拳から炎を吐き出している——

避けられない、と思ったが、想像よりもなんとというか、ぬるい。

これは苦しめられたあれか。

「火の聖印……か。あと俺はローゲルだ」

「い、今は細かいことはいいでしよう!？」

「それにしても……イシユはまだか！ まだ迷っているのかあの馬鹿！」

今こそあの馬鹿力を発揮する場面だろうに、どこをほつつき歩いてるんだ。

回転が止み、今度は青い顔になった石像がまたも拳を振り上げる。どうやら拳を扱った攻撃くらいしかできない単細胞、いや、単岩なよ。うだ。

「ぐえっ」

潰れた蛙のような悲鳴をあげるアルメリアの首根っこを掴んで攻撃を回避する。

なんだか以前も同じようなことをした気がする。不思議と懐かしい感覚に襲われ、そういえばウーファンにこういうことをしたなと思

い出した。

あの時と同じくニーズヘッグの連中というのは、馬鹿ばかりだ。拳だけを警戒すれば、いや、そういうわけにもいかないか。

今までそれで何度も痛い目を見てきたんだ。距離が空いていればと思えば腕が飛んで来たり。距離を詰めればと思えば爆炎に巻き込まれたり。

拳以外にも何かがあると思つて行動するべきだ。

「つとー」

考えたそばから石のさすまたのようなものが飛んできた。

頭を下げて回避すれば、さすまたは地面に突き刺さり固定された。拘束する技もあり、と。

今の奴の頭は青ということは、セオリーに従つてリンクサンダーで斬ればいい。

次に狙うなら、ヒビの入った箇所といたいところだが……

「アルメリアはここにいろー」

「ほあ？」

奇声ばかり上げる少女から手を離し、剣に薬品を塗り付けながら守護者との間合いを詰める。

迫る獲物に向けて拳が振り上げられる。

跳びながら躲し、先ほどと同じく伸びきった腕。

装甲全体が変化しているのなら、この腕からまずはもらおう。

振り下ろした斬撃は右腕に大きな亀裂を走らせる。だが落とすには足りない。

そのときまた、頭が回転し始めた。今度は黄色。

まるでリンクサンダーに反応して対応したかのような。今度は熱に弱いはず。

砲剣の切っ先を真上に持つていき、機構を変形させた。

瞬間、中にこもっていた熱が強制的に吐き出される。

熱された空気は火こそ作り上げないが、その温度は強力な熱だ。

先ほどの亀裂に向けて排熱された空気はさらに大きな亀裂を走らせて――

「アルメリア！ 火を右腕に！」

「は、はい!!」

—— 追い打ちをかける火球がその腕を破壊した。

右腕を失ったと同時に大きくバランスを崩す石像に、畳みかけるようにさらなる追撃を浴びせる。

砲剣の冷却ももう済んだようだ。

「今度こそ砕けろ！」

火による攻撃を受けた石像は再び頭を回転させる。

次は火に抵抗するために、赤い頭になるはずだ。

生物ならば、考えることができるのならば、そんな単調に切り替えたりはしないだろう。

所詮は人形だ。守護者だのと名乗っているが、ただの人形。

「この、木偶の坊があ!!」

瞬間、冷気を圧縮したドライブが、フリーズドライブが炸裂した。

今度は完全に砕け散る揺籃の守護者の胴体。吹き飛んでいく破片を見ながらようやく撃破が叶ったと息をつこうとして……

頭だけが浮遊していることに気付いた。

—— まだ、終わっていない。

胴体が無くなったというのにまだ動けるとは。

頭は高度をあげて、こちらの攻撃が届かない上空で停止した。何をするつもりかわからない。だが、ろくでもないことは確かだ。

「つ……アルメリア！ 印術で撃ち落とせないか!？」

「イシユ!! あれ!!」

本当に短い言葉だ。

たったそれだけで、通じたのは偶然か必然か。

このタイミングで広間に到着したイシュに対しての短い言葉。

嬉しさと慌ただしさが織り交ざったアルメリアの言葉に、千年前から存在する人形は高く飛び上がった。

「……あれだけで理解できるもんかね」

千年前の叡智とやらを込めて作られた機械の体。それはつまり人形だろう。

だが揺籃の守護者と同じ人形にカテゴライズするには、あまりにも柔軟な対応すぎる。性格はアレだが。

とてもじゃないが人形とは呼べない。案外、人間と見てもいいのかもしれない。

「いや、やっぱり人間ではないな」

足を切り離し、断面から火を噴かせて空を飛ぶ姿は人間とはいえない。
い。

そいつは、そのまま浮遊していた守護者の頭を力任せに両断した。

49. 廻り戻るは光の柱

石像を完全に撃破し、大広間を見渡せばどこにもシウアンと皇子の姿がなかった。

最後に見たのは広間の奥に向かう姿だったが、奥には扉らしきものはない。あるのは奇妙な紋章のある祭壇のようなものだけだ。

「貴様！ シウアンはどこだ!!」

ウーフアンがワーゲルさんに……ローゲルさんに掴みかかる。

そういえば彼の説明をしないと。それに彼から色々聞きださないと。

「シウアンはここにはいない……おそらく世界樹の中だ」

「貴様……!」

「アルメリア殿よ。この男がお主と共にいるということは、ひとまずは敵対関係ではないと思ってもよいのだろうか?」

「は、はい」

キバガミさんの問いかけに答える。ウーフアンが怒り心頭だが、なんだかんだで冷静さをすぐ取り戻すだろう。熱しやすく冷めやすいタイプに思えてきた。

「ローゲルさん、シウアンのところ、心当たりは——」

シウアンの場所、皇子の向かった先について、聞きだそうとした瞬間だった。

全体が大きく揺れたのだ。

地震とはまた違う、たった一度の大きな揺れ。

「ぐべっ」

あまりの揺れに、転倒してしまった。鼻が痛い。思いっきり打つた。

「……もう実行に移したというのか」

揺れに対して心当たりが浮かんできたのか、ローゲルさんが神妙な顔で

呟いた。確実にろくでもないことだ。

「どういうことだ。答えよ」

「殿下が、心臓を世界樹に返した……のかもしれない。確かめるためにも外に出るぞ！」

鼻を盛大に打ち付けた私を無視し、イシユとウーフアン、ローゲルさんが駆け出していった。

キバガミさんだけが起こしてくれた。

今回は鼻血は出ていないようだ。私もキバガミさんと一緒に、三人の後を追いかけた。

外に出るまでの道中、そこら中に血の痕があった。

それは魔物の血であったり、帝国の兵士の血であったり、実に様々な状態だ。

途中で魔物にも遭遇したが、狂乱状態なのか近づく者すべてに襲いかかっていた。同族の魔物にさえも。

それによって兵士や魔物の血があちこちにあるのだろう。

明らかに異常事態だ。先ほどの揺れが、世界樹になんらかの変化が引き起こしているのか。

外に出ればもうすっかり夜になっていた。横には趣味の悪い金色の気球となったノアがそばにある。入った時と変わらない姿だ。

周囲を見渡しても大きな変化はない。いや、軍艦がなくなっている。

「な……世界樹が……」

ウーファンの啞然とした眩きに、北にそびえる世界樹へと目を向けた。

そこにあつた姿は、今まで見慣れた姿ではなく――

「枯れてる……？」

生命溢れるような碧の大樹はなりを潜め、見る見るうちに葉は枯れ落ち、樹の表面は弱々しく色あせていく。その変化はあまりにも急激で、まるで世界樹の時間だけがおかしくなっているかのようで。

「悪魔の樹が……」

やがて世界樹は、自身の重みに耐えられなくなったのか、中頃から大きな音を立てて傾いていく。思わず耳を塞ぎたくなるような亀裂音は、この大地どころか遠くのタルシスにまで届くかのように思えた。

いや、きつと届いているだろう。あの街はずっと世界樹が見えていたのだ。

私が生まれた時から、世界樹が見える景色と共にあつたのだ。

その世界樹が今、

「崩れ落ちたか」

完全に崩れ落ち、轟音と強い突風を生みだし、やがて沈黙した。何が起きているのかわからない。

世界樹の起動を阻止するのが目的だった。その世界樹が枯れた。崩れ落ちた。

これはどういうことなのか、全然理解できない。

「ローゲルさん、これはどういう……」

「……世界樹の起動が、巨人の復活が近づいている」

「なっ!? 悪魔の樹は枯れたのだぞ!? まだ終わらんと言うのか!」
「世界樹の力のほとんどが根に送られただけだ。そこに巨人がいる。シウアンと殿下も、な……」

もうすぐ巨人が蘇る。

かつて神話で呪いを振りまいたとされる、巨人が。

「……率直に答えよ。阻止はまだ間に合うのか」

イシユがローゲルさんを見つめながら聞いた。

今この場で、あの世界樹について詳しいのはイシユではなくローゲルさんだ。

「まだ間に合うはずだ……力が根に集まっているが、次に巨人へと移る段階がある。それが終わるまでに心臓を取り戻せば間に合う」

「そうか。ならば問題ない」

趣味の悪いノアに乗りこみながら、いつも通りの言葉をイシユは言い放った。

問題ない、確かにそう、なのだろう。うん、そうなのだ。問題ない。まだ間に合うのだ。これは問題ないと言うこと以外見つからない。

「早く乗れ、置いていくぞ」

「ま、待ってくれ!」

いつものように返事を返そうとしたら、先にローゲルさんが声をあげた。それも待ったである。

「なんだいったい」

「俺も乗せてくれ。虫のいい頼みだとはわかってる。許されないことをしたということも。だがそれでも、乗せてほしい……殿下が追

詰められていることに気づかなかったような奴だが……これ以上、手遅れになりたくない……」

「帝国とやらの計画を最も知っているのは汝だ。情報源としての価値がある以上、汝は連行するに決まっているだろう」

聞きようによつてはツンデレとも捉えれそうな言葉だ。

まあイシユのことだし言葉通りの意味しか込めてないだろうけど。

「ほら、ローゲルさん。早く乗りますよ」

「昨日の敵は今日の友と言う。後ろめたいと思うのであれば、共に戦いこの苦難を越えようではないか」

「……ここで言い争う時間も惜しい。それに、貴様には幽谷での借りがある。いいな、次はないと思え」

「本当に……お人好しな奴らばかりだな。まるであいつらみた——ぐお!？」

まだ何か言っていたローゲルさんに、イシユの堪忍袋の緒が切れたのだろう。喋っている途中に強引に引っ張られ、情けない悲鳴をあげたローゲルさんだった。

乗った時に小声で彼は「やっぱりあいつは嫌いだ」と呟いたのが印象深い。

折れた世界樹の根元を見れば、ウロが広がっていた。ノアを降ろすには充分すぎるスペースである。ノアだけではない、もっと大きなものでさえも……

そこまで考えて、理解する。これはきつと巨人に合わせたサイズなのだろう、と。小さな街程度なら覆えるほどのサイズ。

ローゲルさんがみんなに向かつて一言。

「先に言っておく。中はどうなっているか俺もわからん」
「使えん奴だ」

「全くだ」

「ま、まあそういうこともあるよ」

「ちゃんと調べておいてくださいよ」

なんとも微妙な表情を浮かべているが、正直な感想を述べたままで。キバガミさんもきつと本音では同じようなことを思ったはずだ。「し、仕方ないだろう。俺は元々肉体労働派なんだ。多少は計画のことを知るために学舎に足を運んだことはあるが、専門的なことはわからない」

「知っていることを洗いざらい吐け」

「尋問……わ、わかったよ。といっても、この中にはかつて滅んだ人間の都市がある。煌天破ノ都、と学者たちは呼んでいた」

ウーフアンに睨まれながら情報を言うが、名称なんて正直あまり……

「名前なんて全然参考になりそうにないですね」
「全くだ」

私とウーフアンの言葉にわなわな震えているが、自身もそう思っているのだろう。特に言い返すことはなかった。

「だがそれはつまり、人工物があるということだろう。侵入者を排除する罠などがあるやもしれん。それがわかっただけでも御の字よ」

「キバガミ……あんた、いい奴だな」

キバガミさんは甘やかしてしまうタイプのようだ。

ローゲルさんからの感謝の眼差しに、やや居心地の悪そうなキバガミさんだった。

やや緊張感が欠けた状態となってしまうたが、ノアはどんどんと沈んでいく。

外の明かりが届かない暗い場所へと進んでいるはずなのに、澄んだ月明かりが未だに届く奇妙な場所。

碧照ノ樹海で体験した違和感と同じだ。それがあそこも世界樹の一部だったことを証明するかのようで。

樹の内側はすでに植物ではなく、完全に都市の形を残していた。過

去の住居だろうか、あちこちに小窓が見える。当然誰も住んでいない。

ようやく降りれる広さがある場所が見えてきた。

ノアをそこに着け、煌天破ノ都に足をつける。

キバガミさんとローゲルさんが正面に目をやる。

「ローゲル殿、あれは……」

「……俺もわからん」

二人が示したのは巨大な門だった。

門には各地で見た紋章が書いてある。門は固く閉ざされており、押しても引いてもビクともしない。

「イシユ、君の馬鹿力でどうにかならないか」

イシユは門の前に立ち、大きく剣を振りかぶった。また剣が壊れるんじゃないだろうか。

「山行水行」

なんだか久々に聞いた技名である。

しかしただの超大振りな山行水行でも門はビクともしない。

「我の力でも壊れぬか。他の入口を探せ」

「もしくは手掛かりだな」

そう言って近くの小部屋や通路、壁を細かく探す。

ここで足踏みをしている暇はないというのに、これでは人手が足りない。

「アルメリアー！ イシユー！」

突然後ろから、いや、後ろの上の方？ から声が掛けられた。

振り向き見上げれば、

「ウイラフさん……と、軍艦？」

「帝国の……」

赤い気球艇と黒い軍艦、他にも気球艇があるが、特に目を引いたのは軍艦である。

まさかまだ抵抗するつもりかと思ったが、軍艦から兵士が全力で手をこちらに振っている。

「ローゲル卿！」

「彼は……そうか、自分の気持ちに素直になつたつてわけか……」
その声には私も聞き覚えがあつた。

あの人は、ローゲルさんに砲剣を渡した兵士だ。

「……大丈夫だ、あいつらは敵じゃない。心強い味方だよ」

「なるほどね。まだヤバイ状況つてわけね」

合流した人たちへの説明は、私とローゲルさんが担当した。

イシュたちはその間に別の入り口を探している。

ウイラフさんは話を聞いて、未だ危険ということをつかつたようだ。それにしても、ウイラフさんがいるのにキルヨネンさんがいないのはなんだか珍しい。

「キルヨネンさんは帰つたんですか？」

「別に私とキルヨネンはセットで行動してるわけじゃないんだけど……ギルド長とタルシスに戻つたよ。世界樹が倒れたから辺境伯の指示を聞きにね」

どうせなら合流してから戻れば良かったのに、と思わなくもない。

「おい、手掛かりのようなものがあつたぞ」

そこにウーファンのぶつきら棒な声が入つてきた。

まだイシュとキバガミさんは戻ってきていない。

「向こうに古い言葉で門について書いてある壁画があつた」

「へ、壁画……」

「なんて書いてあつたんだ？」

周囲の視線を一身に受けながら、つまらなさそうにウーファンは言った。

「四人の王の認証を受けろ、とあつた。そうすることによって門は開

かれるとな」

「四人の王つて誰ですか……」

「それについては書いていない。王というのはなんらかの比喩だろう。人物ではないはずだ」

四つの何か、と言い変えてみればいいのか。

人物じゃないとなると、少しだけ予想が出来上がる。

「……祭壇」

「それしかないな……」

私とローゲルさんの予想が一致した。

碧照ノ樹海、深霧ノ幽谷、金剛獣ノ岩窟、木偶ノ文庫。

この四つの最奥には祭壇があった。そしてその祭壇にある紋章は、門と同じもの。

碧照から見えていたからすぐに結びついた。

しかし祭壇をどうすればいいかはわからない。とにかく行ってみるしかないんだろうか。手探りの状況。時間の余裕はそれほどないというのに、だがそれを愚痴つても仕方がない。

「何かわかったか」

「あ、イシュー！ この紋章があった各地にある四つの祭壇に行けば何か、わかるかも……？ って程度のことか」

いざ口に出してみるとなんと不安要素しかない判明なのだろう。

これはわかったと言えるレベルなのだろうか。

「各地の祭壇……石盤のあった場所か。なんとも準備のいい話だ」

「はい？」

「ここから西に樹海地軸が備えられていた」

「ジユカイ……なんですそれ？」

急に専門用語のようなものを出されても困る。

素人を苦しめる第一歩が専門用語なのだ。術式書も特定の分野を知っている前提で書いていくから困る。

「汝に理解できるように噛み砕くならば、世界樹内の特定地点へ瞬時に移動できる装置だ」

「なるほど、わかりません」

全然わからん。

「それを使えば、深霧ノ幽谷にも瞬時に移動が可能なのか」

「うむ。幽谷にある地軸の元まで移動ができる。幽谷の地軸がどこにあるかまでは、まだ調べていないがな」

イシユはそこまで言つて、西へ歩きだした。

ペースがやや遅めなのは、ついてこいということだろうか。

「私たちは私たちが門の向こうへいく方法を探してみるよ。状況が良くないし、色々と試してみないとね」

「わかりました。それじゃあ」

ウイラフさんを残してイシユについていく。

イシユはそのまま振り向かず話を続けた。

「あの門が創られた時代を考えれば、我の知る時代より後だ。となれば門の開閉は、我の知る科学とはまた違う技術を混ぜたものによつてなされている」

「……つまり、君の知識は使えないわけだ」

「我とてすべてを瞬時に理解できるわけではない。時間さえあれば別だが」

正直未だにさっきの樹海地軸とやらがよくわかってないんだけど、瞬時に移動つて言っていたけどもそのままの意味だろうか。だとすれば移動時間は短縮される。

辿りついた小部屋、というより小さな広間となっている場所には何も無い。

キバガミさんがいるだけだ。樹海地軸とやらはどこなのか。

「全員そろつたな」

そう言いながらイシユは広間の壁に手を掛ける。

すると壁が音を立てて横にズレていった。

隠し扉とか初めて見た。

中にあつたのは、奇妙な桃色の光、の柱。

「これが樹海地軸というやつかい」

「そうだ。碧照、深霧、金剛獣、木偶。そのどれもに移動できるように設定する。事態が思いのほか悪化している。一つ一つ回る時間は惜

しい」

地軸に手を掛けながらイシュは振り向き言い放った。

「それぞれの場所に、汝らを一人ずつ送る。そこで各自、鍵を解除せよ」

言わんとすることはなんとなくわかる。

鍵というのはあの門を開ける認証のことだろう。だけどその鍵がどんなものか、全くわからない。どうすれば解除になるのかもわからない。

わからないだらけのこの指示。

「わかりました。私は碧照にお願いします」

ウーファンも、キバガミさんも、ローゲルさんも戸惑う中、真つ先に自分の希望を言った。先手必勝的な。

碧照はタルシスと近い場所。そして私の初めての冒険場所だ。思入れもあるというもの。あと今なら熊程度、焼き払える気がする。

「アルメリア、今の話ではまだわからないことが多い。もう少しよく考えてから……」

「いくら考えたってわかりませんよ」

「これ以上説明したところで汝らにわかるはずがない」

「らしいですし」

絶句みたいなリアクションをされたが、ローゲルさんも散々イシュを見てきただろうに。これくらい普通と思ってもらわないと困る。

それにイシュに頼り切りというのは私は避けたいのだ。ならばこの展開は願ってもない状況だったりする。切羽詰まっているという点を除けばだけど。

「ならば私は深霧ノ幽谷に頼む」

「拙者は金剛獣に。やはり縁ある地がよい」

次いでウーファンとキバガミさんが希望を言った。

二人とも生まれ育った地だ。正確にはその中にある里だけだ。

「では木偶は汝が赴け」

「……あー、わかったよ。それで、君はどうするんだい」

余った木偶はローゲルさんに決定した。

帝国騎士として動きまわった木偶ノ文庫は、彼にとっても馴染みのある地だしいい采配な気がする。

あとはイシユがどうするかだけだ。

「我は地軸の制御でここから離れられぬ。本来これは、設定された同一箇所のみを行き来するものだ。汝らに設定を操作できる知恵があれば別だが……」

そう言つて地軸に顔を向けながら、チラリと目線をこちらに向ける。

それに対して私たちは、

「無理です」

「悪魔の技術など知らん」

「拙者は力仕事ぐらいしかできぬ……」

「俺もさっぱりだ」

「元より期待していない。はやく行け。ここに戻るときはその地にある地軸に触れよ。それだけでいい」

どこことなく冷めた眼でイシユが言った。

あとはなるようになれ。いや、確実にやることをやり遂げればいい。簡単な話である。

樹海地軸と言われる光の柱へ近づく。

「まずはアルメリアか。……碧照に設定した。行きも帰りも同じだ。触れるだけでよい」

「はい。それじゃ、行ってきます」

光の柱に触れると、視界が輝きでいっぱいになっていく。あまり繰り返したくない感触だ。

ひとりで樹海へ赴く。

考えたら初めての経験だ。ゲン担ぎというわけではないが、行つてきますという言葉を使った。行つてきますと言ったのだから、ちゃんと戻ってただいまを言わないといけないのだ。

「うむ、気をつけて行くのだ」

「ほあ——」

予想外の見送りの言葉に、間抜けな声が出てしまった。幻聴ではと、確認したい衝動に駆られたが視界が戻ったころはそこにイシユの姿はなく、

耳に届く音は、声などではなく。

揺れる葉の音、流れる水の音。

鳥が囀り、虫が囁き、遠くから獣が吠える音が聞こえた。

「碧照ノ樹海……」

かつて熊の魔物が多く暴れた森の迷宮。

世界樹を目指したタルシスの人たちを邪魔していた最初の奇妙な樹海。

あらゆる動物や魔物が生活する樹海に、私は戻ってきた。

第五章

50. 誰かの墓標

通り抜ける風が、草木を揺らし音を立てて去って行く。
どこからか、水の流れる音がする。

足の裏には柔らかな土の感触。空は月明かりを遮る雲一つない快晴。きつとここは地下だろうに、快晴。

空に関する事情を除けば、なんとも平和だったんだ。碧照ノ樹海と
いうのは。

本当に深霧や金剛獣、木偶の担当にならなくてよかった。

わけのわからない霧に満ちた森や、寒暖激しい洞窟、襲いかかる石
像だらけの木偶と比べれば楽園である。

こりや熊たちも棲みつくのもわかる。

背後には樹海地軸。

今はまだ触れるときではない。戻れるか試す必要もないだろう。
イシユが制御してくれてるんだから。

碧照の雰囲気に吞まれている暇はない。鍵の解除だ。

鞆から地図とペンを取りだし、この場所を記す。

「よし、やるぞう」

気合いは充分だ。あとは動くのみだ。

力強く地面を踏みしめ、樹海の奥へと突き進んだ。

歩きだすこと数十分、できる限り息を押し殺しながら慎重に進む。
あちこちの木や壁に大きな引っ掻き跡があるんだもの。絶対これ
は縄張りを示すやつだ。

この縄張りの主は森の破壊者だろうか。あれから術式は強くなつたとはいえ、先制攻撃をされたら私はあつさりバラバラ死体になってしまう。そう思うと慎重にならざるを得ないのだ。

「ひ、ひとりが……まで……心細いものだったなんて……」

眩いた途端、そばの茂みがガサガサと揺れる。

咄嗟に短剣を向けて警戒を行った。だが出てきたのは小動物。リスだ。魔物ではない。

安心とともに神経がすり減っていく感覚が心臓に悪い。

ダメだダメだ。この調子じゃ心が壊れてしまう。

リスは茂みから飛び出てきたが、その姿を隠すことなくそこにいる。

ここはあれだ。愛らしいリスの姿を見て癒されよう。もしも魔物が来たら燃やしてやる。

そう思ったのだがしかし、リスの様子がなんだか変だ。

移動するわけでもなく、愛嬌を振りまくわけでもなく、じっとしている。

奇妙に思い、逃げられるかもと考えながらも少し回り込んでその顔を拝もうとして、

「……っ!?!」

すぐさま術式の準備をする。敵は不明。とりあえず爆炎だ。

リスは泡を口から吹き出し、生気を完全に失っていた。

パツと見たところ外傷はない。となると、毒か何かだろうか。外傷もなく体内に毒が入り込むとなると……

また茂みから生き物が飛び出した。いや、今度はパタパタと、ゆっくりと揺れるように出てきた。

蝶だ。それも大きなアゲハ蝶……の魔物。それが五匹。

碧照でよく見た魔物、シンリンチョウとはまた違う色を持っている。

「鱗粉……」

リスの様子を見るに、毒の鱗粉を持っていると考えるべきだ。それも致死性が高いもの。

ばたばたと、リスのもとへ、いや、私のもとへと向かうように飛んでくる。

危険とわかり、なおかつ向かってくるのなら一切の遠慮はない。爆炎を全力で解き放つ。

術式によつて起動した炎は毒アゲハを呑み込み消えた後、そこには焼け落ちた虫の死骸だけが残った。

勝ち誇りたいところだけど、完全にやらかしてしまった。

今の爆炎の音はまずい。近くにいるであろう獣の魔物を呼び寄せかねない。

「と、とりあえず移動しなきゃ……！」

とりあえずこのあからさまに歩きやすく、見通しのいい道は不味い。一本道のようだし、ぼったり出くわす可能性が高い。

動物が一切通らない道であれば歩くのは困難。獣道ならばもう少し歩きにくい。

一方この未踏のエリアはというと、とても歩きやすい。ということ、大きな魔物の通り道だからだ。

せめて隠れる場所、隠れる場所。さっきのリスが出た茂みくらいか？ ちよつとまだ毒とか残ってるかもだからすごく怖い。

他は……駄目だ、どこも壁のように隙間なく木々が立ち並んでいる。入る場所がない。

「うひ……」

それほど離れていない距離から、獣の咆哮が聞こえてきた。

響く唸りから一頭だけのようだし、なんとかなる……？ いや、そもそも本当に森の破壊者なのか。火に耐性のある魔物やタフな魔物だったら終わりである。

蝶の魔物ですら命の危機に繋がると今さつき感じたんだ。油断など一切できない。

まだ咆哮の主は見えない。が、色々と破壊しながら向かっているのだろう。木々の裂ける音が聞こえてくる。破壊者っぽい気がしてきたが、嫌な予感が止まらない。

隠れる一択だ。

こうなったら茂みに入るしかない。

だ、大丈夫。きっとあの鱗粉はもう散った。でも念のため息は止めて入ろう。

「……！」

いぎ、と茂みに入れば思いのほかスペースがある。

というか、ちよつとした通路だ。すぐくわかりにくいけど。抜け道、だろうか。

隠れた通路に入り切る前に、茂みの中からそつと外を盗み見る。

縄張りを主張し、あれほど音を立てて迫ってきた魔物だ。

となるとこの辺りの生態系で上位の魔物。森の破壊者だったらいいな、という確認である。

そこにいたのは、青い毛並みの熊の魔物。毛並みというか、長髪ヘアスタイルと言いたくなる熊の魔物だった。

……前髪なつが。

しかし前髪の下から時折見える目は、不気味なぎらつきを放っている。森の破壊者よりはるかにヤバイ奴、という印象だ。下手に戦うのはやめた方がいいだろう。

青い熊は置いておいて、できる限り音を立てないように隠し通路を進んでいった。

しばらく歩くと行き止まりに狭い穴があった。這って進めば入れそうな穴だ。

魔物か動物の巣か、それともまだ先へ進める抜け道か。

穴の周辺の地面をよく観察する。このサイズはサソリの魔物が巣にしてそうだけど……サソリの這った跡はない。

小さな動物の足跡があるが、これはあのリスのだろうか。だとすればここも通り道なのかもしれない。

引き返しても一本道でかつ、あの熊がいる。

ならば、と這って穴の中をさらに進むことにする。実は行き止まりでした、なんかじやありませんようにと祈っていると顔に風が当たったので、普通に通り抜けが確定した。

這って進むというのは全身運動すぎる。

なんとも土だらけになりながらようやく外に這い出ることができた。

外の光が眩しいぜ、と言いたくなる。

それよりも、だ。ようやく立つことができ開放感を感じていたが、周囲の確認をしなくては。

魔物の姿は……なし。代わりに、

「……人骨」

人骨が二つ、いや、二人、寄りそうように並んで倒れていた。

死体は獣に食い荒らされたわけではないのだろう。残っている布地や皮鎧を見るに、この人たちも毒でやられたのか。白骨化するほどの長い年月の間、ここに晒されていたのだろう。

死体を荒らされなかったことを考えるに、この辺りは大きな獣や魔物は入り込みにくいのか、気づきにくいのか。骨の人たちには悪いが、少しだけ安心してしまおう。

それにしてもここは誰も足を踏み入れていない場所のはずだ。碧照ノ樹海が調査されていた10年分は余すことなく調べられていたのだ。おそらく木々の壁を無理やり越えなくては辿りつけないほどの奥地。

よっぼどの向こう見ずな冒険者だったのか、それとも何か強い目的があったのか。

この人たちの装備を見るに二人とも剣士だったようだ。

あの毒吹きアゲハ相手に剣士だけではこうなるのも仕方のないこ

とかもしれない。獣型の魔物相手が入り込めず、ここは先の蝶の魔物が棲みやすい場所だったのかもしれない。そんな場所に迷い込んでしまったこの二人は、運が悪かったのだろう。

ここで見つけたのも何かの縁。

世界樹起動の阻止のために時間はないとわかっているけど、二人のお墓を作りたくなった。何故か、作らないといけないと思った。

サンクトウスをスコップ代わりにして土を掘る。

ルーンの刻まれた短剣をこんな扱いするのは私くらいだろう。

そうやって掘った穴は、なんとか二人の骨を埋めれる深さだ。とはいえずぐに掘り返せるほどの浅さでもある。

「ごめんなさい、私では深く掘るのは難しいです。それに時間もありませんから」

二人の骨を穴に並べる。

寄り添いながら最期を迎えたこの人たちは、とても親しい仲だったのだろう。恋人同士だったのかもしれない。

添える花がないのが悔やまれる。欲を言えばタルシスまで連れて帰り、吊ってあげたかった。

「それじゃあ、私はもう行きますね。どうか安らかに」

途中魔物と遭遇することなく、流れの強い川まで辿りつく。

本当にこの樹海はどうなっているのか。この川はどこから生まれどこへ行くのか。今度イシユに聞いてみたらわかるだろうか。

向こう岸までなんとか行けないものか。濡れるのをお構いなしに行けば……でも足を取られたら不味いしなあ。

「んあ」

向こう岸とこちらを繋ぐロープがあった。と言っても随分と古そ

うなロープである。これはあの二人が張ったのだろうか。

これを持ちながらなら、流されずに渡ることはできそうだ。

……ロープが持てばの話だけだ。

ああ、さつき弔ったあの二人組。弔ったお礼に加護を、どうか私を守ってくださいもといロープが千切れないように祈っててください。

そんな似合わない神頼みをしながら川へと突撃を決めた。

結果的に無事に渡れた。ロープも千切れていない。つまり帰りも問題ない。きつと私の善行の成果である。

しかし地図の出来がひどい。過去最低の出来ではないだろうか。

本来の道から大きく外れているせいで、どう繋がるかさっぱりわからない。というかそもそも認証のための鍵はどこなのだ。

とりあえず人工物的なモノがあればそれだと思っただけど、それっぽいのが全くない。

「とか思ってたから見つかるとは……」

明らかな人工物。

だけど鍵っぽくはない。扉だ。

どうやって開けるのかなこれ。なんか普通の扉と違う。取っ手がないし、押戸ってわけでもないし……

適当にペタペタ触っていると、地響きのような音を立てながら扉が左右に開いていく。開いたことによって、扉の分厚さが数メートルはあるということが判明した。

どういう意図でこんな扉を作ったのかよくわからないが、ひよつとしてこれは当たりなのではないだろうか。

この先に鍵が……

「……………」

「……………」

知らないおじさんがいた。

そのおじさんの周囲には見慣れた鎧姿。タルシスの兵士の姿が

あつた。

「な、何か大きな音が聞こえたと思つたら、ニーズヘッグの……どうしてこちらに」

「え、と。私もあなたたちが何でここに居るのか聞きたいんですけど……」

私の言葉にそれぞれが顔を見合わせる。そんなに変なことを言つただろうか。

「我々は世界樹の異変に何かわからないかと、祭壇の調査を改めて行っていたのですが……」

「祭壇……？」

それですそれ、と背後を指さされる。

「あ……」

ここ、あのボス熊と戦つた場所だ。石盤の置いてあつた祭壇だ。

後ろを見れば扉を開けたことによつてか、形が変わつてしまつた祭壇がある。

「それで、あなたはいつたい何故ここに。それもおひとりで」

「えつと……鍵を探して……？」

「鍵？」

「なんと云えばいいの……とにかく！ 世界樹の起動阻止はまだ間に合ふんです！ そのために鍵を探してます！ 何か知りませんか！」

説明をどうしたらいいかわからず、とりあえず勢いで一気に言う。

しかし目の前の兵士も、おそらく学者であろう知らないおじさんも何も知らないようだ。

背後の祭壇はただの扉、だつたのだろうか。それともこれが鍵なのか。

認証を受けた感じがしない。ダメだ、わからない。

「よ、よくわかりませんが、我々は鍵と言うのが何かわかりません。とつか世界樹の起動とはいつたいなんですか。それに……世界樹が枯れたのと何か関係が——」

この兵士は世界樹計画を聞かされていない？ 混乱を避けるため、だろうか。

だけど世界樹が枯れたのは知っている。まあ見えてたのだろう。となると、私が勝手にあれこれ言っているものか判断がつきにくい。

「詳しくは辺境伯に聞いてください！ 答えるかわかりませんが！」

「は、はあ」

「あと！ この祭壇の先は危険な魔物が多くなります。森の破壊者よりも危なそうなのが。なのでここで引き返してください。ついでに辺境伯に、まだ間に合う、報酬はお金がいいと伝えてくれたら嬉しいです」

祭壇側の扉はそれほど大きくないから向こうから熊が来ることはないだろう。だけど毒吹きアゲハのような大きさの魔物なら問題なく通れてしまう。

扉の閉め方がわからないから注意喚起しかできない。

「猛毒をまき散らす魔物がこの先多いんで、絶対に入ったらダメですから！」

「は、はい。あなたはどうするつもりですか」

「引き続き鍵を探します！」

調査済みの場所に鍵らしきものはないはずだ。

祭壇の向こうのどこか、だからまた危険地帯へ行かないとならない。

再び祭壇の通路を突き進みながら、少し落ち着いて考え直す。

鍵について、だ。

人工物だろうと考えているが、そもそも何年も、何百年も樹海にあるものだ。適当なところに置いていたら魔物たちが破壊するか持っていないてしまいかねない。

となると、魔物が入り込めない場所だ。頑丈な箱の中に入れてあるのか、もしくは扉と壁に囲まれた部屋。

それと、鍵の意味はなんだ。

今回あの門が閉ざされていたが、巨人の起動が迫っていることを考えると、門を閉ざしたのは皇子だろう。大昔に、今回と同じように巨

人の起動を邪魔されないように作られたのが門だとすれば、なんで鍵が外にある。

ただの時間稼ぎにしては詰めが甘い。チグハグだ。

鍵を無くしたときの保険、みたいな合鍵とかだろうか。一気に規模が小さく感じてしまう。

しかしいくら考えても合鍵という意味合いでしか頭に浮かばない。時間稼ぎ兼、保険という意味での。

移動の省略にあった樹海地軸。祭壇の扉。

これらを使えばあつという間に門の前に行けることを考えると、その途中に合鍵を置くのは防犯上アレだ。時間稼ぎの点を考えるとちよつと不味い。

地図を取りだし、祭壇の通路を描き足して、繋げる。

空いた箇所は南東、及び西。地軸の位置関係を思うなら南東は除外。

根拠としては弱いが、今は1%でも確率が高い場所を探すしかない。よつて、進むべきは西だ。

隠れながら、時に魔物をやり過ぎしたり、時に背後から奇襲を掛けたり、時にゴリラの物まねをして魔物との交戦を躲したりしながら奥へ進む。もらったバナナが美味しい。

地図を描き足して確認。問題ない。

起動の時間稼ぎだけでなく、合鍵として考えれば、どんどんと目標が絞れてくる。道から外れることはない。偶然できた抜け道の向こうに置いている、なんてことはないだろう。

となると、歩きやすい道の先にある。年月によって草木が生い茂ってしまっただが、それでも名残があるはずだ。あるいは獣道となったか。

だから壁に沿って進めば問題ない。

「二頭……」

通路の先、水場のそばに二頭の青い熊がいた。番いだろうか、それともただの仲良しさんか。

お魚でも取りに来たのだとしたら、さつきと取ってどっか行ってほしい。

そんな祈りもむなしく移動する気配はない。

こんな時、イシユならどうしていたか。考えるまでもない。突っ込むだろうな。

というか森の廃鉱の時も似たような場面あったや。あの時も突っ込んでいた。時間が惜しいと言いなから。

……………よし。

「時間が、惜しい」

いつまでもイシユに頼りつきりじゃダメなのだ。

私もできることを、証明するためにも前へ踏み込め。

熊たちが近づいてくる私に気づいた。

前髪を鬱陶し気に払いながらこちらを捕捉する。どういう理由でそんな前髪の進化を遂げたのか。

二頭が同時に立ち上がり、聞く者の戦意を削ぐような雄たけびをあげた。

素通りできたらいいなーとか考えてたけどやっぱり無理か。

水場を挟むようにした立ち位置。水を気にせず突っ込んでくるか、回ってくるか。

どちらにしろ、距離が開いているうちに先手必勝である。

「ほやあああー」

二頭に向けて爆炎の術式を放つ。なんの遠慮もない爆炎だ。

大きな音は不味いとか考えてられない。どうせ今のところはこの熊たちがこの辺りの頂点なのだろう。

だったら出し惜しみせずに燃やしてやる。

できたら今の爆炎で終わってほしい。もしくは怯えて逃げてほしいところだ。

そんな願いとは裏腹に、元気よく駆けだした熊たち。

どうやら水場を回りこんで来るようだ。それなら、回り込まれて追

いつかれる前に、

「とやああああ……あ？」

水場の向こうからの一方的な攻撃を浴びせてやる。

そんな気持ちで凶鳥烈火を放とうとしたけど、火が上がらない。

ローゲルさんと戦ったときは、絶好調だったのに……

「うぎゃ……」

首をひねっている場合じゃなかった。水場を回りこみ、あとは一直線に距離を詰めるだけの状態の熊たち。

爆炎を一度浴びていながらやる気満点なあたり、距離を詰められたら不味い。巻き込み爆炎なんて意味もなさそうだ。

これはあれだ。

「し、失礼しました!!」

逃げるしかない。

まだ距離は空いている。そんなわけで反転して走りだす。

ドシドシと、重量ある熊たちの地面を蹴る音がよく聞こえるものだ。

振り向かなくてもわかるくらい追いかけている。

全力で走りながら、あてずっぽうに振り向かずには却火を放つ。一直線だし当たってくれるだろう。振り向いた途端に爪が振り下ろされる気がしたので、走りながらだけど大丈夫だきつと。

当たったような業火の燃え上がる音が聞こえ、すぐにまたドシドシといった重い音が聞こえてくる。

こいつはダメだ。やっぱり手を出しちやダメな奴だった。

「……」

前方に明らかに人工物な扉を発見。

鍵の在り処の可能性が高い。それにずっと置いてあるということ
は、すごく頑丈な扉のはずだ。

扉に駆け寄り全力で引っ張る。開かない。どうやって開くんだこれ。あ、押せばいいだけか。

押したと同時に慌てすぎたためか、倒れこむように中へ入った。それと同時にゴロゴロと大きな音を立てて別の何かも中に入ってくる。

「うそお……」

青い熊が一頭、中に入りこんでしまった。もう一頭は中に来ないようだ。

まるで怒っているかのような荒い息遣いの魔物の様子。熊の物まねをしたところで誤魔化せそうにない。

ドタドタと距離を詰めて剛爪が襲い来る。

みつともなく跳ねるように必死に動く。意地の回避である。あんなの当たったら裂けてしまう。

「へ？」

勢いよく振り回された剛爪は扉に当たった。扉の強度がとんでもなかったのかその結果、ポツキリと折れてしまった。

その事にさらに怒り狂う熊の咆哮が響いた。

今の私のせいじゃない。なのに怒るのは見間違いじゃないだろうか。

思わず後ずさりすると、ゴツリと硬質な何かに当たる。

木々の壁とは全然違う硬いモノ、石よりも冷たい何か。

確認する前に熊が馬鹿太い腕を振り上げて襲って来た。

掌底のような、張り手のような形で迫る熊の肉球。辿りつく先は私の顔面である。肉球で死亡とかあんまりだ。絶対避けなくてはならない。

肉球パンチ、というには恐ろしいほどの大きな音が響いた。

頭上スレスレの位置にある剛腕が、もう少し遅れていたらどうなっていたかを想像させて息がひきつる。

次いで聞こえてきた音は、追撃の轟音などではなく、森の中にはそぐわない異音。

そしてなぜか光りだす私の背後。

光に照らされた熊は驚きと眩しさのためか、腕を引いて顔を隠した。

案外あの前髪のせいで、光をまともに見るのは苦手なのかもしれない。

後ろから聞こえる異音、駆動音のような、歯車の回る音のような、奇妙な音については今は確認してられない。

「うやあああああー!」

短剣を構えながら、なんだか得意になってしまった至近距離の爆炎を放つ。

熊の大きな悲鳴を聞きながら、次の術式の準備。今度は却火である。

さすがに却火となると、サンクトウスとレッドタブレットでも熱さを感じる火炎。頬がチリチリと痛む。

業火をまともに浴び続けた熊は、火が止むと同時にズシンと倒れた。

結構私って戦えるようになってる。確実に、頼らなくてもいいほどに。

完全に死んだのを確認し、異音と光を放つ背後のものをようやく確認する。

そこには巨大な祭壇と、あの紋章があった。

これが鍵だろうか。持ち運びはまず無理なサイズだ。キバガミさんよりもはるかに大きい祭壇だもの。

なんだかよくわからないが起動している様子。熊の肉球パンチで動き出したのだろうか。ということは、これで認証は終わったということか。

「……熊が認証を受けちゃったけど、大丈夫かな……」

不安になったので一応ぺたぺたと触ってみるが、特に変化はない。だが離れて少しすると今度は巨大な鐘のような音が鳴り響いた。それに呼応するように、地面が大きく揺れる。

世界樹に変化があったときも地面が揺れたせいで、また何かが起きたのかと不安になる。間に合わなかった？ いや、そんなはずがない。

やがて音は止み、揺れも収まった。

なんだか怖いけど、大丈夫だと自分に言い聞かせた。

51. 浄化齋す楽園への導き手

鐘の音が鳴りやんだ。

何がなんだかよくわからないままだけど、おそらくこれで碧照の鍵は動かした。動かしたのは熊だけだ。

今度は樹海地軸まで戻らないと。

またあの川をロープで伝っていくとしよう。あ、でもその前にこの部屋の外に熊がもう一頭いるんだ。それをまずは振り切るか倒さないと。

そんな悩みは部屋を出ると無くなった。熊が倒れていた。走りながらの却火であるの時倒してたのか。

樹海地軸に向かう途中、一応祭壇の様子を見に行く。

同じ紋章だったし何か変化がないか、あと誰も入ってきてないかの確認である。

何もなければ無いで、誰も入らないように祭壇の入口に書置きをしておくつもりだ。

「ええ……なんでまだいるんですか」

さっきの学者さんと兵士さんが残っていた。

「帰還しようとしたのですが……先程の大きな揺れと鐘の音が気になりました、それで祭壇を見に戻って来たのです」

まあ祭壇の変化はありませんでしたが、と兵士は続けた。

「そうですね。さっきの揺れについては私もあまりわかってません。とにかくここは危険です」

「は、はい。あ、そうだ」

まだ何かあるのか。

何かを思い出したかのように兵士が尋ねた。

「キルヨネンを見てませんか？」

「はい？」

キルヨネンさん？

「いえ、見てませんが……」

「そうですか……」

「何かあったんです？ ギルド長と共にタルシスに向かったと聞いてますが」

確かウイラフさんが言うには、キルヨネンさんはギルド長と共にタルシスに戻ったはず。

「それが帰還中にはぐれたそうなのです。気球艇に不調でもあったのか……」

キルヨネンさんがはぐれた。

事態が事態でないなら私も搜索したいところけど。

「絶界雲上域にいるはずのあなたがここにいるのでもしかして、と思っただのですが……」

「私の方は不思議な古代の技術のおかげです。キルヨネンさんについてはさっぱりで……」

「なるほど、情報ありがとうございます」

では我々はこれで、と言って、兵士と学者さんは今度こそ帰還した。世界樹の異変が恐ろしくなって去った、とかはあの人に限っては考えにくい。気球艇がちよつと変になったとかだろう。

一段落したら搜索隊が組まれるだろう。それまであの人なら耐えてくれる。

そんな楽観視をしながら、今度は真っ直ぐ樹海地軸に向かった。

帰りは特段問題が起きることなく、光の柱の前にたどり着く。

イシユは戻るときも樹海地軸に触れるだけでいいと言っていた。その点の心配はしていないが、他の三人は大丈夫だろうか。

地図を描く習慣のないウーファンとキバガミさんとか鍵を見つけるのか。見つけられたとして、今度は樹海地軸まで戻ってこれるのか。

ローゲルさんは一人で冒険をしてきた経験があるし、すぐに鍵を見つけて地軸まで戻ってそうだが、その場合はイシユと二人になってしまふ。喧嘩してないだろうか。こんな時にするとは思いたくないけど、やってそうに思えるのは何故だろう。

まあここで考えても仕方ない。

えいや、と光の柱に触れた。

光に染まる視界が収まると、そこにはいつもの人たちの姿。

イシユとローゲルさん、それにキバガミさんとウーフアンもいる。ということとは……

「……私が一番遅かったんですか」

ウーフアンよりは早く戻りたかった。謎の敗北感が心を占める。

「なに、お主と拙者ら、それほど大差はなかったぞ」

キバガミさん優しい。

「火力のない私の方が早いのはどうかと思うがな」

ウーフアンうるさい。

流れに乗るかのように、ローゲルさんも何かを言おうとしたが、

「アルメ——」

「よくやった。先程門が開いたと報告があった。汝は無事にやり遂げた」

イシユのお褒めの言葉が彼の言葉をかき消した。

わざとではないと思うけど、まあいつか。それより行きの際の言葉を成立させよう。

「はい、ただいまです」

おかえり、という言葉は帰ってこない。うむ、といった感じの頷きをしたあと、

「我らも都の中に入る。巫女を取り戻すぞ」

今度こそ煌天破ノ都、その攻略に乗り出した。

門を潜ると違和感が襲った。

見える景色こそ、古代の都市の荒廃した姿だ。石造りの建物には植物の、枯れた根が絡み付いている。緑はそこにはない。だというのに感じる空気や雰囲気は森林の中を思わせる。

木偶でも森の雰囲気を感じたが、あそこには多くの植物が繁っていた。本棚ばかりが目をついたが、至るところに蔦や葉が侵食していた。緑がどこにでも目がついた。

それと比べると随分やりにくい。

見える景色と感じる周囲のズレ。それはたった今歩いた道すらも疑いたくなる違和感。地面はどこも平らな石の硬さがあるはずなのに、通ったばかりの背後の地面は柔らかな土が広がっているのでは、みたいな錯覚。

「……気持ち悪い」

違和感がもたらす気持ち悪さと、あるべき姿を歪める世界樹の気持ち悪さに思わず本音が漏れた。

シウアンが聞いたら怒りそうである。

「……ここは地脈が読みにくいようだ」

「ん？ ということは方陣が使えないってことかい？」

「使えないわけではないが……いつもより集中しなくてはならない。あまりにも大きな気が、他の気を覆うかのように満ちている」

ウーファンとローゲルさんのやり取り。

方陣についてはよくわからないけど、それはつまり、

「皇子の気がどこかわからないってことですか？」

「……いや、それはおそらく問題ない。大きな力の傍にいる気が奴だろ？」

皇子の場所さえわかれば大丈夫。そこまで一直線に行けばいい。文字通りに。

「その方角はどこだ」

「ここから北だ」

聞いたそばからイシユによる壁のぶち抜き。

歴史学者とかが見たらぶちギレ必須なルート開通だ。

パラパラと崩れる石壁の向こうには数人の帝国兵の姿。

敵か味方が全然わからない。帝国兵も計画反対派が動いているから悩む。

その帝国兵は立ったまま動かない。死んでる……？

「……うう」

小さな呻き声が鎧の中から聞こえた。

外傷が見当たらないからまた毒の魔物の被害かと身構え周囲を見渡した。しかし何もいない。

「巨人の呪いか……」

「ああ……」

キバガミさんとローゲルさんが兵士に憐憫の目を向ける。

呪いという単語にイシユが訝しげに声をあげた。

「まだ世界樹の力は発現していないはずだが」

「もともと計画を実行する騎士たちは、呪いを既に受けていた連中を中心に編成していたからな。力の発現が近づいて真っ先に影響が出たんだろう……」

「じゃ、じゃあ他の人はまだ呪われてはいないんですね」

ローゲルさんの言葉に、前にいる兵士には悪いがホツとした。すでに呪いが溢れているわけではないのだ。

「邪魔をするわけでないなら捨て置け。どのみちその兵士は永くない」

「先を急ぐとはいえ、なんとも後味が悪い話よ……」

イシユはまた壁を破壊するために北へと歩いていく。

キバガミさんの言う通り、呪いに苦しむ姿を見捨てることとなるのは後ろめたいが立ち止まる暇はない。

全部が終わる前にやらねばならないのだと、私たちはイシユのあとに続いた。

「……イシユ、大きな力は移動していない。北にあるままだ」

ウーフアンは立ち止まった。

「ウーフアン？」

「私はこの兵士の介抱をしよう。シウアンほどではないが、ウロビトの結果を応用すれば多少は長引かせれるだろうからな」

なんとというか、らしくない。

シウアン、シウアンと息巻いていたのに。シウアンを拐った帝国兵のために行動するなんて。相手は計画賛同者なのに。

「何を馬鹿みたいな顔をしている。そんなに私の行動がおかしいか？」

「ばっ……！ まあ、らしくないとは思うけど」

我関せず、とばかりに壁の破壊音が起きた。

ウーフアンの離脱に関してイシユは思うことはないようだ。

「シウアンは皇子に言ったのだろうか？ 誰とでも手をつなぎ合わせる

ことができる世界をと。ならば私はシウアンの意志を具現するため
に行動したい。それに……前にも言っただろう。私が誰かのために
行動することは、シウアンにとって嬉しいことだからだ」

「アルメリア、何をしている。その者に付き合っつて汝まで残る必要は
ないはずだ」

なんてことはない。安定のシウアン馬鹿ぶりだ。そしてイシユか
ら急かされてしまった。

「シウアンを助け出したら、ウーフアンを誉めてあげるように言っ
てあげますよ」

「やめろ。シウアンの保護者としての威厳に関わる、やめろ」
「今更威厳も何もないじゃないですか。それじゃあその人は頼みましたよ！」

ウーファンから離れて北へ北へ。

壊れた壁の穴を潜ると、死んでいる獅子の魔物の姿。

戦闘音も魔物の断末魔も全く聞こえなかったんだけど。爪や牙などから強そうな魔物に思えるのに。

「そいつ、壁の破壊音を聞いても起きなかった凶太い魔物でね。それだけ強さに自信があるだろうからってことで眠っている間に仕留めたんだよ」

「ほへえ……」

「にしても、ウーファンはやっぱり来ない、か」

魔物の死体からローゲルさんに意識を向ける。どこか残念そうな言い方だった。

「はい、シウアンのためにだそうで」

「はは、こんな時でもとはね」

他にもいろいろ言っていたけど、要点をまとめたらシウアンのためという一言で終わってしまう。私は何も嘘を言っていない。

「このような時であっても誰かのために動くことを選べることは美点よ。拙者も本来なら薬師として、今の兵士を助けるべきだろうにイクサビトとして戦う道を選んだ。選んだというよりは流されるままに、かもしれないがな」

「そう自分を卑下するなよ。君が戦う道を選んでくれて俺はほっとしてるさ。俺以外の数少ないまともなメンツだからな」

「なんと……」

随分な言い草である。変人というのは自覚がないから困る。

ていうかさつきから会話に参加していないイシユはいったい……

あ、また壁を破壊した。

壁を破壊した後ろ姿をこれ以上待たせるわけにもいかないな、と追いかけてよとしたら、突然イシユは奥へと走りだした。

まるで焦ったかのような急な動き。イシユが焦るようなことといえば、当然それはまずいこと。

イシユを追わなくては、と私たちも破壊された壁をまた潜る。

——全身を包んだのは、より深い森の中に足を踏み入れた感覚。そしてこの体を通り抜けていく、澄んだ……いや、澄み過ぎた風。

壁を潜って真っ直ぐ先には大きな扉を今まさに開けようとしているイシユの姿。

開かれていく扉の先に見えたのは——大きな白い顔。

巨人の、顔面だ。

巨人の白く不気味な顔はわずかに脈動している。そしてそれに呼応するように、風が吹く。

鼻息か、これ。いや、口呼吸かもしれない。

じゃない。そんなの今はどうでもいい。巨人が呼吸をしているということは、起動したということ……？

部屋の中央には皇子が一人、膝をついていた。その頭部には硝子細工の冠があった。

しかし、どこにもシウアンの姿はない。

「なんとということをしてくれたのだ……！ 汝の所業、どれほど愚かなことか——」

「古代の者か……貴公がいるということとは」

皇子はイシユから目を離し、扉へと向ける。

その目は随分と昏い。それだけでなく、体からはじわじわと黒い霧が滲み出てきた。

彼はローゲルさんの姿を見つけると、暗い笑みを浮かべる。

「やはり来たか、ローゲル」

「殿下……！ 今すぐに巨人の起動を中止してください。帝国の民は、あなたまでも失いたくはないはずです！」

「余がいなくなつた後、帝国にも混乱が訪れよう。だがそれも長くは続かない……いずれ皇帝アルフォズルが帰還するであろう。ローゲル、お前のようにな」

「殿下、陛下はもう……！」

ローゲルさんの言い淀む姿から、皇帝はもうこの世にはいないのだろう。

しかし皇子はその言葉では止まらない。

「ローゲル、お前は皇帝アルフォズルを看取つたのか？」

「いえ……陛下の姿は見ておりません。ですがもう10年です……陛下を私も探しましたが、帝国にもタルシスにもおりません……」

「ならば戻ってこられる。皇帝アルフォズルは余よりもはるかに優れた方だ」

皇帝の帰還を信じて止まない皇子の姿。ローゲルさんのように戻ってくるはずだ、と考えているのだ。

10年帝国を離れていたローゲルという騎士の帰還が前例にあるから、まだ可能性がある、いや、可能性ではなく確信している？ それとも、認めたくないだけなのかもしれない。

「お主のいう皇帝とは、白き鎧の方であろうか」

皇子とローゲルさんの会話にキバガミさんが入った。

彼の言葉に二人の反応は劇的だった。食い入るように視線を向けての反応だ。

「知っているのか、イクサビトの者よ」

「キバガミ！ まさか陛下を見たのか!？」

「……10年ほど前にな。聡明で、骨のある武人であった。短い間であったが、その方がもたらした知識は里の医療を支えた。拙者の薬師としての知識もその方に教えてもらったものだ」

懐かしむようにキバガミさんは言葉を続ける。

きつとその先の言葉は、二人にとって望んでいないものだろうけど。

「その方の最期を、我らイクサビトが看取った。里に来たころにはすでに深手を負っておったのだ……」

「……そう、か。お父様が……」

「その話がどうしたというのだ。汝の父親について、今更知ったところで何になる」

話に付き合ってもらえないとでもいうように、イシュが剣を抜き皇子へと歩み寄る。

そのまま剣を振りかぶろうとした途端、地面に穴が開きそこから蔦がいくつも伸びてイシュの腕を捕らえた。

「確かにその通りであるな。だが古代の者よ、貴公といえど余の邪魔はさせぬ……!」

冠を持つものを巨人が守った……？ それとも皇子が蔦を操った？

「殿下!!」

「巨人の復活は、大地の浄化は、お父様の悲願。散っていった騎士たちの希望……」

皇子は決意と自棄を混ぜたかのような昏い眼のまま、言葉を紡いだ。

「余は彼らに報いなくてはならぬ！ 彼らの遺した家族を守らねばならぬ！ 彼らが信じた未来を守らねばならぬ！」

自身がいなくなった後は皇帝に託すという考えが不可能となったことは、彼を止めるに至らなかった。頼れる者がいなくなったとばかりの宣言に、すべてを背負うかのような言葉に、過去のイシユと同じ姿になってしまっていた。

一方イシユは鳶を引きちぎる度に新たな鳶が伸びて体を絡めとられている。

その間にも皇子は止まらない。

「汝の決意などどうでもよい！ 我の目的を邪魔させるものか！」

「救世の灯火よ！ 長き眠りから目を覚まし、この地より南に広がる大地をその力で浄化せよ！ 伝承の巨神、楽園への導き手よ!!」

この大地を終わらせる命令を、

巨人が進む方向性を、強く、強く言い放った。

言葉を受けて巨人は何も映していない瞳を開き、体を震わせる。

ただそれだけで、大きな揺れが都全体を襲った。

「イシユ！ 頭だ!! 巨人の起動に必要なアイテムは頭に埋め込まれている！ 地上に出る前にシウアンと心臓を剥がせ!!」

「おのれ……!! アルメリア！ 汝の火炎で我ごと鳶を焼き払え！」

「は、はいっ！」

爆炎に吞まれた直後、炎から抜け出し巨人の顔へと迫るイシユ。

まだ巨人は体を震わせているだけで外には出ていない。まだ剥が

せる。

「邪魔はさせぬと言ったであろう!!」

皇子の叫びに呼応するようにまたいくつもの蔦が現れる。その蔦は皇子の体から伸びて、その先はねじれ貫通力が高そうな印象を受ける形状になっていた。

勢いをつけてイシユに迫る蔦を、横から大きな金棒が巻き取り、長い刀が蔦を斬り落とす。

「そうはいかぬ! かの巨人は止めなくてはならん! この地に住まう者たちのためにも、お主らのためにも!」

キバガミさんの吠え声とともに鋭い太刀筋が舞い、新たに伸びる蔦を尽く斬り捨てていく。

この調子ならまだいける。巨人の動きに速さはない。

イシユの接近から逃れることはできない。その巨体もまだほとんどが埋まっている。顔の高さに余裕で届く。

イシユの手が巨人に届く寸前——緑の瘴気が巨人の口から零れた。

それは数秒もしないうちに、空気に溶けるように霧散した。

だけど霧散する前に、イシユの腕に触れていた。

本当に、僅かな時間だった。

「!」

その姿を見た私は、迷わず却火をイシユに向けて放つ。

見えてしまったのだ。

イシユの腕から不気味な蔦が生えて、一気に体まで伸びながら増え

ていく植物の姿が。

爆炎と比べ物にならない熱量の火が、イシユの表皮ごと、いや、肉ごと植物を焼け落とした。

大丈夫だ。イシユはまだ植物にされ切っていない。

却火が間にあつた。

ほっとしたのもつかの間、イシユが巨人から距離を大きく離れた。

そして体の向きを変えて――

「――うひゃあ!?! イシユ!?!」

「……」

私の手を掴んで一気に走った――巨人から離れるように部屋を出る。逃げるように。

引つ張られながら後ろを見れば、部屋の中でキバガミさんとローゲルさんが皇子と対峙している姿。

そして、上へ上へと這い上ろうとしている巨人の体から、溢れ出る緑の瘴気が部屋を満たそうとしていた。

52. 忠義の矛先、呪皇を穿てば

巨人の復活を、阻止できなかった。

地表を目指して腕を伸ばし這い上っていく巨人の姿を見ながら、胸中に渦巻くのは絶望ばかりだ。

イシュも間に合わないかと判断したのか、アルメリアを連れて去って行った。

アルメリアだけでなく、イシュも依存と言ってもいいほどに相手を大事にしているようだ。随分と眩しく感じるものだ。

煌天破ノ都の最奥の部屋に残ったのは俺と、キバガミ……そして殿下の三人だ。

この部屋以外に突撃した冒険者たちは、タルシスの兵士たちは、帝国の仲間たちは、今頃避難を開始しているだろうか。

部屋を満たすような緑の瘴気から少しでも逃れていたらいいが……

「……？」

「瘴気の影響が、ない……？」

キバガミも同じことを思ったのか、不思議そうな声をあげた。

緑の瘴気は間違いなく呪いを濃厚に含んだもののはずだ。先ほどもイシュが瘴気によって植物に変わる寸前だったのを確認した。

あの規格外の体も例外なく植物へと変える力が、俺たちに何も効果がないとは考えづらい。

「ローゲル……そしてイクサビトの者よ……」

地を這うかのような低い声で、殿下が静かに告げた。

その体は奇怪な変化を遂げながら――

「貴公らには感謝している。帝国のために10年かけて、使命を果たしてくれた忠臣に……我が父の最期を看取ってくれたイクサビトに。よってせめてもの手向けだ……その姿が変わり果てる前に、余の手でその命を終わらせてくれよう」

先のやり取りでも鳶を操っていた姿を見るに、冠による力だろうか。予想以上に細かい調整もできることに驚くが、知ったところですでに巨人は地上を、タルシスを目指そうとしている。

もうすべてが遅い。

鎧の隙間という隙間から黒い靄と緑の瘴気を溢れさせ、砲剣を掲げながら、体皮を植物に喰い破られるように荒らされる殿下の姿がそこにあつた。

もはや――異形そのもの。

殿下の姿はもう人間ではない。人間を、やめてしまった。アルメリアの言っていた言葉が現実に近づいたかのようだ。

そのことが、なおのこと絶望の後押しをさせる。

「ローゲル殿」

「……なんだ」

「あの黒き靄が、神の加護か悪魔の意志かわからぬが……皇子の体は変わりこそすれど完全な変異はまだしておらぬ。あの皇子を救い、巨人を止める。そのためにも絶望などしておられんぞ！」

絶望していた心を読まれたかのような台詞に小さく驚いた。

そしてその内にもまた驚いてしまう。

キバガミは殿下を異形から戻すつもりだ。それだけでなく、巨人をも止める気だ。

そこにはできないのでは、といった不安は一切ない。

必ずやり遂げるために、俺にも動けとでも言うような発破だ。

そうだ。まだ間違いを戻せる。この身が生きているのだ。間違いを正す忠臣となるためにも、動け。

「……確かに、まだ冠が殿下の元にある。それを使って巨人を巢に戻せる……シウアンが戻れば呪いによる変異も、命が残っていれば問題ない……」

「ウム、そのためにもまずは——！」

「ああ！ 殿下を無力化する——！」

人間の姿を失いつつある帝国の主君に、帝国騎士の証である砲剣を向けて戦いに挑んだ。

迫る俺たちに対し、殿下は砲剣を構えて動かない。

その間にもまた、殿下の肌を体内から突き破る植物。今度は背中を喰い破られた。

殿下の砲剣から駆動音が鳴り始める。ドライブの起動——

内部に仕込まれた術式と触媒を用いた強力な攻撃。

「キバガミ、絶対に当たるなよ！」

「承知！」

当たれば致命傷は確実。

今の殿下は鳶を操る力もある。注意を向けるべきは砲剣だけでなく周囲にもだ。鳶に自由を一瞬でも奪われれば死に繋がる。俺たちはどっかの馬鹿と違って普通の体ではないからだ。

砲剣の音が大きくなっていく。それと同時に奇妙な変化が起きた。

殿下の体からまたも黒い靄が滲み出て、砲剣へと入りこんでいき——

——内部の術式開放と共に黒い無数の風の刃が襲いかかってきた。

「な……!?!」

「ぐぬう——！」

条件反射のように、砲剣を前に構えて迫りくる攻撃から身を守る。隣ではキバガミも同じように金棒を使い体を庇っていた。

だが無数の刃から完全に逃れることができず、至る所を刻まれる。首や眼を守れただけでも良しと考えるべきか。

それよりも、今の攻撃はなんだ。

「名をつけるとすれば、カオスドライブといったところか」

砲剣から内部に籠っていた熱を吐き出す音が聞こえたとともに、殿下の言葉も一緒に届いた。

殿下の砲剣はドライブの起動後と同じように放熱状態になっている。だがあんなドライブは知らない。名をつけるとすれば、という言葉から、他の帝国兵も知らないだろう。だとすればあのドライブができるようになったのはつい最近。砲剣の発動直前の黒い靄が原因なのか……？

あの靄は一体なんだ。呪いの影響で出てきた何かと思ったが、よく考えれば違う。

あれは木偶ノ文庫でも殿下の体から滲み出していた。

キバガミの見立てではあれによって、殿下の体が保たれていると言っていた。

なんらかの力。何かはわからないが、いい気にならないのは確かだ。殿下の行動に、この世界樹の起動計画に、まだ見えてこない何かの思惑が混ざっている。

それが偶発的なものなのか、悪意によるものなのか、何か隠れている。

だが、それがなんであれ――

「殿下、あなたにこれ以上独りですべてを背負わせる気はありません……まずは、あなたを絡め取ろうとしている隠れた思惑からあなたを救います。そのためにも、全力をもって剣を向けさせていただきます」

砲剣の切先を殿下に向けて構え直す。言葉で間違いを正されないのなら、目を覚まさせる拳骨が必要だろう。

俺の拳はどっかの印術師より強烈だ。

「ローゲル、今更お前が何をしようとは何も変わらぬ。お前には何も成せぬ」

「そうですね。俺独りの力なんて、たかが知れていることでしょう。人間一人に成せることなんて、限界があります」

人にできることには限界がある。わかっていたのに、殿下独りに帝国を背負わせていた。代わりに全てを背負うことなど俺にはできない。誰にもできない。

「だから、あなたが今後背負うものを、今まで背負ってきたものを、我らは共に背負うつもりです」

自身が扱う砲剣の機構はまだ動く。

この剣は託されたものだ。帝国が一人に頼り切らない方向へと舵をとる切欠となりえるものだ。

「これ以上の問答など無意味だ。余が余であるうちに、そして貴公らが貴公らであるうちに……この戦いを終わらせる！」

殿下の背中から巨大な葉が鎧を砕きながら顔を出した。

次いで眼から茨が伸びる。

あの様子から見て、時間は少ない。

「問答が無意味？ そのようなはずがなからう！ 拙者もお主も、理性ある戦士であるはず！」

キバガミが床を擦りながら金棒をスイングした。金棒の威力を弱めようと蔦が絡みつくがイクサビトの力が無理やり引きちぎり、金棒に絡まった植物が黒く焦げ落ちていく。

まさか摩擦で熱を持たせたとでもいうのか。一見力任せの強引なものだが、床を挟らず擦って最大限熱を出させる技なのだろう。

「言葉を無くし戦うことしかできぬようになってはただの獣よ！ 帝国を導く者がそれでいかがする！」

「うるさい！ 余の苦しみも知らずして勝手なことを抜かすな！」

「指導者としての重圧、拙者も里を率いていた者として少しは理解できよう！ その重みが同じとは言うまい……だが、お主は今、共に背負おうとしてくれる者たちの手を振り払おうとしているのだ！」

技を磨いているとはいえ、金棒の重たい攻撃を避けて舌戦と白兵戦を行う二人。

キバガミに充分気を引き付けてもらえた。

砲剣のドライブの起動は済んだ。あとは当てるのみ。

狙いは殿下の砲剣。剣を破壊して無力化を図る。

「手を取ったところで何も変わらぬ！ もはや楽園への導き手は復活を遂げたのだ！」

「ぐぬっ……い！」

捻じれた蔦がキバガミの体を貫く。

急所は逸れているとはいえ深手。殿下は追撃をするかのごとく砲剣を振りかぶる。未だに放熱が必要な状態にもかかわらず、剣に黒い靄が入りこんでいく———またあれが、カオスドライブが来る。

あの距離で発動すればキバガミは持たない。それだけではない。あのままでは熱が過剰に籠り暴発する可能性がある。暴発すれば殿下もただでは済まない。

「殿下ア!!」

声をあげ意識をこちらに向けるように揺さぶり、その振りかぶられた砲剣に向けてフレイルムドライブをぶつけた。

爆炎を浴びながら殿下の砲剣が手から離れる。

その威力に手から抜けてしまったのだろう。

砲剣の破壊はできなかったが、これで大幅に力を削ぐことができた。

落ち着いて話し合いをしたいが、今は巨人のせいでゆっくりできない。どんどんと這いあがっていく巨人によって、建物は崩れ空から落石が止まらない。巨人が遠ざかりつつあるからか、緑の瘴気は少なくなってきたはいるが、落石によって埋まる前に抜けなくてはならない。

「殿下、まだ間に合います。巨人に戻るように指示を……蝕まれたお体もシウアンの、巫女の力で元に戻せます」

「まだ、間に合う、だと……?」

「ええ、殿下。ですから——」

「冠が残っているから、そう思えるのだな……お前はまだ、立ち上がれるのだな……」

小さく呟きながら、彼は額の冠を外した。

その目に浮かぶは諦めなどではない。

「殿下——」

何を、という前に殿下は冠に向けて拳を叩きつけ——

「自棄になるでない。一時の感情に支配されるな」

———ることができなかつた。

「は、離せ！」

「離すわけなからう。勝手なことをする坊主の言葉など誰が聞くものか。少なくとも、拙者はそこまで心広くはないのだからな」

キバガミが冠を破壊する拳を止めてくれた。

今回は本当に彼には感謝してもし足りないほどだ。

「余を坊主だと……！」

「事実であろうに。なあ、ローゲル殿」

キバガミが小馬鹿にするような言い方で同意を求めてきた。

なんともまあ、答えづらい状況だ。

「そうだな。立場上、言いつらいが事実だ」

「ローゲル……！」

「お主の忠臣から見てもこの通りだ。坊主一人に背負わせる国など未来はない。豊かな大地になろうとも、他を犠牲にした国として周囲から恨まれ孤立し、また弱っていくことだろう」

「帝国に対してなんたる侮辱を——！」

「その侮辱をさせる切欠が、お主の姿なのだ」

キバガミの言葉はなんと耳の痛いことか。

事実だからこそ辛く感じる。とはいえ、このまま彼の言葉を聞いているだけではさらに帝国を侮辱させることになってしまう。

「殿下、彼の言葉は事実でしょう。俺たちは、あなたに陛下の姿を求めていた。あなた一人にすべてを背負わせていた。そんな国が、世界樹の力を持ったとしても長く続くはずがない……」

「世界樹の力があれば、帝国はさらなる力を手にする……帝国が敗れ

るはずがない……」

「敗れますよ。伝承にも語られているように、巨人もこの地の者たちによって敗れたんですから」

誰だったか、アルメリアだったかが言っていたな。

束ねられた力は竜をも討つと。彼女自身の言葉ではないらしいが、事実そうなのだろう。

帝国が世界樹によって豊かになると、周辺の住民を犠牲にした国として諸外国からの心象は最悪になるだろう。周囲は敵だらけとなり孤立する国など……

「巨人の力は、帝国を滅ぼす力です。殿下ももうわかっておいででしょう。豊かになるのは一時だけだ」と

「……ではどうすればいいと言うのだ。帝国が滅ぶのはもう時間の問題だ！ たとえ一時だけであろうと、生きながらえることの何が悪い！」

「助けを求めましょう」

「——助け？」

俺は肉体労働派だから、すぐに解決策なんて思いつかない。だからといって殿下に頼りつきりでは何も変わらない。

ならば他に頼る。それだけだ。

「ええ、周囲に助けを求めるときです」

「……隙を見せれば食い殺される。政の世界を知らぬ者の言葉だ」

「ならば政の世界を知る者に、助けを求めればいいでしょう」

「……それが辺境伯だとしても言いたいのか。辺境伯は帝国の者ではない。あの者が帝国のために頭悩ませようか」

辺境伯が帝国のために考えてくれる姿を想像する。

きつと彼ならば、いつものように犬を抱えながら兵士に指示を飛ば

し、人手が足りないならば冒険者を募り依頼し、それでも手が足りないならば、世界中に知らせを飛ばすだろう。

初めは世界樹の謎を求めての行動力だったが、それを抜きにしても彼は他人のために労力は惜しまないはずだ。

「報告したはずですよ。彼はウロビトもイクサビトも受け入れませんでした。帝国だって例外はないはずです」

「ウム、辺境伯殿は言っておった。帝国とも手を取りあう未来を、と。それは支配などではない。互いに認め合う形としての提唱であった」
「……………余は、本当に誰かに頼ってもいいのか」

むしろ頼るべきだ。一人悩み続けたって、必ず答えが見つかるというわけじゃない。

「ええ、頼りましょう。誰かに頼ることが許されないなんてことはないんです」

「余は、帝国を導かねばならぬ……………そのような立場で頼っていいと本気で考えておるのか……………」

「帝国を導くために人に頼る、当然ありでしょう。そもそも帝国を導く立場であろうとその前に一人の人間です。支え合ってしかるべきじゃないですかね」

「お前にしては、不真面目な答えだ。ローゲル……………」

本心の言葉がひどい評価である。しかしなんとなく、殿下の纏っていた空気が弛緩したような気がした。

「貴公らの言葉を、信じてもいいのだな……………」

その言葉に笑みが漏れる。もちろんです、と答える直前に

——黒い風が、吹き抜けていった。

ただの風ではない。最初の殿下との立ち合い時に起きた、黒い風の刃。カオスドライブ。

その凶刃が殿下に向かい、

「なっ……!?!」

「殿下……!」

硝子の割れる音とともに、巨人の冠が破壊された。

「な、何者だ!!」

キバガミが黒い風の刃が飛んできた方角を見ながら吠える。

だがその言葉に返答はない。

その方角にあるのは、吹き飛ばされた殿下の砲剣のみ。

砲剣からは黒い靄がにじみ出て、空へと昇っていく。

「何が、起きた……ローゲル、冠は、無事か……」

「殿下！ 大丈夫ですか！」

殿下に大きな怪我はない。植物化した部位を除けばではあるが、今の刃によって傷を負った様子はない。

だが冠は……完全に砕かれている。

「冠……冠が……」

砕かれた冠は、すぐに殿下の瞳に映った。

「あ……ああ……」

「殿下！ しっかりしてください！」

「冠が……！ あれがなければ巨人を止められない！ 僕が、僕のせ

いで!!」

「殿下!!」

「ローゲル殿! その坊主を連れて脱出するぞ! また次がいつ来るかわからぬ!」

キバガミの言う通り、またあの黒い風の刃がいつ来るか全くわからない。

それにいつ壁が崩れて生き埋めにされるかと言った危険もある。

「もう、今度こそすべてが終わってしまった……僕のせいだ……僕のせいで……」

「殿下、まだ終わっていません! まだです!」

「ローゲル……お前もわかっているだろう。もう、巨人を止められない……」

「いいえ、止めれます」

立ち上がる気力がなくなっている殿下を背負う。

まだ間に合う。油断すれば心が折れそうだが、まだ間に合う。そのためにもここから脱出する。そして、

「巨人を追って、必ず止めます」

53. 神話の再現を今ここに

煌天破ノ都の壁が、ガラガラと音を立てて崩れていく。

崩れていくのは壁だけではないのだろう、きつと。もつと大事な、積み上げられた日常までもが崩れている。そんな錯覚をもたらす崩壊の音。

未だにこの地の揺れは収まらない。それも遠近感が狂うような巨体が壁をよじ登っていくせいだろう。アレが地上に出た時、この大陸は終わりを迎えてしまう。

「イシユ！ ローゲルさんとキバガミさんがまだ！」

私はまだイシユに手を引かれていた。イシユは何も答えずただひたすら進んでいく。

皇子がいた部屋に二人を置いてきてしまったのに。

「イシユ！ どうしたんですか！」

とうとう煌天破ノ都、その門まで辿りついてしまった。

たくさんあった気球艇はすっかりまばらだ。まだ軍艦や気球艇が何組か残っているようだが、ほとんどが脱出し始めている。

イシユは何も答えず、だけど手を絶対に離さず、そのままノアまで私を引っ張っていく。

このまま飛び立つつもりなのか。さすがにそれはダメだ。二人が残っているのだ。

だけど抵抗しようにも力の差が大きすぎて、強く引きずられてしま

う。半ば放り投げられるようにノアに乗せられ、飛び立ち始める。

「イシュ!!」

「世界樹が起動した」

ようやく答えてくれたと思ったら、そんなのわかっている。

今私を知りたいのは何故ここまで引つ張ったのかと、ローゲルさんとキバガミさんを置いていった理由だ。

「それはわかっています!」

「世界樹を止めることなどできない。一度起動すれば最後、すべてを呑み込んでいく。人も、街も、国もすべて」

それは、千年前にイシュが見た光景。

「対抗する策はない」

「そんなこと——」

「策があれば千年前、すべてが滅ぶことなどなかった」

そんなことない、と軽々しく言えなかった。

イシュにとってこれで見るのは二度目の世界樹の起動。最大のトラウマのようなもの。

国を捨てさせ、指導者となり、すべてを背負わざるを得なかった原因。

「だが我に任せよ」

「え」

「我に任せれば問題ないと言ったのだ」

トラウマを見て弱気になっていたのかと思ったら、急な強気発言。

まあその方がイシュらしいといえばらしいけど——

「逃げればいい。世界樹の力の届かぬ、空へと」

その言葉は、全然強気なんかではなかった。

「我を信じ、ついてくるのだ。ノアの動力である程度の距離は稼げよう。天ノ磐座、我が城に戻れば汝は不自由なく暮らせる。我に任せよ」

「イシュ、それは……この地を見捨てるってこと、ですか？」

「うむ。世界樹が起動してしまった以上、この地に研究的価値あるものは残らぬ。巫女ももはや取り戻せない。我の目標のためには回り道となるが、逃げることこそが最善だ」

堪えろ。

堪えるのだ、私。

今感情のままに叫んだって何にもなりはしない。イシュは嘘をつかない。事実ばかり言うのだ。

このままノアに乗って、イシュに任せていれば私は助かる。きっと本当にイシュの城で不自由なく暮らせるだろう。

タルシスを見捨てることができなからと、巨人に戦いを挑んだところで私程度じゃ巨人の指一本燃やせるか怪しいものだ。死ぬ可能性、いや、草木に変えられる可能性が高い。死ぬことすらできずに。

だから、イシュに任せればいい。イシュに頼ればいい。

千年前の人たちのように――

うん、考えがまとまった。

見れば世界樹の洞から出れば周辺には、戸惑い迷っているような気球艇の姿がいくつもあつた。逃げるべきかどうか、悩んでいるのだろう。

「イシュ、木偶ノ文庫周辺の水道橋で降ろしてください」

「何を言っている。そこに何があるというのだ」

「あそこってすごい高いですよ。だからあそこで降ろしてください」

「ならぬ。この状況でそれをする理由がない」

なかなかお願いを聞いてくれない。

そうしている間に後ろから、

「もはや時間も無い。あれがとうとう外へ出てきた」

その言葉が示す通り、世界樹の洞から巨人がついに這い出てきてしまった。

その全貌は山をも越える姿。

煌天破ノ都の束縛から解放された、古の希望であり、厄災。

絶界雲上域に足をおろした巨人は、産声をあげるように凄まじい咆哮をあげる。

空気を揺らす咆哮。まるでこの大陸に終わりを宣告するかのよう

に。
巨人の全貌は神々しさと禍々しさがごちゃ混ぜになった、混沌とした姿だ。首回りには深緑のマントのように見える謎の飾りを纏っており、背部は異常なふくらみを見せている。マントの下からは白い胴体と長い手足を見せており、その全長は山より高く、水道橋の最上段にいてもなお、腰にようやく届く程の高さ。それが惜しげもなく披露されている。うれしくない。帰れ。

力を解放しただしたのか、緑の瘴気を溢れ出させる。瘴気に触れた箇所は見る見るうちに緑が生い茂っていく。

逃げ遅れた気球艇、動物や魔物、人がその姿を変えていった。

悲鳴をあげながら草木になっていく生命。物言わぬ木々を乗せ、堕ちていく気球艇の数々。

その光景に吞まれては、ダメだ。

「イシユ、お願いです。私を水道橋に降ろしてください」

「ならん。汝も見えるだろう。世界樹の力を持った巨人の姿が。我を信じてすべて任せよ」

平行線の会話。

こんな緊急事態に何をやっているのか、と思われそんなものだ。

「降ろしてください。これですか、どれですか、高度を降ろすやつ」

イシユが降ろそうとしないのなら自分から降りてやる。こんなことならちゃんと気球艇の操縦を覚えておけばよかった。どれが何か全然わからない。

勝手に弄ろうとする私を止めようとしてか、腕を掴んで舵から引っぱがされた。

腕を掴んだままイシユは珍しく焦ったような表情をしていた。

「何をしている！ 汝は命が惜しくないのか！」

惜しいに決まっている。惜しくなかったらこんな旅に出てはいない。

ただ他にも惜しいものがいっぱいあるだけだ。

掴まれた腕を払いのけ、正面からイシユに言った。

「今回ばかりは、私はイシユを信じません」

「……アルメリア、何を言っている」

払われた腕はやり場に困っているかのように、戸惑うように所在なさげに揺れる。

その姿が意志を揺らがせる。信じてくれているという信頼を、今裏

切ったようなものだ。だけどダメなのだ。

「イシユに任せたら大丈夫だなんて、一切思ってません。むしろ任せてはダメだって考えてます」

単なる意地ではない。当然、千年前の奴らと同じことをしたくないという意地も入っているけど。

こうして世界樹の力を目の当たりにしてよくわかる。世界樹から逃げることを責めるなんてできっこないと。国を捨てて逃げた人たちを責めれるはずがない。あんなのどう見ても勝てないと思ってしまう。

「世界樹の前にイシユは千年前と同じことをしています。逃げれば生き延びれるってわかってます。だけどそれじゃまた繰り返すだけです」

イシユだけではない。イシユを信じて一緒に逃げることを選べば、私も千年前の人たちと同じ選択をすることになる。

イシユの城に逃げた先はどうなる。イシユは巨人と会うことのない城で、魔物にされた人たちを解放するために研究を開始するだろう。私は城での勝手がわからずイシユに頼り続けることになってしまっただろう。

そんなことをして、どこまで繰り返せばいいのだ。

「あの力を理解できないわけがないだろう。あれは一度起動を果たせば、すべてを呑み込む。それが何故わからぬ」

「それでも私は巨人を止めます。まだ止められる可能性は残っています。そのためにも、戦います」

巨人を止める。

そんなこと不可能だと、心の片隅で考えてしまう。だけど前例が今

回はあるのだ。前回できたことが今回できないなんてことあったまるか。

だから戦う。だけど、

「イシユは戦わなくてもいいです。これは、この時代の人たちの問題です。この地に集う人々の問題です。遠くから見ててください。それでもしもだめだったら、逃げてください」

世界樹の力はイシユの最大のトラウマだ。

いつもの調子も完全になくし、千年前と同じ逃げの一手しか選択肢に浮かばないほどに思いつめさせる悪夢だ。

あるいは、この地の世界樹は倒された前例があるからイシユが戦ってくれ、といえば戦ってくれるかもしれない。イシユの力はとても大きい。

だけど、それじゃダメなのだ。

また一人で背負わせてはダメなのだ。

「千年前の人たちも、そして私も今まで、イシユに頼り切っていました。それがイシユから頼るといふ手段を奪わせていた。一人で戦わせていた」

「何を言っている。我の力を頼ることは当然だ。優れた者が弱き者を守る、それが正しい在り方だ」

千年前から、ずっとこの人にそう言わせてきた。

一人でずっと戦ってきた。

一人にずっと、戦わせてきた。

「我のこの体は人より遥かに優れている。その我でもあれは止められぬ。この地は終わったのだ」

イシユは皆を守るために人の体を捨てた。

皆がイシユに人の体を捨てさせた。

過ぎたこと。もう取り返しのつかないことだ。だけど、その時違う選択肢があったことを気づかせたい。

そうしないと、この人はずっと間違った過去に囚われ続ける。

そのために、私たちが守られるだけの存在ではないということを示せ。

人の力、人のままの力をイシユに示せ。

今の時代の人たちの力を見せるのだ。

「私は全力で、イシユの選択が間違っていたと、イシユの千年を否定します」

千年の否定。

それがどれだけ酷いことかはわかっている。ほとんど存在の否定と同じとも。

この場で殺されても何の不思議もないほどの酷い言葉だ。

だけど、否定だけで終わるものか。

一度払った手を、強く掴んで言った。

「人の可能性を見せるために、私は戦います。だから見てください」

愚か者が、とイシユは吐き捨ててから何も言わず、だけど希望通り木偶ノ文庫周辺の水道橋、その南側に降ろしてもらえた。

距離はまだあるとはいえ巨人の真正面。進行方向にある位置だ。

遠ざかっていくイシユの乗ったノアを見て心細くなる。そんな自

分に喝を入れるように両頬をぺしんと叩いた。
ゆつくりと、だけど大きく一步踏み出した巨人を睨みながら考える。

さて、どうしたものか。

いや、やらないといけないことはわかっている。聖樹の護りの再現だ。

巨人から心臓、心、冠を奪い取る。

力の源は心臓。そしてシウアンは心。だから絶対奪うのはこの二つ。

伝承では力を合わせて挑んだって話だ。

だからまずは力を合わせる。そのために意志を統一する……んだけど……それをどうしたものか。

「あ……」

右往左往する気球艇だらけの空の中、真っ直ぐ近づいてくる黒い軍艦に自然と笑みが漏れてしまった。

水道橋にいる私の元に来るということは、きっとあの人が乗っているのだろう。

それじゃあ、まずは最初の一手である。

「そうか。それでイシユと一緒にじゃないわけか」

軍艦から降りてきたローゲルさんとキバガミさんと合流し、イシユとのやり取りを簡単に話した。詳しく説明する余裕もあまりなかったので、方向性の違いということにしておいた。

一瞬何言っただこいつ、みたいな顔をされたが細かく聞いている暇はないと判断したのか、とにかく納得してくれた様子。やや引つかかるような感じで遠くに浮かぶノアを眺めていたが納得したはずだ。巨人はまた一步、ゆっくりとした歩調で進む。

このまますれば木偶ノ文庫を踏み潰し、この水道橋と接触である。

「それでアルメリア、君はどうするつもりだい？」

無精髭に手をそえながらローゲルさんが聞いてくる。

しかしそんな質問をするということは、まあこの人は変な考えでも頭に巡らせているのだろうか。

私の答えはもう固まっている。

「あの巨人を止めます。もちろん一人じゃできないです。だから、この大地にいる人たちにも協力してもらわないといけません」

「ま、そうだよな」

私の答えをすでに予想していたかのような返事。

「アルメリア、だったら今からでもイシユと一緒に戦うように言ってくれないか？ あいつの力は大きい」

「ダメです」

「……君があいつを戦わせたくないっていうのはわかった。だけど今はそんなことを言ってもらえない状況だ」

「ダメです。それにイシユ自身、巨人と戦う気力はありません。今ああして空に残っているのは、私が見てほしいと頼んだからであって、本来ならもうこの地から去ってると思います」

納得してくれたと思っただけどそうじゃなかった。

「ただどれだけ言われようとイシユの参戦はできない。一大事だとはわかってはいるけど、そもそもイシユはもう逃げの一手しかないのだ。」

「ローゲル殿、イシユ殿が心折れているのであれば戦力として期待するのは酷な話」

「そうかもしれないが……」

「そうです。それにこれはこの地に集う人たちの問題です。イシユは本来関わることはないはずのものです」

キバガミさんのフォロローにすぐさま乗った。

でも、この地の人の問題とは言ったつたけど、イシユが逃げを選ばなかったら一緒に戦うことを選んでいたかもしれない。

「確かに、絶望している奴に期待するだけ無駄か……それで、アルメリア。ここからどうするつもりだい」

「はい。軍艦のアレ、あの声がすごく聞こえるやつで巨人と戦う意志を示します。ローゲルさん、お願いします」

「アレって……ああ、拡声器か」

あの軍艦の声を大きくするやつ。あれさえあればこの大地にいる人たちに声を届けれる。

向こうからの声は聞こえないとはいえ、意志の統一の第一歩となる。

「あれを使うのは問題ない。というかそれが一番だろう。だが使う人物は俺じゃダメだ」

「え、なんでですか？ あ、皇子に使わせるとか？」

やっぱりそういった意志統一となるなら人の上に立つ役職の人だろう。そういった立場の人を旗印にすれば統一もしやすい。

「いや、殿下は容態が……呪いの影響がひどいため無理はさせれない。それにそもそも殿下も人選としてはダメだ」

「え、ええ……あ、それならキバガミさんで」

「拙者はイクサビトへの鼓舞こそできるが、大勢に対してはいかんともしがたい」

「そこをなんとか……ていうか皇子がダメならローゲルさんでいいじゃないですか」

いっそのことウーファンか。というかウーファンどこだ。

たぶんどっかの気球艇にいるんだろうけど。

私の指摘に対してローゲルさんは、

「今回の騒動、事の始まりは帝国だ。言ってしまうえば元凶だ。その帝国が全員の意志をまとめるために声を掛けてもそこに疑念が混ざる。これも利用するための行動じゃないかってな。だから帝国出身の俺

や殿下はダメだ」

親切丁寧にダメな理由を語ってくれた。

それで終わらずさらに続ける。

「いいかい。今この地にはタルシス、ウロビト、イクサビト、帝国の四つの派閥がいる。それらすべての懸け橋となったタルシスの人間の言葉が一番受け入れられる」

「そ、そいつあ……」

この後の流れが想像できてしまい思わず変な口調になってしまった。

戦う覚悟はあるけども、そんな……

「タルシスの兵士ではダメだ。彼らは指示を出す側ではない。ここまです道を開拓してきた冒険者の言葉、そしてなおかつ、これまでの種族との邂逅に居合わせた人物なら最高だ。ここまで言えば、もうわかるだろう？」

「……お腹痛くなりそう」

そんな………演説の役目がくるなんて想定していなかった。

「わ、私演説なんてできませんよ!？」

「まあいっばいっばいいな言葉も案外伝わるさ。それじゃ一度飛行船に乗るぞ」

「アルメリア殿、頼んだぞ。拙者もモノノフたちに指示を出してこよう。ここに集えとな。我らの牙を届かせるとしたら、この水道橋を利用するのが一番だ」

演説なんてどうしたらいいんだ。そもそもずっと引きこもっていたのに演説って、辺境伯の演説すら聞いたことないよ。何を言えばいいんだ。本日もお日柄がよく？ 巨人倒して？ この地にいる人たちに協力を求めないといけないのに、せめてカンペとか。

頭の中にぐるぐるというんな言葉がよぎるが全然まとまらない。

そんな間にも時間は無情に過ぎていく。というか拡声器とやらを渡された。想像していた形と違う。

片手で持てるサイズのものが、軍艦の内装と紐づけされていた。そ

れに向かって言葉を言えという。

「アルメリア、難しく考えなくていい。ただ思いの丈をぶつけられたい」

「そ、そうですかね……」

カンペがないままだなんて。せめて演説を聞いたことがある人に任せてほしいものだ。私にはそんな機会がなかったんだから。

辺境伯ならこんな時なんて言うのだろう。いや、辺境伯以外にも演説家と思えた人物がいた。この旅で。

散々見てきたじゃないか。あのやつたらと自信満々で、高慢な振る舞いを。

それで散々私は信じ込んできたじゃないか。

参考となる人と、ずっといたじゃないか。

「……これ、もう聞こえ——うわっ、すごっ」

外に響く自分の声に驚く。すごい技術である。それにしても、自分の声とはいえこんな聞こえ方はなんだか変な感じだ。でも思ってたほどマシにも聞こえる。以前イシュの声真似の時は、もっと間抜けに聞こえたものだ。

「えーっと、私はタルシスの冒険者をやってる者で、あー、アルメリアです。ニーズヘッグのアルメリアです」

しどろもどろである。だけど大事な点は抑えているはずだ。自己紹介は大事である。この声が帝国所属でないことを示すためにも、その先を信頼してもらえるかはまだこれからだけど。

というか、しどろもどろじゃダメだ。

イシュのように自信満々で言っていくのだ。みんなをやれると信じさせるのだ。

「みなさん、聖樹の護りに出てくる巨人が復活しました。伝承にある、

あらゆる生物を草木に変える巨人……楽園への導き手】

巨人が一步步くごとに、ひどい地鳴りが起きる。その音に、声がかき消されてしまわないか不安になる。

だけど吞まれてはダメだ。ダメなのだ。

周りくどい言い方なんてできなくていい。今はシンプルに、すべてを伝えるんだ。こちらの要求を伝えるのだ。

【全員！ あの巨人を倒すために協力してください！】

シンプルすぎたかな。まずいかな。

いや、いい。これくらいが丁度いい。シンプルすぎるならここから補足すればいい。

えっと……

【正直言つて、無理だつて思いますよね。私も、こうやって喋っている今も……だけど、伝承を思いだしてください。伝承では全員で力を合わせて巨人を退けました！】

不安を表に出してしまつたが、まあよしだ。そのまま不安に引きずられずに言うんだ。

伝承で巨人を倒したのだ。あとは私が吞まれずにいれる呪文を声に出して言うだけだ。

【伝承でできたことを、過去にできたことをもう一度する。それだけでいいんです！ 私たちはこれまでたくさん旅をしてきました！ いろんな問題とあたつてきました！】

くっそ顔が熱い。

やっぱりイシユのようにするのは難しい。自信満々で言うのは大変だ。

もう自分が言いやすいやり方も混ぜてしまおう。

【碧照ノ樹海では、自然に阻まれ、木の壁から突然現れた熊に邪魔をされました】

あの樹海が始まりだった。

冒険について右も左もわからず始まったあの日、いろんな人と知りあえた。ウイラフさんやキルヨネンさん、他にもメノウさんや、名前は知らないけど上品そうな人や兵士の人たち。

【深霧ノ幽谷では、惑わす霧に種族間の壁、そしてホロウとの争い】

ウロビトの人たちと一緒に旅をするなんて、あの時は一切考えられなかった。あれほど敵視されていたのに、それが今じゃどこのグループにウロビトが混ざっていても不思議じゃないほどだ。

【金剛獣ノ岩窟では、イクサビトに拮据する呪い、心臓を取りにくくたために寒暖激しい道。私はお留守番でしたけど】

私は里でひたすら本を読んだけれども。

イクサビトの里でウロビトに伝わる伝承と違うものを知った。巨人との戦いを知った。

【木偶ノ文庫では、その時敵対していた文庫を見張る軍艦。どれほど注意を払っても、砲撃される危険があるのに囷となって送りだしてもらえて、今更ですけどありがたいと思っています】

結局皇子をそこで止めるのが間に合わなかったのは申し訳ないと思う。

【過去にあったできごとでの対立も、盲目的な行動による対立も、どれ

も乗り越えてきました。ここまで乗り越えてきました！ 私たちは過去の人たちと同じくらい、もしくはそれ以上に、苦難を乗り越えてきたはずです！ 過去の人たちにできたことができなはずなんてないんです！」

過去より優れているところを示す。

それだけで巨人を倒せる。たったそれだけの話だ。

【もう一度、ここに伝承の……】

伝承に語られた巨人を倒すために。

過去に創られた神を倒すために。

【神話の再現を！ 神話の続きを描きます！ そのためにも力を貸してください！ 以上!!】

「アルメリア、お疲れ」

「ほんつとうに疲れましたよ……」

ローゲルさんの労いの言葉に、疲労感一切隠さず答えた。実際喋つてた時間は数分程度のものだっただろうけど慣れないことはやっぱり疲れる。

それに対して少し苦笑し、すぐにキリリと表情を整えるローゲルさん。

「ただどこからが正念場だ。さっきの言葉で、君はこの地にいる仲間たちの旗になった。作戦なんてまともに立ててない状況の中、次は行動で全員の意志を束ねないといけない」

「……はいー」

「もつとも、それは君だけに丸投げをするつもりはない。キバガミも俺も、行動はフォローできる。おそらくウーファンも動いてい——
—っ!？」

「……は？」

ローゲルさんの言葉を遮るように、雷鳴が轟き、東の空に光が迸った。

轟音と共に眩い雷光が、幾度も繰り返される。

これは自然現象による雷ではない。巨人が何かをしたわけでもない。

光が収まると、そこには輝きを放つ怪物がいた。
きつとこういうのを、悪夢と言うのだろう。

「こんな時に……なんで……」

黄金に輝く長い体躯。

翼を持たずして空を舞い、雷と呪いを操る竜。

「雷鳴と共に現る者……」

この状況で現れた竜の姿。

軍艦の中で皆が言葉を失う中、追い打ちをかけるように事態がさらに変化する。

雷竜を追ってきたかのように暗雲が瞬く間に広がっていくのだ。

雲は冷気を運んできたのか、東の空は見る見るうちに荒れていき、
猛吹雪となっていく。

吹雪の中心に鎮座するのは、蒼き体躯に長い手足。

三つ首に十二の瞳を持つ、氷と魔を支配する異形の竜。

「氷嵐の支配者……」

混迷に陥りつつある巨神の大地に、三竜のうちの二体が姿を現した。

絶界雲上域に突如現れた二体の竜。

ただでさえ巨人の対処をしなくてはならないというのに、三竜のうち二体が来るなんて頭が痛くなる。

しかしまだ事態の変化は収まらない。

音が、聞こえた。

「——、—— いったいなあ！」

「アルメリア!？」

またあの音だ。

鎖の千切れる音。突如として頭に響いた音に悪態をつく。また

ローゲルさんたちには聞こえていないのか。

「ロ、ローゲル卿！」

「今度は何だ!？」

兵士が指し示す方角、北東に目を向ければさらにもう一体、竜が現れた。まるで前からそこにいたかのごとく、忽然と。

これで竜が三体。

だけどあれは赤竜じゃない。

「黒い、竜……?！」

漆黒の巨大な体躯を持ち、翼膜のない形容しがたい歪な翼を広げた存在。

この状況下でもなお、目を離してはならないと思えるような、惹きつける存在感を放っていた。

あの竜に逆らってはいけない。あの竜に従ってはいけない。

見ているだけで矛盾した感情がせめぎ合う。

漆黒の竜は翼の調子確かめるように、広げては畳み、時には片方だけを伸ばしたりとしている。周囲には無関心な様子だった。

それとは対照的に雷竜と氷竜は少し首をもたげ、そして黒き竜に威嚇するかのよう——

反射的に未だに手に持っていた拡声器に叫んだ。

【すぐに耳を塞いで!!】

その後、

雷竜の死に繋がる呪いの遠吠えと、氷竜の微睡に陥る叫びが、この地に響き渡った。

54. 戦いの狼煙をあげて

雷竜の呪われし遠吠え。

氷竜の微睡みの叫び。

竜の咆哮が終わると共に、気球がいくつも墜ちていく。

突然操舵していた者がいなくなつたかのように。

いや、まだ間に合う。間に合うはずなんだ。

【起きてー！】

耳を塞ぐのが間にあつた人だつて乗っているはずだ。あるいは死なずに氷竜の咆哮で眠ってしまっただけかもしれない。ならばすぐに起こせば間に合う。墜落する前に。

【早く起きてください！ じゃないと……!!】

どんとどんと高度が落ちていく。あるいは崖壁に向かって進んでいく。

まだあの気球の人たちは、戦えてもいないというのに。こんな終わり方などさせていいものか。

もう一度拡声機に叫ぶも、妨害するようにまた別の咆哮があがつた。

【起き——!?!】

巨人の咆哮。

竜とは違う純粋な大音声。ただ声を出しているだけなのに、地響きを想像させる音。

「……っ！ ア、アルメリア！ 見るんだ、持ち直した！」

巨人の馬鹿みたいな大声で起きた？

なんで巨人が叫んだのかわからないが、今回ばかりは感謝しよう。まあ倒すけど。

でもなんで叫んだんだあれは。あのタイミングで叫ぶ理由は、竜への威嚇？

それとももしかして、シウアン……？

巨人の心として取り込まれたシウアンの意志がまだ少し残っている？

夢見すぎだろうか。だけどそんな夢を見て何が悪いと言うのか。希望を持って今の状況を抗いたいと思うのは当然だ。

突然現れた竜に滅茶苦茶にされそうだ。だけど雷竜と氷竜はどう見てもあの漆黒の竜と敵対している。というかあの二体が現れた理由は絶対黒い竜だ。

黒い竜の目的はわからない。けど二体の竜と戦いは避けられないはず。

それならば、

「竜から離れてください！ あの竜は、少なくとも雷竜と氷竜は巨人と私たちに用はなさそうです！ 変な乱入者がありますが、私たちは巨人を倒しましょう！」

気球も持ち直し距離を取りだす。

そして予想通りというか、雷竜と氷竜は黒い竜に襲いかかっていった。

「アルメリア、貸してくれ」

「へ？ あ、はい」

ほっとしたら、ローゲルさんが手のひらを向けてこの発言。

拡声機の話しかける道具のことかなと思いき手渡す。

「ありがとう。ところであの時の炎の壁、また撃てるかい？」

「え？ あの時の……？」

あの時とはいつたい。

思い至らないでいると教えてくれた。

「俺と戦った時のだよ。あの馬鹿みたいな炎」

「馬鹿みたいになって……ま、まあたぶんですけど。今のこの状況なら撃てるはずですよ」

イクサビトの里でウーフアンが言った通り、感情に呼応する術式だと思ふ。実際あの時ものすごく興奮状態だったし。

だから今の状況は撃てる。場合によってはあの時以上に出るかもしれない。

「そうか。まあそれがなくても戦いやすい場所はやっぱり水道橋の上かな。急な変更は混乱を招くし丁度いいか」

「？」

「ん？ あー、まあ、あの巨人と戦うのなら、だよ」

「あ、はい。そうですね。気球艇や軍艦の上からはちよつと危ないかなど」

しかしそれがどうしたというのか。

ひよつとしてあの火にすごく期待しているのか。

「あ、あの、あの術式はすごかったですけど、あれだけじゃ巨人を倒すには……」

「ああ、大丈夫。わかってるさ。さ、降りてくれ」

「え」

ぐいぐいと押されて軍艦から降ろされた。

私を降ろしたあと、軍艦は飛び立っていく。

うん？ うーん??

東の空では三体の竜の激しい攻防。北を見れば巨人、が少しおかしい。

「巨人が、西に移動してる……?」

皇子が最後に出した命令は南を呪いで満たすことだった。

だから真つ直ぐ、ゆつくりと確実に南下していたはずなのに、ずれていく。

木偶ノ文庫を、いや、水道橋を避けて行動している？

シウアンがやっぱりまだ残っている？

いや、きつとどれも違う。

シウアンは言つてたじやないか。

世界樹が怯えていると。黒い影に怯えていると。

今まですっかり忘れていたけど、ウロビトの里でシウアンは言つてた。

黒い影とは何か。どう考えたつてあいっだろう。あの漆黒の竜だ。あれは夢で見た竜だ。そして黒い依頼書に関わった人たちが斃された竜だ。

南下していく命令と竜への怯えが、巨人の動くルートをずらし始めたのだ。

ある意味竜の争いに巻き込まれにくい位置となって嬉しいけど、水道橋のようないい場所が西にはない。この立地は巨人を囲んで数に物を言わすのにちょうどよかつたのに。

もう贅沢は言つてられないか。別の場所で戦うしかないか。つてどうか私軍艦から降ろされてるからさすがにどうしようもない。

【俺は帝国騎士ローゲル】

私を置いていった軍艦からローゲルさんの声が響いた。

あれ？ 拡声機使わないんじゃないか。あ、やらないのは演説だけか。

【巨人を止めようとする志を持った帝国兵に告ぐ。これより巨人を木偶ノ文庫周辺の水道橋まで押しやる。あの場所以上の戦いに有利な場所はない。確実に押しやるために、同志は力を貸してほしい】

軍艦から降ろされた理由は押しやるからここで迎え撃てと。

なんだかともんでもない過大評価を受けている気がする。凶鳥烈火でも限界があると思います。

でもやるしかないかあと青ざめながら決意を固めると、そばに気球艇が降り立った。

「アルメリア！」

「ウイラフさん、良かった。無事だったんですね」

わーっと駆け寄ってきた彼女と謎のハイタッチ。

見ればウイラフさん以外の気球艇も続々とこの水道橋に集まろうとしている。

「驚いたよ！ 急に変な声が聞こえてきたんだもの！ 神話を再現しようって！ でも具体的な方法は教えてくれないし、わからないからこうして来たんだ」

「ナチュラルに変な声扱い……」

「いいじゃないじゃん。それで、私たちはどうすればいい？」

他の気球艇の人たちも同じ気持ちでここに来たということか。

しかし何か違和感。

「うーん？」

「え、もしかして何も考えてなかったとか？ 神話を再現するとか元氣いっぱい言っておいて？」

「あ、いえ、それも考えてませんでしたけど、なんか皆さんの姿に違和感というか……何か足りないというか……」

少し考えて、ああ、とウイラフさんは何か納得が言ったように答えた。

「ここに来たのはタルシス組だけだからじゃない？」

「タルシス組で」

「ウロビトもイクサビトも、それぞれで動いてるみたいだし」

ほらあそこ、と示された場所は水道橋の上ではなく、その下。

絶界雲上域の大地にニカ所。イクサビトの集まりとウロビトの集まりが見えた。

「なんであんなところに……」

「わからないけど、きつと何か意味があるはずだよ。それより私たちもどうにかしないとね……」

テキトーに各自が動くのはきつとダメだろう。みんなそう考えたから、こうして来た。私がこの戦いの旗となったのだ。しっかり考えないと。

巨人が少しずつ西、いや南西へと舵を取り始めたのに対し、軍艦はさらに西へ回り込むように動きだしている。

さっきのローゲルさんの声を思いだせ。押しやると言っていた。砲撃でもするのだろうか。

砲撃で動かせるかはわからないけど、最初の攻撃は帝国になる。その起点から、どう動くべきか選べ。

それぞれが自分たちのやるべきことを選んでるんだ。わからない、なんてことはない。考えろ。

「……」

「アルメリア？」

軍艦の動きの意味、イクサビトの位置、ウロボトの位置、巨人の力。

「気球艇を三つ……いや、二つに分けて飛ばしてください！ それぞれ帝国、イクサビトに！ 帝国に飛ばす気球艇は何か梯子かロープを！」

「わ、わかった！」

「ウイラフさんはここで待機！ 状況が動き次第、ローゲルさんとキバガミさん、ウーフアンを連れてここに！」

「動き次第ってどういう状況に？」

「動き次第！」

「……オツケー！」

思い浮かべた通りの展開になるかはわからない。自信もない。けど自信のない姿なんて見せてはダメだ。そんな姿で指揮を取れば、不安が伝播してしまう。

これ以上、世界樹のせいでは不安を広げてたまるもんか。

二方向へ飛んでいく気球艇を見ながら、巨人に対しての不安要素と別の不安に思考を回す。

東の空。

竜たちの争いだ。

竜の咆哮は明らかに異常を起こす。先の影響を受けた気球艇の分

布から、距離が開いていれば効果は薄いようだけど、いつまでもあそこから移動しないとは限らない。

黒い竜の目的は世界樹だ。敵の敵は味方、なんて単純な考えはできないだろう。

それに見てるだけで畏怖と嫌悪を感じさせるあの姿に、好意的な考えなど持てない。

東の空の乱戦に目をやれば、黒い竜に雷竜が纏わりつきながら大口を開けて噛みつきこうとしていた。その口を片腕で掴みながら妨げているものの、黒いものの背後からは氷竜が腕を青白く光らせながら振りかぶり殴りかかろうとしている。

多勢に無勢の状況。

次の瞬間には、黒竜は噛み千切られ、叩き潰され、命を失うと予感させる光景だった。

しかし牙が届く前に、氷の腕が振り降ろされる前に、黒竜が吠えると同時に黒い煙が噴き出た。

煙は意志を持つように蠢き、竜たちの体に纏わりつく。

ただそれだけで異変が起きる。

翼もなく空を飛んでいた雷竜が、まるで飛ぶ力を失ったかのように地に落ちた。首をもちあげようとしているが、纏わりつく煙に重みでもあるかのように動きが鈍い。

氷竜も同じだ。その両腕は重しでも持たされているかのように下がり、膝をつきながら動けないでいる。三つの首が恨めし気に黒竜を睨んでいるだけだった。

倒れた二体の竜を見下ろすのは、黒い竜。

「嘘……三竜のうちの二体が負ける……?」

私と同じく東の空を見たウイラフさんが、信じられないとも言おうように呟く。

黒竜は動けない敵をまるでとるに足らない相手とでも言うように無視し、巨人に視線を定めた。

今この状況で乱入はさせるわけにはいかない。

この神話にお前の席はないのに。

黒い竜が動きだす直前、東の空を業火が包みこんだ。
業炎の中、紅き巨体が飛び込んでいく。

「赤竜……！ は、はは……三竜勢ぞろいって何これ」

「赤竜って確か怪力の竜ですっけ」

「え、ええ。力が赤竜、魔法が氷竜で呪いが雷竜」

まるで現実感のない悪夢を見せられている、そんな気持ちなのだろうウィラフさんも。

もう笑うしかないといったリアクションとともに、こちらの確認の言葉には丁寧に教えてくれた。

「赤竜がどこまで持つか……あの黒いのがこっちに来たら最悪ですね……」

「……三竜が負けるなんて、思えなかったんだけど」

巨人の起こす地響きと、竜の起こす地響き。

竜がいた丘の上は、赤竜の咆哮と共に崩落するように崩れていく。足場が崩れ落ちていく中、雷竜と氷竜も一緒に落ちていくのが見えた。

業炎に包まれていた丘が無くなり、黒竜と赤竜は空中で掴み合うように戦っている。

さすがに怪力な竜だけあるのか、赤い力は黒を投げ飛ばした。さらに追撃を掛けようと大きく息を吸いこむ動作を見せる。

その仰け反りの間に、黒竜から青白い塊が飛びだし赤竜の体に触れた。直後に赤竜の姿が凍りつく。

それで終わったかと思えば、凍りついた体を内側から割るようにもがき、体の自由を取り戻す姿。しかしその間に現れていた黒い煙が、他の二体の竜の動きを奪った煙が赤竜を包み込んだ。

それだけで赤竜からも動きが奪われ、地に堕ちていく。

竜が墮ちる音は、見ている者に重く刻まれた。

「赤竜まで……」

「……ウィラフさん、巨人の力の源は顔にあるそうです。そこにシウ

アンと巨人の心臓が入りこんでるんだとか」

「え……う？」

あの黒い竜は巨人との場に来てはダメだ。

赤竜を一瞬で凍らせた魔法染みた力を持ち、雷竜の力を片腕で抑え込む肉体の力、すべての竜の動きを封じる呪い染みた黒い力。

三竜を超えた力を持つ黒竜が、今度こそ邪魔ものがなくなったとばかりにゆっくりと翼をはためかせた。

その進む先は、巨人。

少しでも時間を稼がないといけない。

「秘策ってわけじゃないですけど、凶鳥烈火っていうすごい術式があるんです。それで少しは時間を稼げないか、やってみます」

「アルメリア、何言ってるのさ。あれは挑んじゃダメ。絶対に」

「そうですね、そうも言ってもらえません。とにかく巨人の弱点は顔です。大変ですけどお願いします」

「ちよつと——え？」

「ほい？」

ウィラフさんが引き留めの最中に間の抜けた声をあげる。

それにつられて私も微妙な声をあげてしまったが、まあいい。何が見えたのかと視線を辿れば、黒竜の飛ぶ先に趣味の悪い金色の気球艇。

その気球艇から、何かが落ちていく。人型の何かが、飛び降りるよ

うに。気球艇の飛ぶ高さから飛び降りれば、死ぬ。

そんなもの普通は死ぬ。

普通であれば。

あの人は普通じゃない。だから死ぬことはないだろう。

だけど何故、動いてしまったんだ。

見ているだけで良かったのになぜ。

「イシユ……！」

落下していくイシユの姿。

そして向かってくる黒竜の姿。

タイミングを計ったかのように、両者が接触した。

接触と同時にイシユが黒竜を足蹴にしながら幾度と斬り刻んでいく。何度も舞うように。

あれは熊騒動のときに見た――

「如く舞う……」

その攻撃によって黒竜が堕ちたわけではない。だけど、動きは止まった。

巨人から視線を外し、竜から離脱し落下していくイシユに向ける。

「イシユ、どうして……」

「……アルメリア。イシユと何があったか知らないけど、あつちは任せよう」

「……」

落下していくイシユを追うように黒き竜は降下していく。

自身を傷つけた小さな存在を叩き潰しに向かったのだ。

自然落下よりも速く降下していく竜に小さな体は追いつかれる。

まるで嘲笑うかのように並走したのちに、見せつけるように黒い腕を振りかぶり――余裕たつぷりの竜の顔を、イシユの腕が飛んでぶん殴った。

竜にも奇襲って通じるんだ。そんな感想が浮かんだ。

黒い大きな体と小さな体、その両者はそのまま地に落ちる。

二度も自身の体を傷つけた小さな者に、怒りを隠さないような黒竜の咆哮があがった。

遠目からでも恐ろしい存在と悟れる相手を前に、小さな体で対峙する剣士の姿。

震えもなく、二振りの剣を悠然と構えて何かを言った。

さすがにその声は届かない。

「アルメリア」

「……はい」

トラウマの世界樹相手ではないなら頼ってもいいのではないかと

考えてしまつて自己嫌悪に陥りそうになる。

しかし、あの人以外はあの竜を止めることはできないとも思える。竜が巨人との戦いに混ざるのは危険だ。巨大な力と凶悪な力が一つに合わさりかねない予感がする。

私の我儘で全てを終わらせてはダメだ。

だからあの竜だけ。あの竜だけ、お願いしよう。

理論武装をして、私たちの戦う相手を見据える。

「私たちは私たちの相手にかかりましょう」

東で黒き竜と千年前の指導者が争い、西には巨人と軍艦の最初の一手が打たれようとしていた。

55. 崩れゆく日常を崩さぬために

——マルク統治院。

外から聞いたことのない神々しくも恐ろしい声が聞こえ、執務室の窓から辺境伯は北の空を眺めた。

そこには見慣れた大樹の姿はなく、遙か遠景からでも人型とわかる巨神の姿があった。

その光景に、何が起きたかを彼は悟った。

帝国が計画していた世界樹の力の発現、この大地を緑で呑み込む悪夢を。

「始まってしまったな……マルゲリータ」

マルゲリータと呼ばれた愛犬は、辺境伯の顔をしばらく見つめたと思えば執務室の扉に顔を向ける。

誰かが向かってきているのがわかったのだ。

巨人の進行方向からせめて住民を逃さないとならない。領主としての最後の命令となるだろう。その命令を下すために誰かが訪れるのは丁度いいと思えた。

「辺境伯！ 世界樹のあった場所に巨人のような何かがある——！」

「ああ、見えているとも。伝承の巨神、楽園に導くと言われていた存在だ」

「……あれが、各地で語られている……あ、今言うことではないかもしれませんが、碧照ノ樹海の祭壇報告なのですが」

「本当に今言うべきか悩むことだな……祭壇の調査はすぐに辞めるように。兵士は一度集合し、二つの部隊に分けてくれたまえ。一つは住

民を避難させるために。もう一つは北に向かった者たちの撤退の手助け、及びウロビトとイクサビトの里の避難の手助けを」

少しズレているのだろうかこの兵士は。それとも職務に愚直なのか。

もつともその程度のことは怒ることではない。状況が状況でなければ笑い話にしていただろう。

そんなことを思いながら辺境伯は指示を出す。

北にはすでに多くの冒険者や兵士が向かっている。彼らの救出をしなくてはならない。見捨てることなど、彼にはできない。

「了解しました！ あとニーズヘッグの方から祭壇の調査時に伝言を受けてまして」

「うん？ 彼らから？」

「はい。まだ間に合う。報酬はお金が嬉しい。この二点を辺境伯に伝えるようにと言われておりました」

それはアルメリアからの伝言。彼女がこの伝言を頼んだのは、巨人の復活の阻止がまだ間に合う、ということ伝えるためだった。その伝言が今になって辺境伯に届いた。

伝言を受けて、辺境伯は思案に耽る。

まだ間に合う、とはどういう意味か。報酬はお金が嬉しいとは。

この状況でこの伝言。本来意図された内容はこの場にいる誰もわからない。だからこそ、勘違いが起きた。その勘違いは決して悪い方向ではなかった。

「……そうか。ふふふ、そうか！ まだ間に合う、か！ 君、先の命令は一部取り消しだ」

「はい？」

「北に向かう部隊は、ウロビト、イクサビトの里の避難にだけ注力してくれたまえ。絶界雲上域にまではいかななくていい。あとわかっ

ると思うが、赤竜には警戒するのだよ」

数時間前から、世界樹が倒壊後少ししてからか、赤竜が奇妙な動きを見せていた。思えばあれは巨人の出現の前兆だったのか、今となつてはわからない。よっていつも以上に竜に関しては警戒するよう促す。

まだ計画を止めれるということだろう。

報酬を受け取りにくるつもりなのだろう。ならば、それに応えないといけない。信じなくてはならない。

一介の冒険者の言葉に己の命運を委ねつつ、住民の避難指示は出しておく。

指示を受けた兵士は慌ただしく走りながら執務室を後にした。

「私のモットーは、慎重に！　かつ大胆に！」

以前ここで少女に言った言葉を愛犬にも言つて、窓に映る巨人の姿を見た。

そして彼は静かに呟く。

「だから私はここで、諸君を信じて待っていよう」

その言葉とともに、領主として住民の避難準備を進め、個人として彼らの帰還をここで待つ決意を固めた。

普段なら冒険者なり兵士なり、誰かしらいる店内には今日は誰もいなかった。

先ほど聞こえてきた不気味な声に皆外へ飛びだし、北にそびえる人型にパニツクに陥ったからだ。

他の店員も家に帰らせた。よってこの店内に残っているのは店主の女性一人だけだった。

「こんなに静かになるものなんてね……」

誰もいない店の中で一人ごちる。

普段であれば、店内の騒がしきで外の音など聞こえなかったのに今日は逆だ。

店の中が静寂で、外の音は慌ただしい。

外から聞こえる兵士の言葉に耳をすませば、避難指示が出ているようだ。そのため荷物を最小限にまとめて集合するように、と。

彼女も避難指示に従うべきだが、何故だか移動する気になれなかった。憧れであった自分の店を手離すということに抵抗があるのだろうか、命より大事なのだろうか、と自問するもわからずじまい。

客がいらないのなら今のうちに依頼書を整理するのもいいかもしれない。古いものと新しいものを仕分けするかと依頼ボードに目をやると、

「うわあ……そんな風に消えるのね……」

ここ最近彼女の頭を悩ませていた黒い依頼書が、煙のように形を無くし消えていく瞬間を見た。

ここ数時間の間、赤竜がやけに騒がしいと聞いていたが誰かが石柱を破壊したのだろうか。それとも地響きによるものか。

黒い依頼書がなくなったことは嬉しくある反面、不安でもある。

巨人の出現したタイミングとは偶然なのか、それとも必然か。これ以上嫌な方向に転がらなければいいと祈りながらボードを整理する。

すると店内に誰かが入ってきた音が聞こえた。

「あら？　こんな時にいらっしやい。どうしたの？」

「こんにちは。ちよつと新しい依頼を出そうと思いましてー」

セフリムの宿の女将だった。

女将がこの店に来ること自体は珍しくもない。宿に出している料理の食材調達は依頼を通して多いからだ。

だが今は非常時。マイペースな女性だとはわかつているがここまでは、と店主は面食らう。

「世界樹がなくなつて巨人が出たつていうのにあなたねえ……」

「……巨人？　なんのことです？　あ、それより聞いてくださいよ。最近疲れが溜まっているのか世界樹が動いているように見えるんですよねえ……こう、ゆらゆら〜つと」

「そう……。まあ気づいてないならいいわ。でも避難指示だつて出るのよ？」

巨人の声も女将は疲れが聞かせた幻聴と思つていそうだと考え、別の方向から指摘をする。

「そうですねえ……なんでも緊急事態だとか」

「そうよ。だから依頼なんて出してる暇はないんじゃないの？　どんな依頼かは知らないけど」

「そうなんですよ、頼みたい依頼がですねえ」

どんな時でもおつとりとした雰囲気を崩さない女将はひよつとしてかなりの大物なのは、と彼女は呆れながら話の続きを待つ。

こんな時でも出したい依頼。よつほど大事なものと普通は考えるが、こと女将相手ではいつも通りかもしれない。

「ご飯を作るのを手伝ってほしいんですよ。今」

「……今？」

「はい、今です」

「ご飯作りを手伝ってほしい。今。」

時間指定の依頼は珍しくないけど何かが違う。絶対違う。

「頑張ってくださいってる兵士さんたちや不安になっている方たちにご飯を作りたいんですよ。でも私だけだと手が足りなくて」

世界樹が無くなり、巨人が現れてパニックな中の避難指示。誰もが不安になっている最中だ。

そんな中でも自分ができるところを、女将は見つけて行動しようとしている。人々を安心させようと。マイペースさが作った偶然かもしれないが。

「……まあ、避難指示が出てるとはいえ動かせない病人や怪我人もいるし、そんな人たちのために作るのもいいかもしれないわね」

「ありがとうございます。報酬はどうしましょう？」

「そうねえ……今度あの子にご飯を奢ってもらおう予定だから、その時あなたに腕によりをかけて作ってもらおうかしら」

孔雀亭を後にしてセフリムの宿へ二人は向かう。

先のことを話せばそれが現実になると願って、という気持ちはなく、ただの日常のように。

——カーゴ交易場。

「どうもー！ ベルンド工房から来ました！」

「相変わらず元気いっぱいだな嬢ちゃん」

カーゴ交易場にベルンド工房の看板娘が訪れていた。

交易場として工房の品を扱うこともあり、工房関係者が来ることはそれほど珍しくはない。しかし、それは普段ではの話だ。

「こんな時にどうしたんだ？ 避難指示が出てんだろ？」

「そういう港長だつてこんな時に何してるの？」

「俺は仕事だよ。ま、もう終わっちゃまったけどな」

交易場の作業員たちの緊急の仕事、一人でも多く乗せれる馬車や気球艇を作れ。

避難のために使うのだろうが、ゼロから馬車や気球艇を作るには圧倒的に時間が足りない。よって現存している気球艇や馬車に外付けの籠を作っていた。

だがそれでも限界がある。気球艇でも馬車でも、重量とバランスの問題に詰まる。無理な設計をして気球艇が途中墜ちるなどあつてはならない。馬車が途中壊れて魔物に襲われてはならない。

よつて手を尽くせる限界までの作業とはいえ、すぐに終わつてしまった。

「工房にも避難指示出てんだろ？ 嬢ちゃんもさっさと行つてこいよ」

「出てるけどだーれも避難しないんだ。もちろん私もそのつもりだよ！」

「素直に避難しとけ。兵士が困るだろうが」

「私もやれることをやりたいもん。それより余つてる廃材とかないか

な？ 簡易な武具にできそうな素材で」

工房の娘の姿に、こんな時にもまだ何か作ろうとしているのか、生粋の職人気質なのだろうかと交易長は愉快的な気持ちになった。

彼にも避難指示が出ている。だが避難する気はない。多くの気球艇を生みだしてきた作業場から離れたくないのだ。最後まで気球艇と関わって終わりたいという気持ちがある。

「街の外で魔物もたつくさん暴れてるみたいで武具が足りなくなるかもなんだって。今から打つには時間が足りないからあるものでなんとかしようってなってね」

「……どこもそうだよなア」

「それでそれで！ 何か余ってるのいかな！」

どこも時間が足りない。そんな中で精いっぱいやらねばならないのだ。

街の外の魔物もパニックに陥っていると聞いて、さらにはこんな娘も精いっぱいやっていると知った。

余っている素材ならある。いや、あった。

だが今は余っていない。

「すまねえな。何にも余ってねえわ。仕事がまだ終わってなかったからよ」

「ほえ？」

「嬢ちゃんは今工房に戻りな。武具がなくても医薬品とかならあんだろ。それか兵士のために飯でも配ってやれよ。何気にあんだ、人気なんだぜ」

「へ？ へっ？」

魔物の暴走に対して、馬車や気球艇の補強も視野に入れてもう一度働かないといけない。収容人数を増やし、なおかつ強度を高める。ギ

リギリまで、やり遂げなくてはいけない。限界と考えたラインは本当なのか、再度考え直し、絞りだし、動かねばならない。冒険者や兵士の戦場とは違う、気球艇の作業員としての戦場に本気であたるのだ。まだ作業員たちは残っているはずだ。諦めている時間などない。

彼は避難の準備をしていた作業員たちを呼びとめた。
こんな時でも最後までつき合わせてしまうのは申し訳ないが、一人では限界がある。

混乱している工房の娘は置いといて、自身にも喝を入れるように声をあげた。

「おいボンクラども！ 休憩は終わりだ、さっさと持ち場につけ！」

――
街門。

街門では冒険者や兵士、魔物と入り乱れている状況になっていた。うろつく跳獣の拳に合わせてカウンターを放ち、一呼吸空いた隙を見逃さずギルド長は兵士たちに指示を出す。

「三人一組で一体の魔物を相手にするのだ！ 魔物どもは正常な判断はできていない！ 落ち着いて対処せよ！ 絶対に中に入らせるな！」

巨人の出現と咆哮により、大地中の魔物がパニックに陥り暴走しているせいだ。

どの魔物もただ巨人から遠ざかろうとしているだけだが、街の中に

入れさせるわけにはいかない。

ただでさえ巨人の出現により馬が興奮している。そんな中魔物が近くにいればまともに動けない。住民の避難もままならない。

「まったく……街を通らず逃げればよいものを……!」

跳獣のような大地をうろつく魔物は川を越えてまでタルシスに向かってくる。それだけでなく、近くの廃鉱からも魔物が流出している状態。

すべての魔物が街に向かっていているわけではない。全体の数割程度。しかし一体でも避難に大きな影響が出かねない。

街の死守のために数多の魔物と戦うというのは、なかなかしんどいものだ。ギルド長は感じた。

「神経を使い過ぎてかなわん……巨人を相手にする方が面白そうだな」

「ギ、ギルド長! そんなこと言っていないで前! 前!!」

「む?」

何頭もの狒々と共に迫ってくる魔物がいた。周囲の狒々よりも二回りは大きな存在。さながら狒々の王。

廃鉱の魔と呼ばれていた彷徨う狒狒より上の存在。

森の廃鉱の奥深くに狒々の王がいるのでは、という話がかつて何度か上がったことがあった。新米の試練として使われている廃鉱にて、ごく稀にとてつもない力で押し潰された死体が出てくるがあったためだ。

力試しの試練、そこに現れる理不尽。その元凶が巨人によってあぶり出てきた。

「巨人騒ぎは悪いことばかりではないな……力を試すことすらできず散っていったヤツらの無念、それを晴らす機会が訪れるとはな!」

「ギルド長!? ですが門を守らなくては!」

「む……それもそうか……」

門を守るためにも彼はこの場を離れられない。確実にあの魔物の息の根を止めてやりたいが、それに尽力すれば守りはおろそかになる。兵士たちは魔物との戦いには不慣れなため彼がいなければ決めた手に欠けてしまいジリ貧に陥る。

冒険者もこの場にはいるが、腕に自信ある者は絶界雲上域に行ってしまうている。

せいぜい痛手を与えられる程度に終わりかねない。口惜しいが耐えねばなるまいと彼は堪えようとした。

せめて腕利きの者があと一人、この場にいれば。

「……僕に手伝わせてくれないだろうか」

堪える彼に、凜とした声が協力を申し出た。

彼にとっても聞き覚えのある声だ。木偶ノ文庫攻略のために軍艦の囿になり、世界樹倒壊時にタルシスに戻るはずだった冒険者。

「キルヨネンか。お前、今までどこにほつつき歩いておった」

「……それは」

「それにお前、少し臭いぞ」

「……」

決して彼はふざけて言ったわけではない。

実際にキルヨネンから変わった匂いがするのだ。泥や汗の匂いでも香水の香りでもない。

キルヨネンは沈んだ顔をしながら背囊から小瓶を取り出した。

「竜が嫌う香りを出す薬品です……」

「……赤竜に使ったか」

「……言い訳にしか聞こえないかもしれませんが、タルシスへ戻る途中、急に意識が途切れました。そして気づけば、赤竜の石柱を破壊していました……」

竜の石柱。

突然現れた孔雀亭の黒い依頼書に関するもの。未だに学者たちも全容を掴めない不気味さと人を惑わす力から、触れないように通達は出ているものだ。竜殺しの家系の出からも言われていた危険物。

自らの意思ではなく、件の惑わす力によって操られてしまったのだろう。

その力のせいであってキルヨネンのせいではない、と声を掛けたところで意味はなさそうだとギルド長は判断する。

キルヨネンの先の申し出は、罪悪感によるものが大きいだろう。

普段のキルヨネンであれば巨人に迷わず向かうはずだ。

「勝手に石柱を破壊した件についてはワシからは何も言えん。破壊したところで、それがどう響くかはわからん」

「……」

「だが今、確実に言えることがある。全力で門を守れ。フォートレスのあり方を示してやれ！」

今やるべきことを彼は言った。

そして、とさらに続ける。

「誰にだって間違いはある。それをフォローする者がいれば問題はない。ワシの今からする行動とて間違いだからな！　というわけで、ワシは勝手にあの狒々を仕留めさせてもらおうぞ！」

「ギ、ギルド長?!」

「キルヨネン！　門は任せたぞ!!」

「……は！」

戸惑う兵士をよそにキルヨネンは力強く返事をした。

自分がやった失態がどう響くかわからない。それをいつまでも引きずるわけにもいかない。

巨人が現れた北の地では今頃、多くの冒険者仲間が戦っているのだろう。その戦いに参加したいという気持ちはあるが、今自身がやるべきことは、城塞騎士としての使命は、

「騎士としての名誉を求めず、無垢なる者を守ってこそその城塞騎士だ」

ギルド長が剛腕の狒狒王に掴みかかり、揉み合いになりながら何度も頭突きを繰り返している姿に若干引きながら、キルヨネンは己が使命を務めんと武器を抜いた。

タルシスでは各々が各々のやり方で巨人の現れた世界と戦っていた。

56. 暁の上帝と冥闇に墮した者

黒き竜、縛鎖より解き放たれた忌むべき者。

冥闇に墮した者と呼ばれた竜は、機嫌がよかった。

一つ目の封印が解けた時、力を持って無理やり人間を動かした。二つ目が解けた時、ある考えがよぎり三つ目の封印はすぐには解かずにいた。

封印が解けたとしても、この身では未だ竜を統べる神竜には敵わない。再び封印されることとなるだろう。

だからこそ、力を得る必要があった。

それは世界樹の力。

封じられる前から求めていた力。

永き眠りによつて世界樹の力は発現していなかったが、人間が復活させようとしていたことを知っていた。だから二つ目の封印が解けた際、世界樹復活に協力してやることにした。

世界樹復活に合わせて自身の封印も解くために。

それならば世界樹の力を喰らう際、壁となりえる神竜は間に合わない。

そのために帝国の皇子に力を貸した。どうせ滅ぼす対象ではあるが、感謝を込めて些細な願いは叶えてもやった。世界樹の呪いに蝕まれることなく動けるように、皇子が殺したい相手からも呪いの影響を遠ざけた。

結果、世界樹の復活は叶った。

そして封印も解かれた。

すべてが順調だった。

永年自らを封じ込めていた鎖もなくなり、さらには世界樹の力をも喰らう絶好のタイミング。神竜以外の邪魔するであろう三竜も、今は翼をもちがれた状態となったからだ。

己を苦しめていた呪縛を利用し三竜は動けない。人間どもと世界樹の力を持つ巨人の争いなど自身にはなんの痛痒もない。

あとは世界樹を喰らい、その力をもって忌々しい神竜をも喰らうだけだ。

——だというのに。

「千年の間に生まれた新種、珍種か。世界樹が創りし竜が独自の生態を獲得したといったところか」

奇妙な邪魔が入った。

金の髪を風に靡かせて、人間のようなモノが観察するように不躰に視てくる。

その目には冥闇に墮した者への畏怖はない。恐慌状態の目でもない。ただ珍しいものを、珍奇なものを見る目だ。

小さな弱き者に、二度も傷をつけられただけでも許しがたいことであるのに、珍獣のような扱いを受けることは屈辱に感じるほどだった。

黒竜にはもう、それまでの上機嫌な気持ちはもはやなく、人間のようなモノへの怒りのみが心に占める。

「アルメリアが——人の仔が、かつて我が見つけられなかった可能性を見せてくれるのだ。珍しい蜥蜴ごときに邪魔させるわけにもいかなぬ」

壊す。

神竜はまだ来ない。この無知で無礼な人間のようなモノをガラクタに変える。破壊する。

侮辱する言葉を垂れ流すモノは破壊する。すぐには壊さない。教え込むように、じつくりと破壊する。

冥闇に墮した者には人間の言語も解せる知能がある。話すことも

できる。だがこの無知なモノに対して言葉を交わす必要を感じない。死刑宣告の如く、空気震わす咆哮をあげ、辺りに黒い煙を放出する。

———まずは体の自由を奪う。動けなくなったところをゆつくりと、確実に恐怖心を覚えさせていたぶる。

三竜と同じく、冥闇に墮した者の咆哮にも力が込められている。聞く者のあらゆる加護をかき消すものだ。通常の間にはあまり効果がない地味なもの。人ならざる者にこそ効果のある咆哮。

目の前の人間のようなモノはその実、人間でないということはずでに知っている。

一つ目の封印を解いた存在。その存在を有効利用しようと体内に力の一部を潜らせたが、人間の脳や神経を持たない別のモノだとその時に気づいた。

体内に潜らせた力の一部で操ることは叶わなかったのもそのためだ。人間でないから、なんらかの力によつてその身を守っているからだ。

そう予想をつけた黒竜の咆哮、そして体の自由を奪う黒い煙——自身を封じていたものをアレンジした、冥闇の呪縛。

黒い煙に包まれ、その身の異変に気づく愚かなモノの姿の未来を予見していた。

「山行水行」

煙の中から人間のようなモノが飛び出すまでは——

「またも——この身に傷を！」

「ほう、言葉を使うことができるか。実に珍しい蜥蜴だな」

傷自体は深くない。鱗の表面をなぞられた程度のものだ。だがこれで三度、竜の王となるこの身に烏澁がましくも傷をつけた。

その激情が下賤なモノと言葉を交わす気がないという考えを忘れさせ、怒りが表へ噴出する。

「壊す！ 必ず壊す！！ 確実に壊す！！」

「話すことはできるが、知能は低そうだな。所詮は珍獣か」

「——！！」

どこまでも愚弄する小さなモノに憤怒の叫びをぶつけた。

叫びに対し人間のようなモノから奇妙な音が漏れだす。空気の漏れるような音。

黒竜にはその音が何を引き起こそうとしているのかはわからない。すでに憤怒によって理解をしようとしてもしていない。

ただの無駄なあがき。くだらぬ小細工。

そう断じて叩き伏せ、粉々にし、この世から完全に消すことだけを考えて動きだした。

——呪縛が効かないのであれば、ただ単純に壊すまで。

迫る凶爪を前に人間のようなモノは避けようと体をよじる。だが竜にはひどく遅く見えた。

人間の鎧程度、葉のように切り刻む爪は奇妙な手ごたえを覚える。どこまでも人間とは異なる存在だということだろう。同じなのは見た目だけのモノ。

「ヴ——ド——」

切断されなかったが、衝撃を殺しきることができず無様に転がるモノが何かを呟いた。

しかし黒竜は気にも止めない。

確かに人間より強い体なのだろう。生物ならば絡めとれる呪縛が通じぬ特殊な体なのだろう。

しかし、それだけのモノ。

その剣を用いた斬撃も鱗に少し引つ搔き痕を作る程度。

落下中に用いた拳による攻撃も、ただ驚かせた程度で終わった。

人間のようなモノの攻撃は、冥闇に堕した者に何一つ通じない。ゆえに、安心して破壊することができる。

翼をはためかせ、倒れたモノに向かって獄炎を思わせる炎の風を浴びせる。

周囲の草は一瞬で燃え尽きて形を無くし、大地からは湿り気が完全になくなり干しあがった。

「ヴォ——ウ」

生命を持つものであれば、致死に至る熱風。そんな中、耳障りな声と音を立てるモノが立ち上がる。

未だに悲鳴をあげず、何かを口走る姿。気に食わなさど奇妙な、僅かな息苦しさを感じながらも別の気持ちりが沸きあがる。

すでに一方的な展開。

それが冥闇に堕した者の嗜虐心を擦った。激怒の破壊衝動よりも、当初のいたぶり弄ぶ感情がぶり返してきた。

——想像以上に頑丈なこのモノなら長く愉しめる。

残酷な嗜虐心を満たすために、そしてこれから起きることをわからせるために、冥闇は言葉を用いて尋ねた。

「人間の遊び、毬突きを知っているか？ 弾む球を幾度も地に打ち付ける遊びだ」

「……蜥蜴が、人の遊戯に興味を持つとはな」

つまらない反応だったが、これから恐怖へと、悲鳴へと変わっていくであろうことを思えば愉しみは尽きない。

人間のようなモノが持つ剣に炎が纏いだす。

周囲に満ちた熱気をも糧にするかのようになり、激しい炎だ。しかし炎の剣は冥闇に届かない。

迫るモノを上から、爪を立てながら叩き伏せる。

肉を抉られながらも地に勢いよく体をぶつけ、その衝撃により弾んだ体。それをもう一度叩き付ける。

先の問いに出した、毬突きのごとく、何度も何度も。

「——オイ……」

未だに悲鳴は上がらない。

腕がもげ、脚も吹き飛び、胴体は幾度も跳ね飛ばされながらも悲鳴は上がらない。だが奇妙な音と声を出す。

まだ壊れない、それが嬉しい。

永年封じられた身が、頑丈な玩具を見つけたのだ。最後はどんな言葉を上げるのか、それが気になるため頭はもげないようにのみ注意して遊ぶ。

冥闇の胸中には愉しさが大きく占めていた。それが先ほどから感じていた息苦しきから意識を逸らさせる。息苦しいと言えど、呼吸できないほどではない。ただ違和感があるだけだ。

モノが弾むのを中断しないように、また爪を立てながら叩き付ける。また弾む。また叩きつけようとして——

——外れた。

弾んだモノを叩き付けることができず、バウンドは終わってしまった。

記録が止まってしまったことは別にいい。外れたことが問題だと冥闇は感じた。モノがもがいたわけではなかった。ただ腕が、思った通りの動きをとれなかった。

何かがおかしい。

奇妙な事態が、冷静さを取り戻していく。

この息苦しきは何か、いったいいつから。モノが立てる奇妙な音は何か、この音は何を引き起こそうとしているのか。腕が思う通りに動けない理由は何か、何が原因なのか。

己の黒き腕を見ながら、口から血が垂れ落ちた。

———
何故。

「つまらん遊戯は終わったか。蜥蜴よ」

「何を——— 貴様、何をした———!!」

手も足もない、達磨状態のモノが愚弄の言葉を吐く。

何が起きているかわからない。だがこの異常は、このモノが原因。竜は叫ぶも上手く言葉がだせなかった。その怒号はまるで苦しむように途切れ途切れの言葉となって空気を震わす。

「まったく、知性を感じぬ声というものは聞き苦しいものだな」

「貴、様———!」

「千年前、世界は滅びた。大地は汚れ、海は淀み、空は濁った」

モノが何を言っているか、理解などするつもりはすでない。ただ完全に壊す。遊ばずに壊すという考えをもとに、竜は迫る。

しかし思い通りに動かない体のせいで距離がすぐに詰められなかった。

「世界樹の力を持ってしても、千年の時を経てもそのすべてを浄化しきれぬ汚染。その汚染を我は改良、いや、改悪させた。改悪したそれは使えばあらゆる生命を奪うものとなる」

「———!」
「この付近をそれで満たした、ただそれだけだ」

咆哮をあげようにも、出てくるのは己の血だけだった。

「さらに濃度をあげるとしよう。蜥蜴の生命力がどれほどのものか——耐久実験といくか」

モノは見る者を怒りに染め上げさせるような表情——竜には知らなかった表現で言えば、ドヤ顔を見せながら、最後の宣告を行う。

「ヴォイドゼロ
VOIDO」

その言葉と共に、眼にはつきりとわかるほど空気が淀み、濁っている。

冥闇の口から、眼から、汚染された空気を押しださんと血が溢れる。鱗の生え際からも、全身の穴という穴からも血が。

世界を滅ぼした汚染、それを集め、さらに歪めた諸悪の物質が触れる者の命を蝕んでいく。

そこには竜も例外ではなく、唯一の例外は命を持たぬ存在。

——このままでは、この汚染が、届かない場所へ

汚染と血により覚束ない意識と視界の中、冥闇は状況を打開せんと動く。

汚染濃度が跳ね上がったことにより苦しみは激化した。だが、肉眼でわかるほどの汚染度の空気。ならばここから抜け出せばいい。

今は体が自由に動かせない。だが外に出れば、外から炎を浴びせるなり、凍らせるなり、感電させるなり——はたまた自身の切り札、スーパーノヴァで消滅させるなりと壊す方法はいくらかもある。

外に出れば、氷竜には及ばないが高位の回復術式によって肉体を完治させて、自由にあのモノを壊せる。

——もう、少し

汚染の届かぬ空間へ出れる。あと少しで。

この汚染はすぐには広げられないものようだ。段階を踏んで空間を満たす必要があるのだろう。

あと少し。赤く滲む視界の中、脳裏に浮かぶはこれから破壊されるモノの未来の姿だった。

——外、だ。

外に顔を出した瞬間、己の血とは異なる紅が——偉大なる赤竜の剛腕が、冥闇に墮した者を再び汚染の中へと殴り返した。

「——が、アッ!?!」

「この蜥蜴は随分と嫌われているようだな。なんとも、哀れなものだ」

汚染の中、忌まわしきモノの声が聞こえる。

汚染の外では、しつこくも喰らいついてきた鬱陶しい赤竜の咆哮が響く。黒竜を逃がさぬとばかりに。

「この——屑どもがアア!!」

ほんの僅か。ほんの僅かではあったが汚染から抜け出し新鮮な空気を吸えた黒竜は、脅威の回復力をもってその体を少しばかりまともに動かせるほど回復していた。

怒りの咆哮をあげながら氷礫波——先の争いで赤竜を凍らせた技を用いながら呪縛を伸ばす。

狙いは外へ出ることを妨害する鬱陶しい竜に向けて。

その攻撃は汚染を抜ける前に、突如間に現れた青白い障壁に阻まれた。

汚染された空間の中、氷礫波を阻んだ障壁は光り輝き、より鋭い冷気の刃を持って黒竜を切り刻む。

「なあ——!?」

切り刻まれる冥闇に墮した者を、汚染空間の外から冷たく眺める者。

それは十二の瞳を持つ異形の蒼き竜、氷嵐の支配者。
驚愕に満ちる黒竜。

——このままでは、不味い。

切り刻まれた傷口からも汚染が入りこむ。それがより深い出血を引き起こす。

確実に、そして急速に命を奪っていく。竜の王となれるほどの素質を持つ体から。

黒竜は残された力を振り絞り、攻撃はやめて一度外に出ることに集中する。

残された力を全て脚と翼に込めて一気に翔ける。三竜といえどこの汚染に入ることはない。ならば赤竜の反対側から外へ出る。

回復さえすれば、三竜が揃う前に再度叩き伏せるのみ。

その速度は今まで見せていた以上の速さを出していた。火事場の馬鹿力か、窮地に追いやられたための力は赤竜も氷竜も追いつけない。

されど、雷の早さは越えられなかった。

まばゆい光と共にその身を現した、雷鳴と共に現る者は、冥闇に墮した者の行く手を阻むように姿を晒す。

途端、冥闇の体に汚染とはまた異なる異常が走る。
体中が痺れ、体力を奪っていく。力が抜けていく。

——雷鳴の、呪いの力。いや、それよりも……!

三竜が揃ってしまった。

そのことが冥闇の心に陰りをもたらす。

三竜はそれぞれが、特化した力を持っている。その特化した点だけは冥闇をも凌ぐ。

ゆえに三竜は冥闇の封印の要であり、場合によっては牙を剥く存在だった。

一体ならば冥闇の勝利は揺るがない。二体であっても、冥闇に分があつた。

だが三体は無理だ。

赤竜の圧倒的な暴力を絡めとる術式の力は、氷竜によって阻まれる。

氷竜の凶悪な術式を封じる呪いの力は、雷竜によって阻まれる。

雷竜の忌々しい呪いを打ち破る純粋な力は、赤竜によって阻まれる。

世界樹の力さえ喰らえれば、三竜が揃おうと問題はなかった。

むしろ準備運動として丁度いいと踏んでいた。だからこそ、動きを封じた時に見逃した。

その油断が、傲慢が、慢心が今、冥闇に墮した者から完全に退路を塞いだ。

もはや汚染の外に逃げても無事ではすまない。万全であれば、気に食わないが逃げることにのみ集中すれば振りきることは可能かもしれない。

だが今は汚染によって弱った状態。もはやすでに命が失われつつある瀕死の身になっていた。

——まだ、せめて……

しかし冥闇は諦めない。執念深く可能性が見出した。

すでにほとんど見えていない昏き眼は、人間のようなモノへ向けられる。

——この体を棄てることとなるが、今は止むを得ない。この汚染の中動けるその体を……

冥闇に墮した者の体が分解されだす。

完全に命が尽きる。もう避けられない。

しかし最後の、一縷の望みを持って、己の力の源、魂とも言える物質をあのモノに向かって放出した。

形容するならば巨大な黒真珠。

竜の力の塊、竜の宝珠。手に取れば強大な力を得られるという伝説の代物。

冥闇に墮した者の宝珠は他の竜と違う点がある。

手に取れば、確かに強大な力は得られる。

代わりにその身は冥闇に墮した者に支配されてしまう代物。

——その体、我が依代としてくれる。

宝珠が体から離れ、消えゆく意識の中も邪悪な思想を持って動いた邪竜。

人間のようなモノに宝珠が当たるのを見届けた瞬間、歪んだ笑みを浮かべて完全に消え去った。

「なんだこの珍奇な玉は」

本来、触れれば体に吸い込まれるように消えていくはずの宝珠。

それを眺めながら人間のようなモノは首をかしげる。

機械の体に溶け込むことができず、脳のない体の意志を乗っ取ることができず。

しかしそんなことを、このモノ、イシユが理解はできず。

最後の最後でぶつけてきたが、殺傷力は全くない謎の攻撃。ただ放置するのも良くないと考え、戻ってきた腕と足をひつつけると――邪竜の宝珠を完全に踏み砕いた。

それを汚染の外から眺めていた三体の竜は、この地にもう用はないとばかりに空へと去って行く。

三竜が去ったのを見届けてから、イシユは汚染の放出――V O I Dを停止させた。

「耐久実験終了。なんとも使えんデータだったな」

冥闇に墮した者を最後の最後まで珍獣としての扱いをした。

57. 神話の後継者達

冥闇に墮した者と天の支配者だったモノとの戦いが始まった同時刻。

「黒竜の足止めはあいつがしているのか……」

帝国の黒い飛行船からローゲルは双眼鏡を覗き込み、変化していく絶界雲上域の様子を見ていた。

戦場の様子は、西にズレ始めた巨人、それよりさらに西を陣取れる飛行船。水道橋の麓にイクサビトの集まり、木偶ノ文庫近くにはウロビトの集まり、水道橋の上にはアルメリアとウイラフ。

それぞれの配置の近くにはいくつもの気球艇が飛んでいる。

状況をひたすらに乱す危険性が高かった竜には、どういうわけかローゲルの嫌いなイシュが止めている。

「ローゲル卿。飛行船四隻全て、配置につきました」

「そうか、ありがとう」

これですべての配置は完了した。

おおよそ予想通りの各種族の配置、しかしローゲルに取って予想外だったのは周囲に浮かぶ気球艇の存在だ。

「なあ、君。飛んでいる最中に飛行船から気球艇へ移動ってどう思う？」

軽口のようにローゲルは隣の兵士に尋ねた。

「滅茶苦茶な話ですね。やはりそういう意図なのでしょうか」

「まああの娘が考えそうなことだ。きつと斬り込みだけでなく、その後も戦えって意味だろうな」

「随分と厳しい話ですね」

帝国の軍艦、飛行船の周囲に飛ぶ気球艇はご丁寧に梯子や節を作っ

たロープを垂らしている。

この船一つあたりの乗組員数は知らないのだろうに、なんとか全員いきわたりそうな気球艇数。

船の装備については知らないはずなのに、やろうとしていることは気づかれた。

ローゲルの脳裏には世話をしてきた少女の姿が思い浮かぶ。いつもやることが出鱈目だ。

「しかし本当に無茶苦茶な要求だよな……」

「ですが神話を再現するんです。これくらいはできなくては話にならないという意味かもしれませぬね」

「手厳しいことで」

少し笑い合った後、騎士としての表情を整えて拡声機を使用する。

「帝国所属の各飛行船に告ぐ。これより衝角戦法をとる。相手は巨人、近づけば呪いに蝕まれることだろう。だがタルシスの連中からの要求はまだまだ戦え、だそうだ。飛行船の軌道を整えたら飛行船は放棄、周囲の気球艇へ各自移動せよ。攻撃開始は一分後だ。それまでに準備を整えろ」

衝角、船首の角を使った体当たりによる攻撃。

物資乏しい帝国としては消費の少ない戦法として有効なものだ。大砲と違い、弾や火薬を消費せず、そして衝角にあたる部位には砲剣のドライブ技術を使用した固定武装。つまりは低コストの必殺技。しかし放送した通り、相手は巨人。近づけば乗員への呪いによるカウンターがある。仮にウロビトの結界があつたとしてもこの高さまで届かないだろう。

元は帝国が撒いた種。危険であろうと決死の覚悟で挑むべきだと、自分たちの負い目につけいった発想でもあつたが、周囲の気球艇の目的を考えるに救出だ。その指示を出したのはあの少女。

ならばそれに従うべきだ。ローゲルは帝国騎士だったが、今は、一応、あまり気は進まないが、おそらく、ニーズヘッグに所属している

のだから。

「ローゲル卿、時間です」

「ああ」

飛行船と巨人、そして水道橋の中心部は一直線上に並んだ瞬間でもあった。

【各艦、衝角ドライブ起動。目標、伝承の巨人。第一から順に攻撃を開始せよ】

加速していく帝国の飛行船団。

その先は宣言通り、巨人の体へと向かっていく。

一つ目の飛行船、黒い船体が瘴気に包まれ、呑み込んでいく。しかし進路は変化しない。

攻撃に使われる衝角部位は赤熱した輝きを持ちだしていた。

飛行船までも植物に変えることはないことに安堵する。迫る飛行船は巨人に接触、右上半身に衝角ドライブによる大きな爆発が襲う。

その爆発は巨人にたたらを踏ませた。大きなダメージを受けているようには見えない。しかし倒れるほどのものではない。

飛行船による攻撃は四波まである。

「全員呑まれるな！俺たちを蝕んできた呪いをここで打ち砕くためにも!!」

ローゲルは大声で騎士たちを奮い立たせ、続く第二波を送りこむ。再び迫る第二の飛行船。

二度目の爆発が起きたとき、武に長けた種族が動きだした。

イクサビトの戦士、モノノフたち。

水道橋の麓にて、戦士の集団は巨人の足元へと進軍を開始していた。

その先頭を走るはイクサビトを率いる頭、キバガミ。
鍛え上げられた種族たちを鼓舞するかのように強く吠える。

「我らイクサビトが磨き上げてきた武の力はこの日のためにある！
過去より続く、忌まわしき巨人との因縁をここに断ち斬ろうぞ！」

近づくことによる呪いを恐れず、頭の吠え声に呼応するように全員が雄たけびをあげる。

いかに丈夫なイクサビトであっても呪いの影響は受ける。彼らもそのことは知っている。しかし引くことはなかった。

呪いの瘴気は巨人の顔から噴出している。足元となれば多少は薄れているというのもある。だがそれよりも、彼らは純粹に仲間を信じて行動していた。

地にいるからこそ、智の種族の結界はより強く、呪いに対抗すると。

「帝国の軍艦が上を崩しておる！ ならば我らは巨人めの足を切り崩せ！ 彼奴めの巨体を支えるその足に、我らの牙を深く捻じり込め！！」

「装飾のように地上まで垂れさがっている部位はどうされますか！」

「斬れ！！」

「御意！！」

巨人の肩のあたりから垂れ下がる服のようなもの、それも斬る。

相手は神話の怪物。すべてを草木に変える呪いの魔物。足ではない部位も足に変化しかねない。すべての可能性を考えて、確実に自身の役目を果たす。

土煙と雄たけびをあげながら彼らは接敵する。

集団の一部の者の体からはすでに草木に変化しつつある者がいた。されど怯まない。

深く、深く斬り込んでも巨人が倒れる様子は見せない。

倒れることはなく、代わりとばかりに巨人の足からいくつも大きな双葉の茎が生まれた。

双葉の茎は意志を持つように揺れ出し、刀を振るうイクサビトを刻まんと動きだす。

倒れることのない巨人、足元ですら反撃してくる攻撃範囲、体を蝕みつつある呪い。

状況に希望は見出しづらいものだ。

キバガミが暴れ回る双葉の茎を根元から斬り落とす。

状況を覆さんと咆哮をあげ奮い立たせる。それと同時に、上空で三回目の爆発音が響いた。

「皆、臆するな！ 足元にいる我らへ攻撃を向けたということは我らの牙が響いているということに他ならぬ！ 四肢のいずれかでも動かぬ者は下がれ！ 五体満足に動ける者は引き続き奴を喰らえ！」

白刃一閃、伸び寄ってくる鳶を斬り落とす。

「最大の敵は巨人にあらず！ 我らの内に棲む絶望よ！」

垂れ下がる装飾と足にイクサビトが広がり、何度も刀を、金棒を、鎚を振るう。

逃げるように巨人の片足が浮いた。

その瞬間を逃さぬように、残った片足にキバガミが吠えて喰らいつく。

「ぬおおおおおおお!!」

——— 渾身の斬撃と共に、四度目の爆発音が上空から響いた。

巨人が足に、上半身に、傷を負う。
それによって大きく巨体がふらついた。
まだ、倒れていない。

——今度は巨人の首元で、五度目の、それまでと比べると
小さな爆発音が発生した。

爆発と同時に首元から落ちていく人影は帝国騎士ローゲルだ。
最後まで飛行船に残り、接触と同時に巨人へと飛び移ったのだ。四
度目の爆発で駄目だったときのために、五度目の爆発は砲剣のドライ
ブによって引き起こした。

「ははっ——案外うまくいくもんだ」

落ちながらローゲルは巨人を見続けた。
度重なる上半身での爆発、イクサビトの武が集中した足元、巨人自
身の重量。

それらが合わさり、バランスを崩して尻もちをつくように倒れこむ
巨人の姿。

巨人の足元からはキバガミの指揮をとる声が聞こえる。

「皆の者、倒れる巨人に巻き込まれるな!! 動きが収まり次第、戦えな
くなった者は近くの気球艇に乗せよ! 戦える者は引き続き武器を
手に取れ! 奴をこの地から動かせるな!」

巨人が倒れる。それによって——山をも越える巨人の顔
の位置は、水道橋の高さと同じに並んだ。

「……さて、俺も次の行動をしなくちゃ、なア!」

落ちていくローゲルは途中で軌道が変わる。

彼は捨て身の行動に出ていたわけではない。呪いに関してはほぼ捨て身ではあったが。

決め顔で呟いている最中に、腰に巻いていたロープが張ってしまい恰好がつかない台詞となってしまうた。

ロープの先はタルシスの赤い気球艇。

まだ彼は戦い続ける。

巨人が倒れたと言っても、それは一時的なもの。

足へのダメージと爆発の衝撃が重なったことによる転倒だ。

よって、巨人が立ち上がればそれで全て水の泡と化す。

巨人は、彼女は立ち上がろうと地に片手をつけた。

——しかし、立ち上がることは叶わなかった。

巨人を中心に大地が光り輝く。

その陣は今までより大きく、上空からか水道橋の上から見てなくては、見慣れた者も何かわからないと思える規模だった。

木偶ノ文庫近くで集まっていたウロビトの集団。

その集団の力を合わせた、特大の方陣。

地脈の力を利用し、生命の気を絡ませて地に縫い止めるもの。

「全員念を振り絞れ！ この好機を逃せばシウアン、巫女を取り戻すことは叶わぬと知れ！ シウアンと共にいることこそ私の悲願！ そのため力を尽くせ!!」

慣れない大声を張り上げて方陣師をまとめるウーファン。

ほんの僅か本音が漏れてしまったが本人は気づいていない。野暮な突っ込みを入れる余裕も誰にもない。

地面に触れている足、尻、片手はウロビトたちの方陣によって自由を奪われた。

しかしまだもう片方の手、右手は自由に動く。

巨人は再び起き上がろうとするも、動けない。彼女はすぐに行動の方針を変えた。

方陣によって動けないのであれば、その方陣を破壊するまで。

左手さえ動けば方陣を破壊することなど容易に可能。

彼女の手は怪しく動きだした。

「ウロビトの術を、侮るな！ 全員発動せよ！」

ウーフアンの合図とともにウロビトたちが方陣とは別の術を起動させる。

すると巨人を包むように黒い霧が現れた。

それは世界樹を喰らおうとしていた邪竜の使っていた靄と似ているようで異なる。

ウロビトたちの、覚えていたが扱えなかった古の術式、幻豹黒霧。

かつて起きた聖樹の護りにて使われた、巨人を封じるための結界術。

霧に包まれた巨人は闇雲に右腕を払う。まるで何かが見えているかのように、何もない空間に攻撃を放つ。

方陣を破壊するということも忘れ、黒い霧が見せる幻に敵意を向けて暴れだす。

地面にその凶刃を向けるだけで逃れることができるというのに、ただ闇雲に暴れ地に縫い止められた巨人の姿。

これで水道橋の前に完全に縫い止めることが叶った。

近づいてくる赤い気球艇、その乗員の顔ぶれを見てウーフアンは指しを出した。

「皆、このまま巨人を地に縛り続けてくれ。私はシウアンを迎えに行く」

「ウーファン、前から思ってたんだがお前はもう少し子離れをした方がいい」

「行ってくる」

「——ああ、行つて来い。ここは我らに任せろ」

同胞に見送られ、ウーファンはウイラフの赤い気球艇へと乗りこんだ。

そこにいる顔ぶれはいつものメンバー、というには数が足りない。先に乗っていた面子を見渡してから、ウーファンがひとこと。

「あの馬鹿は私たちを行使しすぎではないか？」

「俺も同じ意見だよ、本当に」

「だが素直に助力を乞うのも重要よ。特にこれほどの獲物が相手となればなおさらのこと」

ローゲル、キバガミの返しを受けて水道橋の上、巨人の顔の正面にいる少女の元へと気球艇は飛び立った。

巨人の顔を地に近づけ、縫い止める。

そこまでやってようやくスタートライン。

彼らの最終目標は巨人から巫女と心臓を剥がすこと。それを成すための条件は整った。

ウーファン、キバガミ、ローゲルは水道橋の上で待っていたアルメリアと合流する。

「ローゲルさんとキバガミさんはイメチェンでもしたんですか？」

合流後の第一声はなんとも気の抜けたものだった。

自身の緊張を解すための言葉なのだろうが、もう少し他にないのかと呆れたため息が何人かから漏れる。

「ま、たまにはね。とはいえイメチェンは失敗だから元に戻すつもりだよ」

「拙者も同じく、いめちえんというのは失敗だ」

「貴様ら、そんな話に乗らなくていい……それよりイシユはどうした？」

ニーズヘッグのリーダーであるイシユの不在、それについてウーファンが尋ねる。

ローゲル、キバガミはすでにアルメリアから事情は聴いているが、彼女だけは知らないからだ。

「イシユを巨人とは戦わせません。私たちだけでやります」

「……何か考えがあつてそういう結論に至つたのだろうか……」

アルメリアの返答にやや難しい顔をしてウーファンは続けた。

「貴様、何か意固地になつていないか？」

「そんなこと——！」

反論をかき消すように巨人の叫びが響く。

未だに幻と戦っているとはいえ、いつまでも持つわけではない。

暴れ回り、そのバランスを崩したのか今度は左手までも地面についた。

その瞬間方陣がさらに輝きを放ち、その手までも縫い止める。

これで両手両足が封じられた。

巨人を討つための、更なる絶好のチャンスの襲来。

「話をしている暇はないな……今は全力で事に当たるしかないか」

「ですー！」

暴れる巨人の顔に巫女と心臓がある。

顔まで行かないといけない。気球艇では途中叩き落されるか、呪い

によつて地に堕ちるか。

「でもアルメリア、巨人の顔にどうやっていくつもり？」

ウイラフが疑問をぶつける。

彼女の頭の中には目ぼしい方法が浮かばなかったため、現状この戦場の指揮をとるアルメリアへ尋ねた。

いくら顔の高さが水道橋と同じとはいえ、すぐそばに配置されているわけではない。

「キバガミさんの馬鹿力の出番です」

「磨き上げた武ではなく、単純な力を求められるとはな……」

キバガミは肩周りの動きが阻害されないように鎧を外した。肩の調子確かめるようにぐるぐると腕を回す。

この場では唯一、常識的な考えを持つウイラフが確かめるように声を掛ける。

「え、まさか……投げてもらうつもり？」

「はい」

「いやいや、考えはわかるけどよく見て！ あいつの顔周辺は今瘴気だらけだから！ 投げて近づいてもすぐに死んじゃうよ！」

「それなら大丈夫です。軍艦の爆発とローゲルさんで確信を得ましたし」

「何を!？」

アルメリアの言葉に、そういえば、とばかりにローゲルが続く。

「熱や爆発によって瘴気はある程度散っていたな。おかげで俺も首元まで行ってもこの程度で済んでいる。そういうことだろ？」

「はい。私の爆炎の術式と、凶鳥烈火で道を焼き開きます」

「そこに拙者がお主らを投げ込めばいいと」

「私も足場さえあれば、巨人の力を利用して強固な結界を作れるだろう」

みるみるうちに方針が固まっていく。ウイラフもまた、自身が巨人の顔まで行く腹を括る覚悟を固めた。

もともと危険な稼業だ。そんな稼業の中、整えられた道が作られている巨人の顔の前に恐れてはいられない。

「私も気合入れなくちゃね……!」

そんな気持ち固めた彼女に対し、アルメリアは、

「あ、ウイラフさんはお留守番です」

「え」

「私たちがシウアンを剥がした後、巨人から離れるために気球艇を飛ばしてほしいですから」

「あ、うん」

「じゃあキバガミさん、炎を出すんでお願いします！」

なんだか釈然としないウイラフだった。

そんな彼女は置いておいて、アルメリアが術式を起動する。起動する術式は、凶鳥烈火。燃え盛る火炎の壁を持って相手を焼き払う攻撃的なもの。かつてローゲルとの戦いに用いられた術式。

ローゲルとの戦いでは使えたが、一人で碧照の熊と対峙した際は使えなかった術式でもある。しかし今なら使えるという確信がアルメリアにはあった。

——本当に感情の昂ぶりに左右される術式だなんて。

「たええええええ！」

今のアルメリアの胸中は強い使命感に満ちている。

だからこそ火炎は応えるように放たれた。

気持ちの昂ぶり、その大きさに比例するように炎はより強く、より大きく、業炎となり翼を広げて焼き進む。

「と、もう一個おぉお！」

ダメ押しのように爆炎の術式を放つ。

瘴気に満たされた巨人の体に業炎が道を作り、爆炎が道を押し広げた。

「キバガミ、私から投げろ！ 瘴気が拡がる前に陣を作り確保する！」

「承知！」

キバガミはウーフアンの首根っこを鷲掴みにした。

「ちよ、ちよつと待て、もう少しマシンな投げか——」

「頼んだぞ！ ウーフアン殿!!」

思っていた投げ方と違ったのか、抗議しようとしていたがキバガミは全力で投げた。

投げ飛ばされたウーフアンは巨人の左肩に着地した。

首をさすりながらも杖を巨人に突き、集中しだす。

後には続くはずの二人もまた、思っていた投げ方と違っていたので若干引き気味だった。

「次はローゲル殿だな！ さあ拙者に任せよ!!」

「お、おう。お、お手柔らかに——ぐお!? おおおおお!?」

「拙者の分まで頼んだぞ!!」

重鎧であつても関係ないとばかりに豪快に投げ飛ばした。

確実に少しハイになっているキバガミは続いてアルメリアの首根っこを掴む。

「ひっ……」

「アルメリア殿、拙者はお主の願いを汲めぬやもしれぬ」

「へ？ それはどういう——うきやああ!?」

「頼んだぞ!!」

真剣な顔と落ち着いた語りから不意打ちのようにぶん投げられた。

投げられたアルメリアは、やっぱりキバガミも変人だという認識を固めた。

一連の流れを見ていたウイラフは自分が投げられないことに少しほっとしていた。

58. 此処まで繋げた物語

宙に舞いながら見える景色は情報量が多かった。

遠ざかっていくのは、やたらと真剣な顔のキバガミさんに他人事みたいな顔で安心していたウイラフさん。近づいていくのは、首をさするウーファンと同じく首をさすっているローゲルさん。

きつと私も着地したら首をさする。

遠目から見えた黒い竜とイシユの争いの場所は、なんだかよくわからない色に染まっていた。絵具をひっくり返したかのようなごちゃまぜの色の空間ができており、その中の様子がさっぱりだったのだ。あの中から巨人を見ているのだろうか。竜にやられてはいない、はず。

どうかこれ以上戦わずに見てほしい。

「ぐべえ」

小さな悲鳴と共にべちやりと着地して、気持ち切り替える。

ウーファンが結界を作ったとしても、瘴気を払っているとさえも時間はかけられない。

大樹から創られた巨人ゆえか、自身の体の上にも草や蔦が伸びている。

腕と顔は病的なほどに白いがそれ以外の部位は不気味な森を思わせる色彩。

「ローゲルさん、ウーファン、行こう！」

首をさすりながら進行方向、巨人の顔に向かって爆炎の術式を再度放ち、二人に呼びかけた。

肩から首へ移動する。

しかし首から顔に向けての進路上はわけのわからない深緑マント

と硬質な装飾が邪魔をしていた。

でかいマントみたいなあれか。背中には畳まれた翼の葉。絶対その翼を使っても飛べないだろう。それも飾りか。装飾なのか。なんだったいいい。

邪魔をするなら爆炎だ。

「とやあー！」

炎が植物の体を焼き払うも、表面が多少焦げただけでどの装飾も落とせていない。

爆炎で駄目ならば、却火だ。

「これも……！」

「アルメリア、ちよつと待ってくれ」

却火でも装飾の破壊に至らない。

ならば凶鳥烈火をと急ぐ私をローゲルさんが止める。その手には駆動音を鳴らす大剣。

「炎で駄目なら砲剣の爆発を使おう」

「でも剣は届きます？　結構高いですけど」

「起動寸前の砲剣を投げる。それに向けて爆炎を直撃させてくれ。暴発させる形でやろう」

「……いっつも暴発させてません？」

この人はことあるごとに爆発させている気がする。

会合の時も、木偶ノ文庫の時も。二度あることは三度あるというけども……

「しようがないだろ。必要な状況なんだから。それに俺はこの先、行けないだろうからね」

「へ？」

途中離脱をするかのような発言に戸惑う。

その反応が面白かったのか何なのか、苦笑を浮かべて事情を話しました。

「この首をよじ登るなんてできそうにないだろ。だったら俺もキバガミに倣って君たちを投げることにするよ」

「うへえ……」

確かに登るのは難しい。

しかし登れても肩より上に足場はないのではないだろうか。今更ながら気づいてしまったやばい事態。

それならいつそよじ登る形で行った方がいいだろう。それならば砲剣もとっておくべきだ。

私やウーファンだけ送られても、へばりつくのが限界でズルズル落ちかねない。

「よじ登りましょう。私とウーファンじゃ投げられても足場が無いんじゃないですかから」

「うーん、とはいえないなあ……」

「アルメリア、ローゲルの言う方法しか今はない」

ウーファンがローゲル案を採用するように言ってきた。

ウーファンも私と同じく非力なのにいったい何故。実は筋トレでも隠れてしていたのだろうか。いつの間に。

「ローゲル、私が離れる意味はわかっているのか？」

「……ああ、任せたよ」

「そうか」

私をよそに二人が決定していく。二人の中ではもうローゲル案で確定しているようだ。

——ウーファンが離れる意味……？

「それじゃアルメリア、炎の準備を頼むよ」

「え、あ、はい！」

気になる言葉を考える暇を与えずに、ローゲルさんは高い音を立てている砲剣を巨人の装飾に向かって投げた。

それに向かって却火をぶつける。

以前もこんなことをやったな、と少しだけ思いだした。

あの時はマンドレイクの根を火球で小規模爆発させたっけ。

随分と環境も対象も、炎の威力も変化したものだ。

却火に触れて砲剣は内に秘めていた圧縮された術式を急激に解放

する。その爆発の威力は凄まじく、ぼーっとしていたら巨人の体から落ちるほどの空気の衝動を伴った。

落ちなかったのはローゲルさんに庇われたからである。

私とウーファンに覆いかぶさるように庇い、衝撃から守ってくれた。ローゲルさん越しに見えた巨人のマントの装飾は崩壊した。マントの下の姿がさらけ出される。やはり巨体に反して異様に小さな翼が背中についていたが、それ以外は特にならない。マントが無くなったのであれば、あとは巨人の顔までの邪魔なものは謎の硬質そうな装飾。

進路上の邪魔なものを一つ破壊された巨人は、いびつな曲線を描く首をさらけ出した。

どういう形だあれは。

首の中にもう一つ関節でもあるのかと言いたいような曲がり方。

蛇のように鎌首をもたげているわけでなく、首だけが不気味な前めりの姿勢を作り上げている。

マントが剥げ落ちたことよつてか、巨人の体が大きく揺れた。方陣からもがき抜け出すように、しかし両手足は動かない。

ただ体が揺れるだけ。

「はは、思つてた以上に派手に壊れたね」

「ですね……つてローゲルさん、ありがとうございます。吹き飛ばすに済みました」

「ああ、けどお礼はまだ早い。俺は武器もなくなったことだし、ここでストップだ。キバガミみたいな投げ方はしないから安心してくれ」

体を離していくローゲルさんから奇妙な違和感。

この違和感は、そう。なんというか、匂いが違う。

加齢臭とかくたびれた匂いではなく、かといってソードマンが使うオイルなどの匂いでもなく、鏝磨きの匂いでもなく——
濃厚な草木の匂い。

それがローゲルさんから放たれていた。

「え……ローゲルさん……?」

「幸い首の裏になら乗れそうだな。さ、俺の手の上に足を乗せて。タ
イミングを合わせて自分でもジャンプしてくれよ。思いつきりに
飛ばすからな」

巨人からの匂いではない。確実に今の草木の香りはローゲルさん
から放たれていた。似合わなすぎる、彼には加齢臭こそお似合いだ。
草木なんて、そんなものは似合わない。

彼の鎧の下はどうなっているのか。

「ローゲ——」

「アルメリア、止まらず進むんだ。時間をかけられないのはわかって
いるだろう?」

「ローゲル、私を投げろ」

「ああ、それじゃあウーフアンからだな」

ウーフアンを巨人の首裏に向かって投げ上げるローゲルさん。

そこでようやく、先のやり取りの真意に気づけた。

ウーフアンが離れる意味。

それは呪いから身を守る結界が遠ざかるということ。

「ローゲルさん! すぐに登ってください! その体じゃ……!」

「駄目だ、時間をかけられない。それに俺には武器がない。砲剣が
残っていても、蝕んでいく呪いがよくわかったよ。この先について
いっても俺は足手まといさ」

「でも、ここにいと……!」

「ウイラフからの救出は間に合わないな。降りようにもこの高所、
まあどうしようもないな」

「そこまでわかってるなら早く登って——」

「だから、早く巨人を止めてくれないかい? 俺はすぐに動けなくな

る。だけど巨人が止まれば、俺の心臓まで呪いが届かなければ間に合
うはずだからな」

その言葉に、言おうとしたものを飲みこんだ。

ここでこれ以上揉めてもダメだ。余計悪化する。もともと時間が
ないのはわかっていているんだ。この地に参加している人たちは多かれ
少なかれ、すでに呪いの影響下にある。

だったら巨人を止めないといけない。何も変わらない。

何も言わなくなった私に、ローゲルさんは屈みながら手を出した。
その手に足を乗せる。

「それじゃ、頼んだからな!!」

「……はい!!」

このやり取りは気休めなんかで終わらせない。絶対に。

首裏に辿りついたとき、下から重たいものが倒れこむ音と、茂みが
揺れるような音が聞こえた。

振り向く時間もここまで来たなら惜しい。

「ようやく来たか」

「うん、待たせてごめん」

砲剣暴発による衝撃によって首裏まで登れたけど、次は顔の前まで
移動しないとイケない。

さすがにもうこの先には足場がないだろう。

「ここから前に回り込むことってできない、ですよね……?」

「……」

後頭部に一点集中で攻撃して、後ろからシウアンと心臓の元まで繰
りぬいてくれようか。

「ウーファン?」

「……イクサビトたちが幾度も斬りつけてようやく足に傷を負わせれ
る相手だ。顔を正面から攻撃しない限りは時間の浪費となる。確認

したがやはりシウアンは顔の正面、おそらく口の中だ」

口の中、なんとも嫌な場所に入れられているものだ。

ウーフアンは話しながら巨人の頭部を登っていく。杖を差し込み取っ手にしては、窪みを作りと登っていく。きつと遠目から見れば、装飾がなくなつたつるつる頭だろう。その実白く細かい蔦や根が生え渡っているので滑り落ちることはない。揺れたりしなければ。

頭頂部についた私とウーフアンが着き、彼女は告げた。

「私が足場を作る。貴様は遅れて降りてこい」

言い終えると同時に彼女は巨人の顔の前へ——落ちていく。

降りたなんてものじゃない。ただの落下だ。

何を考えて……

「はあー！」

ウーフアンの珍しい掛け声とともに、彼女の杖が口に入りこむ。突き刺さる。

「まさか足場ってそれのこと……!?!」

「もう少し待て!!」

杖を深く突き刺したのだろうか、杖が落ちずとも杖にぶら下がっている彼女の筋力はそれほど持つと思えない。

ダメだ、やっぱり何を考えてそんなことをしたのか理解できない。ただぶら下がっているだけの状態から何ができるのか、混乱しながら眺めていると巨人の顔に変化が起きる。

それと同時にウーフアンの首飾りの水晶玉——ホロウクイーンの眼球らしい——が輝きだした。

水晶玉の変化はわからないけど、巨人の顔の変化は私も知ってい

る。

なにせあれは何度も見てきたのだ。巨人の足元にも今なお広がるものと同じ。

「方陣……！」

しかし方陣を使ったところで――

疑問に思う間もなく、次の変化が訪れた。

輝きだした方陣が外側から崩れていく。しかし崩れていく分だけ、杖のついた陣の中央に光が集まっていく。

方陣は地脈の力を利用して聞いたことがある。

巨人の力を利用して強固な結界を、と乗りこむ前にウーファンは言っていた。あの陣は地脈ではなく巨人の力を利用して発動しているのだろう。

あの光は巨人の力を集めたもの。それを攻撃に転じるつもり……？

「必ずシウアンを救え！ わかったな!？」

方陣がほとんど崩壊していく。

そして中心の光はより強く、力を発揮しだした。

それはまぎれもなく、巨人の力を利用したものだ。

巨人の力は世界を浄化する力。すべてを植物に変化させる力。

それを彼女は無理やり引きだし、まとめ、束ねて一カ所に集中させた。それは杖に、杖をつかむ腕に、力が襲う。

「……はいー」

巨人の口元に、世界樹の力を束ねた効果が現れていた。

杖も、彼女の姿もここからじゃ見えないほどに。

眼下に広がるのは、いくつも太く捻じれた植物の枝や根が絡まっ

た、足場となっていた。

——体を張り過ぎだ。シウアン馬鹿のくせに。

すぐさま彼女の足場に飛び降りる。

これでようやくだ。

ようやく、このデカブツの顔の前に辿りついた。

体を揺らしてもがくも、巨人は未だに方陣から解放されていない。しかし巨人の腕からは、ギチギチと不気味な音が生まれだす。

「――！」

巨人の目から怪し気な発光が起きるとともに、全てが捻じれだす。見える景色が赤黒く染まっていき、瞬く間に白く変化しながら熱を生みだし、私の体は炎に包まれた。

——炎で良かった。

手足が動かせない状態でも、顔だけでも術式のような技を使ってくるなんて。

聖印、レッドタブレット、この二つがなければ消し炭だったろうか。お返しとばかりに凶鳥烈火を放つ。口の中というのなら、頬を焼け落としてパカりと開けてやる。

巨人の顔を炎壁が襲うもまだ足りない。却火も放り込む。却火が届く前に、赤い壁の向こうでまたも発光が起きた。

光は大きく、私の視界を染めるように広がる——それこそ完全に、視界を紫に染めた。

「あ……、え………？」

舌が上手く動かない。舌だけではない。腕も、脚も動かない。首も動かせない。

膝が勝手についた。

何で体が動かないんだ。

首が僅かに下がる。

見えた自分の手が、炭のように焦げていた。表皮は内側から弾け飛んだように飛び散り、内部から焦げていた。

頭には疑問符しか浮かばない。

何が起きたんだ。何をされたんだ。火ではない。何を。

何を。

手だけじゃなく、全身が、こう、なっているのだろうか。

認識した途端、体中が叫ぶように痛みを訴えだす。痛みを身体をよじろうと動けば、その動きが更に痛みを生み出す。頬に当たる風すらも激痛の引き金となる。

さらには追い打ちのように周囲の温度が下がった気がした。急激に。

——あ。また、眼が光った。

温度が下がったということは、次は氷だろうか。三種の属性でも扱うのか、あの眼は。

じゃあさつきのは、雷？

体中が痛い、いや、痛くない。

痛みが消えていく。

痛覚が無くなっていくのだろうか。それはそれでやばい。やばいけど、今は都合が良い。

ブチブチと音を立てる体を見捨てて首をあげる。

氷槍の術式……に似ても似つかない巨大な氷の槍が、矛先をこちらに向けて穿たれる瞬間だった。

「が——、あああ——！」

避けたい。防ぎたい。逃げたい。

そんな思いが混ざりあったのと、ヘタレた結果、後ろに倒れこむ。すると先ほどまで首があった位置に規模がおかしい氷の槍が重い風切り音を立てて通過していった。

凌げた。凌いだ。次が来る前に、何もさせる間もなく燃やさないと。

考えと裏腹に倒れたまま動けない。

痛みはないのだ。体もまだ動いた。ならもう少し動かせるはずだ。力の入れ方がわからないわけではない。だけど動かない。いや、正確には動いている。胴体は動かせている。

手が足場から離れないのだ。

まるで絡めとられているかのよう……に、と思ったら本当に絡めとられてやんの。

手は植物の蔦と根によってなくなっていた。理由がわかれば剥がせばいい。落ち着いて剥がせば……あ。

違う。これは違う。

手がなくなっている。足場と、足場の植物と、同化している。

私の手ではなくなっている。手が、腕が植物へと変わっている。

「……こんな……ときに！」

足も動かない。動かせない。動く気が全くしない。感覚が一切ない。

少し前までは足からも痛みがあった。その痛みがなくなった理由は——呪いの発症。

もう少しなんだ。

もう少しでシウアンに手が届くのに。

動けない体に影が差す。

とどめの前の猶予のつもりだろうか。氷の槍でもまた準備しているのか、その影は動かない。

「もう、少し……なのに……」

悔しさを滲ませた言葉が口から漏れ出る。

ああ、もう。

ここまで辿りついたのに。ここまで託されたのに。

今も皆が下で戦っているのに。止めないとタルシスの人たちにまで被害が出るというのに。

イシュに任せない戦いを、見せるはずだったのに。

葉と葉が擦れる音が体から出る。何度も何度も。

そうか、ウーフアンがないから呪いの進行ペースも強まっているんだ。私の体に呪いがなかった期間って、思えば随分と短い間だ。

「何をしている」

いてはいけない人物の声が聞こえた。

——あー、だめだ。最後の最後にあの人の幻聴が聞こえるとは相当だ。今まで頼り過ぎていたせいだろうか。こんな時にいてくれれば、なんて願望がやっぱり私にもあったのだろうか。

これじゃあ千年前の人たちを怒れない。私も同じ貉じゃないか。

「アルメリア、汝は何をしている」

しつこい幻聴である。

というか最期ならもつと他の幻聴があってもいいのではないか。

この際百歩譲ってイシユの声でもいい。交流が狭かったからそれほど候補がないし。だけど他にもっといい台詞はないものか。なんで威圧感ありありの台詞なのだ。

「ふむ、声が出せないのか……随分と弱っているが呼吸は辛うじてしているな」

まだ消えない。

聞こえてくる台詞も嬉しいものではない。どうせならこう、よくやった、とか、ここまでよく頑張った、とか慰めとかがセオリーなのではないだろうか。

幻聴に心の中で想いをぶつけていると、今度は爆音が聞こえてきた。それもすぐそばで。

何か近くで燃やされたのだろう。

ひよつとしてその火で私も燃やされてしまうのでは。

え。

え、え……？　なんか服をまさぐられている。え、何……なにこわい、誰。

ゴソゴソと服をまさぐられた感触はなくなり、今度は顎を持たれる。明らかに巨人がやつてるわけではない。じゃあ誰、え、それともやっぱり幻聴ではなく――

「ぶも」

「む？　発声できるではないか」

口に何か啞えさせられた。

「しかし言葉を話せるほどではないか。ならば聞くが良い、アルメリアよ。肯定ならその笛を鳴らせ。否定ならそのままにいるのだ」

イシユがここにいる。言葉通りなら、なんでか啞えさせられたのは

笛なのだろう。

どうしてここまで来てしまったのか。世界樹の力はイシユの最大のトラウマ。向き合えない相手。そして何で笛を、悠長なことをしている暇はないのに。

なんていうか、もつとこう、逃げるとか、戦うとか。どっちかするべきなのに。

そばで轟音と、遅れて耳鳴りがした。

音しか聞こえてないけども何が起きたか想像がつく。雷がイシユを襲ったのだ。

「汝は我に言った。力を合わせて巨人を倒すと」

雷に当たっただらうに、イシユは言葉を続ける。

私の記憶が確かなら雷は苦手って言ってなかっただらうか。それともやせ我慢でもしているのだらうか。

「タルシスの者、ウロビト、イクサビト、果ては帝国の兵士までも汝はまとめあげた」

地面が揺れる。

正確には足場が繋がっている先、巨人の体が揺れている。また方陣から抜け出そうともがきだしたのだらう。

そしてイシユの言葉は少し誤解がある。私はまとめていない。協力をお願いしただけだ。あとはそれぞれがそれぞれのできることをしただけである。

「だが巨人はこうして、今なお存在している。このままでは汝のあの言葉は偽りとなる。汝はそれを良しとするのか」

「……」

大きな、とても大きな裂ける音が聞こえた。

何かを引きちぎった音。それが二回。音の発生源は遠い。だけどその大ききのせいでよく聞こえる。

「答えよ。汝はそれを良しとするのか」

「……」

「答えよ」

「……」

そんなの、良いわけがない。

……あれ？ 肯定なら笛を吹けだったよね。否定ならそのままでって。

だから無言でいるんだけど、なんかりアクションがおかしい。

え、答えなきやダメなの？ 笛の意味なくない？

「答えよ！」

「——いいわけな痛い!!!」

「うむ」

うむ、じゃないよ。なんでそこで満足そうな声音なのさ。

「汝の考えは、この地にいる者の力を合わせ巨人を討つことなのだろう」

「……いい、いたい……」

「肯定ならば笛を吹け」

ぶひい、と弱々しく笛を鳴らす。

さつきは言葉を要求して、今度は笛である。もうなんだこの人。

「ならば何故、すべての者に助力を求めぬ。我には理解がでкин」

まだ顔のあたりは植物化が進んでないから痛いのに、何度も質問し

ないでほしい。

ぷびゅう？ と笛を鳴らす。

「言われている意味を理解していないのか……む？ 場所を移すか」

僅かに見える視界の中でイシユの剣が、私の手のあたりを足場ごと斬り離れた。

そして荷物のように担ぎ、揺れる巨人から離れて宙へと跳んだ。

「汝は力を合わせると言ったにも関わらず、実際には除外している相手がいる」

落ちていく。イシユは気にせず話を続けているが、どんどんと落ちていく。何を考えてというかイシユは本当に今更ながらなんでここに来れたのだ。

というか除外している相手？ そんなのいないない。そりや戦えない人とかはいるからそういう人は除外だけでも。帝国の皇子とか。負傷者とか。でも細かい話はわからないから各自に任せてるけど。

それよりも落下をどうにかしてほしい——！
びゅうう！

気持ちを訴えるような全力の笛の音。

がくりと落下が止まった。その反動で笛が口から離れてしまった。離れていく笛は、笛だけは落下していく。

そういえばイシユは少しだけ飛べたっけ。まだ空中の景色に他人事のような感想が生まれた。

「この身は天の支配者でもオーバーロードたる体でもない。今は一介の冒険者の身だ」

「イ、イシユ……？」

なんだろう。イシユの顔、滅多に見ないような、いや、見たことはある。見たことはあるけど、向けられたことのない表情が浮かんでい
る。

この表情をよく向けられていたのは……ワールウインドさんだわ。
イシユつたらなんか怒ってるんですけど。

「そして、汝の所属するギルドのリーダーであるはずだ。ニーズヘツ
グのリーダーは我のはずだ」

「え、あ、その……」

「この地にいる者の力を合わせるのであれば、我の力も求めるのが自
明の理というもの。何故汝はそれをしない」

責めるように言ってくるが私だって色々思うところがあるのだ。

「それは、イシユに……頼り切るのが嫌だから、です……！ 私は！
千年前の人たちみたいに、一方的に頼るなんて嫌なんです!! あの
人たちのようにはなりたくないんです!!」

超痛い。体が超痛い。

だけど言った。言っちゃった。

まあ、今はそんなことを言っちゃられないのだろう。イシユに頼り切
りになりたくないなんて、私の我儘だ。その我儘でもやり遂げること
ができればよかったのに、結局手が届かず仕舞い。

このままでは今の時代を生きる人たちが滅ぶ。

そうなつてまで我儘を貫けるほど、私は凶太くない。

「でも……結局、イシユにだけ、任せる状況になってしまいました
……。今更ですけど、巨人を……お願いしていいですか……?」
「汝は本当に愚かだ」

ひどい言われようである。だけど事実だ。

イシユに任せたくないと言いながら、結局任せろなのだ。自分ではどうにもできないからと、結局頼り切ってしまうのだ。

「我は空に逃げることを選んだ。我の力では吞まれると悟ったがゆえに」

「イシユ……でももう少し、もう少しなんです……」

「汝らの戦いを見ていた。途中珍妙な蜥蜴の耐久実験を行っていたために、細かくは見る事ができなかったが……それでも大部分は見ていた」

私たちが必死に戦っている最中に何を謎な実験しているんだ。

「我に頼り切るのが嫌だと言ったな。巨人をここまで追い詰めたのは、我の力か？」

「追い詰めた……？」

イシユは体の向きを変え、私に巨人の姿を見せた。

尻もちについて、方陣によって手足を縫い止められていた巨人は――両足で立っていた。

……いや、状況が悪化してるんですけど……あ。

立ち上がった状態ではあるが、最初とは姿が異なっている。巨人の両腕がない。腕は無理に引きちぎったのか、植物なのか肉の繊維なのかよくわからない切断面を見せている。

方陣から抜け出そうともがいた結果、腕を引きちぎったのか。

両足で立ってはいるが、巨人はその場から動かない。棒立ちなのか、それともまだ上手く動けないのか。

「巨人の移動を支える足の腱を斬り、その身を守る草木の鎧を破壊し、歪な力を振るう両腕を失わせ――巫女を保管する顔を焼き削いだのは我の力ではない。汝らだ。この状況でもなお、汝は我に頼り切っていると言えるのか？」

「あ……」

「それともこの時代の者には、最後の一手を打った者だけが称える決まりでもあるというのか？」

「……そんなもの、ありませんよ」

「ならば汝は我に何を言う。何を願う。何を求める」

そんなに一度に聞かれたら驚いてわからなくなりそうだ。

イシユの言った通り、最後を決めた人だけが重要ではない。ここまです力を束ねて紡いできたこの戦い、誰一人無意味などではない。一方的な寄りかかりでもない。

なら言うことは、願うことは、求めることは。

巨人を倒して。

これは、最後のトドメを任せるだけだ。全てではない。

ここまで皆でできたのだ。あとは、

「決めちゃってください。この戦いを——私たちの手で」

最後の一押しを、任せよう。

59. 永劫の玉座にて求めた楽園の夢

千年前、叡智ある者たち、科学者たちは世界樹を創り出した。

世界を浄化するために。人という種が失われないために。

そしてその目的は果たされた。

だが、浄化の力は人をも呑み込むとわかり人々の思惑は枝分かれしていった。

世界樹の浄化を受け入れる者と逃れる者。

受け入れることを選んだ者たちが間違っていたと言うつもりはない。

逃げることを選んだ我が間違っていたと言うつもりもない。

もしもあえて、間違いがあつたと指摘するのであれば、それは選んだ後のこと。

世界樹を創った科学者たちは、統治者たちは、一般の者に世界樹のことを教えなかった。

受け入れることを選んだ者たちも教えなかったのだろう。誰もが生を諦めることができるわけではない。

教えなかった理由も理解できる。人として、最期の瞬間を争いや暴動の最中に終わらせたくなかったのだろう。

逃げることを選んだ者たちも、一般の者には教えなかった。

ただ避難所へ彼らを移動させるだけだった。外は汚染された空気で染まり、それを呑み込む大樹の説明をしなかった。

我も同じだ。箱舟計画に参加した者の中で、科学者たちにだけ世界樹の情報を共有した。

一般の者には何も情報を与えなかった。

世界樹は千年前の叡智の塊。対抗できるは同じく叡智を持つ知識だけと、考えていたために。

叡智を持たぬ彼らは無力と決めつけて。

彼らに説明したところで世界樹が大きく変わるとは今でも思わない。

だが、何か小さな変化を起こしていたのかもしれない。その変化があれば、彼らは城を降りなかったのだろうか。

巨人と戦う場に相応しくない思考が、我の中を満たしていた。

不敬にも天に届かんとばかりの巨人、その顔に攻撃を届かせるほど我が脚部の推進器は長くは持たぬ。

最後の一手を打ちはあるが、そのためには一度態勢を立て直す必要がある。

アルメリアの体を戦いの余波が届かぬ場所に移動させるためにも。イクサビト……キバガミとウイラフのもとへと推進器で調整しながら降下する。

「イシユ殿、アルメリア殿！」

「キバガミさん……」

「無事か！ 他の者は！」

キバガミに半樹化しているアルメリアを渡す。

他の者……ローゲルとかいう男がほとんど植物化して倒れていたため、巨人の体から落としておいた。

「ウーファンは、巨人の口元に……ローゲルさんは……」

アルメリアの説明にローゲルの名前が出たため補足を入れる。

「あの男なら巨人の足元あたりに落ちているだろう。巨人の体に乗せているよりは呪いの進行も弱まっているはずだ」

「え、落ちたんです……？」

「うむ、落とした。草木と化した体が落下の衝撃からある程度は守るはずだ」

絶対とは言い切れないが、あの場での最善行動だ。

「今はローゲルのことなどどうでもよい。ウィラフ、汝の気球艇を貸せ」

「どうするつもり？」

「巨人より上空へと飛ばす。そこから直接巨人の顔に飛び移る」

「その足ならできそうだね……ほんつとイシユの体はよくわかんないことばかりだよ……気球艇の操作は任せて。私も何かしたいからさ」

ノアは珍奇な蜥蜴のせいで回収が今は難しい。

気球艇の操作は我一人でも可能だが、自主的に協力を行うのであれば言うことは何も無い。

「キバガミはアルメリアとここで——我がリーダーのはずなのだがな……」

言っている最中に二人はウィラフの気球艇へと乗り込んでいた。

「拙者は飛び移れる器用さを持ち合わせておらんが、お主を彼奴めの顔に投げることはできよう」

「汝は投げるのが癖になっただけではないか？」

「せ、拙者がやれることを述べたまで！」

「キバガミさん……ひよつとしてイシユも投げたんです？」

昔から理解しがたい趣味趣向というものはある。投げるのが趣味というのもあるのだろう。随分と珍奇な趣味もあるものだ。

だがキバガミの手段は悪くない。我の体といえど呪いの対象から外れていない。巨人の顔の前となれば浸食速度は凄まじい。勢いよく飛び込まねばならないのであれば、投げ入れるというのはむしろ望ましい。

それにすでに一度投げられている。キバガミのコントロールもそれほど悪くはない。

「ウム。先刻、イシユ殿を巨人の体に送り込むためにな。言っただろう、拙者はアルメリア殿の願いを汲めぬとな。お主ももうイシユ殿を戦わせたくないという気持ちはないようだが」

「まあ……任せっきりにするのは嫌です」

「キバガミはともかく、アルメリア。汝は体がほとんど動かぬである

う」

「あと一回くらい、印術を使えますから、気休め程度かもですが瘴気を少しは散らせませす」

印術についてはともかく、ここに一人置いていくよりかは気球艇の方が安全か。

ローゲルはどうでもよいが、これ以上時間をかけてウーフアンが元に戻れないほどに侵食されるわけにもいくまい。ハイ・ラガードに巫女の、シウアンの協力を得やすくするためにも。

「とにかく巨人より高く飛ばばいいんだよね」

「うむ」

ウイラフの気球艇に乗りこみ、上空へと昇っていく。

巨人は未だ動きだしていない。

我の力を使わずして、一カ所にこれほど長く足止めできるのは偶然か必然か。過去にもあった戦いの再現——アルメリアが言うには神話の再現、続きを描く、だったか。

巨人の顔の前まで高度が届く。

高さは同じだが距離は離れた状態、これ以上接近すれば墮とされるだろう。

巨人が気球艇に反応してか、それともただ偶発的な行動か。巨人が蠢いた。

——この距離でも危険か。

何らかの攻撃が来るかと構えたが、巨人は攻撃をするのでなく、千切れた両腕を再生させていく。蠢きだして一秒もかからずに元の両腕へと。

「ちよつと……どうなってんのさこれ」

「気にすることはない。世界樹、神話の怪物が相手なのだ。むしろ再生が遅かったくらいだ」

両腕の再生に集中していたのか、再生が終わると共に巨人が前へと足を踏み出した。

最初と違う点は、片足を引きずるような歩み方。足をあげるだけの動作にも緩慢な動き。

そして再生した両腕は、胸元まで持ちあげ警戒しているような姿。より高くから乗りこみたかったが、警戒されているのであれば悠長なことをしてられぬ。

「キバガミ、炎が上がれば我を巨人の顔めがけて投げよ」

「承知」

「アルメリア」

「はい」

炎を浮かべている姿は落ち着いている。

やはり何度見ても炎を出す原理は我にはわからぬ。腕も足もなくとも、頭さえ動けば出せるとは。

興味深くはあるが今はいい。

「火を放て。そして……この地に集う者たちで、この神話に終焉を与えよう」

「——っはい!! 必ず!!」

気球艇から飛び出す火は、我が今まで見てきたものと異なる温度と形をもっていた。

火の球ではなく、広がる炎でもなく、一直線に延びていく業炎。

歩く火炎放射器と呼んでもいいのでは……妙なエラーが出そうだ。

襲いくる炎に対し、顔を庇うように両腕が前に出る。

炎は触れたそばから広がり腕を焼き尽くさんと呑み込んでいった。

「キバガミー」

「ウム！ 頼んだぞ!!」

両腕を炎によって炭化させながら、投げられた我を叩き落さんと迫る。

全盛期の体であった時、オーバーロードたる体より遥かに小さな冒険者を剣で叩き落そうとしていた。まさか今や我が叩き落される側となるとは。

あの時は結局冒険者たちを落とせず、懐まで迫られ斬られてしまった。

過去にやられたことを、我もすればいい。

迫る腕を足蹴にし、あるいは体を捻り通り過ぎる腕の上を転がり進み、ひたすらに距離を詰めればよい。

両腕を躲し、顔の前に出た植物の足場へと踏み込む。すぐさまさらに前へ、巨人の口へ。

空間が揺らぐほどの熱が発生する。アルメリアが扱う業火とは違う火炎がこの身を包む。それでも前へ。

警鐘が鳴り、視界の一部が消えた。

頭部が何割か植物化した。それでも前へ。

巨人の閉じていた口に腕を入れ、無理やり開かせる。何故か下顎にのみ生えていた巨人の歯がその際何本か折れる。

口の中、その奥。シウアンが喉に埋まっていた。人の形を維持しているのは好都合だ。さらにはそれだけでなく、そばには核のような赤く透き通った肉の塊。

進もうとすると動きが阻まれる。足が根となり巨人に根付いてしまったようだ。

侵食がさらに上に行く前に足を切り離してシウアンの元へ進む。

巨人の体に埋まっているのなら、その部位ごと切り離せばよい。

口内を斬り刻み、シウアンが器官へ落ちないように支えながら切り離す。

「童話のような展開だな」

悪しき巨人の口の中に、小さな勇者が入り込んで内部を破壊する。発想の転換が大事であることを子に伝えるための物語がかつてあった。比喻ではなく実際に行うとは、千年の時を経て初めての経験だ。

もつとも、我は勇者には程遠い存在ではあるが。

痛覚があるのか、それとも心が切り離されたがためか、空気の震えを伴う巨人の絶叫が口内に響く。

悲鳴をあげながら、シウアンを取り返そうと周囲から鳶が伸びる。

さながら最後の抵抗か。

心を失わんと、制御を失わんとさせた行動。これもこの地の研究の成果による賜物なのか、それとも思わぬ進化の形が引き起こした動きなのか。

なんにしろ随分と勝手な進化をしてくれたものだ。

「聞くがいい、世界樹よ」

巨人の悲鳴に呼応するように、赤い核が震える。
伸びる蔦を斬り落とし、焼き払い、引きちぎり、世界樹に呼びかける。

世界樹に意思などない。心など本来ない。意味のないことだ。合理性に欠ける行為。だがなぜか音声を出してしまう。エラーによる行動なのかわからない。

「この時代の者は、滅んだ世界から脱却を果たした。この世界は千年前に夢見た、新たな世界となって生まれ変わった」

赤い核の前へシウアンを背負いながら進む。

蔦では心を取り返せないと悟ったのか、鋭く尖った枝が四方からシウアンを避けるようにして我の体を貫いた。

だがその程度で我は止まらぬ。言葉を止めぬ。

国ごとに特色は違えど、世界樹には共通の願いが託されていた。

人類の存続という願いが、託されていたのだ。

その願いが今の世を滅ぼすなどあつてはならぬ。たとえそれが、我が生まれた時代の願いといえども、今の世界はもはや違う世界なのだ。

そのためにも、

「古き願いの残滓に壊させはせぬ！ 人が人としてこの世界に在るためにも、私たちは汝を越えるのだ！」

千年前の、私たちの歪んだ願いをここで終わらせる。
もう遺物は必要ない世界となっている。たとえまた汚染広がる地
となろうとも、過去の答えなどもはや必要はない。

赤い核を、巨人の核を前に剣を振り上げ――

「神を越えし私たちの力を思い知れ！」

――核に剣を突き立て、砕いた。

核を砕かれた巨人は叫ぶのを止め、完全に停止した。
背中でシウアンが身をよじるように動いた。

「……………」

「気づいたか。シウアン」

「……………イシュ、だよね？」

シウアンが戸惑い気味に尋ねる。

幾度となく顔を合わせているはずだが……………頭部の植物化によって
判断しづらいのか。

「ずっと、みんなの声が聞こえてたの」

「そうか」

「イシュの声も……………なんだか雰囲気違ってたけども」

「我は変われぬ」

「我じゃなくて私って言った気がしたんだけど……………」

まだ少し混乱しているようだ。だがシウアンには働いてもらわね
ばならぬ。

巨人は活動を再開する様子はないが、まだ終わってはいない。

「つていうか私のことシウアンって……………名前で呼んで……………」

「汝はシウアンだろう。先ほどから何を言っている」

「ええ……アルメリアータすけてー……」

「うむ。アルメリアだけでなくこの地にいる者を助けるために動くのだ」

「話がかみ合わない……やっぱリイシュだ」

要領を得ぬことばかり言うが、弱っている様子はない。

これならすぐにでも解呪に回れるであろう。

現状最も呪いの侵食が激しいのはウーフアンとローゲルのはずだ。

「あ、イシュ。待って」

「なんだ。ウーフアンの植物化がどれほど侵食しているかわからぬ。時間はかけれぬ」

シウアンは祈るような姿勢を取りだした。時間にして数秒ほど。すると巨人の体が揺れ、風が吹きだす。

「……何をした」

「世界樹にお願いしたの」

「何をだ。いや、それよりも、この巨人はまだ動ける力があるというのか」

巨人の気道の奥底から植物が伸び育ち擦れる音が届く。未だに揺れは収まらない。

「大丈夫」

「何が起きると——」「シウアン!!」——この声は……」

外から声が聞こえる。

喋れる状態ではなかった者の声が、シウアン専属の過保護な声が。

「世界樹が残った力で吸ってくれたの。だからもう、大丈夫」

「……」

「シウアン!! 無事で良かった! 本当に良かったシウアン!! シウアン!!!」

こともなげに言ってくれたため、何も言えなくなってしまった。

あらゆるものを植物に変えてしまう世界樹の副作用が、こうもあっさり解決されるなど反則だ。

これも暴走したとはいえ、制御に力を注いだおかげなのか。

そして暴走を止めて、今に繋げた結果なのか。

「ウーファン、痛い、痛いよ」

「良かった！ 本当に良かった！」

まったく、こうもやかましいと考えもまとまらぬ。

口の中まで入り込み、シウアンを強く抱きしめるウーファンに呆れてしまう。

「帰るぞ。いつまでもここにいるわけにもいくまい」

「うん、ウーファンもいこ」

「シウア——！ あ、ああ、そうだな。うむ」

今更取り繕う姿に言うことは何もない。そっとしておいてやろう。

外からまたも声が聞こえてきた。この旅路で聞きなれた声だ。

これ以上出るのを遅くして、中に入られても困るというものだ。

ゆえにもう出るとしよう。終わったことを伝えるために。

60. 例えどれほど違っていようとも

巨人の絶叫が唐突に途切れ、ゆっくりと膝をつき始めた。

それと同時に巨人に向かって風が吹く。その風は心地良く、以前シウアンから受けた祈祷と酷似した感覚を覚えた。

「アルメリア、その体……」

「戻っていく……」

植物化が止まったどころか、元の手足に戻っていった。

私だけじゃない。キバガミさんも、地上で戦っていた人たちも、みんな、元に戻っていく。

植物になる前は酷い状態だった手足も治してくれるサービス付きで。

「巨人って意外に太っ腹だったんですね……スラっとしてたのに」

「ウイラフ殿、巨人の顔にできる限り近づけてもらえぬだろうか。イシユ殿たちを迎えに行きたく思う」

「うん。任せて」

私の言葉は流された。

巨人の顔にはウーフアンがよじ登っている姿が見えた。シウアンの名前を叫びながら。

ウーフアンも無事だったのは良かったけど、体が戻ってすぐさまシウアンとは筋金入りである。

私も遅れていられない。

イシユの名前を呼びながら、動かない巨人の顔へと近づいた。

巨人の体から出てきたイシユたちを気球艇に乗せ、巨人から離れ

る。

巨人は両手を前に合わせ、祈りを捧げる姿勢をとったのち体に変化していく。

不気味だった白い体も、紫の手足も樹皮色に染まり、さらに伸びてきた樹皮が上から覆いかぶさり巨人の姿が見えなくなった。

見えなくなった、というより、

「新たな世界樹が生まれるとはな……」

イシユの言葉の通り、新しい世界樹が生まれたのだろう。生まれ変わったとでも言うべきだろうか。

倒れた世界樹とも、巨人とも違うまた大きな大樹。太陽の光の反射なのか、葉の一つ一つがほのかに光を放っているようにも見えてまるで神聖な樹の様相。

「巨人は完全に死んだということであろうか」

キバガミさんの言葉に答えたのはシウアんだ。

「ううん、また眠っただけ」

「ということとは、いずれまた目覚めるやもしれぬか……」

新たな姿に生まれ変わったと言っても、巨人の力はまだ残っている。再び目覚めた時もまた止めれるかどうか。そんな心配をキバガミさんはしているのだろうか。

「巨人の心臓さえ守れば復活はしないだろう」

「そうだな。してその心臓は何処に？」

「私が持つてるよ」

シウアンが心臓を見せる。これ、今砕けば巨人復活は永遠になくなるんじゃないだろうか。

「今砕いちゃいます？」

戦いが終わったがために緊張がなくなったのか、何も考えられず思ったままの言葉がすつと出た。

でも名案だと思う。

「やめよ。我がなんのためにここまで来たと思っっているのだ」

「心臓がなくなれば呪いを払うこともできぬ。イシユ殿の故郷のためにも砕くわけにもいくまい」

「私の故郷？ 何の話だ」

「む、すまぬ。勝手な詮索を滑らせてしまっただけのこと。気にされるな」

なんかキバガミさんは勘違いしてそうだけど、まあいっか。

「私も碎いてほしくないな。これはあの子の眠りを妨げちゃうものだけど、あの子の一部でもあるんだもん」

「シウアンがそう言うならば碎くわけにはいかない」

「そつすねー」

「貴様、なんだその顔は」

シウアン全肯定なウーフアンを見る顔だよ。

というか碎く派は私一人だったか。まあいいけど。あの巨人の姿を見ておいて、復活を試みようとする人はもういないだろう。それに冠もどこへ行ったのやら。

「巨人が復活したところで、またその時代の者で止めればいいだけの話だ」

イシユの言葉に、それって丸投げなのでは？ と思ったけど何も言わないでおく。

もしかしたら、次も人々の手で止めることができると信じてくれているからかもしれないから。

「とりあえず一度タルシスに戻る？ それともあなたたちの気球艇を探す？」

気球艇を操縦しているウイラフさんから質問が飛んできた。

「あー、イシユ。ノアってどうなつたんです？」

「乗り捨てたから知らぬ」

「おおう……」

黒い竜と戦う前に、なんかこう、安全な着地ができるよう計算しながら飛び降りたのでは、と思ったけどそんなことはなかった。

となるとどっかに堕ちて壊れてそうだ。交易長が怒りそう……いや、ていうか巨人を倒したんだし怒られることはないよね。むしろ褒められるべきだ。

「タルシスに向かえ」

「一応この気球艇の持ち主は私なんですけど……」

イシユとウィラフさんの操舵前でのやり取りを見ているとシウアンが小さく笑いだした。

「シウアン？」

「ふふ。なんだか変わった気がしてただけど、前のままなところもあるなあって思ったからおかしくて」

「そうだねえ」

イシユのあの高慢な性格は変わらなさそうさ。

それがらしいっちゃらしいけど。

「ん？ 下でワールウィンドが手を振って呼んでるよ。あ、ローゲルだっけ」

ウィラフさんの言う通り、下でローゲルさんが両手を振っていた。

「そうか、放っておけ」

「え、うん。まあいいけど」

ローゲルさんへの扱いも以前のままだ。哀れなローゲルさんである。私もまあいいかと思っているけど。

風馳ノ草原、最果ての街タルシスが見えてきた。

ここに戻るまでの間に、金剛獣でキバガミさんを降ろし、深霧でシウアンとウィラフアンを降ろした。里に残った人たちに吉報を伝えるためだとか。

実際に巨人が倒れ、新たな世界樹が各々の大地からも見えるけど、帰って安心させたいという点ともう一つ、単に里帰りも兼ねているかもしれない。特にシウアンには。

街門の外には多くの斃れた魔物の姿。それとくたびれた状態の兵士たちの姿。

「ただ戻ってきた気球艇に気づいたのか、立ち上がり歓声をあげながら迎えてくれた。」

「街門に気球艇を降ろしてもらい、たった一日しか離れていなかったはずなのに、何故か妙に久々な感覚でタルシスへと足をおろす。」

「すぐさまいつぞやの熊騒動終了時の熱いお出迎えよりも、さらに激しい波が襲って来た。」

「帰ってきたってことは巨人はもういないんだな!」「他の奴らはどうしたんだ!?!」「やったなちくしょう!」「あの世界樹はなんなんだ!?!」「こつちも大変だったんだからな!」「気球艇違うくね?!」「とにかくやったな!」

「質問と称賛と現場自慢のラツシユである。ボロボロの姿なのに全員すごい力強い。一気に来すぎです。」

「ある意味大騒動中、大きく厳つい咳ばらいが聞こえた。ギルド長だ。」

「お前ら、よく戻ってきたな。他の奴らは後から戻ってくるのか?」

「あ、はい。私たちは先にそそくさと帰還しました」

「そうか。ならばお前らは辺境伯のところへ行つてやれ。事の顛末をあやつが誰よりも聞きたがつているだろうからな」

「へとへとなんで今日はもう休みたいんですが……」

「街の住民に吉報を知らせるためだ。堪えろ」

「口をへの字に曲げる私を見て、がははと笑いながらギルド長は兵士たちに指示を出し始める。」

「お前たち、もうひと踏ん張り働くぞ! 魔物の死体をそのままにしておくわけにもいかん。回収及び処理のために班を分けるぞ!」

「嫌そうな返事をしながらも、どこか嬉しそうに兵士たちは動きだす。日常に戻るための最後の一踏ん張りだ。お疲れ様ですとありがとうございます。今回は皆が功労者みたいなものだし、私たちももうひと踏ん張り頑張るとしよう。」

「マルク統治院へ目指そうとすると、見慣れた黄緑のコートの優雅な人物が見えた。」

「あ、キルヨネンじゃない。見ないと思つたら街の方で戦つてたのね」

「ウイラフ、無事だったみたいだね。本当に良かった。ニーズヘッグも」

行方不明と聞いていたけど無事だったようで良かった。

キルヨネンさんは安心した表情を浮かべた後、沈んだ表情へと変化した。

「ウイラフ、すまない」

「? どうしたのさ急に」

「僕は、何かを封じていたであろう竜の石柱を破壊してしまった。巨人の阻止が成功したというのに……」

石柱。封じる。竜。

途中見た黒い竜のことか。最後の石柱はキルヨネンさんが破壊したのか。そのことを気に病んでいるようだけど、もう解決済みである。

ウイラフさんも合点がいったのか、おかしそうに話します。

「あー、それなら大丈夫だよ。イシュが倒しちゃったみたい。封印されてた竜を」

「それは、また……」

驚きを向けられたイシュはいつも通りのままである。

いつも通りの無表情さのまま。

「我とアルメリアは辺境伯に報告へ向かう。汝らは汝らで話をしておけ」

さっさと報告したいという気持ちが出てきたのか、勝手にやっててくれとのことである。

「イシュ、すまなかった。それと、ありがとう」

歩いていくイシュにキルヨネンさんは謝罪と感謝を告げた。律儀な人である。

マルク統治院につくところでも兵士の熱烈な歓迎を受けた。

ただすぐに熱は引いたというか、仕事を思いだしたかのように「辺境伯に知らせにいつてください。きつと彼も首を長くして待つてますから」と急かしてきた。

そんなわけでの辺境伯の執務室前。

扉をノックしてから開けると、

「辺境伯、報告に——もがあー！」
「む」

扉を開けると私とイシユに突然のハグが襲った。

うわ、紅茶と犬のシャンプーのにおいがする。すごくする。

「諸君、よく帰って来てくれた！ ああ、ありがとう！ ありがとう！」

「辺境伯！ いたい！ いたい！」

「落ち着け辺境伯よ。我らは早く報告を済ませたい。それに以前、汝は執政者として熱い歓迎はできぬと言っていたであろう。この行動は執政者としてどうなのだ」

私は小柄だし、イシユも見た目は女の子だから大きいわけじゃない。そんな二人を同時にハグは傍から見たらセクハラです。

「おお、すまない。だが私も完全無欠な執政者というわけではないからね。素直な気持ちを抑えきれなかったのだよ」

こほん、と辺境伯は咳ばらいをしてから執務室へと招く。

私たちはもはやすっかり見慣れた執務室、そしていつも通りソファに沈みそうになりながら座った。

「さて、では聞かせてくれたまえ。あれから何があったのか、そしてあの空で何が起きたのか、それらをどのように解決に至ったのかを！」

それから私たちは、辺境伯がタルシスに戻ってからの木偶ノ文庫攻略戦から巨人との戦い、途中にあった竜の話話を話した。

色々とありすぎて結構な時間が掛かってしまう。その間にも他の気球艇が続々戻ってきていると兵士が途中報告に来たくらいだった。

だけど報告は私たちに一任することだそう。私一人で把握

できてる事態じゃないってのにひどいものだ。

「そうか、帝国騎士も味方となり力を合わせて、か。皇子はどうなったのだろうか？」

「皇子は……どうなったんですかね……？」

「我は知らぬ」

話が皇子に変わると誰も答えられない事態となった。

皇子の細かい顛末についてはキバガミさんかローゲルさんしか知らない。

「最後の戦いときは、呪いの影響で動けなくなっていたとは聞きましたけど……」

「ふむ……彼が今回の件で考え直してくれていたらしいのだが……」

「その事なら大丈夫だ」

報告の最中突然入ってきたのはローゲルさんだった。

「アルメリア、イシュ……置いていかなくてもいいだろう？」

「何故汝を拾わなくてはならぬ」

「この……！」

「それよりも、皇子について知るのであれば汝の報告をしろ」

ローゲルさんも来たことだし、ソファを詰めて場所を空ける。一言お礼を言いながら彼が座るとやったらと沈んだ。重鎧のせいだこれ。

姿勢を崩さぬように戦っている私の隣でローゲルさんは報告を、というには少し違う話を始めた。

「帝国騎士はもう、殿下一人にすべてを任せることはしない。彼が間違っているのならそれを正し忠義を示すことを約束しよう。そしてできることならば、帝国にタルシスの力を貸してほしい」

「ふむ……」

「今更と思うかもしれない……今回の戦い、発端は俺の行いのせいだ。結果的には収めることができたが、犠牲者が出なかつたわけではない。咎めるのであれば甘んじて受け入れよう。だが殿下はまだ執政者として未熟だ。全てを許してくれとは言わない。だが、それでも……」

「ローゲル。皇子はタルシスに助力を乞うことを良しとしてくれたの

かね？ 助力を乞うことは君一人の判断ではないのだね？」

辺境伯は真剣な顔でローゲルさんを見た。

何かを図るような目を前に、ローゲルさんは戸惑いなく答える。

「殿下と話し合ったよ、ちゃんね。また勝手に理想を押し付けるような真似はできないさ」

「そうか。ふふふ、それなら心配ないな」

その答え方は、騎士面していた硬い口調と異なりワールウインド時代と同じ軽さを感じるものだった。変に力まない答え方に辺境伯は笑みを浮かべ、

「このタルシスは帝国のために必ずや応えよう。我々は伝承のように、そして今回のように、互いに助け合うべきなのだから」

辺境伯の言葉にローゲルさんは頭を下げ、一方でイシユはその発言に対して思うことがあるようで。

「汝の考えに文句を言うつもりはないが、帝国の行いを良く思わぬ者としているだろう。それを踏まえての上での発言か」

イシユの指摘に対して彼は微笑みながら茶目つぶりなウイंकをして続けた。

「生まれた場所、種族、果ては時代までも異なっていようと、我々は手を取りあうことができる。それを他ならぬ諸君が私に証明してくれたのだよ」

「そうですね……うん、私もそう思います」

辺境伯の言葉に私も完全に同意だ。他に何も言えなくなってしまう。

全くもって、その通りなのだから。

千年前のハイ・ラガードの人間、タルシスで呪われていた私、異なる種族のウロビトとイクサビト、敵対していた帝国とも一緒に巨人と戦って勝ったのだ。

キョトンとしているイシユの横顔に、私も辺境伯のように微笑ん

だ。

第六章

6 1. 異国から来た旅人

今日も今日とて朝から快晴で、空には雲と気球艇が浮かび賑やかな街並みを見せるタルシス。

そんなタルシスの街はずれにある一軒家で、庭先の草むしりを一人する。ずっと放置されていた庭は雑草だらけだった。背の高い雑草はあまりないのが幸いか、それにしても草むしりというのは結構体力を使う。

イシユにも手伝ってほしいと思うところだが、あの人はダメだ。一度手伝ってもらったことがあるけど、そのやり方が燃える剣で焼くという方法だった。人の庭先でボヤ騒ぎはやめてほしい。

そんなわけでイシユは今頃家の中でコーヒーを啜っては読書をしているだけだ。ごくつぶしである。

ずっと屈んでいたせいか、背中が痛い。一度背中を伸ばし休憩に入り、北にそびえている世界樹を眺める。

以前より輝いて見える世界樹は、もう辿り着けない場所ではない。気球艇さえあれば麓まで行けるのだ。

もう辺境伯からの世界樹調査の発令は終わった。だけど未だにこのタルシスでは冒険者の気球艇は空を飛ぶ。

その理由はいくつかある。

その一つは魔物や樹海の素材採集のためだ。今タルシスでは素材の高価買取が行われている。帝国からの移民を受け入れるために、大規模な移動を可能とする気球艇……ではなく飛行船を造るために。そして移民の人たちの住まう家を造るために。

自然の木々を伐採して開拓していけば、いずれは帝国と同じ道を辿る。世界樹に関わる迷宮であればその道を辿るのは緩和されると考えてのことらしい。

とにかく冒険者は未だこの街に必要な人材。むしろ今はとても稼
ぎ時なのだ。私たちもこの期に乗じて冒険へ、と行きたいところでは
あるが、それをすることはできない。

「……ノア、まだできないかなあ」

つい出てしまった独り言の通り、気球艇ノアが完全に壊れてしまっ
たからだ。

あの戦いで乗り捨てられたノアは見事に崖壁に衝突し、バラバラに
なっていた。正直仕方なかった部分もあるよねと思っていたのだけ
ど、まああれである。

交易長は全く仕方ないと思ってくれなかったのである。

イシュと私は二人そろって延々と説教をされた。竜を倒すため
だったと言っても説教は止まず、「このボンクラどもの気球艇は後回
しだ！ くそ忙しいってのに！」と最後には吐き捨てられた。

帝国移動計画の飛行船製造よりも後となれば、どれほど先かと戦々
恐々ものだったけど、なんだかんだで合間合間にちよつとずつノアを
作ってくれているらしい。情報源は辺境伯である。これもツンデレ
というやつだろうか。

空を飛んでいく気球艇を恨めしげに眺めていると、大きな客人が
やって来た。

「アルメリア殿、元氣そうでなにより」

牛頭のモノノフ、イクサビトのキバガミさんだ。

「キバガミさんこそ元氣そうで。それよりどうしたんですか？ 里に
戻ったんじゃ？」

「なに、タルシスの兵に稽古をつけてくれとギルド長殿に頼まれてな。
里の方は、皆が優秀すぎて拙者の役目がなくてな……」

「家に居場所がない状態の夫みたいな……」

しゅんとしながら話すキバガミさんは巨人との戦いのあと、イクサ
ビトの里に戻った。もともと彼は成り行きで私たちと同じギルドと
なっていたし、里の長として今はギルドに所属していない状態だ。だ
けどこの様子ではどこかのギルドから声を掛けられそうさ。

「拙者は辺境伯殿や帝国の坊主、ウロビトの長老のような出来の良い

頭ではなくてな……里の者にも今では稽古しかつけてやれぬ……」

「いきなり落ち込まないでくださいよ……ていうか帝国の坊主って？」

「ム？ ああ、帝国の皇子のことよ」

まさかの皇子を坊主扱い。

「一応皇子相手に坊主で……てか皇子、体調は良くなったんですね」

巨人戦後、呪いは解けたがかなり消耗していてしばらく療養と聞いていたけど、話しができるほどには回復したってことだろう。

「ウム。今では憑き物も落ちたように元気なものよ。拙者と会う度に稽古を望むほどにな」

「へえー」

「なんというか……つくづく拙者は稽古しかつけてやれぬな……」

「だからいきなり落ち込まないでくださいよ」

イクサビトやウロビトを犠牲にする計画を立てていた頃とは全然違う皇子の話。キバガミさんはなんか落ち込んでるけど喜ばしいこととしか思えない。

とうとうかこの人、愚痴るために来たのだろうか。

「今日はもう予定がないなら上がっていきます？ ついでに一緒に草むしりしません？」

「ム？ まだ来ておらんのか？」

「はい？」

何の話？

「シウアン殿がお主に頼みたいことがあるらしくてな」

「頼みたいこと？」

シウアンが来るということも頼みがあるということも、全く聞いていない。逆にこちらがシウアンに頼むことはあつたりする。正確にはイシユがだけど。

イシユがシウアンにハイ・ラガードまで連れていきたがっているのだ。しかし、すぐに連れていくつもりはないらしく、彼女に里帰りをさせていた。

なんでもハイ・ラガードまでの移動だけで一月以上掛かるらしい。

しばらくウロビトの里に戻れないから長旅に出る覚悟が固まるまでゆつくりしてろとのこと。イシユがその発言をした時は驚きの方が大きかったのは仕方がないと思う。

「旅支度とかかな……」

とにかく、シウアンに頼むことはあれど頼まれることは思い付かない。強いて言うなら長旅準備を手伝ってほしいとかだろうか。

「拙者にも頼みたいことがあるらしい。なんらかの荒事かもしれないぞ」

「キバガミさんにもですか」

「ウム、拙者が尋ねた時は上手く言葉にできなかったようだな。内容については揃ってから話すそうだ」

「それが今日なんですか」

全く聞いていないんですが。私たちがどつかに出掛けてたらとか考えてないんだろうか。気球艇ないけど。ないから暇だと思ってくれているのか。ちくしょう。

「それにしても、まだ来ておらんとはな……」

「案外ベルンド工房にいるかもしれないよ。お店の子がシウアンと年齢近そうですし」

「もしくは噂になっている巫師のもしかもしれんな」

「巫師？」

「……お主、あまり家から出ておらんのか？」

「た、たまたま知らないだけです……で、その噂の巫師って？」

気球艇がないから日用品の買い物ぐらいしか出ないんだもの。仕方がないじゃないか。

巫師といえばタルシスでは珍しい部類。昔、体に呪いがあった頃に診てもらったことがあるが、たいていは旅の途中の人だった。ぎつくり言ってしまったえばスピリチュアル的な医療の人たち。地域によっては生活の中心だとか何とか。タルシスでは根付かなかったけど。

「遠方から世界樹の調査発令を聞きつけてやって来たらしくてな、凄腕でありなおかつ高位の巫師と聞く」

「世界樹の調査で、もう終わったじゃないですか」

「ウム、まさか終わっているとは思わなかったのだろうか。だがタルシスに残り、治癒やまじないをしてくれるそうだ」

「へえー」

シウアンも祈祷とかするし、巫師と似たような感じなのかな。それで見に行つたとか。

「でもなんで噂になるんです？ 確かに巫師は珍しいかもですけど」
「その者は破格の値で診てくれるそうだな。それだけでなく、迷宮にて行方がわからなくなった者を率先して助けに向かい救出してくれたと聞いておる」

安い値段で診てくれてなおかつ危険な場所にまで来てくれる、と。なんだかまるで聖人のようだ。確かにそれなら噂になるのかもしれない。

「お主が知らぬということは、イシュ殿も知らぬのだろうか……」

「行動範囲が一緒ってわけじゃないですけど、イシュは噂とか気にしなさそうですしね……」

「お主もであろうに」

私はたまたま知らなかったただけだって。

そんな呆れた目はやめなさい。

「イシュ殿ともしかしたから知己やもしれん」

「へ？ なんです？」

「確かイシュ殿の故郷はハイ・ラガードという場所であろう？」

ハイ・ラガードの世界樹から来ただけで、故郷かというと厳密には違うけども……キバガミさんは知らないままだっけ。

誰がどこまで知ってるのかさっぱりだ。イシュが千年前の存在と知ってるのは辺境伯とローゲルさんに、ウーファンとシウアンもだっけ？ 皇子も知ってるのか。

「その巫師はハイ・ラガードで冒険者をしていたそうだ。その地の世界樹にも挑んだことがあるらしい」

「ほへえー！」

絶対イシュとは知り合いじゃないだろうけど、私としてはその人に俄然興味が出てきた。ハイ・ラガードにいずれ行く予定なのなもの。

そして世界樹の頂上にイシユの住んでた城があるのだ。事前情報はほしい。

「その人はどこに？」

「セフリムの宿にいるらしいが……」

「じゃあ今から行きましようか！」

「シウアン殿が来ると言ったであろう。すれ違うことになるやもしれん」

「イシユがいますよ！」

「ムウ……」

「少し待っててください！」

キバガミさんにちよつと待ってもらって、家で読書中のイシユに出掛けることを伝えてこよう。あ、一応イシユも来るか聞いた方がいいかな。まあその場合はキバガミさんに家に居てもらおう。

もはやすっかり現代の文字も読めるようになったイシユは、学舎から本を借りては読むほどの本の虫となっていた。

「イシユー？」

黙々と読み続けているイシユに声を掛けると、本から目を外して私を一瞥した。

「どうした」

「ハイ・ラガードの冒険者がタルシスにいるみたいなので、ちよつと会いに行こうと思うんですけどイシユも来ます？」

「ふむ」

すると、イシユは読んでいた本を閉じ立ち上がる。どうやらイシユも来るつもりのようなのだ。

「イシユも来るんですね」

「ハイ・ラガードのことで確認したいことがある」

「はい、それじゃセフリムの宿に行きましよう」

イシユも行くことになったので、シウアンとすれ違いが起きても大丈夫なようにキバガミさんに留守を頼むことにした。

家主がいない家に居座るわけには、と渋っていたけど家主である私が任せただから大丈夫、と説得してなんとか待つてもらうことに。

セフリムの宿に行くのは実は久しぶりである。

最後に来たのは宿のチェックアウトのため、それも巨人戦後わりとすぐだ。まあ久しぶりといっても一月も経ってない。だいたい二週間程度だろうか。そんなわけで別に大きな改装とかがあるわけではなく、以前と変わらない姿。

セフリムの宿で他の人との交流スペースといえは食堂だろうと思いい、そこへと向かうと見慣れぬ格好の人がいた。

その人の向かいには少年が涙を流して椅子に座っている。シウア
ンはいない。

「ほーら、できた。完成よ」

「……違うよ、ひつく……そつ、そんな不気味な人形じゃないよ……」

「不気味なつて失礼ね……」

何やってんだろ。

泣いている少年に、おそらく噂の巫師と思わしき女性が藁人形を見せていた。全くわからない状況だ。巫術用の人形だろうかあれは。

「だいたいねえ……巫医であるあたしに妹へのプレゼント作りを頼むのはおかしいんじゃない？」

「だ、だつてえ……すごい優しい冒険者つて聞いたもん……」

「尾ひれがつきすぎよ……」

やっぱりあの女性が噂の巫師のようだ。少年は噂を聞いて訪ねて来たつて感じだろうか。優しいイコールなんでも頼めると思っ
ちやったのか。

「プレゼントとか自分で用意するもんじゃないの？」

「したよう……でも、人形、買ったのに……無くしちやった……」

「ああ、そういうことね。あるんならそう言いなさいな」

無くしたつて少年は言ったのに、女性は別のことを言った。見てる

私も当事者の少年も頭上にクエスチョンが浮かびそうな雰囲気である。

一方で女性は紙とおはじきのようなものをいくつか取り出し、何やら色々書いて並べていく。

何度か紙の上におはじきを滑らせた後、女性は言った。

「……買ったあと、果物屋に行っていないかしら？」

「えっ……うん。わかるの……？」

「そこに置き忘れたんじゃない？」

「そ、そうかも……見てくる！」

少年は慌てて去っていった。

今のも巫術の一種だろうか。少年は手ぶらだった。果物屋に行つたなんて見ただけではわからないのに、まじないで当てたということだろうか。そしてプレゼントの人形の場所すらも。

巫師の力の一端を見れたおかげで、ますます期待が高まる。へっばこだったら世界樹に挑んだことがあるらしいといっても、全然浅い段階で止めたのかもと考えられるが、凄腕巫師ならある程度深みには行つてそうだからだ。

期待の眼差しが強すぎたのか、女性は私たちを見て言った。

「さっきから見てるけど、あなたたちもあたしに何か用があるのかしら？」

「あ、えっと、まあ、そうなります？」

「一応言っておくけど、あたしはなんでも屋じゃないんだからね」

何人にも訪ねられているからか、ちよつと面倒くさそうに応える彼女。話すの面倒だから断るって言われたら素直に下がろう。そう思えるくらいの態度だ。

「ハイ・ラガードから来たんですよね？ あつちのことを聞きたいなあつて思つて」

「……怪我とか病気のことじゃなくてハイ・ラガードについてなの？

どうしてか聞いてもいいかしら？」

逆に質問された。特に取り繕うことなく素直に答える。

「ハイ・ラガードの世界樹に行く予定があるので、どんなところか聞け

るなら聞いておきたいんです」

「……世界樹に？ そっちの子も？」

女性はイシユにも聞いてきた。

イシユも世界樹へ行くけど、この人は世界樹について聞きたいってわけではない。

「我は少し異なる。我もハイ・ラガードの冒険者に尋ねることがあるが、それはアルメリアの問いを答えてからにする」

「すごい声ね………とにかく二人ともハイ・ラガード関係を知りたいわけね」

久しぶりにイシユの声に驚く人を見た気がする。すっかり馴染んだけど、そっぴいやその反応が普通か。

「でもあたしはあまり期待に答えられないと思うわ」

「なんでですか？」

世界樹に挑んだ噂は出鱈目ってことだろうか。

「あたしはね、ハイ・ラガードを追放されたの」

まさかの答え。

追放なんてただ事じゃない。ハイ・ラガード公国、つまり国からの追放なんて、よっぽどのことをしない限りはそんなことにならないはずだ。

実はこの女性、そうとうやべえ人なのか。

何を言うべきか悩んでいると、別の声が会話に入ってきた。

「お嬢様、追放とはまた違いますよう」

しゃがれた男性の声。

その声の持ち主は黒いコートを身に纏った老齢の男性だった。だけれどその背筋は曲がっておらずピンと張られているし、歩く姿も力強いものだ。

ていうかお嬢様？

「爺やの言う通り、逃げたと言う方が正しいかしら」

「そのようなことは言っておりません。……又しらに言っておく。お

嬢様は自らの意思で国を出られたのだ。追われている身ではない」

じいやって言いましたよこの女性、いや、お嬢様。ひよつとして貴族とかなんだらうか。大金持ちさん？

それより爺やさんの眼光が鋭すぎる。めちやくちや睨まれている。

「いきなりごめんなさいね。爺やは愛想が悪すぎよ」

「……」

「いえ、大丈夫です……」

笑いながら謝罪するお嬢様と違い、爺やさんは無言で睨み付けてくる。私別に悪いことしてないよね？

「爺やのことは気にしないで」

んな無茶な。すごい威圧感放ってますもん。

「それにしても、ハイ・ラガードの世界樹を目指さなくてもいいんじゃない？ この地にも世界樹があるんだから」

「いえ……ハイ・ラガードの世界樹に行かないとなんです」

「ふうん……」

爺やさんが追放ではないと言ってたけど、やっぱりハイ・ラガードに何か思うところがあるのだろう。お嬢様も反応が淡泊だ。

「答えを濁すな。汝は知ることを話せばよい」

ここでイシユのこの発言である。

貴族疑惑のお嬢様相手にこの高圧的物言い。当然これには、

「お嬢様に向かって生意気な……！ その命、要らぬようだな！」

爺やさんがキレた。

怒ったとかじゃない。キレた。銃を両手に取り出してイシユにつきつけたのだ。

「やめなさいー！」

「イシユ止まってー！」

お嬢様が爺やさんを止め、私は剣を振り抜こうとするイシユに制止を掛ける。

なんで宿屋の食堂でこんな殺伐とするんだ。

「……はあ。悪かったわね」

「い、いえ、こちらこそ……」

あまりお嬢様も話したくないようだし解散した方がいいかもしれない。そんな気持ちが生まれ始めた時、

「お詫びつてわけじゃないけど、あたしがハイ・ラガードについて知ってることを話してあげるわ」

「……いいんです？」

あんなにもつたいぶつてたのに。

「そんな気持ちも込めた、いいんです？　だ。

「ええ、いいわよ。でも本当に期待に応えられるか怪しいわよ」

「大丈夫です！　お願いします！」

情報が少ななくても一般人目線のハイラガ世界樹を知れるのは嬉しいことだ。そんな期待を込めて話を聞く。

「まずは……そういえばまだ名乗ってなかったわね」

「あ、そうですね。私はニーズヘッグのアルメリアです。こちらはイシュ」

聞かせてもらう側だと、先に名乗る。

私たちの名前を聞いてから女性は名乗った。

「あたしの名前はアーテリンデ。そこの恐いお爺さんはライシュツツ。あたしたちは、ハイ・ラガードではエスバットというギルドだったわ」

62. 異国の出来事、咎の在り処

エスバットと名乗った女性、アーテリンデさんは、私たちのリアクションを見逃すまいとじっと見てくる。しかし特に反応できないので困る。

ひよつとしてすぐく有名なギルドとかなんだろうか。世間知らずなのは許してほしい。

「……やっぱり知らないみたいね」

「うっ……諸事情で長く引きこもってたんで……」

「別に責めてるわけじゃないのよ。もしも知ってたら性格悪い人たちって感じたただけだから」

すぐーく引つ掛かる言い方だ。さっきの追放云々とか、爺やさん、もといライシユツツさんとのやり取りから、やっぱりハイ・ラガードで何かやらかしたのだと想像してしまう。

「それで？ 世界樹の何が知りたいの？」

「気をつける点とか、用意してた方がいいものとか、ですかね？」

「……」

思ってた質問と違ったのだろう。そんなことを知りたかったのとばかりの視線である。

「まあいいわ。特別に用意しなきゃいけないものは特にないわね。強いて言うならハイ・ラガードは防寒着かしら。世界樹の中に雪降る階層があるもの」

「冬の階層ですね」

銀嵐ノ霊峰みたいなものだろう。

「そうよ。世界樹の中ではまるで季節が変化したかのように、階層ごとに大きな違いがあるの。って偉そうに言っても、あたしたちは三階層までしか知らないんだけどね」

「魔物もその階層に適応したのが出てきたりですか？」

「……」

「そうね」

火の印術が活躍する階層と全く活躍しない階層がありそうだ。にしても、魔物という言葉を出した途端、なんだか空気が重くなつた。重たい空気を出している原因はライシユツツさん。いや、彼だけでなくアーテリンデさんからもどこか重苦しい雰囲気を感じる。

魔物の話題は避けた方が良さそうだ。

そんな感想を浮かべていると、トテトテと軽やかで可愛らしい足音が近づいてきた。

見るとそこには黒いもふもふ。これは……

「子犬？」

黒い毛並みの子犬だ。短い手足でトテトテと近づいてくる。かわええ。

「子犬じゃなくて狼よ。まあ子供だから子狼かしら」

「こんなに可愛い狼が……ってアーテリンデさんたちの子ですか？」

「一緒に旅をしている仲間よ」

子狼はアーテリンデさんの足元まで来ると、靴をがじがじとあまがみしだした。やんちゃだ。

「こら、やめなさい」

重たかった空気が弛緩されていく。いつか犬を飼ってみたいかもしれない。辺境伯に犬の飼い方を今度暇なときに聞いてみようか。

「甘えたざかりなんですわねえ。なんて子なんです？」

「親は落ち着きのあつたらしいんだけど……名前はクロガネJr.」

「ジュニア……」

親の名前はクロガネですね。わかりやすすぎる。

「……この子の親が所属していたギルドはね、第一階層で散ったわ」

「……」

「話の続きをするわね」

重たい空気とはまた違う、張りつめた空気です。アーテリンデさんは話しました。

「気をつける点、当然それは死なないこと」

それは当然だ。どうせなんとかなる、なんて楽観視はできないもの

だとわかっている。

「タルシスでの冒険でも死なないのは当然でしょうけどね。死んだら終わりなんだから」

「はい」

「でもね、ハイ・ラガードの世界樹では……死んだらそこで終わり、ではないの」

死んだら終わりじゃない。

その言葉はなにも知らなければ意味不明に思えたかもしれない。だけど私は知っている。すでに聞いている。

世界樹で死んだ人の体をイシユの城に連れていき、

「樹海で命を落とした者は、天の支配者の元へ連れていかれる」

永遠の命を作るために実験を受けて、魔物となる。

「そこで……永遠の命を与えられる。死ぬこともできず、かといって人として生きることができず、理性を亡くした魔物となって……」

魔物という単語で空気が重くなった理由がよくわかった。

この人たちは、イシユの行為による被害者だ。

「人間だった頃、とても優しくかった人が、近づく者を殺す魔物にされた……」

「我らはその方を救うことができなかった……」

行き当たりのない怒りと、やりきれない哀しみを浮かべながら語る彼らは、実際に仲間が魔物にされたんだ。

「にわかには信じがたい話よね……だけど本当のことなの」

「汝の知り合いか」

イシユが確認の言葉を掛ける。

「ええ……あたしの姉は、とても優しい人だったわ。人が傷ついたら自分も同じように痛がるような……そんな人だったの」

何も言えない。

この人の姉を魔物にしたのはイシュだ。それを教えることなんて私にはできない。

私は何も言えないまま、話はまだ続く。

「さっき追放されたって話はね、あたしたちが人を殺したからなの」
「え……」

死んだら魔物にされるとわかっていながら、人を殺した？

どういふことか理解が追いつかない私に、アーテリンデさんとライシュツツさんは話を続ける。

「魔物にされた姉さんが、冒険者に傷つけられるのを見たくなかった。あの優しかった姉さんが、人を傷つけるところを見たくなかった。だから、そうなる前にあたしたちは姉さんに誰も近づけないようにした」

「彼女が汚れる前に、我らの手で人を殺めた」

私は何も言えない。

イシュも何も言わない。

「だからあたしたちは犯罪者なの」

「……我らは許されぬことをした。お嬢様が旅をされているのは償いのためでもある」

「償いになり得ているかはともかくね……」

何を言えばいいかわからない。私は誰の味方になればいいのだろう。当時のイシュは狂っていたのだと言っても、この人たちにはそんなの関係ない話だ。魔物にしたという事実は変わらない。

「汝らは、天の支配者を憎く思わぬのか」

「イシュ……？」

何を言うつもりだ。

何を考えてそんな発言を。

「……憎くて当然でしょう？ 叶うのなら、あたしたちの手で殺してやりたいくらいよ」

「だが天の支配者は討たれた。我らの手は憎しみを晴らすこともできず、ただ罪の償いをするのみだ」

アーテリンデさんとライシュツツさんの返答。

この人たちは、イシュが死んだと思っっている。憎い相手が目の前にいるとは思ってもいない。

「汝らの憎き天の支配者、それは我だ」

イシュは彼女たちの勘違いを、自分から訂正する発言をした。

「イ——」

なんでそれを言っちゃうんだ、という思いを込めて名前を呼ぼうとしたが息が止まってしまった。

さつきもイシュは銃を突き付けられた。今度はそれだけではとどまらなかった。

「もう一度、くだらぬことを言うようであればその眉間に風穴ができると心しろ」

ライシュツツさんの銃口から硝煙が上がる。

放たれた銃弾は、座っているイシュの足の先、ほんの僅かにズレた場所に撃ちこまれていた。

「爺や、宿の人に迷惑をかけることはよしなさい」

「……」

「喧嘩っぱやくて困ったお爺さんよね、本当に」

アーテリンデさんは従者の暴走に困り眉で笑っているが、目は全く笑っていない。

「あなたも気をつけてね？ 冗談でも触れちゃいけないコトつてあるんだから」

「我は真実を言ったまで。汝の姉を冬の階層の魔、スキユレーにしたのは我だ。天の支配者である我から汝らに告げるべきことがある」
「……………」

再度告白するイシユに、アーテリンデさんが短刀を抜いて動く。我慢の限界を迎えた動き、今度は威嚇なんかじゃ止まらない。

「待ってくださいー！」

「……………！ 放しなさいー！」

咄嗟に彼女の腕を掴むことができた。けども少し気を抜けば、即座にイシユへ刃が突き立てられるほどに力が込められている。

アーテリンデさんはなんとか止めれたけど、ライシユツツさんの方は……………！

「我は警告した。己の愚かさをあの世で悔いるがいい！」

————— 発砲音が食堂に響く。

あっさりど、ためらいなく撃った。

「……………この街にももういられないわね」

「申し訳ありません、お嬢様」

この人たちは本当に人を殺してきたんだろう。ここまで命を奪う引鉄が軽いほどに、慣れてしまっているのだろう。

普通の相手になら殺人となったこの状況で、もう次の行動を考え始めている。

普通の相手になら。

「我には、汝の言うあの世に赴くことができない」
「馬鹿な……………」

「…………どういふこと」

眉間に銃弾を撃ち込まれたイシユは立ち上がる。

イシユが普通の人間と同じと思っていたエスバットの二人は呆然としたが、すぐに我に返ったのか再び攻撃を始めようとした。

「待ってください！ イシユの話聞いてください!!」

「人間に見えるけど、人間じゃないのね。本当に天の支配者なのだとしたら、なおのこと話なんて聞く理由がないわ」

イシユは剣を構えはしていないけど、アーテリンデさんは持ち手の長い剣を構えだし、ライシユツツさんも両手に銃を構え距離をとった。

下手に身を挺して妨害しようものなら、蜂の巣にされるか刻まれるか。そんな殺伐とした空気が漂う中、

「みなさん、困りますよ。ここで暴れられたら他のお客さんに迷惑なんですから」

「うひっ…………」

殺伐感とは無縁の雰囲気を出す喋り方をしながら、やたらと大きすぎる包丁を手にした女将さんが返り血まみれの姿で微笑んでいた。

……また血抜き失敗したんだろうか、あの姿。

「我はこの者たちに話があるだけだ。店に迷惑をかけるつもりはない」

「そうなんですか。でも武器を使ってするお話なんてないと思いますよ。」

「我は見ての通り武器は構えておらぬ」

「イシユさんはそうですねー」

のほほんとして話しながらゆっくり歩いてくる女将さん。口調からは毒気を抜かれそうなおっとり具合なのに、その姿は不気味で怖い。

口調に毒気を抜かれたのか、お店に迷惑を掛けるのは良くないと思っただのか、アーテリンデさんたちも動きを止めていた。

「ですがイシュさんも武器を構えちゃうかもしれない。本当にお話だけならみなさん、一度私に危ない物は渡してくれませんか？」

「え、ちよつと……」

「我が銃に触るな」

「困るんですよー。わんちゃんも怯えちゃってるじゃないですか。大人の喧嘩する姿なんて教育に良くないですよ」

見るとクロガネJr. は尻尾を股に挟んですつかり縮こまっていた。庇護欲をくすぐるその愛らしい姿に私も喧嘩を止めなくちゃという謎の使命感が強まる。

もつとも、その使命感は出るのが遅すぎたのか、アーテリンデさんたちもクロガネJr. の姿を見た後、ゆつくりと武器を女将さんに預けました。

お話が終わったらちゃんみなさんにお返ししますねー、と言い残して女将さんは厨房の方へと引っ込んでいった。

「……」

「……」

女将さんがいなくなった後、全員椅子に座り最初と同じように話をする状態となっている。あくまで見た目だけは最初と同じだが、雰囲気は最悪な状況だ。

「……本当に天の支配者だって言うのなら、何をあたしたちに言うつもり？」

武器は手元にはないけども、ピリピリした空気は続いている。クロガネJr. は足元でじつと固まってしまっていた。

「汝らが憎む天の支配者は我だ。我は永遠の命を研究するために、人間を何人も魔物に変えてきた」

「……」

もしも武器があつたら、再び発砲騒ぎになっていた気がする。

「それで、何が言いたいのか。あたしたちに謝罪でもしてくれるってわけ？」

「我は汝らの姉を、魔物に変えられた者たちを解放するために行動している。それまで我は汝らに討たれるわけにはいかぬ」

「解放？」

「世界樹の遺伝子が混ざったがゆえに、魔物たちは不死となっている。完全に死なすためには世界樹に作用する力が必要不可欠だ」

「……」

「もうじきあの者たちを死なすことができる。しばらくしたのちに、ハイ・ラガードへ赴くが良い」

「……要するに」

イシユの話を聞いて、アーテリンデさんは一度静かに目を瞑った。

「姉さんをあんな姿にしたお前の話を信じろって？ 仇討ちはせずに見逃せって？」

「誰がそんなことを言った。我は信じろとも見逃せとも言っておらぬ」

「……!!」

ガタンと音を立ててアーテリンデさんが勢いよく立ち上がる。

今にも掴みかかりそうな怒りに染まった表情は、直接私に感情をぶつけているわけじゃないのに怖いほどだ。

小さく足元から獣の鳴き声が聞こえた。

クロガネJr. が不安そうな声をあげたのだ。

「……。じゃあ何が言いたいの。姉さんを魔物に変えて、あたしたちを国からいられなくさせて……」

「汝は何を言っている。確かに我は汝の姉を魔物に変えた」

「……だったらっ！」

「だが汝らのその後、我は何も関与していない。汝らが人を殺めた

のは、汝ら自身が選んだ結果だ。そこに我は関係ない」

「——貴様ア!!」

ライシュツツさんが怒鳴り、イシュに向かって拳を振るう。それをイシュは顔で受け止めるも仰け反ること一切せず、何も気に留めずに話を続ける。

「貴様は……貴様は！ 貴様の行いでどれほどの者が苦しんだと思っ
ている!？」

「我が汝らの仲間の死体を使い魔物に変えた咎は、責められることを甘んじて受け入れよう。我が作り上げた魔物によつて起きた被害についてと同じだ。だが、汝らの殺人は汝らの咎だ。そのことにまで我を持ちだすな」

厳しい言い方だ。理屈は、いや、冷静に聞けば正論にも思える。イシュにとつては一切の人情を挟まずに、淡々と事実との因果関係を言つたまでのことなのだろう。

だけどそんな風に誰もが割り切れるわけじゃない。この人たちは、姉が魔物に変えられなければ、そんな選択肢すら出ることにはなかつたんだ。選択肢を作つた責をイシュに求めているのだ。

「……ライシュツツ、座りなさい」

「貴様は……!」

「ライシュツツ!」

「……はっ」

「結局、何が言いたいっていうの」

アーテリンデさんが改めてイシュに聞いた。

それを受けて、迷いのない返答。

「我の邪魔をするな」

机を拳で叩く音が食堂内に響く。クロガネJr.の驚いた声もはや気にしていない。

「私の邪魔をすればするほど、汝の姉は魔物でいる時間が長引く。これは汝のためでもあるのだ」

「どれほど身勝手なことを言ってるかわかっているの？ 天の支配者の言葉を信じて何もするなっつて？」

「信じずともよい。私は汝がどう思おうと、魔物を解放することに変わりはない」

決定事項とでも言うように、異論を許さない雰囲気で言い放った。その態度がますます彼女たちの神経を逆なでしている。

「我から汝らに告げることは以上だ」

「……」

アーテリンデさんもライシュツツさんも、何も言わないがひたすらに怒りを堪えている。その証拠とでもいうように、彼女たちの拳は血が滲みそうなほどに握り込まれていた。

やがて、アーテリンデさんは静かに席を立つ。

「ハイ・ラガードにはそのうち行くわ。あの国ではあたしたちは犯罪者だから、頻繁には行けないけどね」

クロガネJr.を抱きかかえ、もう話を切り上げるつもりなのだろうか。没収された武器以外の荷物を纏めだす。

纏めながら私に目を向けて、小さな謝罪を行った。

「……アルメリア、だったかしら。殺気立って悪かったわね」

「いえ、そんな謝らなくても……」

「優しいのね、あたしたちは殺人者なのに」

「そんなこと……」

「いいのよ。無理に否定しなくても。あたしたちは許されないことを

した。ハイ・ラガードで牢に入れられてもおかしくないほどに。遺族から殺されても文句が言えないほどに」

この子は別だけどね、とクロガネJ r. を撫でながらアーテリンデさんは言った。

クロガネJ r. は安心しきっているのか、気持ちよさそうに目を閉じて撫でられている。

「しばらくこの街にいるわ。他に何か知りたいたいことがあったら訪ねなさい。その時は、あなた一人に来てくれると嬉しいわ」

「はい……ありがとうございます」

私一人でという理由は、聞かなくてもわかる。

最後までライシユツツさんは怖い顔だった。あの人、付き人というより護衛なのかな。柄が常時悪い……

二人……クロガネJ r. を入れたら三者？ まあとにかくアーテリンデさんたちがいなくなり、食堂には私たちだけ。

聞きたかったことだけでなく、込み入った話まで聞けてしまった。イシユが暴走していた頃の被害者の話だなんて……

そしてイシユの暴露……

「戻るぞ。ここにシウアンが来ていないのならば、これ以上いる意味はない」

「き、切り替え早いですね……」

「ハイ・ラガードの冒険者はもう去ったではないか。あの者たちがいないというのに、いつまでもここにいる意味はない」

「いや、さっきの話にこう、思うところとか……いや、やっぱりいいです。そうですね、帰りましょう」

何も思うところがないのなら、それでいいかもしれない。あの話は突き詰めればイシユの悪事の結末話だ。さらにもとを正せば千年前の人たちがイシユを連れていかなかったせいだとも思うけど。

とにかく、私も切り替えることにする。

うん、シウアンが会いに来てほしいんだからそっちだそっち。

とりあえずセフリの宿にはいないみたいだし、やっぱりいるとしたら年齢が近そうなベルンド工房かな。

ベルンド工房にはシウアンの姿はなかった。

その代わりにというわけじゃないけど、いたのは顔に包帯を巻いた不審者だった。

「アルメリアにイシユじゃないか。君たちがここに来るなんて珍しいね」

不審者が親しげに話しかけてきた件。

「……ここにもシウアンはいなさそうですね。戻りましょうか」「うむ」

「無視はよしてくれないか……シウアンならついさつき、君の家に行っただが」

不審者はまるで知り合いのような感覚で話しているけど本当に誰かわからん。

「えつと……どちらさまでしょうか？」

「……それはひどすぎないかい。俺だよ俺。ローゲルだよ」

ローゲルさん？

そう言われたら声はそれっぽいいけど……

「その包帯はなんでまた？」

「ん？ ああ、そうか。顔が隠れてしまったのを忘れてた。この包帯には訳があつてね……」

「汝の話などどうでもよい。アルメリア、シウアンの場所まで行くぞ」

「はい」

「まあ待ちなよ」

ローゲルさんがなんかついてきた。そんなに語りたいのだろうか。この人暇なの？ 包帯について聞いたのはこっただけでそんなに興味があったわけじゃないし、イシユじゃないけど私もその話はどうでもいい。

「なんですか？」

「シウアンと会うんだろ？ それなら俺も一緒に行くよ」
「え、なんでです？」

シウアンと会うのに何故ローゲルさんが一緒に来るのか。やっぱり実はロリコンなのでは、とかつての疑惑が脳裏によぎる。

「なんでって、シウアンはニーズヘッグに依頼したいことがあるらしいからな。それなら俺も一緒にいた方がいいだろう？」

「え？ なんでです？」

「いや、一緒に聞いた方が手間が省けるじゃないか」
「？」

シウアンが私たちに何か頼みごとがあるということは知ってる。しかしなんでそこでローゲルさんが出るのだろう。

「とにかく、同じギルドなんだから俺も行くよ」

「え？」

「……………え？」

同じギルド？ ローゲルさんと私たちが？

「そ、その反応はさすがに酷すぎると思うんだが……………同じギルドだろう！？」

「初耳ですけど」

「なっ!？」

あ、ひよつとして私が知らない間にイシユと仲良しになって同じギルドに、とか……………ないな。まあ一応確認しとこ。

「イシユ、ローゲルさんって同じギルドなんです？」

「ありえぬ」

「な、何言ってるんだ！ 煌天破と一緒に——」

「それこそ何を言っている。あれは汝の持つ情報を得るために連行しただけだ」

「んな——!？」

ああ、なるほど。勘違いか。

ということはニーズヘッグのメンバーはイシユ、私、シウアンとウーフアンだけのままのようだ。

「ていうかローゲルさん、帝国騎士に戻ったんじゃないんですか？」

ギルドの所在勘違いはこの際置いておいて、帝国騎士に戻ったのならどつちみち冒険者ではないのでは。

「……理由はどうあれ殿下に剣を向けたからな。そのまま騎士を続けるわけにはいかない」

「無職……」

「冒険者にまた戻っただけだ。まあ引き留められはしたんだが、勝手に君たちのギルドを抜けるのは悪いと思って……ただけどなあ……」

「抜けるも何も、ギルドが違いますからね」

「容赦のないことで……」

事実なんだし仕方がない。

というか、勘違いしてなかったら騎士のままだったのだろうか。数時間の間一緒に戦っただけで、そこまで重きに持たれるとは。

「今からでも皇子に頼んだらどうです？ 騎士に戻ってって」

「そんな簡単に戻れたら騎士が軽く見られてしまう。ま、ギルドに入れてなくても俺のやることは変わらないさ。騎士としての立場ではなく、何にも属さない立場から殿下を助けるってね」

声音から、もしかしたらカッコつけているのだろうか。しかし顔がやっぱり包帯で隠れているせいで怪しさがひどい。ただでさえ包帯がなくても胡散臭いタイプなのに。

「それよりその包帯はなんなんですか？」

「それよりって、まあいい。これはまあ……ケジメみたいなもんかな」

「はい？」

ケジメで顔を隠すとはいったい。

「巫女誘拐の件で……ギルド長にぶん殴られて腫れ上がってね」

「あー……それなら仕方ないですね」

ギルド長のパンチなら腫れあがるか。でも包帯巻きの人には悪いけども、もっと痛めつけられてもおかしくなかったのではないだろうか。

見たところ包帯は顔だけのようだ。首から下は騎士の鎧、ではなく冒険者時代と同じラフな格好になっている。背中に砲剣を隠さず背

負っている点を除けばだけど。

「まあ殴られたからって、はいおしまいって訳にはいかない。贖罪のためにも今後は恥じることない生き様をするつもりだ」

恥じることのない生き様。アーテリンデさんたちのように人助けの旅とかするつもりだろうか。皇子のことを考えると活動範囲は狭いかもだけど。

とりあえず、

「ギルド勘違いは恥じる点ではないんです？」

「忘れろ……」

63. 奈落より響く呼び声

どうせ暇だからと何故かついてくるローゲルさんと共に家に戻った。家には椅子のサイズが合っていないせいで座りにくそうにしているキバガミさんと、やはりすれ違いになっていたのかシウアンとウーファンがいた。

ちなみにローゲルさんはほとんど顔の腫れが引いていたのですでに包帯はとつてある。なんだこの人。

「アルメリア！ イシユ！ 久しぶりだね！」

「シウアン、元気だった？」

「うん！」

シウアンの無邪気な笑顔。それに比べウーファンは相変わらずの仏頂面だ。

「貴様ら、シウアンが来るとキバガミから聞いておきながらどこへ行っていったのだ」

「来るのが遅いから探しに行っただけじゃないですか」

そのついでにエスバツトの人たちに会いに行っただけじゃないか。「しかしこうして揃うのはあの戦いの時以来だな。皆、息災なようになによりよ」

場の空気が悪化するのを防ぐためか、キバガミさんが間に入る。強さだけでなく、この優しさが里の人たちに支持されている理由な気がする。

「ローゲル殿も久しぶりだな。あの坊主の元に戻る気はないのか？」

「今はあまりないな。着かず離れずの距離からフォローするつもりだよ。それより坊主って君ね……」

「そう難色示すな。あの者自身がそう呼べと言っただけだからな」

やっぱり一国の皇子相手に坊主呼びは良くないのか、ローゲルさんが困ったような顔をしたけどキバガミさんの言葉に止まった。

「なんでも自然と坊主と呼べなくなる日をいずれ迎えさせるそうだな。なんとも楽しみな話ではないか」

「……そうか。ならいい、のか?」

皇子の話で盛り上がる二人をよそに、イシユがシウアンの前に立つ。

「汝から何か頼みがあると聞いた。しかしその頼みを聞く前に汝に問う。それは本当に必要なことか」

「貴様、シウアンの頼みを無下に扱うつもりか」

「我には譲れぬ目的がある。その目的を叶えるために良き関係を務めるつもりだが、無駄な時間はかけられぬ。今日改めて我が所業を思い知ったがために」

イシユの言葉は、この場にいたほとんどの人に良くわからなかったと思う。

思い知った所業というのは、エスバットの人たちの話を聞いたからだろう。彼らの犯罪行為、突き詰めていけば元凶はイシユとなる。もつと突き詰めればイシユを置いていった人たちでもあるけども、イシユは彼らを咎めることを絶対にしない。

魔物にされた人だけでなく、その関係者の人生までも狂わせている。イシユは彼女たちの行為は自分と関係ないとは言ったけども、魔物による被害の咎は受け止めると言っていた。きっと被害はあの人たちだけではないはずだ。それを今日知ったのだ。シウアンの協力が必要不可欠とはいえ、余計な時間はかけたくないと考えたのだらう。

「汝の頼み、それが後回しできるものならば、もしくは重要性が薄いものであるならば、先に私の目的に付き合ってもらおう」

イシユの問いに対してシウアンは悩まし気な表情だ。

どう答えたらいいかわからないのか、それとも重要性が薄いものだったのか。彼女は少し間を置いて、ゆっくりと話した。

「正直ね……わからないの」

「わからない? どういうことだ」

「世界樹は……あの子は眠りについた。なのにね、声が聞こえるんだ」

世界樹の巫女に聞こえる声。ということとは世界樹の声なのだろう。眠っている状態ということは寝言とかだろうか。

やっばい。寝言とかすごい重要性薄そうだ。

「世界樹が魘されてるとか……？　夢見が悪くて」

「ううん、そういうんじゃないかね。世界樹の声に似てるけど、違う声なの」

「ただ世界樹が風邪気味で鼻声なだけとか……」

「貴様、ふざけるくらいなら少し黙ってる」

「な、なんですか！　真面目に考えてるんですよー！」

話の邪魔だと言わんばかりにウーフアンに睨まれた。不満を漏らすも誰も取りあってくれない。

シウアンさえも私の抗議を無視して話を続ける。

「すごく小さく声が聞こえるの。あの子が寝静まったから聞こえるようになったのか、最近になって声を出し始めたのかわからない」

「その声が頼みと関係があるのか」

「うん……その声は、私を呼んでるの。なんで呼んでるかわからないし、私から聞いても私の声が届かないみたいで……だから、その声について調べたいの」

「その声の場所はわかるのか」

「うん。あの子が眠っている地からほんの少し離れた場所……北西、かな」

今の世界樹はあの戦いで少し移動したせいで、木偶ノ文庫の真上に位置している。そこから北西というところ……たしか山地だったような。

頭の中に絶界雲上域の地図を広げていると、ローゲルさんも話に加わってきた。

「シウアン、その場所は確かなのか？」

「え、うん。場所は間違いないよ。どういう場所かまでは、わからないけど」

「ローゲルさん、何か知ってるんです？」

絶界雲上域は帝国に近い方だし、あのあたりについては彼が知ってもおかしくはないか。

そう思い尋ねてみると、

「……人づてで多少な。あの辺りは世界樹に近いため建造物もそう多くない。だから俺が考えている場所と一致しているとは思うが……」

「勿体ぶらずに汝は知ることを話せ」

「勿体ぶってるわけじゃない。ただ、俺も半信半疑な話なんだ」

「いいから貴様は言え」

「君たちね……」

イシユとウーフアンの高圧的物言いに文句を言いたげだったが、不満を呑み込んで彼は話しだした。

「俺がまだ騎士として新米だった頃、帝国は山間に隠れるようであった建造物を発見したんだ。その当時から帝国は弱っていたため、世界樹の力を求めていた。木偶ノ文庫にはなかった情報があるかもしれないとその建造物の調査が行われた」

「それがさつきシウアンが言った場所ですか？」

「たぶんね、現世界樹……木偶ノ文庫の北西、煌天破ノ都より西に位置する場所なんだが……合ってるかい？」

「うん、そこだよー」

声の発生する場所に建造物があるとわかったことが嬉しいのか、先ほどまでと違いシウアンの声は大きめになった。

それとは反対にローゲルさんは残念そうな顔だ。その表情から予想がつく。つまりそこは、

「ローゲル殿のその顔から見るに、その場所は非常に危険ということか？」

「ああ」

まあ世界樹に近いんだから、影響を強く受けて強力な魔物がいるってのはよくあることだ。

「一回目に組まれた調査隊は帰還叶わず。二回目の調査では帰還できなかったの是一名のみ……だったそうだ」

「帝国の兵でも生還が困難というわけか……」

「勿体ぶった割に、大したことのない話だったな」

重く受け止めるキバガミさんと、鼻で笑うようなイシユの反応の違

いのひどさよ。

「この話はまだ続きがある」

「三回目も調査隊が組まれたんです?」

それはなんとも不屈な精神だ。二回目で打ち切りかなと思ったのに。

そんな私の予想に対してローゲルさんは首を横に振った。

「調査は二回目で打ち切られた。そして今後、その地には決して触れてはならないという御触れが出た」

「続きというかまとめじゃないですか」

「……二回目の調査で帰還できたのは一名だ。帝国に戻る途中に墜落した気球艇の中にいた一名のみ」

「……」

つまり、死体となつて帰還したということだろうか。生還は一名もいなかった、と。

とにかくすごい危険な地ということにはわかった。

「——そいつは石になっていた」

「石……?」

人が石になっていた……性質を変容させるものには根源的な恐怖を感じる。世界樹の呪いによる植物化と似たような恐怖。

冒険譚ものの本では石化の呪いを操る魔物なども存在する。実際に遠い地でもそういった魔物がいるらしい。だがこのタルシスでは見たことがなかった。

しかし実際は、北上すれば石化の呪いがあつたということ。

対岸にある恐怖が、急に近づいた感覚。

「石になるとは……なんとも面妖な」

「話はそれで終わりか」

「ああ。その地には、人を石にする魔物がいるとしかわからず仕舞いだつた」

「やはり勿体ぶつた割には大したことのない話ではないか」

「……誰もがお前みたいな規格外の体をしているわけじゃないっての」

石化について書いてた本はどこにあったかな。植物化と違って確か治療方法も書いてあったはずだ。もしも行くのなら事前準備として欠かせない。ハイ・ラガードの魔物に石化させてくる奴がいるかもだし、アーテリンデさんに聞くのもありかな。

「しかし、場所についてはわかったが、まだ優先度合についてはわからぬな」

「うん、ごめんね……」

「私としては、シウアンの希望なのだから最優先以外に選択肢はない」「ウーファンもふざけるくらいなら黙ってましようね？」

「貴様！ 私に至って真面目だ！」

行きたい理由が謎の声。その場所が石化を使ってくるような危険な魔物がいる謎の地。

後回しにしてもよさそうな気がしなくてもない。むしろハイ・ラガードの魔物による被害が少しでも大きくならないように、先にイシュの目的の方でもいいのでは。

「小さな声、か……シウアン殿が聞こえるということは世界樹に縁あるものの声ということではなからうか」

「世界樹ではないが、世界樹と関係するもの、ねえ……シウアン、他に手掛かりとかないのか？ なんだっていい」

「……ごめんね、何もわからないや。こんなこと初めてで……」

シウアンには悪いけど、この分だと後回しになるかな。

そんな結論に至りそうな時、ローゲルさんがふと何か気づいたように声をあげた。

「世界樹ではない世界樹関係ってなると、ここにもいるじゃないか」

「ローゲルさん？ 何言ってるんです？」

「いや、ほら。世界樹が創られた時代の奴がそこに。別の地の世界樹ではあるが、そんな具体例があるんだ。もしかしたらその声つてのも古代の関係者かもしれない」

イシュを指さしながらのローゲルさんの主張。つまりイシュと同

じように千年前の人間かもしれないってことか。

そんな例外みたいな例が何個もあるわけが……なんて否定は私にはできない。ありえるかどうか、イシュにそんな疑問の眼差しを向ければ、

「ふむ……我と同じ時代の者か。可能性もなくはない。仮に違っていたとしても、なんらかの研究資料は残っているかもしれないな」

「研究資料、ですか？」

何故に資料。イシュの時代の資料とは声を出すものなのだろうか。あ、資料じゃなくて死霊？ 科学者なのにそんなオカルトチックなことを……

「資料ってこの地の世界樹についてのかい？ それなら木偶ノ文庫から回収したものが確かあるぜ。帝国が保管しているから殿下か辺境伯の許可が必要だけだな」

「木偶ノ文庫は私の知る時代よりも後のものだ。保管されていた本の劣化から見るに、私の求めるものはない」

「ややこしくなりそうだな……そもそも資料がなんで話に出てきたんだ」

イシュってお化けとか信じるんだ。意外ー、とか思ってたら話が全然違った。やっべ。一人勘違い暴走してた。

「この地の世界樹は特殊すぎる。世界樹の巫女、声、巨人。今になってそれらがありえぬと否定するつもりはないが、あまりにも私の知る世界樹とかけ離れている」

「それでこの地の世界樹の資料が出てきたってのかい？」

「汝らは知る由もないが、世界樹の力は強大だ。それに比べ、復活した巨人の力はあまりにも小さかった」

突然巨人の力をディスプレイした。でもあなた、かなりパニックになつてたじゃないですか？ 突っ込みはしないでおこう。

「この地の研究で制御に注力した結果だと考えたが、この私の叡智を持ってしても謎が多い」

「私の叡智で」

「ゆえに、私の求める資料が残っている可能性があるのならば、調べね

ばならぬ」

なんだか急にシウアンの要望に協力的になった。話を聞いてた身としては、どこに優先度が上がる要素があったのかさっぱりだ。ただの資料回収なら後回しでもいいと思うんだけども。

「えつと……それじゃあお願い、聞いてくれるの?」

シウアンがおずおずと切り出した。さっきまで却下ムードだったのに急に乗り気になられて困惑しているのかもしれない。

「うむ。フォレストセルについてもその資料で言及しているやもしれぬ」

急に専門用語を出さないでもらいたい。

それがどういふものか聞かため、鸚鵡返しのように声をあげた。

「ふおれすとせる?」

「世界樹の二つ目の欠点だ。世界樹の力を細分化してセルを弱め、消滅したのであればよいが……結局は巨人制御も暴走していたあたり、あまり期待はできぬ」

うーむ。まったく説明になってない。いや、説明する気がないのかもしれない。

とにかくイシユにとって優先度が高い問題ということだろう。

「なんだかよくわかんないけど、いつ出発できるかな?」

「準備とかあるから……それに気球艇の問題も……」

「準備……私は何を用意したらいいかな」

シウアンの要望を受けると決めただけでも、実行に移すには壁がいくつもある件。

つていうか、あれ、今の発言。シウアンも来るつもりだろうか。

「……シウアンも来るの?」

「うん、だって私を呼んでるんだもの」

「えつと、危ないと思うけど……」

言いながら横目でウーファンを見る。

ウーファンのようなシウアン過保護勢から絶対反対されるのではないか。いや、逆にシウアン全肯定するのかな。

そんな思いを脳裏に浮かべながら見ると、彼女は頭を抱えていた。

これは絶対反対派だわ。だけどシウアンの願いだし、でも危険だし、みたいな考えから葛藤している状態だわ。

頭をぶんぶん振り回す不気味なウロビトは放っておいて、ローゲルさんが提案するように言った。

「気球艇なら俺が使ってた奴があるぜ。ワールウィンドとして使ってた気球艇がな」

「なるほど！ でも、加齢臭とか染みついてません……？」

「どうしてそうなるんだ……」

「となると、あとは準備のみといったところか。石にする魔物……拙者には皆目見当もつかん」

「その点は一度街の図書館とかで調べてみます。たしか治療方法があつたはずですから」

「おお。まことか」

治療方法を調べるのと、道具や医薬品の用意と……あとはカンテラの油も買い足したほうがいいかな。久々の冒険だ。変な忘れ物とかしたくないからよく考えないと。

とにかく調べるのにどれくらい時間かかるかわからないけど、まずは一週間と言う目途で考えよう。

「色々調べてからですし、とりあえず一週間後に出発つてことで。場合によっては延びるかもですけど」

「ああ、俺はそれでいいよ」

「拙者もそれで構わぬ」

ローゲルさんとキバガミさんはすんなり了承してくれた。

「シウアン……私が行くからやはりシウアンは里にいたほうがいいのではないか？」

「私しか声が聞こえないんだから、私が行かないとだよ」

「うう、シウアン……」

「シウアンとウーフアンもオツケーですねー」

「はーい」

「ううう……」

さきでイシユはつと。

「我もそれでよい。旅支度はすべて汝に任せている」

「あ、はい」

聞く前に言われた。

任されたことだし、過不足なく準備をやらなくては。目的地はえつと……名前あるのかな。

「ローゲルさん、その場所の名前とかってあるんです？」

「ん？ ああ、調査対象となった建造物の名前ね」

別に呼称はどうでもいいかなと思うけど、あるのならそれを使った。いつまでもあの場所だのその場所だのってのはかつこ悪いしね。

「明かり一筋通さない地で、暗黒ノ殿だったかな」

——暗黒ノ殿。

名前からして暗そうだ。カンテラを人数分、あと油も大目に用意した方がよさそうかな。

64. 暗闇の前に佇む金色の守護者

暗黒ノ殿へ行く準備の買い出しにはローゲルさんとキバガミさんにつき合ってもらった。

荷物持ちも兼ねてである。イシユ？ あの人は読書に夢中だった。石化については図書館で調べただけでなく、エスバットの人たちからも話を聞くことができた。

ハイ・ラグードでも石化をさせてくる魔物がいたらしく、タルシスほど珍しくはないのだとか。ただしやっぱり脅威度としてはかなり高いもの。

なんでも石化は皮膚の硬質化と剥離を誘発させる毒素だとかで、冒険必需品の解毒薬、テリアカβで対応が可能だとか。ただし石化は表面だけでなく心臓までも硬直している状態のため、時間を空ければ手遅れになるとか。

しかし六人分となると出費が大きい。巨人戦での報酬は気球艇ノアの修理費用にある程度とられたから、それほど爆買いはできない。荷物の重量も関わることだからバランス取りがまた難しい。

「——というわけで、こんなことになりました」

あの日から一週間後の朝一番、全員集合している中で見せたのはそれぞれの荷物とお昼用のバスケット。

準備万端な状態を見て誰も何も言わない。それほどまでに完璧な仕事っぷりだったのだろう。

そんな中、最初に声をあげたのはウーフアンだった。

「一応聞いてやる。この壺はなんだ」

「油の入った壺ですよ？」

「……これを背負って行けと？」

「言いたいことはわかりますよ。ええ、重たいです。でも他に入れるものがないんだからしょうがないじゃないですか」

水筒になんて入れてみる。洗うの大変つてのもあるけど、誤飲してしまいかねないじゃないか。

そんな気持ちを文句たらたらなウーフアンにぶつけるも、あまり彼女にはその気持ちが伝わらなかったようだ。

「貴様ら、こいつと買い出しに行った時に何故止めなかった」

「す、すまぬ。まさか冒険に使うつもりと思わなくてな……」

「俺もてつきり家に買い置きしておくものだとは……」

ウーフアンだけでなく買い出し組の二人からも裏切られるとは。

「なっ!? 私たちが行くところは暗黒ノ殿つてところですよ! 明かりは必須じゃないですか!」

「あのなあ……アルメリア、魔物との交戦がありえるんだから荷物はできる限り軽くしないといけないだろう?」

「だから軽くした結果がこれです!」

「よしわかった。俺が選ぶ。みんなちよつと待っていてくれ」

ローゲルさんが冒険者としての先輩風をびゅーびゅー吹かせてくる……

そもそも暗黒ノ殿がどれほどの広さかわからないんだから、探索範囲を広げるためにも仕方ないじゃないか……

折角六つの壺をそれぞれ紐づけして背負えるようにしたのに、一切の容赦なく解かれていく。

「カンテラ、医薬品、包帯……うわ、インク瓶多すぎないかこれ。五本も……」

「地図を描くために必要じゃないですか……瓶が割れた時用にも予備は欠かせません……」

「ナイフ、布に笛、金槌……? それにスコップつて」

「その笛はお守りみたいなものです! 金槌は……なんと、なく……?」

その白い笛は今まで何度も助けてくれた素敵アイテムなのだ。あの意味お守りとしてこれ以上ないアイテムだから人数分用意した。白い笛は外せない。

ちなみにスコップは穴を掘るためである。また誰かを叩くこと

があつた時のために、穴掘り道具として買ったのだ。サイズ縮小のため仕方なく園芸用のものだけど。

そんな私の事情などお構いなしにポイポイと鞆から外に放り出されていく道具たち。白い笛は残してくれてるみたいだけど、これでも結構頑張つて考えたのに……

「まあこの鞆はこんなものだろう。これをあと五回か……」

「私の鞆が……すごい心もとない重量に……」

体感前の三割程度だろうか。重量が。

「アルメリアっていつもあんなに入れた鞆持ってたの？」

シウアンが不思議そうに聞いてきた。

「ううん、いつもはあんまり入れてないけど……基本的に慌ただしくて用意する暇なかつたから」

「ある意味幸運だつたんだね……」

「なにその評価……」

「なんでもないよ……それより、道具について教えてほしいな。私でも使えるよね？ これとか見たことないから気になるんだ。これも医薬品？」

そういつて彼女が手に取つたものは盲目の香。医薬品ではなく危険な薬品である。

「それは盲目の香つて……攻撃用？」

「薬じゃなかつたんだ」

「他にも危ない物があるし、シウアンの荷物は香はなしにしておいたほうがいいかな」

「そっかあ」

一歩間違えれば自分たちに被害を及ぼす道具だつてあるんだから、使い慣れてない人はあまり触らない方がいい。まあ私も全然使い慣れていないんだけど。盲目の香なんて碧照での熊騒動時の一回きりだよ。他の香なんて一回もないよ。

だけどシウアンより遥かに先輩冒険者としてそんな情けない態度は見せるわけにはいかない。

盲目、麻痺、睡眠、毒の香。それぞれ一つずつあるけども、まあラ

ベルが貼ってあるからよっぽど慌てない限り誤使用なんてないだろう。

ローゲルさんの荷物整理が終わるまでの間、シウアンが使っても問題なさげな道具。主にメデイカやネクタルなどの医薬品の説明を行いなから待っていた。

「だいぶ軽くなったもんだろ」

おおよそ一時間ほどしてから、そんなことをローゲルさんが言いだした。その言葉通り、人数分用意していた鞆は軽いものとなっていた。私としては心配な軽さだ。

「それじゃあ、行こう！ みんなよろしくね！」

やっぱりもう一度荷物を見直しませんか、という前にシウアンの出発宣言が入ってしまった。

まあこれ以上悩んだって仕方ないかもしれない。いくら考えたってわからない場所の対策なんて、実際に体験してみないとだ。

移動手段はローゲルさんの使っていた気球艇。正直言うともあまり良い思い出のない気球艇だ。

絶界雲上域につく時間は丁度お昼頃。昼食を取ってから暗黒ノ殿の調査に入る形になる。

あれ？ ていうか絶界雲上域はタルシス冒険者の探索範囲内にもうなっているけど、そんな怪し気な場所の噂話なんて聞いたことない。

ローゲルさんの気球艇ということで、現在運転中の彼に聞いてみることにした。イシユは甲板からの景色を静かにじっと見つめているだけだった。

「そういえば暗黒ノ殿って他の冒険者からは話を聞いたことありませんけど、見つかりにくい場所なんです？」

「ん？ そうだなあ。単純に封鎖されているから見つからないだけだろう。金鹿図書館という施設があつて、その最奥の扉が暗黒ノ殿に近づく唯一の道なんだが……まあ調査打ち切りによつて嚴重に封鎖

「されているな」

「ほへー」

「幾重にもなっている鎖を破壊できるような奴は他の冒険者にはいないだろう」

「あ、そういうことですね」

「ああ、あの馬鹿力ならなんとかなるはずだ」

今もじーっと景色を眺めているイシュに期待だ。

それにしても今日はやけに静かである。不気味なほどに静かだ。お喋りな気質ではないけども、何かと主張してくるタイプなのに、なんだかアンニユイ。

「イシュ」

とてとてと近づいて声を掛けると、何の用だとばかりに振り向いてくれた。心ここにあらずという状態にはなっていないかったか。

「何か考えてたんです?」

「なんのことだ?」

「いえ、イシュがじつと景色を眺めてたんで気になって」

横に立ってイシュがさっきまで見ていた方角を私も見る。目を引くものといえば、大きな滝があるだけだ。風馳ノ草原は他に見どころが特にない。やっぱり北の世界樹ぐらいか、観光名所となりえるのは。

「我の目的が成就するのも近い。ゆえにこの地の自然を見納めていただけだ」

「気が早いですよ。シウアンの頼みをまだできてないんですから」

「確かにそうだ」

……見納め、か。

やっぱりイシュはハイ・ラガードに戻ったらタルシスに来るつもりはないようだ。まあ予想通りっちゃ予想通りだし、だからこそこちらから出向けるようにハイ・ラガードへの帰還についていくのだ。

再びイシュは景色をじつと眺め始めた。滝や森、空に河。その目が映すものは自然ばかり。

「イシュ」

「む？」

また声を掛けるところこちらを見てくれた。

「私はゴンドラの中に入ってますね」

「うむ」

わざわざ言わなくても良かったけど、声を掛ける切欠として言った。

「待て」

「はい？」

ゴンドラへと向かおうとしたら、呼び止められた。

「汝に問いたいことがある」

「はい？ なんですか？」

イシユが私に聞きたいこと？ それは私に答えることができるものだろうか。

どんな質問が来るのだろうと考えていると、思わぬ質問が来た。

「汝は我を殺すことができるか」

質問の意図が全く分からない。

何故突然そんなことを、それはどういう意味なのか。力量的な話なのか、それとも心情的な話なのか。

私の力はイシユより遥かに劣る。そのため力量的な意味なら無理だ。

さらに私はイシユのことをまあ、好意的に思っている。だから心情的な意味でも無理だ。

答えに詰まる私にイシユは、

「……くだらぬことを聞いた。もう良い、ゴンドラへ行くがいい。我はここで景色を見ている」

答えを待たずにまた景色を眺め出した。

ゴンドラの中ではキバガミさんの薬について教えてもらっている

シウアンと、講師役のキバガミさんを羨まし気に睨むウーフアンがいたのでなんだか肩の力が勝手に抜けた。やっぱり皆いつも通りのようだ。

絶界雲上域。その中央にはあの日生まれ変わったとも言える世界樹が鎮座していた。

もうすぐということもあり、今はローゲルさんを除いて全員が甲板に出ている。

「木偶ノ文庫にはもう入れませんねこれ」

巨人との戦いの場が最もやりやすかった位置が丁度入口の真上だったのだ。そのまま決着もついてしまつて木偶は完全に埋まつていた。

「手段がなくはない。煌天破ノ都から行けばよい」

「樹海地軸ですか……使える人がかなり限定的なような……」

「行先の変更をしないのであれば触れるだけで起動する」

じゃあ誰でも使えるのか。まあ木偶ノ文庫に行く用なんてあんまりないと思うけど……あ、資料探しとかならありえるかな。

私とイシユが世界樹に呑まれた木偶について話していると、世界樹がすぐそばにあるのにシウアンは違う方角を見ていた。その方角は世界樹よりも北西。

「シウアン？」

「……」

「シウアン、また声が聞こえるのか？」

心配げなウーフアンの問いかけに、静かに頷いて応える。場所は間違いないということが改めてわかった。

「距離で言えば近づいたわけだが、その声の内容はわからぬままであるだろうか？」

「……うん、やっぱりとても小さな声で、呼んできるとしか」

「物理的な音ではないのだ。距離など関係ないだろう」

声は変わらず呼んでるだけ。聞こえるのはやっぱりシウアンだけ。世界樹と関わりがある何かだろうかやっぱり。

北西の山間の前にある建造物、金鹿図書館に気球艇は近づいていく。

時間は正午。お腹の空き具合的にもお昼ご飯を食べたい。探索開始前の今以外に時間はないだろう。

「お昼を食べてから行動開始しません？ 時間的にも丁度いいですし」

図書館じゃ飲食禁止ですし、そう切り出しながらバスケットを見せる。中は安かった南瓜のサラダと固くなりかけている黒パンだ。

昼食を取ることに関しては誰からも反対はあがらなかった。ただ南瓜サラダの見た目には微妙な反応をもらった。糸状の果肉についての文句を私に言わないでほしい。

そんなわけで、金鹿図書館からやや離れた見晴らしのいい原っぱで、気持ちだけピクニック気分にお昼ご飯。魔物が来たらすぐに対応できるように全員武器もそばに置いてある。

「それにしても、この地は図書館が多いのだな。何か理由があるのか？」

食べながらキバガミさんがそんな疑問を口にした。固くなりかけなパンも平然と噛み千切るあたり、顎の筋力すらすごそうだ。

「俺も理由はわからん。どれも古くからあるものだからな。何を思っ
てあちこちに図書館を造ったのやら……」

「ローゲルでもわからないんだね」

「シウアン、ローゲルでもではない。ローゲルだからわからないんだ」
「俺は学者連中と違って肉体労働派なんだよ……」

掘ねたような物言いのローゲルさんは置いておいて、実際図書館が多いのはよくわからない。木偶ノ文庫、金鹿図書館、会合に使われた南の聖堂、あと私たちは行ってないが、南西にも図書館があるらしい。とにかくわかってる範囲内でも四つも。それがどれも古くからあるなんて。

「よっぼど昔の人は本好きだったんですかね？」

昔の時代を知るイシユに聞いてみた。

「私の時代では本がないわけではなかったが、機器にデータとして取り入れての保管が主だった」

「ふむふむ?」

「……図書館を乱造するような時代ではなかった。そもそもこの地の図書館は私の知る時代より後の時代に造られたものだ。我が知る由もない」

理解してまずよ風に頷いていたら結論をサクツと言ってくれた。結局図書館があちこちにある理由は考えてもわからないということになる。

「そういえばローゲルさん。なんでここって金鹿図書館って名前がついてるんで……あ、やっぱりいいです。どうせ知らないでしょうし」

「金色の鹿の魔物がいるからだよ」

「答えたただなんて……」

金色の鹿がいる図書館だから金鹿図書館。そのまんまだ。

「金色の鹿か……」

「ウーファン?」

「いや。金の鹿は不吉の象徴と長老から聞いたことがあったのだ。それをふと思いだしてな」

「へー、金色なのに。富みの象徴とかじゃないんですね」

「金色だからこそだ。金色の竜も不吉なものとして扱われていたのだからな」

「あー……」

雷竜を言われると確かに。あの竜は呪いと雷の竜。確か夢に出てくると衰弱してしまうんだっけ。夢見た人が。

「金色は栄華を表すのに良いと考えるが……」

「イシユは金色好きですもんね……」

「ま、そいつの好みはともかく、帝国では金色は警告の色と言われているな」

「警告?」

「ああ、まあ理由については俺も詳しくないが」

「まあローゲルさんですしね、そつすよね」

「糞生意気になりやがって……」

とにかく金色はあまり良くない色、か。

これから行く先を考えると、できることなら金鹿とは遭遇せずにありたいものだ。迷信を信じるわけじゃないけど、不安な種は少ないほうがいい。

昼食を終えて、いよいよ図書館へと入る。

中は木偶ノ文庫よりは小さいが、似たような静謐な空気。大量に並ぶ本棚。棚にかかる蔦や草。

進むと吹き抜けのような広間に出た。上だけでなく、下にも吹き抜けである。地下でもあるのか、それとも地崩れか何かで大きな穴が開いたのか。

そしてその穴のそばに、金色の鹿が悠然とこちらを見ていた。

……不吉の象徴、見つけちゃったよ。思いつきり目があっちゃったよ。

施設の名前に付けられるような魔物。となれば強力な奴だろう。自然と緊張感が高まる。

武器を構える私たちを確かに見ているはずなのに、鹿は動かない。

「……じつとしますね」

「ああ、近づかない限り襲ってくることはないらしい」

平然とローゲルさんが言った。

それをもつと早く言ってくれ。

それにしても近づかない限り無害ってことかな。強い魔物の中にはそういうのも結構多い。自分のテリトリーを侵されない限りは基本的に無関心な魔物。あの鹿もそのタイプなのだろう。

「邪魔するわけでないなら放っておいて問題ないだろう。暗黒ノ殿へつながる道はどこだ」

「西にあるらしい」

魔物への興味がもともと薄かったイシユとローゲルさんのやり取

り。場所を聞くやいなや、我が物顔で西へ西へと進んでいった。それに追従するように私も急ぐ。

金鹿はただじつと、私たちを見つめているだけだった。

西は浸水でもしているのか、一部濁った水たまりがあった。

あの鹿の水飲み場だったりするのだろうか。ということはここはテリトリーの範囲内？

床をよく見ると、鹿のものと思しき蹄跡がある。給水に来た時にばったり出くわす可能性があると考えると結構危ないポイントだ。

ん？

水たまりに何かがある……小さい何か。

「……なんだ、ザリガニか」

「どうしたの？」

「あ、いや。あそこに何かいるなーって思ってたんだけど、ただのザリガニだったよ」

「アルメリアって意外に色々見てるんだねー」

「意外についてどういうことかなシウアンや」

冒険者として注意深さは大事なのだ。意外でもなんでもないやい。

ザリガニは放置して、そのまま奥へと進む。するとやがて、鎖で厳重に封鎖された扉を発見した。

その扉を小突きながらローゲルさんが言う。

「イシュ、君の無駄に有り余った力で壊せないか？」

「我が体に無駄など一つたりともない。そこをどけ」

無駄がなさ過ぎてスレンダーな女の子体型ですもんね。

そんなことを思いながら眺めていると、バキンと大きな音が何度も鳴り、そのたびに鎖がひとつ、またひとつと千切れていく。

普通の人には絶対にできないよあんなの。辛うじてキバガミさんならできるかな。

「……この先にいるんだね」

扉が解放されていく様子を見ながら、シウアンが小さく呟いた。

声の存在をかなり気にしているようだけど、一体どうしてそこまで気にするのかよくわからない。呼ばれてたら気になるつちや気にな

るだろうけども。

最後の鎖が千切れると同時に、扉が勢いよく開く。

開け放たれた道の奥にはまだ本棚の壁が続いているが、そこから風が吹いていた。

これで進めると思った時、

——背後から、蹄の音が聞こえた。

「っ！」

「シウアン！ 下がってろ！」

すかさず刀に手を添えて臨戦態勢に入るキバガミさんと、シウアンを庇うように動くウーフアン。

遅れて私も下がりながら短剣を抜き背後の存在を見やる。

そこにいたのは、金色の鹿だった。

襲いかかる様子もない。ただ何も言わずにそこに立っている。

近づかなければ無害。この距離はまだセーフということか。キバガミさん以外がじりじりと後退するのを確認してから、彼自身も下がり始めた。

距離を取りだす私たちを鹿はただ見ている。

やがてその場に体を伏せだした。伏せている状態でもただじつと、私たちを……いや、扉を見ている？

「……ローゲルさん、この鹿、どういう習性なんです？」

「……知らん」

「放っておけ。ついてくるようであれば始末すればよい」

イシユの言葉通り鹿を放置して、扉をくぐり抜ける。

最後まで鹿は静かに眺めていた。

65. 暗黒の中から覗くは惨劇の瞳

金鹿図書館の最奥の通路を抜けた先は、高い山間に囲まれた陸の孤島のような場所だった。

周囲の山によって日照時間は非常に短いのだろう。周辺の草木は高く伸びず、這うように広がっている。

まだ正午を過ぎて少ししかしていないというのに、影が差すその場所には建築物が一つあった。

絶界雲上域にある他の建築物とは明らかに違う色合の建物。これも遙か昔に造られた物なんだろうけど、色だけでなく雰囲気も、形状も、大きく違う。

「これが暗黒ノ殿か……帝国の調査隊を呑み込んだ施設……」

ローゲルさんが無表情に呟く。調査隊が全滅したことに対しての義憤はそこになく、かといって未知の場所に対しての冒険者の好奇心もそこにはない。ただ冷静に観察するような目。

「……うん、この中から聞こえる」

「それならば行くしかないな。シウアン、私から離れないように」

シウアンとウーフアンは気を引き締めるように杖を握り直した。

「……嫌な空気よ」

「キバガミさん？」

「ム、すまぬ。拙者としたことが、少し吞まれてしまった。イクサビトの勘とでも言うのか、邪悪なものが潜んでいる気がするな」

その感覚はなんとなくわかる。

この建物は今までの場所と明らかに違う。

さつきから聞こえるのだ。

低く唸るような音が、この建物からずっと。なんの音かよくわからない。シウアンにのみ聞こえる声のような、物理的ではない音でもない。空気の震えが音となつてずっと鳴っている。

「イシユ、この音ってなんでしようね……」

わからないことがあれば、ついついイシユに聞いてしまう。知識についてはがんがん頼りたい今日この頃。

「……」

「イシユ？」

イシユは答えず、ただ暗黒ノ殿を見つめている。心なしか、目を見開いているような気がする。

何か、発見した……？

「……イシユ？ どうしたんです？」

「シウアン、この場所で本当に間違いないのだな」

「うん、ここだよ」

確認するような問いかけ。

一体この場所がなんだというのか。黒い不気味な場所は何か重要な意味合いがあるのか。

「ここは何なんです？」

スルーされたけど気を取り直して聞いてみる。

今度は答えてもらえた。

「……この地の、かつての避難用シェルターのひとつだろう」

避難用シェルター。

名前から察するに、緊急時の避難場所。大昔のがここに。しかし山間に囲まれているから土砂の危険とかなりそうだけど……それくらいじゃ平気な丈夫な造りなのか。

「シェルターねえ……それじゃ、さつきから聞こえてるこの音はなんなんだい」

ローゲルさんがさつき私が言った疑問を口にした。

「空気の浄化装置と換気口が同時に動いているのだろう」

「空気の浄化？」

「かつては空気までも汚染されていたのだ。シェルターに浄化装置は備え付けられている」

それじゃ謎の生物の呼吸音とかではないのか。ちよつとほつとし

た。

「……」

「イシユ、何か引つかかっているんですか？」

「……ここはあくまでシエルターだ。世界樹計画の研究施設とは言い難い」

「えつと……ここには研究資料とかはないってことですか？」

「……この規模のシエルターならば、それなりの人数の科学者もいただろう。だが世界樹計画はシエルターに内蔵されるような研究機関では不可能なはずだ」

つまり、研究資料はあるけど、それは世界樹関係の資料ではないってことかな。

ということとはイシユの求める物はここにはないということか。

「しかし、世界樹の巫女が聞こえる声から……予定通り調べるしかないか」

「それじゃとにかく行きましようか！」

「うむ」

やっぱり探索やめるとってわけじゃないようだから、中に入って色々調べるコースだ。

不気味だったけど、ただの避難場所だとわかった途端に不気味さは結構薄れた気がする。要するに罠はないのだ。あるとしたら魔物の脅威だけ。

魔物の脅威……

避難用シエルターなのに……？

それは何か変じやないか。

避難用シエルターは害から守るために、安全な場所のはず。現にこの建物もかなり丈夫そうな造りだ。どこかに大穴が開いているようには見えない。

避難用シエルターから人が出ていって、その後魔物が棲みだした？ それも何かおかしい。外でまた何かがあった時、避難場所として残しておくためにも管理はそれなりにされるものではないか。

用が無くなったから開けっ放しで放置するなんてまずありえない

だろう。

帝国の調査隊が全滅したということは、その時点で魔物が棲んでいた。それより前の記録はないけど、とにかくそれよりも前に魔物が発生していた。

引っかかりを覚えている間にも、暗黒ノ殿の扉は開かれていく。錆びついているのか、金属を絞め殺すような耳障りな音を大きく立てて。

「……中の空気は清浄のようだ」

「マジかよ」

「空気清浄が問題なく可動しているためだろう」

中にまず入ったイシユが言った。

ローゲルさんはてつきり埃や菌類の胞子で空気が悪いイメージを持っていたのだろう。鼻をつまみながらそつとイシユに続いていく。

「って暗いな……暗黒ってそのままの意味とはね」

「早速カンテラの出番だな。アルメリア殿の準備の良さに感謝せねば」

「キバガミ、こいつに妙な気遣いはしないでもいい。こいつは闇雲に準備しただけだ」

「んなつ!?!」

キバガミさんの言葉に内心ドヤってたらウーフアンのこの物言い。しかし本当に真っ暗だ。扉から差し込む光以外は全く見えない。その光さえも、山によって影となった弱い光なのだから酷いものだ。

キバガミさんがカンテラに火を灯して周囲を照らす。

「ひっ……!」

照らされた光景を見て、シウアンが悲鳴を漏らした。咄嗟にローゲルさんがシウアンの口を手で塞いだ。

「シウアン、落ち着くんだ。大声を出しちゃいけない」

「――」

シウアンは、ゆっくりと頷いた。

それを見てローゲルさんも手を離す。

周囲は濁きこびりついた血痕が広がっており、バラバラに刻まれた

血染めの鎧、兜、石像の腕が落ちていた。

「ウーファン殿、周囲に魔物の気配はどうだ？」

「……離れた場所に何体かいるな。ただし、空を飛んでいるやつは感知できない。気休め程度の情報だ」

「あいわかった」

この石像の腕……たぶん元は人間の腕だったんだろう。

石に変わりつつある体でここまで逃げて、そして刻まれたのか。

「……帝国の者たちだな」

「鎧姿のはやっぱり帝国のなんでしょうけど……この石像のもですか？」

ローゲルさんに辺りを警戒しながら被害者の姿を調べる。

バラバラになった鎧と違い、私が示した石像はだいたい形を保っている。喉を両手で押さえながら苦しそうにしている人間の石像。その姿は鎧ではない。学者のような服装だ。

「ああ、調査隊の一人だな。襟もとの紋章が帝国のものだ」

「……冷静ですね」

「ああ、取り乱せば死に繋がる。俺がこれまで生き延びてきた理由の一つだよ」

理屈はわかるけど、その通りに実行するのは難しい。

それにしてもこの石にされた人……

「石化毒はガス状のものだな」

「ですね」

やった。イシュと同じ答えに辿りついた。

毒の形状がわかったことは大きい。ガス状、というか呼吸器系に入りこむタイプ。

「換気口が可動してなければ石化毒で満ちていたかもしれぬな」
「……うげえ」

「破壊された鎧から見て、鋭利な武器を持つ魔物、ガス状の石化毒の魔物がいると見てよい。魔物と遭遇の際は空気も注意して動け」

空気も注意……だけどどうも暗いと難しそう。

暗闇の中、キバガミさんとウーファンがカンテラを持ちながら探索

を進める。

全員がカンテラを持ちだすと咄嗟の時に対応が難しくなるため、そして明かりを持つ以上狙われやすい危険性もあるからだ。

キバガミさんは武の達人らしく、片手がふさがっていても対応可能らしい。ウーファンはそもそも敵の接近にいち早く気づけるため、そして武器の関係上カンテラを持っていても問題ないとか。

私も武器が短剣だからカンテラ候補であつたけど、地図を描くためにはちよつと邪魔なのだ。

血みどろの道を歩く際、精神安定の役割を買うのは地図である。描いている最中はなんだか心が救われるようだ。

「それにしても……歩きやすい道だな」

ローゲルさんの言う通り、今まで旅してきた場所と比べると本当に歩きやすい。まさに人のために作られた道だ。というか廊下だこれ。「シエルターですしね。獣道だったり自然の洞窟とかと比べたら歩きやすいのは当然ですよ」

「それもそうか……ところでイシユ、ズカズカ進んでいるけど道がわかつてるのか？」

隊列の先頭を歩くイシユのペースは結構早い。

ちなみに最後尾はキバガミさんだ。

道がわかつてなくてもイシユは常にズカズカ歩いていくタイプなので、その質問は無意味である。だってイシユも初めての場所なのだから。

だからこそ私の地図描きがすべてを握ると言っても過言ではない。

地図は偉大である。

「当然だ。この先に配電盤がある。まずは明かりを確保する」

「……へ？」

「む？ 聞こえなかったか。道に問題はない」

「え、いや。道わかるんです？」

いきなり私のアイデンティティが揺らぐ事態。いや、そんなまさか。わかるはずがない。

「天井の電線を伝って進めば問題ない。そこまでの道はわかる」

「なん……と……」

「ま、よくわからないけどそれなら道は任せたよ。道中の地図は俺も描いておくさ」

「まずい。」

私も描いているのにローゲルさんのこの発言はまずい。私の個性を殺しにかかっている。

「魔物が近づいてきている。二体、奥からだ」

魔物の接近をウーフアンが知らせた。

奥からと言うことは接敵は避けられない。印術の準備を行う。

暗闇から見えてきたのは二体の土竜だ。鋭く長い爪を携えて走り寄る。

だけど見える前から来るとわかっていたのだ。準備はすでにできている。

火球の印術を迫る土竜のうちの一体にぶつける。

もう一体のほうはイシユが斬るだろう。そう思っていると別の攻撃が土竜に当たった。

それは氷の槍。

え？ 氷槍の印術……？

あれ、誰もそんなの覚えてないはずなのに……印術はこのメンバーの中で地図以外の私のアイデンティティで……

「ウーフアン、今のって印術？」

「ああ、実戦で使うのは初めてだったが、うまくいった」

「おやあ？」

「私も攻撃手段を覚えなくてはと思っていたからな」

「あれからも己を磨いていたわけか。お主の向上心もなかなかのものよ」

「他の印術も使えるのかい？」

「氷の術式は一通り使えるようになった。だが十全に発揮できそうにないがな……」

「今の分じゃ充分だよ。な、アルメリア」

「……………そっすね」

私は黙々と死んだ土竜の魔物から爪を剥ぎ取って鞆に入れた。

やがて小さな小部屋の中に私たちは入った。

なにやら黒い管のようなものがいっぱい繋がった箱があり、それをイシユが弄りだす。

やがてガチリという音とともに振動音が響きだした。

「……わ。明かりが」

明かりがついた。しかし、

「ないよりましかけど……思ったより明るくないな」

「主電源はすでに死んでいた。緊急時用の施設電源でのものだ。仕方あるまい」

壁に掛けられていたランタンのようなものに光が灯ったけど、本当になによりマシって程度のものだ。薄暗い赤い明かりが周囲を照らしてくれるけども……

「お……」

「ローゲル殿、どうされた？」

「ああ、ちよつと気になるものがここにね」

「どうしたんです？」

ローゲルさんが示したものを、それは地図のようなものだった。

「このフロアの地図だな」

「また私のアイデンティティが……」

「？」

「ご丁寧に現在地っぽい印までついている、この地図。」

文字はだいたいぶ汚れて見えづらいけど、さらに言えば古代文字。辛うじて読めるのは『食堂』『居住エリア』……？

食堂や居住エリアって、本当にただの避難用施設なんだここ。

「地図は書き写せたか」

「あ、はい」

「ならば行くか」

もうこの小部屋に用はないとばかりに廊下に出る。廊下にも点々

と赤いランタンが壁に掛けられているため、明かりに困ることはそれほどない。

イシユは地図を覚えたのか、相変わらず先頭をズカズカと歩いていく。私はというと地図が間違っていないか確認しながらの追従だ。

進行方向的に食堂のそばを通る、いや、通り抜けるかなこれ。

「……この先に強い魔物がいる」

ウーファンの忠告を証明するように、石像が並んでいる。

鎧を着こみ剣を構える騎士も、羊皮紙を握りしめた学者も、どれもが例外なく石になっている。

「……ねえ、この人たち。何か変じゃない?」

「シウアン、何か気づいた?」

何か石像に気になる点があったのだろうか。些細な気づきでも重要な情報に繋がる可能性がある。

「入口にいた人たちと違って、逃げる間もなく石にされたみたいに見える……」

言われて確かにと気づく。

騎士も学者も、表情がわかるものは恐怖で歪んでいるか、何かに驚いている顔だ。入口の人のように苦し気にはしていない。何か恐ろしいものを見たのか、そのどれもが前だけを見ている。

石化を扱う魔物はもう一種類いるということだろうか。

それも一気にこの数を石にするような、そんな存在が。

「もうすぐ見えてくる。石化させる魔物かはわからないが……」

「はい」

ウーファンの言葉に、前方を注視しているとギョロリとした黄色い三つの眼を携える青い顔の羊が見えた。

突然見えた不気味な顔に驚く前に、妖し気に瞳が輝いた気がした。

その瞳を私は見て――

「ぶはあ！」

「良かった！ アルメリアも気づいたよ！」

「は、はい……う？ え……う？ な、なに？」

シウアンが心底ほっとしたかのように、安心した表情を浮かべている。あれ？ さつきまで羊が。というかなんかすごく私の息が荒い。息を無意識に止めていたのだろうか。しんどい。

「さつきまでアルメリア、石になってたんだよ。本当に良かった。元に戻って……」

「え……う？」

もしかして目があったあの一瞬で石に？

周囲を見渡すと、頭部を抉られた先程の羊っぽい魔物の死骸が転がっていた。

「ローゲルがね、砲剣でやつつけたの」

「ドライブだっけ。改めてすごい威力……」

頭部を消し飛ばしてるじゃないですかこわー。

「お、アルメリアも気づいたか。良かったよ」

「あ、どうやらお手数お掛けしたようで……」

「そう落ち込まなくていいさ。俺とシウアンはたまたま影になっていだから石化を逃れられた。言ってしまうえば偶然だよ」

そっか。ローゲルさんとシウアンだけが被害にあわずか。全員やられてたら……ん？ ローゲルさんとシウアンだけ？

「え、イシユも石に？」

「ああ、見事に石に。あっち見てごらん」

言われた方角を見ると床を見ながらなにやらブツブツ呟いているイシユの姿が見えた。

そつと近づいてみると、

「この我が石化毒などに、いや、あれも進化の一種。毒も変化していく

ため私の作り上げた皮膚に影響を及ぼしたただけだ。私の体は無敵なのだ。今回が例外中の例外に過ぎない。そもそも神経に影響なく皮膚を硬化化するなど順序がおかしいのだ」

落ち込んでるや。

「なかなか面白いだろう？ こいつにも落ち込むことってあるんだな」

「まあ、時折ありましたし……」

落ち込んでいるイシユはともかく、キバガミさんやウーフアンも無事なようだ。

目を合わせただけで石にする魔物の脅威度を記すために、手帳にうる覚えながら羊の魔物について書くことにした。

66. 心は見えない声に導かれ

ウロビトの里では、私だけが人間だった。

アルメリアたちが来てから、人間の街を知った。

人間の街で私は、普通の人間とは少し違うと知った。

みんな、お父さんやお母さんがいる。

でも私にはいない。

育ててくれた里の皆が親といえはそうだけど、特にウーフアンはお母さん……というよりお姉ちゃんかな。とにかく、私には産みの親というものがいない。

10年ほど前、私は深霧ノ幽谷の奥にいた赤子だった。それを拾ったのがウーフアンだ。

私にはみんなのようなお父さんやお母さんはいない。

だけど寂しくはなかった。ウロビトのみんながいるから、と言えたらよかったけどウロビトは私を巫女として扱うし。寂しくなかった理由は、きつと世界樹と話すことができたから。世界樹とつながりがあつたから。

いつだってあの子とつながりを感じれた。まるで他人ではないよな。

あの子は私の話を聞いてくれた。私のお願いを聞いてくれた。

いつだって、私のことを支えてくれていた。

ウロビトのみんなに教えられて、世界樹の声が聞こえる巫女だとかだった。

アルメリアたちに外の世界を見せてもらって、世界樹の巫女は世界樹の心だとわかった。

世界樹の心だとわかった時、納得と安心感があつた。

私は世界樹と、一心同体の存在なのだ。

たとえウロビトのみんなやタルシスのみんなと、産まれ育ちが違っても、私は世界樹という家族がいる。孤独になることは絶対はないの

だと。

——そう、思っていたのに。

先に進めば進むほど、石にされた犠牲者の数が少なくなってきた。正直あまりジロジロ見たくはないけど、犠牲者の姿もヒントになり得るからとアルメリアに言われたから私も注意深く観察する。ウーファンはそんなことしなくていいって言ってくれたけど、私がお願いでここにたづねてきてもらったんだから、少しは役に立ちたい。

この辺りは苦しんだ表情の石像がないみたい。羊の魔物を倒したから少しは安全かもってローゲルは言ってた。

壁に掛かるランタンに照らされた暗闇の廊下を歩いていくと、広い部屋に辿りついた。

部屋の入口には『食堂』と書かれている、らしい。イシユとアルメリアはここに書かれている古代文字が読める。二人とも全然凄そうに見えないのに、あの戦いの時といい知識といい実は結構すごいんだって改めて実感した。

足を踏み入れると、ほのかに暖かな香ばしさがどこからか漂ってくる。

誰かがいるのかな。でも、そんな風には見えない。いるとすれば魔物だけだと思うけど……

じゃあ魔物がこんな香りを出しているのかな。調理できる魔物とか？

「香りの元……調べるか？」

「この先は突き当たりだ。行く意味はない」

キバガミの方角を示しながらの提案に、イシユは却下した。

何があるかわからないまま進むのもなんだかこわい。けども何があるかわかって薄気味悪さが付きまといそうで、何が正解か全くわからない。想像していた冒険と全然違う。

いくつもの机が並ぶ食堂の中を歩き進む。壁には文字が書いてあった。

やっぱりこれも古代文字。アルメリアに内容を教えてもらおうと『一日一食まで』

ここでの決まりだったのかな。でも一日一食だけとは健康上問題がありそう。

「……また石にされた者たちか」

ウーフアンがうんざり気に呟いた。犠牲者の気は感知できないもんね。私も手伝えないかとたまに気の感知を試みているけど、魔物以外の気は見つからない。

今度の石の人たちは苦し気な表情だ。入口の人たちと同じ、ガス状の石化毒の魔物が原因。その魔物とはまだ遭遇していないから怖い。飛ぶ魔物だったら近づいてきても気づけないかもしれない。さつきみたいに、皆が石になったらと思うととても怖い。

「……帝国の調査隊じゃないな。彼らは」

ローゲルが石を見て言った。

「調査隊じゃないってことは……ここに住んでいた人たち？」

「かもな。とても戦いに赴く服装じゃない。一般人だったのかもしれない」

「ひどい……」

ただ普通に生活していた人も石にされるなんて……

「……アルメリア、この文字は読めるか？」

「はい？」

倒れ伏した石の犠牲者のそばをしゃがみこんでいたウーフアンが、アルメリアに床を示していた。

私も横から見ると、そこには黒いインクで文字が書かれていた。石に変わりゆく中、最期の力を振り絞って書かれたメッセージなのか

も。

「文章……じゃないですねこれ。えつと……『蟲 失敗 開けるな』とだけ」

「その蟲が原因でこの惨状ということであろうか……」

「いや、それならば開けるなどは書かないだろう。何かに襲われている最中であつても、その蟲というのがより脅威なものだと示したかつたのかもしれない」

何があつたのか、やはり想像がつかない。

遺された文字から色々と考えていると、奥を見てきたローゲルが声をあげた。

「おい、あつちの部屋に日記があつたらしい」

「日記？」

「ああ、イシュが今読んでるんだが……俺が頼んでも内容を教えようとしなからな。アルメリア、君からも頼めるかい」

「あ、はい」

アルメリアがいくつも扉が並んでいる廊下の元へと進んでいく。私はどうしよう。ウーフアンはあまり離れるなつて言つてたけど、イシュが見つけた日記が私も気になる。

うん、ウーフアンからは離れるけど、アルメリアから離れるわけじゃないしついていこう。

「シウアンも日記が気になるの？」

「うん、それに……あんまり石にされた人たちを見たくないから……」

「……じゃ、一緒に聞こっか」

開けられつぱなしの小さな部屋の中には、三段ベッドがあり反対側の壁には本棚、そして小さな机と椅子。イシュは椅子に腰かけて日記を読んでいた。

「イシュ、何か気になることが書いてありました？ ローゲルさんがすごい気になりましたよ」

ローゲルの頼み通りアルメリアが尋ねた。たぶんアルメリアも他人の日記が気になつてるんだと思う。他人の日記を見ることはいけないことだけど、頼みごとだからしょうがないんだつて言い訳を用意

してそう。

「……この地で世界樹の力が発現した回数。前回の戦い、聖樹の護り、この二回だと我は考えていた」

日記には世界樹のことが書いてあるんだ。力の発現回数についてイシユは言いだした。

「二回じゃなかったんですか……?」

「前回の戦い、聖樹の護り、そして千年前の世界樹計画。恐らくこの三回だ」

三回もあつたんだ。全然知らなかった。

世界樹はあまり多く語ってくれない。いつも眠っているからというもあるけど、自分のことを教えてくれたりしないから。

だけどそれが不満に感じたことはない。私は世界樹の巫女、世界樹の心だから。あの子とは繋がりがああるから不安なこともない。

「我は発現した巨人の力を小さいと言った」

「そうですね」

あの子の力が小さいと言えるなんて、イシユがいた時代はすごかったんだ。

でもあの子の力は私の呼びかけで抑えられていたっていうのも一応あるけど……別にそれは言わなくてもいいかな。

「模造品だった」

「……はい?」

模造品?

唐突に出てきた言葉の意味を理解する前に、イシユが言った。

「汝らが見てきた世界樹は、世界樹を模して創られた贗作だ」

——ひとつ、私が信じてきたものに、ヒビが入る音が聞こえた。

「へ? いや、でもあの力はイシユも世界樹の呪いだって言ったじゃないですか」

「我も始めは制御のため力を抑えられた世界樹だと考えていた。だが

そうではない。力の発現を終えた世界樹をベースに創られた劣化コピーだ。人間に制御のしやすいように、調整された代物だ」

世界樹が、世界樹じゃない……？

じゃあ私はなに？ いや、あの子が世界樹じゃないとしても、私とあの子の繋がりに何も関係ない。ちやんと事実を受け止めないと。私の我儘でみんなにここに来てもらったんだ。そこで知ることを、私は知らないといけない。

イシユは私を見て、さらに話しを続けた。

「世界樹の心、それも奇妙な話だった。世界樹の意思を、声を聞くことができる巫女。その巫女が世界樹の心とはどういうことか。世界樹の意思と世界樹の心は別々にある。では世界樹は意思を二つ持つものなのか」

「え、あ……ここ、心と意思は別のものなんじゃないかな……」

「世界樹の心を巨人に組み込み、巨人の制御を行う。世界樹にあった意思を呑み込み心を使つての制御。力関係が明白だった。その理由は――」

事実を受け止めないといけない、はずなのに、イシユの言葉を聞きたくない。

この話は世界樹の正体についてだけでは止まらない。私の根幹を、支えを揺るがすものだ。私がこれまで継ってきたものを壊すかもしれないものだ。

「汝が本体の世界樹から創られた心であり、模造品の世界樹は本体の指示に従っていただけだ。つまり、汝は汝らの知る世界樹の心ではない。別の世界樹の心だ」

そんなこと、ない。

だって世界樹は、あの子はいつだって私の話を聞いてくれた。私のお願いだって聞いてくれた。だからみんなから呪いを払ってくれた。

私のお願いを……

——『本体の指示に従っていたただけだ』

私の話しを聞いてくれたのは、私だからじゃなく、私が本当の世界樹の一部だったから……？

お願いを聞いてくれたのも、本体の指示に従っていたため……？

「このシエルターの人間は、本物の世界樹の力の発現時、偶然生き延びた者たちだ。その中には世界樹計画に参加できずともそれなりに優秀な科学者もいたようだ。その者たちは、世界樹の力に呑まれた世界に絶望した。生き延びるためにそばにあった世界樹を研究し、危険性を考え性能を落として模造品を創り、制御しやすいように、意思疎通を可能にするために世界樹から人間を作り、心とした」

イシユがまだ話を続けている。だけど私には全然耳に入らない。「完成品がそばにあったのだ。シエルターの研究施設といえど、サンブルがあるのならばできることも増えるということか。その結果、この地に危機を齎す巨人が創られたのだからな」

あの子にとって、私は何？

語りかけても、眠っていて応えてくれない。どれだけ声を聞くことに集中しても、あの子の声は聞こえない。

聞こえるのは地下からの声だけ。

あの子によく似た声……だけど違う声。

これは、これが……本当の世界樹の声……？　じゃあやっぱり、あの子と私は違う存在だったの……？

私と今までお話ししてくれていたのは、私の願いを聞いていたからじゃなく……私を通して本体の願いを聞いていただけ……？

「……違う」

「シウアン？」

「追い詰められれば人間は思いもよらぬ力を発揮する。科学者たちに

も当てはまるとはな。食糧危機の状態の中、状況を打破せんと世界樹のコピーを創る計画。その保険や副産物をいくつも生み出したようだ」

私はあの子の心じゃなかった。

じゃあ私は、地下から聞こえてくる声の子の心……？

そう考えた途端、声が今までよりも鮮明に聞こえだした。繋がりまでもはつきりと感じれる。

それでもまだ小さな声。だけど呼んでいる。私を強く、求めている。

ウロビトでもない、人間でもない私を求めている。

「——行かなくちや」

「シウアン？ どこに？」

アルメリアの声を無視して、部屋を出る。

今までよりも鮮明に呼んでいる。地の底から、暗闇の中から、私を求めている。私はその子の心なら、応えてあげないと。会ってあげなくちやという強い使命感のようなものが胸いっぱいになる。

ただ聞こえるだけじゃなく、まるで声の子に抱擁されているかのように、身近に感じてきた。

部屋の中ではイシュがまだ何か長々と話していた。

アルメリアは心配げに私を見てくれている。

廊下ではウーフアンとローゲルが石にされた人の荷物を調べて、キバガミが周辺を警戒してる。

「地下への道は……うん、ありがと。こっちだね」

声の子が、道を教えてくれた。

大丈夫、この子は私を求めている。今までごめんね、気づいてあげられなくて。

「シウアン!? イシュ、シウアンが！ その話はあとでいいですから

！ ああ、もう！！

声に導かれるままに走った。

後ろでアルメリアの焦った声が聞こえた。けど私は止まらない。ずつとこの声の子を私は気づけなかつたんだ。この子の元にすぐにも行かなくちゃ。

暗いけど、怖いけど、ずっとひとりぼっちにさせてた子がいるんだ。ちよつとぐらい私も我慢しないと。

いくつも並ぶ石像をすり抜けて、奥へ奥へと行く。

廊下の灯よりも強い明かりに照らされた階段が見えた。

——こつちだね。

階段を降りた先はさらに真つ暗で、声がなかつたら方角もわからなくなりそう。

あ、声が近づいてる。

私が動いているからじゃない。向こうも、動いている。

這いあがってくる。下から、この階へと。

遠くから、大きな音が聞こえた。

早く会わなくちゃ。会っていっぱい遊んであげなくちゃ。もう寂しげに済むんだ。

「あ……なに、この花……」

勝手に動いて……花粉？　すごい吸っちゃ……体が急に重たく……？

「シウアン！！」

名前を呼ばれると同時に突然、眩しいくらいに明るい炎が花を燃やした。

一瞬の明るさの中で見えた私の腕は、石になりかかっていた。

「石に……！　　テリアカ早く！」

「ウム！」

あ……みんな、追いかけてきてくれたんだ。

「何を勝手に突っ走っている。汝の力は我が目的に不可欠なのだ。不用意な行動は控えよ」

「素直に心配したとか言ったらいいじゃないか」

「黙れローゲル。我は事実を述べたまでだ」

「貴様ら、呑気にしているな！　シウアンの治療を終えるまで周囲を警戒しろ！」

キバガミが背中をさすりながらテリアカを飲ませてくれた。

効果がすごいみたいで、ちよつと体中痺れが残るけど石になっていた皮膚が戻っていく。

……私はなんであんなに焦ってたんだろう。

「シウアン、急にどうしたの？　本当に……」

「ウム、何か気づいたことがあったのか？」

アルメリアとキバガミの質問に、なんて答えたらいいかわからない。声が聞こえて、それと、なんでか会わなきゃって気持ちが強くなつて……でもなんですか。

悩んでいる間、イシュとローゲルの喧嘩を止めようとウーフアンが二人を諫めている。だけどウーフアンも気が強いから三人で喧嘩しているみたいに見えちゃう。それがちよつとおかしくて、笑っちゃった。

——声の子も、すぐそばで笑ってくれた気がした。

また、声に包まれていく。

「——何かが来る！」

「むっ!？」

「うおおっ!?!」

壁が壊されて、声の子が私たちとウーファンたちの間に入った。

あれ? 声の子かと思っただけど、なんかちよつと変。

「な、なにこれ……」

「巨大な蟲……! 書かれていたのはこいつか……!?!」

間に入ってきたのは薄緑色の体色の、大きな蟲。赤く光る複眼が私を捉えた気がした。

「いかん!!」

蟲が飛び掛かるように跳ねた。

その寸前にキバガミが私とアルメリアを抱えて跳躍する。

「ひよああ!?!」

蟲はまた私を見る。

また襲ってくるその前に、蟲の後ろから三人の声が聞こえた。

「虫けらが我を無視して暴れるとは、不敬にもほどがある。美しき陽光を浴びて償うがいい」

「こんなでかい虫はちよつと気持ち悪いな……ショックドライブ準備完了」

「シウアン無事かー!! キバガミ! シウアンを絶対に守れ! シウアン、すぐにこの邪魔な奴を貫くから待っててくれ! 凍牙で貫いてくれる!」

一斉に喋るから何言ってるか全然聞き取れなかった。ウーファンの言葉はすごい長かったからわかったけども。

蟲が何かをする前に、轟音が響く。

三人の攻撃が強かったのか、蟲の口から黄色い液体が噴出した。

「うげ、きもい……」

「ムウ!?!」

アルメリアの小声とキバガミの掛け声が混ざる。

私とアルメリアを抱えながら大きく後退したことによって、私たちに黄色い液体に掛かることはなかった。

液体が掛かった床からはじゅうじゅうと音が立つ。

「と、溶けてますけど……」

「気を抜くな！ この蟲はまだ動くぞ!!」

「は、はい！」

音はいつまでも立ち、やがて部屋の床に大きな穴を開けた。もしも体に掛かっていたらなんて考えたくない。

大穴を蟲は軽々と飛び越えて、そのまま押し潰すように迫りくる。

キバガミはそれを回避するためにまた後退した。

蟲の重量によって空いた穴がさらに広がった。

「凶体がでかいだけあってしぶといか」

「悠長に言ってる場合じゃない！ アルメリアたちと分断されたんだ！」

「シウアン！ キバガミ、絶対守れ!!」

遠ざかってしまった三人の声が小さく聞こえる。

代わりによく聞こえるのはあの声。それがやっぱり前にいる蟲から……蟲の中から聞こえる……

「拙者らは一度引く！ このままでは応戦できぬ！ のちに合流しようぞ!!」

キバガミはそう言って、やっぱり私とアルメリアを抱えながら部屋から飛び出した。

すぐさま背後からは蟲の巨体が壁を壊しながら部屋を出てくる音が聞こえた。

これ、タルシスで子供たちがやってた鬼ごっこみたいだ。
なんだかすごく、楽しい。

67. ある男の日記

ヤバイ。

やばいやばいやばいやばい。

「キ、キバガミさん！ まだアレ来てます!!」

「承知!!」

壁を破壊しながら、床を砕きながら、時には溶かしながらも迫る巨大な蟲。

どういうわけか執拗に私たち、シウアンとキバガミさん、そして弱い印術師の私を追いかけてくる。

イシユたちとは分断されてしまうし、体勢を立て直そうにも全然距離が取れない。

逃げながらも火球や却火をぶつけているが、ものともせずには追いかけてくるのだあの蟲。

『蟲 失敗 開けるな』ってあいつのことか。開けてないよ私たちは。なんなんだあれは。なんで避難用シエルターにあんな化け物がいるんだ。

私と同じく抱えられているシウアンはなぜだかさつきから楽しんで。結構豪胆なところがあつたんですねとか言う余裕も今はない。

「アルメリア殿！ 火をー!」

「え!?!」

「魔物だ！ 前方!」

「うおー!?!」

前方と言っても後ろ向きに俵抱きされているから見えない。闇雲に爆炎を放つと、私の後方、つまりは進行方向から魔物の悲鳴が聞こえた。よかった当たった。

「跳ぶ!」

「ひゃい!!」

ぴよんと跳び越えたのは火によってダウンした魔物の姿。

南瓜？ の魔物が三体。仲良く倒れていたが、さすがに爆炎じゃ仕留め切れなかったのか、むくりと起き上がり—— 全て蟲に踏み碎かれた。

「ひ、ひいい!!」

「あはは！ 鬼ごっこってこんなに楽しいんだね！」

「何言ってるんのシウアン!? 鬼ごっこはもつと平和だからね!」

ひよつとして現実逃避してるの？ 私もしたい。平和的な鬼ごっこだったらどれだけ良かったか。

「でも鬼ごっこって鬼から逃げる遊びなんだよね？ 一緒じゃないの？」

「全然違うから！ 鬼ごっこ経験ないけど絶対違うから！」

「かくれんぼの方がアルメリアは好き？」

「そうかもねっ!!」

やけくそ気味に答えた。

やっぱりシウアンの様子がなんか変だ。

突然走り出した時からだろうか。イシュが世界樹について語ったのが原因？ 世界樹の巫女にとっては衝撃だったのか、それにしているこの反応はおかしい。なんだか正気じゃないようだ。

「でもかくれんぼだと私はすぐに見つかっちゃうから……ごめんね？」

「なんの話か全然わからないんだけど！」

「……シウアン殿、何故すぐに見つかるとか教えてもらえぬか」

キバガミさんがよくわからない会話に疑念を抱いたのか入ってきた。

まさか彼も現実逃避の仲間入りではないと思うけど、抱えられている身としては祈るのみだ。

「私とあの子、繋がってるもん。声が聞こえちゃうからすぐに見つかっちゃうんだ」

「声というと、ここに来る理由となった声のことか」

「うん」

繋がってる？ あの子？

あの子って、蟲のこと……？　これがシウアンを呼んでたって、それにしては全然友好的じゃない。害意満点だ。

「声が聞こえる限り、シウアン殿の場所がわかるということか」

「うん、そうだよ。だから鬼ごっこしかできないんだ。ごめんね」
なんで遊びの話になるのか理解できない。

とにかくあの蟲はシウアンを追いかけているということはわかった。わかったけども……だから何って話だ。シウアンを置いていくわけにはいかない。アレは確実にシウアンを潰す勢いだ。だからやっぱり一緒に逃げるしかないわけで。

「アルメリア殿、少し降ろす。遅れず走るのだ！」

「え!？」

突然降ろされて私も足を動かす側に。

私はキバガミさんほど足に自信はないのに、とか抗議する暇もなかったんですが。

するとキバガミさんはシウアンを抱え直し、

「シウアン殿、御免！」

「えっ——」

「ほわあ!？」

走りながらシウアンから意識を奪った。

突然に手刀に私も驚きの声をあげる。なんかローゲルさんの裏切り事件を思いだしてしまう。

「アルメリア殿、拙者の腕に掴まれ！」

「え!?! え!?! はい!?!」

気絶したシウアンを抱えながら、また私に手を差し伸べたキバガミさん。この人が何をしたいのかよくわからない。

「つて前!　前!　道じゃなくて吹き抜けになってます!!」

「ウム!　跳ぶ!　しっかり掴まっておれ!」

「うぎよああああ!?!」

「又オオオオ!!」

空を翔る牛頭、そんなタイトルをつけたくなる光景だ。傍から見る側に回れたら。

そんな気持ちが一瞬の間だった。

吹き抜けの対岸の廊下にドシンと着地した。

イクサビトの力ってすげー。

って感心している場合じゃない。あの蟲は………！

振り向いたとき、蟲が吹き抜けを落ちていくのが見えた。

キシヤアという鳴き声を出しながら、暗闇の中へと落ちていく。

しばらくして底からずしんと重々しい音が響いた。

「……死にましたかね」

「わからぬ……が、イシュ殿たちの一斉攻撃を浴びても平然としておったのだ。恐らくは生きているだろう……今のうちに皆と合流すべく動こうぞ」

「はい。ってちよつと待ってください」

「ム？」

いや、普通にしているけど何でシウアンを気絶させたのか、説明がほしいんですが。

「シウアンを気絶させたのは何ですかいったい……」

「ウム、うまく言葉にはできぬのだが……あの蟲の声が聞こえぬようにすれば、奴から身を隠せるのではないかと考えてな。相談もせず動いたのはまことに申し訳ない」

「ああ、そういう……」

そんなのしなくても蟲が落下したところを見るに、大丈夫だったと思うんだけど。

まあ切羽詰まっていたし、シウアンを囮にするとかじゃないみたいだし、私は良しとしよう。シウアンやウーファンから怒られても庇う気はないけど。

とにかくまずはイシュたちとの合流だ。

向こうはイシュ、ローゲルさん、ウーファンというメンバー。性格のかみ合わなさとはもかく、戦力的にも探索能力的にも向こうの心配はいらなさそうだ。

地図を描けるローゲルさんに、気配感知のウーファン、それに全員戦闘力があるし。

それに比べてこちらは……私は地図を描けるが、気配感知ができそうなのシウアンは絶賛気絶中。キバガミさんはシウアンを運ぶためにもあまり無茶するわけにもいかないだろう。

つまり戦力的にも探索能力的にも不安が残るメンバーだ。

「合流するにはウーフアン頼みですかね……来た道を引き返そうにも……」

「また跳び越えるのは少し……無理そうだ」

「ですよね……」

対岸、つまりジャンプした場所は蟲のせいで崩れている。より吹き抜けが広がった形になっているせいで、戻れそうにない。

戻らずに進むか、それか待つか。

方角を変えれば壁の赤い光に照らされた階段がある。それはより深く、地下へと降りる階段だ。

地下へ降りるということは、それだけさっきの蟲に近づくとということ。

うん、ないな。階段を降りるといっなのはない。

階段とは違う方角には道が続いているし、こっちの道を選ぼう。

「慎重に進みましょう……」

「ウム」

キバガミさんも降りるといっ選択肢は除外しているようだ。

私たちはこのフロアの探索を優先することにした。

「しかしこう言うってはなんだが、アルメリア殿とはぐれずにすんで拙者はほっとしておる」

「はあ」

周囲を警戒しながら歩いていると、キバガミさんがぼつりとそんな

ことを漏らした。

「拙者は地図を描けぬ。それにこの施設の文字も読めぬ。拙者ひとりでは彷徨い続けていたことであろう」

「そんなことないですよ。キバガミさんならなんだかなんだで脱出できそうです」

野生の勘が！ とか理屈の通じない勘というものによって迷わなさそうだ。

その点私にはそういった勘はあまり培われていない。だからこそ、地図が大事なのである。

それにしても……この広間、何か変だ。

地図の描き方が間違っているはずない。なのに地図がおかしい。

それなりに歩いているのに、広間の壁につかない。真っ直ぐ進んでいるはずなのに、まるで夢の世界のように仕切りが見えない。広間がどこまでも広がっていく。

なんだかこの感覚……どこかで感じたことがある。これは確か……

「……深霧ノ幽谷」

「どうかしたのか、アルメリア殿」

そうだ、あの幽谷でも似たような感覚を僅かに感じた。確かあそこ
の霧は幻術がどうたらつてウーファンが言ってた。それと似た感覚
がさつきからあるのだ。

でもなんでここに。ここには霧なんてない。

いや、関係ないか。似たような力を持つ魔物でもいるのか、それが
古代の技術か。なんであれおかしいという感覚があるのに変わりは
ない。

「キバガミさん、こう……邪魔というか嫌だなーって感覚というか、な
んか悪そうなやつがいるかわかったりしません？」

「？ よくわからんのだが……」

「こう、イクサビトの勘で敵のいる位置を言ってみてください！ こ
の広間、なんか変なんです！」

「ム？ しかし……」

「何もなくてもいいですから！　なんか嫌な感じがするところをテキトーに！」

打開策がないから力押しである。

シウアンが目覚めていれば、なんらかの方法が見つかるかもだけど今はそれができない。ならばキバガミさんの野生染みた勘を頼りにするのみだ。

「な、ならば……あの方角に何かがいるような気が……あまり自信はないのだが」

「はい！　じゃあいきますー！」

「アルメリア殿?！」

キバガミさんの指示した方角に向かって、全力で爆炎の術式を投げ放った。

周囲を照らす炎の花はいつもより見えづらい。それは暗いからとかではない。炎によって霧が見えるようになったからだだった。

暗すぎて霧に包まれていることを全く見えなかった。そしていま、炎の中に影が見えた。

「いた！」

「おおー！」

影のあった位置に、もう一度爆炎を放つ。

敵の位置がわかりづらいのなら、広範囲に焼き払うのが一番だ。

「周囲に敵はおらぬな！　ならば！」

キバガミさんが片手で刀を抜き、敵へと肉薄する。シウアンを担いでいることを忘れてはいないと思うけど心配だ。

イシユの豪快な斬撃やローゲルさんのような揺らめく斬撃とは違う、モノノフの鋭い白刃が敵を斬り倒した。

「これは……」

「キバガミさん、大丈夫ですか？」

「ウム、しかし……これはいったい……」

キバガミさんが斬った敵の姿を見せる。

そこにいたのは、

「……ホロウ？」

眼から血の涙を流し、影のように実体を捉えづらい種族。かつて幽谷でウロビトと争っていたホロウがそこにいた。

何故ホロウが。クイーンが倒れたのだから、もういなくなっただけじゃないのか。

それとも別の種族？ よく似ただけの。でもホロウならあの霧の幻術も理解できる。じゃあやっぱりホロウなのでは。

ダメだ。考えがぐるぐる回る。ありのままに受け止めなくては。

ホロウがいた。幻術あった。倒した。以上！

「拙者は、魔物と勘違いしてこの者を斬ってしまった……」

「ホロウは魔物かどうか私にはわかりませんが、このホロウは敵対してたのは間違いないです。幻術がなくなっただけ今のうちに行きましよう」

「……ウム」

実際のところ、ホロウは魔物ではないのだろう。

ただ敵対する存在だけで魔物ではない。じゃあなんだと聞かれたら……ホロウとしか答えられない。

先の倒したホロウが原因だったのか、広間を抜けることができた。

広間を抜けた先は見飽きるほどに今までと変わらない廊下。

それにしてもこの辺りは……血の痕はあるけど石化した人たちはいない。

廊下を歩いていくと扉があった。扉には『——長室』と書かれている。なに長かかすれていて読めなかったけどとりあえずお偉いさんの部屋かな。

お偉いさんの部屋ということはそれなりに重要な資料があるので。イシユが見つけたら喜びそうなやつとか。

「中に入りましょうか。一度休憩するためにも」

「あいわかった」

中に魔物がないか確認し、入ると同時にそつと扉を閉める。

これでちよつとは安心できる。

中には居住エリアの部屋とは違い、簡素なベッドがひとつ、そして本棚に比較的立派な机にタイヤのついた椅子。机の上はとっ散らかっているが、魔物のせいってわけではなさそうだ。人間の力でつかつとなつてやつちやつたという程度の散らかり具合。

ひとまずベッドにシウアンを寝かせてキバガミさんも体を休めることにした。

私は本棚をじろじろと眺める。気になる資料がないかと思ってだけど……

「日記……」

なんだか豪華な装丁の日記が目を引いた。

資料よりも気になるそれを手に取りページを開いていく。

始めのほうは、未曾有の災害について。その後の周囲の環境について、問題点などが書いてあった。

イシユはこれと似たような内容を読んであの話をしたのでだろう。ペラペラとページを読み進めていくと、気になる単語が書いてあった。

「世界樹計画……」

未曾有の災害、その原因でもある世界樹の力を使って環境を変化させる計画が書いてあった。イシユの時代の世界樹計画の産物を使った、たぶん偶然にも同名の計画。

災害に至った力を抑えるための理論やそのために必要な実験について書いてあるが、その辺りはよくわからなかった。ただわかることは、自分たちの手で制御可能な世界樹を創る計画なのだということだけだ。

「アルメリア殿、お主は休まぬのか？」

「大丈夫です。移動の際はキバガミさんに抱えてもらうつもりなので」

「それはどうかと思うのだが……」

世界樹を新たに創る。

その計画を実行するには時間が必要だったらしい。そして時間が過ぎれば過ぎるほど、このシエルターの人たちは追い詰められていった。

それを打破するために、彼らは命を創った。

最初の使徒は『武に優れた者』

ちらりとキバガミさんを見た。

彼は、彼の種族は武に長けたイクサビト。頭部が動物と同じという他にない特徴がある姿。

日記に書かれた最初の使徒もまた、武に優れ、動物的特徴を持つ者たち。

イクサビトの人たちは、そしてウロビトたちも、人間に創られた種族だと言っていた。

人間は創造主であり戦友だとも、背を向けた裏切り者だとも。

本当に人間が創った種族だったんだ。

ということはこの次の第二の使徒『知に優れた者』というのは……ウロビトだ。知に優れているが体が非常に弱い使徒。

……じゃあこれは、第三の使徒はなんだ。

第三の使徒『眠らぬ者』

日記には第二の使徒を参考に創られた究極の存在だと大きく褒めている。人間とはかけ離れた存在だとも。

今の時代にそんな種族は知らない。

人に創られたという種族はウロビトとイクサビトだけだ。それともどこかに里を作って暮らしているのだろうか。

「……女王が単身で仲間を増やす？」

女王。単身での増殖。眠らない。

これらの情報と一致する存在を知っている。

ホロウだ。

彼女たちも人間に創られた種族。敵じゃなかった種族だった。

眠らぬ者には最も重要な研究成果の管理と護衛が任されたと書いてあった。

もう、なんとなくわかる。

この管理と護衛の対象である研究成果とは何か、ホロウクイーンの行動からもわかる。

ホロウクイーンは最期、シウアンを守るために蛾の魔物を仕留めることを優先した。自身の身よりも、シウアンの身を守ることを優先した。

シウアンを誘拐した際も、決して彼女を傷つけることはなかった。それにきつとあの時、彼女が私を守ろうと立ちはだかったから私も誘拐したのだろう。大事な護衛対象の行動を尊重するために。

ホロウたちはずっと人間に任された役目を全うしてただけ……いや、考えるな。同情するな。だってホロウたちはやり方が悪かった。だからウロビトたちに反発されたのだ。言葉を交わせばわかりあえたはずなのに、ホロウたちはしなかった。

そう自分に言い聞かせようとしても、ある一文がどうしようもない事実を突き詰める。

—— 『彼女らは意思疎通に言葉を要しない』

言葉を交わすことも、ホロウたちにはできなかった。

ダメだ。考えるな。終わったことにもう一度目を向けるのはいい。だけどそこから目を離せなくなってはダメだ。余計な残留思念を生み出すな。

「アルメリア殿？ やはり今は休んだ方がよいのではないか？ 顔色も良くない」

「いえ、今はいいです。あとでキバガミさんの肩の上で休みますから」「それは拙者が疲れるのだが……」

今はこの日記のことだ。

キバガミさんにも内容を言うべきか少し悩んだけどやめておく。さつき斬ったホロウが同じ人間に創られた種族だったなんて、知ったって良い方向には転がらない。むしろ余計な罪悪感を刺激しかないだけだ。

使徒については後は愚痴だけだった。ほとんどが第二の使徒に対してのばかり。第三の使徒が上位互換なせいで、使徒用とはいえ食料を圧迫する存在が疎ましかったのかもしれないが、こんなことをして

たからウロビトの人間への悪感情が育ったのではないかと思わずに
いられない。

日記の内容は世界樹計画に戻った。

使徒を揃え、計画を着手に至つての会議の愚痴が細かに書かれてあ
る。

世界樹を制御できると信じて疑わない姿勢が日記から見取れた。
しかし誰もがそうは思っていなかったのか、保険のような計画が同
時進行されることとなつたらしい。

暴走した世界樹を止める術。世界樹の天敵を、世界樹を喰らう存在
を生み出す計画。

生み出された怪物を『蟲』と記していた。

「……世界樹を喰う、蟲」

シウアンは世界樹の心だ。それもイシュが言うには、世界樹の本体
の一部。

そして蟲は世界樹を喰う存在。

シウアンを追い続けている理由は、喰べるために？ この計画で植
え付けられた本能に従つて、あそこまで執拗に追い回していたとい
うこと？

ページを進めるごとに、蟲の計画に日記の人物は怯えていった。

異形の蟲を創る計画、その蟲を制御する方法がなかったからだ。

いや、正確には用意されてあるらしい。それはあまりにも力技な方
法であり、保険と呼ぶにはひどいものだった。

それは、蟲に力を抑える薬物を投与し、弱つたところを捕獲する
というもの。実際に薬物の効果はあつたらしいが、日記の人物は怯え
切っていた。

世界樹を喰うことによつて、より強くなつた蟲に対しての実験デー
タをとる術がない。そのため薬物データは正確なものではない。

そのことを日記に書き殴っていた。誰に言つても理解されないと
嘆いていた。

やがて、日記の人物は自身が着手する計画にも恐怖を抱きだした。

日々追い詰められていく現状への恐怖、世界樹の力への恐怖、蟲へ

の恐怖、ひたすらにこわいと書き綴られている。

最後のページには計画を止めるために、死ぬ覚悟を固めた文章を残して終わっていた。

それでも計画が止まらず、聖樹の護りが起きたのだろう。やりきれない気持ちをため息とともに吐き出して、日記を本棚に戻す。

日記の横には赤いファイル。背表紙には『薬物試験記録』

他にも似たような本はないかと見たが、これだけだった。きつとこれは蟲の力を抑える薬物の情報だろう。赤いファイルを手に取り中を見る。

……専門用語ばかりだ。呪文のような言葉が、それともちゃんと文字解読を私ができるのかわからないのか、全然わからない内容。せいぜいわかるのは、薬物実験は地下二階研究施設にて行われていたということだ。

これは合流したらイシユに読んでもらおう。

「ん……あれ……？」

「シウアン、気づいた？」

小さな声があがり、シウアンが体を起こす。

見たところ後遺症とかはなさそうだ。

「あれ？ 私どうして……」

「えっと……キバガミさんが全て悪いんであつて私は悪くないからね？」

「す、すまぬ……」

きよとんとしていたシウアンは、急に笑顔を見せた。

「あの子だったら、続きがしたいのかな」

「……え？」

フロアのどこからか、大きく響く音と甲高い不気味な鳴き声が聞こえてきた。

いや、どこからなんてものじゃない。かなり近い。せいぜい壁を一枚隔てている程度の距離。

「今から来るって。鬼ごっこ、がんばろうね！」
「いかん!!」

シウアンと私の腕を掴んでキバガミさんが走りだす。

扉を開け放つと同時に、部屋の壁が崩れ……赤い複眼を持つ巨大な『蟲』がその姿を見せていた。

まだ悪夢のような鬼ごっこは終わらないようだ。

68. 異形苦しめど悪夢未だ終わらず

「くっ！… どの道もまともに歩けない!! おのれ、あの芋虫が!!」

ウーファンの恨み節が廊下に響く。

シウアンの危機が迫っていることもあって、彼女は完全に冷静さを失っていた。

「っ！… また魔物か！… 邪魔だな!!」

他人事のように評したが、かくいう自分も冷静かと問われると怪しい。

最近やたらと生意気になったとはいえ、世話をしてきた少女なのだ。くそ生意気になったとはいえ。そんな少女の危機でもあるのだから自然と焦りが生じてしまう。

まあそれでも俺はまだマシンな方だろう。

二人に比べればまだ。

ウーファンと、イシュに比べれば、

「我の邪魔をする愚者どもが、死して灰燼となるがいい!!」

過剰なまでに炎を纏わせた剣によって大きな花の魔物を焼き刻むイシュ。あまり表情を変えないが心情は単純な奴だ。わかりやすいほどまでに怒っている。

だからこそ危険だ。こいつの体でも石化することがわかったのだから、暴走させるわけにはいかない。あの巨大な蟲は総攻撃を受けても暴れ回っていたんだ。戦力を落とすわけにはいかない。

遠くから大きな轟音が聞こえる。あの蟲がまた壁を破壊したのだろう。

壁破壊はやっぱり化け物の特許じゃないか、なんて無駄口も今は叩けそうにない。激しく移動を続けているということは、未だ彼女たちは追われている状態だ。

あの蟲が通った道はわかりやすい。そのため追跡は容易だが、蟲は

大きな音を立てながら移動するせいで、周辺の魔物が興奮して姿を現す。そのせいで追いかけるのもままならない。

「ウーファン！ あの手の魔物は周囲にいるか!?」
「いない！」

一番危険なのはイシュをも石化させた魔物だ。それ以外も厄介なことには変わりはないが、いきなり全員石像になる事態は何がなんでも避けなくてはいけない。

「イシュ、突っ走りすぎるな！ お前でも石化の危険があるんだ！
ウーファンの索敵範囲からは出るな！」

だから勝手に飛んでいこうとするんじゃない。

こいつに心臓や脳はないから、石化しても後から治療して問題ないだろうがそれでもだ。

「……！ ウーファン、アルメリアたちのいる方角を言え！ 我が道を切り開く！」

切り開くというのは文字通りの意味だろう。ウーファンの能力を思いだしたあたり、少しは冷静さを取り戻したのかもしれない。

「南だ！ ただし移動し続けている！」

「山行水行！」

聞くや否や、すぐさま壁の破壊が行われた。

壁を抜けると暗くてわかりづらいが、廊下ではなく広い部屋。床は重量ある物が通ったのか、ヒビや穴が開いていた。

「——」
今の音は……

「ここから南西！ シウアンたちが向かってきている！」

「……！ 吹き抜けじゃないか」

南西から俺も音が聞こえて、ようやく合流が叶うと思ったら邪魔するような大穴。

このままでは走っている彼女たちが気づかず落ちかねない。

どうする？ イシュだけ行かせるか？

向こうはキバガミとアルメリアがいるとはいえ、シウアンを守りながらということを考えてと戦力的には不安定だ。それに一番わかり

やすいほどに危機が迫っている。

となれば、イシユだけでも行かせるべきだ。

「イシユ、アルメリアたちの元へお前だけでも——」

言い終わる前に、蟲から逃げる彼女たちの姿が見えた。

向こうもこちらに気づいたのか、アルメリアが大声をあげて呼ぶ。

「イシユー!!」

どうやら怪我などはないようだ。全員無事な姿が見れて少しだけ安心した。

つていうかキバガミに走らせて……抱えてもらってるだけじゃないかアルメリア……

「キバガミ！ 吹き抜けだ！ そのまま突き進んじゃダメだ！」

「ウム！」

「イシユ！ あの蟲について！ これを!!」

キバガミは止まり、アルメリアが赤いファイルを投げ飛ばした。

それは丁度イシユの手元へと向かっていく。

……本当にコントロールいいな。

「私たちは下に行きます！ あの蟲、シウアンを狙ってるんです！」

「シウアンを!? どういうことだ！ それに下にいくだと!? 貴様シウアンを守る気があるのか!?!」

「今渡したやつに蟲の力を弱める薬について書いてます！ たぶん!!」

興奮するウーフアンを無視してアルメリアは赤いファイルの説明をした。完全に言いきれていないあたりが不安ではあるが、一応考えがあつてのことのようだ。

「いかん、もうすぐそこまで来ている！ 拙者らはアルメリア殿の言う通り下に降りて時間を稼ぐ！」

「薬などなくとも我が蟲を破壊すればよいだけだろう」

「あの蟲、変なんです!! そんな単純な話になりそうにありません!! とにかく薬をお願いします！ それまではなんとか私たちが凌ぐんで!!」

そう言い残して彼女たちは通路脇にあつた階段へ向かって行った。

それを追うように姿を見せたのは、やはりあの蟲。

「あの蟲がー！」

忌々し気にウーフアンは叫びながら、蟲に向かって氷槍の印術を放つも距離が空きすぎていたためか、届くことなく落下していく。

蟲は階段入口に一度頭を突っ込ませ、入ることができないと理解したのか吹き抜けから落下していった。

通路には何も残っていない状態。今の自分たちはどうするべきか。アルメリアの言う通り、薬とやらを調べていくか。それとも彼女たちの危機をすぐに救出するため、蟲へ即座に挑むか。

「イシュ、どうするつもりだ？」

薬については古代文字の解読ができるイシュしかできない。アルメリアも可能といえば可能だが、あの状況では悠長に調べることもしないだろう。だからこそイシュに託したわけだ。

託されたのはイシュのみ、ならばあとはこいつの選択次第。

赤いファイルに挟まれていた資料をペラペラとめくっていく。とても読んでいるような早さではないが、こいつのことだ。これでも読めているんだろう。

「……私も下へ降りる」

「下に降りて……薬を調べるのかい？ それとも蟲を攻撃するのかい？」

「下にはあの蟲を捉えていた籠があるそうだ。そこを一度調べ、それから判断する」

らしくない行動に思えた。もつとも、それほどこいつとの付き合いが長いわけじゃない。勝手なイメージでは即断即決だった。

「飛ぶぞ」

「は？」

そう言つてイシュは自身の足を分離させ、その足を俺に渡した。

「私の足を持っていろ」

「は？ うわ、意外に普通の足だ……」

「……貴様、こんなときに気色悪い触り方はやめろ」

「濡れ衣だ……」

ウーファンの目が今までにないほどひどく冷たいものだった。別に普通の触り方だと思うんだが……

イシユはその後、俺とウーファンの首を掴む。まさかこいつもキバガミみたいに投げられるつもりじゃないだろうな。

「あまり暴れるな。持続力がないため一気に飛ぶ」

「な、何をする気だ」

「さっさと飛べ」

ウーファンの言葉と同時に世界がブレた。

正確には凄まじい速さでイシユが飛んだ。俺たちを持ったまま。ひとつ言えることは、急発進すぎて首が痛いということだった。

とにかくこれで俺たちも階段から下へと降りることができると。

薬を調べるにしろ、なんにしろ、もたもたはしてられない。

アルメリアたちと蟲を追って下へと降りるとそこは、より荒れたフロアだった。

渴き切っているが、壁や床にへばりついた夥しいほどの血痕。

だがそれよりも、気になる奇妙な点。

「なあ、ここは換気はできていないのか？」

「……空気は澄んでいる。少なくとも害はない。今はな」

空気が澄んでいる。澄み切っている。

この澄み具合、それは煌天破ノ都で巨人を前にしたときと似た感覚。まるで深い森の中にいるかのような、濃厚な緑の空気。

だが周りは無機質な機材のみ。どこを見ても世界樹のようなものは見当たらない。根っこでも入り込んでいるのではと考えたがそうではないようだ。

遠くから振動が届く。蟲はまだ暴れ回っているようだ。

イシユは振動の発生源には向かわず、北へと足を進める。そこにはやはりよくわからない機材と頑丈そうな鉄格子、鉄格子の向こうには黄ばんだ硝子のように透明感のある壁で仕切られた一室があった。部屋の中には大きな穴が開いており、その穴はまるで溶かされて開けられたかのようだ。あそこから蟲が出たのか。

首のない石像が機材の前で椅子に腰かけている。

その手には紙が握られていた。

イシユは石の手を碎き、紙を取りだす。乱暴なやり方だが紙を取りだすためにはそれが一番か。

「何かわかったかい？」

「……蟲は世界樹を喰い終えた。この中には世界樹の本体、その核を入れて蟲の囿にしていたが、全て喰い終えたために暴れだしたのだから」

「世界樹の本体か……私には関係のない話だ。私にとっての世界樹はあの世界樹だけ。他は知らん……それよりもどうするつもりだ」

蟲を捉えていた籠というのはこの部屋のこと。それを調べて何を思ったかはわからないがウーファンも俺も、こいつに選択を委ねるしかない。

「蟲が世界樹を喰ったというのは事実のようだ。世界樹を喰らうほどの力を持つのであれば、まずはアルメリアの要望通り薬を作り蟲を弱らせる」

世界樹を喰う蟲を弱める薬。聞くだけでも実体を捉えづらい話だ。

「世界樹は本来巨人みたいに動かないんだろ？　そこまで警戒する相手なのか？」

「核は違う。ただ喰われるのを待つとは思えぬ。この施設が壊滅したのも、蟲から身を守ろうと魔物を作りだしたがためかもしれない。だが蟲は世界樹を喰らいきった。脅威度は未知数だ」

「そうか」

それなら薬のために動くとするか。といっても俺やウーファンにはわからないことばかりだ。

「薬の材料は大丈夫なのか？」

「このフロアは研究施設だ。蟲の計画は自分たちの安全に繋がる重要なもの。保管は厳重にされている」

「それじゃあ、早いところ動こうか。俺たちは門外漢だ。どうすればいいか言ってくれ」

「我の邪魔をする魔物を排除しろ」

何を言われるかと思えば、なんともまあ……

「わかりやすく助かるよ」

「早く済ませるぞ。これ以上こんな辛気臭い場所にシウアンをいさせたくない」

薬の制作。時代が変わればそのやり方も大きく変わるのだろう。

奇妙な物体から色濃い液体が出てきては、それを小さな瓶のようなものに混ぜていれていく。草木をすり潰したりするわけじゃないよ
うだ。

「ローゲル、右奥からホロウと魔物だ」

「了解つと」

イシユは薬の調合中。それが終わるまで、俺たちは俺たちの仕事を全うするのみ。

幸いにもこの部屋から移動せずとも薬の制作はできるため、ウーファンが方陣を張り捕らえた魔物を俺が仕留めるだけという楽な作業だ。

「ローゲル」

「なんだ、薬ができたのか？」

ホロウと黄色いゲル状の魔物を撃破するとイシユから名前を呼ばれた。

「もうできあがる。だがひとつ問題がある」

「……なんだ？」

「薬の噴出はその部屋内にしかできぬ」

「直接蟲にそれをぶつけるじゃダメなのか？」

「無理だ。霧状にして内外に染みさせなくてはならぬ。そのため蟲を一度部屋にいれる必要がある」

さすがに楽な作業では終わらないか。

つまり、蟲をおびき寄せなくてはならない。

「アルメリアたちに薬の完成を知らせ、ここまで来るように伝えねばならぬ」

無表情だがきつと困っているのだろう。俺たちにそんなことをわざわざ言うあたり。合流する方法が思いつかないとかそんな感じで。

一方で俺はウーファンを見ると、同じことを考えているのかそれほど困っている表情は浮かべていない。

答え合わせも兼ねてウーファンに聞く。

「……お守り、案外使えるかもな?」

「そうだな」

「?」

イシュだけはわかっていないようだ。こいつはゲン担ぎとかそういうのは重要視しないだろうし、仕方がないか。

ウーファンも俺も、鞆から道具を取り出す。

アルメリアが出発前に用意した、彼女にとっての大事なお守り。

白い笛。

ギルド長がベルンド工房に作らせた特製の笛だ。本来熊騷動の作戦用に作られた笛。よく響くように調整されているのか、全力で吹けば耳が痛くなるものだ。

「二人で吹いていたら、まあ聞こえるだろう」

「合図としては申し分ないな。お守りかどうかはともかく」

片手で耳を抑えながら、二人して笛を一斉に吹く。

甲高く響く笛の音は、無機質な施設の中に染みわたるように空気を震わせる。

当然この音に誘われるのは彼女たちだけではない。魔物も来る……が、今度はイシュに片づけてもらおう。

笛の音を響かせて数分ほどすると、大きな音がどんどん近づいて

くる。

あの音は蟲が立てる音だろう。音に引かれてやってきたのか、それとも彼女たちが誘導しているのか、それはこちらからはわからない。いや、わかつてしまった。

「……なんであいつも笛を吹いているんだ」

何をやっているんだとばかりにウーファンが呟いた。まあ俺にも意味はわからないが、元気なことが伝わったしいいじゃないかとなだめる。

しかし本当に、何で吹いているんだ。こっちの音が聞き取りづらくなるだけだろうに……

間もなくして見えてきたのは相変わらずシウアンとアルメリアを抱えて走るキバガミの姿。さすがに彼もかなり疲れているのか、遠目から見ても呼吸が荒い。

「ロ、ローゲ、ル殿オ！」

「お、おう！ そのままこっちへ走れ！」

そういや薬は人体に影響があつたりしないのかイシュに聞いていなかった。

まあこいつもアルメリアにはかなり気にかけていることだし、きつと大丈夫なのだろう。

「薬、できたのですか！」

「ああ！ 薬を使うにはこの奥の部屋じゃないとダメらしい！ っていうかキバガミにばっかり走らせるのはどうかと思うぞ！」

「キバガミさん！ あと少しがんばってください！」

「鬼か」

部屋へと駆け込むキバガミたち。そして次に見えてきたのはあの『蟲』

「おい、イシュ。あの蟲はどうやって入れさせるつもりだ！」

「勝手に入るだろう」

「適当な!？」

アルメリアの言う通り、シウアンを狙っているのか真つ直ぐ向かってくる。というかこのままじゃ、透明な壁をぶち破って入ることにな

るが薬の噴出に影響はないのかこれ？

「蟲が部屋に入ったら汝らは即座に出ろ。薬の噴射が終わるまでは誰も部屋に入るな」

「は、はい！」

イシユがアルメリアたちにそう告げた。しかし薬の噴射が終わるまでつて、それまで蟲がじつとしていているとはとても思えない。薬の効果が即座に出るのならまだわかるが……

「薬は即効性があるものなのか？」

「記録ではな。だが念のため、部屋での蟲の足止めは我が行う。我に薬の影響は出ない」

「そういうことか。じゃあ頼んだよ」

それ以上のやり取りはできなかつた。節足を動かし生理的嫌悪を抱かせる蟲が今まさに部屋へと入る瞬間まで迫っていたからだ。

鉄格子ごと黄ばんだ透明な壁を壊し、部屋の中へと勢いよく入っていく。

その瞬間イシユは瓶のようなものを機材に差し込み、部屋へと駆けだした。

すれ違うようにアルメリアたちが部屋から出て、中には蟲とイシユだけとなった。

「イ、イシユ、殿が、中に入った、が……大丈夫なのか……？」

「お疲れキバガミ。薬の噴射が済むまで足止めするそうさ。少しの間だけど休んでおきなよ」

汗だくな彼を労わり、部屋の中を見ると壁中から確かに霧が吹き出していた。あれが薬なのだろう。

蟲が壊した壁のせいでわずかに部屋から出てはいるが、効果範囲は広くないようで俺たちの場所までは届いていない。

そして肝心の効き目だが、

「——っ！」

「うるさいっ！」

蟲の苦痛に染まったおぞましい絶叫が響いてきた。

あまりの声に思わず顔をしかめたが、効果が出ているとわかりみんなの表情が和らぐ。

蟲は苦し気に体を震わせ、暴れ回っていたのが嘘のように弱り切っている。この分ならイシュだけで仕留めることができそうだ。

過去の遺した遺産によつて、あの化け物もとうとう終わる。この辺りに残った過去の犠牲者は首のない石像だけ。感謝の念を込めてその石像に視線を向けようとしたとき、

「——そこに隠れてたんだね」

シウアンの小さなつぶやきが聞こえた。

隠れていた？

何のことだと聞く前に状況が変わる音が届く。

「え……」

アルメリアが呆然とした声をあげた。

何が起きたのか、部屋の中を見るとそこには

——赤い双葉が蟲から出現し、その葉を追うように黒い触手のような蔦と大きな花卉が蟲の背中を喰い破り部屋の中で急成長を遂げた。

内部から裂かれた蟲の体から、茎を守るようにまた別の蔦が螺旋状に伸び始める。その先端は蠍の尾のような形状をしており、カチカチと硬質な音を立てている。

「なんなんだ……あれは」

巨人ほどの大きさではないにしても、今まで見たことのない巨大な化け物。

最上の赤い双葉がゆっくりと開かれ、人間の目のようなデザイン

の、それでいて虫の翅のような姿を見せた。

双葉の前には小さな隆起があり、その部分が横に開く。そこにあったのは赤い眼がひとつ。

その赤い眼が、シウアンを見た。俺たちを見た。

最後に近くにいた異物、イシユを見た。

ろくでもない戦いが始まると、予感せずにはいられなかった。

69. 悪夢の中、固く閉じる

怪物の中に、怪物がいた。

そうとしか形容できない目の前の光景。

中に潜んでいた怪物が近くににいるイシユを排除しようとしたのか、部屋の中は混沌に陥りつつあった。

あんな存在、あの日誌にはなかった。

日誌には、世界樹計画、世界樹を喰う蟲、各使徒についてだけだ。世界樹を喰う蟲……その内部から現れたアレは……

「あれも、世界樹……？」

私たちの知る世界樹は模造品だとイシユは言っていた。

シウアの言っていた声の正体は蟲ではなくあの中身なのならば、あの異形が本物の世界樹なのか、とても豊穣を齎す樹には見えない。まさに悪魔の樹だ。

その異形は赤い蕾をつけた触手の鎌首を二つ、もたげさせた。

二つの触手はどちらもイシユに狙いを定め、乱打のように激しい突きが放たれた。

あの樹は咆哮をあげているわけではない。にもかかわらず、幾度も繰り返される突きによって空気を震わす音が暴動のように激しく響く。

……大丈夫、イシユならきつとあのくらい、大丈夫だ。

乱れ突きが止むと同時に、反撃するようにイシユが跳ぶ。

悪魔の樹の赤い眼に届くほどの勢いのあるジャンプ。途中襲う触手を足場にしながら何度も跳び、何度も斬るあの技は。

「如く舞う」

斬りながら樹を登り続けるイシユを、突如現れた業火が呑み込ん

だ。

だけどその前に確かに見た。あの赤い眼が妖しく光るのを。

あれは巨人の眼と同じく、炎を操っているのだ。この分ならきつと氷も雷もあるのだろう。

「じつと見ているだけというわけにもいくまい！ 拙者も助太刀に向かう！」

「気持ちはわかるが待つんだキバガミ！ まだ薬の噴射が続いている。止むまで待つんだ！」

止むまでつていつたいいつになるんだ。

そもそも薬の噴射が止んだところで、本当にすぐに入ってもいいのか。

迫りくる触手を斬り払いながら応戦しているイシユの力になれる方法がないのか。

部屋の外からせめて攻撃でもできれば……

そうだ、ウーフアンの方陣！

南の聖堂でも部屋をまたいで規模の大きな方陣を使っていたし、巨人戦でも方陣は効果があった。巨人の時と違いウーフアン一人となるが、それでもないよりはましだ。

「ウーフア——！」

「シウアンに何があったか知らないか！ シウアンの様子が明らかにおかしい！」

シウアンの異変。心当たりがあるとすれば、やはりあの異形だ。あれと近づき過ぎたからなのか、心が本体に惹かれているのか。

「たぶん原因はアレです！ だから今はアレを倒すことに集中してください！」

「あいつが……！ 封縛してくれる!!」

私も私で動かなくちゃ。印術で攻撃するには少し遠いけども、何もしないよりはいいはずだ。

術式を準備していると、そばの首のない石像の前にあるボタンが目についた。

いくつもボタンがあるがその中でひとつ『換気』とある。

叩くようにボタンを押した。

途端、強い突風が吹き荒れたかと思うような音が部屋から発生する。すると部屋を埋め尽くしていた色濃い霧が急速に消えていく。

「いきますー！」

「イシユ殿、助太刀いたす！」

薬がなくなつたと目に見えてわかつたので、私とキバガミさんはすぐさま部屋に突撃した。

ウーファンは方陣の展開に集中し、ローゲルさんは異形を冷静な眼で観察している。

シウアンは……正気ではないのだ。この空気の中、楽しそうな笑顔な彼女を今は放置しておくしかない。

「イシユ！ 焼き払いますー！」

「我ごとやれー！」

「はいー！」

部屋に入つてすぐに爆炎の術式を放つ。イシユを巻き込むのももう慣れた。

無数の触手が闖入者をもターゲットにしようとしたのか、こちらに向かつてくる前に爆炎が焼き落としていく。大丈夫だ、効いている。巨人よりはサイズも小さいし、こちらの攻撃も響いているっぽい。なら大丈夫だ。

攻撃の感触を実感していると、一際大きな触手が迫ってきていたのに気づくのが遅れてしまった。

触手というよりは、いくつも節がある奇怪な腕。先には蠍の尾のような鋏がついており、ガチガチと音を立てながら這うようにそばまできていた。

「角神ー！」

迫る鋏の腕を、横からキバガミさんが突進しながら刀で何度も突き刺しては蹴りとばし、また突き刺し、と苛烈な攻撃を繰り返した。

それにしても、キバガミさんも技名とか叫ぶタイプだったんだ。

「助かりましたー！」

「礼には及ばぬ！ 一本の腕ですらこれほどの威圧感とは……！」

「つてキバガミさん！ もう一本来てます！ そこから離れて！」
「なぬっ!？」

もう一本、鋏のついた腕がキバガミさんを襲いかかる。術式はまだ準備が終わっていない。爆炎なら出せるけども、あの腕は爆炎を物ともしなかった。むしろ短時間だけとはいえ、視界が悪化するだけに終わりがねない。

キバガミさんは逃れるため突き刺した刀を引き抜こうとするが、
「ぬ、抜けん！」

「キバガミさん！ 早く！」

言ってる間にも鋏はもう間近まで迫っていた。

眼を逸らしたくなるような光景が広がると予感される状態。

しかしその凶悪な鋏が届く前に、天から巨大な氷の塊が鋏を叩き潰した。

なにこの氷。

印術？ いや、氷の印術は詳しくないけど、こんな氷塊を扱うなんて聞いたことはない。じゃあこれは一体なんなんだ。

「ぼさつとするな！ まだ仕留めたわけではない！」

「ウーファン!？」

「何を呆けているんだ！ 魔狼氷葬は何度も使えるものじゃない！」

え、何それは。

イシュだけじゃなくみんな独特な技名を言うのが流行りなの？
つてボケている場合じゃない。時間も充分稼げた。だから今度は特大の炎をお見舞いできる。

私もみんなを見習って、

「却火!!」

術式の名称を叫んでみた。

凶鳥烈火にしようかと思っただが、若干のテレが混ざって術式が発動しない可能性。なので却火である。もつとも、これだって威力はトンデモない代物。

狙いは触手や腕ではない。

あの赤い眼だ。どんな化け物も眼は弱点だ。目つぶしてやる。

飛んでいく巨大な火の塊から眼を守るように、進路上に槍のように尖った蕾が入り、却火を貫いた。

「ひうつ!？」

却火をまるで紙風船のようにあっさりと貫通しながら迫る攻撃が頭上スレスレに通り過ぎていく。

植物つぽいくせになんだこいつは。いや、愚痴よりも先に反撃だ。伸びきった蕾は今こそ攻撃チャンスなはず……なんだけど、術式を連発なんてできない。

せめて体勢を立て直そうとすると、爆発音が響く。直後に蕾が地面に音を立てて落ちた。

爆発音の発生源はローゲルさんの手の持つ武器。刀身を赤くした砲剣。

「これでようやく一本か。頭には巨人みたいに悠長に登らせてくれそうにないな」

そんなことを呟いて、彼はまた別の蕾が迫るのを砲剣でいなしながら、その勢いのまま振りかぶって斬りつける。ドライブではないため切断するほどの威力にはならなかった。だが浅いとはいえ傷を入れることができた。もつとも、相手の大きさを考えるとこの傷は本当に小さなものだ。ダメージにもなりえないレベル。ローゲルさんの腕力でこれならば、私の投刃ナイフなんてひっかき傷すらできないと思う。

「拙者がお主らを投げるといふ手もあるが……」

「どうやって降りればいいんだよそれ……つと」

ローゲルさんはキバガミさんの提案に却下しつつ、しなり迫る鋏の腕を避けるため跳びのいた。

近接二人じゃ眼まで届かない。

例外として今、イシユが上空で戦っているけども、それは置いといて。

「印術でならここからでも届きます!」

「ああ。アルメリア、ウーフアン。君たちは術式で直接眼を狙ってくれ。触手の動きが庇ってたから脆いはずだ。俺とキバガミは君たち

を守る」

「はい！」

狙いを高い位置にある眼に集中して術式を用意する。上空では氷や雷などが飛び交う異常な様相を見せていた。

やっぱり巨人と同じく各属性を扱えるのか。ということとは、さつき落とした蓄もいずれ再生すると考えたほうがいい。それなら早く眼を潰さないで。

眼に向けて飛ばす術式は、凶鳥烈火。

業炎の鳥が一直線に目標まで飛んでいくものだ。これなら鳶や触手が間に入ったところで止まることはない。

「たえええええええー！」

鋏の腕が火鳥の妨害に入ったが、すでに節が弱っていたのか一点から焼き千切れて落ちていく。眼を狙ったのにラッキーだ。

火鳥はそのまま眼まで飛び、異形を大きく怯ませた。今までにないほどの手ごたえ。

「山行水行」

眼からの攻撃が怯みによって消えた途端、イシユが眼のそばに降り立って超大振りの攻撃。

その剣が届く前に、眼は反射行動のように瞳を閉じた。

「……！」

瞳を閉じただけ。いわば斬る対象が瞼に守られただけなのに、当たった剣が一本、真ん中からへし折れた。

「触手より硬い……!?!」

「硬いのならば叩き潰せばいい！」

ウーファンの術式、眼のさらに上に巨大な氷が作られ、重量を持って異形の頭へと落下した。

その勢いと、異形の硬度がぶつかり合って氷が砕け散る。だが異形の頭部は変化がない。

なんだあの硬さは。滅茶苦茶だ。

凶鳥烈火では怯んでいた。だから瞼の下は脆いのは確実なんだ。

瞼が異常に硬いのなら、開くまで根競べだ。攻撃する瞬間は瞳を開

くはず。開いたら攻撃を叩きこめばいい。

「アルメリア殿！」

ぐいっと引つ張られ、真横を植物の鋏が通り過ぎていく。

伸びきった鋏の腕をキバガミさんは雄たけびをあげながら、金棒と刀を用いて引きちぎった。

その豪快さに驚くとともに、見逃せない点がひとつあることに気づいた。

今、引つ張られなかったら確実に、私は両断されていた。

敵の殺傷力が高いのは別にいい。良くないけども、今はこの際いい。

だけどそれよりも、今、あの異形は瞳を閉じているままなのだ。なのにあの鋏は私を両断しようとして迫ってきた。

なんで私の位置がわかったんだ。

瞳を閉じる前に見えた位置へと攻撃を行っただけという可能性もある。だけど、異常相手なら他の可能性もありえる。

あの眼以外にも、見る器官が存在する。もしくは、見ずとも周辺がわかる。

正直その可能性のほうが高い気がしてきた。他に眼に相当するものがあるのか、コウモリみたいに音の反響で場所を把握しているのか、とにかくこのままでは瞳が開かないという可能性も考えないといけない。

でもどうすればいいんだ、それって。

「うわっ！」

また攻撃が来た。今度は鞭のようになりながら、空気を横一文字に引き裂いていく蔦を倒れ伏すように避ける。ゆっくり考えている暇なんてない。だけど候補が何も無い。ジリ貧すぎる。

すぐに起き上がろうと顔をあげた時、色を失った昏い眼と視線がち合った。

ちよつとびつくりした。

一瞬心拍数がさらに跳ね上がったけどその正体が何かわかり、落ち着きを取り戻す。

それは背中を裂かれた蟲の死骸の眼だった。

あの異形の苗床となつている哀れな蟲。一瞬この蟲の眼が私たちの居場所を教えているのではと思ひいたる。他にそれっぽい眼なんて、せいぜいあの翅の模様くらいだ。

ものは試しにあの蟲の眼を攻撃するべきか。死骸に攻撃を加えるというのはあまり気持ちのいいものではないけど、状況打破のためだ。それにあの蟲には執拗に追い回された恨みもある。

死骸とはいえ、蟲の体はイシユたちの総攻撃を受けても耐えられるほど頑丈だった。生半可な火じゃダメだろう。却火でもいけるか怪しいけども……

やらないよりはいいだろう。

却火の準備を始めようとして、視界のはしにシウアンの姿が映つた。

シウアンは相変わらずこの状況に相応しくないほど楽し気な表情をしている。蟲に追われている時と変わらず。

……そうだ、彼女が変だったのは蟲に執拗に追われていた時からずっとだ。例外はキバガミさんが気絶させた時。その時は意識がないから当然眠っているような表情だった。そしてなによりも、蟲は来なかった。

シウアンは言っていた。繋がっているから場所がわかると。

彼女の繋がっている相手は誰だ。蟲ではない。蟲の中にいた存在だ。

今戦っている異形の正体はなんだ。ただの魔物ではない。予想が正しければ、世界樹の本体だったものだ。

シウアンは今、ただ笑顔で私たちを見ている。

あの異形ではない。私たちをだ。

それじゃあ、私たちの居場所を教えているのは――

「アルメリアー！」

「あ――」

縦にぶれていく世界の中、見えたのは赤い塊。

ああ、蕾で殴りつけられたのか。貫かれなかったただけ御の字ってやつだろうか。けどこれ、高く殴りあげられたからこのまま落ちたら死ぬ気がする。生きてても痛みで動けるか怪しい。

いやに冷静な思考が働いてしまっていることを自覚して、少しだけ面白く思えた。

上へと殴りつけられ、そして落下していく。

なんで頭から落ちていく形になるのか、世の中と言うのはよくわからないものだ。なんだかんだで混乱している気がする私の思考。

「このっ！ 愚か者が!!」

落下していく最中、罵倒とともに横からの衝撃がきた。そのおかげで私の体を、罵倒したやつ腕が包む。

抱きとめるというには弱いものだったが、それでもそのおかげですトレートに地面に叩き付けられることを避けられた。

「っ……！ ぼさつとするな愚か者が！」

「ウ……ファン」

落ちていく私を抱きとめようとしたからか、彼女は体中に擦り傷ができて所々から出血していた。

「動けるか!?!」

その問いかけに対してあまり良い返事はできそうにない。お腹の痛みが激しすぎて今は視界がぐわんぐわんと揺れている。正直少しでも気を抜いたら眠ってしまいそうなくらいである。そのため印術は使えそうにない。

首を動かしてローゲルさんとキバガミさんを見ると、彼らは触手を斬り払い、私の回復を待ってくれている。

イシユは眼が開いた瞬間を狙っているのか、上空で迫る鳶を引きちぎっては脛を殴ったりしていた。

ということとは、ウーファンにしか伝えられない。

「ウーファン……」

「なんだ！」

正直決定的な証拠があるわけではない。ほとんど推測だ。だけど今はその推測を伝えて、彼女に行動してもらうしかない。

「シウアン……シウアンが、あの魔物の眼の代わりになっています……」

「！……どういうことだ」

声を荒げることなく、ウーファンは疑問をぶつけてくる。よかつた、シウアン関係だから興奮して話にならないのではと不安だったけど、思いのほか冷静そうだ。

「あの魔物が、世界樹だつたみたいです……シウアンの意識と繋がっているらしいので、推測ですけど、シウアンの意識がある限り、魔物は眼を開きません……」

「世界樹……巫女……。答えろ、シウアンの様子が変わる前に、何か聞かせたか」

「は、はい……イシュが、世界樹について……」

「私たちの言う世界樹は、世界樹ではないということか」

「はい……」

ウーファンももうその話は聞いていたのか。世界樹信仰をしていた彼女にとって、あまり良い話ではないと思う内容だが、少なくとも怒っている様子はない。

「貴様は戦えるか」

「私はちよつと……無理っぽい……」

「そうか、わかった。ならばあとは任せておけ——ローゲル！ アルメリアを戦いの影響が及ばない場所まで運んでやれ！」

ウーファンはローゲルさんにそう頼むと、私から離れてシウアンの元へと向かっていく。

キバガミさんに頼んでシウアンを気絶させてくれたらいいのに、ウーファン自身がシウアンの元へと。

ローゲルさんはドライブを放ち、残っていた鍬の方を落としてから

私のそばに来た。

「アルメリア、大丈夫か？」

「だいじよばない……」

「大丈夫そうだな。まあ休憩しておいてくれ」

会話がかみ合わないのは一体なぜなのか。

残ったの異形の触手で目立つのは赤い蕾が一本。さすがに残り一本となったからか、警戒しているのか鎌首を揺らすようにしてタイミングを見計らっている。しかし細かい蔦や蔓がじわじわと伸びているあたり、他の攻撃もありえそうだ。あのサイズにしては細かいだけであって、どう見ても人間を容易に殺すことができそうなものばかりが生えている。

それを見ながらウーファンはキバガミさんに言った。

「キバガミ、私を守れ。おそらく私を狙ってくる」

「心得た。しかし何をするつもりか」

「何、特別なことをするつもりはない」

シウアンに近づいていくウーファンに、予言通り蕾が一気に迫る。

それをキバガミさんが居合いのように素早く一闪し、攻撃がウーファンに届く前に地面に落とした。

「シウアンと話をするだけだ」

70. 守り手が残せし願い、神樹を止める者

アルメリアが叩かれて、高く打ち上げられた。

その光景にひどいという感想と、すごいという感想が同時に浮かんだ。

アルメリアは優しい人なのにあんな風に痛めつけるなんてひどい。

——アルメリアは強い冒険者なのにあっさり倒しちゃうなんてすごい。

すごくなんでない、ひどい。ひどい。

——だけど、まだ咲いてもない蕾を斬ったり焼いたりひどいことをしたのはアルメリアたちなんだ。

違う。それは身を守るためで………

でもあの子だって、身を守るためにアルメリアを叩いたんだ。だからあの子の行動をひどいというのはおかしい。

何が正しいのかわからない。

何か変だ。何を信じたらいいか、全然わからない。

繋がっていると思ってた、一緒だと信じてたものが違ったんだ。ずっと一緒にいてくれたのは家族のような関係なんかじゃなく、私が本当の世界樹の巫女だったから。

ずっと正しいと思ってたことはどれも違ったんだ。じゃあ考えるだけ意味がないんじゃないかな。

一心同体だと思ってた存在は全く違うものだった。

世界樹だと聞かされたものは世界樹じゃなかった。

みんな今まで嘘をついていたんだ。

ウーファンが私に近づいてくる。

そうだ、ウーファンだって私に嘘を教えた。

私は人間だ、なんて言ってたけど、そうじゃなかった。

私が人間ならあの声は聞こえなかった。

私が人間ならウロビトの里で拾われ、育てられることはなかった。私が人間なら、お母さんとお父さんがいるはずなんだ。

ウーファンが私と仲良くしてくれていたのは、世界樹の巫女の付き人だったからだ。

思えば幽谷で私がアルメリアたちについていくと決めた時、ウーファンは変だった。

いつもなら私が何か言わなくても私の行く先についてきてくれたのに、あの時は消極的だった。

あれはきつと、私から離れたかったからじゃない？

だけど一緒に来てくれた。嫌な気持ちを隠して、一緒に来てくれた？

やっぱり嘘をついていた？

——ウーファンを私に近づけないで。

私の願いに応えるために、花開かない蕾がウーファンへと向かう。だけど届く前に、キバガミが最後の蕾を斬り落とした。

時間が経てばまた成長するからって、全部落とすなんてやりすぎだ。

ああ、ウーファンが来る。来てしまう。

「シウアン」

「来ないで……」

「シウアン、何をそんなに怖がっている」

いやだ。来ないでほしい。嫌な思いを隠しながらそばにいてくれても、全然嬉しくなんかない。

あの子に頼もうにも今はできそうにない。

後ずさりしようにもすぐに壁とぶつかった。

もう、下がれない。

あの子に助けを求めても、大きな蕾は全部落とされた。細かい蔦を伸ばしてくれているけど、ローゲルやキバガミに邪魔をされてしま

う。

「シウアン、今もあの声は聞こえているか」

「……」

あの子が瞳を開いてウーファンを止めようとしてくれた。だけどイシユが眼を強く斬りつけて攻撃ができない。

「シウアン、あの声は——」

「……聞こえてるよ」

あの子はまだまともに動けない。今は回復するのに専念してもらうしかない。

だから私もがんばらないと。

「声はなんと言っている？」

「……私を求めている。私と一緒に、やらなきやいけないことをやるって」

「その声に協力するつもりなのか？」

「うん。だって、私は声の子の心だから」

だから私はあの子に協力する。ずっと一人でこんな暗いところにいたあの子のためにも。

それが正しい在り方なんだ。

たとえその、やらなきやいけないことがひどいことでも、私はあの子の心なんだ。

「シウアンはどうしたい？」

「……どうしたいって」

今さつき、答えたばかりなのにどういう意味？

「声の心じゃない。シウアン自身の心はどうしたいんだ」

「さつき言ったまま——」

「私はシウアンに聞いているんだ」

ウーファンの言葉に確信する。

やっぱりウーファンは私のことが嫌いなんだ。今の私の言葉を信じてくれない。求めているのは私の答えじゃなくて、ウーファンが望む答えだけだ。

「世界樹の巫女としての答えではない。世界樹の心としての答えでは

ない」

「……」

「深霧ノ幽谷でシウアンと名付けられ、私と共に10年過ごし、私たちと共に冒険し、皆と一緒に聖樹の護りを乗り越えたシウアン自身に聞いているんだ」

そんな言葉に騙されない。

私はシウアンである前に世界樹の心。答えは変わらない。

「ウーフアンは、私の答えを求めているんじゃない、ウーフアンが望む答えを求めているだけじゃない……」

「シウアン」

こんな問答意味がない。

私は心だから、世界樹のために動く。それが私のやらなくちやいけないことだ。

「私たちが冒険に出ると決めた時のこと、覚えているか？」

「……」

冒険に出ると決めた時のこと……？

「……私の想いはあの頃から変わっていない。私にとって、シウアンの幸せは私の幸せだ。だからそのためにも力を尽くす」

ホロウたちとの争いが終わった時のこと、だよね。

あの頃と変わっていない？ 何のことだろう。でも、あの時たしかウーフアンが何か言った気がする。私がアルメリアたちについていくことに反対せずに、何か……

そうだ、それはたしか……

「何かのため、なんて考えなくていい。シウアンの望み通りにすればいい。どのような選択であっても、私はそれを尊重する。協力する」

思いだした答えとほとんど一緒のことを、ウーフアンは言った。

思いだしたけど、やっぱりそれも嘘だったんだ。もしも本当なら、こんな問答が長く続かない。最初のやり取りで私に協力してくれただけなのに。

「シウアン自身が本当に望むのであれば、私はシウアンの協力をする。あの異形にも力を貸そう」

「なら……」

「シウアン自身が望むのならば、だ」

ウーファンは首を横に振った。

なにそれ。言葉で言いつくろっているだけだ。

ウーファンは責める私の視線を無視して杖を地面につけた。

「10年ほど前、私は幽谷の奥深くで、シウアンを見つけた」

ウーファンの杖を中心に、方陣が展開される。

私を封縛する気なのかな。だけど私だって方陣についてちよつとはわかる。抵抗する術を知っている。

「まだ赤子だったシウアンの小さな手が、私の指を掴んだあの日から……ずっと一緒に過ごしてきた」

展開された陣の封縛対象は……私じゃない？ 誰にも影響を与えてない。ただ地脈の力を整えているだけのものだ。何を考えて……

「ずっとシウアンを見てきたんだ。シウアンのことについてなら多く知っている……好きな唄を、好きな食べ物を、嫌いな食べ物を、身長を、体重を！ その姿も気も何もかも、深く知っている！」

ウーファンの首飾りがまばゆく輝きだし、陣が外側から崩れていく。

これは、破陣……封縛が目的じゃない。破陣ということは、亜空絞破？

だけど亜空絞破にしては変だ。あれは陣の中央へ力を収束させる

もの。だけどこれは陣が崩れたそばから霧に変化している。

こんなの知らない。見たことがない……

「そんな私が気づかないと思ったか！ シウアンの心はシウアンのものだ！ 世界樹の心などではない！」

霧は透き通る青い風となって私に吸い込まれるように入り込んできた。

それは決して悪影響を齎すものではない。それどころか、体から何かを取り除くような……青い風が私を抱擁するものを払いのけるように、体中がすつと軽くなる。

「シウアンの体から出ていくがいい！ 旧き時代の豊穡の神樹……いや、歪みし豊穡の神樹よ!!」

あ……………

繋がっていたものが、ウーフアンの叫びと共に途切れた。

鮮明に聞こえていたはずの声も、小さくしぼんでいく。代わりに聞こえてくるのは私のよく知る世界樹の寝息。穏やかな心情の子供のような、普段から聞いている安らぎの寝息。

「……………ようやく離れたか」

「ウーフアン……………」

私は、何をしようとしてたの？

声の子の望みを叶えようとしていた。望みの内容が多くの人を苦しめるってわかっていて、やろうとしていた。一緒に旅をしてくれたアルメリアたちを殺してでもって考え始めていた。

「さあシウアン、教えてほしい。シウアンの望みは、やりたいことは何か。世界樹の心としてではなく、ウロビトの里の巫女としてでもな

く、シウアン自身の望みを教えてほしい」

私の望み。

冒険に出た時の望みは、世界樹を助けることだった。黒い影に怯える世界樹を助けるために、冒険に出た。

今の私の望みは何か。

世界樹を助けることが叶ってあの子は安らかに眠っている。だから世界樹を助けるといふ望みはもうない。

代わりに本物の世界樹を助ける、なんて望みは、今はもう完全に無い。

あるのは――

「みんなといっしょに、過ごしたい……友達を作って、一緒に遊んで、里に帰って、また同じ日を迎えたい……」

「うん」

「だからそのためにも、あの世界樹を、狂ってしまった子を止めたい……！」

私はいつも誰かに願ってばかりだ。

いつだって私を優先してくれるウーフアンの優しさに甘えている。

願いを聞いてくれたウーフアンに感謝と同時に申し訳なさを感じた時、ウーフアンから手を差し伸べられた。

「実はいうと、シウアンの望みがそれじゃなかった場合、私は願いを叶える気がなかった」

「え……？」

「シウアンの本音を出させるためとはいえ、ひどいことをしたという自覚はある。私にも今回の件で望みがある。その望みは――

――シウアンと一緒にだった」

じゃあやっぱり私の答えじゃなくて、ウーフアンの望む答えを求め

ていたってこと？ 結構ひどい。

「いつもシウアンに選択を委ねてすまなかった。だが今回からそういうのはやめようと思う」

「どう、して？」

「何もかも託すだけだったからこそ、シウアンに孤独感を与えていた気がした。その孤独感にあの神樹が付け入った。もつと早くからこうするべきだったかもしれないな」

照れくさそうに笑うウーフアンは、変わらず私に手を差し伸べている。

「なんにしろ、望みは一致した。あとは一緒に叶えるだけだ。私たちの手で、あの神樹を止めよう」

「……………うん！」

やっぱり優しさに甘えているかもしれない。だけど、さつきまであった申し訳なきが、後ろめたさが今はない。

もう大丈夫だ。

清々しい気持ちで差し出された手を掴むことができたから。

私とウーフアンが話している間に、戦況は一進一退となっていた。私に目という役目を任せていたけど、私とのつながりがウーフアンによって途絶えたために自身の目を使うことになったから。

妨害者の排除のために目を開く。そのおかげで攻撃は苛烈になったようだけど、その分イシユたちの攻撃も通じるようになっていた。

神樹の目から周囲を破壊する雷が放たれ、新たに成長しきった蕾と鉤爪が雷の影に隠れてイシユたちを襲う。

迫る雷を最初に落としていた蕾の影に隠れてやり過ぎし、襲い来る鉤爪を剣で弾き身を守る。雷が止んだ瞬間に三人が飛びだし、イシユは目に向かつて、ローゲルとキバガミは蕾と鉤爪に攻撃した。

その様子を後ろから眺めていたウーフアンは、静かに目をつぶり集中する。すると上空に巨大な氷塊が現れた。それはすぐに砕け散り、無数の氷の礫と変化する。

神樹の目になっていたときに見た技と似ていたけど、あの時は直接氷塊をぶつけるものだった。確か技の名前は……魔狼氷葬。

だけど無数の氷の礫となったコレは、ホロウクイーンの使っていたものと同じ。唄と同時に放たれていた、氷の礫。

「氷結のエリア」

ウーフアンの言葉と共に、一斉に氷の礫が降り注ぎ始めた。それは細い蔦程度なら軽々と貫き神樹を襲う。

太い蔦であっても深くまで食い込むほどの威力。

「楔として申し分がないな！」

「ウム！」

食い込んだ礫の位置に合わせてローゲルとキバガミの攻撃が重なった。

すると内部にまで深く入った氷はさらに奥へと突き進み、やがて貫通、そこからまた入り込んだローゲルたちの剣が切り崩して切断した。

触手を斬り落とされて身をよじる神樹の眼に、イシユの山行水行が入る。

剣技というよりは純粋な力技。それによって神樹が大きく仰け反った。

私もこのまま見ていただけじゃられない。

あの子を止めると決めただ。蟲の中で成長したあの子の大本、核

の場所を探すんだ。ウーフアンほど気を感じることはできないけど、私は繋がりを持っていたから探しやすいはず。

探そうと集中しても、そもそもの気が大きすぎて核本体を感知しづらい。それどころか戦っている皆の気すら上手く感じ取れない。せいぜいわかるのは……距離を置いて安静にしているアルメリアぐらいだ。

そうだ、アルメリアは無事なんだろうか。

死んではいけないけども、誰も治療する暇なんてなかった。

「アルメリアー！」

「シウアン……私の印術より、ウーフアンの術が活躍してる気がするんだけどなにこれ……」

アルメリアの元に向かうとよくわからないことを言っていた。

でも良かった。重症じゃなさそう。だけどすぐに戦えそうじゃない。

「アルメリア、私はどうすればいい？」

「へ……？」

「私もみんなにまかせっきりは嫌なの。だけどどうしたらいいかわからない。だから教えて。私はどうすればいい？」

気の感知もまともできない。だからって闇雲に動けばみんなに迷惑がかかる。

だから教えてほしい。私はどうすればいいのか。聖樹の護りでみんなに指示をだしていたアルメリアなら、きっと導いてくれるんじゃないかって期待して。

そんな私の切な願いにアルメリアはしばらく考え込んだあと、

「巨人の心臓、今持ってる？」

「え、うん。持ってるけど……」

なんで心臓についていきなり尋ねるの。

「良かった。じゃあそれと、私の鞆から盲目の香出してくれない？」

アルメリアには何が見えているのか、わからないけど言われた通りにする。

私を取り出したのを見てからアルメリアは静かに言った。

「この部屋の外……首のない石像の前にボタンがあるんだけど、それを押してきてくれない？ 換気が強すぎて盲目の香がこのままだと散るだけだから」

「アルメリアが押してたやつ……？」

「そう。それを押したらあの蟲のそばで香を開けてそこに置いて」

なんだか単純なお使いみたいなのを任されている気がする。だけど大事なことなんだ。

そこまで言つて、アルメリアは最後に「あとは流れで」と締めた。結構肝心なところがうやむやな気がする。とにかく今はボタンを押して香を置くんだ。

言われた通りに換気のボタンを押すと、風の音が消えて戦いの音だけになった。

これで香が散らなくなった。次は蟲のそばだ。

移動しながら戦っている様子を見ると、かなり押している。イシユの攻撃は確実に眼に響いてるみたいだし、ローゲルとキバガミは成長した触手をそれぞれで斬り落とし、ウーフアンは氷の技でみんなの援護をしている。

盲目の香、効果が出る前に終わっちゃうんじゃないかな。その場合は急いで核を探そう。

そんなことを思いながら香の蓋を開けて蟲のそばに置いた。

ここからは流れて言つてたけど、とにかく香から離れて核の気を探そう。それくらいしか今のところできそうにない。

気を感じしようと集中すると、神樹の気はるかに小さくなっていった。

かなり追い詰められている。これなら核の在り処も見つけやすいかもしれない。気の発生源は……やっぱり眼の中だ。ただ攻撃するだけじゃ弱めることはできても再生を止めることはできない。

瞬間、神樹の気が大きく膨れ上がった。

それと同時に眼から緑の瘴気が溢れ出て、戦っていた四人を包み込んだ。

——あれは、呪い。

瘴気が通り過ぎていくと、物音ひとつない状態に変化する。

先ほどまでの剣の音や掛け声などの戦闘音は完全に消え去り、残ったのは四つの植物。それと神樹。

神樹は敵がいなくなつたからか、ゆつくりと辺りを見渡し始めた。私を探している。なんとなくわかった。

だけど私を見つける前に、途端に様子がおかしくなつた。突然何度もまばたきを繰り返し、やがて深く瞳を閉ざした。

何かやろうとしている……？

いや、そんなことより今は行動しないと。イシユたちの呪いを払わないと！ そのためにも心臓を……

『巨人の心臓、今持つてる？』

『蟲のそばで香を開けて』

ついさつき交わしたアルメリアの言葉が脳裏によぎる。

蟲のそばで開けた香は、風のない環境で散ることなく真上へと漂っていく。蟲の真上は神樹の莖、そして眼がある。

今の神樹の異常は、香の影響？ 眼に異常が走り、治癒のために瞳を閉じている？

心臓を所持しているか確認したのは呪いのことを考えて？ 呪いを払う時間のために香を置いた？

——やっぱリアルメリアって、意外とすごいんだ。

感心している場合じゃない、すぐに四人の呪いを払うんだ。

本当の世界樹の呪いだけど、私の解呪は効果があった。そして事態はそれだけじゃない。

「ぐ——」

「イシユ、お願い。私を眼のところまで連れてって」

呪いから解放されたイシユに頼みこむ。

核に、世界樹の心と心臓であり方を変えることができれば終わらせる。そのためには眼のところまで行かないといけない。

「汝を？」

「うん。あの神樹の核に語りかけるためにも。再生を止めて、深い眠りについてももらうためにも、私を連れてって」

「……世界樹のあり方を変える、か。良かろう」

神樹は今、眼を閉じている。

敵がいないと判断したから、ゆっくりと眼を閉じて治療に専念している。

「絶好のチャンスだな。一時はやられたと思ったが」

「ウム。上は任せるとして拙者らは莖を狙うとしよう。彼奴の重心を崩して反撃させぬためにな」

「イシユ、シウアンを頼んだぞ」

目の役割を何かに託していない神樹は、周囲が見えていない。

だから、呪いから解放された四人に気づけていない。

眼の異常が治って、再び瞳を開けた時、眼前に迫る危機に気づけていない。

「眼を晒した瞬間、深く斬る。汝は斬り口から核を狙え」

「うん」

イシユにしがみ付きながら高くへ飛ぶ。

核の場所を一度感知できたからか、しっかりと把握できる。絶対に逃がさない。

神樹の眼が、ゆっくりと開いていった。

71. 最果てより天を求めん

蟲の体内で歪み育った過去の厄災、その動きが完全に止まった。

シウアンが眼に上半身ごと突っ込んで、何かしたんだろう。先ほどまで感じていた重苦しい重圧は消えてなくなり、無機質な施設の雰囲気を取り戻しつつある気がした。

時間にして10秒ぐらいだろうか。静寂の中、神樹の体が著しく萎れていく。ゆらゆら蠢いては、小さく、短く変化していく。

見あげるほどに大きかったその姿は、蟲の高さと同じぐらいまでに縮んでいった。

その中から、シウアンが体を起こし無事な姿を見せてくれる。

その手には巨人の心臓ともうひとつ。あの神樹の心臓か何かだろうか。濃緑色の宝石のようなものを大事そうに抱えていた。

ようやく悪夢のような戦いが終わったことを実感してくる。

「アルメリア、体に異常はないか」

「イシュ、頭がぐわんぐわんしてましたけど、大丈夫です」

とはいってもすぐには動けそうにないけど。

「これでようやく、終わったんですね」

「うむ。想定外な出来事ばかりであったが、求めていた収穫もあった」

「収穫？」

「我の目的成就、その最後の証明をシウアンが見せた。……だがまずは、タルシスに向かうとしよう」

「イシュの目的……シウアンと巨人の心臓で世界樹のあり方を変えて、魔物の解放。」

ああ、あの神樹のあり方をシウアンが変えたことが収穫なのか。シウアンの不安解消のための今回の冒険だったけど、イシュの目的達成をより確信に近づける旅路にもなったわけだ。

「イシュに抱きかかえられ、シウアンたちの元へ移動する。」

「アルメリアー！」

「シウアン、おつかれさま」

「アルメリア！　ありがとう！　本当にありがとう！」

「ほ、ほへい？」

そんな激烈感謝が来るとは思わなかった。シウアンに今回私がやったことつて、盲目の香の使い方を言ったことぐらいだ。それでの感謝はいつたい。

「ま、まあ……気にしない、で？」

「なんで感謝されてるかわかってない顔だぞこれ」

ローゲルさんの野暮なつつこみがひどい。事実だけでも。

彼と同じような呆れた顔でウーファンが続いた。

「こいつはいつもこんなだからな。しかし、さすがに今回は私も疲れだ。早く街に戻らないか？」

「ウム。此度の戦いも、熾烈極まりないものであったからな」

全員疲労困憊といったところだけど、もうひと踏ん張りだ。タルシスに帰るために。

家路へと出発する前に、シウアンが深く頭を下げた。今度は私にではなく全員に。

「みんな、本当にありがとう。それとごめんなさい……迷惑かけて……」

迷惑ってなんだろう。あの正気じゃなかった期間のことだろうか。

それだったら気にしなくていい。原因は敵さんの方だったし、シウアンのせいじゃない。そう言おうとして、

「謝罪など不要だ。それよりも、汝は我に協力するのだ」

シウアンの罪悪感とかどうでもいい、と言わんばかりのイシユの発言。裏表の一切ないその言葉にシウアンは少し戸惑い、

「……うんー」

そして強く頷いた。

行きはほとんどキバガミさんに抱えられながら、そして蟲に追いか
けられながらだったから全くゆっくり見れなかった道中。

最奥に潜んでいた濃縮された厄災のようなものを止めれたとはい
え、危険な魔物は変わらずいるし、犠牲者の軀もそのままだ。

「けどシウアンが言った。」

「神樹の核はもう眠ったから、ここはこれ以上魔物が増えたりはしな
いよ」

「それじゃあいずれは調査の手を入れることができるな。犠牲者をそ
のままにしておくわけにもいかない」

シウアンの言葉に対して、ローゲルさんがどこか嬉しそうに返した
のだ。行きで帝国の犠牲者すらも冷静に観察していた彼だけど、やつ
ぱり奥底まで冷静にはいられなかったのだろう。

「だが残った魔物が交配し増えることもあるだろう」

「それならペースが落ち着いているから、きつと対処が可能さ」

イシユの意見を聞いても彼は前向きな気持ちのまままだ。

「それにしても……」

急に私の方へ視線が向く。

「行きも帰りも、君は抱えられてるな……」

「仕方ないじゃないですか」

「今回アルメリアより私のほうが歩いてるよね」

「仕方ないじゃないですか」

ローゲルさんとシウアンの言葉に同じ返答しか出てこない。でも
仕方ないじゃないか。触手攻撃を直撃しちゃったんだし。

そんなわけであの部屋からずっとイシユに抱えられっぱなしだ。

「碧照ノ樹海のミッションでも我が抱えて行ったな」

「今それ言わなくていいです！」

「貴様はそれでよく冒険者としての先輩風を吹かせれたな」

「実際経験はウーファンより長いですから先輩ですー！」

おかしい。何故私がいじられる流れになっているのだ。怪我人だ
というのにおかしい。

こういう時は優しさの塊キバガミさん、助けて。そんな想いを込め

てキバガミさんに目で訴えると彼は、

「木偶ノ文庫から脱出する際も拙者が抱えて移動したな。そして今回の逃走劇でも……」

「蒸し返す必要なくないです!?!」

「あの時もか……」

キバガミさんから優しさが消えている件。木偶では最後尾だったからバラさなければ誰にも知られない内容だったというのに、なんてひどい行為だ。

全員が可笑しそうに笑っている。私を除いて。こういうの酷いと思います。

「前方に魔物だ」

「む」

談笑しながらでも気の感知はちゃんとしていたらしいウーファンが忠告する。

出口までもうすぐなのに、魔物と遭遇とは。

それは赤い獅子の魔物だった。口元には真新しい血が滴り落ちている。そしてそばには食い荒らされた別の魔物。

「もう少しで出れるっていうのに、なんとも強そうな奴が来たな……」

「……待て、もう一匹来る」

武器を構えて臨戦態勢に入ると、ウーファンがさらに追加を察知した。

獅子の魔物っただけでも強力そうなのに、さらに来るなんてやめてほしい。

「……これは」

ウーファンが追加の敵が何かを言う前に、赤獅子が動きだす。獅子の魔物だけあって、その動きは機敏そのもの。威圧感と素早い動きによって接近をあつさり許してしまった。

「こいつ……!」

「ヌー……」

迫る牙をローゲルさんが砲剣で受け止め、それでも止まらない獅子をキバガミさんが金棒で殴り飛ばす。

吹き飛ばされた獅子は体勢を崩すことなく着地し、再度迫ろうと駆けだした。

——が、迫ることはできなかった。

「……なんで、金鹿がここに」

突如現れた金色の鹿が横から赤獅子を蹴散らしたのだ。

魔物同士の争い？ 金鹿のテリトリーは全然違う場所のはずだ。なんでここにいるのか考えてもわからない。

赤獅子が体勢を整える前に、金鹿が追撃のように何度も強く蹴りつけた。

やがて骨が砕けたかのような、重く鈍い音がすると赤獅子は動かなくなつた。

奇襲とはいえあの赤獅子を仕留めた金鹿。

今度は私たちを狙ってくるんじゃないかと思つたが、

「……何もしてこない？」

金鹿が道を譲るように横へと移動していった。

私たちに対して攻撃しようと構えてはいない。これは罠なのか、それとも人間より魔物を襲う習性があるのか、なんなんだこれは。

頭に色々浮かぶ中、ローゲルさんがぽつりと言つた。

「……帝国が調査打ち切りを決めて暗黒ノ殿を封鎖する際、それまで開けられっぱなしだった扉を見張っていたのは金鹿だったらしい。ただ偶然そこにいただけだと片づけられたが、もしかしたら暗黒ノ殿の魔物が外に出ないためにいたのでは、って意見を聞いたことがある」

「だから魔物を襲つたのか」

「たまたまって可能性もあるけどな」

そんな話しをしている間に、金鹿はなかなか道を通らない私たちにしびれを切らしたのか、私たちの横を素通りしていった。

「……最大の脅威がいなくなったことを悟って、残った魔物を倒しに行った……とかだったらいいんだが」

「案外そうかもしれないな。魔物の気に向かって真つすぐ向かって行った」

これなら犠牲者を弔うのも、案外早くできるかもしれない。

出口の光に向かって進みながら、明るい未来をなんとなく感じれた。

「タルシスだー!」

「タルシスー!」

タルシスの街門で私とシウアンが両手をあげながら大声を出す。ようやく帰ってきた嬉しさが噴出してしまった。時間はもう日が暮れて、晩御飯時だ。

「今日はもう疲れたし、ご飯も寝床もセフリムの宿で!」

「はーい!」

「帰ってそうそう元気だね……」

若人の元気にローゲルさんについて来れそうにないようだ。

もつとも、このテンションは他のメンバーもついて来れないけども。

テンションについて来れない系代表としてイシユがシウアンの前に立つ。

「シウアン、汝の気がかりはこれで完全に解決したか」

「うん。助けてくれてありがとう。今度は私がイシユの協力するよ」
「うむ」

その会話から、いよいよハイ・ラガード行きが迫ってきたとわかった。

「イシユ殿の故郷か。道中危険であろう。拙者も協力しよう」

イシユとシウアンの会話に入ってきたのはキバガミさん。

キバガミさんはイシユについてどこまで知ってるんだっけ。っていうかイシユの過去のやったことって私以外知らないのでは。

知らないなら知らないままでもいいかもしれないけど、もしもハイ・ラガードでエスバットの人たちのような被害者と会った際、ややこしくなる可能性もあるのかな。

「……我はシウアンを連れてハイ・ラガードに行く。ついてくるか決めるのは、もう少し待つがいい」

「ム？ 理由を聞いてもよいだろうか」

「ここで話すことではない。宿の部屋にて話す」

……イシユは過去のことを言うつもりなのかもしれない。

それを聞いてから、ついてくるか判断をさせるつもりだ。

「アルメリア、君はイシユの目的を知ってるんだよな」

「ローゲルさんは知らないんです？」

「あいつが呪われた君の体で実験をしたがってたことと、シウアンの協力を求めていることから別の地の呪い関係って予測は立ててるが、実際は知らないな」

「……たぶん宿で話しますよ」

イシユが造った魔物の解放。

その話を聞いて、ローゲルさんたちはどう反応するか。過去だけを見て嫌悪するか、彼らを解放しようとしているとこまで見て安堵するか、私にはどちらになるかわからない。

もしも離脱を選んだとしても、それは仕方ないことなのかもしれない

い。

セフリムの宿、六人が寝泊まり出来るよう大部屋を借り、予測通りイシユは自身の過去と目的を話した。

私にとって聞くのは二度目の話。

「——ゆえに、我は魔物となった者たちを解放するためにシウアンの協力を要求した。シウアンの力は世界樹のあり方に変化を与えることを、暗黒ノ殿で確認できたのは大きい」

イシユの話が終わり、それぞれの顔を見る。

ローゲルさんもウーフアンもキバガミさんも、表情は真剣そのものだ。冗談だと疑っている様子はない。事実だと捉えていた。

シウアンは目を瞑りながら、頭の中で話しの整理をしているようだった。

「我は魔物の解放のために、ハイ・ラガードに向けてすぐにでも出発したい。我は話した通り、決して善ではない存在。解放も贖罪のためなどではなく、我についてきた者たちの名誉を守るための行動だ。我の意志に賛同できぬと言われても仕方なきこと。ゆえに汝らは、ついて来るかどうか自由に決めてよい」

「私についていきます」

「……好きにするがいい。だがシウアン、汝は必ず連れていく。我に賛同できなくとも、魔物の解放には汝の力が必要なのだ」

「私は大丈夫。これまで助けてもらったからっていうのもあるけど、別の世界樹だけでも、世界樹のせいでも苦しんでいる人たちがいるのなら、私は助けたい。そのための力があるんだもの」

シウアンだけは強制という状態だけど、強制でなくても来てくれそうなのな雰囲気だ。

そして選択の自由が与えられた他の三人は、

「拙者も協力しよう。イシユ殿の話、思うところがないわけではない。だが今は何よりもまず、魔物とされた者たちを解放することが優先すべきことだと考える。そのためにも拙者の力、存分に振るおうぞ」

キバガミさんは協力を申し出た。

彼は武人肌であり、なおかつ心優しい戦士だ。里でも薬師として勉強に努め、常に誰かを助けることを優先していた。そんな彼だからこそ、何よりも魔物とされた人たちを助けることに注視した答えだった。

「悪魔と称したのは間違いではなかったか……」

「ウーフアン……」

ウーフアンはイシユのことを最初悪魔と罵っていた。その時は命を持たずに動くイシユの異常さを言っていたけど、今話を聞いて改めて出した答えが先の発言。

「だが……仲間を守るために悪魔の力を手に入れた、元弱い人間だということがわかった。始まりの志は褒められこそすれど、責められるべきではない。私も協力しよう。だが勘違いするな。私は悪魔に力を貸すわけではない。千年前に仲間を守ろうと奮い立った人間の遺志のために、力を貸すのだ」

なんだこの面倒臭い人。

聖樹の護りで逃げた人間に辛辣だった彼女にとって、最後まで抗うことを選んだ姿は尊ぶべきと考えたのかもしれない。でも言い回しが面倒臭い人だ。

「……アルメリアが以前、俺が千年前にイシュを信じてついていた人たちと似ていると称してた理由がわかったよ」

「彼らと胡散臭い汝が似ているわけがないだろう。ふぎけるな」

「……お前な」

ローゲルさんの言葉にイシュが喰い気味に否定した。本当、胡散臭いよねローゲルさんって。

「俺は正直、協力する理由がない。ギルドも違うし、俺が支えるべきは殿下だ。だが俺はもう帝国騎士じゃなくなった。一介の冒険者だ。まあ、あれだよ。冒険者としては、ハイ・ラガードの世界樹にも興味がある。だからハイ・ラガードに行くついでに、協力してもいい」

ギルドも違うしって、根に持ってないこの人？

ローゲルさんは以前、千年前と同じ状況を作りかけた。だからこそ、イシュの過去の所業を責める方向にはならない。彼は言葉通り、協力する理由はないけど、拒否する理由もない、まさに自由なスタンスになっていた。どんどん騎士から遠ざかってるよこの人。

これで参加者は全員となった。

最悪私とイシュ、シウアンの三人旅を覚悟していたから本当に良かった。

「ふむ……では出発に向けて明日動きだす。我はこの時代について詳しくはないが、辺境伯にも協力させればなんとかなるだろう」

「丸投げじゃないですか……」

「異国への旅路だ。何か紹介状が必要かもしれないにしても、馬車を手配してもらわねばなるまい」

馬車の手配がすぐにできれば明日、タルシスを出発ということか。

準備期間は全然ないけど、まあなんとかなるだろう。なんせこのメンバーは、聖樹の護り乗り越えて、そして暗黒ノ殿に潜んでいた厄災を止めたんだ。

そんな楽観的なことを考えながら、私は寝る準備を進めた。

最終章

72. 餞別の言葉を最果てより

タルシスを出ることを辺境伯に伝えに、私たちはマルク統治院に向かった。

私たち、と言っても説明はほとんどイシユがしたけど。一番の関係者であるからだ。

「そうか。イシユの目的のためにハイ・ラガードに、か……」

「汝には馬車と紹介状を用意してもらおう。ハイ・ラガードにはウロビトやイクサビトのような容姿を持つ者はいない。他国とはいえ一領主の言葉添えがあれば要らぬ問題も避けれるというもの」

紹介状ってそういう意図で求めてたんだ。てつきり世界樹に挑むための推薦的なモノを求めてたのかと。でもそうか。ウーフアンやキバガミさんの容姿はタルシスじゃ普通になっただけど、他の場所では目立つものだ。最悪魔物と勘違いされてしまう可能性もある。

「なるほど。それで私のところへ来たのだね。もちろんどちらも用意しよう。それよりも、諸君に尋ねたいことがあるのだがいいかね？」

「なんだ」

紹介状も馬車も了承の返事を得られた。

ハイ・ラガードへ向かう理由は話したけど他に何が気になるのだろうか。以前冒険者になるために訪れた時の問答をなんとなく思い出した。あの頃は猛反対を食らったんだっけ。今度はそうはならない、はず。

「イシユの目的が叶った後、どうするのか気になったのだよ。私個人の願いとしては、諸君にはタルシスに戻ってきてほしいと考えているが……」

ああ、戻ってくるかどうかの確認か。それは確かに気になるだろう。それに大事な点だ。おそらくイシユ以外はタルシスに戻る予定、

つまり帰路のことも考えないといけな。その点も辺境伯に甘えたいなーっと思ってしまう。

辺境伯の問いかけにそれぞれが答えた。

「拙者は無論、戻るつもりだ。里長としての務めがあるのでな」

「俺も戻るよ。殿下を支えるためにもね」

「私もこの世界樹から離れっぱなしは嫌だからちゃんと戻ってくるよ」

「方陣師を束ねる者として、私も里を長く空けるつもりはない」

考えたらみんな立場とかあるよね。

そういったしがらみが全くないのは私ぐらいである。人脈のなさが悲しい。

「私は……」

どうしよう。戻ってくるつもりだったけど、改めて考えると戻る理由がない。いや、家があるし、知り合いもできたのだから全くないわけではない。けどみんなほど強い理由じゃないのだ。でもでも、タルシスに戻らない理由もないわけ。

「……タルシスに戻ります。ただ、その後またタルシスを出たりするかもしれません」

私の返答にたいして、辺境伯は嬉しそうな顔で頷いてくれた。確かに一度は戻るという答えに対してははず。

「イシュ、君はどうするつもりかね？」

唯一回答していないイシュに辺境伯の視線が動く。

イシュの答えは、

「我は城へ、我の領地へ戻る。このタルシスには我の居場所はない」

予想通り、戻らないという答えだった。

「そんなことはないが……強要するわけにもいかないな。だが、これだけは覚えておいてほしい。イシュ、君がタルシスに訪れてくれることを、嬉しく思う者は多いのだと」

辺境伯は、当然私もその一人だと最後に付け加えた。

その言葉に対してイシュは何も返さなかった。

出発は二日後となった。

それまでは準備期間。といっても普段通りの冒険必需品を用意するだけだ。あとはしばらくタルシスにいませんって挨拶周りとか？

というわけで、みんなそれぞれ里に戻ったり、親しい人に挨拶に行ったりすることにした。私もイシュと一緒にタルシスでお世話になった人たちに挨拶である。

セフリムの宿に、ベルンド工房、踊る孔雀亭にカーゴ交易場、冒険者ギルドにも顔を出さないとかな。

そんなわけでまずはセフリムの宿である。

初めて訪れた時は、女将さんが返り血まみれの笑顔で出迎えてくれた恐ろしい思い出の施設。最近の思い出としては、エスバットの人たちと会話した施設だ。

……エスバットの人たちと会ったら、もうすぐお姉さんが解放されると伝えるべきだろうな。

「あら、アルメリアさんにイシュさん。こんにちはー。今日も泊まってくれますか?」

「女将さんこんにちは。今日は挨拶に来たんです。しばらくタルシスを離れるんで」

返り血はなかった。

そんな当たり前なことが心底安心させてくれる。それが正しい宿のあり方なんだけども。

「わざわざ来られたということは、今までより遠い場所へ冒険に行くんですか?」

「はい、二日後にハイ・ラガードに向けて」

「寂しくなりますね……でもしばらくということとは、また戻ってくる

んですね。そうだ、よろしければ今日はうちで食べていきませんか？
無事に戻ってこれるように腕によりをかけて作りますよ」

「いいんですか？」

「はい、アルメリアさんたちにはごひいきにしてもらってますし、お代も結構ですよー」

嬉しい提案に感謝と、また夜に来ることを伝えて他の人たちにも挨拶へ向かうことにした。

ちなみにエスバットの人たちはまた別の地に旅へ出たらしい。少しだけ、ほつとしてしまった。

続いて訪れたのは踊る孔雀亭。

丁度そこにはウイラフさんやキルヨネンさんなど他の冒険者もいたので軽く挨拶。碧照でのミッションや絶界雲上域と一緒に戦った人たちにも同じくだ。

キルヨネンさんはまだしばらくタルシスにいるが、いずれは一度祖国に戻る予定らしい。それに氷竜探しはまだ続けるそうだ。

ウイラフさんもタルシスにまだいるにはいるが彼女もまた、別の地へ旅に出る予定だそう。まだ行先は決めてないんだけどね、と笑っていたけど決めたらすぐにでも出発しそうである。

とにかく今はタルシスで稼いでからだそうで、ウイラフさんもキルヨネンさんも、これから食料品を調達していくそう。ブラックタウルスと七香銀アユ探しに行った。

「気ままに旅をできるっていうのは冒険者のいいところよねえ」
ウイラフさんたちとの会話を聞いていた店主さんの言である。

「危険がつきものですけどね」

「そうよね。でもあなたたちを見てみると、とても危険を乗り越えてきたって感じには見えないのよね……」

「褒められてる気が全くしないんですけど……」

「それだけ安心感があるってことよ」

物は言いようである。

「それにしても……すごく賑やかになりましたね、ここ。初めて来た時よりもずっと……」

「何せウロビト、イクサビト、帝国といろんな人たちが訪れているもの。それに黒い依頼書もなくなって、すっかり大繁盛よ。依頼なんて奪い合いですぐに消化されちゃうわ。みんなちゃんと報告をしてくれるしね」

「その節は申し訳なく……」

でもあれはイシュが悪いんだってば。そんなことを言っても言い訳になるだけだから言わないけども。

「ふふ、冗談よ。あなたたちもしばらくタルシスを離れるんでしょ？ それまでにもう一度、こうやって揶揄いたかったから言っただけよ」

「私はまた説教が始まるのかとビクビクしたので勘弁してほしいです……」

「まあ、ハイ・ラガードだっけ？ あまり問題起こさないようにするのよ？ 特にイシュ」

「我は問題を解決に向かうだけだ。問題を起こすはずがない」

「……アルメリア、頑張ってるね？」

あ、これは保護者として頑張られて意味だ。

その言葉に苦笑いを浮かべながら頷く。もつとも、そんなに心配する必要はもうないと思っっているけど。

「タルシスにこれだけ色々な人が住むようになったのは、あなたたちのおかげでもあるの。きつかけとなったギルドがいつまでもいないんじや締めりがいいわ。だから、お早いお帰りを、ね？」

「はい……」

続いて冒険者ギルドへ。

ここに訪れるのもどれほどぶりのことか。碧照のミッションでしか来たことないや。

でも感謝の割合は高い。何せお守りとなっている白い笛をくれた

場所でもあるのだから。

そんなわけで冒険者ギルドへの挨拶も欠かせないと思い、扉をそつと開けば、

「ヌウンツ!!!」

私はそつと扉を閉めることにした。

「汝は何がしたいのだ」

「いや……ちよつと眩しい光景だったので……」

「わけのわからぬことを」

今度はイシユが扉を開けた。

「うおおおおおおお!!!」

扉を閉めることはなかったけど、心なしか面倒臭い雰囲気漏らししている。

あんな熱心に鍛錬している人に話しかけるのはなんか、抵抗あるよね。

「ぬ？ お前らか。話はすでに辺境伯から聞いているぞ」

扉が開きつぱなしだったからか、ギルド長が私たちに気づき声を掛けてきた。見つかってしまったからには当初の予定通り挨拶決行コースだ。

「旅支度は進んでいるのか？ 今度はハイ・ラガードの世界樹へ挑むらしいな」

「挑む、というには語弊がある。我はハイ・ラガードの世界樹にある我が城へと戻るのだ」

「相変わらずよくわからん奴だな。だがそんなお前たちがこの街に多くのモノをもたらしてくれた。次の目的地についてはワシにはわからんが、礼を言わせてくれ」

ギルド長は頭を下げて感謝の言葉を告げた。

なんともこそばゆい。イシユはイシユの目的のために動いていたし、私も自分で自分の呪いを払うために動いていたのだ。それなのにこんな感謝、なんとも落ち着かない。

「これからお前たちに幸多からんことを」

「……」

「ありがとうございます」

強面で暑苦しい人だけど、基本的にいい人なのだ。ただ強面で、暑苦しくて、やたら眩しくて、地図の描き方が荒くて、デリカシーがやや欠けていて……あれだ。人というのは悪い面をよく見つけてしまいう生き物なんだ。だから欠点を見つけても、まあ仕方ないことなのだ。

「またタルシスに戻ってきた時は顔を見せに来い。さらに強くなったお前たちの姿をな。腑抜けているようだったらワシが鍛えてやる!」

「お、お手柔らかにお願いしたいです……!」

「そこは期待するな!」

「何故そういう点だけ後ろ向きなんです!?!」

腕を組みながら豪快に笑うギルド長。なんともしんみりした空気が続かない相手だ。

カーゴ交易場。

ここによく訪れていたのはイシユであって私ではない。交易長はどこに普段いるのだろうかと悩む私よりも前へ前へとずいずい進んでいくイシユ。完全に慣れた足取りだ。

「あんたらか」

タルシスの強面人相組の一人、交易長がほどなくして見つかった。なんで来たのか、といった疑問はなく、むしろやっぱり来たのかみたいなニュアンスの言葉だった。

この人ももしかしたら辺境伯から聞いているのだろうか。私たちがハイ・ラガードへ行くことを。

「……悪いな、まだノアは直ってねえんだわ」

「今回はそのことについてではない」

「ああ。ハイ・ラガードへ行くんだってな。現状の気球艇じゃ、ハイ・ラガードまでの遠征は持たねえ。というかそもそも向こうさんの受け入れ態勢も整ってねえだろうからな。気球艇をより広めるためには、タルシス以外にも宣伝していかねえと話にならねえ」

この人はまず気球艇第一である。初めて会った時も気球艇への熱いこだわりを見せていた。名前を付けないと気球艇あげないよ、的な。

「……正直言うともよ、あんたらをどう送りだせばいいかまとまらないんだわ。だからつい、気球艇の話をしちまう」

どこか恥ずかし気に、頬をかきながら彼は言い訳のように言った。「問題ない。我がここに来た理由は、タルシスを出ることを伝えるためだけだ。汝から送られる言葉があるうがなろうが、我の行動に変わりはない」

「……つんとうに、ボンクラだな。こういう時はもつと気の利いたこと言えつての。嬢ちゃん、こいつと旅するのは大変じゃなかったか？」

「えつと……た、たまーに？」

「苦労してんだなア……」

突然私に話を振るのはやめてほしい。おかげで微妙な返事になってしまった。

私からイシユに視線を戻した交易長は、頭をガジガジと掻いて目をつぶって言う。

「まあ気の利いた言葉なんて言ったところで、ボンクラ相手じゃ意味ねえか。……まだしばらくノアの修理には入らねえけどよ、必ず直す。だからあれだ。ちゃんと引き取りに戻ってこい」

「我はタルシスに戻ることはない」

「それも辺境伯から聞いた。けど先の話だ。絶対なんてことはねえ。だから気が変わったら引き取りに來い。嬢ちゃんは気球艇の操縦ができないんだからな」

「……」

さらつと私がディスプレイされました。

いや、実際操縦できないけども。でも気の利く私はここで野暮なつつこみは入れない。

「わかったな!？」

「……可能性はないに等しいが、汝の好きにするがいい」

「おうー」

可能性はないに等しい、けどゼロじゃないという意味でもある。本当に僅かに、ちよつぴりだけイシユの戻る意志が出たことに対して交易長は嬉しそうにした。

最後に訪れたのはベルンド工房だ。

そういえばこの親方さんの姿、見たことない。いつも対応が店員の子だったから。改めて親方さんと挨拶したら初めましてからになるしいか。

そんなことを思いながら工房に入るとすぐにいつもの子が出迎えてくれた。

「いらつしや……あー!!」

「はいっ」

いつもの出迎えの挨拶は中断され、大声をあげながらイシユに向かって指をさす。あら、お行儀の悪い。

「もしかしてまた剣を壊したの!?!」

「あ、そういう……」

この子はまだハイラガへ出ることを聞いていないようだ。しかし今回はいつもの用件ではない。あ、でも……

「うむ」

「うむ、じゃないよ!?!」

そういえばイシユはまた一本、剣を壊していたんだ。なんだかいつも通りの展開になってしまっそうだ。とかすでになっっている。

「あれほど大切に使用って言ったじゃん!?! 今度はどうやって壊したの!?! 見せて!! ……また何か硬いものを力任せにぶつけたでしよ!?!」

「魔物の硬質化が原因だ。我に責はない」

「刃こぼれどころかポツキリ折れる時点で力の入れ方がおかしいんだってば!?!」

二人の言い合いが面白いのか、他のお客さんや店員が楽しそうに眺

めていた。まあどちらも珍しい姿ではある。イシユが怒られっぱなしな場面なんてレアだし、この店員ちゃんが大声で怒る場面もレアなのだ。

とはいえいつまでも続けさせるわけにもいかない。

「えっと、今回はちよつと挨拶に来ただけで……」

「へ？ あいさつ？」

「しばらくタルシスを離れるんで、お世話になった挨拶をちよつと」

「え……？」

何を言っているか理解していない表情だ。

しかしやがて意味を呑み込めてきたのか、だんだんと驚愕の表情へと変わり、

「ええーっ!？」

再び大声を出してその驚きを露わにした。

「タルシスを離れるってどういうこと!? なんで!？」

「お、おおう。ハイ・ラガードに、イシユの目的があつて、それで、タルシスを離れる、ことに」

すぐく肩を揺さぶられて辛い。そして何気にこの子も結構力があることに戦慄した。下手したら私よりあるこの子……工房という環境のためなのだろうか。

「ハイ・ラガード……そっか」

「は、はい」

急に落ち着いた。この子もハイ・ラガードに何か思うことがあるのかと考えを巡らし、そういえばと思いいたる。

「それじゃああの剣、ようやく吊つてあげれるんだね」

「はい、そうなりますね」

イシユが最初使っていた剣。元はハイ・ラガードの冒険者のものだ。イシユが死体から回収した遺品。この子はその剣について聞いていた。

もはや遺族を探すのも難しいが、それでも本来の所持者の、最期の地に戻せるだけマシだろう。

「それなら止めるわけにはいかないよねっ！ それにイシユさんみた

いに武器を破壊するような人、ウチじゃないと対応できないもんねっ！」

「我はタルシスに戻る予定はない」

「ええ!？」

体全体を使つてのオーバーリアクションを見せてきた。相変わらぬの元気いっぱいなご様子。

「そういうこと言っちゃうんだ！ いいよ！ イシユさんがそのつもりなら私が出張して押しかければいいもんねっ！ その分出張料金として割高にするんだからっ！」

「押し売り……」

「それが嫌ならちゃんとタルシスに戻ってきてよっ！」

「それよりも剣が一本足りぬのだ。出来合いのものでいい」

「今の流れで!? マイペースすぎるよ!？」

案外イシユとこの子は、相性がいいのかもしれない。見てるだけではない。なんだか楽しくなれるやり取りだ。

購入した剣はカツツバルゲルというもの。鰐が独特な剣だった。ついでに私も投刃用ナイフを何本か売ってもらおうとすると、

「ルーンマスターなんだよね……?」

「まあ……一応……」

「いいけどさ。何気に結構ナイフ使ってるよね……」

「い、いいじゃないですか!」

「せっかくだし、コレも使ってみる?」

「はい?」

見せられたのはやけにごわごわしたマント? いや、これはクロークかな。それにしてもごわごわ感が強いけども。

「ナイトシーカーの人たちがよく使うんだけどね。防具……とは言えないけど、使い方次第じゃ攻撃を凌いだりできるんだって」

「へー、その使い方ってどんな風にです?」

「えっとね……全身を包んで隠れたり……」

「すぐく場所を選びそうなの……」

それは攻撃を凌ぐというより戦闘を回避する使い方では……

「他にも広げて使うといいらしいよ！　なんかね、姿を見失いやすくするんだって」

「いまいちわからない。広げて投げつけるとか？　それで影に隠れて不意討ち的なの。」

「まあナイトシーカーじゃないけど結構向いている気がするし、重いわけでもないし、クロークだから今の服の上からも身につけられるし……うん、結構よさげかも。」

「じゃあこれも購入します」

「まいどありー！」

「思わぬ出費だけと思わぬ掘り出し物、そうなるもいいけども。」

一通り挨拶巡りを終えて、夕飯を呼ばれにセフリムの宿に戻る道中、イシユと二人。

「今日のやり取りを思いだしてふと言った。」

「みんな、イシユもタルシスに戻ることを期待してましたね」

「無意味なことだ」

「でも戻らないと出張料金とるって工房で言われましたしね」

「あれは勢いで言っただけのことだろう」

「勢いがつくほど、イシユとの別れを惜しんでるんですよ」

「減らず口と言うやつだな」

「かもしれない」

「この時代のタルシスの人たちはもう、イシユを受け入れているのだ。千年前の人たちとは違う。」

「まだイシユの中の、千年前の人たちは重く存在するけど、少しは別の場所へ目を向けられるようになっていると私は考えていた。」

「もしかしたら、タルシスにたまには自発的に訪れるようになってくれるのではと、そんな風に……私は考えていたのだ。」

73. 世界樹の麓の国

タルシスから馬車に揺られ揺られて、おおよそ三月ほど。

道中は平和そのものだった。馬車に備え付けられている獣避けの鈴が万全に発揮しているからか、それとも世界樹が近くにないために魔物がいないのか。

こうして考えるとタルシスって結構危険な地だったのだと実感する。

とはいえ安全な旅路というのはなかなか退屈なものだった。それももうすぐ終わる。

その理由は馬車の御者さんが教えてくれた。

「見えてきましたよ。あれがハイ・ラガード公国です」

「わあー」

シウアンが感嘆の声をあげる。

巨大な世界樹と、その麓に広がる国の姿が見えてきたのだ。国の周りは断崖絶壁になっていて、繋がっているのは長い橋だけ。橋以外の出入りできそうな道はない。

あんな場所に国があるなんて、危険性はないのだろうか。世界樹には魔物がいるって話なのに。

「ハイ・ラガードの冒険者には入国試験があるので、まずはラガード公国に行ってください」

「入国試験？ どんなことをやるんだい？」

「自分も内容までは知らないですが、タルシスで大活躍されたギルドであれば問題ないでしょう」

「ハードルがあがってますね……」

「それにしても入国試験か。」

タルシスでも辺境伯からの試練があったつけ。気球艇の動力を手に入れてくるっていう簡単なやつ。それと似たようなものだろうか。

だとしたら楽だけど。

「一時期は試験で多くが命を落としたって噂です。エトリアで慣らした冒険者までも」

「試験とはいったい」

世界樹での冒険で命を落とさない実力があるか調べるものだと考えていたけど、その前に命を落とすとかどうなっているのだ。

「一時期は、ですよ。最近じゃすっかりそんな噂も聞かなくなりましてから」

「噂にならないほどに挑まなくなつたとかじゃないだろうな……」

「噂には尾ひれがつくもの、と思いたいのだが……」

御者さんはあははと笑っているけど、私たちには笑いごとではない。

ただ大げさに言ってるだけだと信じよう。うん。

それにもう、ハイ・ラガード公国に入るのだから。

ハイ・ラガードへ入る橋の先には門があり、そこで一度馬車は止まった。タルシスの兵士と違い、重装備な兵士が入国目的の確認にやってきたのだ。

このやり取りをスムーズに済ませれるように、辺境伯の紹介状を用意してきた。そのため紹介状を持つイシユが対応しようとしたところ、相手の兵士が反応した。

「あれ？ 君はあの時の子だよな？」

「なんのことだ」

「あ、この格好じゃみんな一緒に見えちゃうよね。一応シトト交易所まで案内したんだけど……」

「汝はあの時の兵士か。なんだってよい。タルシスの領主からの紹介状だ。これを然るべき者へ渡せ」

まさかの知り合いさん。

と言ってもそれほど親しくはなかった感じだ。というかただ道案内しただけの様子。それでも完全な初対面ではなく少しだけ友好的

な感じに接してもらえらるぶんお得だ。

「紹介状……公宮に持っていけばいいかな。そういえばタルシスに探し物があるって言ってたけど、見つかったのかい？」

「でなければ戻ってきてはいない」

「そっか。何かわからないけど良かったよ。紹介状もあることだし、公宮まで一緒に来てもらっていいかな」

仲間の人たちも一緒に、と言われたのでここで馬車の御者さんとはお別れである。馬車からウーファンとキバガミさんが降りた時、検閲の兵士たちが一瞬戸惑った気がした。だけどそれもすぐに収まった。「……気を悪くさせたら申し訳ないけども、そこの方たちは魔物ではないよね？」

イシユと話していた兵士の人が、恐る恐る尋ねた。

この質問は二人にとつてあまり良い気にはならないだろうけど、それでも問答無用で武器を突き付けられたりといった可能性を考えていたのでだいぶマシである。

「魔物ではない。この者たちはウロビト、イクサビトと呼ばれる種族だ」

「紹介に預かったイクサビトのモノノフ、キバガミだ」

「ウロビトの方陣師、ウーファン」

このハイ・ラガードでは見慣れないものに対して排他的になるか、それとも友好的態度で接してくれるか。兵士の反応次第で色々今後変わってくるかもしれない。

フルアーマーな鎧姿からじゃ顔は見えないけども、挙動から察しようと注意深く見る。

「イクサビトの人にウロビトの人だね。それじゃあ公宮まで案内するよ」

……なんともあつさりである。

そこには異種族への警戒も、未知への恐怖もない。理想的な反応すぎて逆に不思議な感覚。

ウーファンも同じことを思ったのか、複雑そうな表情で兵士に言った。

「……随分と門を広く開けているのだな。自分たちと違う種族をこうも容易く受け入れるとは……いや、すまない。感謝こそすれど、疑念を抱くのはおかしい話だな」

「あはは。少し前まではもつと違う反応だったかもしれないけどね。この国じや違う種族と共存しているんだ」

「違う種族？」

「うん。翼人と言ってね、彼らは普段は世界樹の中で暮らしてるんだけど、時々街まで降りて交流しているんだ。だいたい一年ぐらい前かな。彼らと交流が始まったのは」

翼人……それって確か、イシュが創ったっていう種族。

「あの者たちが、この時代の者と共に歩みだしているというのか……」
「会ったことあるんだね。まあ彼らの文化は僕たちと異なっているけど……それでもそうだね、今じゃ隣人みたいな関係かもね」

「そうか……」

翼人とイシュとの関係。創造主と創られた種族としか知らないけども、何か他に繋がりがあるのだろうか。それとも創った種族への母性、いや父性が湧き出てきたのだろうか。そんなことを思わせるイシュの反応。

公宮までの案内の間、他にも色々と兵士の人は話してくれた。結構お喋りな性格のようだ。

それに対してイシュは基本的に無言、無視。もっぱら話を聞いているのはローゲルさんとシウアンだ。ローゲルさんは色々楽しそうに情報を聞きだしている。今までの経験と好奇心のかみ合った行動だろう。シウアンの方も好奇心にあふれた結果だと思う。

私も聞いてはいたけども、話の内容はなんとも毒にも薬にもならないものばかり。公国直営のレストランのメニューが見た目ヤバイだの、酒場の親父さんがリアルな犬の人形を買っていただの、そんな世間話レベルの話ばかりである。

いや、こういう話が本来普通なのか。世界樹の情報について聞けばかなりなのが異常なのかもしれない。

「……随分と饒舌な兵士だったな」

「ですね……」

私とウーファンの意見が合った。

件の兵士は大臣さんに紹介状を渡しに行つてこの場にはいない。

「まあおかげでいろいろ知れたじゃないか」

「ほとんど有益な情報とは思えなかつたんですけど……」

「だけど彼との交流になつただろ？ 知り合いは多いにこしたことはないや」

そんなコミユ力は私にはない。けどもまあ、ちよつとずつ頑張つてみよう。もう引きこもることはないだろうし。

のんびり駄弁りながら待つていると、やがて先の兵士さんと一緒にお爺さんが奥からやつてきた。あの人が大臣なのだろう。

「お待たせしたようすな、タルシスより来られた冒険者の方々」

背筋がやや曲がつており、かなりの高齢を思わせる風貌だけでも声はしっかりとしたものだ。あまり執政者や高官の人を知らないけども、その目は優し気にも感じれた。

「この老体は大公さまに仕え、この国の政を司る按察大臣である。その中には世界樹へ挑む冒険者たちの管理も携わつておる」

そこまで話して大臣は、辺境伯が用意してくれた紹介状を取りだした。

「そなたたちがタルシスでも歴戦の冒険者とその紹介状に書いておつた。しかし何処の英雄であろうと、この国で世界樹に挑むには公国民となる必要があるのじゃ。そして冒険者が公国民となるためには、大公宮から出す試練を乗り越えてもらわねばならん」

「必要性が理解できぬ。世界樹の麓にある国だからとて、何故この国の民にならねばならぬ」

イシユのこの物言いに大臣は特に気にした様子はない。ひよつとして冒険者つてイシユみたいな人が多いのだろうか。

「公国民になると言つても、何も縛りつけるわけではないのじゃ。世界樹への入口は公国の中にある。国民ではない者に自由に出入りさせることは、国民への危険が及ぶ可能性もある。それに、世界樹に挑むことは命に関わること。異国の立場の者が挑み、命を散らせたとな

れば外交問題にも発展する可能性がある。そのため、世界樹に挑む者は公国民の立場を持ってもらわねばならんのじゃ。わかってもらえるかな？」

少し長い話だったけどなんとなくわかった。

とりあえず公国民になつたらいいよ、つてことだろう。うん、そんな理解で十分はず。

「一応聞いておきたいんだが、俺たちはこの国に永住するつもりはない。というか目的を果たしたらすぐにタルシスに戻る予定だ。それは可能なかい？」

「もちろんじゃ。公国民という立場になつたからといっても、そこに何らかの税を掛けたり行動を縛るつもりは毛頭もない。仮に、この国を気にいり永住したいとなつても歓迎じゃよ」

あまり政治の世界を知らないけども、なんとなくこの人は善意の塊みたいなイメージを持ちつつある。私が単純なのか、なんだか親しみやすい感じを覚える。

まあ政治の世界を知つてそうな知り合いなんて、辺境伯ぐらいだしなあ。辺境伯は悪人面だけでも善人だった。この大臣は……どつちかっていうと悪人面だ。じゃあ大丈夫だ！

「汝の話、理解した。それで試練の内容はなんだ」

「試練は世界樹の迷宮一階の地図を作成するというものじゃ」

楽勝だわ。

地図の申し子を自称する私には楽勝の試練だ。

「当然、一階といえども魔物が現れる。時間の制限はないためそなたたちのペースでじっくりやっていくとよろしい。あとの詳しい話は一階にいる衛士に聞くのじゃ」

そなたたちのペースでじっくりと言われたけども、その日のうちに試練は達成した。

浅い層だけあって、出てくる魔物も大したことがない。奇襲を受けたら別かもしれないけども、ウーファンの方陣は別の地であっても

問題なく発動する。そのため魔物の接近も即座に気づけるのだ。
そのためすぐさま公宮に戻り報告となった。

「これほど早く終わらせるとはの。さすがはタルシスの世界樹を踏破した方々じゃ」

「あの程度の試練、ないに等しいものだ」

辺境伯にだけでなく、ハイ・ラガードの大臣にすらもこの態度。まあこれはイシユだけじゃなくローゲルさんもたいがいだっただけでも。幸いというか、心が広いとでもいうのか、大臣は気を悪くした様子はない。

「ではこれを受け取りなされ。この公国の民である証じゃ。それと、ひとつ聞いてもよろしいかな?」

渡された国民証はとりあえず鞆にしまおう。これも一種の記念品になりえるし、お土産話の小物として使えるだろう。

大臣への対応はイシユに任せておく。

「何が聞きたい」

「世界樹に挑む目的について聞きたくての。一年ほど前までは公国からも世界樹の踏破に報奨を用意しておったが、今はもうそれもない。タルシスの世界樹を踏破した方々が何を目的としておるのか、この老体は気になつての」

目的。

それは魔物にされた人々の解放だけでも、イシユはどう答えるつもりなのだろうか。キバガミさんたちに正直に語ったのは一緒に行動するからだろうけど、大臣は別だ。それでも構わず正直に話すのか、ぼかすのか。

「この世界樹にいる不死の魔物。それを完全に死なせるために我は来たのだ」

「不死の魔物……」

「冒険者の管理もしているのであれば、汝も知っているはずだ。キマイラ、炎の魔人、スキュレーなどの各階層ごとに配置された番人を」
「やはりその魔物のことを……あの魔物たちの存在は大公さまも頭を悩ませておる。しかし、幾度となく討伐しても、いつの間にか再び姿を現す存在じゃ」

「そのことについても知っている。そして解決策の用意は済んだ。哀れな魔物はその生をついに終えることができるのだ」

その魔物を造ったということをしゅは伏せている。たまたま言っていないだけか。

「タルシスの方々が何故この世界樹の魔物を存じているのか知らぬが、あまり無理をされぬようにな。それと、樹海の中には翼人と呼ばれる方々が暮らしておる。樹海に存在するすべてが害意を持つものではないことを忘れぬようお願いするぞ」

「問題ない」

大臣は今の魔物の話は半信半疑といったところだろうか。大臣から見れば、よその冒険者が不死の魔物の事情を知っており、そして解決方法を持っているなんて都合が良すぎることだし。かといって全否定するわけでもなく、ただ他の冒険者と同じような扱いをするしかないってところかも。

もう話すことも済んだのか、ラガード公宮から離れようとする私たちを大臣が見送った。

「そなたたちの活躍、期待しておるぞ」

たとえば半信半疑だとしても、事実であれば彼にとって、いや、国にとって非常にうれしい話なのだ。今の見送りの言葉には嘘は一切ないと思えた。

「それじゃあ早速世界樹に行く?」

噴水広場でそう切り出したのはシウアンだ。もう試練も終わったしすぐにでも行くことが可能となった。タルシスじゃそもそも世界

樹の麓へ行くのが大変だったのに、と思わずにはいられない世界樹との距離。

「馬車による長旅に入国試験と続いたんだ。さすがに休まないか？」
「我に休息は必要ないが……いいだろう」

休みを求めたのはローゲルさんだ。少しだけイシユは渋ったけども反対はしなかった。

私はまだ休まなくても平気だけど、頂上が見えない世界樹を見上げると休みたくなる気持ちが湧く。ゴロゴロしたい。

「それにしても、この世界樹を登っていくんですよね。一日じゃ登り切れなさそう……」

「最短を進めば二日ほどで登り切れる」

あ、そうか。イシユはこの世界樹については詳しいし、迷うことはないのか。ということとは地図が不要……？ それは困る。描かないと手が震えてしまいそうだ。うん、描こう。不要と言われても描いていこう。

「世界樹上層は強力な魔物がいるんだろ？ そんなハイペースで大丈夫なのか？」

「我は天ノ磐座の主。天ノ磐座以下の階層の魔物は我の管理下にある」

「つまり、戦闘にはならぬということか？」

「うむ。最大の問題は天ノ磐座より上、禁忌ノ森の魔物だけだ。世界樹内部で休むのであれば我が城を使えばよい」

「なんにしろ、途中休む予定地である天ノ磐座とやらまでは厳しい状況にはならないってことか」

地図の決意を固めている間に城で寝泊まりできることが発覚。お城である。

お城で寝泊まりなんて今から緊張してしまう。それが無人のお城であったとしてもだ。

そんな話をしている中、聞いたことのない女の子の声が入ってきた。

「ひよっとしてイシユさん……？ お久しぶりです！ 戻ってきてた

「んですんねっ！」

イシユの名前を呼んだのは、ひまわりの髪飾りをした女の子。歳はだいたいベルンド工房の店番の子ぐらいだろうか。随分と若い。

「汝は……交易所の娘か」

「はいっ！ あの時のスカーフ、使ってくれてるんですね！」

そう言っただけで彼女はイシユの頭巾を見た。ひよつとして、この子からもらったものだったのか。唯一のおしゃれアイテムが少女のプレゼント……

「うむ」

「そういえばタルシスの世界樹が踏破されたって聞いたんですけど。もしかしてイシユさんだったり……とか……」

「うむ。我とそこの者たちでタルシスの世界樹は解明された」

「！ すごくいですー！」

ベルンド工房の時といい、ひよつとしてイシユは少女と相性がいいのだろうか。幼い系と……考えたらイクサビトの里でも子供から人氣があつたし……

「あ、すみません。急に話しかけちゃって。タルシスの冒険者の方たちですよ。私はシトト交易所でお手伝いをさせてもらっているエクレアです。冒険に使う武器や医薬品を扱っていますので、ご入用でしたら是非来てください！」

「私と同じぐらいなのにすごいしっかりしてるんだね」

「なに、シウアンも負けていない」

ウーファンは置いといて、シウアンと同じような感想が私にも出てしまう。さらっとお店の宣伝を混ぜつつ挨拶を行うとかこの子の対人能力は高い。

エクレアちゃんの挨拶を受けて、私たちもそれぞれ挨拶を返している中。イシユが金髪をまとめていた頭巾を解き、それを手に持ってエクレアちゃんに渡した。

「イシユさん？」

「これは元々汝の物だ。我は今後使う予定もない。ゆえに汝に返す」

使う予定云々はともかく、返すなら一度洗ってからとかが普通だと

思う。

「いえ、これは差し上げたものですし、イシユさんの好きにしてくれたらいいですよ」

「ならば勝手に汝へ譲ることとしよう」

イシユは頑なに返品しようとしている。正直頭巾のないイシユの姿はなんとなく新鮮だけど、不思議な感じがするのであってくれたほうが私としてはいい。

けど言ったところであの様子じゃなあ……

「ですが……」

「不要であれば捨てればよい」

「……わかりました。でもせっかく似合ってたんですし、気が変わったら取りに来てくださいね！」

ややしぶしぶと言った感じだけど、彼女はイシユからスカーフを受け取った。

「うむ。だが捨てても問題はない」

そう言つてイシユは、ぎこちない手つきでエクレアちゃんの頭を撫でた。

頭を撫でた。

誰だあの人。

「あまり子供扱いしないてくださいよイシユさん」

「子供は子供だ」

「もう……あ、私はもう行きますね！ 基本的にシトト交易所にいますから、いつでもご来店お待ちしております！ それでは失礼しますね」

頭を下げて去って行くエクレアちゃんを見送ったあと、平然とイシユは言った。

「では行くか。まずはこの街の宿へとな」

一方で私は……いや、私だけじゃなく皆も微妙な顔である。

あのエクレアちゃんへの対応はなんなのか。タルシスじゃあんな姿見たことないというのにアレは何なのか。説明がほしいところだけど上手く要求できない。というかイシユはもう元通りである。あ

れか、ハイラガという故郷がかつてあつた地だから浮かれているのか。

なんとも釈然としないまま、私たちは宿へと向かうのだった。

74. 其の罪を背負う資格

フロースの宿でチェックインを済ませ、今日は一日それぞれ体を休めることとなった。

キバガミさんは武具を見にシトト交易所へ、ウーファンとシウアンは公国直営のレストランへと行った。ローゲルさんは適当に街を見ていると行ってどこかへぶらり。

みんな肉体的な疲労より精神的な疲労を取り除くための一日のようだ。

そんなわけでみんな出かけて、宿の部屋には私とイシュのみ。私は一日ゴロゴロするつもりだ。イシュもきつと出かけないのではと思っていたけども、イシュは剣を持ちだして出かける準備をしていた。

「その剣……」

ベルンド工房で買った剣ではない。イシュと出会った頃から持っていた剣だ。それを持ちだすということは、弔いに行くのだろう。

私もついていこう。ないとは思うけど、適当に世界樹内に置くだけとかしちやわらないように。

「私も一緒に行きます」

「そうか」

あまり関心のなさげな返答。だけど構わずついていく。

奥深くまで行く気はないけど、私たちは今日世界樹へ行くことにした。

「あれ？ 君たち二人だけでどうしたの？」

世界樹への入口で、兵士が声をかけてきた。全身鎧でみんな一緒に

見えるけど、この声とやけにフレンドリーな感じなのは誰かわかった。顔も名前も知らないけどもわかった。入国時に対応した兵士だ。「遺品を弔いに来た。大勢で行く理由もない」

「……そっか、じゃあせつかくだから一緒に行かないかい？」

「何がせつかくなのだ」

イシユじゃないけど本当に何がせつかくなんだ。

その疑問はすぐに答えてもらった。

「僕もお墓参りをしに行こうと思ってたからね」

「世界樹内に墓所などないはずだが」

「うん。だけど名も無き墓ならいくつかあるんだ。君たちも遺品を弔うならその近くの方がいいと思うよ」

樹海内での拾得物は拾った者の所有物になるからお墓の近くじゃないと取られそうだしね、と兵士は続けた。

よく見ると兵士の人は花を鞆に入れてあった。本当にお墓参りの予定があつたんだろう。同僚が死んでしまったからお墓参りをしに行くのかと考えたけど、名も無き墓と言ってたし何か違和感。

「名も無き墓って、知り合いの方のじゃないんですか？」

「うーん、どう言えればいいかなあ」

兵士は少し考え込む仕草をとった後、

「知り合いの……というか世話になつた人へのお墓参りなんだけだね。まあ、死体が見つからなかったんだ。ここはそういうことが多かったからね。言ってしまうえば慰霊碑への参拝かな」

死体が見つからない。理由はいくつか思い至る。それにより、どうしようもないやるせなさが心を覆ってしまう。

この国にいと、イシユの過去の悪行がどこまでも追ってくる……

「我はこの遺品の剣を弔う。所持者が誰かは知らぬが、それでも問題ないか」

「この剣の紋章……」

私だけが沈みかけていた間にイシユと兵士の話は進んでいた。兵士が遺品の剣をまじまじと見つめてこの発言。

紋章なんてあつたつげと思ひ私も横から見ると、刀身の根元に紋章

があった。その紋章で何か気づいたようだから、もしかしたら所持者の知り合いだったのかもしれない。

どこで拾ったのか詰め寄られるか、もしくは外へ持ちだしていたことに怒られるか、どんな反応が来るかと身構えていたけども、

「……そっか。やっぱり死んでたんだ」

どこか、疲れたような言葉だった。

お喋りばかりしていた兵士とは思えないほどの覇気のない声音。

「……知ってる人の剣でしたか」

「……珍しい紋章だったから覚えているよ」

「……」

「さっき言った世話になった人が、その剣を持ってた人なんだ」

遺品はこの人に見つからない方がよかったのかもしれない。

そんな風に思える反応だった。

死体が見つからないことよって、まだどこかで生きていると思えていたのかもしれない。だけど剣もなく世界樹内で生きていとう可能性は低いと、知人の死を心のどこかで認めていなかった兵士に改めて、知人の死を突き付けてしまった。

「その剣の持ち主は冒険者だったんだ。優しいヤツでね、樹海で率先して人助けばかりしてたよ。衛士も冒険者もわけ隔てなく助けてさ。衛士はともかく他の冒険者なんて競争相手のようなものなのにね」

ポツリポツリと兵士は語りだした。

「その人は一度、ギルドがキマイラのせいで壊滅状態にされたのに、冒険者を辞めずにいたんだ。キマイラへの復讐の機会を、探っているんだと、思ってたんだ」

最初は懐かしむような口調だったのに、少しずつ声が震えていた。「人数を増やさず、二人だけでいるのも何か、考えがあつてのことだつて……」

「汝にこの剣を渡す。何も知らぬ我が弔うよりも、汝がするべきだろう」

イシュは剣を兵士に渡そうとした。さりげなく紋章がない剣も渡そうとしているけど、私たちよりこんなに冒険者の死を悲しんでいる

人だ。この人の手で弔った方がいいと思えたから反対もツツコミもしない。

「……僕だって何も知らないよ。ベオウルフが何を考えていたか、何も知らない」

「……僕だって何も知らないよ。ベオウルフが何を考えていたか、何も知らない」

「ベオウルフというのは、その剣の持ち主の名前か、それともギルド名か。」

「二人だけでキマイラに挑んだのは、何か作戦があったからってずっと思ってた。だけど、本当はただ、仲間と同じ死に場所を求めていたんじゃないかって、思うようになったんだ……。だとしたら、彼らは自殺したことになる……。僕たち衛士隊は彼らに助けられた。だけど彼らを、助けることはできていなかった……。そんな僕が何を知っているって言うんだ……。知ってるつもりになっていただけの、僕が……」

「それでも我よりは汝の方がその者を知っているはずだ」

「イシユはなかば無理やり持たせるように剣を渡した。」

「そして世界樹の反対方向へ、宿のある方角へ向かい兵士から遠ざかっていく。有無も言わさない態度すぎる。」

「残されたのは私と兵士だけだ。」

「……前から思ってたけど、あの子は強引なところがあるね……」

「そ、そうですね」

「確かにこの兵士の方が、イシユより剣の持ち主について知っているだろうけども、あの子の流れでも説得もなしに無理やり渡すのはすごい。」

「でも、少しだけあの強引さが羨ましいや」

「え？」

「強引に、ベオウルフを止めていたら違った結果があつたかもしれない。ベオウルフ自身の考えがあるはずだ、なんて逃げずに、自分から動いていたら……。もう後の祭りだけだね」

「……結局のところ、ベオウルフさんが何を考えていたかなんて、本人しかわかりませんよ。どれだけ考えたって答えはもうわかりません。」

できても推測どまりです」

「とうか他人が何を考えているかなんて、どうしたってわからない。わかりっこない。」

「わかっているつもりになるのが限界だ。」

「そうだね……だけどやっぱり、二人だけで挑んだ彼らは、過去を、失った仲間をずっと見ていて、目の前の人たちを、生きている人たちを見てくれなかったんだろうね」

「……………」

「…………ごめんね、湿っぽくしちゃって」

「いえ、大丈夫です。では私もこれで」

掛ける言葉が見つからず、逃げるように私も去ることにした。

後ろから聞こえた「あ、結局遺品は僕に預けるんだ」という声は放置した。無責任ではない。あれだけ悲しんでた人ならむしろ任せるべきだろうし、ほら。」

遺品を吊って、とうか押し付ける形ではあったけど、吊って翌日。

ハイ・ラガードの世界樹。

内部に入り上へ上へと、まさに天を目指して進む。

タルシスの世界樹は内部に入り込むなんてことはなかった。いや、あまり実感はないけど入ってはいいたか。碧照とかは世界樹の一部だったらしいし。とはいえ根だったらしいから、やっぱりこうして世界樹の樹内部を登るのは奇妙な感覚だ。

始めの階層は緑の草木が鬱蒼とした自然の階層。イシユが言うには夏の階層らしい。イシユの城である天ノ磐座より下の階層は、四季を再現した場所。そしてそれぞれに一体ずつ、イシユが造った魔物が配置されている。

イシユの造った魔物たちは、ある程度は命令を聞けらしい。だからこそ、激しい戦闘になることはなかった。だけど魔物の本能によつてか、少々の抵抗はあった。

夏の階層に配置されているのはキマイラと呼ばれる魔物。様々な獣を合成させた怪物。他の野生の魔物を支配下に置く存在。そして、昨日聞いたベオウルフさんのギルドを壊滅させた魔獣。

その咆哮は周囲の魔物を指揮し、聞く者を委縮させる獣の威圧。複数の獣の中でも獅子の本能が強いようだった。

その次の階層、秋の階層に配置されていたのは炎の魔人と呼ばれる魔物。人間が混ぜられた魔物だ。肥満体型で黄色い肌に、長く美しい髪。紅い森の中、紅蓮の炎を生み出す怪物。

その叫びは狂乱の咆哮。人間が混ざっていると知っているからだろうか。まるで自身の変貌した姿に気が狂った悲鳴のように痛ましいものだった。聞いているだけで、こちらの正気を削ぐような音叉。

冬の階層にはスキュレーと呼ばれる魔物。アーテリンデさんの姉だった魔物。人間の上半身に、海の生物を混ぜ合わせた怪異。凍てつく冷気を纏い、表情は寂し気な美しい女性。

その声は穏やかな唄だった。死にゆく者へせめてもの子守唄を唄うかのように、怪物の姿とは裏腹に安らかな唄だった。容赦なく熱と命を奪う環境の中、苦しみを薄めるような子守唄が生前の優しさを表しているようで、それでいて残酷な魔物の特性を造っているようである……

春の階層はハルピユイアと呼ばれる魔物。翼人と呼ばれる種族が混ぜられた魔物だ。翼人の死体を生みだし、回収するために配置された魔物。同族を襲わせるために生み出された存在。

ハルピユイアが放つ金切り声は絶望に歪んでいるかのようにだった。造られた目的を聞かされたからそういった先入観を持ってしまいうか、まるで信じていた存在に裏切られ、同族を殺めることをも抵抗できずにいる悲劇の異形。信仰心を歪められたその姿が恐怖を煽るようだった。

これら四体の魔物を仕留め、死体が消える前にその体内に混ぜられた世界樹の遺伝子を、シウアンの力で変化させる。

シウアンが言うにはこれでもう復活することはないそうだ。その言葉は自信に満ち溢れたものだった。

ハルピユイアも完全に死を迎え、彼女も世界樹から解放された。解放されたとはいえ、最期の姿は魔物のまま。それは決してイシユの罪を赦されないと主張しているように感じた。

桜の花びらが舞い散る中、戦いを終えた私たちのそばに舞い降りてきたのはひとりの翼人。

「……」

黒い翼を持つ翼人は無言で降りてきた。敵意はない。けども友好的にも見えない。その視線はただ一直線に向けられていた。イシユに対して。

相手の出方がわからない。街では翼人と共存関係と聞いていたけども、あと独自の文化を持つとか。これも彼らなりの挨拶かなにかだろうか。

「あ、あの……？」

とはいえ黙っていても何も進まない。そんなわけで私は恐る恐ると翼人に声を掛けた。

「……初めて見える土の民よ。我は空の民の長、クアナーン。全能為るヌウフ、父なるイシユと母なるイシヤの仔」

いきなりヌウフと言われても。というか今、父なるイシユって言った？

翼人はイシユが創った存在。てつきりウロビトやイクサビトみたいに、祖先を造った関係かと思っただけで現代の翼人もイシユが創ったってこと？

「イサの流れが変わった。空の女王が星から切り離された」

「えつと……いさ？」

「その者、汝は土の民ではないようだが……汝の出自を教えてもらいたい」

「土の民？ ほし？ あ、よくわからないんですが……」

「……」

マイペース極まりない。

こちらの疑問は全く無視である。いや、ちらりとこちらを見たりはするから完全無視ではないのだろうけど、なんか自己完結しているの

か説明が一切ない。

「我はかつて天の支配者だった存在。汝らを創りし者だ」

「汝がヌウフ……」

ヌウフってなんだ。

翼人の人、クアナンさんはイシユの言葉に少し目を見開き驚きを見せて小さく呟いたけど、それからじっとイシユを見て黙ってしまった。

「それで、汝は我に何用か」

「……」

黙ってしまったクアナンさんにイシユが問いかけた。

「汝がヌウフであるならば、教えてほしい。ヌウフはいかなる定めを持つているのか」

ヌウフっていうのはイシユのことか。

イシユの定めとやらが気になる？ 定めって運命とかだよね、なんだか思春期だ。

「我らは神の声に従うために生まれたと信じていた。汝のことを神と信じ、従っていた。だが……汝は神ではなかった。神なき我らは土の民と新たな道を歩もうとしている中、再び現れたのはいかなる定めなのか」

とても思春期とか茶化す雰囲気ではない。

クアナンさんはひどくイシユを警戒している。それは創造主へ向けるものとは思えないほどに、強く、場合によっては攻撃することを厭わないと思わせるほどに。

「ヌウフは……汝は最後の伝承、禁忌の扉開き、全てを終わらせる定めを持つのであれば、我は土の民との未来のため、今ここで再び神を墮とさねばならない」

「自惚れるな。我が墮とされたのは汝ら翼人の手によるものではない。本来であれば、汝の疑問に答える必要はないが、我の創りし種だ。汝の疑問、答えてやろう」

全てを終わらせる？ 土の民との未来？ まるでイシユが凶悪な魔物を地に放ち、暴れ回るのではと恐れているようだ。

それにしてもクアナンさんもイシユも、どちらも一人称や二人称が被っている。これはあれか。子は親に似るというやつか。特殊な家庭環境すぎる。

「我は禁忌の扉を開き、魔物にされた者たちの命を終わらせる役目を持つ。汝ら翼人とこの地に住まう者たちの未来に我は関与しない。よって、汝の懸念する事態にならぬ。我の邪魔をしないのであれば、汝らは汝らの好きにするがいい」

イシユの回答は、私たちが聞いていたものとあまり変わらない。魔物にされた人たちの生命を解放すること。この回答をもらつてもなお、クアナンさんが噛みついてくるようだったら少し荒事になる覚悟をしないとイケない。

「……空の女王もそのうちの一つ、ということか」
「そうだ」

「……………以前の我らならば、ヌウフの言葉こそすべてと信じ、従っていた」

「……」

まずい流れかもしれない。

荒事になった場合、いつもと勝手が違う。魔物相手とは違うのだ。翼人はハイ・ラガードの人たちと友好関係にある。だから私たちにできることといえば、気絶させて逃げるぐらいだろうか。もしくは説得………だけこの人はイシユの過去を知っているからこそ、イシユを信じられないのだ。

過去は消えてくれない。どこまでも追いかけてくる。

気絶させるなら意識の外からの奇襲が一番だろう。

幸いクアナンさんはイシユに意識を集中させている。そつと後ろから殴りかかれれば……

そんな考えから動こうとしたら、背後から肩を掴まれた。

「ひっ……………」

「その悲鳴はやめてくれないか……………」

掴んだのはローゲルさん。

あまり驚かせないでほしい。てつきり他の翼人がいつの間にか背

後にいたのかと。

「なんですか急に」

クアナーンさんの意識がこちらに来ないように小声で問いかける。

「勝手なことをしないように止めたかったんだ」

「勝手なことつて……」

「俺たちはあの二人の間に入ったら駄目だ。ここで起きた出来事、彼らはその当事者なんだ。部外者が口出ししていい問題じゃない」

部外者。

確かにハイ・ラガードで起きた事件と私たちは関係ないけど、今はその後片付けのために協力しているんだ。完全な部外者ってわけじゃないし、それにイシュは解決しようとしているんだからちよつとぐらい口出ししてもいいじゃないか。実際は手を出そうとしてたけども。

頭に浮かんだ反論を出す前にローゲルさんは言葉を続ける。

「これは避けてはいけない問題だ。イシュがやってしまったこと、それに対しての罰。俺たちが間に入ればうやむやになってしまう」

「でも問題を解決するためにイシュは来たんです……そんな罰だかなんだかで、解決できる問題の邪魔なんてされたって——」

「アルメリア」

真面目な声音で名前を呼ばれた。

それまでの、言い聞かせるような言い方ではなく、咎めるように短く名前を言った。

急な変化に思わず言葉を吞んでしまう。

「千年前の人々のように、イシュに頼り切るのが嫌だったのは知っている。だから頼らないように、積極的に力になりたがっているってことも知っている。あいつの負担を軽くさせたいって考えてのことだろうが……」

ローゲルさんの目は、いつか見た騎士のころの目と同じだった。敵意こそは込められていないけども、軽い空気を一切纏わない、鋭い視

線だった。

「君のそれは、イシユの意志を奪っているも同然だ。あいつが本当に背負わなくてはいけないものすらも、君は取り上げようとしている」「なっ……それじゃあ責められることが大事だっけ言うんですか……!?!」

「ああ、大事だ」

「——っ!?!」

少しの迷いもない返答に面食らう。

何を言っているんだこの人は。イシユが責められている内容、罪は、過去の狂ったイシユがやったこと。狂わせたのは、千年前の裏切り。イシユも被害者なんだ。

「イシユは当時狂っていたけども！今は違うんです！いつまでもネチネチと過去のことを責めるなんて陰湿すぎます！」

「過去のことじゃない。始まりは大昔のことだろうが、今の時代まで続いている出来事だ。事情を知っているからといって、イシユを特別扱いしすぎるな。自分を特別だと思ふな。あいつの罪はあいつの物なんだ。一緒に背負っていいのは当時の関係者だけで、アルメリアじゃない」

「そんなこと——!?!」

「汝らは何を騒いでいる」

声を荒げすぎてしまったようだ。ローゲルさん以外からの意識を向けられた声にハツとなる。

気づけばその場にいる全員の注目を集めていた。その中には当然、話題のイシユも含まれる。

「悪いな、邪魔しちゃったみたいで」

「全くだな。汝が止めずとも問題なかった。私の意志は私の物だ。ア

ルメリアが奪えるようなものではない」

「なんだ、結構前から聞いてたんだな」

「我を誰だと思っっている」

「はいはい」

ローゲルさんがようやく私から手を離した。

解放された私は、注目集まる中何を言えればいいかわからず口ごもつてしまう。

なんとも微妙な空気が流れ、最初に口を開いたのはクアナンさんだった。

「今はイシユと名乗っているのか」

「……ただの気まぐれだ」

「気まぐれ……そうか、気まぐれ、か」

彼は反芻するように、何度も同じことを呟いた。

いったい何なんだ、翼人のこのペースは。

やがて満足したのか顔をあげて気まぐれ以外の言葉を口にした。

「ヌウフ……いや、イシユ。汝の言葉、今一度だけ、僅かばかり信じてみよう」

クアナンさんからさつきまでの敵意に満ちた雰囲気はなくなっていた。かといって友好的な感じではない。

「汝が信じようと信じまいと、我の行動に変わりはない」

「それが汝のイサなのだろう。我の行動もまた、イサの流れに従うものだ」

またイサが出た。イサってなんだ。

「あの、イサって……？」

私の疑問にクアナンさんは答えてくれなかった。

無視はしていない。今度はちらりとではなく、しっかりと私の方へ顔を向けたから。だけどイサについて教えてくれない。なんなんだこの人は。

「願わくば、この信頼を汝が裏切らんことを」

今の言葉を残してクアナンさんは再び空へと昇っていった。

なんともマイペースすぎる。そういうところもどこことなくイシユに似ている。やっぱり子は親に似るというやつかもしれない。

「……なんとも、敵対したわけじゃなかったですけど、友好的とも言い難かったですね……」

「かつては私の言葉に疑問を抱かず従う種族だったが……好ましい変化だ」

「へ？」

イシユにとっては今の態度は嬉しいものだったらしい。前の態度がどんなのだったか知らないから、私には何とも言えない。ただ好意的に捉えるイシユが珍しいなと思うだけである。

しばらく空を見上げていたイシユは、やがて私を見て言った。

「汝が何を思ってあのような話をしたのか知らぬが、先も言ったように私の物は汝が奪えるものではない。身の程を知れ」

いつもより突き放した言い方だ。

奪うなんてつもりは一切ないのに、そんな悪意満点な捉え方はやめてほしい。これもローゲルさんのせいだ。

私の反論を聞く気がないのか、あると思っていないのか、イシユは背を向けて進みだす。いつものようにすぐに追いかけれない。少しだけシヨックを受けている自分がいた。

「アルメリア」

「……ローゲルさん」

元凶ローゲルさんはまたも私に何か用があるようだ。

他の三人は、とかキバガミさんとシウアンは私を気にしながらイシユの後をついていった。ウーファンはすたすた行った。

「私は奪うつもりなんてないです」

ローゲルさんが何かを言う前に、勘違いを正させるつもりで言い放った。

「一緒に背負う、って言いたいのかい？」

「は？」

「……はあ」

わざとらしいため息をつくんじゃない。

むかつとしたから睨む。できる限り目力を込めて。上手く睨めてたらいいんだけども。

「ため息が出るのはしょうがないだろ？ そんな膨れないでくれ」

「しようがなくなるとはいいです。それと膨れてません」

「そうかい。イシユは拒否してたじゃないか」

「奪うことに対してなだけで、一緒に背負うことには拒否してません」

……まあ、それも拒否しそうだけども。

それなら無理やり一緒に背負うつもりでいけば……いや、だめだ。

この考えはつまり、イシユの意志を奪うこととなる。

「それも拒否するだろうな」

「……」

「だから膨れるなって」

膨れてなんかないやい。睨んでるんだい。

「まあ、君も俺も、結局は部外者だ。だからあいつについては想像でしか議論できない。君が間違っている可能性もあるし、俺が間違っている可能性もある。当然二人とも間違っている可能性もある」

「……」

「だけどはつきりとこれだけは言える」

「あいつの罪を、一緒に背負うなんて無理だ。部外者が触れるものじゃない」

反論は浮かばなかった。

さつきだって、罪については一緒に背負うなんて考えてなかった。せいぜい、クアナンソンさんを説得、誤魔化しにかかるつもりだった。

一緒に背負うには、私には身に覚えのない罪。当然だ。私は関わっていないことだから。どこまでいっても関われないことなのだから。

ローゲルさんに言われなくてもわかっていることだった。

だけど、認識したくないことだった。

これ以上止まっていたらはぐれてしまう、と背中を押される。

もうこの話はお仕舞いらしい。
だけど私の中じや終わりそうにない話だ。

——一緒に背負うのが無理なら、どうしたらいいか。どうにかしたいと考えるのは、愚かなことなのだろうか。

はぐれることなくイシュたちと合流して少し。答えのない悩みから目をそらすために、地図を描きながら進んでいるとイシュが言った。

「もうじき天ノ磐座につく」

「やつとか……いくら慣れているとはいえ歩きっぱなしはしんどいものがあるな」

「私も足が棒みたいになっちゃってるよ……」

もうすぐ休めるということでローゲルさんとシウアンが弱音を吐いた。私も同じく足がへとへとだ。気球艇による移動がないだけで、これほどまでに疲れるとは。

それはそうといよいよお城で寝泊まり。世界樹の上に城があるっというのもすごいものだけど、どこにあるのだろうか。辺りは雲と桜だけだ。それらしき建造物はない。

やがて光の柱が見えてきた。樹海地軸に似ているけど、色が違う。

その柱は上空にある濃雲の中に繋がっていた。

「……この地軸に似たものが城への入口か？」

「うむ。起動は触れるだけでよい」

「古の技術とは計り知れぬものだな……」

入口が思っていた形と違ったけども、とにかくこれで城に入れる。天に浮かぶ城というおとぎ話のような場所にだ。

魔物たちとの戦いで感じてたやるせなさと、イシュとの関係性の悩みを忘れるように、私は城への期待に胸を膨らませながら光の柱へと触れた。

75. 悠久の時を過ごした孤独の城

お城と聞いて、私が想像していたのは尖った屋根の建物だ。こう、鋭い三角な屋根がいくつもあるような、それでいて城壁に囲まれた堅牢な建物。

空を飛ぶ城と聞いたときも、想像図はあまり変わりなかった。せいぜい白い雲の上に謎パワーで建っているという変化ぐらいか。

「い、今、雷が！ 大丈夫なんですかここ!?!」

「問題ない」

「突風が吹きでもしてバランスを崩せば、地面まで真つ逆さまだな……」

「問題ない」

「問題しかないだろう!?!」

雷雲の中にあるなんて想像はできなかった。これは私の落ち度ではないはずだ。そして城の形状も思っていた図と全然違う。いや、近すぎるからそう思えるだけで、遠くから見れば案外想像図通りかもしれないけども……というか時代が違うのだから城の形状も違って当然か。

光の柱で辿りついたのは城の内部ではなく、雷雲の中。入口の前らしい。

正面にはイシュの城があり、左右を見れば想像とは違う城壁と雲ばかり。柵はなく、下を覗き見ると雲しか見えない。どれほどの高度か考えたくもない。

こんなにも壁が恋しくなるのは初めての経験だ。はやく壁に囲まれた場所で安心したい。

「早く中に入りましょう!」

「城の雄大さに対して感想が出ぬとは……なんとも嘆かわしい」

城自慢は中に入って聞くから、今は移動が最優先だ。

イシユの浮遊城、天ノ磐座の内部へ入る。高度は変わってないのに、壁に囲まれているだけで安心感が段違いだ。

はるか上空ということパニックになりかけていた心が落ち着いてきた。そこでようやく城をじっくり観察する。

硬質な床に、変わった材質の壁。外の光を七色に変えて城内を照らす窓硝子。太陽の光でも月明かりでも、ましてや街灯の明かりでもない光で城内は満たされていた。

暗黒ノ殿も同じぐらい古代の産物なのに、この違いはなんなのか。城と避難所の差か。

それにしても内部に入っただけで外の音が随分と小さくなった。ゴロゴロと雷が鳴っていたのにここじゃ全然聞こえない。扉が閉まっているわけじゃないのに不思議だ。

そこでふと想像してしまう。

外の雷、城に落ちたりとかないだろうか、と。

「イシユ……雷、城に落ちて、城が浮けなくなるとかない……ですよね……？」

「汝は何をありえぬことを言っているのだ」

「ありえぬって……雷雲の中じゃないですか！ この城！」

「だからと言って、天ノ磐座が落ちることはない」

なんだその自信は。

あ、あれか。古代のなんかすごい技術で城壁がなんかすっごく頑丈なのか。でも万が一ということだってあるのではないか。

「そりゃすごい城なんでしょうけど……ていうかそもそも落ちない理由がわからない……」

古代技術とはいえ浮遊城って本当に意味がわからない。おとぎ話の世界すぎる。

雷で落ちないかって心配よりも、どうやって浮き続けているのかとか。気球艇だって浮き続けることはできないらしいし、いずれ限界が来るものではないだろうか。

いや、その限界を取っ払ったのが古代技術？ ああ、もう駄目だ。

何考えたらいいのかわからない。

「ていうかこんな城が上空にあるって、ハイ・ラガードの人は知ってるんですよね……不安じゃないのかな」

「不安になるはずがない。この城は地上からは見えぬほどの高度に位置する。それだけでなく世界樹の枝葉によつてなおのこと見えることはない」

見えないとはいえ城があるってことは知っているのでは。

上空にこんな大きな建造物っぽいのがあって、落ちて来たらどうしようってならないだろうか。

「アルメリアが言っているのは、何故ハイ・ラガードの者たちが城の落下を危惧しないのかということだろう」

「そう、それですウーフアン！」

「私の城が落ちるはずなどないが……ハイ・ラガードの者たちの考えは知らぬ。だが仮に、城に異常が発生し、高度を維持できなかったとしてもあの街まで落ちることはない」

城が落ちないことに絶対の自信である。

仮にの話ですら落ちないとは。

「それは、城と街までの間に世界樹があるのが理由であろうか？」

「うむ。天ノ磐座は巨大だが、世界樹を覆うほどではない。そして世界樹を突き抜けるほどでもない」

破片や残骸こそは落ちるかもしれぬがな、とイシュは言った。その言葉の枕には「まずありえぬが」とついていたけども。

「……ひよつとして、このお城も世界樹の一部？」

それまで黙って聞いていたシウアンが首を傾げながら呟いた。

城が世界樹というのはどういうことだ。こんな人工的な建物、とても世界樹には思えないけども。

「反対だ。我が城が世界樹の一部ではない。世界樹が我が城の一部なのだ」

どうしよう。どっちでもいいって感想しか出てこない。

けどどそれより、今の情報からしてつまり、ここも魔物が出るってことでは。世界樹が魔物を生み出すようなもんだし。

え、ということとは雷以外にも魔物による被害で墮ちる危険性も？

あ、でも世界樹の一部？ 逆だっけ？ 世界樹が城の一部？ どっちでもいいや。とにかく繋がってるの？ でも浮遊城なんじゃ？ んんんー？

疑問がどんどん溢れ、好奇心となったのでストレートに聞くことにした。

「でもこの城って浮いてるんですね。世界樹の上にあるだけで世界樹とは繋がりが無いんじゃない？」

「かつては独自に完全な浮遊をしていたが、いつまでも浮かせるだけのエネルギーを維持するのは困難だ。エネルギー問題を解決するために、世界樹が発生させる力場を城に繋げ、今の高度を維持している」
「力場」

「周囲の浮島の原理を利用している。城の動力部に浮島の核に当たる樹を取り込ませたことにより、それが可能となったのだ」

補足説明なのかもしれないけど全くわからない。そもそも浮島を見ていない。名称的にやっぱり浮いている島だろうか。

とりあえず、城の中に島が浮くための樹があつて、それで世界樹が城を島と思つて浮かせている……？ 自信がないけどこれ以上聞いでもわからない気がするし、もうこの解釈でいいや。

まあどんな形にせよ、世界樹と繋がりがああるなら野生の魔物がいるのだろう。どんな魔物がいるのか聞こうとして、その前にウーファンが言った。

「……しかし、魔物の気はないな」

「え、そうなの？」

シウアンも魔物がいると思つていたようだ。だけど索敵能力の高いうーファンの言葉から、魔物はほとんどいないと発覚。

私なりに魔物がない理由を考えた。

「さすがに魔物もこんな高いところでは生まれない……とか？」

「城の一部となった世界樹の影響によって、城内にも魔物は発生する。だが、城の防衛システムによってそれらは排除される。排除対象は私の許可なく入り込んだ者、つまり人間も含まれる」

「念のため確認しときたいんだが、俺たちは大丈夫……ってことではないんだよな？」

ローゲルさんの確認に、イシュは返答する。

「我と行動を共にしていれば問題ない」

問題ないって口癖になつてない？

この問題ないというのは攻撃されないってことなのか、それとも我強いから問題ない、なのか、判断に悩む。

今日はもう休むために、安全な寝場所まで案内してもらおう。イシュにただついていくだけだ。

時折見かける白い樽みたいな鎧や、黒い鎧などが近づいてきたがイシュの姿を見た途端止まった。これが防衛システムとやらなんだろう。

それにしても……この城はどこか寂しい。

地上より遙か上空。人間がいないのは当然、魔物もいない。命持つ者が全くない城。当然遺跡や洞窟だって、そういう場所はあるだろう。だけどこの寂しさは、命を持つ者がいないという点だけで感じるものじゃない。

七色の窓硝子、汚れ一つない壁、荒らされた様子のない広い通路。

かつて人が多くいた場所。

その大勢の人たちから、見捨てられた場所。

この城はイシュと同じだ。

過去の人たちのために創られ、過去の人たちのために整備され、そして過去の人たちに裏切られ、未だに過去の人たちのために在り続ける城。

イシュはタルシスに戻る気はない。目的を果たせばこの城に残るのだろう。

……本当に残していいのだろうか。こんな場所に、この人を。

たまに会いに行けばいいと考えていたけども、この場所は寂しすぎ

る。私の勝手な価値観の押し付けかもしれないけども、こんな場所に居てはダメなんじゃないか。

「この先に、ジャガーノート……我が制御できる魔物の中でも最強の存在がいる」

扉の前でイシュが言った。

わざわざ言うということは、ジャガーノートもイシュによって造られた魔物。

「ジャガーノートの解放は後回しだ。禁忌ノ森の魔物との戦いに使用する」

てつきり戦う準備をしろと言われるかと思えば、この発言。

それに良い顔をしなかったのはキバガミさんだった。

「イシュ殿……それは酷な話ではないか。そのジャガーノートも弄ばれた命の一つなのだろう。一刻も早く解放してやるのがせめてもの情けではなからうか」

「禁忌ノ森の魔物は我の制御下から外れている。少しでも戦力は必要なのだ」

「イシュ殿」

キバガミさんは納得いかない様子。咎めるようにイシュの名前を呼んだ。

「……禁忌ノ森の魔物は強力だ。そして、我への恨みも強い。これまでのような微々たる抵抗ではない」

「だとしてもだ。哀れな犠牲者の骨の髄まで貪るような真似、とても見過ごせぬ」

「ジャガーノートを解放すれば、汝らの命に危機迫る可能性が格段に上がるのだ。それでも汝は構わないというのか」

「犠牲者の解放、そのために拙者は協力を申し出たのだ。我が身可愛さに犠牲者の亡骸を利用する気は毛頭もない。その分危機が高まるというのであれば、拙者はお主らを守るために死力を尽くそう」

二人の言い争いは平行線だ。

イシュの主張は安全性のため、キバガミさんの主張は倫理観のため、だろうか。

「二人とも落ち着け。互いの意見をぶつけるだけじゃいつまでも終わらないぜ?」

空気が重たくさせそうな言い争いの仲裁に入ったのはローゲルさん。

「ローゲル殿。魔物とされた魂への冒涇、とても許容できるものではない」

「それは俺だって同じ気持ちだ。だけどこいつが危険視している禁忌ノ森の魔物の脅威を俺たちは知らない。キバガミがジャガーノートの分まで死力を尽くすと言っても限度がある。ホムラミズチの時みたいに独りで張りきったって仕方ないだろ?」

「ム……」

ローゲルさんの説得にキバガミさんが言い淀む。

そして次に彼はイシユにも質問した。

「造られた魔物はあと何体いるんだ?」

「禁忌ノ森に二体、そしてジャガーノートの計三体だ」

「じゃあこうしないか? 禁忌ノ森の魔物の脅威、それをまず見せてくれ。その後、ジャガーノートの解放を急ぐか後にするか、判断しよう。ウーファンなら気の強さで脅威が正確にわかるだろ?」

「私か。確かにある程度ならわかる」

ウーファンの同意を得たことで、ローゲルさんは再度イシユとキバガミさんに向きなおる。

「イシユ、キバガミ。これで今は納得してくれないか?」

「我は構わぬ」

「……承知した」

キバガミさんはしぶしぶと言った感じだ。

それでも納得を示してくれたのは良かった。

「だが今日のところは汝らは休息をとるがよい」

「……拙者らが命尽きれば、犠牲者はいつまでも解放されぬか……」

「そういうことだ。休むのも、時には非道な選択も必要なことだってあるさ」

ローゲルさんって何気に処世術高い。

タルシス潜伏時に培った信頼を集めるノウハウでもあるのだろうか。胡散臭い顔なのに。

話もひと段落したということもあって、扉を開ける。そこには黒い獣の魔物がいた。

魔物は体を起こし、私たちを見て雄叫びをあげた。

その雄叫びは闘争心溢れるもの。狂戦士の如く、理性なき咆哮。

しかしイシユの姿を視界に入れた途端、物静かになった。

「……化け物だな」

「ウム……」

ローゲルさんとキバガミさんが静かに言った。私も同意見である。

制御下にあるからこそ、戦いは避けられたけども純粹に戦うこととなった場合、今の一瞬だけでも脳内で警鐘が鳴り響くやばさを感じれたからだ。

「ウーフアン、大丈夫……?」

「ああ……」

シウアンがウーフアンに心配げな声を掛ける。

ウーフアンは造られた魔物と対峙するたびに気分が悪そうになっているのだ。理由は魔物たちの気によるもの、らしい。

今回は特に酷い顔色だ。

「どれほどの命を利用したのか……いくつもの気を無理やり混ぜ合わせ固め、さらに上からまた別の気で包み込ませたかのような歪さ……悪魔の所業そのものだ」

「ジャガーノートはこの城と共にあつた魔物だ。新たな死体を得るたびに、我がその肉体に組み込んだ強力な魔物。これまで見てきた魔物とは比べ物にならぬほどの……犠牲の上に造った存在だ」

「……」

多くの犠牲によって造られた魔物をイシユは素通りした。

さっきの話で決めたことだ。まずは禁忌ノ森の魔物を、いや、体を休める。休息する場所は玉座の間にするそうだ。そこが最も安全で、そして世界樹内部の状況を把握できる場所らしい。

玉座の間への扉は真つ赤に染まっていた。

決して血などではない。ただそういう色合いの扉なだけだ。

扉を開けた先には、いくつもの動く絵が入った小窓。チカチカとする奇妙な絵画。

そして玉座であろう大きな椅子。

その椅子に腰かけているのは、

胸部に穴が開いた——壊れた白い鎧兵だった。

76. 楽園になれなかつた森

玉座の白い鎧兵は動かない。

確かこれは城の防衛システムのはずだ。壊れているということは、防衛システムを越えてきた侵入者がいるということなのではないだろうか。冒険者とかならいいけども、魔物だとしたら不味いのでは。

イシユは鎧兵に近づいていく。

「……宣言通り、自壊していたか」

「イシユ……？」

イシユは小さな笑みを浮かべながら言った。

喜びのような前向きな笑みではない。物悲し気な、後ろ向きな笑みだった。

「自壊つてことは、暴走でもしたのか？ コレ」

「いや、正常に動いていた結果だ。暴走ではない」

ローゲルさんの疑問に答えるイシユの顔にはもう笑みはない。無表情に戻っていた。

しかし暴走ではないのに自壊つて……要するに自殺ということじゃないか。正常だと自殺するってなんだそれ。理解ができない。

「これは我だった物だ」

言ってる意味がよくわからない。

鎧兵はイシユだったというのは、比喻なのか。それとも言葉通りなのか。比喻なら比喻で何のかわからないし、直喩だとしたらイシユは複数いることになる。古代の力の限度がわからないから何とも言えない。

顔に疑問符でも浮かんでいたのだろう。

イシユは説明してくれた。

「この城を出る前の僅かな時ではあったが、我は同時に二人存在していたのだ。その片割れがこの侵入者排除用の警備アンドロイド、SSA-1の体にダウンロードされていた」

「双子……とかじゃないんですよね？」
「うむ」

同一人物が二人もいるわけがない、なんて常識はこの際捨てる。古代技術に今の常識は通用しないとつくづく悟っているから。

それよりも、この鎧兵がイシユ……

なんで――

「どうしてこのイシユは……死んでるの？」

シウアンが私の気持ちを代弁してくれた。

自壊、つまり自殺。イシユは何で自殺したのか。同一人物が同力所にいると、なんかこう、死んじやうってなんかこう、ふわつと聞いたことあったりするけど。なんでだっけ。とにかくそれと関係があるのだろうか。

「この時代に存在する意味を見いだせなかったからだ。千年前の彼らはもうどこにもいない。哀れな魔物の解放はこの体の我が成す。城に残った我に役目はない。いつ再び狂うかわからぬ中、存在し続ける理由はない。ゆえに自壊を選んだ」

「……無責任な話だ」

ウーファンは責めるように言った。

「もう一人己がいるからなど関係なく、犠牲者を救うために動くべきだったはずだ。それをせず、逃げるように消えるなど……」

「命なき存在となっていたのだ。自身を動かす意義、それなしに在り続けることは難しい……この我は、惜しむことなく自壊を選んだはずだ」

「それが無責任だと言っているんだ」

「汝の言う通りかもしれないな」

イシユとウーファンのやり取りをぼんやり見ながら、私はなんだか落ち着かなかった。

何か、重要なことを見落としている気がするのだ。それが何かよくわからないけども、胸騒ぎがひどい。

イシユは玉座に腰かけて動かない鎧兵、かつてイシユだったものを無理やりどけた。

どかされた鎧兵は抵抗することなく、操り糸の切れた人形のようにガシャンと音を立てて玉座の横に倒れた。

「少々待つがよい。この玉座の間に人数分ベッドを移動させる」

「まるで引越し作業だな。別にベッドのある部屋に案内してくれたらいいんだが」

「数分程度で移動が完了する。ここは城の制御室でもあるのだ」

玉座の前に青く透けた光の板が出てきてイシユが何やら弄っている。

私は倒れた鎧兵をじっと見ていた。

胸には穴が開いており、穴は完全に貫通している。細長い何かで溶かされたのだろうか。周囲にヒビが入ることなく綺麗に貫通していた。

その両手にはそれぞれ細長い筒状のものを握っている。

観察している私に気づいたのか、イシユが説明してくれた。

「SSA-1は両手に光刃……高熱の剣を用いて白兵戦を行う機兵。その柄は戦闘時に緋色の刃を生み出す。その刃をもって、胸部のコアを自ら貫いたのだろうか」

「やっぱり自殺なんですな……」

「自壊だ」

胸、というか胴体以外に攻撃を受けた部分はない。

争った様子もないし、遺書のようなものもない。遺す相手がいないと判断したからか、何のこだわりもなかったからか。

それ以上観察しても何もわからなかった。

やがてイシユが言っていた通り、玉座の間にベッドが人数分地面から出てきた。床がパカッと開いてベッドが出てきた。

「体を休めた後、禁忌ノ森へと向かう。目標は二体。ジャガーノートも連れていくが……」

「戦力として扱うかはウーファンの判断待ち、でひとまず納得してくれよ」

「承知……」

ということは、明日は六人とジャガーノートの大所帯。たとえ戦力ではなく即座に解放すると決めたとしても、禁忌ノ森の脅威度がわかるまでは同行というわけだ。

「うわ……ばいんばいん……」

とにかくベッドに横になろうと飛び込むと、すごい弾力がある。床から生えたベッドなのに高級感溢れるものだ。思わず出た感想が自分ながら酷いこと酷いこと。

「あれ？ イシユは寝ないの？」

みんなが横になる中、シウアンが玉座に腰かけているイシユに言った。ベッドは一応イシユの分も出ているみたいだし、イシユも横になるものだと私も思っていた。

「我に睡眠は不要だ。気にせず眠るがよい」

「せっかくベッドがあるのに……」

イシユはまた、青い透き通った板を弄り始めた。あれは何か操作しているってことだろうか。

城のこととなると本当にわからない。手伝えることもないし、むしろ本番は禁忌ノ森っぼいのだ。ならば本番に備えて今は休むこと。それが一番の手伝いだ。

そんな理論武装を整えて、私は眠りについた。

禁忌ノ森。

そこは天ノ磐座の周囲に浮かぶ島に点在する森。イシユが制御できない魔物の……いわば物置小屋のようなもの。廃棄することもできず、利用することもできず、扱いに困った魔物たちを押しやる一角。

禁忌ノ森とは具体的にどんな場所なのか、出発前に玉座の間で説明

を受けた感想が今のだ。だいたいみんなも同じような感想だったと思う。

「だけど、実際に足を踏み入れた感想は、大きく二つに別れた。

「なんとも……穏やかな場所よ」

「そうだな。禁忌つてつくほどだから、もつとおどろおどろしい場所を想像してただけだな」

キバガミさんとローゲルさんは広がる緑の草原と青空に、拍子抜けしたような顔で感想を述べた。

「ここ……いやかも……」

「ああ、不気味な場所だ。いや……狂っている……」

シウアンとウーファンは広がる景色から異常を感じていた。気をしっかり持ったためにとばかりに二人の表情は険しい。

全く違う感想が出たことよって、ローゲルさんが尋ねた。

「危険な気が近いとかか？」

「そうではない。確かに歪な気が多いが、この森は狂氣的だ」

「拙者にはのどかな景色にしか見えぬが……」

のどかな景色だと私も思う。そしてどうしようもないほどに、不安な場所だとも思う。

なんで不安になるのか、上手く説明ができない。見える景色が信じられない。何かが引つかかる。何かが不安にさせる。何かが正気を失わせる。

「城は雷雲の中にあつた。そしてこの森は城の周囲に浮かぶ島。だというのに、この穏やかな天気はなんだ。それに……風は吹いているにも関わらず、雲は動かない。空模様に変化がない……。歪な生命を押し込め、まがい物の空を造り、さも楽園のように姿を晒すこの森は……とてもものに感じれない……」

ああ、そうか。ウーファンの説明を受けて納得がいった。

表面だけは綺麗なんだ、ここは。きつと何も知らなければ、表面だけを堪能して満足できた。だけど私たちはすでに知っている。ここには魔物にされた悲しい生物がいることを。望んで棲みだしたわけでもないのに、押しやられた存在がいることを。そのどれもが狂気が

生んだ存在だということ。

綺麗な表面を剥がせば裏には歪みきった地獄が潜んでいるのだ。天国に見える薄皮で包まれた地獄だ。

「汝の言う通り、この森の空はまがい物。空に見えるそれは壁に映されただけの、いわば絵だ。世界樹内部の管理が済む前に、我を信じた彼らのために急造した楽園。それを制御不能な魔物を押し込める場所として再利用しているのだ」

千年前の人たちのための、楽園のつもりで造った場所。だけど楽園になることができなかった場所。

天ノ磐座も、それより下の四季の階層も、そしてここも。

全部千年前の人たちのために用意した場所。こんなにも尽くしてくれたイシユを、千年前の人たちは置いていった……

イシユが狂っていた。だけどそれと同様に、千年前の人たちも狂っていたんじゃないか。そうでも思わないと、どこまでも軽蔑してしまいたいそう。

造られた森の中、心中穏やかになれそうになかった。

禁忌ノ森の奥深く、霧が立ち込める場所に目的の魔物がいた。その名はヘカトンケイル。

青と薄紫の肌、つぎはぎで乱雑に繋がられたいくつもの巨腕。体中には杭が打たれ、逆さを向いた顔には大きな口が開いていた。とても人間に見えない。腕や足こそ人間のものと同じ形だけど、そのひとつひとつのサイズは大人の身の丈を軽々と越える。だけどこのヘカトンケイルも、人間が混ぜられたもの。

全体的な大きさだけを見れば、ジャガーノートと同じぐらいにも見える。だけど感じる印象は全然違う。ジャガーノートが闘争心の塊

なら、このヘカトンケイルは怨念の塊。

「ウーファ……大丈夫？」

実際の脅威度としてはどれほどのものか、ウーファンに聞こうとしたけどあまりにも顔色が悪い。だけど仕方がないことか。ジャガーノートよりも酷い目にあっている、見ただけでわかる存在。気を感じする彼女には悍ましますぎるのだろう。

「……単純な強さで言うなら、ジャガーノートより悍ましく、強力だ」となると、ジャガーノートには悪いが力を貸してもらおうしかないな」「……ムウ」

キバガミさんは悔しそうだ。だけどごねる様子はない。

「ヘカトンケイルは力任せの狩りしかできない。もう一体の魔、始原の幼子に比べれば危険性は低い方だ」

「その情報、あまり嬉しくないんですが……」

要するにヘカトンケイルよりもっとヤバイ奴がいると。パワーバランスはどうなっているんだ。

というかそれならジャガーノートにはその幼子つて相手と戦う時もらわれないとってことでは。

「期待はしてないが、弱点とかそういうのってないのか？」

「……」

「ないのか……」

「……ヘカトンケイルの体は所々腐乱しているはずだ。魔物に利用された死体の中でもかなり古い」

腐乱していると言うけども、やたら馬鹿デカイ棍棒を平然と持ち歩いているけども……腐っていたら持ちあげることすらできず崩れていそうなもんだ。いや、常識で考えちゃダメか。ヘカトンケイルの体は人間と、世界樹を利用して造られたものなんだから。

「かなり古い……ということ、大昔の冒険者の死体か。長き時をあのような姿で……」

キバガミさんの言葉は憐憫が多く含まれていた。あの姿になってもお、人間としての記憶や意思が残っていたらそれは残酷なことだ。残っていたとしても、すぐに正気を失ってしまうだろう。

「冒険者の死体ではない。千年前の罪人だ」

「罪人？」

「うむ。世界樹に人間が入り込むようになったのはここ最近。それ以前もごくまれに迷い込むことがあったが優れた肉体を持つ者は少なかつた」

千年前の罪人……いったいどれほどの罪を犯せばあんな姿にされてしまうのか。

こんなことを思うのは酷いだろうけども、ちよつとだけ安心した。なんの罪もない人たちだった場合、あんまりな話だからだ。その罪人がこの報いを受けるのは当然、なんて考えはないけど。やり過ぎだと考えるけども。それでも何らかの責められる人たちということなら、少しだけ安心だ。

だけどその安心感も、すぐに無くなる。

「ゆえに、人間の肉体を使うには罪人から選ばれた。だが……咎められるほどの罪ではない者や、何の証拠もなかった者ばかりではあつたが……」

「それって……罪人に、仕立てられた人たちってこと……？」

恐る恐ると言った具合にシウアンが確認した。

今のイシユの言葉は、そういうことなのだろう。イシユは以前、禁忌ノ森の魔物は恨みが強いと言っていた。

イシユはシウアンからの質問に、何も返さなかつた。

ヘカトンケイルとの戦いは、ジャガーノートの対応に追われている隙に手足を削いでいく作戦で挑んだ。

ヘカトンケイルはイシユの姿を見た時、その口からは怨嗟のような慟哭が漏れた。人の意思がなくなつてもなお、恨みと悲しみが込められた泣き声はこの場に立つこともつらく思わせる揺さぶりをかけてくる。

無数の腕で地面を揺らし反撃を試みる魔物をジャガーノートの突進が妨害し、炎で魔物の皮膚を焼き、腐りかけの筋肉を剣で斬り、金

棒で潰し、砲剣で爆ぜ、体勢を整えようとしたところを方陣が絡めとる。

禁忌ノ森の魔物には何もさせない。させてはいけない。これは試合ではないし、冒険による単なる命の取りあいでもない。負ければ誰も救われない。だから絶対に負けてはいけない。

ヘカトンケイルの怨念、恨みを私たちは徹底的に無視して彼を地に伏せさせた。

ヘカトンケイルも解放され、これで残り二体。うち一体はジャガーノート。

そしてもう一体は、最も危険視されている存在。始原の幼子。

ジャガーノートは制御下だから、このハイ・ラガードの世界樹における最後の戦いは始原の幼子だ。

つまりはあともうひと踏ん張り。

77. 千年の時を越えた岐路

禁忌ノ森。その最奥。

始原の幼子、全てを終わらせる者と呼ばれた魔物がいた場所。

言葉こそ話せるが、会話をすることができず、ただただ苛烈な攻撃を持つて襲つて来た魔物の姿はもうない。頭部を剣で貫かれ、完全に動きが止まったところをシウアンの働きかけで世界樹から切り離された。そして死体も残ることなく光の粒子となつて消えていったのだ。

同時に最後まで戦い、力尽きたジャガーノートも世界樹から解放する。最後まで利用する形になってしまったけど、負けてはダメな戦いだったから。

「これで、ようやく終わったか……」

「うむ。造られた魔物はすべて完全に死んだ。蘇ることはない」

膝をつくウーフアンの言葉にイシュが同意する。

世界樹の一部ということもあつて魔物自体はまだ存在するけども、過去のイシュによつて弄ばれた命は解放された。もう永遠の命に苦しむ存在はいない。

「今度は世界樹を下るのか……今回もハードな旅だったな……」

「だが意義のあるものだった。囚われ続けていた魂が解放されたのだからな」

「まあね。イシュ、城でもう一泊させてくれないか？ 街までこのまま降りるのはさすがに厳しい」

特別な魔物はいなくなつたとはいえ、危険な魔物はまだまだ存在する。満身創痍な状態だとあつさり死にかねないし、私もイシュの城で一度休憩をとるつもり気でした。

しかしイシュの返答は、

「……降りるのであれば、樹海地軸を使えば瞬時に可能だ」

泊めることを了承せず、降りることの提案。

登りでは魔物とすれ違う可能性を考慮して使わなかったけど、確かにそれさえあればあつという間だ。

「宿代は節約したいんだが……」

「辺境伯から受け取った金があるだろう」

「まあそうだけどな……」

まあ、ハイ・ラガードの宿を堪能するのもいいか。せつかくの異国なんだし。

「樹海地軸……私使ったことないけど、お城に入るときの柱みたいなやつであつてる？」

「その通りだシウアン。色合いこそ違うが使用感は似たようなものだ」

そういえばこのメンバーの中でシウアンだけが樹海地軸を知らないのか。私も使ったのは煌天破ノ都での時だけだけでも。

「汝らを地軸の場所まで送ろう」

「つてことは、イシユとはそこでいったんお別れですか？」

「我は城に残る。あの者たちの解放が叶ったのだ。大地に降りる理由がない」

「引きこもり……」

そんな軽口もどうでもいいとばかりにイシユは移動を開始した。

禁忌ノ森からいよいよおさらばである。

一番近い樹海地軸は天ノ磐座にあるそうで、このパーティで行動するのはこれが最後になるかもしれない。

イシユは城に残り、私たちはタルシスへ戻る。

タルシスに戻っても、ローゲルさんは冒険者として活動するが、ウーファンとシウアンはウロビトの里に戻るだろう。キバガミさんもイクサビトの里に戻る。

こうして一緒に旅をすることは、もうほとんどないと思っっている。

禁忌ノ森を降り、天ノ磐座内の玉座の間を通り抜ける。

玉座の間には壊れた白い鎧兵のみ。使ったベッドが無くなってるのは、再び床の中に収納されたんだろう。

……やっぱりあの白い鎧兵が、何か引つかかる。

「イシュ」

「なんだ。この城でなくとも、麓の街には今の時代の宿がある。今後休むのであれば、今の時代の施設を使うべきだ」

「いえ、そうじゃなくてですネ」

かつてのイシュだったという白い鎧兵を指さして、だけど上手く引つかかっている部分が言葉にできずにいた。

「あの……えつとあれ、あれがなんだか気になって……」

「以前の我だ。何も気になる点はないはずだが」

「なんだか引つかかるんですよ……」

うーん。

足を止めているためか、ローゲルさんたちも話に加わってきた。

「実は自壊じゃなくて侵入者にやられた可能性があるとかかい？　ここにも一応冒険者の手が伸びているみたいだしな」

「そうなの？」

「ああ、時折物陰に焚火跡があつたよ。太古の時代のものにしてはチグハグだしな」

防衛システムを突破できる實力をもつ冒険者……そんなに多いとは思わないけど、いないとは言いきれない。実際全盛期のイシュを倒したのは冒険者なのだし。

「侵入者自体はいただろう。だがこれは間違いなく自壊だ」

「断言できるものなのか？」

「うむ。光刃で自身を貫いていることもあるが、この玉座の間の開閉は我がタルシスへ旅立ち、そして今回帰還するまでの間に一度もない」

「戸締りができてたんですか」

「途端に世俗的な話に変わったな……」

私の言葉は微妙な反応を返された。

「実際この玉座の間は、認証を受けた者がいなくては開閉されぬように設定されているままだ。戸締りができていると言う表現は正しいだろう」

私の感覚は古代でも通じると証明された瞬間である。

それよりも認証という単語が出てきた。煌天破の時の門を思いだす言葉だ。

「今回の場合、その認証と言うのはイシユ殿を示すのであろうか？」
「うむ。城の主である我、そして我が許可した者だけだ。よって、一介の冒険者では玉座の間に入ることはできぬ」

イシユの許可なく入れないということは、やっぱりあのイシユは自殺……理由は自身の役割が無くなったから、だっけ。

「ってことは、今回俺たちが入れたのは許可をもらえてたからってことか」

「汝らは私の同行者だったから入れたただけだ。許可した覚えはない」
「こいつはいつも……」

ローゲルさんとイシユがいつものように口喧嘩しそうになっているが、今聞き逃せない点があった。

「え、じゃあ私も許可がないってことですよね？」
「うむ」

「それはちよつと困ります。私はタルシスに戻りますけど、たまにはここに遊びに来ようかと思ってるんで！」

「遊びに来るような場所なのか……？」
イシユを訪ねに、つまり友人を訪ねについて感じだから遊びに来るで

合ってるはずだ。そんな細かい表現についてはどうでもいい。とにかく私は許可がほしい。

「この城は遊戯施設ではない」
「いや、遊びについていかイシユを訪ねに来る予定なんで！」

細かい表現は重要だったようだ。人の城をなんだと思ってるんだと言わんばかりに窘められた。

「我を訪ねに？ 何を考えているのだ」
「いいじゃないですか。一緒に旅してきたんですし、たまには会いに行こうってなるかもじゃないですか！」

仕方ないなあ、みたいなニュアンスでもいいから許可が欲しい。
ってというか私の発言って別に変なところなくない？ 何を考えて

いるとか言われるほどではないのでは。

「アルメリア殿の言う通りだ。共に戦った仲間を訪ねることはなんら不思議ではないと拙者は考える。どうだ、イシユ殿。拙者らに、お主の玉座に入る許可を与えてはくれぬだろうか？」

キバガミさんいい援護。キバガミさんの常識人ポイントさらにアップだ。

「……ならん。我が城の、ましてや玉座の間だ。何人も許可を出すわけにはいかぬ」

「頭の固いやつだな」

「ウーフアン、汝にそのようなことを言われるとはな」

「なっ!？」

キバガミさんの援護射撃でもイシユは折れてくれないとは。

なんだかウーフアンが騒ぐ予感がするが無視だ。

「私のどこが頭の固いというのだ!」

「しかし……アルメリア、汝にのみ許可を出そう」

「おい！ 聞け！」

「ほんとですか!」

「だが、その許しも一度だ。一度だけ、玉座の間に入る許可を出す。それと、今回のような同行者は認めぬ。訪れる日時は汝が好きに決めるがよい。無論、訪れずともよい」

一度だけ……

ケチくさいこと言わずに何度も許可してほしいけど、これ以上は折れてくれないだろうきつと。

「同行者を認めないというのは、少々酷ではないか？ 玉座の間の前まで行くのも危険であろうに」

「樹海地軸で天ノ磐座まで瞬時に移動が可能だ。防衛システムも許可を受けた者には働かぬ」

「それなら危険は少ないか……」

何故かウーフアンをなだめているシウアンの姿が目に入ったが、まあいい。その一度の許可で、次の許可ももらえるようにごねよう。もしくは城から連れ出そう。

結局、壊れた白い鎧兵の何に引つかかっていたのか。その時はわからず仕舞いだった。

「夏の階層にすでに設定してある。触れれば世界樹の一階に着く」

天ノ磐座の樹海地軸前で、イシユはそう言って去って行った。見送りはこれで終了らしい。

なんというか、もうちよつとこう、何かあってもいいのではないだろうか。ここまで送ってくれたのなら最後まで見送ってほしいところ。

「最後までマイペースなやつだなあいつは……」

「まったくだ……」

「でもイシユらしいと思うよ」

イシユの行動にそれぞれ感想を漏らす。

「イシユ殿と次に会えるのはアルメリア殿だけだな」

「私だけが許可をもらいましたしね」

「あんな奴と会いたがるやつは貴様ぐらいだろうがな」

ウーフアンうるさい。

とにかくこれで樹海地軸に触れば、ハイ・ラガードの世界樹としばらくさよならである。

だいたいイシユの案内のおかげでスイスイ登れたけど、もう一度登るのは苦勞しそうだ。いや、次は樹海地軸を使えばいいのか。触れたら一瞬で移動できるんだし、今回よりも簡単そう。

ハイ・ラガードに降りたら、すぐに馬車の手配をしてもらってタルシスに一度戻ろう。馬車代は辺境伯からもらってるし、あ、でもお土産とか一応いるかな。せっかく遠い国に来てるんだし、お世話になった人たちへのお土産を探してから……ううん、考え出すとやること

いっぱいある。

イシユはそういうことが嫌で城に残ったとか？ それはないか。嫌ならやらなければいい、とか言いそうだしね。

だけど私は常識人。だからやるべきことはちゃんとやるのだ。イシユとは違うのです。

そういえば、イシユはこの後どうするつもりなんだろう。

イシユの千年前の目的、信じてついてきた彼らはもういない。代わりにできた別の目的、魔物にされた人たちの解放は果たせた。

特に城に残る理由なんてないんじゃないだろうか。だってもうイシユの目的は果たされ

『命なき存在となっていたのだ。自身を動かす意義、それなしに在り続けることは難しい……この我は、惜しむことなく自壊を選んだはずだ』

あ。

自然と、イシユの、玉座の間で言っていた言葉が脳裏に浮かんだ。壊れた白い鎧兵を前に、放った言葉だ。

他人事のように言っていたけども、イシユだって命なき存在だ。自身を動かす意義がなければ、在り続けることは難しい……？

『城に残った我に役目はない。いつ再び狂うかわからぬ中、存在し続ける理由はない。ゆえに自壊を選んだ』

イシユは、目的を果たした。役目を果たした。

機械という体は人と全然違う。千年も存在し続けたのだ。この先も、長い時間存在し続けることができるだろう。その長い時の中、再び狂う可能性がないとは断言できない。

もしも、イシユがそう考えたとしたら……いや、あの人はそう考える。考えてしまっている。

じゃあ、城に残ったあの人が行うことは——自殺、自壊。

「アルメリア?」

すでにローゲルさんとキバガミさんは地軸に触れて降りたようだ。残っているのはウーファンとシウアン、私。そして急に黙って動かなくなった私をシウアンが気にしていた。

今から走っても、玉座の間にイシユが戻る前に追いつくことは難しい。防衛システムが起動している。扉の前まで行くのにより時間が掛かってしまう。

惜しむことなく自壊を選ぶ相手だ。ほんの数秒が手遅れになる。それなら——

「ごめん、忘れ物!」

「え!」

「先に降りてて! 大事な忘れ物があるから!」

「アルメリア!」

私ひとりで向かう。防衛システムも私ひとりなら反応しない。扉も私ひとりなら一度だけ開いてくれる。許可をくれた一度、それを使うタイミングは私が好きにしているという話なんだ。それなら今使おう。

あの人を取り残すわけにはいかない。

今動かなければ、千年前の出来事を繰り返すだけになってしまう。全力で足を動かしながら、脳裏に浮かぶは炎の中で叫んだ記憶。

『気づいたときにはひとり城に取り残して……なんで誰も、あの人と一緒に降りようとしなかったんですか!! 無理やりにでも引つ張ってあげればよかったのに! 手を振り払われても、何度もその手を掴んであげたらよかったのに! なんで!!』

かつてローゲルさんに向かって叫んだ自身の言葉。

あの時は怒りのあまり、勢いで叫んだ言葉だ。勢いで言ったけども、本心だった。心の底から思った言葉だった。

今、イシユはひとり城に残ろうとしている。

タルシスの人たちが、今の時代の人たちが差し伸べた手を振り払って、城で消えようとしている。

消えるなんて許すものか。無理やりにでも引っ張りだす。

何度手を振り払われようとも、私は何度も何度も掴んでみせる。たとえそれがイシユの意思を無視するものであっても、そんな結末認めてたまるものか。

あの時言った言葉を嘘にしないためにも。

私の嫌いな人たちと同じにならないためにも。

私は、千年前の人たちとは違うのだ。

天ノ磐座の赤い扉、玉座への扉の前まで走る。
すると、扉に触れずとも自然と開いていった。

部屋の中央、玉座にはイシユが腰かけていた。ただ座っているだけで、特に自害をしようとしてはいない。

——良かった。間に合った。

「アルメリア……何をしにきたのだ」

イシユの問いかけに答えたいところだけど、ちよつとごめん。息を整えさせてほしい。全力疾走してたから本気でしんどい。

「何故、ここに来た」

「いやな、予感が、して……」

全然息が整わない。やっぱり体力勝負な前衛職は私には向いてな

さそうだ。いいけども。

でも旅を始める前に比べたら、かなり体力がついたと思っっている。

「嫌な予感？」

「イシユが、自殺する、気がして……」

これがただの私の早とちりなら、それはそれで別にいい。

私がこれからすることに変化はあまりない。早とちりであっても、ひとり城に残すつもりはない。

「……」

「イシユ？」

イシユは答えない。

思えば、ここ最近答えないことが多くなっていた。答えたくない質問には、無言でいるようになっていた。

ということとは、

「……やっぱり自殺するつもり、だったんですね」

「………自殺とは異なる。我的場合、自壊だ」

「同じじゃないですか……」

「全く違うものだ」

早とちりではなかったけど、こんな予想合っても嬉しくない。

「まさか汝が、これほど早く玉座の間に来るとは予想できなかった。まったく、珍奇なことばかりする……」

「イシユに言われたくない……」

珍奇って、自分のことを棚上げするの、よくない。

幸いというべきか、今のところイシユは会話をするつもりがあるようだ。最悪なのは、私がいよいよといまいと関係なく自殺を図ること。説得の余地なく実行に移されたら妨害は困難だ。

「だが……我が存在するうちにこうして来たのであれば、メッセージ

を残す必要はないか」

「メツセージ？」

「汝が再び城に訪れた時、汝宛てに手紙のようなものを残そうとしていたのだが……言葉をまとめている間にやって来るとはな」

メツセージの意味はわかるよ。言い換えなくても大丈夫だよ。

でもまさか置手紙を用意しようとしていたとは。だけどそんなもの不要だ。

「メツセージなんて、必要ないですよ。だから一緒にタルシスに戻りましょう」

「確かに必要なくなった。今ここで、汝に直接言えばいいだけの話」

「聞いた後、一緒にタルシスに戻るって言うのならそれでもいいです」

私の要望に対して、面倒臭そうにため息をつかれた。

「我はタルシスに行かぬ。タルシスは我の住まう場所ではない。ここが、この天ノ磐座が……地上から逃げた、最後に残った我らの城。最後に残った、我らの居場所。ここで我は最期を迎えるべきなのだ」

イシユは目を閉じながら、今私と話しているはずなのに、過去を想いながら言葉を紡いでいるようだった。

どこまでも、過去にしがみついている。

「タルシスは、他種族であろうと受け入れていたじゃないですか。一緒に旅していた最中、何度も見えてたじゃないですか……」

「アルメリア、汝との旅は有意義なものだった。始めこそ、目的のための手段と考え守っていたが……いつの間にか新たな時代を想い、未来のために存分に戦った」

何を勝手にまとめに入っているんだ、こいつは。

まだ私との会話は続いているのに、何を勝手に終わらせようとしているんだ。

「だが我は過去の存在。未来にあつてはならぬ過ち。ならば、この城で最期を迎えるべきだ」

過去の存在？

私が話している相手は過去ではない。今のイシユだ。現在進行形で、勝手に締め掛かっている今の、イシユだ。過去の人物ではない。

「勝手に話を終わらせようとししないでください。私はイシユをタルシスに連れ戻します。この城に残す気はありません」

「……アルメリア、汝は共に旅したという点を注視しすぎるあまり、寄せるべきではない情を抱いている。我は存在してはならぬ異物。この先の汝の人生に、関与してはならぬ存在だ。奇人ではあるが、愚者ではない汝ならわかるはずだ」

「わかりません」

「汝の体に呪いはもうない。今後、汝は多くの者と出会い、そして多くの者と別れることとなる」

「イシユとも、そのうちのひとつと言いたいですか」

「そうだ」

「そんなの——！」

いやだ、という前に、イシユが言葉をかぶせてきた。

それは私の反応を予想していたかのような、先回りした言葉だった。

「別れを惜しんではならぬ。それを惜しむあまり、我は大きな間違いを犯した。別れを惜しまずに、共に過ごせる時を大切にせよ」

なんて、らしくない言葉なのだ。似合わなさすぎる。

言葉の内容も、その穏やかな表情も、何もかも似合わない。

共に過ごせる時を大切に？ それなら別れの前にその時を一緒に過ごさせろ。あんなドタバタな旅じゃその時間がなかったんだ。今から作るべきだ。

「……何度も言っています。私はイシユをタルシスに連れて帰りませぬ」

またため息。

まるで聞き分けのない子供を相手にしているかのような反応。

「汝は知ったはずだ。我の所業を、我の大罪を。過去の時代の人々を救わんと動き……結果、この時代に災いを齎す悪魔。人を魔物に変え、魔物に人を襲わせ、また新たに魔物を造りだす……到底、許されることではない」

「だけでもう、みんな解放されました」

「だが我が存在し続ければ、また同じことを繰り返しかねない。我が再び狂う日がいっ訪れるともわからぬ」

だから、今で終わろうとするのか。

過去を悔やみ、未来を恐れて、今を終わらせようというのか。

あれほど自分の行動を省みなかった人なのに。人の死をなんとも思わなかったのに。今はそう思えなくなったのか。それは本来喜ばしいはずなのに、そういった倫理観がイシユの中に生まれ、それがイシユを責め立てる。過去の罪はなかったことにできない、と。

だけど未来は確定ではない。不確定なものだ。それを恐れて、終わらせるなんてさせない。

イシユの恐れる未来なんて、壊してやる。

「繰り返させません。私が、絶対に」

「……何を言っている」

「イシユが再び狂い、同じことを繰り返させたりはしないって言ったんです」

「口ではなんとでも言えよう」

イシユは出任せとでも思っているようだけど、具体的な方法はあるにはあるけど、それは酷く単純な方法。単純だからこそ、難しいかもしれないけども。それに、少し歪だ。

歪けども、繰り返させない方法があるのなら今で終わらせたりはしない。

「出任せでも、勢いで言ったわけでもないです。まあ少しは勢いもありますけど……とにかく！ 絶対に繰り返させません！」

「勢いでしかないな。仮に止めれるとしても、我が存在し続けている理由にはならぬ。汝も知っているだろう。エスバットというギルドを。我の罪を深く憎むのはあの者たちだけでは留まらぬ。ならば我は罰を受けねばならぬ」

「エスバットの人たちだって罪を犯してます。でも償うために彼らは生きてます」

「あの者たちと我では重みが違う」

イシユとエスバット、何が違うって言うんだ。

彼らは旅先で人助けをして償おうとしている。

イシユだってタルシスで、大勢を助けたはずだ。巨人との戦いで、竜の足止めをしてくれた。それだけじゃない。そもそもイシユがいなければ未だに碧照で躓いているかもしれない。あの時の帝国の計画を止めれなかったかもしれない。

その時は助けるなんて考えがなかったのかもしれない。だけど多くの人を助けたのは事実だ。それでも償いきれないものを、死んだらできるというのか。

「じゃあ消えたらイシユの罪は償いきれるって言うんですか」

「不可能だ。だが、繰り返さないために、我は消えなくてはならぬ」

消えなくては、ではなくて消えたいだけじゃないのか。

玉座の間の鎧兵のイシュのように、無責任に逃げたいだけじゃないのか。狂う前にといいながら、本当は怒られるのが怖くて、責められるのが辛くて逃げたいんじゃないのか。

そうであろうと、そうでなかろうと、もういい。強引にでも生かしてやる。そうしないと私は、ベオウルフさんの死を嘆いていたあの兵士のように後悔する。

狂うのがこわいという建前があるのなら、狂わせない。

「だから、イシュが狂ったら私が止めます！ 力づくでも！」

「……それが無理だというのだ。汝の力で我を止めれるはずがない」「止めます！」

またため息。呆れたようなため息ばかりだ。

できるはずがないと考えているのか、それともそもそも根本的にズレてたりするのだろうか。

「我は汝と違う体だ。汝が天寿を全うしようとして、我は存在し続ける。汝がいなくなった後、狂った際はどうするつもりだ。汝の子孫に、狂気の我を止める大役を任せるとも言うのか」

「だったら、私が死ぬ前にイシュを殺します。イシュが狂う前に、イシュを殺します」

「――」

目が点になる、というのはこういう表情を言うのだろうか。

だけどそれしかないじゃないか。そもそも、以前狂ったイシュが正常に戻ったのはよくわからない古代の技術のおかげらしい。私にそんな技術はない。だから私が現役の際、イシュが狂って力づくで止めたとしても、正氣に戻らなければ殺す気だ。物騒だとは自覚してい

る。

「……どれほど勝手な話をしているのだ、汝は」

「イシユほどじゃないと思います」

「以前、汝にそれを期待したことがある。だが汝は私の問いかけに言い淀んだ」

「あの時はあの時、今は今です」

あなたを殺して私も死ぬみたいなドロドロの愛憎劇みたいな異常発想だけでも、狂う未来を恐れているのなら、そんな異常性で止めてあげたらいい。

これでも納得できないのなら、もう話はおしまいだ。無理やり引きずってでも連れて帰ってやる。

「……いいだろう」

「！ ほんとですか！」

引きずって帰る前運動というわけじゃないけど、手をグーパーしてたら了承の返事。

だけど少し奇妙だ。

イシユは玉座から立ち上がり、そして、剣を抜いた。

「だが、その言葉が本当に実現可能かどうか、我に証明できればの話」
「え」

「狂いし我は汝に手心を加えることなどないだろう。ならば汝は、私の全力をも越える力がなくてはならぬ」

本当にイシユを止められるのか、殺せるのか、それをするだけの力を示せと。

つまり、力試し。それも全力のイシユ相手に。

「この我、天の支配者と戦うか、自身の力量を省みて引き返すか、選ぶがいい。だが仮に戦うとすれば、我は汝の命を奪うことに躊躇しないことを宣言しよう。汝が我を止めれぬのであれば、我はこの時代から去るだけなのだから。汝は無謀にも我に挑み、死を選ぶか……それとも言葉を撤回し、生きながらえるか、良く考えて選ぶのだ」

剣を構えながら、イシユは選択肢を突き付けてきた。

しかしあんまりな選択肢だ。どちらを選ぶにせよ、自殺すると言っているようなものじゃないか。

「わかりました」

だから私は、短剣を構えて選んだ答えを言った。

「イシユをタルシスに連れ戻すことを選びます」

78. 戦場 天の支配者

天ノ磐座、玉座の間。

私の言葉を、挑戦を受けたイシユはまたため息をついた。

馬鹿な選択をしたと思っっているのか。随分勝手に勝敗を決めてくれる。

「……愚かしい。汝を好ましく思っていたが、汝の我儘にこれ以上付き合いきれぬ」

そういう精神攻撃はやめてほしい。力を試すんじゃないのか。だけど弱気になってなったりするものか。

「イシユ、私も全力で行きますけど、それでイシユを殺しちやったら何のために挑んだのかわけがわからなくなります」

「……私の体は汝ごときに破壊できるものではない。だが、公平性を保つために教えてやろう。私の胸部——」

イシユが服をはだけさせ、まっ平らな胸をさらけ出した。絶壁だ。その絶壁の中心部をイシユは指で示す。

「ここに私の心臓部とも言えるコアが埋め込まれている。これが破壊されれば、我という存在は消滅する」

「じゃあ、そこ以外を攻撃すればいいんですね」

「逆だ。コアはこの体の中だ。この体は人間に近いが、それでも装甲は比べ物にならないほど頑丈。コアに最も近い装甲を、剥がせるだけの力を見せよ。そうすれば汝の勝利とみなそう」

「装甲だけじゃなく、コアごと破壊されたりは……」
「ありえぬ」

たいした自信だ。だけど私の火力を今まで見てきて、そう判断しているのだろう。ならば遠慮なくぶち込んでやる。

「それじゃあ、いきますー!」

「……愚か者が」

愚か者なんて言葉、言われ慣れてる。

まずはすっかり得意となってしまうた爆炎の印術を放つ。花開くように広がっていく炎は確実にイシユの体を呑み込んだ。

呑み込んだけど……

「山行水行」

「ほあっ!」

炎の中から飛びだし、超大振りの山行水行が襲いかかる。

さすがに爆炎で怯むなんて考えてなかったから、これぐらいは予想済みだ。

イシユの動きは対魔物に特化したもの。偶然だろうけども。

その動きのほとんどが大振り。一撃はとんでもなく重たいけども、当たらなければ大丈夫だ。ローゲルさんの動きを参考に戦えばいい……んだけど、間近で振り下ろされた山行水行の剣は、身を委縮させるには充分過ぎる威圧感があった。

掠っただけでも全て持っていかれる。そんな予感をさせる風切り音、いや、風をも潰す音を立てる剣。

そんな勢いで使われる剣は、そりゃ壊れやすいよ。ベルンド工房で怒られるわけだよ。

脳裏に浮かぶは店員の子に怒られていたイシユの姿。

……必ず連れ戻して、また怒られてもらうんだ。

「雷鳴と我が身」

「たやああ!」

雷を纏い、激しく弾ける音立てる刀身が振られるその前に、イシユの顔に向かって火球を放つ。

「ダメージは期待していない。期待しているのは目くらし。む……」

闇雲に振るわれた雷剣の届かない距離まで離れる。目くらしと言っても効果はせいぜい一秒程度、いや、一秒もないかもしれない。あまり期待してはダメだ。

「……」

「……」

イシユの攻撃で恐ろしいのは不意打ち。それと、雷の剣だ。不意打ちは技を知っていればある程度対処できる。だけど雷の剣は範囲が危険だ。刀身を迸る電撃が、実際の攻撃よりも効果範囲を広めている。頭一つ分ぐらいのリーチは埋めてしまいかねないほどだ。それに実際の剣撃が見えづらくなるという点もある。

見えづらいという点では炎の剣も厄介だけど、一番厄介なのはやっぱり雷剣。

「うわっとうっ！」

距離を取ったところですぐに詰められる。

やっぱり火球は目くらしとして適していない。小爆発によるものだし仕方ないといえば仕方ない。

「……」

「てやあー！」

「同じ手を……」

再度イシユの顔に火球を放つ。

ダメージとはなりえないし、ほんの僅かな時間稼ぎ。却火を準備するには短すぎる時間。

「……」

これから起きるイシユへの攻撃。その想像図はグロイけども、有利に進めるためにと攻撃を……投刃ナイフをイシユの両目に向かって投げる。火による目くらしで時間を稼ぎ、ナイフで物理的に目を潰

す作戦だ。

イシユの体は人間とは違うけど、火球で目がくらんだことから視界は目で確保しているとわかった。それなら目を潰せば火球以上に時間を稼げると踏んでの攻撃。

「あれえ?」

「無駄だ」

その攻撃は無意味に終わった。

確かに目に刃が真つ直ぐ飛んでいった。そして当たった。

だけど、突き刺さらなかった。硬質的な音を立ててナイフが落ちたのだ。

「着眼点としては悪くない。だが、この体は我の大切な人々が入るかもしれない体。その体に弱点を残すような愚行、過去の我が行うはずがない」

ナイフが刺さらない……腕とかで剣を受け止めているのは見たことあるけど、腕どころか眼球すらとんでもなく硬いってことか。

「ちよつと過保護すぎませんそれ!」

「凍雨と雨氷」

今度は氷剣が振るわれる。

雷や炎より剣先が見やすい。全然避けるのは簡単だ。大振りが完全に癖づいているおかげで助かる。落ち着いて回避すれば問題ない

「——っ!」

躲したはずなのに、小さな切り傷がいくつもできる。

剣によつてできた傷じゃない。何だこれは。

「終わりだ。山行水行」

傷の正体の判明を待つてはくれない。当然だ。今は戦いなのだ。

しかし勝利宣言が早すぎる。山行水行は当たらないってば。

「いったあ!」

轟音と共に振られた剣を、完全に避けたと思ったのにまたも傷がいくつも生まれる。それもさつきより深い。

明らかに攻撃の質が変わっている。避けた攻撃が避け切れていな

い。

攻撃の性質が変わったタイミングは……氷の剣だ。ただ冷気を纏うだけじゃないのかあれは。

そもそも冷気を纏うだけの剣って冷たいだけじゃないか。そんな技、攻撃として採用しない。氷の印術を思いだせ。あれらは冷たいだけじゃなかった。ウーファンが使った術はすべて——氷塊による物理攻撃。

ならこの傷の正体は……

「避ける分だけ苦しみが増える。心静かに死を受け入れよ」

「ほわたああああ！」

剣を振りかぶるイシュに対して、自身を巻き込む爆炎を放つ。

きつとこの氷剣の正体は、周囲の空気を氷に変えて、剣圧と共に相手にぶつける技。

それならば、その冷気を呑み込む熱気を使えばいい。

目くらましばかりだけど、炎の中距離を取る。さつきまでいた位置に剣が振り下ろされたけど、今回は傷が増えることはなかった。

「美しき陽光」

「少しは！・休ませて！」

次から次へと本当に。こっちは今のところ凌ぐので精いっぱいだって言うのに。

今度は炎剣。炎の熱自体は問題ない。問題があるとすれば、剣先が炎の揺らぎによって見えづらいこと。

だけどだいたい剣撃は避けれる……と、油断させる気だろう、これは。私には炎の耐性が高いことを、イシュも知っているはずだ。なにに使うのは、私を舐めているという点もあるかもだけど……

「ほやっー」

「む……」

炎の剣撃の中、イシュの片腕が飛んできたのを回避する。

炎を目くらましにするのは散々私がやってきたことだ。どう使うかは予想しやすいし、イシュの攻撃手段を知っている身としては、不意打ち手段もわかっている。

「予想以上に粘るものだ」

片腕になったとはいえ、危険は変わりない。それに飛んでいった腕もやがて戻ってくる。

イシユの称賛とは思えない眩きと共に放たれる炎の斬撃を凌ぎ、回り込んだ。素早い動きで背後を取った、とかならカッコいいけども、普通に立ち位置を交代しただけ。だけどこれで、私は飛んでいった腕とイシユに挟まれる立ち位置じゃなくなった。さらにはイシユと腕が一直線上に並ぶ位置。

「粘られたくないなら、やられて!!」

凶鳥烈火。一直線に突き進んでいく炎の壁。

思っていたほどの火力ではなかった。これだから感情に左右される術式は。

狙いは欲を言えば本体と腕のどちらも、最低でも腕。

断面が露出している腕ならば、装甲ではなく中身が露出している状態なら攻撃が通りやすいはず。少しでも元にひつつく時間が伸びればいい。

時間稼ぎばかりだけど、そういった積み重ねをしないと有効な攻撃を探せない。却火は負担が大きいから連発はできないため無駄撃ちは少しでも避けたい。

炎の壁が消える前に、壁の向こうから声が聞こえた。

「————如く舞う」

炎壁から全力で離れるために、力の限り後ろへ跳び下がる。

如く舞うは連撃。腕はまだ片腕のままのはずだけど、それでも連撃は危険だ。絶対に一撃目を振らせてはいけない。あれは相手の体を踏み台にして、空中で踊るように斬り続ける技。だから一撃目は絶対に前からか、もしくは、

「上!!」

上方に見えたイシユの姿は片足も切り離している。切り離された断面から火が噴きだし、空中を進む。

踏み台なしでも飛べる準備が整えられているということは、放置しているわけにもいかない。

断面が見えるのなら、火の逆流を喰らわせてやる。

却火を迷わず放つ。あの絶壁な胸にぶつきたいところだけど、今は攻撃の妨害だ。

私の妨害に注力した却火をイシユは剣で斬り払う。

剣が触れたことよって、球状に込められた灼熱は表へと噴き出すが、その勢いを利用してようにイシユの軌道が急変した。

——一気に迫ってくる。

慌てて横に移動するも、足の断面から噴く火がイシユの軌道修正を行う。完全に捉えられている。

きっと妨害に攻撃をしても、それを利用して次の攻撃が鋭くなる。却火のように。

「ぐ、やあああああ！」

全く使っていないなかったクロークを広げるようにして放り投げる。ナイトシーカーが使うと言うクローク。ごわごわしている材質のせいで、広がった形のままイシユの姿を隠した。

「とおおおうー！」

いくら丈夫な材質とはいえ、そのままでは不味い。爆炎を起動し周囲を吹き飛ばす。当然、クロークも。

「ぬ……！」

クロークの形が気球の球皮のように膨れ上がり、イシユに迫る。すぐさま細長いものがクロークにめり込んだけども、爆風でより広がったとはいえ、ごわごわしているとはいえ、空中を漂う布地だ。貫くことは難しい。

今の細長いものはイシユの剣。ということとは、妨害が成せた。

無理やり如く舞うを続けるとは思えない。イシユの性格からして、一度形が崩れた技を無理やり完成には持つていかない、と思う。だから次は仕切り直しの攻撃だ。今度はこっちから攻める。爆炎や火球じゃ効果はない。温存なんて考えている余裕もないやこれ。だから使うのは却火だ。

クロークから飛びだす影に向かって却火を放った。

大草原広がる胸を狙うのは後回し。動きを鈍らせるためにもまずは当てる。

「うなあああー！」

「……！」

イシユは却火を腕で受け止めた。だけど込められた火力を見誤っていたのか、目を見開いて動きを止める。

受け止めた片腕は、骨組みまで露出させるほどにダメージを受けていた。

ここに来て、ようやくダメージらしいダメージが通った。

「……！」

「今の技、胸に当たればコアまで届くと思いませんか？ 私はイシユを殺せるだけの力を持っています。だから狂っても大丈夫です。必ず止めます。だから——」

「確かに、汝の力は当たれば我に届くようだ」

説得する声を押しのけるように、イシユの言葉は続く。

「だが、無意味だ」

「……はい？」

どこが無意味だと言うのだ。当たらなければ、って言いたいのだろうか。当たってるじゃんあなた。

理解できない私の耳に、奇妙な音が聞こえてきた。何か空気が漏れるような——異音。

「我を殺すには、確実に攻撃を当てられる技術、即座に抵抗力を奪う力……そして、命を持たずして動ける肉体が必要だ」

「なに——を……う？」

視界が、揺らいでいく。

空気の漏れる音がより大きくなっている。それに、なんだろう。息が苦しい。

たたり、と鼻から血が垂れた。

気づいた途端、ボタボタと血が流れ落ちる。鼻からだけじゃない、口から、目から、耳から。

「……やはり人間では、ゼロに届く前に限界を迎えるか」

なんだこれ。毒？ 体中から血が吹き出ている。顔だけじゃなく、全身から血が。視界が染まっていく。赤く、赤く赤く。

異音の正体は毒を噴射しているということ？ それがわかったところで、こんななの反則だ。

「眠るがいい。誇るがいい。この我にVOIDまでも使わせたのだ。汝は人の身でよくやった方だ」

——何がよくやった、だ。

勝手に終わらせるな。まだ終わってないんだ。そんな見切りの付け方、いくらイシユとはいえ私だって怒る。こんなズルい技で勝とうとするのもまたむかつく。

空気中に含む毒だというのなら、そんなもの散らしてやる。

「がっ——、あああああつ！ やあああああ!!」

「無駄な足掻きはやめよ。爆風でVOIDを飛ばしたところで、この室内はすでに満たされつつあるのだ。VOIDから逃れる術はない」「ふがああああああああ!」

全身に走る痛みよりも、悔しさと怒りで胸がいつぱいだ。

だからこそ………今ならそれなりの威力に変化しているはずだ。今必要なのは、毒を散らす爆風じゃない。一直線に飛ぶ業火だ。立ちふさがるものを焼き落とす術式だ。

「とんでへええええ!!」

血を口から吹きながら、凶鳥烈火の術式を解き放つ。狙いは——

——この部屋の天井。天ノ磐座最上階の天辺だ。

ここで死ねば千年前の人たちと同じ結果をイシユにさせる。だか

ら死ぬわけにはいかない。そのためにも、この城は壊す。壊すついでに毒の出口を作る。炎の鳥によってできる一石二鳥だ。

私の願いに呼応するように、業火の鳥は天井を焼き落とす……どころか焼き飛ばした。

開放的になった天井の外には暗雲が吹き荒れていた。強い風音が聞こえるほどに。

「なっ——!? 我の城を!?!」

「げほっ……ほあああああ!」

天井に穴が開いたのなら、今度こそ毒散らした。

足元に爆炎の印術を放つ。思いだすは碧照でのメノウさんたちとの共同戦線。あの時教えてもらったのは、盲目の香は火球の爆発だと散ってしまうということ。

今回は爆炎の爆風で、周囲を満たす毒を散らす。あの時と真逆のことをやるのだ。

毒が散っていき、新鮮な空気が肺を満たしていく。

出血もさつきまでより断然落ち着いた。傷口からの出血はすぐに止まるわけじゃないみたいだから、じくじくするけども。でも止めどなく流れる血涙や鼻血はない。

城の天井を唾然と見ていたイシユが、憤怒の表情を持って怒鳴った。

「アルメリア! 汝といえど我が城を破壊するなど許さぬ!!」

余裕ぶった表情や呆れた表情ではない。

そんなにもこの城が大事だというのか。こんな、裏切られた城が。

「こんな、城! 壊してやる!! こんな城があるから! いつまでも過去にしがみつくんです!!」

「何を言っている! 過去を大事に扱うことは当然であろう!」

当然だ。思い出はいつだって色んなことを教えてくれる。

過去の成功、失敗、楽しさ、苦しさ、哀しみ、怒り。やるせなさや悔しさも、色んなことを教えてくれる。

いなくなった人たちとの繋がりを過去に見出そうとするのも当然だ。人として、当然だ。

だけど、

「過去を哀しみ続けて！　ずっとそこから動かない！」

立ち止まることだって時には必要だ。受け入れる準備期間というものだって大事だ。

だけど、だけでも。

「千年も止まり続けていい理由になんかなりません！　いい加減今に目を向けるべきです！　過去だけを見続けてないで、周囲を見るべきなんです!!」

「勝手なことを！　汝の浅はかな考えで我を押し量ろうとするな！」

「いつまでも過去の城の主気取りなら、引きずり下ろすためにも城は壊します！　こんなイシユの過ちの象徴なんて、破壊し尽してやる!!」

叫びながら起動した凶鳥烈火は、かつての巨神戦の時のような巨大さを持っていた。

次に放つは横の壁だ。一直線に貫いてやれ。

放った火の鳥は壁を貫くことはできなかったが、壁の形が熱によってひどく歪められた。

天井は変な仕掛けでもしてあったのだろうか。壁より天井の方が圧倒的に脆い。

「アルメリアアア!!」

攻撃対象を城に変えたことによつてか、感情をむき出しにしたイシユが、剣を振り下ろす。却火で溶かされた腕はそのままということ
は、飛ばした腕が戻ったのか。

だけど怒りのあまりかいつも以上に大振りだ。躲された剣は床に
叩き付けられ、甲高い音を立てて折れてしまった。

「おのれ……！ 我の城を！ 私の最後の国を!!」

「人口一人の国なんて、国として認められるものか知らないけど！ 国
だというなら私はその国を侵略します！ 侵略して、捕まえて捕虜に
して！ イシユの人生を全部奪ってやる！」

とはいっても、これ以上城の破壊をするにはイシユの妨害が激しそ
うだ。

さつきまでの余裕ぶつた感覚が一切ない。

絶対者としての、天の支配者としての仮面が完全に剥がれ、目の前
にいるのは憤怒のイシユだ。

力試しだったはずが、色々と熱くなつてつい願望を口にしてしまつ
た。

だけど撤回は絶対しない。

私がやるべきことは単純な話だ。

イシユに敗北を認めさせ、なおかつ天ノ磐座を破壊するだけだ。

79. 決戦 イシユ

さつきまでの技とは違う、なりふり構わない攻撃が幾度も迫る。折れた剣が、拳が、脚が、何度も体を掠めていく。

天の支配者の技にこだわりを捨てて襲いかかってくる。

動きがシンプルになり、大振りが控えめになった。そう考えると脅威に感じるけども……もともとイシユは戦う立場の人間じゃなかったのだから。あまりにも動きが単純だ。

「おのれ！ おのれえ!!」

単純だからこそ、予測しやすい。というか避けられるという先読みが一切ない。だから動き続けていれば問題ない。といっても、こちらの体力が続く限りではあるけども。

「ほやっ！」

「つまらぬ小細工を!!」

火球を顔にぶつける。時間稼ぎと考えたけども、動きがより激しくなっただけだった。

避けることを一切しないのは、怒りでいっぱいだからなのか、それとも却火の印術じゃないからなのか。両方だろうなきつと。

しかし余裕ぶることがなくなつたせいで、基本的に距離を詰めてくるから却火が準備できない。

そして結構余裕ある感じに考えられているけど、イシユの溶かされた腕が少しずつ修復されている。片腕だから凌げているけど両腕になればさすがにまずい。

一撃でももらつたらこちらはアウトなのだ。身体能力だつて負けている。無理やり掴まれるだけでも敗北決定だ。

「いい加減気づいているんじゃないですか!? 千年前の人たちはイシユを見捨てたんです! 頼り続けて、助けられていたくせに、肝心な時にイシユを見捨てて去って行ったんです! そんな人たちのた

めの城なんて、残す必要なんか無いって!!」

「私の城の破壊を企てるだけで飽き足らず！ 彼らまでも愚弄するな
ど、思い上がりもいいい加減しろ！」

「企てるじゃなくて、破壊します」

「アルメリア!!」

激情のあまり口調が少しずつつ変わってきている。

それともこれが本来のイシユの口調なのか。千年の時が、イシユを
押し込めていたのか。それとも千年前の希望を背負うために、本来の
イシユを殺していたのか。

だとするならば、私の今やるべきことがまた一つ追加された。

城の破壊、イシユの無力化。そして、本来のイシユを完全に引きだ
すこと。

きつともう、断崖絶壁な胸のコアを露出させるほどのダメージを与
えても、イシユは止まらない。乱暴だけでも四肢を動かせないほどに
するか……もしくは精神攻撃だ。精神攻撃は基本。

「過去は変えられないんです！ 認識だけを歪めたって、事実が変わ
りません！ いい加減千年前の人たちのことを引きずるのはやめま
しょう!?!」

「認識を歪めているのは汝だろう!!」

躲した拳が壁にめり込む。攻撃が外れたことと、さらに城にダメー
ジがいったことに怒りがまた膨れ上がっている。でも今のは私のせ
いじゃなくない？

「私はイシユから話を聞いて、思ったことを率直に言ってるだけ！
歪めてなんていません!!」

「どの口が……!! 彼らのことを何も知らず、彼らを陥れる言葉ばか
りで歪めていないだど?! ふざけるな!!」

「それが依存しきってるって……!!」

叫びながら今度は炎の剣。怒りの炎、なんて言葉を体现するように燃え盛った剣が迫る。

周囲を見ていないし、感情任せの炎だ。躲せば先ほどの拳と同じように、城の壁にぶち当たる。周囲を気にせず全力で振るわれた剣撃の破壊力はすべて剣に返った。

これで二本目の剣が折れた。工房の子が激おこ確定だ。

「自分たちの国を捨て、私を信じてくれたのだ！ 私を信じる彼らの存在が、あの厄災を乗り越える支えとなったのだ！ 彼らがいてくれるだけでどれほど私の救いとなっていたことか！ 何も知らないお前が勝手なことを抜かすな！」

「やっぱり、何かしてくれたわけじゃないみたいですね」

「黙れ!!」

剣が二つとも折れてダメになった。そのため今度は体を使った攻撃だけとなる。

理論はよくわからないけど、拳だと炎や氷、雷などは纏わない。こちらにとつての難点は剣より避けにくいということ。逆に、こちらにとつての利点は、

「ほあー！」

「くだらん攻撃を……!」

顔に向けての火球。視界を遮られて闇雲に振り回すのが剣ではない分、距離を取るにしても回り込むにしても安全性が大きくなったことだ。

壁際に追い詰められていたから、反対側へ逃げようとしたときに体の一部が当たったのか、青い光の板がチカチカと光り奇妙な声を響かせる。その声は途切れ途切れだったけど、誰かに似た声だった。

【諸王の…聖杯……。みな…これで……。助かる……。助かる…はずだ…の…】

「え!？」

「これは……」

突然聞こえ出した声。

一瞬気を取られてしまい、慌ててイシユの攻撃に備えたが何もこなかった。イシユも動きを止め、声に気を取られているようだった。

【何故……誰も…答えぬ?】

ひどく寂しい言葉だった。知らないはずの声なのに、聞いたことのある声。この城で聞いたことのある声なんて限られている。

これは過去のイシユの声だ。

「……答えるわけがない。この時、すでに私は狂気に陥っていたのだ……」

「狂気に陥ったイシユのそばに誰もいようとしなかった。誰も止めようとも、助けようともしなかった」

「どうあっても彼らを陥れたいようだな……」

平行線だ。

ジャガーノートの処遇について、キバガミさんと意見が分かれた時のような妥協点は、見つかりそうにない論争。

「イシユが何と言おうと、その人たちがイシユを見捨てたのは事実です。機械の体になってまで尽くそうとしてくれたイシユを、見捨てて城を去ったんです」

「狂人のそばに誰が近寄るものか。私が見捨てられたのは当然の結果。彼らは——」

「この時代の人たちは、一緒に旅をしてきた人たちは、私は、見捨てませ——うひゃあ!？」

イシユの言葉にかぶせながら過去の人たちとは違うと主張するも、私の言葉に返ってきたのは飛ぶ拳だった。辛辣すぎる。

ひよっとして、今の私はイシユから相当嫌われているのでは……まあイシユにとっての大切を破壊しようとしてるから当然か。嫌われているとわかったところでやめないけども。

【……我……研究……伝……を……みな…………為……死……を……】

過去のイシユの声はまだ流れる中、イシユの片腕が先の攻撃で飛んでいき、もう片方は再生中。腕がないなら足を使えばいいとばかりに今度は蹴りが襲う。

【永遠……命……を………今……も………続け……】

声は、誰もいなくなったのに、永遠の命を追い求め続けていた。かつてついてきてくれた人たちのために。

そこで声は途切れ、聞こえなくなった。

しかし、両腕がないとはいえ苛烈な攻めから一転、どこか落ち着いた攻撃に変化している。過去の声によって冷静になってしまったのか。冷静になられたら攻撃が難解になりかねない。それに本来のイシユが遠ざかる。

千年前の人たちの希望を背負うために作られた指導者としてのイシユではない。その希望を背負わされて、潰されてしまった始まりの部分に戻さないといけない。

指導者としてのイシユは千年前の人たちを絶対視している。

始まりの部分のイシユだって千年前を重く置いているだろうけど、もしかしたら千年前に見切りをつけてくれるかもしれない。それに、始まりの部分は純粋な人間の気持ちだ。

人間の気持ちなんて、移り変わりすることもあるのだ。だからその点を期待する。

冷静さを失わせるために怒りを引きだすってなかなか酷い手だけ

ども、そのために天ノ磐座は破壊する。

壁は異常に硬い。大きい凶鳥烈火でも突破できない。天井はできた。というか完全に破壊するには火力が合ってもまず私が持たない。それならば、最低限の破壊で、天ノ磐座を落とす。

この天ノ磐座は浮遊している。いわば巨大な気球艇だ。気球艇は動力源がおかしくなれば落ちる。同じようにこの城を浮かせる力をおかしくさせればいい。イシユは世界樹のエネルギーを利用して浮かせているって言った。世界樹を破壊する、なんてのは城の完全破壊よりもつと無理だ。それならば、城と世界樹を繋げている部分のみを破壊すればいい。

問題はそれがどこか……樹海地軸という考えがよぎったけど、すぐに否定する。可能性はないわけじゃないけど、あそこは低い。あそこだとあまりにも無防備すぎる。どこか別の場所だ。

……まあその場所を今のイシユに聞いても教えてはくれないだろう。

眼前をハイキックが空振る。蹴りの勢いによってイシユ自身の体はその場で一回転する。背中を向けて、再びこちらを向き直った時、未だ再生中の腕を攻撃に用いてきた。

「くう……！」

まだ腕はないと思っていたせいで避けるのが遅れた。ぐにぐにとした謎の材質パンチによって、硬質な床に何度も打ち付けられるように吹き飛ばされ、何かにぶつかって止まる。

追撃に迫ろうとするイシユの姿が見えた。迎撃は無理だ。体勢を立て直すの間にも間に合うかどうか。急ぎ間に合わそうと体を起こし、自分が壊れた白い鎧兵にぶつかって止まったことを知った。

鎧兵の手から筒状の道具をもぎ取り、先端をイシユに向ける。

これどうすれば刃が出るんだ。

どこかにバネとか仕込んであるんだろうか。強く握れば刃が出るとかだった……？ 一か八かで両手で強く握る。全力で握る。す

ると、

「で、たあ!!」

「悪あがきを」

緋色の細く束ねられた光が筒から伸びる。これが刃なのだろう。鎧兵の体を貫ける刃、威力としては脅威のはず。そのリーチを知っているからか、追撃はやめて一定距離でイシユは止まった。

イシユから目をそらさず、体を起こす。これさえあれば猛攻は凌げそうだけど……腕が疲れてきた。握る力を弱めると刃が短くなったのだ。これは長く持たない。

「とあっ！」

せめて怯ませようと投げつけたが、手から離れた途端に筒だけとなった。なんて無意味。

それが当たるか当たらないか、なんて見届ける前に扉に向かって走った。ここにいたままではまた追い詰められてしまう。今の優先は城の破壊だ。

「今更逃げられると思っているのか」

振り向かなくてもわかる。追いかけてきている。対人能力がそれほど高くないイシユだけでも、それでも身体能力の差は大きい。真っ直ぐ走っているだけではすぐに追いつかれてしまう。追いつかれないためにも、また目くらしまし作戦に切り替えて距離を取っていくか、要所要所で避けては回り込むしかない。後者は厳しいけど前者なら可能性はまだ高い、はず。

一直線に迫るイシユに向けて、却火を振り絞る。目くらしましとして使うには負担が大きいけど、玉座の扉まで一直線なのだ。今回はこれで足を止めさせる。

狙いが上手くいったのか確認する暇がない。真っ赤な扉を勢いよく開けて周囲を見渡す。

西も東も防衛システムの機械兵は少ない。この階は違う。それなら下に降りるのみだ。

玉座の間の外へ脱出できたけど、イシュは外まで追いかけてくるだろうか。追いかけてこないなら破壊工作してからまた会いにいかないのだ。まあその方が体力的に楽かもしれない。ちよつと息を整えることもできるし……

「うひっ!?!」

僅かに楽観視してしまった私の顔の真横を腕が通り過ぎていった。追いかけてくる、これ。イシュ本体が来る前に、急いで階段を降りる。なんだか暗黒ノ殿のときみたいに、追いかけてっこ状態だ。ハードな鬼ごっこすぎる。

階段から出てすぐさま振り向いて爆炎。階段内を炎で満たす。さすがに頭が痛くなってきた。走りながら印術を使いながら、体力も精神力も厳しい。

絞りに絞ってあと数回程度だろうか。

それまでに城と世界樹の繋がりを破壊するしかない。

周囲を見渡し、このフロアの構造を思いだす。

たしかここは、小さな機械兵がたくさんいたフロア。それも他のフロアに比べて格段に多かった。あまり強そうには見えなかった機械兵だったけど、あれも防衛システムの一つなら何か厄介な性能を持つのか、それとも見た目にそぐわない強さを持つと考えたほうがいい。ということとは、

「きつとこのフロア……にいい!?!」

「このフロアに、何を求めている」

背後から聞こえた声に右腕を捕まれた。

「痛あ……!!」

「何を企んでいる。何故この階を狙う」

万力のように硬く強い力で腕を握られるあまり、火の聖印を扱うためのルーンの短剣が床に落ちた。

短剣が落ちたこともまずいけど、このままじゃ右腕を握り潰されて……いや、それどころかそのまま命も潰されてしまう。

痛みあまり意識が飛んだらアウトだ。そうならないためにも、左手で鞆から小瓶を取りだし口に含む。

「まだ抵抗する気か」

「……うぶ」

想像をはるかに超えていたせいで吐き気が襲ってきた。小瓶の中身——ネクタルの味とにおいのせいだ。

気付け薬としては充分過ぎるほどに刺激的だ。意識がなくなっていてもこれは目が覚めてしまう。

そのおかげで、少しだけ痛みを忘れられそうだ。吐き気がやばいけど。

「……！」

「ったあ！」

浮かびだした却火にイシユが気づき、火を遠ざけるために私をぶん投げた。

吐き気と頭痛、そして右腕の痛みとひどいが解放されただけよし。それより用意した却火が熱い。短剣がないだけでこんなにも熱く感じるなんて。準備状態でこれほどとは、今まで知らなかった術式の威力に驚きだ。

とにかく熱い却火を私も遠ざけるため、牽制のように放ち再び始める逃走劇。

このフロアで間違いない。なら目的地も近い。

道も想像がつく。機械兵がより多い道を選んでいけばいい。より警備が厚い場所へ場所へと。

その方角へ進めばいずれは……

「いた……い」

見えたのは焦げた魔物の死骸。なんの魔物かはわからないけど、機械ではない存在、世界樹が生み出した魔物。

この城も世界樹の一部。だから魔物も発生する。だけどイシユに案内されていた時、魔物の気配がないとウーフアンは言っていた。それに対してイシユは、防衛システムが魔物を排除しているとも。

世界樹が生み出す魔物に、城内を自由に歩きまわれないために、あちこちへ広がる前に止めないといけない。そのためには発生源の近く……今回の場合、城と世界樹の繋がっている部分、力場とやらの発生原因の島の樹があるところ周辺に機械兵を配置させなくてはならない。魔物の自由を許さず、魔物の抵抗を確実に圧殺できるように。

未だに許可がきているのか、機械兵たちは私を襲うことはない。この先に進めば目的地。それまでの邪魔があるとすれば、発生したての魔物もしくは、

「この先は……まさか！ させるものか!!」

追いかけてくるイシユのみだ。

私の狙いが何か、完全に気づかれた。次は捕まれば問われることなく即死だろう。

魔物の死骸と機械兵を辿って狭い通路へと入る。通路の奥からどこことなく森の香りを感じれた。

一本道なため追いつかれないかと戦々恐々としていたけど大丈夫そう。狭い通路のため、小さな機械兵が地味に邪魔なのだ。機械兵の頭に手を付けては飛び越えて奥へ進む私とは反対に、イシユは機械

兵を蹴とばしたり殴り飛ばしたりと、避けずに排除しながら進んでいる。逆にその行為が時間をかけているにもかかわらず。

狭かった通路もやがて小部屋へと辿りついた。

「ハハ……」

部屋の中央には大きな硝子瓶のようなものに入っている一本の樹。その樹にいくつもの黒く長い管がつけられていた。世界樹のエネルギーを利用するために取りつけたものだろう。わかりやすい見ただ助かる。

この樹ごと、この管も焼き払う。

そうすればこの天ノ磐座も終わる。終わらせれる。こんな古い過ちの象徴を、

部屋の中を熱気が満たしていく。熱気を生み出しているのは却火ではない。

凶鳥烈火。

巨人の腕を焼き落としたといわれる術式。それをもって、世界樹との繋がりを焼き落とす。

「アルメリアアアア!!」

部屋の扉を吹き飛ばしながらイシユが吠え——それを気にすることなく私は火の鳥を解き放った。

80. 太陽と月に背いても

部屋の中にあつた樹が焼け、弾け、形を崩して落ちていく。

硝子瓶は焼け溶け、樹に繋がっていた幾本もの管も異臭を漂わせながら溶け千切れていく。部屋を照らしていた不思議な白い光が、炎とは違う赤く明滅する光へと変わった。

異常を知らせる警鐘のようなものだろうか。明滅する赤い光と共に、けたたましいベルの音が鳴り響く。壁の向こうから高い音を立てながら、弾けるような炸裂音が何度も聞こえてくる。

「止める！　すぐに炎を消せ!!」

イシユがそう言うも、もうこの炎は私の手から離れてる。私にはどうしようもないし、どうにかできても消す気はない。

部屋が大きく揺れ出した。

いや、部屋だけではないだろう。きつと世界樹からのエネルギーを得られなくなった天ノ磐座が、浮遊することができなくなったのだ。

「このままでは、私の城が……！　私の、私たちの城が壊れてしまう……！」

この浮遊城はもう持たないとわかったのか、悲痛な叫びが耳に届く。

完全に心がむき出しだ。

あとはこのまま、冷静にというか、落ち着いてくれたらいいんだけど……さすがにそうもいかない。第一今この城は堕ちかけているのだ。

だから私たちは降りないと。安全な場所まで。

「イシユ、もう城が崩れます！一緒に逃げま——」

城壁が壊れつつあるのか、外の雷鳴がはつきり聞こえるようになってきた。あまり時間はないかもしれない。急いで城から脱出しないと。

イシユの手を掴み、一緒に逃げようとした。けれど、私の手は振り払われた。

「イシユ！このままじゃ危ないんです！難しいかもしれませんが落ち着いてくださいー！」

「何故私が城から離れなくてはならない……！」

「もうこの城は持たないんですって！」

「それがなんだ！」

またどこかで爆発音が起きる。それと同時に全体の振動が激しくなった。

「城と共に私は終わる……それだけだ！」

「何を馬鹿なことをいつまでも……！」

癩癩を起こすイシユを無視して、払われた手をもう一度掴もうと腕を伸ばし——逆に掴まれそして、

「っ!？」

——ぶん投げられた。

投げられて背中を強く打ちつける。元々体力的にも精神的にも厳しい状況で、追いうちのように痛みで息が止まり一瞬意識が遠のいたが、城全体の揺れで小刻みに頭を震わされ意識を落とさず済んだ。

さつきから脳内で警鐘がひどい。早く逃げないと悲鳴をあげて

いる。気を抜けば膝が震えて止まらなくなりそう。

イシユは城がもう持たないと判断してもなお、城に最後までいるつもりだ。そして城を破壊した私を逃がすつもりはないようだ。

正直言つて、もう逃げだしたい。

残り時間は全くない状態で、イシユの説得はもう無理だ。無理やり一緒に逃げようにも抵抗する気満点。

イシユと一緒に逃げるという選択をしなければ、私だけで逃げるのに集中すれば、なんとか間に合うかもしれない。

もしも逃げるのが間に合わなければ、高所からの落下による死か、瓦礫に潰されての圧死か。

ああ、だめだ。

弱気な考えが浮かぶと本当にダメだ。

——立つことができない。

足の震えが止まらない。これでは逃げられない。呼吸が浅くなつていく。視界の色が白く薄まっっていく。

こんなことならさつき意識を失っていてくれたらよかったのに。運がいいんだか悪いんだか。いや、これは悪いんだきつと。

深呼吸だ。

深呼吸して、深呼吸して、深呼吸して、落ち着かないと。

浅い呼吸を無理やり深く、苦しさを抑え込んで無理やり深く整える。

だんだんと視界の色も明確に戻ってきた。そして視界の隅に見える、イシユの足が振りかぶられるのも。

蹴りが来る。

イシユの全力の蹴りなんて、まともに喰らえば死にかねない。転がるようにその場から動いて避けようとした。

「——っあ!!」

世界がぐるんと回転した。

避け切れず、蹴り飛ばされた。特に足が痛む。痛すぎて悲鳴すら上げれない。息を押し殺したような声の出ない叫び。

間違いなく、折れた。折れた、はず。

どういふ折れ方か見たくない。両足どちらも痛いけど、特に右足が激しい熱と痛みを訴えている。そして動かそうと力を入れると目がチカチカする。

「イ、シュ……」

この足ではもう動けない。這って動くしかない。

そんな悠長な時間があればの話だ。あるわけがない。

「イシュ……」

せめて、最後に……最後まで、恰好をつけてみたい。

昔読んだ物語本とかの、悲劇の主人公風に、誰かを守るために命を賭けて、最後まで守って散るような。

だからイシュには逃げるように、最後に言わないと。聞き入れさせないと。私を置いて逃げろと。

「……い……て」

瓦礫が、部屋の天井が崩れてきた。

城の崩れる音と爆発音、世界樹の枝が折れる音、外の風音、雷鳴、外的要因でこんなにも妨害する音が溢れている。そして私自身、痛みで大きな声を出しにくい。

でも伝えないと。

逃げるよう、伝えないと。

「イ……」

幸いと言うべきか、最悪というべきか、イシユはとどめを刺すために近づいてきている。

その分だけ声を届けやすい。裏を返せば、聞き入れてもらえる可能性は低いということだけだ。

だけど聞き入れてもらおうと、言葉を並べるのももう無理だ。

短い言葉でも気持ち伝わりと信じて、一言に全力を込めよう。イシユに人の心の機微なんて、伝わるか怪しいところだけでも。

あっちへ行けと言うように、イシユに手を向けて伸ばす。

この部屋の出口は反対側だ。こっちに来てもダメなのだ。

だけどイシユは向かってくる。その両手は強く握り絞められている。パンチをするつもりだろうか。それともキックだろうか。

やっぱり声を出さないと。

「……イシユ」

変に痛みを和らげようとするから余計痛くて、声が出なくなるのだ。

痛みを覚悟で叫ぶんだ。全力で。

今までより遥かに大きい爆発音。そして大きな瓦礫が落ちていく。これらの音に負けないように、そして、潰される前に、逃げて、と。

ああ、まずい。

私の体を覆いかぶさるように、影が濃くなっていく。イシユが作る影じゃない。私の上の天井が、迫ってきている。もうすぐ潰される。だからイシユ、早く逃げて。

「たすけて」

考えとは裏腹に、口から出た言葉は、あまりにも情けないものだった。

何故最期をかつこよく決めれないのだろう。やっぱり私は物語本

に出るような、主人公めいた決めシーンと無縁なのかもしれない。
いよいよ光が見えなくなっていく光景が、天井が迫る景色が、いや
にゆっくりに見えて。

襲い来る瞬間が少しでも遠ざかってほしいと願いながら、ぎゅつと
目を瞑った。

目を閉じて真っ暗な視界の中、だけど潰れる感覚は襲ってこない。

こんなこと、前もあつた気がする。あの時は銀嵐ノ霊峰で鰐の魔物
に襲われた時だったか。それともつと前、碧照ノ樹海で熊の魔物に
襲われた時だったか。

鰐のときは、イシユが助けてくれたのかと思つたら、偶然の形で氷
竜に助けられた。

熊のときは、イシユが助けてくれたのかと思つたら、キルヨネンさ
んに助けられた。

耳を澄ませば、城の崩れる音は未だ聞こえる。

運よく崩れた瓦礫の隙間にいることができたのか……それとも

ゆっくりと目を開ければ、今回こそは、

「ひえ……」

「本当に……忌々しい……！」

今回こそは、イシユが助けてくれた。それは合ってたけども、表情
がすごい、激怒状態だ。

天井を両腕と首で持ちあげ支えながら、呪詛のように言葉を紡いで
いる。

「敵対行動を取りながら助けを求める愚行……！ 脱出手段を用意せず城を破壊する蛮行……！ そんな愚か者の助けを求め継る手を、振り払えぬ私自身が理解できん……！」

じわじわと、天井を持ちあげていく。イシユの力をもってしても、時折膝が折れかかるほどの相当な重量。

その間にもさらに上から何かが落ちてきているのか、そばから落下物による轟音が鳴り止まない。

「命を奪おうとしていた相手を助けるなど、合理性の欠片もない……！ なのに何故!!」

とうとう天井を完全に持ちあげ、勢いのままひっくり返すようにはね除ける。

イシユが掛け声のように口にしていた疑問。イシユ自身がわからないことを、私ができるはずがない。

たすけて、という言葉は本心だった。恰好をつけたかったけど本心からの言葉だった。だけど助けてもらえるところは思っていないなかった……と思う。切羽詰まっていた状況だったから、自己分析なんてできていないけど。

天井がなくなり、上のフロアまで吹き抜けになった部屋の中、イシユは未だに憤怒の表情のままだ。その怒りは私に向けられているのはもちろん、だけどたぶん、イシユ自身にも向けられている。

イシユは揺れ続ける城を問題なさげに動き、私の手を掴んで無理やり持ちあげた。

引つ張られて肩が痛い。あと足が超痛い。

「彼らとは違う人間を何故……助けなくてはと思考してしまうのだ……！」

私の足が折れていることなど一切気にせず引きずるように運んでいくイシユ。手だけを掴んで引きずるから、さつきから足がやばい。痛みのがあまり目を見開きっぱなし、脂汗も止まらない。

ズカズカと、段差や瓦礫を気にせず引きずりながら進み続けてくれて感謝しかないけども。でもかなりヤバイ。脂汗以外にも涙が追加で止まらない。

ある程度してイシユは立ち止まった。まだ城の中だ。だいぶ傾きつつある状態だけでも。

止まった理由は何かと思えば声が聞こえた。

イシユの声ではない。当然、私の声でもない。

「その土の民は足を怪我している。運び方は気をつけたほうがいいのではないか」

翼人、クアナーンさんがそこにいた。

「……何故ここにいる」

「イシユ、汝を完全に信じたわけではなかった。ゆえに汝の行いを離れて見ていた」

「……この際なんでもいい。アルメリアを連れて天ノ磐座から離れろ。この城はもうじき落ちる」

イシユはクアナーンさんに私を渡そうとした。

怒りが込められているのか、抱え直してから、なんて行動はなかったけども。そのまま手を引っ張られる形でクアナーンさんに押し付けるような状態だ。

クアナーンさんは私を抱きかかえようとしてくれたけど、私はイシユの手を掴んだままの状態だ。

「汝はどうするつもりか」

「このまま城に残る。本来ならば城の破壊を行ったアルメリアに死を

与えたいが……わけのわからない思考回路が邪魔をする」

……まだ城に残る気なんだ。

「……手を離せ、アルメリア」

離さない。ふりほどかれる前にと両手でイシユの手を掴む。理想とはるかに離れた状況だけど、本当はもつとスムーズに色々説得やら一緒に逃走をするつもりだったけど、とにかくこれが最後のチャンスだ。

この重ねた手がほどかれたら、もうイシユは降りてくれない。

「絶対に、離したくありません……」

「手を離せ！」

「離しません！」

そんな強い語調で言われたって従うもんか。

力任せにふりほどかれないように、この状況でもイシユを止めるために、何か手を打たないと。それでいてただの時間稼ぎじゃない、イシユも降ろすような。

「イシユがつー！　なんで私を見捨てれなかったのか！」

確実に止めそうな、イシユが疑問に思っていた行動について口に出した途端、その理由が頭に浮かんだ。どれもそうなんじゃないか、という推測だけでも。それでも今は充分だ。

「イシユはもう過去のイシユと全然違うんです！　今を生きだした人間なんですー！」

「何をわけのわからぬことを言っている……もうよい」

「千年前の人たちを導くための、天の支配者という機械ではなくなっ

ているんです！ 天の支配者としての使命に、イシユ自身が背きだしたんです！」

イシユが天の支配者のままだったら、私は助けてもらえなかった。過去にしがみ続ける機械のままなら、過去の城を破壊した私はあのと潰されていた。

だけど私は助けてもらえた。潰されなかった。それはきつと過去ではなく、一緒に現代を旅してきたイシユとなったから。

イシユの反対の手が、私の手を離そうと動く。

痛いほど強く掴んでいる手だ。そう簡単にはほどかれぬ。上から握りつぶすつもりなら、その形のまま固定されてやる。

「天の支配者としての使命と、過去の人々からの希望に背いてようやく、止まっていた時間が動くこうとしているんです！ 埋もれていた本心の、今を生きたいと憧れていた気持ちを手にしたんです！ 今ここで手を離したら、イシユはまた天の支配者に、過去に呑み込まれる！ だから絶対に、この手を離しません!!」

イシユはまだ天の支配者に、過去に背負わされた希望に囚われ揺れている。本当は死にたくなくせに。消えたくなくせに。

そうじゃなかったら私はイシユの自殺を止められていなかった。言葉をもとめていたとか言っていたけど、本音は少しでも長く今の世界に留まりたかったからじゃないのか。初めて気球艇に乗ったとき、キラキラした目で今の世界を見ていたくせに、消えたいなんて絶対嘘だ。

ずっと家に閉じこもっていた私を、未来に絶望していた私を、外へ連れ出してくれたこの手を離さない。

あの日もらった希望を私で終わらせない。

「貴様、何を……」

「私はこの土の民の意志を尊重する。あなたも共に城から脱出するべ

きだ」

イシユと私の手攻防戦、それに第三者のクアナンさんも参加した。

「今の戯言のどこに惑わされる！ 私は翼人の創造主だ！ 私に従え！」

「神の声にただ従うだけだった我らが、多くの魔物を造りだす原因でもあった。我らはそれを、イサの流れだと、全ては定められたことだと考えるあまり、自ら思考することを放棄していた。だが、今は違う。我らは、私は私自身の考えに従い、この土の民の意志を尊重する。それが我ら空の民の新たな生き方なのだ」

「……！」

「それに土の民の言葉、私には戯言には思えなかった。……再びあの神が生まれることを阻止する。それを第一とする私には、あなたを城に残すわけにはいかない」

イシユに創られた種族であるクアナンさんの言葉。

一緒に旅をしていたとはいえ、他人である私の言葉よりもイシユに響く程度は大きく違う。

「私は……私が生き延びれば、再び狂うかもしれない！ そうなれば再び不死の魔物が造られる！」

「そうなる前に私が止めます！ たとえイシユをその時、殺すこととなったとしても、イシユの生きる今を守るなら必ず約束します！」

「……！」

「私の力をまだ疑うなら、これからも旅をして強くなります！ 絶対にイシユを殺せるように！ だからもう、天の支配者に怯えなくていいんです！ 過去に囚われなくていいんです！」

「どこまでも……愚直な……」

空いた壁の外から聞こえていた雷鳴が遠ざかっている。かなり高度が下がっているということ。

とはいえこのまま中においても危険だ。イシユの様子はまだわからない。

「過去の人たちのためだけじゃなく、今の人たちのために生きようとしてください……！」

「私の罪は生きて償えるものではない」

「そんなの……死んだって償えるものじゃないです！ それなら生きて償ってください！」

「生きていれば、再び罪を重ねかねないと——」

「だから！ 私が止めます！ これ以上罪を重ねさせないために！」

私じや一緒に償うことはできないけども、そばで止めることならできます！ これ以上、イシユの背中に重荷を増えさせないために！」

できることなら、その償いも手伝いたい。だけど私は部外者だ。だからって何もできないわけじゃない。

イシユの背負うべきものを一緒に持つことはできないけども。その荷を増やさないようにはできる。落としそうになったら、支えてあげることができるはずだ。

イシユは口を閉ざした。

その顔はまだ応じてくれていない。

「……」

「私一人の翼でも、あなたと土の民の二人ならば飛ぶことができよう」

クアナンさんがじつとイシユを見ながら問いかける。

敵意も好意もない、見極めるような目。墮ちかけている城の中でもこの冷静さ。やっぱりマイペースがすごいのだろう。

「……」

イシユは答えない。だけど私の手をほごうともしていない。未だ、悩んでいる。

「イシユ」

「……」

「お願いです……私と一緒に、今を生きてください。一緒に旅をしてきたように、一緒に生きて、明日を迎える喜びと一緒に感じたいです。だから——」

「クアナン」

最後まで言う前に、イシユが落ち着いた様子でクアナンさんの名前を呼んだ。

「私とアルメリア、二人を抱えて本当に飛べるのか？」

「それって……！」

「……まだ、疑心は晴れていない。本当にアルメリアが狂った私を止めれるのか、この城と共に私は消えなくてよいのか」

イシユは呟きながら、掴まれている手を見て続けた。

「だが……これまで私を、我を信じ、そして今後も我を信じようとしている一人の願う程度、叶えてもよいと思っただけだ」

イシユの言葉は、今までの旅で聞いた口調に戻りつつあった。

だけどそこに込められている温かみは、天の支配者として話していたものとは全然違う。千年前の始まりと、天の支配者と、そして一緒に旅をして共に過ごしたイシユが混ざりあい、新しい形へと変わったよう。

私は千年前のイシユに戻そうとばかり考えていた。この形は考えと違った。でもこの形になっていなかったら、千年前に完全に戻すこ

とは一緒に旅してきたイシユを否定することになっていた。

「イシユ……ありがとうございます。それと、ごめんなさい……」

私がやらしかけていたこと。それを気づかせてくれたことへの感謝と謝罪。

この先、今回みたいに私も間違えることがある。イシユだけじゃない。互いに正しいあえれば……と考えて、なんだ普通の仲間や友人のよ
うな関係を築けばいいんだと気づいた。

狂う前に殺すだのなんだの、物騒な関係を望んでいたけど、もっと
普通の関係を求めてもいいかもしれない。

そのことを言おうとして、その前にクアナンさんが口を挟んだ。

「二人を抱え、空の民の里まで飛べよう。幸いともいうべきか、桜ノ立
橋の距離も今まで以上に近い」

「では頼む」

まあ、新しい関係を求めるのはまた今度の機会にしよう。今はゆっ
くりしていられないのだし。

それにイシユは言ったのだ。クアナンさんに頼むと。今までの
ような命令ではなく、頼る形を見せた。イシユが天の支配者としてで
はなく、新しい生き方を選んでくれたのだ。

イシユの言葉に私は当然のごとく、そしてクアナンさんもどこと
なく、嬉しそうに見えた。

こうして、私とイシユとクアナンさん、三人で堕ちていく天ノ磐
座から脱出することが叶った。

81. 新しい日々が始まり

今日もタルシスは朝から快晴。

空を飛び交い影を街に落とすのは、色とりどりの気球艇。

タルシスの街はずれにある一軒家で私は黙々と本を読んでいた。読んでいた。

「うあー！ もう無理ー!!」

「何が無理だと言うのだ」

ギブアップを叫ぶ私の向かいの席で、イシユは飛行船の計画書を書きながら呆れた表情を浮かべた。

「古代文字が複数もあるなんて聞いてませんよ……しかも文法まで変わるなんて……」

「文字だけでも優に方は超えるな。そこに単語、文法と合わさっていくことを考えれば嘆く暇もない」

「頭痛い……」

「ふむ。一度休憩を挟むか。時間も昼食の頃合いだ」

そう言いつつ、イシユは席を立とうとしない。

昼食早く作れってことか、これ。いいけどさ。イシユに台所任せるよりは断然いいけどさ。

「チーズトーストでいいですよねー」

「……またか」

「得意料理ですから」

「我は構わぬが……汝は飽きぬのか」

飽きたら別のを作るとも。というか別に毎日これってわけじゃないんだし。

結局、イシユはあの城で崩れていた口調を元に戻した。

千年近く付き合っていた口調を戻すのも落ち着かないらしい。だから口調こそ以前のままだけど、表情や雰囲気は柔らかくなった。

不満気な表情を浮かべるイシユを見ながら、あれからの出来事を思いだしつつ昼食の用意をする。

天ノ磐座が落ちたあの日。

幸いというべきか、イシユが案内してくれていた時に言った通り、世界樹に引っかけかり天ノ磐座は止まった。そのため麓まで大きな被害はなかったそう。代わりに見あげれば城が見えるようになった。私とイシユはクアナーンさんと他の翼人に樹海地軸まで送られてハイ・ラガードに戻ると、即座にウーファンたちに出迎えられた。

事情を説明すると何故かドン引きされたのは記憶に新しい。イシユを殺す約束しました、って確かに字面はひどいけども。

天ノ磐座墜落騒動の後、結局イシユはエクレアちゃんに渡した頭巾をまた譲ってもらい、私にとっては見慣れた姿に落ち着いてくれた。そして行きと同じメンバーのまま、タルシスへ戻る馬車へと乗ったのだ。私の足のためにしばらくハイ・ラガードで療養するという選択肢もあがったが、シウアンをいつまでも里から離すのもウロビトたちが心配しそうだし帰るのを優先。どうせ移動も馬車だし、馬車外の行動時は誰かに抱えてもらえばいいし。

また抱えてもらっているね、とシウアンに言われたのがちよつとシヨックだったり。

そんなこんなでタルシスに到着。ハイ・ラガードに滞在していた時間より馬車内にいた時間の方が長い旅だった。

「ようやく帰ってこれましたね、タルシスに」

馬車から降りて久しぶりのタルシスに立つ。相変わらず色とりどりの気球艇が空を飛んでいる街並み。

「行きと同じ顔ぶれで戻ってこれるとはね」

「よいことではないか。それにしても今回は随分と長く里を空けてい

た。何事もないだろうがやはり心配ゆえに、拙者はこれにて里に戻る」

「私もウロビトの里に帰るね。みんな心配してそうだもん。ウーファンはどうする?」

「私も帰ろう。長旅の疲れを癒したい」

「それなら俺の気球艇で三人とも里まで送るよ」

「ということは、ここで解散かな。」

「ローゲル」

「ん? どうした?」

「それにシウアン、ウーファン。キバガミ」

「イシユが四人の名前を呼ぶ。少し間を置いて、

「世話になった。感謝、する」

四人とも驚いていた。言われた言葉と言った人物が結びつかなかったのか、しばらく四人の空気が止まっていた。かくいう私も少し驚いていたけども。

やがて、といっても五秒ほどだろうか。沈黙が破られた。それはローゲルさんの笑い声だった。

「くくっ……」

「笑うところなどなかったはずだが」

「まあそうだな……くく……」

笑わないように堪えているんだろうけど、漏れまくりだ。

シウアンやウーファンは未だ驚きの表情のまま。キバガミさんは微笑ましそうな、生暖かい目でイシユを見ていた。

「わるいわるい。まったく、本当に驚かされてばかりだ……」

「なんのことだ」

「まあなんだっていいだろ。それより、俺の方こそ世話になった。ありがとう」

「そうか」

「拙者からも感謝を。イシユ殿の旅路がなければ拙者はここにいな

かったやもしれぬ」

「そうか」

「私もありがとう。私の知らない世界をいっぱい見せてくれて、世界樹も止めてくれて」

「私からも、感謝しよう。出逢いの件はともかく、貴様には助けられた」

「そうか」

そっけない返事しかしていないようで、でもどの言葉も相手を見ながら言っている。もしかして照れているのかもしれない。

やがて笑いも落ち着いたのか、にやけていたローゲルさんが真面目な顔になった。

「……俺は今後、冒険者として活動するつもりだ。今までのように……以前のようにはアルメリアのために動くことはもうないだろう。今後は殿下とタルシスのために動く」

「それでよい。汝は汝の目的を目指せ」

「ああ、必ず」

騎士じゃなくなったけど、ローゲルさんは皇子はために尽くすつもりだ。今まで罪悪感からとはいえ、私って騎士に尽くされてたと考えると違和感すごい。これもローゲルさんだからだろうか。

次に口を開いたのはウーフアんだ。

「私は方陣師を束ねる立場だ。これまでは巫女の付き人として里を離れられたが、今後はそうもいかないだろう」

「立場に絡み取られ過ぎないようにするんですよ」

絡み取られ過ぎたらあまりいい予感がしないから。そう思って口を出した。

「今後はそうするつもりだ。巫女の付き人としてだけでなく、私個人として考え、そして示していく」

「私も巫女だからって色々我慢するのはやめるよ」

「え？ シウアンって我慢してたの？」

「してたよ！ 里にいる間は、だけど……」

そうなんだ。そういえば初めて会った時は、シウアンが話をしよう

として、ウロビトの兵士が何度も間に入ろうとしてきてたっけ。

今度からこの二人は自分を抑えないようになるのか。でもウーファンは抑えてたイメージが全くないのは何故だろう。まあいいか。……拙者は里長としての務めがある。だが、必要とあればいつでも力を貸そう」

「あれもこれもと気を張りすぎるな。たとえ助力を乞われても、手の届く範囲までだ」

「なに、手の届かぬ範囲ならば里の者にも拙者から協力を願うまで」
「……それもそうだな」

キバガミさんの言葉に、イシユは眩しそうに目を細めた。
「む」

私はそんなイシユと手を繋ぐ。特にほどかれることも理由を聞かれることもなかった。

「共に旅するのは難しいが、いつでも会うことはできよう」

「キバガミの言う通りだな。それじゃまあ、そろそろ行くか」

「ああ。ではな」

「アルメリア、イシユ。またね！」

手を振りながら離れていくローゲルさんたちを見送ってから、私たちも移動を開始する。

私とイシユはタルシスの人たちに戻ってきたことを報告しに行くのだ。

まずベルンド工房では。

「いらっしやー……あーっ!!」

私たちの姿を見て、出発前と同じようなりアクションを見せたのは店番の子。大声をあげてイシユに指していた。

「ただいま戻りました。イシユも一緒に」

「うんうんっ！ おかえりっ！」

嬉しそうな店番の子にイシユは近づいていき、鞘に入った二本の剣

を渡した。

「およう？ ……ねえ、これってまさか」

「うむ。壊れた」

「やっぱり!! なんで!? 今度はどんな魔物に挑んだの!? 硬い魔物相手に力任せにぶつけたんでしょ!?!」

「床にぶつけたら壊れた」

「なんで床に!?!」

なんて安心する光景だろう。なんか戻ってきたって感じがする。騒ぎの中心の二人には悪いけど、こう、安心感がすごい。

でもこの後の流れを考えると……剣を二本、また購入費が飛んでいく。まあ今後はイシュも物を大事に使う可能性も少しはあるかもしれないし……あ。

「あ」

「およう?」

「む?」

ふと思いだした事実が沈みそうになった。

「あの……私もサントウス、無くなっちゃって……」

「どうということなの!?!」

「空の彼方に……」

「何してたわけ!?!」

恐る恐る申告した内容に、店番の子は頭を抱える。

イシュだけでなく、私まで怒られることとなった。

怒りながらも彼女はどことなく嬉しそうな雰囲気だった。

次にカーゴ交易場では。

「……おう、戻ったかボンクラども」

相変わらずの人相な交易長が出迎えてくれた。

「ノアの修理が終わるまでもう数日ってところだ」

「本当に修理を進めていたか……本来は戻る気などなかったのだが

な」

「だけど戻ってきたじゃねえか」

「想像以上の馬鹿者に無理やり連れ戻されたのだ」

交易長は面白そうにしながら話を聞いていた。この人が気球艇以外で楽しそうにしているのもなんだか新鮮だ。

しかし想像以上の馬鹿者ってひどい言いようすぎる。

しかし楽しそうに聞いていた交易長も、私の城破壊について話が入った途端表情が変わってきた。

「浮遊城を、墮とした……？」

「うむ」

「気球艇じゃなく……？」

「城だ」

これはあれかな。私の強さが想像以上でびっくりしたと言った感じかな。

この後の交易長の反応を予想する。きっとすげーな嬢ちゃん！
みたいな感じだ。

「嬢ちゃん」

「はい！」

「ノアの動力には絶対に触んなよ」

「はい？」

何故そんな話の流れに。

「気球艇の操作をさせなかったらいいと考えてたけど、そんな浮遊城を落とすような危ねえのと一緒にノアは飛ぶんだよ……動力部の保護をもつと頑丈にした方がいいか？」

「耐熱性を優先させよ。動力だけでなく球皮もだ」

「球皮もか……まだまだ課題はありそうだな」

なんなんだこの技術屋たちは。

話の流れに置いてけぼりの私を放置して、二人は気球艇の改良案を話し合っていた。

次に冒険者ギルドでは。

「ム？ お前らか」

珍しく特訓していないギルド長が、机に座って何か書類を書いていた。そういつた机仕事もする姿はとても意外だ。

「……」

「えっと、ただいま戻りました」

ギルド長は腕を組んで目を閉じだした。

何か言葉を探しているのか、しばらくして。

「……色々と言いたいことがあるが、辺境伯の役目だろうな。ならば、ワシから言えることは何もない」

「へ？」

なんだというのだ。

「まったく、トンデモないことばかりするものだな。お前らニーズヘッグは本当に……」

「えっ、えっ？」

「世界樹への道を開拓し、巨人相手に立ちまわっただけでなく……今度はハイ・ラガードの伝承を崩壊させるとはな」

「へ!？」

「ム？ お前らではないのか？」

「なんのことです!？」

なんだ、伝承の崩壊って。

私たちがハイ・ラガードに行つてた時期と重なるからその犯人が私たちと思つているのか。それで言いたいことが色々あると。とんでもない誤解である。その伝承の崩壊の犯人は絶対別の人たちだ。

「スマンな。ワシの早とちりだったか」

「まったくです！ そもそもなんでですか？ 伝承の崩壊って」

私の反応から違うとわかつてもらえたようだ。

それにしても馬車の移動中にそんな事件が起きたのだろうか。何が起きたのか気になるところ。

「ハイ・ラガードにある伝承でな。空を飛ぶ城があるのだ。何ヶ月か

前だったか、その伝承が事実であることが発覚してな」

伝承って空を飛ぶ城のこと？

え、それって天ノ磐座？

「だが少し前にその城が堕ちたそうだな。お前らが何かやらかしたのだと思っただが……アルメリア、顔色が悪いぞ」

「そ、そうです？」

「幸い堕ちた城は世界樹に引つかかったそうだが、いつまでも放置しているわけにもいかず、しかし世界樹内の魔物のせいで解体も遅々としているためにハイ・ラガードは今大変だそうだな」

「ほ、ほ……」

これは撤退あるのみだ。

ギルド長はもう私たちがやったわけじゃないと思っっているようだけど、このままここにはままずい。いつボロが出るかわからない。

「わ、私たちは他の人たちに帰還報告があるので、失礼します……！」

「ム、そうか。皆喜ぶだろう。早く顔を見せに言ってやれ」

「は、はい！」

逃げるように冒険者ギルドから脱け出す。でもふと考えたら、さつきカーゴ交易場で私が城を堕としたってイシユが言っちゃってたし……バレルの時間も問題な気がした。

どうしよ。とにかく今はこの場を離れるべきだ。

逃げた先は踊る孔雀亭。

「あら、問題児のご帰還ね」

「いきなりの挨拶すぎません!?!」

いきなり店主のこの言葉である。

この様子じゃ、ハイ・ラガードの浮遊城墜落は結構広まっているよ。うだ。犯人が誰かまではともかく。

「でも事実じゃないの。本当、あなたたちって騒動の中心よね。退屈しなさそうだな」

「別にトラブルを起こしているわけじゃないのに……解決を頑張ってるだけなのに……」

「そういうのを引き寄せるのも一種の才能なんじゃない？ でも戻ってきてくれてよかったわ」

あ、この人は歓迎ムード？ かな。伝承崩壊なんてしやがって！
みたいな感じじゃない。

安心感からにへらっと笑いながら帰還報告だ。

「にへへ、ただいまです。そんなに喜んでもらえるとは」

「あなたたちに憧れて冒険者を始めたって人がよく来るのよ。だから問題児っぷりを見せて、いい反面教師になってほしくてね」

「反面教師!？」

「なるほど。たしかにアルメリアの問題行動は反面教師として適しているな」

何を期待しているんだこの人は。そしてイシユは何を同意しているんだ。

抗議しようとする、肩を震わせて笑いをこらえている姿に揶揄われていたのだと気づく。

忘れかけてた。この人は見た目より遥かに俗っぽいのだ。

「ふ、ふふ……ごめんなさいね。冗談よ。まさかイシユも乗るなんてね」

「戻ってそうそうこんな扱いだなんて……」

「拗ねないの。それだけ親しみやすいつてことよ。それに全部が全部冗談ってわけじゃないのよ？」

「へ？」

きよとんとする私に彼女は言った。

「あなたたちに憧れて冒険者を始めた人がいるのは本当のことよ。この街だけじゃない。ウロビトの里からも、イクサビトの里からも、帝国からも、外の街からも、ね。そんな彼らに、あなたたちが英雄譚に出てくるような英雄サマじゃなく、揶揄いやすくて親しみやすい姿だっけを見せてくれると嬉しいわ」

イシユもなんだか雰囲気が変わったみたいだしね、とその言葉は続

いた。

「なんだか照れくさくなつた私ははにかむしかなく、代わりに返事をしたのはイシユだった。」

「頼まれようと我らの行動に変化はない。見たい者が勝手に見に来ればいい……この者の問題行動をな」

「まだ引つ張る!？」

「ふふ、そうね。イシユの言う通りだわ」

「店主の彼女だけでなく、イシユにまで揶揄われるようになったのは良いことなのか悪いことなのか。」

「次いでセフリムの宿。」

「こんにちはー……あれ? いないのかな」

「厨房の温度が高い。調理中か、少し出ているだけだろう」

「いつも真つ先に出迎えてくれる女将さんの姿が見えなかつたけど、そういうこともあるか。」

「厨房の方へと顔をのぞかせてみたけど、そこにも誰もいない。ただ鍋の火は掛かつたままだった。」

「火をつけたまま離れるなんて……」

「火をかけてそんなに時間が経ってないのか、沸いてはいなかった。じゃあちよつと出てるだけだろうか。」

「それにしてもこの鍋……いつも女将さんがそばに持つてる鍋だ。だけど食堂でご飯が並ぶ際、鍋から何かをよそつたりはしていない。なんに使われているのかよくわからない鍋。」

「今なら中身を見ることができる……」

「ちよつとぐらいなら蓋を開けてもいいよね。さつと開けてすぐに閉じれば、たいして影響はないよね。」

「では、鍋の真実を拝見——」

「アルメリアさん? 何してるんですかー?」

「ひい!？」

突如聞こえてきた声に心臓がバクバク鳴りっぱなしである。

滅茶苦茶こわかった。すつごくこわかった。

「あ、火を見ててくれたんですねー。ありがとうございます」

「は、はい……」

「でも勝手に厨房に入っちゃダメですよー？ 怪我をするかもしれま

せんから」

「はい……」

冒険者でも怪我の心配がある厨房……まあ、使い慣れてない包丁とかで指を切るとかだよね……きつとそうだ。

「それにしてもアルメリアさんたちは今日帰ってきたんですよ。無事に戻れてなによりですし、今日もうちで食べていきませんか？」

「いいんですか？」

「今日は機嫌がいいので大丈夫ですよー」

「機嫌……？ 女将さんの機嫌次第で変わるんですか……」

厨房に勝手に入った場合、仕事より機嫌優先で拒否する場合もあるということだろうか。

「いえ？ 私じゃなくてお鍋のですよ？」

「はい？」

女将さんが鍋を見ながら言った。

私も鍋を見た。そこには火にかけられて、蓋のされている鍋だけだ。特に何も不審な点はない。ない……はずなのに、何故か不安になってきた。本当にこれは鍋なのだろうか。

何を言っているんだ私は。鍋に決まっている。うん。

でも………この件については、そつとしておこう。

とにかく今日の夕飯をお呼ばれすることとなった。それでいいじゃないか。うん。

そして最後にマルク統治院。

兵士の人たちが待ってましたとばかりに出迎えて、そして辺境伯の執務室まで案内してくれた。正直もう案内なしでも普通に行けるん

だけでも。

辺境伯の執務室に入ると、いつものようにマルゲリータちゃんを抱きかかえていた。

「アルメリア君、それにイシユも。よく戻ってきてくれた」

「はい、ただいま戻りました」

掛けたまえ、と言われソファに座る。

そして辺境伯は向かいに座り、話を切りだした。

「ハイ・ラガードで諸君らに何があったのか、私は知りえない。そのため聞かせてくれるかね？ 遠き地で、諸君らは何を行い、そして何が起きたのか」

「なんだかミツシヨンの報告みたいです」

「そのつもりで報告してくれた方が嬉しい」

ミツシヨンの報告風、といっても何があったかできる限り細かく話すだけだ。

ハイ・ラガードの入国試験、イシユの造った魔物、翼人との出会い……そこまで話して私の口が止まった。

ひよっとして辺境伯は、浮遊城墜落の犯人を知ろうとしているのでは。

もしかしたら私たちかもしれない。だけど証拠がない。だから話を聞いて判断しよう。そんな考えでこの報告を聞いているのかもしれない。というか絶対そんな気がする。

でも誤魔化しは……たぶん無理だ。もう交易長に自白してしまつたようなものだし、この瞬間を誤魔化しても後からバレる。ギルド長には誤魔化したようなものだけど……まあ彼は辺境伯が言う役目だろうとか言つてたしまあ……

ここはもう、正直に話そう。

造られた魔物を全て解放してからのこと、イシユの考えていたことを私が妨害したこと。城の破壊を企てたこと。結果、城を墮としたことを話した。

辺境伯は話の腰を折らず、ただじつと聞いていた。

「以上が、ハイ・ラガードであった出来事です」

報告を終えると、辺境伯はゆっくり話し始めた。

「諸君らが無事で本当によかった。そしてイシユ、君が再びタルシスに生きて戻ってきてくれたことはとても嬉しく思う」

だがアルメリア君、と彼は続けた。

若干目に光がないんですが。

「他にやり方はなかったのかね……」

「うう……」

じっくり考えている時間がなかったんだし、そんなこと言われてもって感じた。

「で、でもあの城は残していたってあんまり……」

「我の前でよくそんなことを言えるものだ。あの城は我に取って思い出深いものだというのに」

「うっ……」

イシユが便乗するように、責めるように言った。

思い出として扱われると言い返せない。でもあの時のイシユは、思い出というには依存しまくっていたくせに。

「……」

「辺境伯？ どうしたんですか？」

「……あ、ああ。いや、なんでもないと。イシユの雰囲気随分と変わったって少し驚いたただけだ」

「我の雰囲気、か。今日だけで何度かそう言われたが、あまりわからぬな」

辺境伯の嬉しそうな、優しい目線から少しでも逃れようとしてか、イシユは辺境伯の横でくつろいでいるマルゲリータちゃんを見ながら答えた。

何気に犬が好きなのだろうか。

「随分と変わったとも……。その変化は決して悪いことではなく、喜ばしいことだ」

どこか和やかな雰囲気になった執務室。

その空気を一度入れ替えるように、辺境伯は咳ばらいをして私を見だした。

「ここからは少し……いや、あまり嬉しくない話かもしれないのだが」
「えと、それは私たちに関係がある話——」

「関係があるというより当事者だがね」
「ですよね!!」

辺境伯の話は、やっぱりハイ・ラガードの件だった。

「イシュの城の墜落。幸い怪我人等が出ていないらしいが……それでもいくつかの家屋が落石により被害が出ているそうだ。それと魔物が刺激されたためか、活発化しており危険度があがっているそうだ」
まさか家屋の弁償と魔物の対処とかだろうか。でもここからハイ・ラガードまで結構掛かる。移動中に状況が大きく変わるんじゃないだろうか。

「ハイ・ラガード側は弁償等を求めているわけではない。そもそも犯人が誰か断言できない状況だったからというのもあるだろうが、かといってこのままにしておくのはあまり気持ちのいい話ではないと思わないかね?」

「は、はい……」

「そこで、ハイ・ラガードの魔物の鎮静化のために、このタルシスからも何名か送ろうと考えている」

良かった。弁償とかはないようだ。

「ただ魔物の対処はやっぱりあるのか。そしてその何名か、ついでうのに絶対私たちも入ってる。」

「だがハイ・ラガードまでの移動時間を考えると無駄骨になりかねないのではないか?」

「馬車での移動でならそうなるだろう。だがこのタルシスは気球艇技術がある。帝国の気球艇技術も取り入れたものだ」

馬車でなく気球艇で……でもそれには確か問題があるんじゃないか。交易長がハイ・ラガードに行く前に言っていた気が……たしか、ハイ・ラガードまでの遠征に持たないことと、気球艇が広まらない限り、受け入れ態勢が整っていないとかどうか。

「遠征可能な気球艇ができた、というわけではないが、途中途中でしっかりと整備さえ行えばハイ・ラガードまで飛ぶことが可能なまで

に改良ができたそうだ。そのためには気球艇知識を持つ者でないとかダメなのだが……イシユなら問題ないと港長のお墨付きをもらった」
「でも、ハイ・ラガードの受け入れ態勢ができてないとかじゃ……」
「その点は前もって手紙で知らせておくとも。それにこれを機に、気球艇を世界中に広めるべきだ。いつまでも一つのところに留まり続けては、変化は生まれえない。それは技術だって同じだろう」

留まり続けては変化は生まれえない。

その言葉は暗に今までのイシユを示している気がしたのは考え過ぎだろうか。でもそう思えたから、私はすんなりと納得できた。

「この世界は未だ未知が多く存在する。未だ解明されていない世界樹が、遺跡が、島が、いくつもある。気球艇技術が……いや、気球艇技術をさらに発展させたものがあれば、それらを知るのに大きな助けとなるはずだ。中には人が踏み入れてはいけない領域もあるだろう。新技術によって、起きる危険もあるだろう。だが世界中の情報がより早く伝わるようになれば、危険は自ずと減っていく。ハイ・ラガードへの遠征は、そのために歩みだされる第一歩となる」

辺境伯の言葉に私は何も反対意見はない。

だけどそれよりも、私たちにとってあまり嬉しくない話というのはいつ来るのだろうか。前置きが長い。

「ハイ・ラガードからの返事次第で出発時期は前後するが、数週間後には諸君らにまた、ハイ・ラガードで魔物と戦ってもらうこととなる」

「はい……あの、それで嬉しくない話って……?」

「うん? 今言った通りだが……?」

「……はい?」

私も辺境伯も、なんだかかみ合っていない。

えと、私たちがハイ・ラガードへ魔物の鎮静化に行ってもらったことだろう、今の話は。気球艇についての云々は辺境伯自身がやり取りするだろうし。

えっと、嬉しくない話というのは魔物とまた戦ってもらうということだろうか。

「……アルメリア君、魔物と戦うことに抵抗はないのかね?」

「え？ ないですね？」

「……」

だって強くならなくちゃいけないのだ。

イシユに負けないように。だからこの話はむしろ嬉しい話の部類。

「イシユとの約束を果たすためにも、強くならないとですから」

「……冒険というのはここまで人を変えてしまうものなのだろうか。旅に出る前に比べて遅しくなったというか、物騒になったというか……」

辺境伯が疲れたように呟いた言葉はなんだか印象深かった。

それから、ハイ・ラガードへの遠征を再び行い、魔物の鎮静化および天ノ磐座の解体作業の間向こうで滞在し、またまたタルシスへと帰還したのだ。

二回目のハイ・ラガードでは古文書をいくつか拾って持って帰った。どれも天ノ磐座と翼人の里で保管されていたものだ。本来の持ち主に返す、というクアナンさんの主張からイシユが受け取ったのだが、イシユには不要だったらしいので私がもらい受けた。

世界樹は古代の技術によるもの。今後も世界樹に行く可能性があるので色んな古文書を読めるように努力中だ。中には古の術式書もある。でも解読はひっじょうに進んでいない。

イシユは天ノ磐座を今までとは違う飛行可能な居住区、飛行都市にするという計画に関わることとなった。

天ノ磐座が地上に姿を見せたことによつて、様々な技術の可能性が生まれた。天ノ磐座をベースにした飛行都市。計画の主導は別国だが、各地の技術者を集っているのかなんとか。

天ノ磐座も過去から変わろうとしている計画だ。

現代の技術レベルの範囲内で提案書を出すのも楽しいものだ、と何

